

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（144）

潟山丈六線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

みなみ すり が はま い せき
南 摺 ケ 浜 遺 跡
(指宿市十二町)



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(144)

南摺ヶ浜遺跡

二〇〇九年三月 鹿児島県立埋蔵文化財センター

2009年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





序 文

この報告書は、街路事業潟山丈六線改良工事に伴って、平成17年及び19年度に実施した指宿市に所在する南摺ヶ浜遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡は、指宿温泉郷の南端に位置し、眼下に海を臨む地にある、縄文時代晩期及び弥生時代終末～古墳時代にかけての遺跡です。調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての壺棺墓、合わせ口甕棺墓、円形周溝墓、土坑墓、立石などから成る墓地群が発見され、枕崎市の松之尾遺跡や同じ指宿市の成川遺跡などと同じ南薩地方特有の立石を伴う墓であることが分かりました。また、南九州特有の多様な在地土器や、須恵器、移入土器、鉄製品等、供献もしくは副葬されたと思われる遺物も多数出土しました。

これらは、当時の墓域および墓地構成、その変遷などを知る上で貴重な資料として注目されています。この墓地に関連する集落跡は今回、特定できませんでしたが、今後、解明が進むものと期待されています。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた南薩地域振興局建設部指宿支所、指宿市教育委員会、関係各機関及び発掘に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成21年 3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 宮原 景信

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみすりがはまいせき							
書名	南摺ヶ浜遺跡							
副書名	街路事業潟山丈六線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	144							
編著者名	久保田昭二・辻 明啓							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査起因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
みなみすりがはまいせき 南摺ヶ浜遺跡	かごしまけん 鹿児島県 いぶすきし 指宿市 じゅうにちょう 十二町 あざくろがおか 字黒ヶ岡	46210	2-62	31° 13' 38"	130° 39' 08"	本調査 20050907 ～ 20051222 20070508 ～ 20071226	5,120	街路事業 潟山丈六線 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南摺ヶ浜遺跡	散布地	縄文時代晩期 弥生時代前期 弥生時代中期		上加世田式土器・入佐式土器・刻目突帯文土器・打製石鏃・楔形石器・石錐・石匙・削器・磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石・敲石・石錘・異形石器 突帯文土器 入来式土器・磨製石鏃				
	墓地	弥生時代後期 ～ 古墳時代	壺棺墓16基 甕棺墓1基 立石(板石)25基 円形周溝墓12基 土坑墓72基	中津野式土器・東原式土器・笹貫式土器 丹塗研磨土器・二重口縁壺 須恵器・磨製石鏃・砥石・鉄鏃・鉄剣・鉄刀・人骨				
遺跡の概要	<p>縄文時代晩期から古墳時代にかけての複合遺跡である。縄文時代晩期の上加世田式土器・入佐式土器などの土器や、打製石鏃・打製石斧などの石器が出土している。弥生時代後期から古墳時代にかけては、壺棺墓16基、甕棺墓1基、円形周溝墓12基、土坑墓72基、立石(板石)25基を検出し、成川遺跡や松之尾遺跡などに次いで南薩地方特有の墓が発見された。遺物としては中津野式土器から笹貫式土器まで3～5世紀末の壺・甕・鉢・高坏などがほぼ完全な状態で多数出土し、須恵器や丹塗土器、二重口縁壺、磨製石鏃、鉄製品など多種で豊富な遺物も出土している。また、壺棺墓内からは、人骨片も検出されている。このことは、この場所が墓域として脈々と使われてきたことを意味しており、南薩地方における墓制の変遷や地域における墓制の違いなどを示す標識となる遺跡である。</p>							



遺跡位置図 (1:50000)

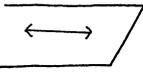
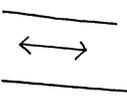
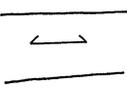
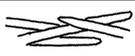
例 言

- 1 本書は、街路事業瀧山丈六線改良に伴う南摺ヶ浜遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県指宿市十二町字黒ヶ岡に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、鹿児島県土木部都市計画課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成17年9月7日から12月22日までと、平成19年5月8日から12月26日まで実施した。整理作業・報告書作成は平成19年度と平成20年度に実施した。
- 5 遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、鹿児島県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじたに委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て久保田昭二が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て久保田昭二・辻明啓が行った。
- 11 土器、石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て久保田昭二・辻明啓が行った。一部は、平成17年度に石器の実測・トレースを株式会社九州文化財研究所に、平成19年度に土器、石器実測・トレースを株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、監修は長野眞一・馬籠亮道が行った。
- 12 壺棺墓及び土坑内の埋土に関する放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 13 遺物の写真撮影は、吉岡康弘・西園勝彦が行ったが、巻頭カラーの写真撮影は、独立行政法人奈良文化財研究所の牛嶋茂氏の指導の下、吉岡康弘・西園勝彦が行った。
- 14 本書の執筆・編集は、I第1章・第2章、II, III, IV第1章、V, VIを久保田昭二が、I第3章、IV第2章を辻明啓が担当した。
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。
なお、南摺ヶ浜遺跡の遺物注記の略号は「ミナスリ」である。

凡 例

南摺ヶ浜遺跡における土器実測図について、調整痕の表示、黒斑並びに丹塗り痕の表示が重要と考え、下記のとおり表示を統一した。また、縮尺については、土器、石器、鉄製品それぞれ縮尺を統一して記載した。

1. 土器実測図調整痕表示について

調整痕種	実測図表示例	留意点	
ハケメ		<ul style="list-style-type: none"> ・ 工具幅を明瞭に ・ 始点終点の表示 ・ 切り合い関係の重視 	
ナ	指ナデ		<ul style="list-style-type: none"> ・ 指ナデ幅を明瞭に ・ ナデ方向を矢印で
	工具ナデ		<ul style="list-style-type: none"> ・ 工具幅を明瞭に ・ 輪郭幅を角張ったものに ・ ナデ方向を矢印で
	ナデ		<ul style="list-style-type: none"> ・ ナデ幅を明瞭に ・ ナデ方向を矢印で
デ	原体不明		<ul style="list-style-type: none"> ・ ナデ幅分かれば記載 ・ ナデ方向は片刃矢印で
指頭圧痕		<ul style="list-style-type: none"> ・ 指幅の明示 	
ミガキ		<ul style="list-style-type: none"> ・ ミガキ痕の重なり 	

2. 黒斑及び丹塗り痕表示

黒斑・・・ 
 丹塗り痕・・・ 
 ベンガラ文様・・・ 
 黒色研磨

3. 実測図スケール

- 土器の器高50cmを超えるものは原則、原寸の1/6で、それ以外は1/3で記載
- 石器は、原寸・1/2・1/3・1/4で記載
- 鉄製品は、1/3記載

目 次

巻頭カラー

序文

報告書抄録

例言

凡例

目次

I	発掘調査の経緯	1
	第1章 調査に至までの経緯	1
	第2章 調査の組織	1
	第3章 発掘調査の経緯	2
II	遺跡の位置と環境	5
	第1章 地理的環境	5
	第2章 歴史的環境	5
III	層位	9
IV	発掘調査の概要	12
	第1章 発掘調査の方法と成果	12
	第2章 縄文時代晩期の調査	14
	第3章 弥生時代前期から中期の調査	40
	第4章 弥生時代後期から古墳時代の調査	42
V	科学分析	186
VI	まとめ	190

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡分布図	7	第33図	4号壺棺墓	46
第2図	基本層位	9	第34図	5号壺棺墓	47
第3図	地層断面図(1)	10	第35図	6号壺棺墓	48
第4図	地層断面図(2)	11	第36図	7号壺棺墓	49
第5図	調査範囲図及びグリッド配置図	13	第37図	8号壺棺墓	50
第6図	縄文時代の遺物出土分布図	15	第38図	9号壺棺墓	51
第7図	縄文土器(1)	16	第39図	10号壺棺墓	52
第8図	縄文土器(2)	17	第40図	11号壺棺墓	53
第9図	縄文土器(3)	18	第41図	12号壺棺墓	54
第10図	縄文土器(4)	19	第42図	13号壺棺墓	55
第11図	縄文土器(5)	20	第43図	14号壺棺墓	56
第12図	縄文土器(6)	21	第44図	15号壺棺墓	57
第13図	縄文土器(7)	22	第45図	16号壺棺墓	58
第14図	縄文土器(8)	23	第46図	1号甕棺墓	59
第15図	縄文時代の石器(1)	26	第47図	立石	62
第16図	縄文時代の石器(2)	27	第48図	円形周溝墓(1)	64
第17図	縄文時代の石器(3)	28	第49図	円形周溝墓(2)	65
第18図	縄文時代の石器(4)	29	第50図	円形周溝墓(3)	67
第19図	縄文時代の石器(5)	30	第51図	円形周溝墓(4)	69
第20図	縄文時代の石器(6)	31	第52図	円形周溝墓(5)	71
第21図	縄文時代の石器(7)	32	第53図	土坑墓(1)	73
第22図	縄文時代の石器(8)	33	第54図	土坑墓(2)	74
第23図	縄文時代の石器(9)	34	第55図	土坑墓(3)	75
第24図	縄文時代の石器(10)	35	第56図	土坑墓(4)	76
第25図	縄文時代の石器(11)	36	第57図	土坑墓(5)	77
第26図	縄文時代の石器(12)	37	第58図	土坑墓(6)	78
第27図	縄文時代の石器(13)	38	第59図	土坑墓(7)	79
第28図	弥生土器(1)	40	第60図	土坑墓(8)	80
第29図	弥生土器(2)	41	第61図	土坑墓(9)	81
第30図	1号壺棺墓	43	第62図	遺物ブロック範囲図	84
第31図	2号壺棺墓	44	第63図	1・2号壺棺墓周辺遺物	87
第32図	3号壺棺墓	45	第64図	3号壺棺墓周辺遺物	88

第65図	4号壺棺墓周辺遺物	89	第100図	47・48・49(1)号土坑墓周辺遺物	125
第66図	5・6号壺棺墓周辺遺物	90	第101図	49号土坑墓周辺遺物(2)	126
第67図	7・8号壺棺墓周辺遺物	91	第102図	50号土坑墓周辺遺物	127
第68図	9号壺棺墓周辺遺物	92	第103図	54・55号土坑墓周辺遺物	128
第69図	12号壺棺墓周辺遺物	93	第104図	58・59・61号土坑墓周辺遺物	129
第70図	13号壺棺墓周辺遺物	94	第105図	63・66・67号土坑墓周辺遺物	130
第71図	14号壺棺墓周辺遺物	95	第106図	Aブロック周辺遺物(1)	132
第72図	14・15号壺棺墓周辺遺物	96	第107図	Aブロック周辺遺物(2)	133
第73図	16号壺棺墓周辺遺物(1)	97	第108図	A(3)・Bブロック周辺遺物	134
第74図	16号壺棺墓周辺遺物(2)	98	第109図	Cブロック周辺遺物	135
第75図	16号壺棺墓周辺遺物(3)	99	第110図	Dブロック周辺遺物(1)	136
第76図	1号円形周溝墓周辺遺物	100	第111図	Dブロック周辺遺物(2)	137
第77図	2号円形周溝墓周辺遺物(1)	101	第112図	Dブロック周辺遺物(3)	138
第78図	2号円形周溝墓周辺遺物(2)	102	第113図	Eブロック周辺遺物(1)	139
第79図	3号円形周溝墓周辺遺物	103	第114図	Eブロック周辺遺物(2)	140
第80図	4・5号円形周溝墓周辺遺物	104	第115図	Fブロック周辺遺物(1)	141
第81図	6号円形周溝墓周辺遺物	105	第116図	Fブロック周辺遺物(2)	142
第82図	7号円形周溝墓周辺遺物(1)	106	第117図	Fブロック周辺遺物(3)	143
第83図	7号円形周溝墓周辺遺物(2)	107	第118図	Fブロック周辺遺物(4)	144
第84図	8号円形周溝墓周辺遺物	108	第119図	Fブロック周辺遺物(5)	145
第85図	9号円形周溝墓周辺遺物	109	第120図	Fブロック周辺遺物(6)	146
第86図	1・3・4号土坑墓周辺遺物	111	第121図	Fブロック周辺遺物(7)	147
第87図	4・5・6(1)号土坑墓周辺遺物	112	第122図	Fブロック周辺遺物(8)	148
第88図	6号土坑墓周辺遺物(2)	113	第123図	Fブロック周辺遺物(9)	149
第89図	6号土坑墓周辺遺物(3)	114	第124図	G・H(1)ブロック周辺遺物	150
第90図	7号土坑墓周辺遺物(1)	115	第125図	Hブロック周辺遺物(2)	151
第91図	7(2)・8号土坑墓周辺遺物	116	第126図	Hブロック周辺遺物(3)	152
第92図	9号土坑墓周辺遺物(1)	117	第127図	Iブロック周辺遺物(1)	153
第93図	9(2)・10号土坑墓周辺遺物	118	第128図	Iブロック周辺遺物(2)	154
第94図	13・17・19号土坑墓周辺遺物	119	第129図	Jブロック周辺遺物(1)	155
第95図	20・21・27号土坑墓周辺遺物	120	第130図	Jブロック周辺遺物(2)	156
第96図	29号土坑墓周辺遺物(1)	121	第131図	Jブロック周辺遺物(3)	157
第97図	29号土坑墓周辺遺物(2)	122	第132図	Jブロック周辺遺物(4)	158
第98図	31・32・34・35号土坑墓 周辺遺物	123	第133図	Kブロック周辺遺物(1)	159
第99図	42・44号土坑墓周辺遺物	124	第134図	Kブロック周辺遺物(2)	160
			第135図	Kブロック周辺遺物(3)	161

第136図	Kブロック周辺遺物(4)	162	第148図	Rブロック周辺遺物(3)	174
第137図	Lブロック周辺遺物(1)	163	第149図	Sブロック周辺遺物	175
第138図	Lブロック周辺遺物(2)	164	第150図	溝状遺構周辺遺物	176
第139図	Mブロック周辺遺物(1)	165	第151図	鉄製品一括	176
第140図	Mブロック周辺遺物(2)	166	第152図	土器分類(1)	193
第141図	Mブロック周辺遺物(3)	167	第153図	土器分類(2)	194
第142図	Mブロック周辺遺物(4)	168	第154図	土器分類(3)	195
第143図	Nブロック周辺遺物	169	第155図	土器分類(4)	196
第144図	Oブロック周辺遺物	170	第156図	絵画土器分類(1)	198
第145図	Pブロック周辺遺物	171	第157図	絵画土器分類(2)	199
第146図	Rブロック周辺遺物(1)	172	第158図	鉄製品分類	201
第147図	Rブロック周辺遺物(2)	173			

表 目 次

第1表	周辺遺跡の地名表	8	第16表	遺構内遺物観察表	83
第2表	縄文土器観察表(1)	18	第17表	遺構内鉄製品観察表	83
第3表	縄文土器観察表(2)	21	第18表	土器分類表(時期毎)	86
第4表	縄文土器観察表(3)	24	第19表	遺物観察表(1)	177
第5表	縄文時代の石器観察表(1)	27		遺物観察表(2)	178
第6表	縄文時代の石器観察表(2)	34		遺物観察表(3)	179
第7表	縄文時代の石器観察表(3)	36		遺物観察表(4)	180
第8表	縄文時代の石器観察表(4)	39		遺物観察表(5)	181
第9表	弥生土器観察表	41		遺物観察表(6)	182
第10表	壺棺墓・甕棺墓遺構観察表	60		遺物観察表(7)	183
第11表	壺棺墓・甕棺墓土器観察表	60		遺物観察表(8)	184
第12表	立石観察表	61	第20表	鉄製品観察表	185
第13表	円形周溝墓観察表	70	第21表	磨製石鏃観察表	185
第14表	土坑墓分類表	72	第22表	土器分類表(器種毎)	192
第15表	土坑墓観察表	82			

図 版 目 次

地層断面写真	11	図版24	弥生・古墳時代出土遺物(4)	226	
図版1	錦江湾から見た南摺ヶ浜遺跡	203	図版25	弥生・古墳時代出土遺物(5)	227
図版2	平成17年度遺物出土状況	204	図版26	弥生・古墳時代出土遺物(6)	228
図版3	平成19年度遺物出土状況		図版27	弥生・古墳時代出土遺物(7)	229
	壺棺墓出土状況(1)	205	図版28	弥生・古墳時代出土遺物(8)	230
図版4	壺棺墓出土状況(2)	206	図版29	弥生・古墳時代出土遺物(9)	231
図版5	壺棺墓出土状況(3)	207	図版30	弥生・古墳時代出土遺物(10)	232
図版6	壺棺墓(4)・甕棺墓出土状況	208	図版31	弥生・古墳時代出土遺物(11)	233
図版7	立石出土状況	209	図版32	弥生・古墳時代出土遺物(12)	234
図版8	円形周溝墓(1)	210	図版33	弥生・古墳時代出土遺物(13)	235
図版9	円形周溝墓(2)	211	図版34	弥生・古墳時代出土遺物(14)	236
図版10	円形周溝墓(3)	212	図版35	弥生・古墳時代出土遺物(15)	237
図版11	土坑墓検出状況(1)	213	図版36	弥生・古墳時代出土遺物(16)	238
図版12	土坑墓検出状況(2)	214	図版37	弥生・古墳時代出土遺物(17)	239
図版13	土坑墓検出状況(3)及び		図版38	弥生・古墳時代出土遺物(18)	240
	遺物出土状況(1)	215	図版39	弥生・古墳時代出土遺物(19)	241
図版14	遺物出土状況(2)	216	図版40	弥生・古墳時代出土遺物(20)	242
図版15	遺物出土状況(3)	217	図版41	弥生・古墳時代出土遺物(21)	243
図版16	遺物出土状況(4)	218	図版42	弥生・古墳時代出土遺物(22)	244
図版17	遺物出土状況(5)	219	図版43	弥生・古墳時代出土遺物(23)	245
図版18	遺物出土状況(6)	220	図版44	弥生・古墳時代出土遺物(24)	246
図版19	縄文・弥生時代出土土器及び		図版45	弥生・古墳時代出土遺物(25)	247
	石鏃・石製品	221	図版46	弥生・古墳時代出土遺物(26)	248
図版20	縄文時代の石斧・石錘	222	図版47	弥生・古墳時代出土遺物(27)	249
図版21	弥生・古墳時代出土遺物(1)	223	図版48	弥生・古墳時代出土遺物(28)	250
図版22	弥生・古墳時代出土遺物(2)	224	図版49	弥生・古墳時代出土遺物(29)	251
図版23	弥生・古墳時代出土遺物(3)	225	図版50	弥生・古墳時代出土遺物(30)	252

I 発掘調査の経緯

第1章 調査に至るまでの経緯

県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を行っている。

この事前協議制に基づき、県土木部都市計画課（指宿土木事務所、現南薩地域振興局建設部指宿支所道路係、以下土木部）は、指宿市内において街路事業潟山丈六線改良工事を計画し、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。

当該工事の予定地内は、周知の遺跡である南摺ヶ浜遺跡の隣接地が含まれており、土木部、文化財課、指宿市教育委員会及び埋蔵文化財センターの四者で、その取り扱いについて協議を行った。その結果、対象地内の遺跡の広がりを確認するため、平成16年3月、指宿市教育委員会が詳細分布（試掘）調査を行い、古墳時代の遺物包含層を確認した。この結果を受けて、平成16年度に指宿市教育委員会が確認調査を実施し、縄文時代晩期・古墳時代の遺構・遺物を確認し、事業区内における遺跡の範囲が確定された。

そこで、土木部、文化財課、指宿市教育委員会及び埋蔵文化財センターの四者で再度協議し、4,000㎡について記録保存のための発掘調査を埋蔵文化財センターが実施することとなった。

当初の計画では、平成17年度に約1,600㎡、平成18年度以降に2,400㎡の発掘調査を行う予定であった。しかし、用地買収等の関係で平成17年度に1,200㎡の調査を行い、残りは平成18年度以降に調査することとなった。このため、平成17年度は、当初6か月の予定だった調査期間を4か月間（平成17年9月7日から12月22日）に短縮して調査を実施し、縄文時代晩期から弥生時代及び古墳時代の遺構・遺物が確認された。

当初予定していた平成18年度の調査は、買収が難航したため実施できなかった。

そこで、さらに土木部、文化財課、指宿市教育委員会及び埋蔵文化財センターの四者で協議し、前年度分も含めた3,920㎡について、平成19年5月8日から平成19年12月26日までの8か月間、埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査総面積は5,120㎡となった。

第2章 調査の組織

第1節 本調査（平成17年度）

事業主体 鹿児島県土木部都市計画課
（指宿土木事務所）
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 県立埋蔵文化財センター
所 長 上 今 常 雄
調査企画 次長兼総務課長 有 川 昭 人
次長兼調査第一課長 新 東 晃 一
主任文化財主事兼
調査第一課第一調査
係 長 池 畑 耕 一
主任文化財主事 中 村 耕 治
調査担当 文化財主事 寺 原 徹
文化財主事 久保田 昭 二

調査事務 主幹兼総務係長 平 野 浩 二
主 査 寄井田 正 秀

第2節 本調査（平成19年度）

事業主体 鹿児島県土木部都市計画課
（南薩地域振興局建設部指宿支所道路係）
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 所 長 宮 原 景 信
調査企画 次長兼総務課長 平 山 章
次長兼南の縄文調査
室 長 新 東 晃 一
調査第一課長 池 畑 耕 一
主任文化財主事
兼第一調査係長 長 野 眞 一
主任文化財主事 井ノ上 秀 文

調査担当 文化財主事 久保田 昭 二
 文化財研究員 辻 明 啓
 調査事務 総務係 長 寄井田 正 秀
 主 事 田之畑 美 幸
 調査指導
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授
 中 村 直 子

文化財研究員 辻 明 啓
 調査事務 総務係 長 紙 屋 伸 一
 主 事 木 曾 美 幸
 調査指導
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授
 中 村 直 子

第3節 報告書作成（平成20年度）

事業主体 鹿児島県土木部都市計画課
 （南薩地域振興局建設部指宿支所道路係）
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 県立埋蔵文化財センター
 所 長 宮 原 景 信
 調査企画 次長兼総務課長 平 山 章
 次 長 兼
 南の縄文調査室長 池 畑 耕 一
 調査第一課長 青 崎 和 憲
 主任文化財主事兼
 第一調査係長 長 野 眞 一
 調査担当 文化財主事 久保田 昭 二

福岡女子短期大学文化
 コミュニケーション学科日本文化コース教授
 橋 口 達 也
 鹿児島大学総合研究博物館資料研究系准教授
 橋 本 達 也
 企画委員会 文化財研究員 川 口 雅 之
 ” 馬 籠 亮 道
 報告書作成検討委員会 平成20年12月11日
 所長ほか11名
 報告書指導委員会 平成20年12月9日
 池畑次長ほか5名

第3章 発掘調査の経過

発掘調査の経過は、日誌抄から略述する。

第1節 平成17年度の調査

1 9月の調査内容

- ・5日開始予定だったが、台風14号接近のため7日に変更。オリエンテーション、機材搬入、環境整備を行う。
- ・表土剥ぎのあと、次の地点を調査する。
 B～D-4～7区4層、B～C-6・7区15層。
- ・B-7区で成川式土器の完形出土。出土状況写真撮影。（8日）
- ・新東晃一次長、現地指導。（14日）
- ・台風17号接近のため台風対策。（22日）

2 10月の調査内容

- ・発掘調査をした地点。
 B・C-6・7区15層、B～D-5～7区13・14・15層
- ・B-1～4区、C-3・4区表土剥ぎ。

- ・15層では、縄文晩期の遺物多数出土。B-6区、土器集中部写真撮影。（20日）
- ・丹波小学校6年生見学。6年生90名、引率担任3名参加。（24日）

3 11月の調査内容

- ・発掘調査をした地点。
 B-1～7区15層、C-1～7区15層。
- ・現地説明会実施、見学者81名。（5日）
- ・B・C-7区東側土層断面写真撮影。（7日）
 実測。（8日～16日）
- ・B-4～7区北側土層断面写真撮影。（9日）
 実測。（9日・10日・16日）
- ・B-1～4区北側土層断面写真撮影。（22日）
 実測。（25日～12月1日）
- ・B-1・2区15層遺物多数出土。出土状況写真撮影。（24日）
- ・航空写真撮影。（28日）
- ・11・14日は、雨天の為作業中止。

4 12月調査の内容

- ・発掘調査をした地点。
- ・B-2～4区15層，C-3・4区15層，B・C-4・5区15層。
- ・B-1区西側土層断面写真撮影。実測。(1日)
- ・B・C-3・4区15層上面コンタ図作成。(6日)
- ・鹿児島市立生見小学校5・6年生発掘体験。児童17名，担任2名。(7日)
- ・B・C-1～4区15層上面コンタ図作成。調査区域図作成。(19日)
- ・B-1～4区北側土層断面，B-1区西側土層断面(13層以下)写真撮影，実測。(19日)
- ・調査区完掘状況写真撮影。(21日)
- ・機材・図面整理。室内清掃。(21日・22日)
- ・雪による交通マヒのため，撤収作業を26日に延期。

第2節 平成19年度の調査

1 調査の方法・工程

・表土剥ぎ

当初では，7層まで重機で表土剥ぎを行う予定であったが，7層で完形壺(P3)が検出されたため，5層まで重機で表土を剥ぎ6層の調査から入る。7層上面での遺構・遺物は他に発見されなかった。そのため，最初の表土剥ぎ以外は7層途中まで重機で表土剥ぎを実施した。

B・C-6～7区(5月)，B・C-6～9区(5月中旬)，D-3～5区(6月中旬)，B-6～9・B～D-9・B～D-5・6区(7月初旬～中旬)，A～B-6～11区(9月)

・調査

土器，遺構の出土・検出により下記のような工程で発掘調査を実施した。

B・C-6・7区6層(5月)，B～D-6～9区9a層(5月～7月)，C・D-10・11区確認トレンチ(5月)，C・D-10・11区表土精査(5月，9月)，B～D-6～9区9b層(8月6日～9月末まで)，B・C-10区(8月中旬～)，B～D-5～10区9b層(8月20日～)，A～B-6～11区9a層(9月～9月末まで)，A～B-6～11区9b層(9月末～)，C・D-10・11区15層(10月中旬)，B・C-9～11区9b層(10月中旬

～10月末)，B・C-9～11区9c層(10月末～)，C・D-4～7区15層(10月末～)，A～D-5～11区9c層(11月～12月初旬)，A～D-6～10区15層(12月初旬～12月26日まで)

1) 5月の調査内容

- ・C・D-10区の確認トレンチ内から縄文晩期の遺物が出土。
- ・9a層から遺物が出土し始め，9b層からは完形土器も含めて多数出土する。
- ・調査区内安全対策(落下防止杭・廃土置き場周辺へコンバー設置)を実施。(17日)
- ・B～D-6～9区遺物出土状況写真撮影。(22日)

2) 6月の調査内容

- ・9層は，遺物の出土状況や土の状態から，9a層(明褐色粘質土)9b層(黒褐色土)9c層(暗褐色硬質土)の3層に分層。(7日)
- ・中村直子氏(鹿児島大学准教授，6日)・竹中正巳氏(鹿児島女子短期大学准教授，8日)
- ・9層板石・完形土器配置図作成。(11日)
- ・C～D-9区東側土層断面写真撮影，実測。(12日)
- ・B～D-7～9区1/20土器割付図面実測。(20日)
- ・B～D-9区東側土層断面写真撮影。(21日)
- ・22日・26～28日は，雨天のため作業中止。

3) 7月の調査内容

- ・台風接近のため，台風対策を発掘作業と並行して実施。(12日・13日)
- ・調査区範囲図作成。(25日)
- ・B～D-10・11区IXb層土器配置図作成。(26日)
- ・3・4・11日は，雨天のため作業中止。

4) 8月の調査内容

- ・1日は，台風対策を実施。2日は台風のため作業中止。
- ・17日～12月13日は，1/20土器割付図面実測。
- ・B-6～10区北側土層断面写真撮影(24日)。実測。(28日)

5) 9月の調査内容

- ・1/10土器平・断面実測(5日～12月6日)。
- ・13日は，雨天のため作業中止。
- ・現地説明会実施。参加者461名。(15日)
- ・土器配置図及び調査範囲図作成。(25日)
- ・A～D-9区東壁土層断面写真撮影。(26日)実測。(28日)

6) 10月の調査内容

- ・ 1/20土器割付図面に記入した完形土器のレベル入れ及び取り上げ。(3日～12月13日)
- ・ C・D-10・11区15層上面で土坑2基検出。(23日)
- ・ 中村直子氏(鹿児島大学准教授), 現地指導のため来跡。(25日)

7) 11月の調査内容

- ・ C・D-7～9区9c層遺構検出状況写真撮影。(1日)
- ・ 壺棺1・板石1周辺の出土サンプル土は, 人骨確認。(鹿児島女子短期大学准教授竹中正巳氏)(8日)
- ・ A～D-9～11区9c層全面遺構調査。遺構多数検出。(19日～12月14日)

8) 12月の調査内容

- ・ 全区IXc層遺構検出状況写真撮影。(7日)
- ・ 1/20遺構割付図面作成。(13日～26日)
- ・ A～D-8～10区15層上面で, 9b層の土を埋土とする遺構検出。(11日～21日)
- ・ B～D-9区東側土層断面(13層以下)写真撮影。実測。(26日)
- ・ B-6～9区北側土層断面(13層以下)写真撮影。実測。(26日)
- ・ 機材・図面整理。室内清掃。撤収作業。(26日)

※主な来跡者(敬称略)

南薩地域振興局建設部指宿支所道路係

(上園健一郎, 下御領清治)

指宿市教育委員会

(鎌田洋昭, 中摩浩太郎, 渡部徹也)

鹿児島大学(橋本達也, 本田道輝)

鹿児島女子短期大学(竹中正巳)

愛媛大学(村上恭通, 三吉秀充)

鹿児島国際大学(上村俊雄)

琉球大学(土肥直美)

南種子町教委(徳田有希乃)

大阪府立弥生文化博物館(東徹志)

大阪府文化財調査研究センター(本間元樹)

指宿市砂むし温泉商店街振興組合

※取材: 南日本新聞, 読売新聞

第3節 平成20年度整理・報告書作成作業

1 整理・報告書作成作業の流れ

整理・報告書作成作業は, 平成20年6月2日から平成21年3月31日まで県立埋蔵文化財センターで行った。作業の経過は下記のとおりである。

1) (6月)

- ・ 縄文・弥生時代の土器及び石器の実測, トレース。
- ・ 古墳時代の土器接合及び実測。

2) (7月)

- ・ 古墳時代の土器接合及び実測。遺構図面トレース。

3) (8月)

- ・ 縄文・弥生時代の土器レイアウト及び原稿作成。
- ・ 古墳時代の土器実測及び接合。

4) (9月)

- ・ 古墳時代の土器接合及び実測。

5) (10月)

- ・ 古墳時代の土器実測・トレース及び接合。

6) (11月)

- ・ 縄文・弥生時代の石器レイアウト及び原稿作成。
- ・ 古墳時代の土器実測・トレース及び接合。
- ・ 古墳時代の遺構・遺物レイアウト。

7) (12月)

- ・ 報告書原稿作成及びレイアウト

8) (1月～3月)

- ・ 遺物及び図面整理。

2 遺物指導

- ・ 10月17日鹿児島大学中村直子准教授
- ・ 10月21日福岡女子短期大学橋口達也教授
- ・ 11月7日鹿児島大学橋本達也准教授

Ⅱ 遺跡の位置と環境

第1章 地理的環境

南摺ヶ浜遺跡は鹿児島県指宿市十二町字黒ヶ岡に所在する。

遺跡の所在する（旧）指宿市は、薩摩半島の南東部に位置している。北は田貫川を境に鹿児島市喜入町と、西は標高約350～400mの山地を境にして南九州市穎娃町と接し、南は池田湖のある指宿市開聞町及び良港として名高い指宿市山川町と接している。東は、約19kmに及ぶ断層海岸線をなして鹿児島湾に臨み、対岸の大隅半島の西側を一望できる。市内のほぼ中央部を南北方向に鹿児島市と指宿市を結ぶ国道226号線が通り、鹿児島湾側には温泉観光街が広がる。

指宿市の地形の特徴としては、山地・台地・平地・湖沼の大きく4つに区分される。西側には標高約300m程度の山地が連なり、主に安山岩類火砕物質からなっている。場所によっては、温泉変質を受け赤色や黄色の粘土となっている。この上に、始良カルデラ起源の大隅降下軽石や桜島起源の薩摩が堆積し、さらに鬼界カルデラ起源のいわゆるアカホヤが堆積する。さらにその上には黒色腐植土を挟んで、池田カルデラ起源の池崎火山灰、尾下スコリア、池田降下軽石が、そして、山川湾起源の山川ベースサージ堆積物、池田湖火山灰が堆積する。これらが指宿地方の地形形成要因となる。指宿市開聞町にはトニコロイデ型の火山とし

て有名な開聞岳がある。この開聞岳の活動は、約4,500年前頃から始まり、有史以来、史料にも活動記録が見えるが、この開聞岳起源の固結した火山灰にも広く覆われ指宿地方特有の地形をなしている。指宿周辺では他にも阿多カルデラ・鰻池などの古い火口がある。

開聞岳起源の噴出物堆積層は、通称、黄ゴラ、暗紫ゴラ、青ゴラ、紫ゴラがある。また、近年、あとひとつのテフラが確認され、縄文時代後期から874年まで計5回の大きな活動があったものと推定されている。

指宿市街地は東側から南側に鹿児島湾が開き、西側から北側に山が迫る地形をなしており、海岸へ向かって西から東へゆるやかに下降する扇状地上にある。北側の山の基盤は安山岩で、海岸に接した部分は断崖となっている。

南摺ヶ浜遺跡は、市街地の南端近くにあり、国指定史跡『指宿橋牟礼川包含地』の南側およそ500mの位置にある。市教委によって調査された南摺ヶ浜遺跡土壙墓群とは県道を挟んで南側に隣接する。遺跡の東側は急な崖をなして鹿児島湾に近接している。海岸は北から続く砂丘の端にあたり、これから南は岩礁性海岸となっている。西側から広く延びる扇状地の先端部に位置し、緩やかな丘の斜面に面している。

第2章 歴史的環境

指宿市における周知の遺跡は、池田湖及び開聞岳噴出物などの堆積層の年代と深くかかわっている。

旧石器時代の遺跡は、市北部に集中している。薩摩半島南部では旧石器時代の遺跡として初めて調査された小牧3A遺跡は、シラスよりも上にあるナイフ形石器文化期において当時の拠点としてくり返し利用された可能性があることや、遺跡以外から石材剥片を持ち込み、最終加工を行っていたと考えられていることで注目されている。ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・

両面加工尖頭器などナイフ形石器文化期の石器と、細石刃核、細石刃など細石器文化期のものとがある。また、水迫遺跡では、赤色頁岩や黒曜石を素材とした小形のナイフ形石器や台形石器などからなるナイフ形石器文化終末期から、野岳・休場型細石刃核や細石刃からなる細石刃文化初期のものが出土している。また、後期旧石器時代の竪穴状遺構や炉跡、杭跡、道跡などが検出され、日本の集落の起源を考える上で重要な遺跡である。鹿児島市喜入町帖地遺跡はシラスより下位の後期旧石器時代前半期のナイフ形石器文化期の遺跡である。

縄文時代には水迫、橋牟礼川、南摺ヶ浜、新番所後、大渡などの遺跡がある。水迫遺跡では草創期・早期の遺構・遺物が発見されている。草創期では集石・舟形配石炉・落とし穴・柱穴などが検出され、この時期の土器は岩本式土器に先行する貝殻文系円筒形土器で、水迫式土器と呼ばれている。早期でも集石や舟形配石炉、落とし穴、柱穴などが検出され、岩本式土器・石鏃・石皿・磨石などが出土している。岩本遺跡では早期初頭の円筒形土器が出土しており、岩本式土器と呼ばれている。石器は打製石鏃や磨製石鏃・局部磨製石槍・石匙などが出ているが、石皿は周辺を加工して楕円形や台形状に仕上げている。近くにある小牧3A遺跡でも早期の前平式土器・吉田式土器などが出土している。橋牟礼川遺跡では、中期～晩期にかけての遺物が出土しており、このうち後期の土器はかつてこの遺跡で縄文土器と弥生土器が火山灰層を境に上下で出土し、その時期差を明確とした学史に残るもので、当時指宿下層式土器と呼ばれ、現在では指宿式土器と呼ばれているものである。大園原遺跡では松山式土器・市来式土器などの後期の土器とともに、石斧・砥石なども出土しているが、その中に掘立柱建物を描いているのではないかとみられる線刻画土器が見つまっている。これは絵の中身とともに、その描き方が一視点画であることが貴重だとされている。片野田、南摺ヶ浜、新番所後遺跡では、晩期の上加世田式土器、入佐式土器、刻目突帯文土器が出土している。特に南摺ヶ浜遺跡で出土した宇宿上層式土器は、当時南西諸島との交流があったことを示す貴重な資料である。他に異形石器なども出土している。これらのことからこの周辺の人々の生活の様子が徐々にではあるが明らかになりつつある。

弥生時代の遺跡数はそれほど多くない。南丹波遺跡では、後期の花卉状住居跡が発見され、当時の人々の生活の様子の解明が今後、期待される。水田となる低湿地がほとんどないため、遺跡が少ないものと思われるが、成川遺跡の低地では中期後葉の堅穴住居跡が8軒検出され、山ノ口式土器の他に須玖式土器・凹線文土器などの外来系土器や、磨製石鏃・石剣・砥石などが出土している。隣接して3基の立石とともに須玖式土器が供献されている。また、市の北側に位置する横瀬遺跡では後期の堅穴住居跡が12軒検出され、その中の1

軒からは朝鮮半島製と考えられる「変形渦文鏡」が出土している。破碎鏡ではあるが、貴重品である。鏡の出土はこの地域に権力者のいたことを示している。さらに、南摺ヶ浜遺跡の墓の一部と重なる後期の堅穴住居跡が、近くの南丹波遺跡で検出されている。この堅穴住居の一部は花卉状を呈しているが、横瀬遺跡のものの一部も花卉状である。

古墳時代においては、南摺ヶ浜遺跡の周辺に連綿として集落遺跡がみられる。橋牟礼川遺跡では、200軒を越える多くの堅穴住居群、土器捨て場、貝塚、溝状遺構等が発見されており、長期にわたって多くの人が住んでいたことがわかる。遺物では、多量の成川式土器と呼ばれる在地の土器とともに、初期須恵器、子持勾玉、青銅製鈴、青銅製鏡片、ガラス製の丸玉や小玉・土製丸玉・蛇紋岩製装飾品・勾玉等の特殊遺物も出土していることから、力のある人々の生活の様子が見え、重要な遺跡である。住居の中から鉄器やふいごの羽口も出土し、鉄製品を作っていたことがわかる。また、鉄製釣針・石錘・土錘などの漁撈具とともに、舟形をした軽石製品も出土しており、漁撈生活にも頼っていたことがうかがえる。市街地の北にある尾長谷迫遺跡でも4軒の堅穴住居が検出されており、そのうちの1軒からは高坏形土器を再利用したふいごの羽口や鉄床石と考えられる台石、砥石とともに66点の鉄滓が出土し、6世紀頃に鍛冶場として使われていたようである。

墓としては指宿地方で初めて発見された高塚古墳の弥次ヶ場古墳、南摺ヶ浜遺跡の土坑墓群が発見されている。また、山を越えた西側には南薩地方における墓制を解明する上で重要な立石を伴う土坑墓群のある成川遺跡があるが、ここは古墳時代の土器である成川式土器の標式遺跡でもある。

古代においては、貞観16年の開聞岳噴火による火山礫・火山灰におおわれた村落・畠などが橋牟礼川・敷領などの遺跡で検出され、注目されている。橋牟礼川遺跡では火山灰の重みで倒壊した掘立柱建物など多くの建物・道跡・貝塚・畠跡などからなる村落が検出されている。畠は広い範囲にみられ、馬鍬の跡なども検出されている。多くの出土品の中には「府」あるいは「厨」、「真」などの墨書土器、転用硯、丸軛・巡方もあり、敷領遺跡とあわせて揖宿郡役所など役所的性格をもつ遺跡と考えられている。敷領遺跡でも橋牟礼川遺跡

第1表 周辺遺跡の地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	松ヶ迫	指宿市西方松ヶ迫・松ヶ迫原	低地	弥生・古墳		
2	玉利水源	指宿市東方玉利瀬坂付	台地	古墳		
3	上玉利Ⅱ	指宿市東方玉利上玉利	丘陵	弥生・古墳・古代・中世	柱穴、杭穴、硬化面、柱材	
4	矢石	指宿市十町字矢石	低地	弥生(後)・古墳・奈良～平安・中世		
5	弥次ヶ湯	指宿市十町弥次ヶ湯	低地	弥生・古墳・平安		
6	上玉利Ⅰ	指宿市東方玉利上玉利	低地	古墳		
7	迫田	指宿市十二町迫田他	低地	古墳・古代・中世	五輪塔、笠、成川式土器、青磁、白磁	
8	南迫田	指宿市十町高迫田	低地	縄文(後)～現代		
9	敷領	指宿市十町敷領・敷領他	低地	弥生(中)・古墳・奈良～平安		
9	弥次ヶ湯古墳	指宿市十二町赤塚	低地	古墳	円墳、弥生土器、辻堂原式土器、笹貫式土器	
10	湯の里	指宿市十二町湯之里	低地	古墳		
11	大牟礼西	指宿市十二町大牟礼西尾建之後	低地	古墳		
12	原田城跡	指宿市十二町中小路	山頂	中世		
13	小田	指宿市十二町小田	低地	古墳・奈良～平安・中世	古道、起耕跡、笹貫式土器、須恵器、青磁、土師器、輸入陶磁器、染付	
14	高田原	指宿市十二町高田原	低地	弥生・古墳・古代		
15	片野田	指宿市十二町片野田	低地	縄文(晩)・弥生～近代	柱穴、竪穴式住居、土壇、浅鉢、深鉢、成川式土器、須恵器、鉄器、軽石製品	
16	橋牟礼川	指宿市十二町下里他	低地	縄文(中・後・晩)～現代	竪穴住居、土器捨て場、貝塚、畠跡、鍛冶遺構、土壇、成川式土器、須恵器、子持勾玉、鉄器、青銅製鈴、墨書土器	
17	南丹波	指宿市十二町南丹波小牟礼原他	低地	弥生(後)・古墳・奈良～平安	古道、畠跡、柱穴、成川式土器、土師器、須恵器、青磁	
18	丈六	指宿市十二町丈六	低地	古墳・奈良～平安		
19	向吉	指宿市十二町向吉向吉ノ上	低地	古墳	笹貫式土器、壺形土器、鉢形土器、高杯	
20	山王	指宿市十二町山王平他	低地	古墳	成川式土器、円盤形土製品	
21	南摺ヶ浜	指宿市十二町摺ヶ浜南	低地	縄文・弥生・古墳・平安	土坑墓、成川式土器、上加世田式土器、入佐式土器、刻目突帯文土器、石錘、異形石器	本報告書
21	牟礼瀬	指宿市十二町摺ヶ浜南牟礼瀬	低地	古墳		
22	新番所後	指宿市十二町字	山麓	縄文・弥生・古墳・古代	上加世田式土器、入佐式土器、黒川式土器、刻目突帯文土器、円盤状加工品、石斧、石皿、敲石	
23	黒ヶ岡	指宿市十二町摺ヶ浜南黒ヶ岡	台地	古墳		
24	道ノ尻	指宿市十二町摺ヶ浜南道ノ尻	台地	古墳		
25	大渡	指宿市十二町大渡	台地	縄文・古墳		
26	内山	指宿市十二町内山他	台地	縄文・古墳		
27	下原・神方	指宿市山川町成川下原・今村	低地	弥生(後)・古墳	壺形土器、鉢形土器、甕形土器、高杯	
28	内山	指宿市山川町成川内山	台地	縄文(中・後)	指宿式土器	
29	馬背城跡	指宿市山川町成川507-1	山地	中世		山城
30	成川	指宿市山川町成川曲道(成川バイパス近辺)	丘陵	縄文(前・中・後)・弥生・古墳	立石、山ノ口式土器、須玖式甕棺、成川式土器、鉄鏃、鉄剣、鉄刀、磨製石鏃	「考古学雑誌」43-4 「鹿児島史学」 6巻泉埋文報(24)
31	森山	指宿市山川町成川	丘陵	古墳	成川式土器	
32	川口坂	指宿市山川町成川川口坂	台地	弥生(後)	弥生土器、散布多し	
33	山根貝塚	指宿市山川町成川山根(電波観測所内)2147	台地	弥生(後)	完形壺形土器	
34	福元洞窟	指宿市山川町福元(山川港崖下)	崖下	弥生(後)	石器、弥生土器、銅鏡、骨角器、須恵器、人骨、骨製品、軽石製品	「日本考古学年報」 「水産講習所研究報告」 人文科学編第1号

と同じように掘立柱建物や畠などが検出されており、「糶」・「智」などの墨書土器、転用硯、圭形の亀トに用いられたと考えられる鉄製品など役所的出土品がみられる。この一帯が古代の中心地だったのであろう。また、山川湾の西壁の岩のさげ目を古代の墓として使った福元岩陰遺跡では、中国製の鏡も出土した。

中世には松尾城・清見城などといった山城が周囲にあるが、開聞岳噴火による火山礫、ゴラに広くおおわれているため、畠などの開発が進まず、遺跡は少ない。近世も同様であるが、鹿児島湾口に近いこともあり、現在の港付近は交易の地として栄えた。

Ⅲ 層 位

南摺ヶ浜遺跡の基本層序は、指宿市教育委員会が実施した確認調査をもとにした。また、この層

位については、橋牟礼川遺跡の基本層位と対比して設定されている。

橋牟礼川標準層位

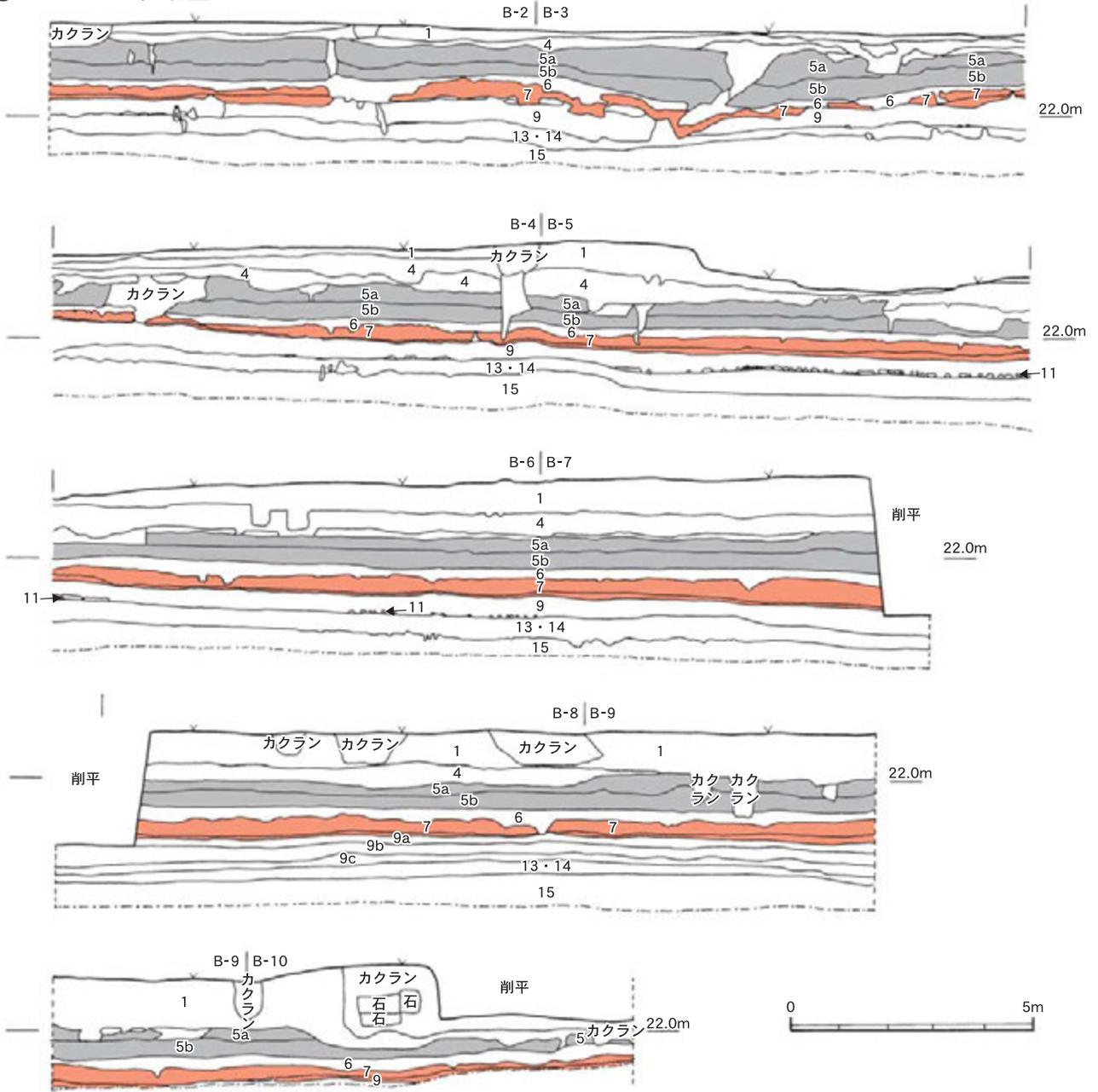
南摺ヶ浜基本層位

1層	1層	黒褐色土層
3層	4層	黒色土層
4層a	5層	紫灰色固結火山灰層
4層b	6層	暗オリーブ褐色土層
5層a	7層	青灰色固結火山灰層
5層b	9a層	明褐色粘質土
5層c	9b層	黒褐色土
6層a	9c層	暗褐色硬質土 (パミス含)
6層b	11層	暗紫色火山灰層
7層	13層	黒褐色土層
8層a	14層	黒褐色土層
8層b	15層	暗褐色土層
8層c	17層	暗青灰色火山灰層
9層		
10層?		
10~12層		
13層		
14層		
15層a		
15層b		
16層		
17層		
18層		

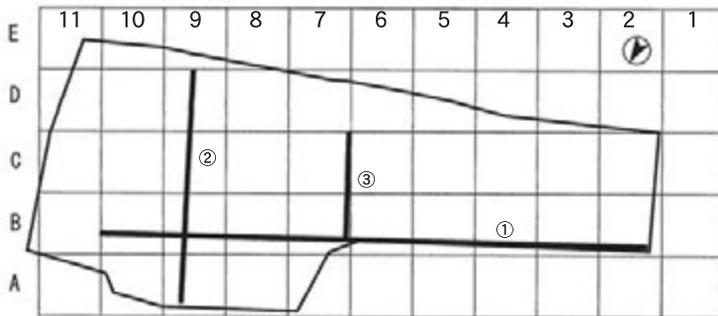
- 1層：表土
- 4層：表土
- 5層：平安時代の開聞岳噴出物堆積層。上下2層に堆積しており、下部は874年3月25日の噴出物。通称「紫ゴラ」
- 6層：奈良・平安時代該当層
- 7層：7世紀第4四半期ごろか。開聞岳起源。通称「青ゴラ」
- 9層a：古墳時代中期の遺物包含層
- 9層b：古墳時代初期～中期にかけての遺物包含層
- 9層c：弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての遺物包含層全面にはない。
- 11層：下部に火山礫が堆積。通称「暗紫ゴラ」
- 13.14層：弥生時代中期の遺物包含層
- 15層：縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物包含層

第2図 基本層位

① B-2～11区北壁

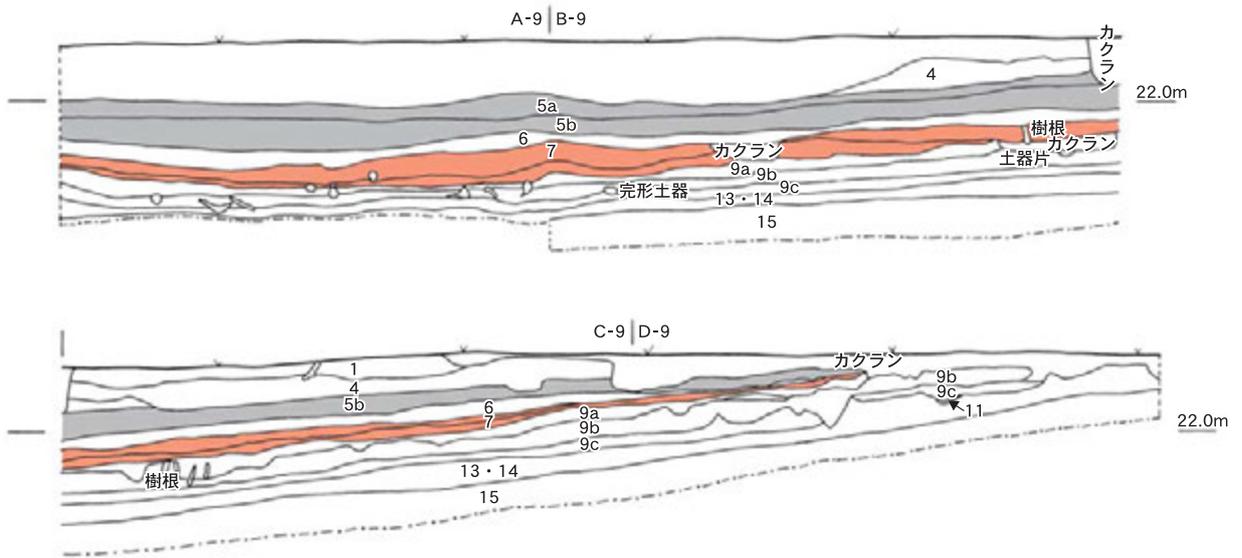


- 1 層 黒褐色土
- 4 層 黒色土
- 5 a 層 紫ゴラ (2回目噴出堆積層)
- 5 b 層 紫ゴラ (1回目噴出堆積層)
- 6 層 暗オリブ褐色土
- 7 層 青ゴラ
- 9 a 層 明褐色粘質土
- 9 b 層 黒褐色土
- 9 c 層 暗褐色硬質土 (パミス含)
- 11 層 暗紫ゴラ
- 13・14層 黒褐色土
- 15 層 暗褐色土

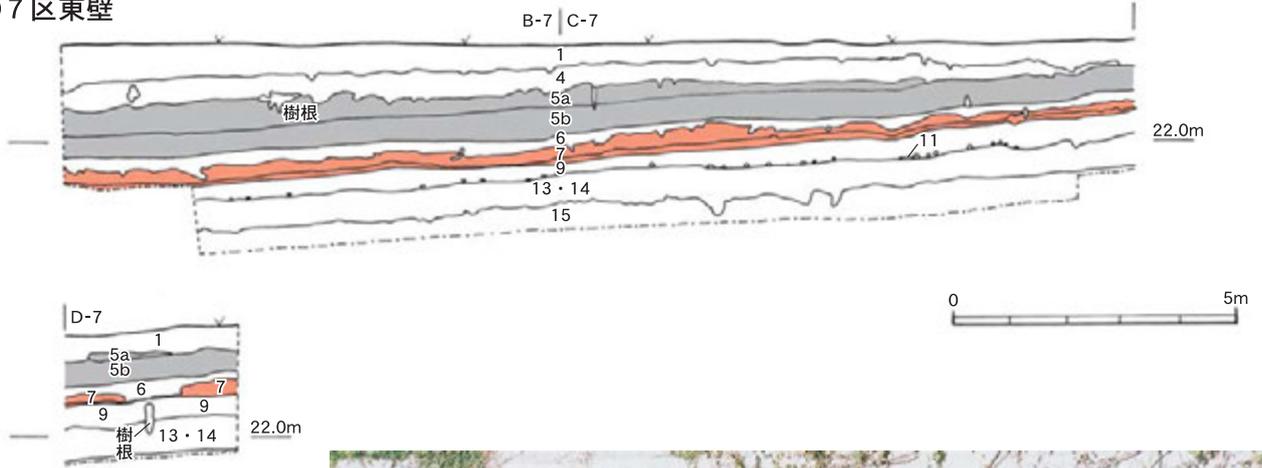


第3図 地層断面図(1)

② 9区東壁



③ 7区東壁



地層断面写真

第4図 地層断面図(2)

指宿周辺は平安時代の開聞岳噴火出物である通称ゴラ（5層に該当する）が腐食化した層が表土となっており、現在の表土は礫が多く滞水性のない土壌である。平安時代以降の層はここでは1層と4層にあたり、1層が黒褐色土、4層が黒色土である。2層・3層はここでは確認されていない。紫ゴラと呼ばれている紫灰色火山灰はこまかい礫をも含んでおり、山クワも使えないほど固結した層である。この付近では約1.5mほどの厚さがある。6層は暗オリーブ褐色土の層で、奈良・平安時代の包含層に該当する層だけが、ここでは無遺物層である。7層は青灰色固結火山灰の層で、7世紀第4半期頃の開聞岳起源の噴火物とされ、俗に青ゴラと呼ばれている。この層にも細かい礫が多く含まれ、紫ゴラ同様、固い地層である。当遺跡では厚さが1mほどあり、古墳時代の土器の一

部はこれにおおわれている。8層は橙色土層だが、ここでは検出されていない。9層は弥生時代終末期から古墳時代にかけての包含層で、上からa、b、cの3つの層に分けられる。a層は明褐色粘質土、b層は黒褐色土、c層はパミスまじりの暗褐色硬質土である。10層は赤橙褐色粘質土だが、ここでは検出されない。11層は下部に火山礫が堆積した俗に暗紫ゴラと呼ばれている暗紫色火山灰層で、これも弥生中期頃の開聞岳噴火出物とされている。12層は明褐色土だが、ここでは検出されていない。13層・14層は微妙に色調の異なる黒褐色土で、弥生時代中期の遺物包含層である。15層は暗褐色土で、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物包含層である。この下には暗青灰色火山灰などが堆積しているが、以下が無遺物層となっている。

IV 発掘調査の概要

第1章 発掘調査の方法と成果

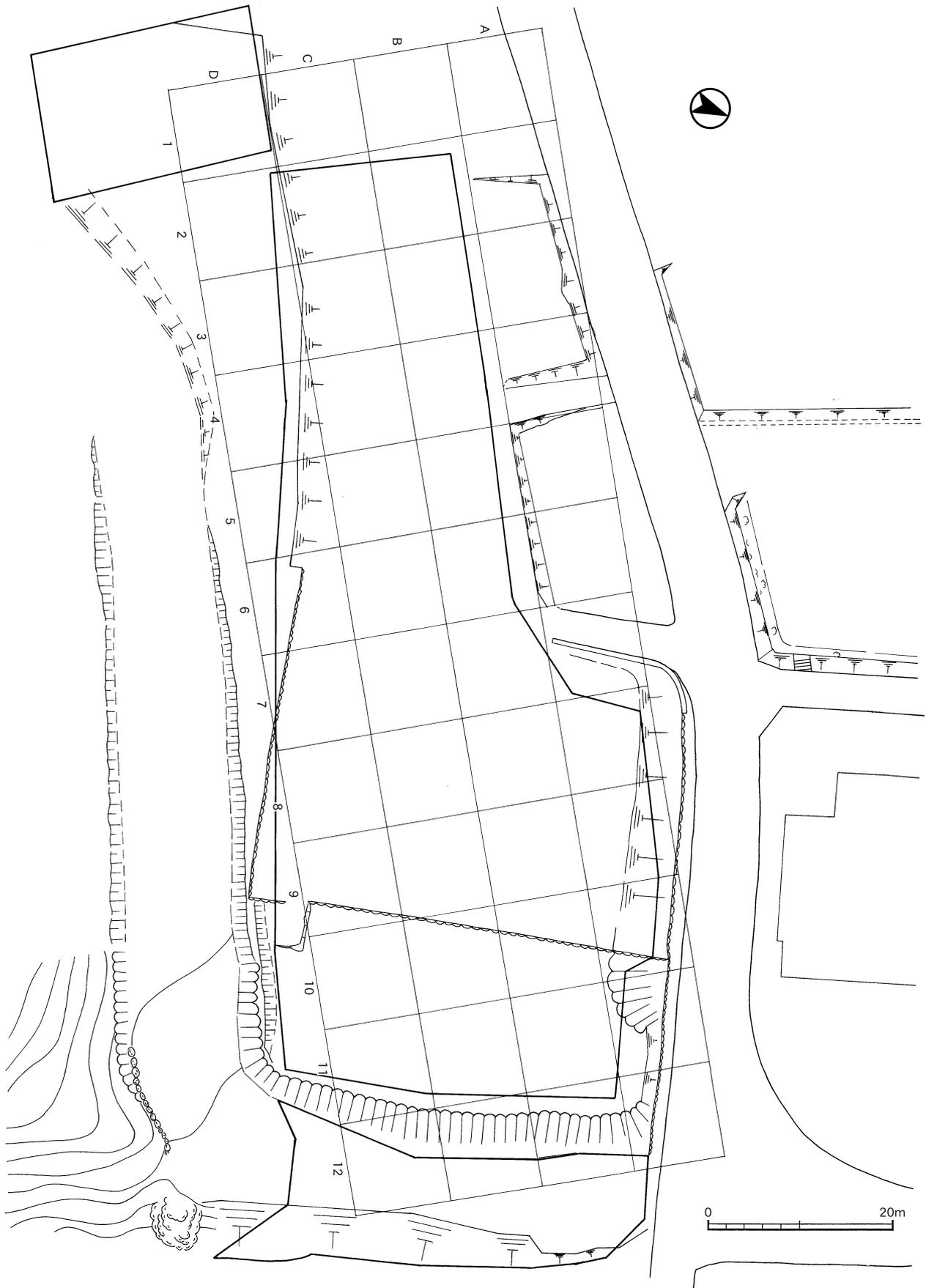
調査の対象地は道が台地を削って走るため、幅20m～41mで、確認調査によって長さ100mの範囲となった。グリッドは道路予定の中心杭HN05とHN06を結ぶ線の中軸線とし、10m四方をひとつの区にすることとした。それぞれのグリッドは北からA・B・C・D、西から1・2・3・・・12とし、それぞれの区はA-1区、A-2区などと呼んでいる。

調査は用地買収が完全にできず立退き等が遅れたため、単年度ではできず、17年度と19年度の2回に分けて行うこととした。17年度がB・C・D-2～7区、19年度がD-2～6区、A～E-7～12区である。当初、7層までを重機で剥ぐ予定だったが、7層上面で壺形土器が出てきたため、6層までとし、6層から人力に変えたが、その後出土しなかったため、7層途中までを重機で剥ぎ、その後は人力で調査した。6区までは縄文土器だけの出土だったため、山クワやジョレンを使っての作業だった。7区から東側は古墳時代の墓地となったため、遺構面までを山クワやジョレンを用い、遺構は移植ゴテなどを用いる作業とした。

当遺跡は縄文時代から古墳時代の複合遺跡であるが、6区以西は縄文時代の単純遺跡で、逆に7

区以東は古墳時代の墓地を主体とする遺跡である。縄文時代の遺物は晩期の上加世田式土器や入佐式土器・刻目突帯文土器を主体とし、これに伴って打製石斧や石皿・磨石・石錘など多種の石器が出土している。遺構は検出されていないが、多くの頁岩剥片・チップ等が出土していることから、打製石斧等の製作跡のあったことが想定される。弥生時代の土器も少量であるが出土しており、前期の突帯文土器や中期の incoming I 式土器、 incoming II 式土器などがある。磨製石鏃も1点出土している。

弥生時代終末期～古墳時代中期の土器はこの遺跡の主体となる時代のものである。遺構として、壺棺墓16基、甕棺墓1基、円形周溝墓12基、土坑墓72基、立石25基などがあり、土器の集中区などもみられる。供献土器と思われる立位の土器群なども遺構のひとつであろうが、元位置を留めているか否かの判断がつきにくい。多量の土器とともに、鏃・刀・剣などの鉄製品、磨製石鏃・砥石などの石製品も出土しているが、いずれも供献品と思われる。土器の中には丹塗土器・線刻画土器・二重口縁壺などの特殊なものほかに臙や小型壺などの須恵器もみられる。



第5図 調査範囲図及びグリッド配置図

第2章 縄文時代晩期の調査

第1節 概要

縄文時代晩期の遺物は、15層で主として出土している。15層は、開聞岳噴出物の黄ゴラ層の上に該当し、既存の土器型式でいうと上加世田式土器から刻目突帯文が全区から出土している。縄文時代晩期の主体は15層であるが、13層～16層間でも出土している。

なお、石器は打製石鏃、磨製石鏃、石匙、石錐、楔形石器、異形石器、磨製石斧、打製石斧、石皿、磨石、敲石、石錘のほかに、石器製作に関わる調整剥片が多く確認される。土器については、深鉢形土器を6類、浅鉢形土器を3類に区分した。遺構は検出されていない。

第2節 遺物

1 土器

①深鉢

深鉢は、口縁部の形状及び口縁部文様帯の沈線文の本数を視点としてI類～VI類に区分し、特にII類土器についてはa、bに細分した。土器片の数は多いが、接合するものが少なく口縁部を中心に分類を行った。

I類 (第7図1～5)

口縁部施文帯幅が狭く、直線的に立ち上がるものをI類とした。口縁部が頸部から外に開く1～3と、短く直線的に立ち上がる4・5が存在する。

1の復元口径は32cmで、口径と胴部屈曲部径がほぼ一致する。口縁部の内外と胴部下位は横方向に、胴部上位は縦方向に丁寧にみがかれる。2は短く直行する口縁部に2本の沈線文を深く巡らし、5は内傾する。2は横方向にみがかき、5はへら状工具の横方向ナデが確認できる。

II類

頸部屈曲部から直線的に外に開き、沈線文を回旋する施文帯として発達する一群をII類土器として一括した。また、回旋する沈線文4本で構成する一群をIIa類、5本以上で構成する一群をIIb類と細分している。本遺跡の主体を成す深鉢形土器で、入佐式土器に該当するものと考えられる。

IIa類 (第7図6～22)

沈線文が4本のものを抽出しているが、施文帯は6cmに達するものもあり、概して沈線文はやや

太めで且つ深く刻まれる傾向にある。また、頸部からの屈曲は特に内面で明瞭であり、内外の器面調整は横方向に丁寧にナデている。

IIb類 (第8図23～37)

口縁部は外に開き、沈線の条数は5本以上であり、沈線が雑に施文されているものも見られる。a類に比べて沈線文は細くなる傾向がある。27の復元口径は31.2cm、29の施文帯は大きく作り出され、8cm以上が現存する。器面調整はa類と同じである。

III類 (第8・9図38～46)

抽出した9点からは屈曲部が確認できていないが、その形状及び器壁状況から、II類同様の器形が想定される。多条の沈線文で施文し、沈線の規則性は見いだしがたい。38や40は貝殻腹縁部で、43～45等は櫛状工具で施文した可能性が高い。一方、器面調整は丁寧にナデている。

IV類 (第9図47～55)

胴部が屈曲し、口径より屈曲部の胴部が大きくなる一群で、口縁部は屈曲部から内傾する。器壁は総じて厚めで、内外面の器面調整はいわゆる条痕調整である。47で27.8cm、52で28cmの口径が復元できる。

V類 (第10図56～58)

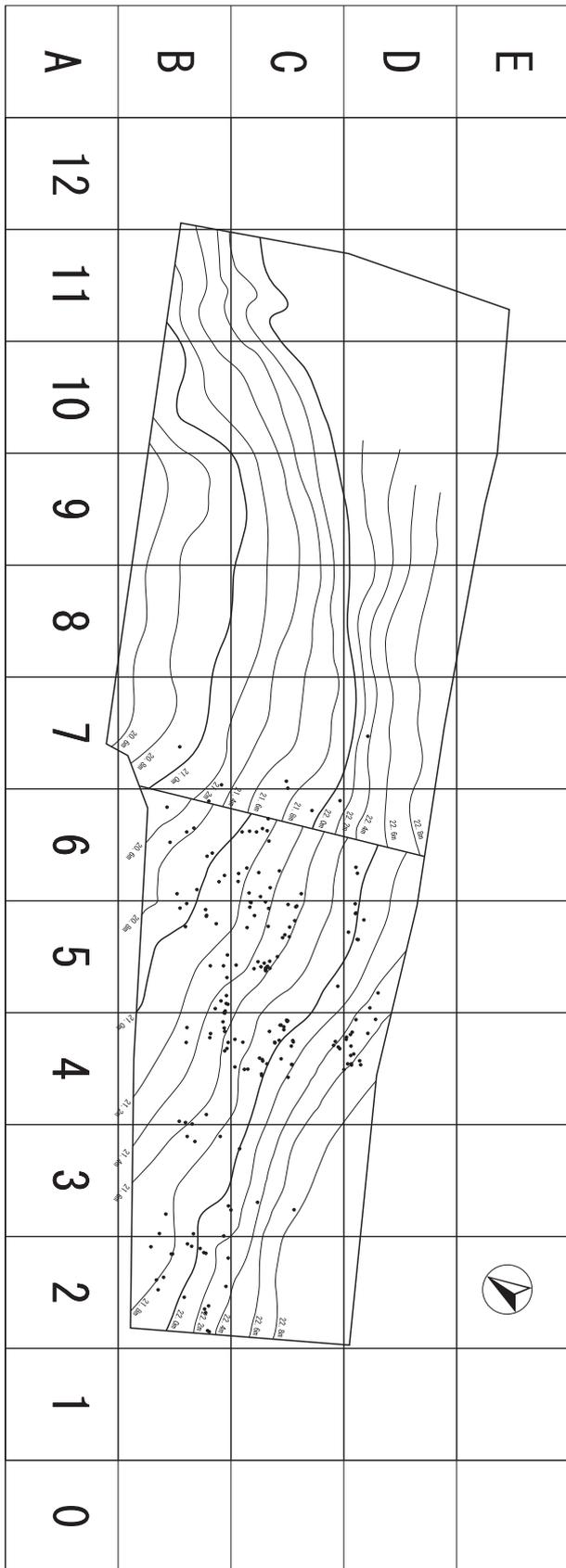
口縁部が内傾するが、口縁端部がわずかに外反する。56は、刻目突帯が口縁部下位及び胴部屈曲部に配され、断面三角形の突帯にはへら状工具で刻目が垂直方向に刻んでいる。割れた状態で集中して出土したが、掘り込み等の関連する遺構は確認できていない。また、底部の破片が見つからず打ち欠いたことも考え観察をしたが、摩耗が激しく確認することはできなかった。突帯間に2個の穿孔がみられる。57は刻目突帯を口縁端部に貼り付け、58は胴部の一部に貼り付ける。

VI類 (第10図59～67)

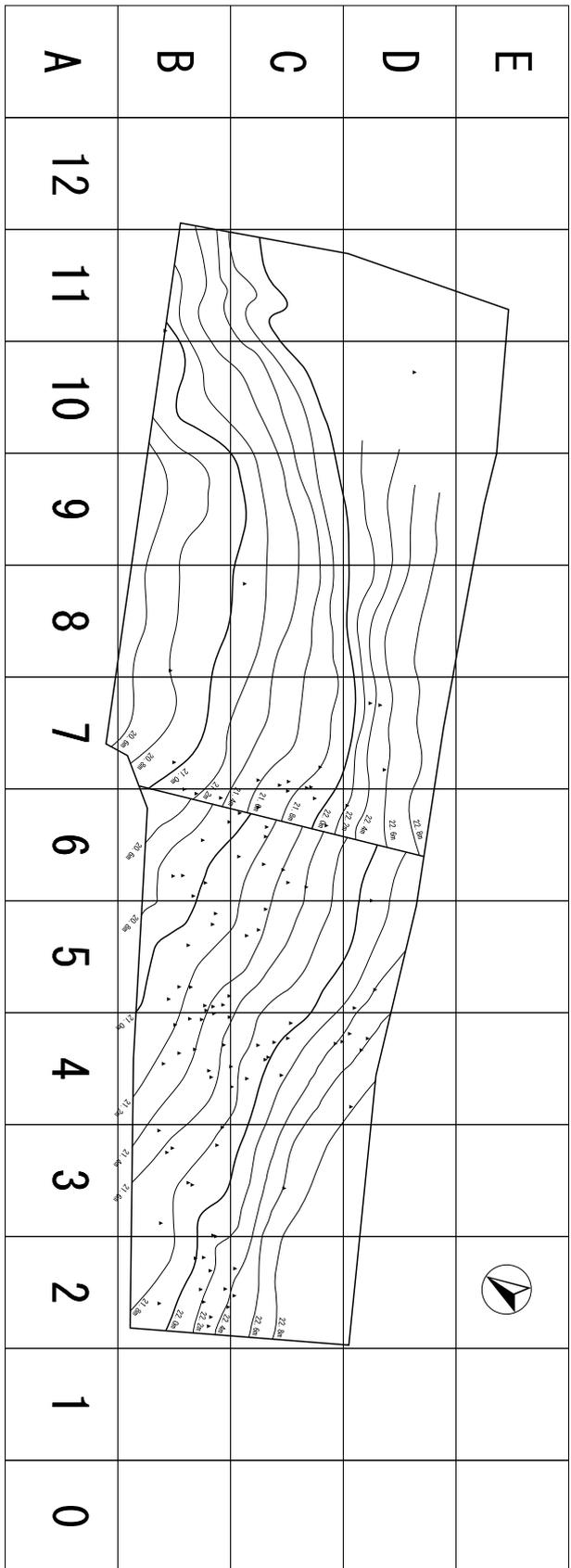
I～V類の土器に該当しない資料を一括した。59～63の器面は内外面共に丁寧にみがかれ、59では波状に、61では菱形を呈するように沈線文が施されている。67は底部片と考えられるが、摩滅が非常に激しい。

胴部片 (第11図68～70)

破片は多いが、ここでは接合作業を経て大きくなった3点を報告する。68は、胴部がくの字形に

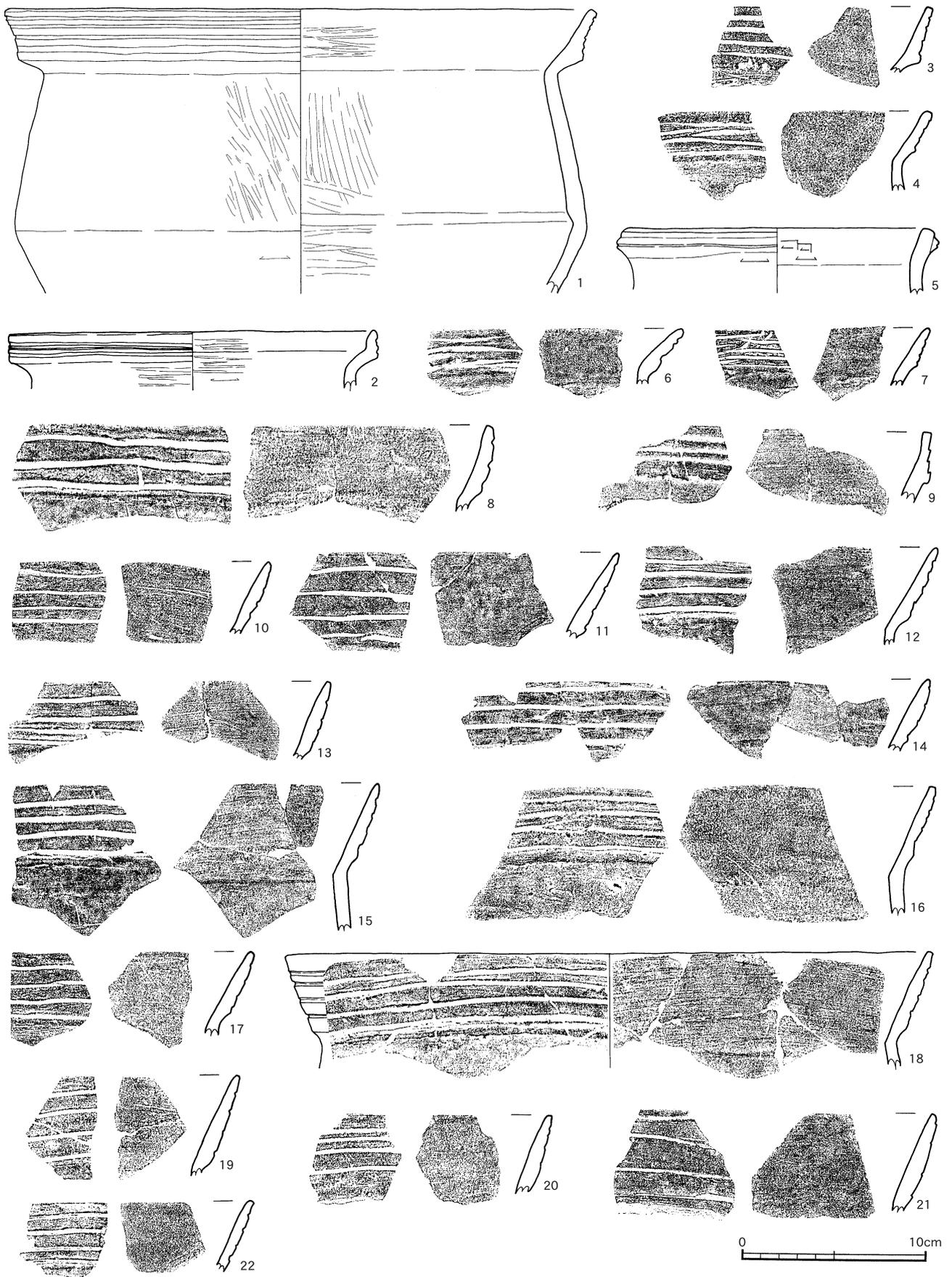


縄文時代土器分布状況

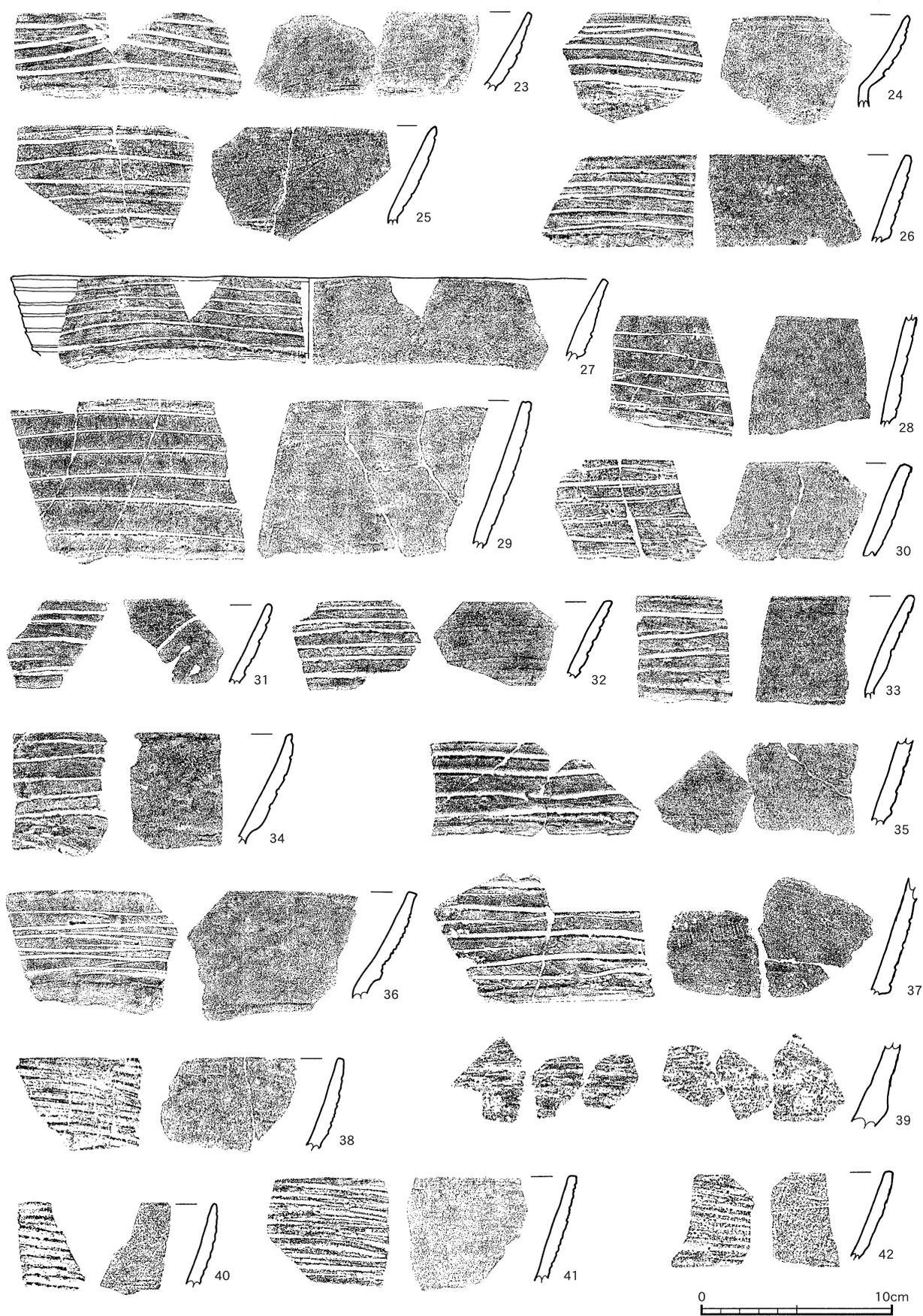


縄文時代石器分布状況

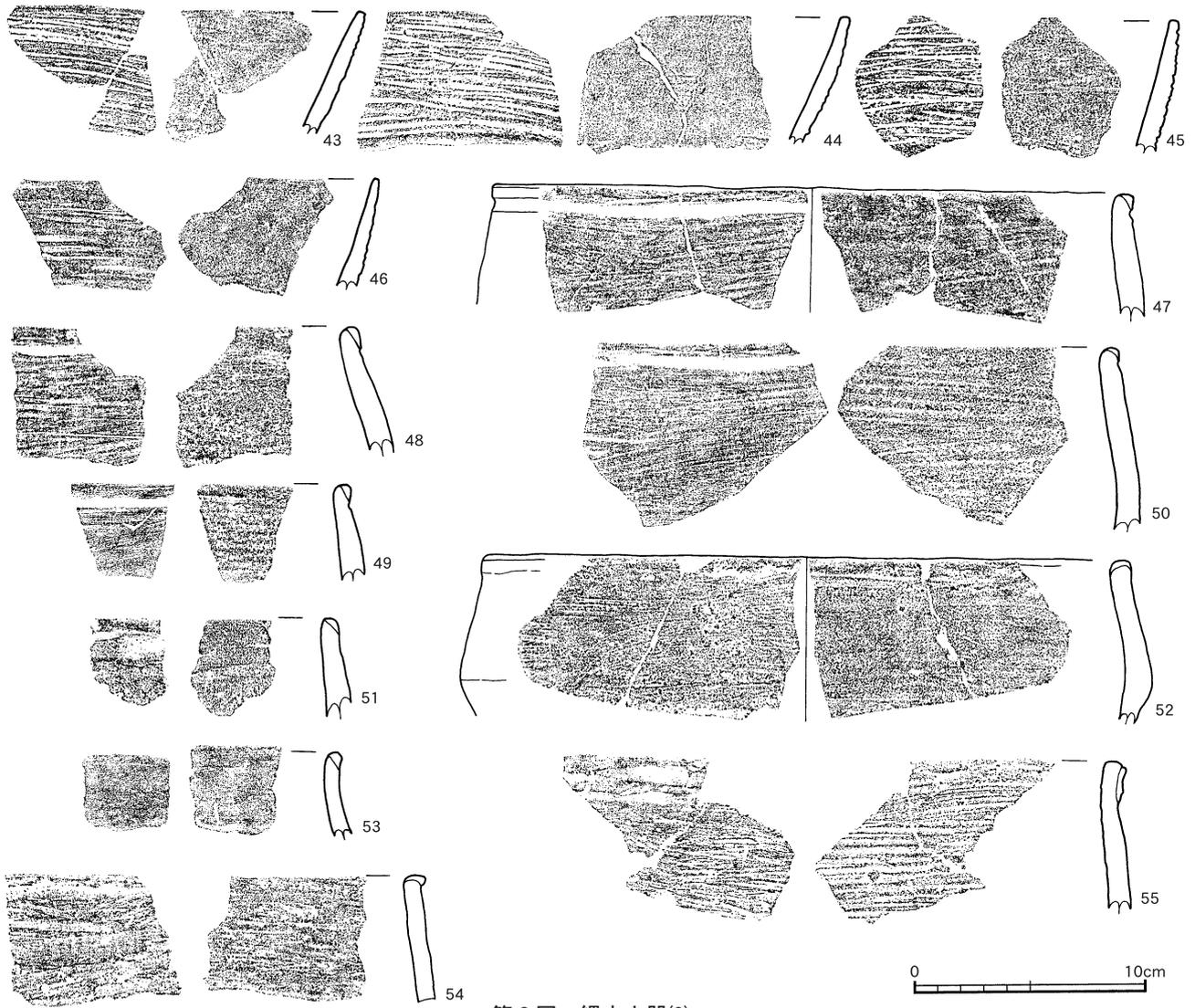
第6図 縄文時代の遺物出土分布図



第7図 縄文土器(1)



第8図 縄文土器(2)



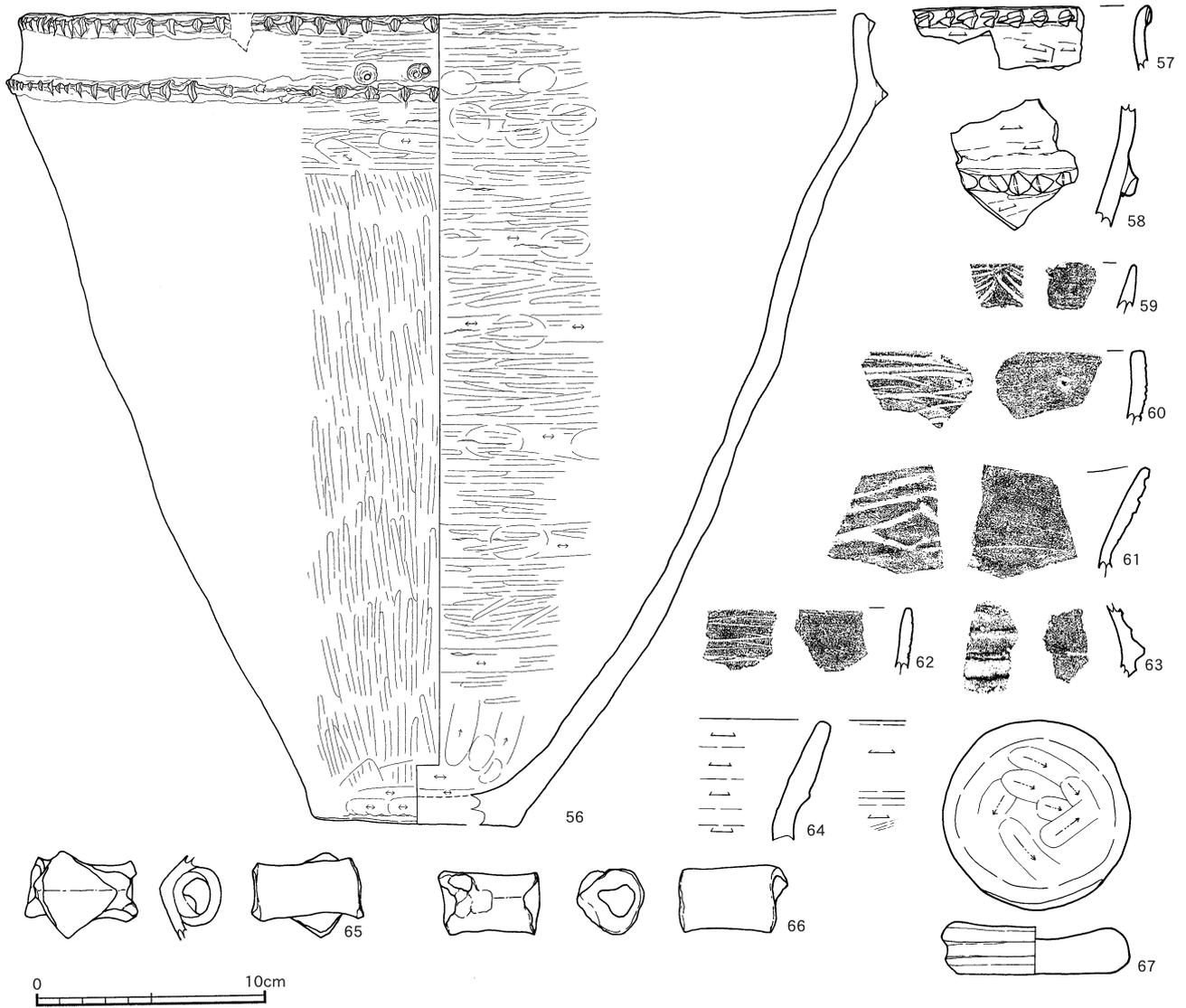
第9図 縄文土器(3)

屈曲し入佐式土器の特徴が見られる。69は内外面ともにミガキによる調整がされており、浅鉢I類の131・132に形状が似ている。70は肩部に補修孔

が見られる。他に接合するものが無く、孔は一つだけしか確認できなかった。

第2表 縄文土器観察表(1)

挿図No.	掲載No.	出土区	層	器種	部位	分類	調整・文様		色調		胎土
							外面	内面	外面	内面	
7	1	B5	15	深鉢	口縁	I	ミガキ・ナデ・凹線	ミガキ・ナデ	黒褐	黄褐	角閃石・輝石
	2	B5	15	深鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ミガキ・ナデ	黒褐	黒褐	輝石
	3	B5	15	深鉢	口縁	I	ナデ・凹線	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	輝石
	4	C6	15	深鉢	口縁	I	ナデ・凹線	ナデ	黒褐	赤褐	角閃石
	5	B6・C6	15	深鉢	口縁	I	ナデ・凹線	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	輝石
	6	B6	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	黒褐	褐灰	角閃石
	7	B6	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	黒褐	黒褐	角閃石・輝石
	8	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	赤褐	にぶい黄褐	角閃石・輝石
	9	B6	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	赤褐	にぶい橙	角閃石・輝石
	10	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	明黄褐	橙	角閃石・輝石
	11	B4・C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	橙	橙	輝石
	12	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	角閃石・輝石
	13	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	にぶい黄褐	橙	輝石
	14	C5・6	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	輝石
	15	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・輝石
	16	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	角閃石・輝石
	17	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	角閃石・輝石
	18	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・輝石
	19	C4	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	にぶい黄褐	褐	角閃石・輝石
	20	C5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	黄褐	褐	角閃石・輝石
	21	C7	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	黒褐	黒褐	角閃石・輝石
	22	B5	15	深鉢	口縁	IIa	ナデ・凹線	ナデ	黒褐	にぶい褐	輝石



第10図 縄文土器(4)

底部片 (第11図71～91)

底部片は、胴部と底部の境目が不明瞭な底部Ⅰ類71～76、胴部と底部の境目が明瞭な底部Ⅱ類77～81、底部に台形状の張り出しが見られる底部Ⅲ類82～89、円盤貼付けのみられる底部Ⅳ類90・91の4つに分類が可能である。何らかの圧痕が認められるものもあったが、その種類について分類することはできなかった。

②組織痕土器 (第12図92～98)

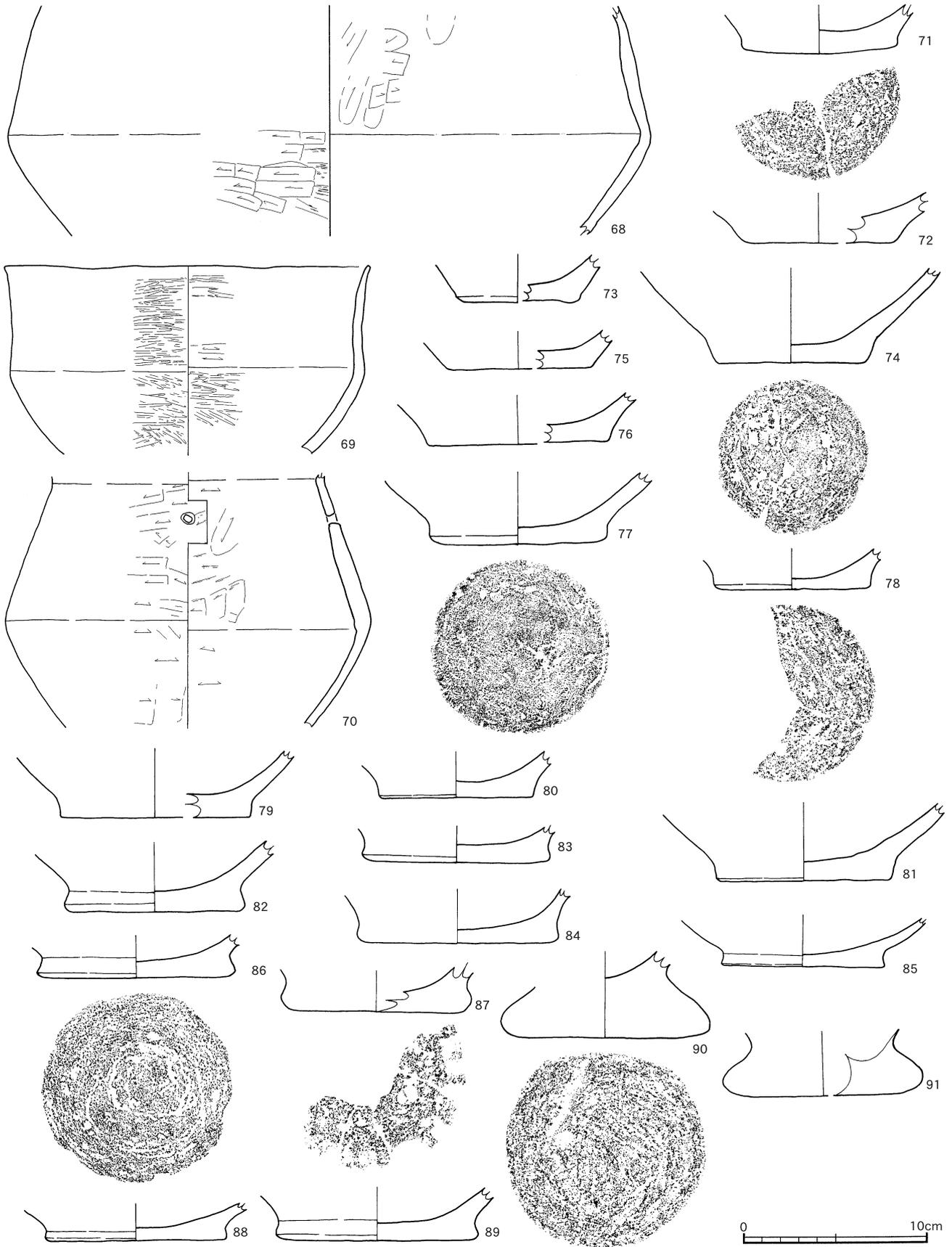
組織痕がはっきりと見られる土器を図化した。組織痕としては、編布の圧痕であると考えられる。いずれも小破片のため正確な部位は特定できないが、鉢の胴あるいは底部と思われる。

③浅鉢

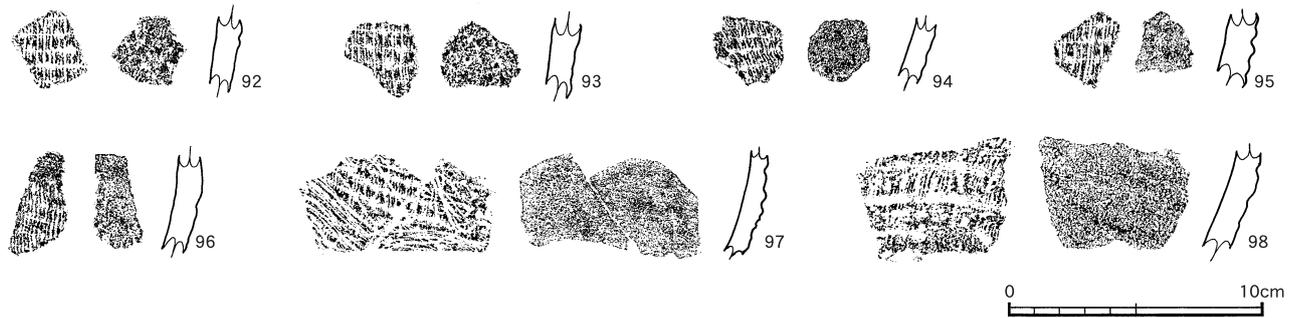
浅鉢は、口径と胴径のどちらが大きいかでⅠ・Ⅱ類に分類した。浅鉢はいわゆる精製土器で、内外面共に丁寧にみがかれる。

Ⅰ類 (第13図99～110)

口径が胴径よりも大きく、くびれから上が長い。また、口唇部下に沈線をめぐらすものもある。口縁部が短く立ち上がり、胴部で明瞭に屈曲し底部に至る形状を呈し、口唇部は丸くその外面端部には沈線文が1条付されるものをⅠ類とした。口縁部が短く直立し、胴部屈曲から口縁部にかけて長く大きく開く99～103と、口縁部までが短く外側に大きく反った104～110が見られる。



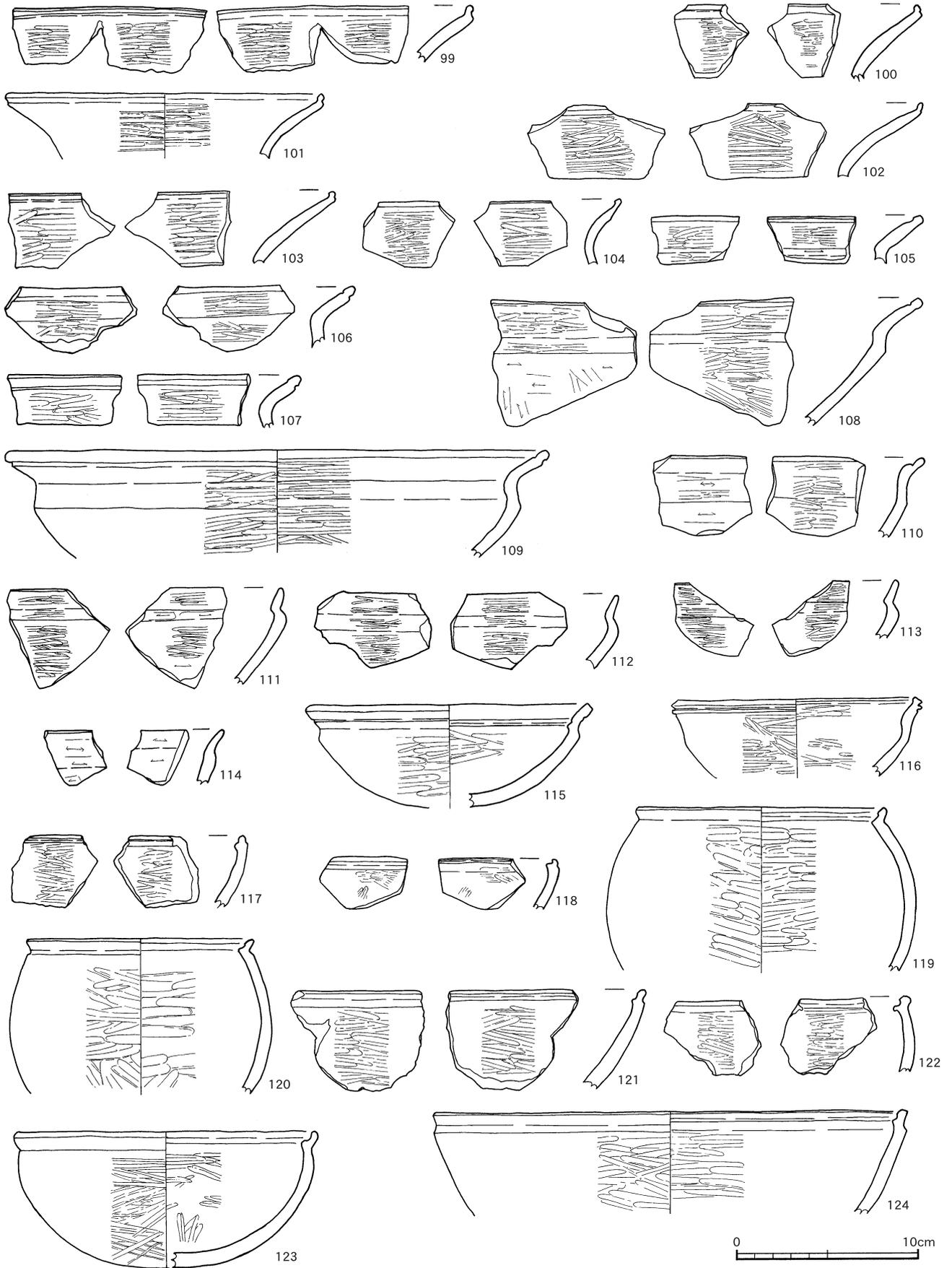
第11図 縄文土器(5)



第12図 縄文土器(6)

第3表 縄文土器観察表(2)

挿図No.	掲載No.	出土区	層	器種	部位	分類	調整・文様		色調		胎土	
							外面	内面	外面	内面		
8	23	C4	15	深鉢	口縁	IIb	ていねいなナデ・凹線	ていねいなナデ	にぶい褐	にぶい橙	金雲母・輝石	
	24	C5	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・輝石	
	25	C4	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ていねいなナデ	明黄褐	明黄褐	金雲母	
	26	B4	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	金雲母・輝石	
	27	B5	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	金雲母	
	28	B3	15	深鉢	口縁	IIb	ていねいなナデ・凹線	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	角閃石・輝石	
	29	B2	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	にぶい褐	黒褐	金雲母	
	30	C4	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	黄灰	黄灰	金雲母・角閃石	
	31	C6	15	深鉢	口縁	IIb	ていねいなナデ・凹線	ていねいなナデ	暗赤褐	暗赤灰	金雲母・角閃石・輝石	
	32	C4	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	暗赤褐	暗赤灰	金雲母・輝石	
	33	D5	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	暗赤灰	暗赤灰	金雲母・角閃石・輝石	
	34	C2	13・14	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	暗赤褐	赤褐	角閃石・輝石	
	35	B4・C4	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	赤褐	暗赤灰	金雲母・角閃石・輝石	
	36	D4	15	深鉢	口縁	IIb	ナデ・凹線	ナデ	暗赤褐	にぶい橙	角閃石	
	37	C4	15	深鉢	口縁	IIb	ていねいなナデ・凹線	ナデ	暗赤灰	暗赤灰	金雲母・角閃石・輝石	
	38	B3・B4	15	深鉢	口縁	III	貝殻条痕	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	角閃石・輝石	
	39	C6	15	深鉢	口縁	III	貝殻条痕	不明	黒褐	にぶい橙	金雲母・角閃石・輝石	
	9	40	B4	15	深鉢	口縁	III	貝殻条痕	ていねいなナデ	橙	にぶい橙	金雲母・角閃石
41		B4	15	深鉢	口縁	III	貝殻条痕もしくは条痕	ていねいなナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	金雲母・角閃石・輝石	
42		D4	15	深鉢	口縁	III	貝殻条痕もしくは条痕	ていねいなナデ	黒褐	黒褐	角閃石・輝石	
43		B4・B5	15	深鉢	口縁	III	条痕	ていねいなナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	角閃石・輝石	
44		B5	15	深鉢	口縁	III	条痕	ていねいなナデ	にぶい橙	橙	角閃石	
45		B4	15	深鉢	口縁	III	条痕	ナデ	にぶい橙	橙	金雲母・角閃石	
46		B4	15	深鉢	口縁	III	条痕後ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	角閃石・輝石	
47		D4・D5	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	角閃石	
48		D4	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	輝石	
49		D5	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	輝石	
50		D4	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・輝石	
51		B4	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	角閃石	
52		C6	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	輝石	
53		C5	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	角閃石・輝石	
54		D4	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	金雲母・輝石	
55		D6	15	深鉢	口縁	IV	ナデ	ナデ	黒褐	黒褐	角閃石	
10		56	B6	15	深鉢	完形	V	ミガキ・ナデ 刻目突帯二条	ミガキ・ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙	明黄褐	角閃石・輝石
		57	BC7・C6	15	深鉢	口縁	V	ミガキ・ナデ・刻目	ミガキ・ナデ	褐灰	にぶい黄橙	角閃石・輝石
	58	C6	15	深鉢	胴部	V	工具ナデ・刻目	工具ナデ	黒褐	褐灰	金雲母	
	59	B6	15	深鉢	口縁	VI	ナデ・凹線	ていねいなナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	金雲母・角閃石	
	60	B4	15	深鉢	口縁	VI	ナデ・凹線	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	角閃石・輝石	
	61	B3	15	深鉢	口縁	VI	ナデ・凹線	ていねいなナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	金雲母・角閃石	
	62	C5	15	深鉢	口縁	VI	ナデ・凹線	ナデ	にぶい赤褐	赤褐	角閃石	
	63	B5	15	深鉢	口縁	VI	ナデ・突帯	ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	輝石	
	64	C4	15	深鉢	口縁	VI	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石	
	65	C6	15	深鉢	胴部	VI	ナデ	ていねいなナデ	橙	にぶい橙	金雲母	
11	66	B1	15	深鉢	胴部	VI	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	金雲母・輝石	
	67	A10	15	深鉢	底部	VI	ナデ	指ナデ	にぶい橙	にぶい橙	輝石	
	68	C4	15	深鉢	胴部	胴	工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	灰褐	にぶい黄橙	角閃石・輝石	
	69	C4	15	深鉢	口縁～ 胴部	胴	ミガキ	ミガキ・ナデ	黒褐	褐灰	金雲母・角閃石	
	70	C4	15	深鉢	胴部	胴	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐	角閃石・輝石	
	71	B3	15	深鉢	底部	I	ナデ	ナデ	にぶい橙	黒褐	金雲母・角閃石・輝石	



第13図 縄文土器(7)

II類 (第13・14図111~127)

頸部から口縁部までの距離が短くなり、頸部の屈曲は不鮮明となる。

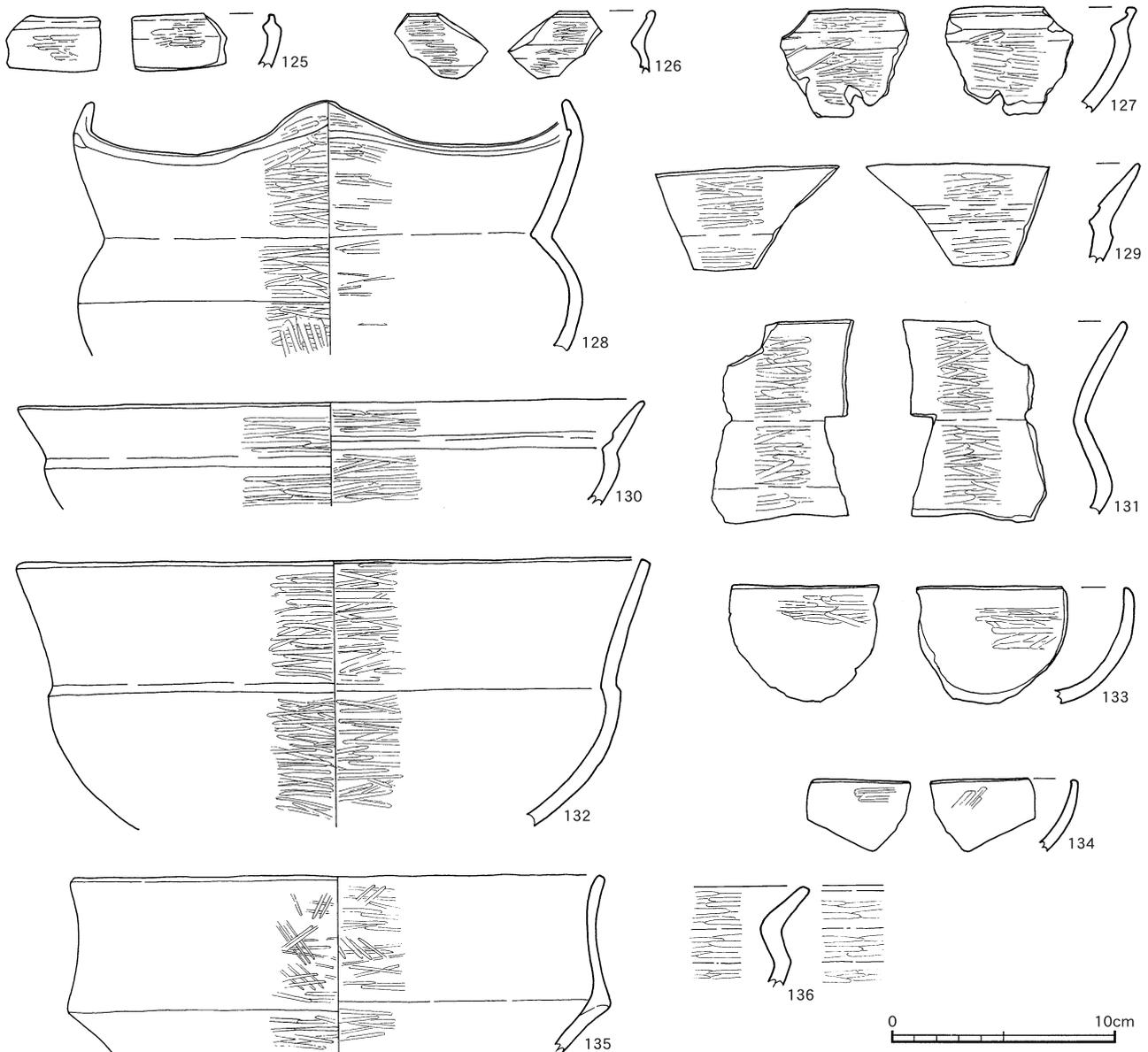
111~114は、I類の特徴であった口唇部外面の沈線文が無くなり、口唇部の内外面はそのまま丸く収められ、胴部が器の最大となる。

115・116は口唇部が最大部であるが、屈曲部の形状は個体差が見られる。115は屈曲部から口唇部までが短く、116では内面に整形時のアクセントで屈曲部を表している。117~127は、頸部屈曲部から口縁部までが短く、胴部が発達した形状を呈している。胴部が丸く膨らみマリ形を成す118~120と椀形を成す121, 123, 124とが見られる。

III類 (第14図128~136)

I・II類に分類できなかった土器を掲載した。

128は屈曲部上位が内弯気味に立ち上がり、口唇部は4カ所が山状に突起し、胴部は丸く作られる。口唇部外面は面取りされ、内面には沈線文が1条巡らされる。129・130は、口唇部が外反し幅が広い。口縁部のくびれ部分に浅い沈線が見られる。131・132は口縁部幅が広く深鉢の可能性もある。調整がミガキであり他の深鉢形土器とは調整方法が異なるためこの類に分類した。133・134は、胴部及び頸部の屈曲が無く、器高の低い小型の一群である。135は、1点の確認であるが、口縁部が外反し、胴部で屈曲する形状をもつ。



第14図 縄文土器(8)

第4表 縄文土器観察表(3)

挿図No.	掲載No.	出土区	層	器種	部位	分類	調整・文様		色調		胎土
							外面	内面	外面	内面	
11	72	B 3	15	深鉢	底部	I	ナデ	ナデ・ミガキ	にぶい赤褐	黒褐	金雲母・角閃石・輝石
	73	B 5	15	深鉢	底部	I	ナデ	不明	にぶい橙	にぶい黄橙	角閃石・輝石
	74	C 4	15	深鉢	底部	I	ナデ	ていねいなナデ	にぶい赤褐	黒	角閃石
	75	B 6	15	深鉢	底部	I	ナデ	不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金雲母・輝石
	76	B 4	15	深鉢	底部	I	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	角閃石・輝石
	77	C 4	15	深鉢	底部	II	ナデ・ミガキ	不明	赤褐	にぶい黄褐	角閃石・輝石
	78	B 4	15	深鉢	底部	II	ナデ・ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石
	79	C 6	15	深鉢	底部	II	ナデ	不明	にぶい赤褐	黒褐	輝石
	80	C 6	15	深鉢	底部	II	ナデ	不明	にぶい橙	黒褐	金雲母・角閃石・輝石
	81	D 4	15	深鉢	底部	II	ナデ	不明	にぶい黄褐	明黄褐	角閃石
	82	B 1	15	深鉢	底部	III	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	角閃石・輝石
	83	C 4	15	深鉢	底部	III	ミガキ	ナデ	赤褐	にぶい黄橙	角閃石・輝石
	84	C 4	15	深鉢	底部	III	ナデ	不明	褐	黄褐	角閃石・輝石
	85	B 4・B 5 C 4	15	深鉢	底部	III	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	金雲母・角閃石
	86	B 2	15	深鉢	底部	III	ナデ	不明	にぶい赤褐	にぶい赤褐	輝石
	87	B 2	15	深鉢	底部	III	ナデ	不明	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・輝石
	88	C 4	15	深鉢	底部	III	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	金雲母
	89	B 2	15	深鉢	底部	III	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	角閃石
	90	D 5	15	深鉢	底部	IV	ナデ	不明	にぶい赤褐	にぶい赤褐	角閃石
	91	B 6	15	深鉢	底部	IV	ナデ	不明	赤褐	赤褐	金雲母・輝石
	12	92	C 5	15	深鉢	胴部	組織痕	組織痕	不明	赤褐	にぶい黄褐
93		C 6	15	深鉢	胴部	組織痕	組織痕	不明	にぶい赤褐	にぶい赤褐	金雲母
94		B 7	15	深鉢	胴部	組織痕	組織痕	不明	にぶい赤褐	にぶい黄橙	金雲母
95		C 5	15	深鉢	胴部	組織痕	組織痕	不明	赤灰	にぶい黄橙	輝石
96		B 5	15	深鉢	胴部	組織痕	組織痕	不明	にぶい赤褐	にぶい黄褐	角閃石・輝石
97		B 6	15	深鉢	胴部	組織痕	組織痕	不明	明褐	にぶい褐	金雲母・輝石
98		C 6	13・14	深鉢	胴部	組織痕	組織痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	金雲母
13	99	C 6・D 4	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ミガキ	黒褐	黒褐	角閃石
	100	D 5	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ミガキ	黒褐	黒褐	輝石
	101	B 1	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ミガキ	黒褐	黒褐	金雲母・角閃石・輝石
	102	C 3	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ミガキ	暗赤褐	にぶい赤褐	角閃石・輝石
	103	C 3	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ていねいなミガキ	褐灰	にぶい黄褐	角閃石・輝石
	104	D 4	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	角閃石・輝石
	105	B 5	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ	ミガキ・ナデ・凹線	暗赤灰	暗赤灰	金雲母
	106	C 4	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ミガキ・凹線	暗赤灰	暗赤灰	金雲母・輝石
	107	C 4	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ミガキ・浅い凹線	暗赤褐	にぶい赤褐	金雲母・角閃石
	108	C 4	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・ナデ	ミガキ・浅い凹線	暗赤灰	暗赤褐	角閃石・輝石
	109	C 4・D 4	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・凹線	ミガキ・浅い凹線	暗赤灰	暗赤灰	金雲母・角閃石・輝石
	110	C 5	15	浅鉢	口縁	I	ミガキ・ナデ	ミガキ・浅い凹線	暗赤褐	暗赤褐	角閃石・輝石
	111	B 2	15	浅鉢	口縁	II a	ミガキ	ミガキ・ナデ	灰褐	にぶい黄橙	金雲母・角閃石・輝石
	112	B 2	15	浅鉢	口縁	II a	ミガキ	ミガキ	黒褐	褐灰	角閃石・輝石
	113	B 3	15	浅鉢	口縁	II a	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒	角閃石・輝石
	114	B 5	15	浅鉢	口縁	II a	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	輝石
	115	C 4	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ・凹線	ミガキ・凹線	黒褐	暗灰黄	角閃石・輝石
	116	C 4	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ・凹線	ミガキ・浅い凹線	黒褐	灰褐	角閃石・輝石
	117	C 5	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ・凹線	ミガキ・凹線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	角閃石・輝石
	118	B 6	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ・凹線	ミガキ・凹線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	角閃石・輝石
	119	B 4・C 4	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ	ミガキ・浅い凹線	にぶい黄橙	浅黄	金雲母・角閃石・輝石
120	C 4	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ・浅い凹線	ミガキ・浅い凹線	灰黄	灰黄	角閃石	
121	B 2	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ	ミガキ・凹線	黒褐	黒褐	金雲母・角閃石	
122	B 2	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ	ミガキ・凹線	黒褐	にぶい赤褐	角閃石	
123	D 4	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ	ミガキ・浅い凹線	黒褐	黒褐	金雲母	
124	B 4	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ	ミガキ・凹線	黒褐	灰褐	角閃石	
14	125	B 3	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ	ミガキ・浅い凹線	褐灰	褐灰	角閃石
	126	B 4	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ	ミガキ・浅い凹線	黄灰	褐灰	金雲母・角閃石・輝石
	127	B 4	15	浅鉢	口縁	II b	ミガキ	ミガキ・浅い凹線	黒褐	黒褐	角閃石・輝石
	128	C 3	15	浅鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ・凹線	にぶい褐	褐灰	角閃石・輝石
	129	C 5	15	浅鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ	黒褐	褐灰	角閃石・輝石
	130	B 5・C 5	15	浅鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	角閃石・輝石
	131	B 3	15	浅鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	金雲母・輝石
	132	B 2	15	浅鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒	角閃石・輝石
	133	B 2	15	浅鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ・ナデ	黒褐	黒褐	輝石
	134	C 4	15	浅鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐	黒褐	輝石
	135	D 5	15	鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ	明赤褐	明赤褐	輝石
	136	C 7・D 5	15	浅鉢	口縁	III	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・輝石

2 石器

①打製石鏃（第15図 S 1～S 11）

S 1～S 3（以下、Sは略す）は平基の三角形鏃で、1が正三角形、3は二等辺三角形、2はその中間に位置する。1の背面は礫面で、石鏃剥離は縁辺に限られ、腹面は素材剥離面を多く残す。

4～11は凹基で、それらの中で4～7、9は、両脚の形状に特徴的な共通点が見られる。9はその長身鏃、他は三角形鏃である。10は凹基の正三角形鏃、11はその凹二等辺三角形鏃となる。

②石匙（第16図 S 13～S 15）

13は両面を剥離面で構成する扁平な剥片を利用したもので、頭部と左側縁の一部が欠損する。14は頭部片いわゆる“摘み部”で、体部が大きく失われている。15は不定形な横長剥片の一部に摘み（頭部）を設けた、不定形石器である。

③石錐（第16図 S 16～S 18）

先端に水平方向の回転擦痕が観察されたのを石錐とした。

16は表面に礫面を残す横長の不定形剥片の端部に、両面から交互の剥離により断面形が凸レンズ状の錐部に仕上げている。18は加工部が錐状に仕上げられた二次加工剥片である。

④楔形石器（第17図 S 19～S 23）

上端と下端に対峙する方向の剥離面及び衝撃痕が観察されることから、楔形石器と判断した。19の正面は礫素材面で、裏面は剥離面がそのまま残される。20は、打点移動する石核から取り出された調整剥片を素材としている。22の正面下端の微細剥離面は衝撃痕と判断した。23は残核の再利用と思われ、正面下端に衝撃痕が認められる。

⑤石核（第17図 S 24・S 25）

24の最終剥離（作業面）は平坦打面から行っているが、先行した裏面の打面は90度転移している。25も打面転移が見られ、横長・縦長の不定形剥片が取り出されたと見られる。

⑥異形石器（第17図 S 26・S 27）

西北九州産の良質な黒曜石を用いたもので、2点とも中央部付近の断面形が凸レンズ状を呈している。

26の右側縁部は先行する剥離面であり、正面右側の整形剥離がこの面より実施されていることからこの形状が最終形状と判断される。なお、裏面は剥離面がそのまま残されている。27も同様と判

断している。

⑦微細剥離痕剥片（第18図 S 28～S 35）

剥片の一部に小剥離及び微細剥離痕が認められるもので、残される剥離面の角度は鋭角である。なお、30・31の小剥離痕は明瞭で、30では両側縁部に、31は下端に認められる。29・32は縦長剥片の左側縁部を中心に微細剥離痕がみられる。

⑧両面加工石器（第18図 S 36～S 38）

石鏃製作の痕跡は確認できていないが、36は未製品の可能性が高い。37は厚手の剥片の両側縁に剥離を加えたもので、完成品に近いのかもしれない。38は白色の玉随を用いた両面加工石器で、平坦打面から取り出した横広剥片を素材としている。最終的には、分厚い打面の除去が障害となり放棄したと見られる。

⑨その他の剥片石器（第19図 S 39～S 44）

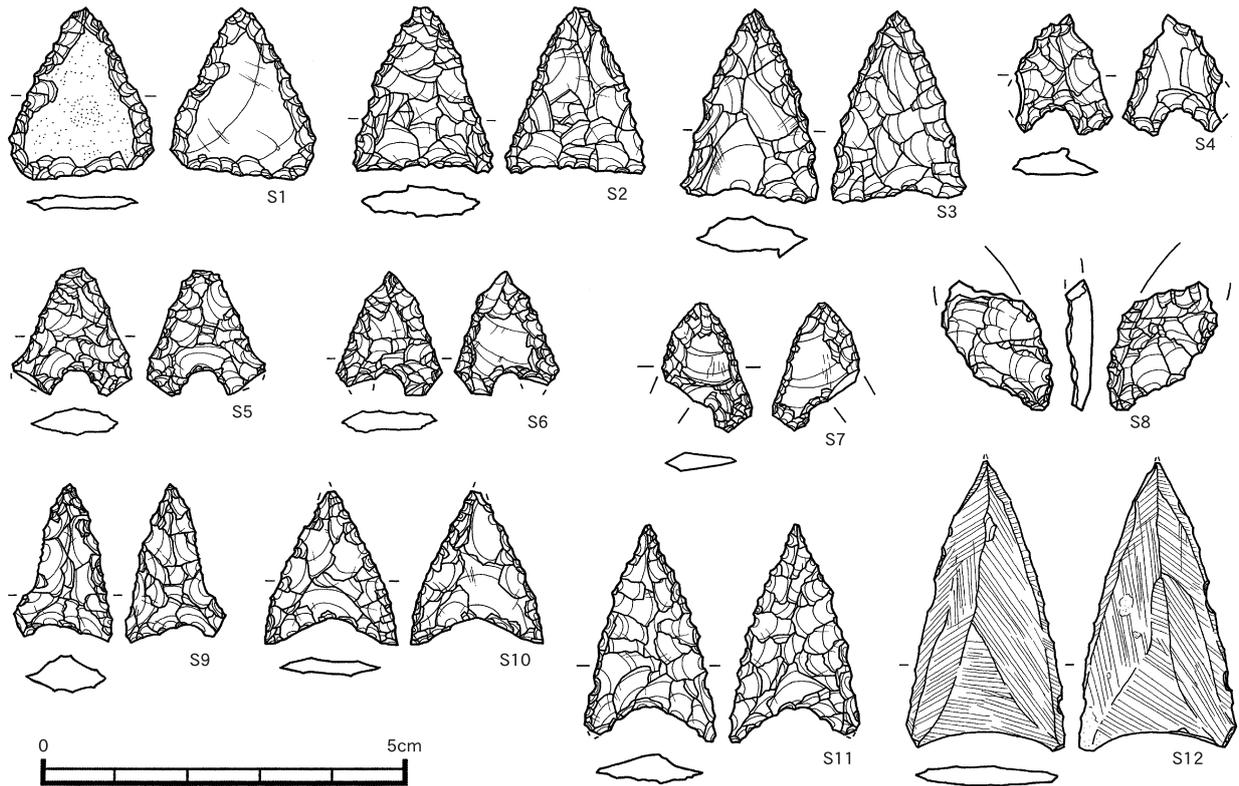
39はチャート剥片で、二次加工は判然としない。40は、表裏に礫面を残す一次剥片で、左側縁部に刃つぶし状の二次加工が見られる。西北九州産の良質な黒曜石である。41はホルンフェルス剥片の右側縁部に、刃部形成が見られる、加工痕剥片である。42は、断面三角形の不定形剥片を使用したもので、主剥離面を切る複数の剥離が見られる。楔形石器或いは剥片石器の未製品と見られ、鹿児島市三船産黒曜石と考えられる。43は、礫面を残す一次剥片の左側縁部に、表面方向から刃部が造られる。樋脇町上牛鼻産黒曜石と考えられる。44は頁岩で、不定形剥片の縁辺部に二次加工が見られる。

⑩磨製石斧（第20図 S 45～S 48）

46は重量感のあるホルンフェルス製の部分磨製石斧で、刃部を中心に磨かれている。体部の整形は丁寧な叩打仕上げがなされ、刃部欠損後も使用されている。47も同じ石材で、叩打整形後、大部分を丁寧に磨き仕上げている。断面形から棒状石斧と判断できる。なお、刃部の破損は使用によると見られるが、体部の破損状況からは熱破損の可能性が伺われる。48の両面の刃部には磨き面が残ることから、刃部主体の部分磨製石斧の破損品と見られる。

⑪打製石斧（第20図 S 49～S 65）

本遺跡では、49～72の24点を一括して取り扱ったが、主に短冊形と分銅形で構成し、49・50・52～54が短冊形、55～62が分銅形で他は製作に関わる資料の可能性も高い。また、使用石材が黒色の



第15図 縄文時代の石器(1)

頁岩と灰色のホルンフェルスで、それらが薄く剥離される特徴を利用し扁平な石斧を作り出している。なお、黒色の頁岩50・54・60・63・71・72の表裏には、特徴的に多量のマンガが付着している。

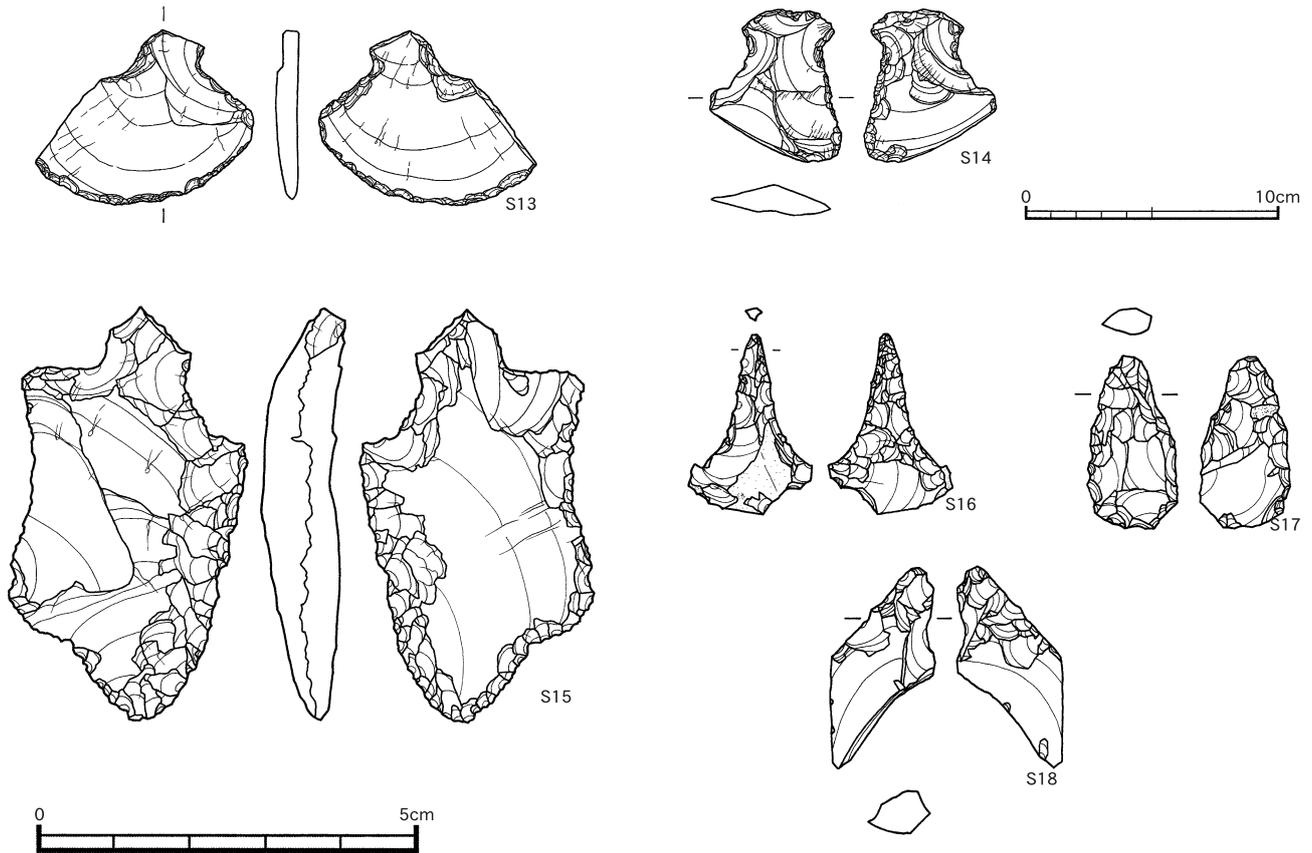
49の裏面は横広剥片の主要剥離面に相当し、剥離面及び刃部を構成する剥離ライン等が著しく摩滅している。50は頭部が欠損した短冊形、51は成形剥片である。52の左側縁は厚みのある素材に丁寧な整形剥離が見られるが、右側縁はシャープな剥離面で構成することから、整形段階のアクセシビリティの可能性もある。53は最長16cmの短冊形の典型で、刃部を含め丁寧な整形剥離が見られる。54は薄い剥片素材を使用したもので、側縁成形と刃部の叩打により摩滅が見られることから取り扱った。

55の正面左頭部には、ローリングした礫面がそのまま残される。礫面を残した剥片素材に成形加工を施しているが、刃部は大きく損傷し、敲打具的機能が推測される。56の頭部は節理で欠損し、やや厚手の剥片素材に二次加工を加えている。57の頭部は上位方向からの加撃で欠損するが、刃部は鋭利な状況を保っている。58・61・62は刃部が

再生される。59は刃部が欠落し、全体が激しく摩滅し、抉りが上部に設置されている。なお、正面頭部には、礫面が確認できる。60の最大長は14cmで、横広の剥片を用い、抉りは浅い。63の素材は扁平礫の可能性が高い。図示したように、上部は両面からの二次加工で突起状に、右側縁部から下半部には敲打痕が残される。

65は図示した下位部を刃部と判断し、66の右側は大きく欠損するが、左側縁部と下縁部に成形剥離が認められる。67の右側縁部には整形加工が確認できるが、左側縁にはシャープな剥離面を残し、また、正面右側上部には平坦な摩滅面が残される。68も横広剥片の周辺に、平坦剥離状の浅い二次加工が施される。69の裏面は主要剥離面で、上下及び両側縁の中央部に抉入状の加工が見られ、石錘状の仕上がりとなっている。70については、下半部が欠落したと判断した。71の上半部は欠落するが、最大幅が10cmを越すことから大型であったと推測できる。刃部も大きく欠損する。72は下半部が欠落した後、刃部の再生が認められる。

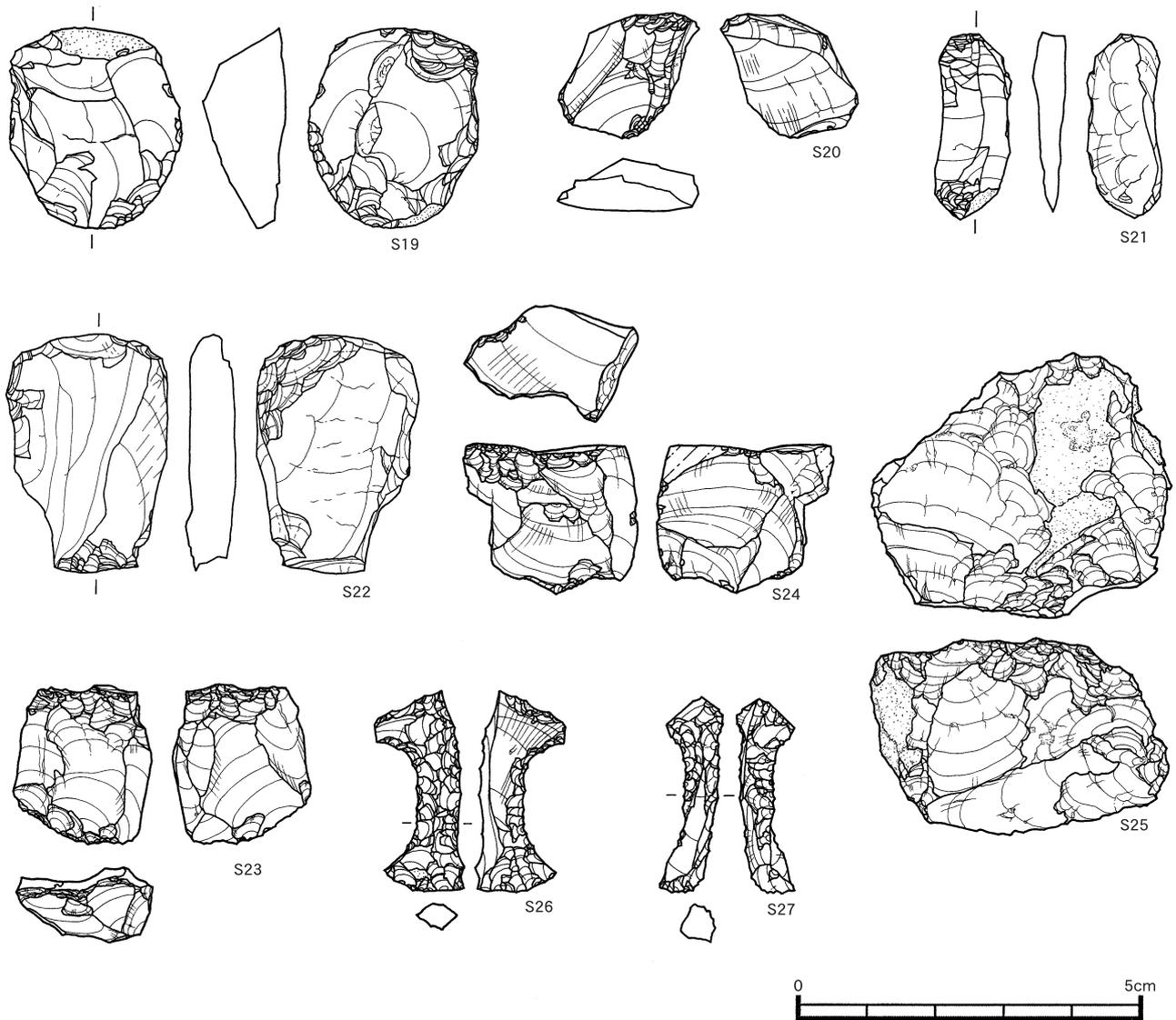
石斧の石材として多く使われているのが、黒色



第16図 縄文時代の石器(2)

第5表 縄文時代の石器観察表(1)

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
15	1	打製石鏃	B 2	15	頁岩	2.3	2.0	0.2	0.95
	2	打製石鏃	B 3	15	頁岩	2.3	1.9	0.4	1.36
	3	打製石鏃	B 2	15	頁岩	2.6	1.8	0.5	2.03
	4	打製石鏃	C 5	15	頁岩	1.6	1.8	0.2	0.58
	5	打製石鏃	B 5	15	黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.77
	6	打製石鏃	B 1	15	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.58
	7	打製石鏃	B 2	15	黒曜石	1.8	+1.2	0.3	+0.50
	8	打製石鏃	C 4	15	黒曜石	+1.8	+1.4	0.3	+0.80
	9	打製石鏃	C 6	13・14	頁岩	2.2	1.3	0.5	0.89
	10	打製石鏃	B 3	15	頁岩	2.1	1.8	0.2	0.82
	11	打製石鏃	B 2	15	頁岩	3.0	1.8	0.4	1.35
	12	磨製石鏃	B 2	15	ホルンフェルス	3.9	2.2	0.3	2.09
16	13	石匙	C 4	15	頁岩	6.9	8.5	0.9	55.60
	14	石匙	B 1	15	ホルンフェルス	6.1	5.2	1.2	37.60
	15	石匙	B 4	15	チャート	5.5	3.1	1.1	15.72
	16	石錐	B 7	15	黒曜石	2.4	1.6	0.6	0.92
	17	石錐	B 2	15	玉随	2.3	1.2	0.4	1.40
	18	石錐	B 3	15	頁岩	2.7	1.4	0.6	1.80
17	19	楔形石器	C 5	15	頁岩	3.0	2.5	1.2	9.20
	20	楔形石器	B 6	15	黒曜石	1.9	2.0	0.8	2.20
	21	楔形石器	B 6	15	水晶	2.7	1.1	0.5	1.80



第17図 縄文時代の石器(3)

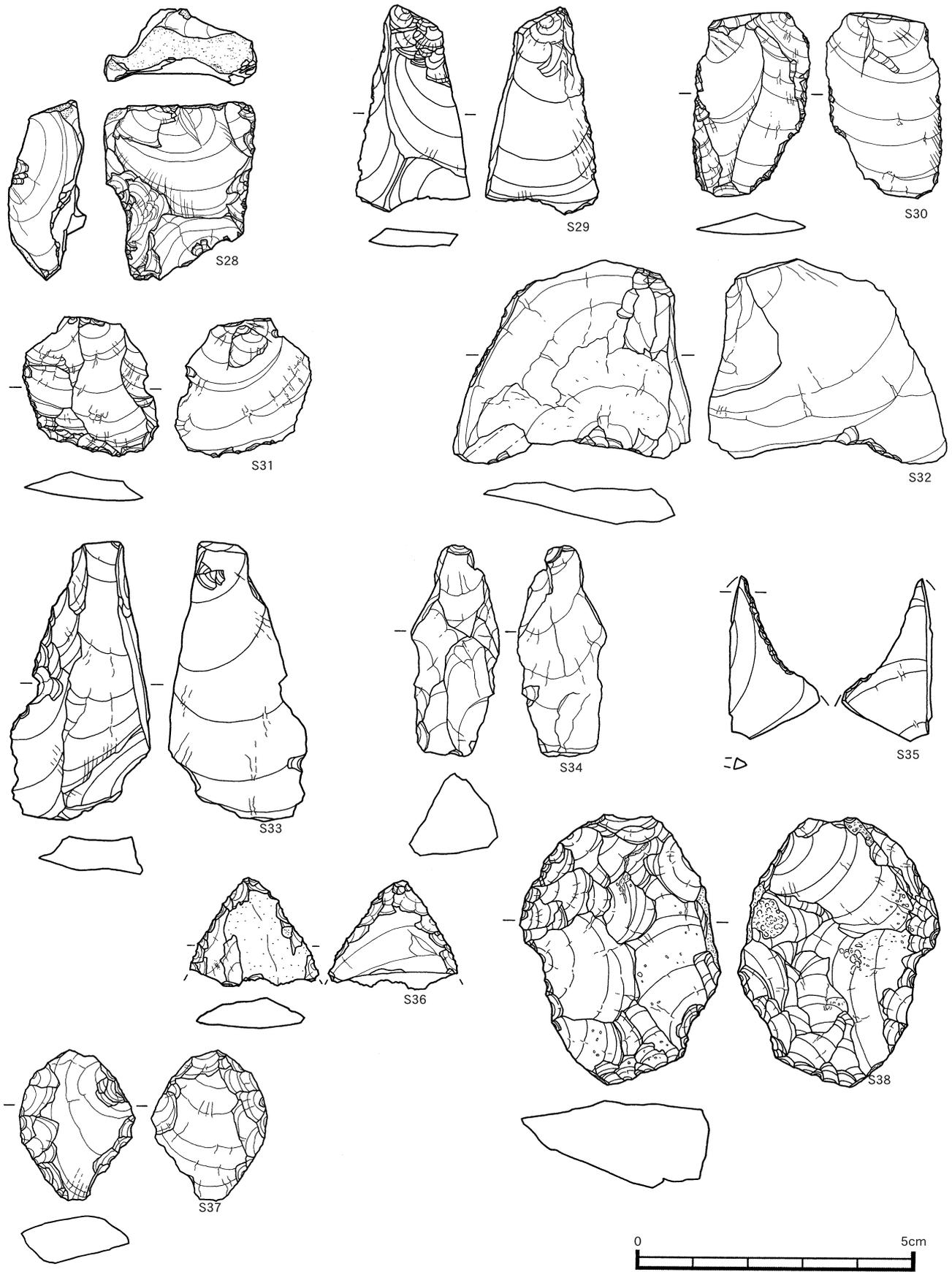
の頁岩と灰色のホルンフェルスである。今回の調査では、これらの石材を使って石器製作をおこなった際に出ると考えられる剥片も多数見ついている。主に調査区B～C-4～6区を中心に分布している状態であった。

特に黒色の頁岩の破片が多く、中でも図50～54・60・63・71・72で見られる多量のマンガンが付着した頁岩の破片が大部分を占めている。これらの破片の分布状況から考えると、石材を持ち込んで石器製作をおこなったり、再加工するなどの作業をこの場でおこなった可能性がある。

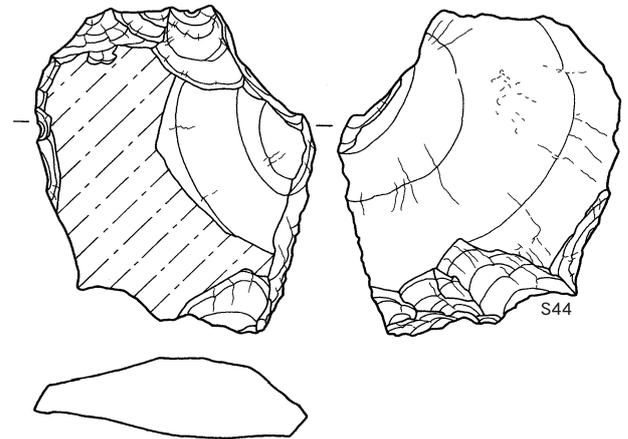
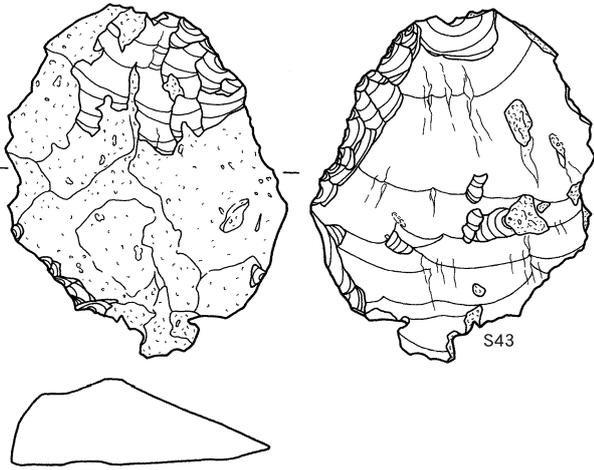
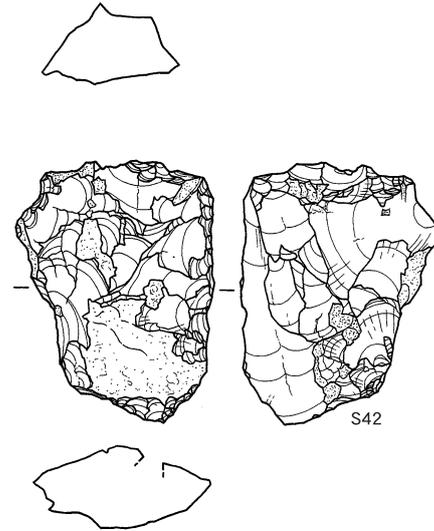
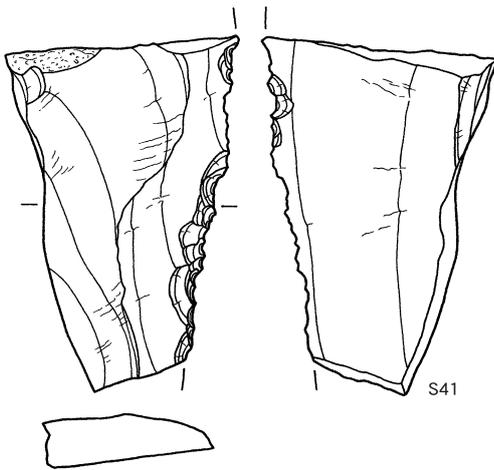
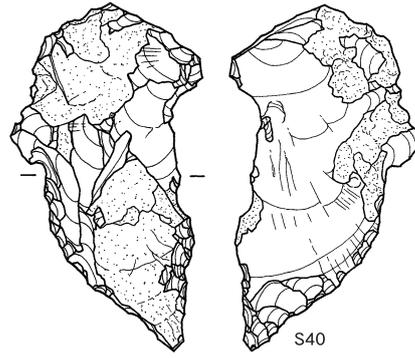
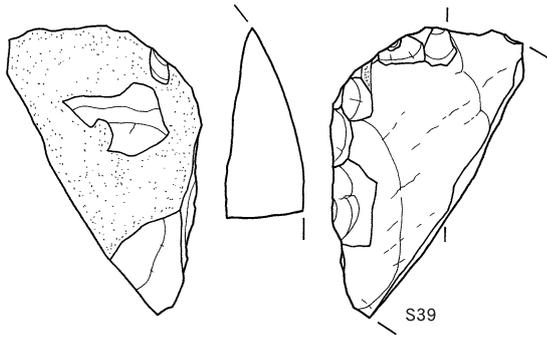
⑫その他の剥片（第22図S73～S91）

73は摘み状の仕上がりが見られるが、判然としない。67は裏面の剥離状況から分銅形石斧の破損

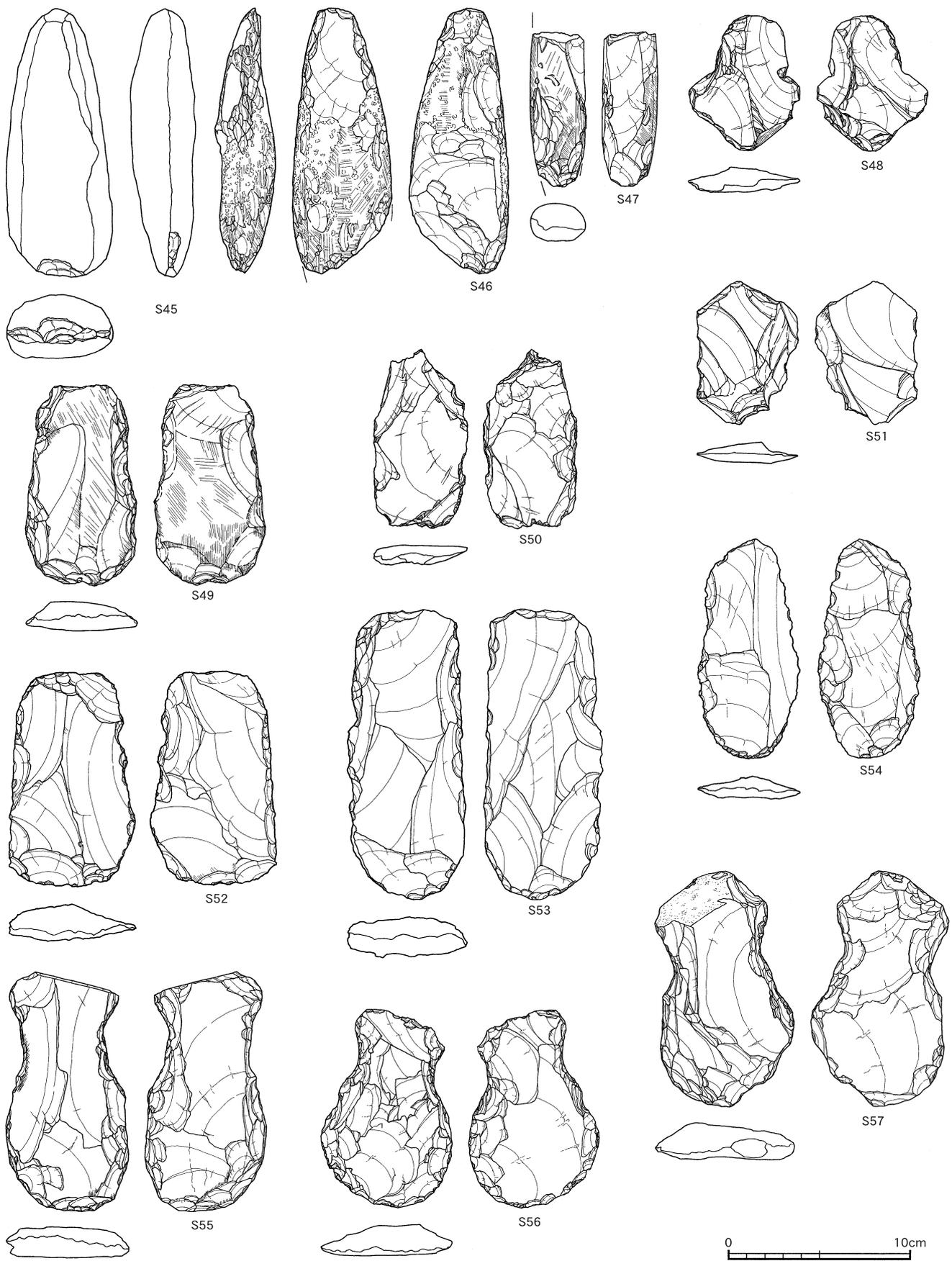
品で、周辺加工からその後の二次利用が想定される。74は刃部周辺の破損品、75は製品の破損品あるいは製作段階の可能性が想定される。77の頂部はローリングされた平坦面、他の3面には粗の二次加工が見られるが、その用途は明らかでない。78の下半部は大きく欠損し、両側縁部に二次加工が施される。79は、裏面に剥離面がそのまま残る欠損品である。80も欠損品で、右側縁部を中心に二次加工を行い再利用したと見られる。81は摩耗が激しく詳細な観察は出来ないが、二次加工と使用による打撃痕は確認できる。82の右側縁部には刃こぼれ状の小剥離が見られる。83はその形状から円盤状石器（石斧）を想起するが、図化した右側縁部が破損した石斧の可能性も指摘でき、左側縁



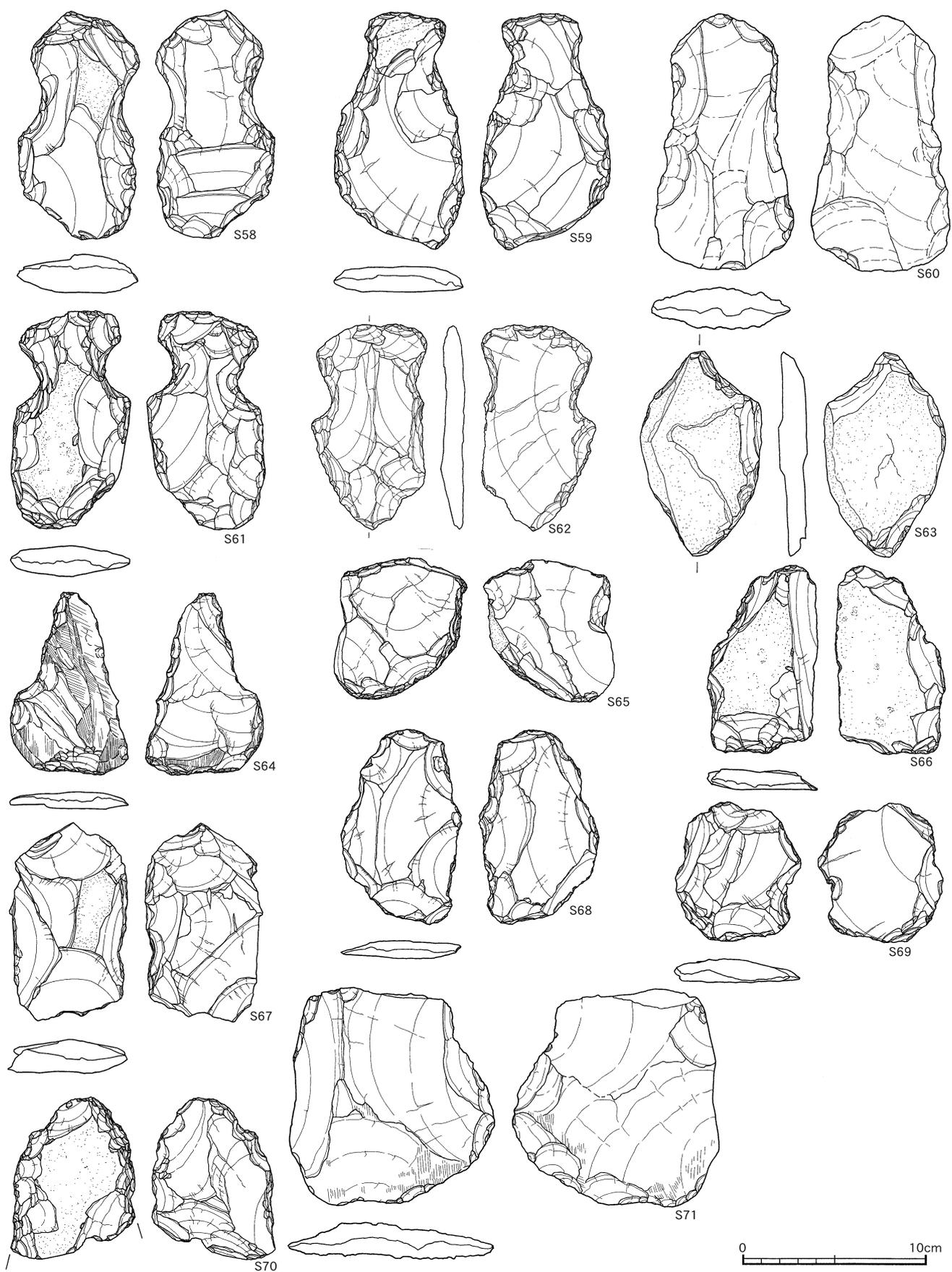
第18図 縄文時代の石器(4)



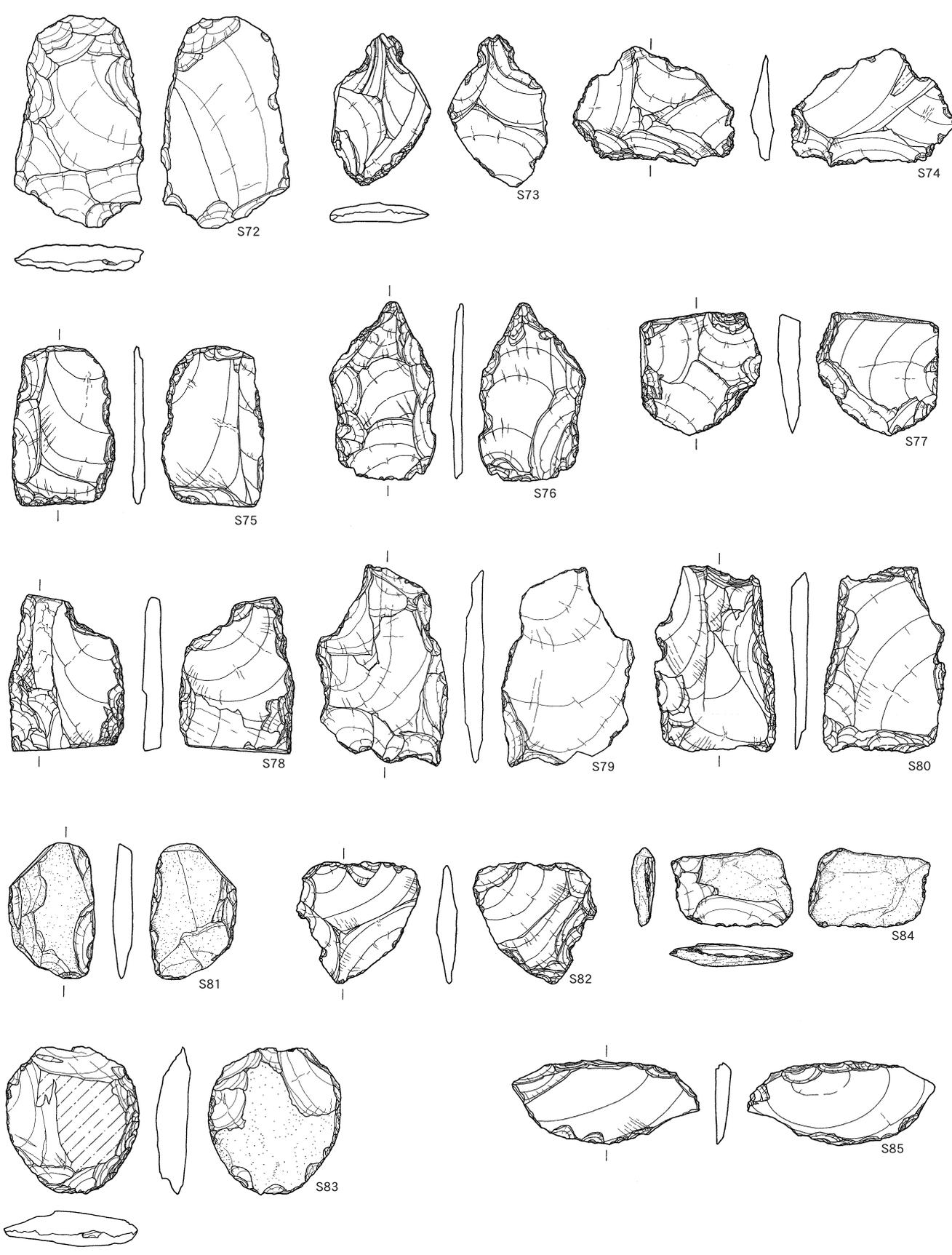
第19図 縄文時代の石器(5)



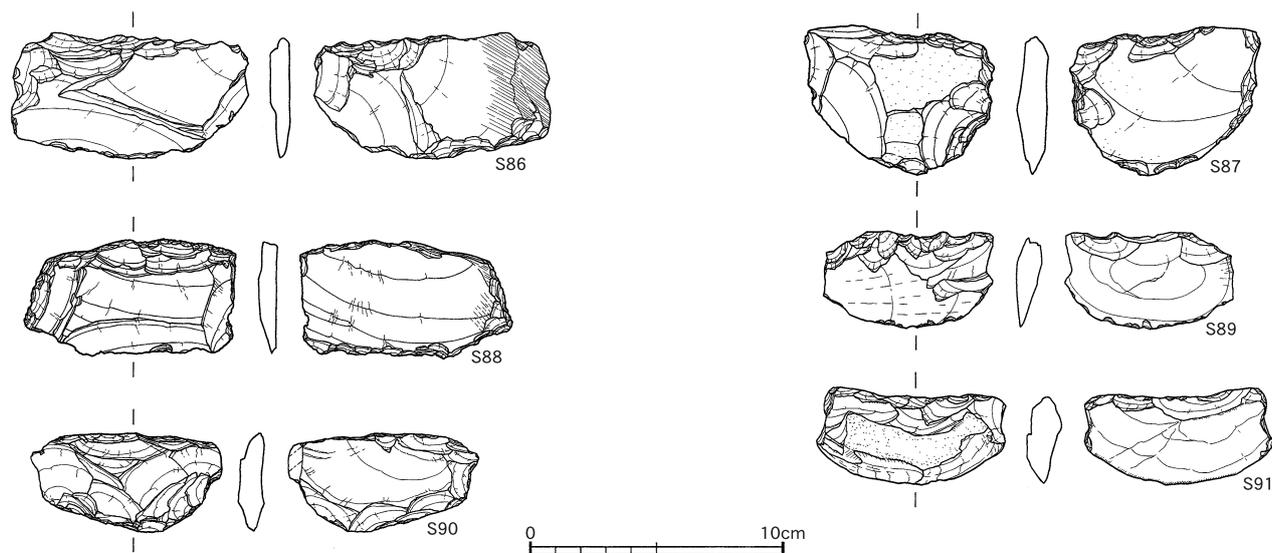
第20図 縄文時代の石器(6)



第21図 縄文時代の石器(7)



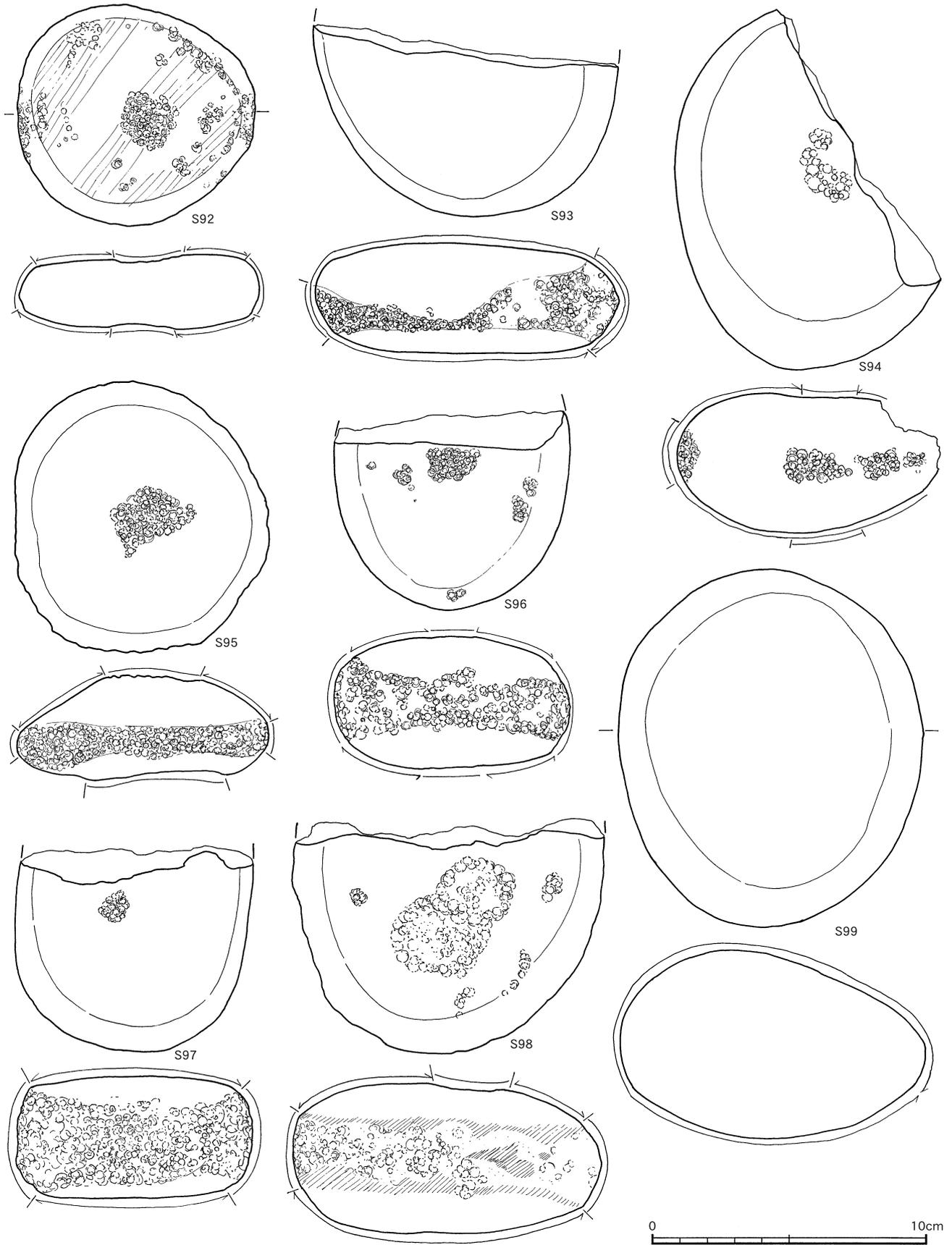
第22図 縄文時代の石器(8)



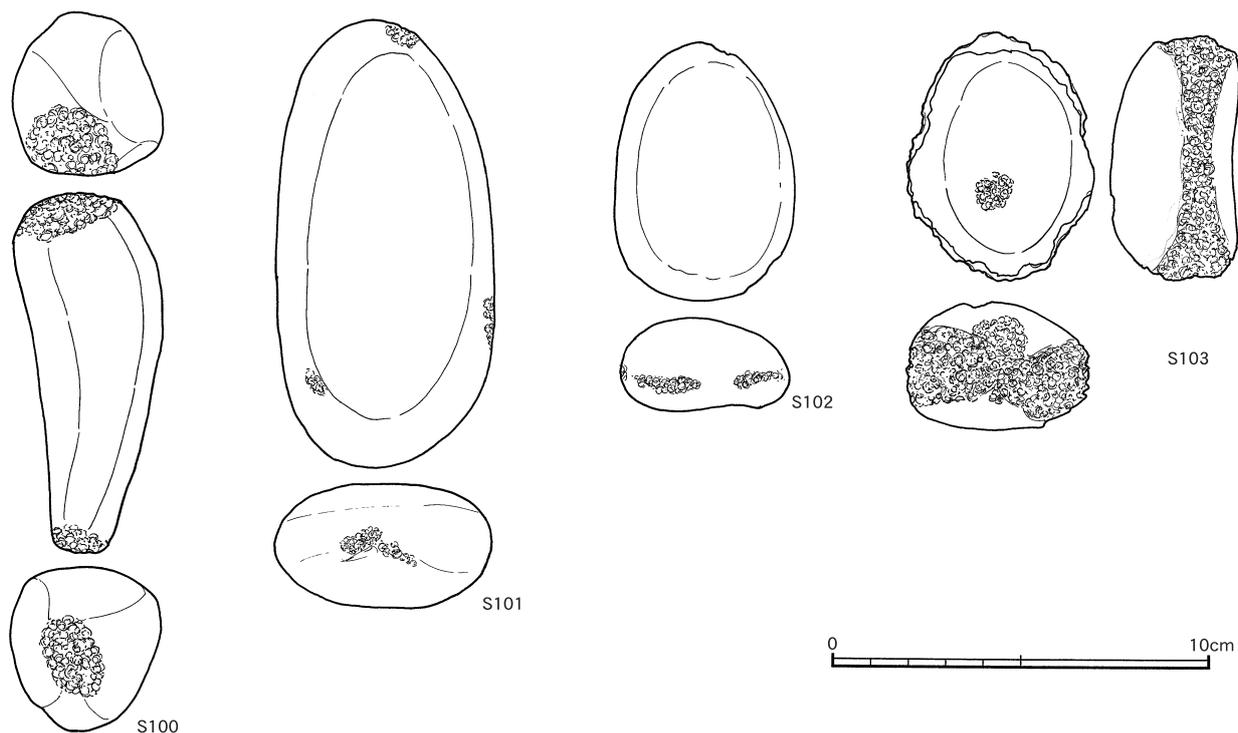
第23図 縄文時代の石器(9)

第6表 縄文時代の石器観察表(2)

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
17	22	楔形石器	B 6	15	頁岩	3.5	2.3	0.7	8.8
	23	楔形石器	C 6	15	黒曜石	2.4	2.0	1.2	4.5
	24	石核	C 6	15	黒曜石	2.3	2.5	1.7	7.0
	25	石核	B 2	15	黒曜石	2.9	4.4	3.9	46.3
	26	異形石器	B 3	15	黒曜石	2.9	1.2	0.35	1.0
	27	異形石器	C 5	15	黒曜石	2.9	0.9	0.5	0.9
18	28	微細剥離痕剥片	B 5	15	黒曜石	3.3	2.8	1.4	9.1
	29	微細剥離痕剥片	B 5	13-14	ホルンフェルス	3.8	2.1	0.3	2.8
	30	微細剥離痕剥片	B 5	15	黒曜石	3.4	2.1	0.4	3.2
	31	微細剥離痕剥片	B 7	15	黒曜石	2.5	2.4	0.4	2.8
	32	微細剥離痕剥片	C 6	15	頁岩	3.8	4.3	0.8	14.6
	33	微細剥離痕剥片	B 4	15	チャート	5.1	2.5	0.7	9.0
	34	微細剥離痕剥片	C 5	15	玉随	3.9	1.6	1.5	7.4
	35	微細剥離痕剥片	B 3	15	頁岩	3.0	1.6	0.2	1.0
	36	両面加工石器	C 5	15	安山岩	+2.0	+2.3	0.5	+2.3
	37	両面加工石器	C 6	15	玉随	2.7	2.1	0.9	4.4
38	両面加工石器	B 5	15	玉随	5.0	3.6	1.6	26.4	
19	39	剥片石器	B 2	15	チャート	3.9	2.6	1.0	10.2
	40	剥片石器	C 6	15	黒曜石	4.6	2.5	1.1	9.0
	41	剥片石器	C 4	15	ホルンフェルス	4.8	3.1	0.7	12.8
	42	剥片石器	B 2	15	黒曜石	3.5	2.6	1.1	8.4
	43	剥片石器	C 6	13-14	黒曜石	4.7	3.7	1.2	18.0
	44	剥片石器	B 5	15	頁岩	4.3	3.7	1.0	20.0
20	45	磨製石斧	B 5	15	花崗岩	14.8	5.7	3.5	388.0
	46	磨製石斧	C 8	15	ホルンフェルス	14.6	5.4	3.1	301.6
	47	磨製石斧	B 6	15	ホルンフェルス	+8.5	3.0	2.1	+79.6
	48	磨製石斧	B 2	15	頁岩	7.4	6.1	1.2	47.8
	49	打製石斧	D 7	15	頁岩	11.0	6.1	1.4	125.6
	50	打製石斧	C 6	15	頁岩	9.8	5.2	1.1	66.2
	51	打製石斧	B 4	15	頁岩	7.8	5.6	1.1	48.2



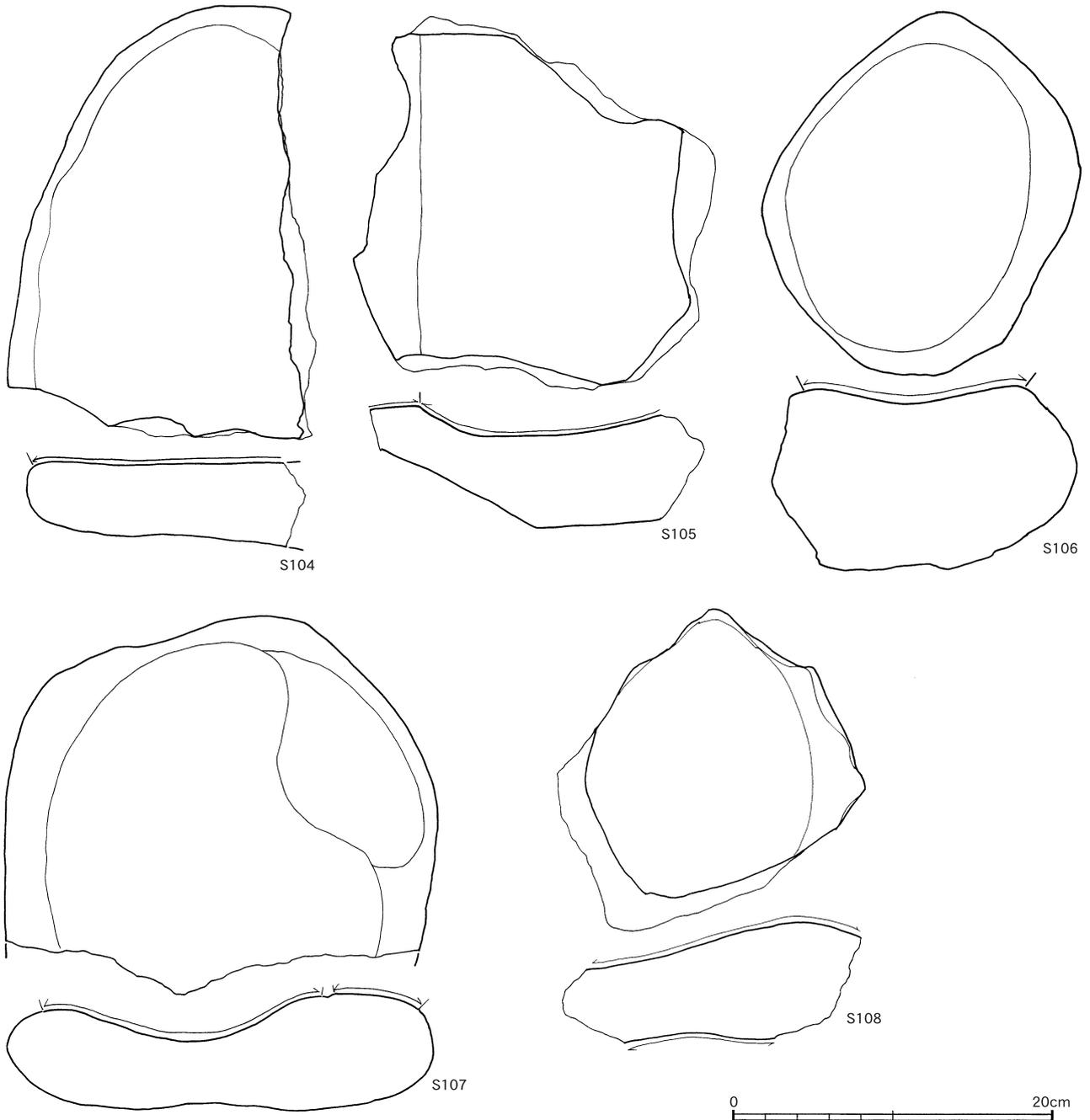
第24図 縄文時代の石器(10)



第25図 縄文時代の石器(1)

第7表 縄文時代の石器観察表(3)

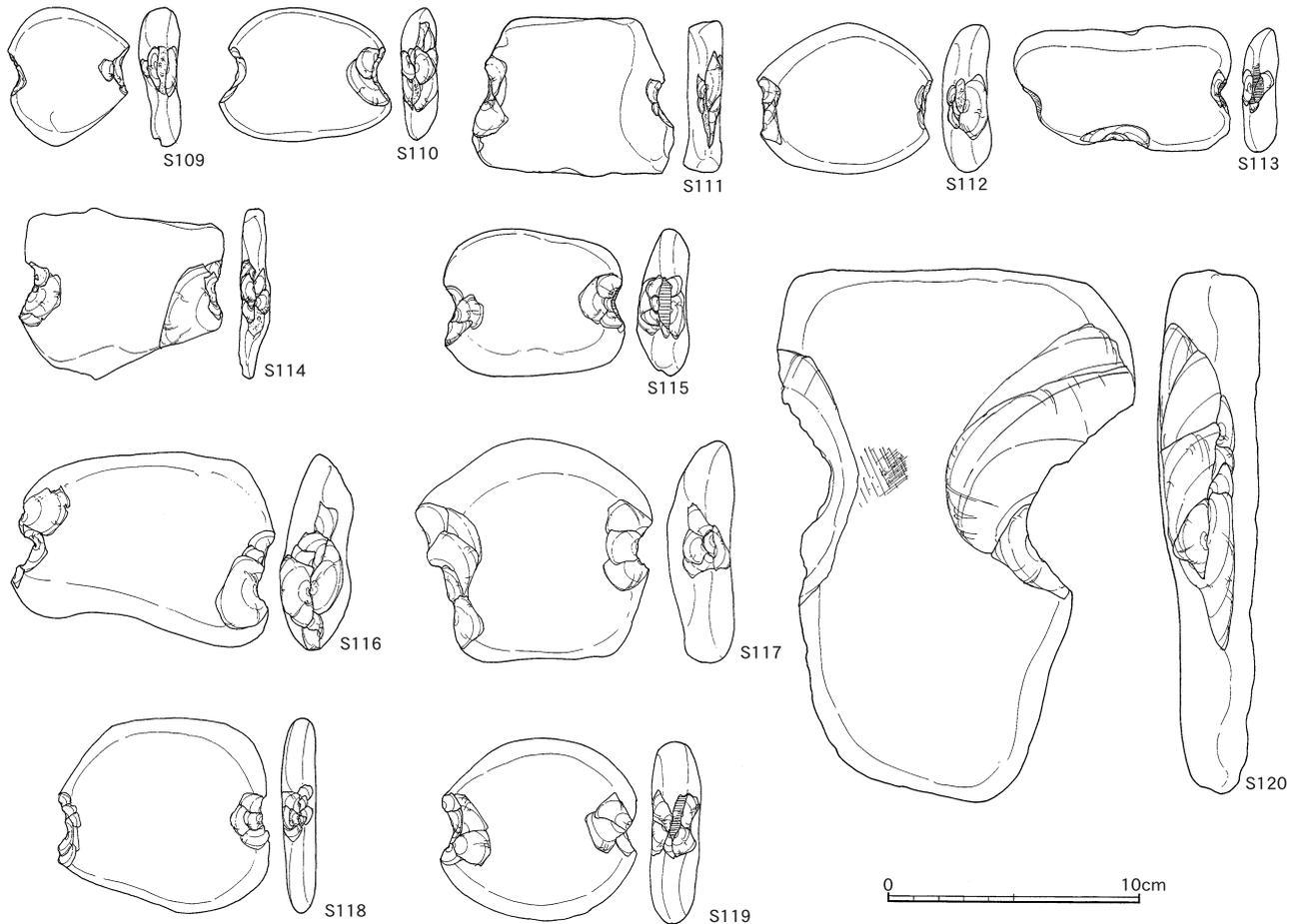
挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
20	52	打製石斧	B 4	15	頁岩	11.7	6.8	2.0	144.5
	53	打製石斧	B 4	15	頁岩	15.9	6.5	2.3	235.0
	54	打製石斧	B 5	15	頁岩	12.0	5.5	1.2	70.0
	55	打製石斧	B 5	15	ホルンフェルス	13.2	6.7	1.6	202.4
	56	打製石斧	C 4	15	ホルンフェルス	10.9	7.1	1.7	129.2
	57	打製石斧	C 6	15	ホルンフェルス	12.9	7.6	1.9	239.8
21	58	打製石斧	D 4	15	ホルンフェルス	12.4	6.5	2.0	172.0
	59	打製石斧	D 5	15	ホルンフェルス	12.9	7.0	1.3	162.4
	60	打製石斧	C 5	15	頁岩	13.9	7.5	2.3	214.0
	61	打製石斧	C 4	15	ホルンフェルス	11.9	6.4	1.7	152.8
	62	打製石斧	B 3	15	ホルンフェルス	11.2	6.1	1.3	110.0
	63	打製石斧	C 4	15	頁岩	11.2	6.6	1.6	141.6
	64	打製石斧	D 4	15	頁岩	9.9	6.4	0.9	55.8
	65	打製石斧	C 7	15	頁岩	7.8	7.1	1.3	83.0
	66	打製石斧	B 8	15	頁岩	10.3	6.0	1.0	80.6
	67	打製石斧	D10	15	頁岩	10.9	6.4	1.7	128.0
	68	打製石斧	B11	15	頁岩	10.6	6.6	0.9	83.4
	69	打製石斧	D 7	15	頁岩	7.6	6.9	1.3	77.0
	70	打製石斧	C 8	15	頁岩	+8.8	+6.7	1.1	+77.8
	71	打製石斧	B 6	15	頁岩	+11.9	11.1	1.9	+245.0



第26図 縄文時代の石器(2)

両面の剥離は破損後に実施されている。なお、裏面は礫面である。84は、小型で扁平な角礫の剥落した二辺に使用痕が観察される。85は横長剥片素材（ホルンフェルス）で、打面への二次加工と端部に使用痕が見られることから取り扱った。86は横位に図示したが、元来は裏面右側端の研磨面から磨製石斧の破損品の可能性がある。本資料の上

辺には対向する剥離が、下辺には裏面方向への剥離が認められる。87も石斧等に関わる二次剥片の再利用で、裏面は礫面で構成する。88の上辺左コーナーには研磨面が形成され、部分磨製石器の破損品の再利用と見られる。89の正面の大部分は礫面で、石斧製作剥片である。なお、下辺に微細な剥離痕が観察される。90の裏面は剥落面で、上



第27図 縄文時代の石器(3)

辺正面の剥離面は剥落に先行する。したがって、下辺の小剥離は剥落後と判断できる。91の表裏は風化が激しく、著しく摩滅している。上辺には辛うじて交互剥離が観察できるが、下辺の弯曲部は節理による剥落面である。85・86・90は、刃部を横方向に設置した可能性が高い。

ここに紹介した剥片の石材は、頁岩もしくはホルンフェルスである。⑩で紹介した石斧の石材とほぼ同じであり、石斧を再加工して使ったと考えられるものもある。

⑬磨石・敲石（第24・25図 S 92～S 103）

磨石と敲石の両機能を兼ねた92～98・103が多数を占め、単体としての磨石は99の1点、敲石では100～102の3点が抽出できる。使用石材では、99が砂岩でその選択は限定されると言える。なお、97・98の隈丸方形で両面に広い平坦な磨り面を、側面の4面に敲打痕を持つ形状のものは、南九州

縄文時代早期に特徴的に出現することが知られている。敲石の3点は、その形状及び敲打痕の状態から石器製作に関わるいわゆるハンマーストーンと見られる。

⑭石皿（第26図 S 104～S 108）

104・105・108砂岩、106安山岩、107花崗岩である。104の作業面は平坦で、104は1/4程度、107は1/2程度の残り度、1/4作業面が平坦である。106はやや厚みがある。

⑮石錘（第27図 S 109～S 120）

扁平な円礫を素材とし、礫の両側縁を打ち欠いた、いわゆる礫石錘である。両側縁部の打ち欠きは、敲打により抉入状に実施している。120の大型を除く他の11点の規格は類似し、その平均は136gである。113・115・119の抉入部には、結束による摩耗痕が残される。

第8表 縄文時代の石器観察表(4)

挿図No.	掲載No.	器種	出土区	層	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
22	72	打製石斧	B 3	15	頁岩	11.5	6.9	1.5	122.0
	73	その他の剥片	B 2	15	頁岩	8.3	5.3	1.1	41.4
	74	その他の剥片	B 4	15	頁岩	6.5	8.6	1.2	55.4
	75	その他の剥片	B 4	15	頁岩	8.7	5.5	0.7	40.6
	76	その他の剥片	C 7	15	頁岩	9.7	5.7	0.6	39.2
	77	その他の剥片	B 4	15	頁岩	6.7	6.5	1.2	68.6
	78	その他の剥片	B 1	15	頁岩	8.5	6.1	1.1	74.0
	79	その他の剥片	C 6	15	頁岩	10.9	7.1	1.1	83.4
	80	その他の剥片	C 2	15	頁岩	10.1	6.5	0.9	67.0
	81	その他の剥片	C 6	15	頁岩	7.3	4.6	1.1	47.8
	82	その他の剥片	C 4	15	頁岩	6.6	6.6	1.1	37.2
	83	その他の剥片	B 4	15	頁岩	8.0	7.1	1.7	115.0
	84	その他の剥片	B 6	15	頁岩	4.2	6.5	1.2	40.0
	85	その他の剥片	B 2	15	頁岩	4.6	10.0	0.8	42.6
	23	86	その他の剥片	B 2	15	頁岩	5.0	9.3	0.8
87		その他の剥片	C 6	15	頁岩	5.9	7.4	1.2	62.2
88		その他の剥片	C 4	15	頁岩	4.7	8.3	0.8	45.6
89		その他の剥片	B 4	15	ホルンフェルス	3.8	6.7	1.0	28.8
90		その他の剥片	C 7	15	頁岩	3.9	7.5	1.0	31.0
91		その他の剥片	C 4	15	頁岩	3.8	7.4	1.4	42.6
24	92	磨石・敲石	C 6	15	花崗岩	8.2	8.6	2.5	300.0
	93	磨石・敲石	B11	15	花崗岩	+7.1	10.8	4.0	+450.0
	94	磨石・敲石	C 4	15	花崗岩	+13.3	+9.6	5.3	+650.0
	95	磨石・敲石	C 8	15	花崗岩	10.0	9.3	3.9	580.0
	96	磨石・敲石	C 6	15	花崗岩	+7.3	8.6	5.0	+360.0
	97	磨石・敲石	C 7	15	花崗岩	+7.5	8.6	4.5	+560.0
	98	磨石・敲石	C 4	15	花崗岩	+8.6	11.4	5.5	+760.0
	99	磨石・敲石	D 7	15	砂岩	13.1	11.0	7.1	1420.0
25	100	ハンマー	B 8	15	花崗岩	9.7	4.0	4.5	205.0
	101	ハンマー	B 2	15	花崗岩	11.9	5.7	3.4	370.0
	102	ハンマー	D 4	15	花崗岩	7.0	4.8	2.4	120.0
	103	ハンマー	D 6	15	花崗岩	6.7	4.9	3.6	170.0
26	104	石皿	B 4	15	砂岩	+27.2	+19.3	5.3	+4700.0
	105	石皿	C 4	15	砂岩	+23.4	+22.7	7.7	+3800.0
	106	石皿	D 5	15	安山岩	22.9	19.9	11.7	6800.0
	107	石皿	B 3	15	花崗岩	+23.9	27.0	7.5	+6000.0
	108	石皿	C 3	15	砂岩	+20.7	+19.4	7.7	+3500.0
27	109	石錘	B 4	15	花崗岩	5.6	4.6	1.7	60.0
	110	石錘	B 4	15	花崗岩	5.3	6.7	1.5	80.0
	111	石錘	C 7	15	頁岩	6.4	8.0	1.6	110.0
	112	石錘	C 2	15	頁岩	6.0	7.1	2.1	120.0
	113	石錘	B 1	15	頁岩	5.1	8.7	1.4	100.0
	114	石錘	B 6	15	花崗岩	6.9	8.1	1.3	90.0
	115	石錘	B 1	15	花崗岩	6.0	7.1	2.1	110.0
	116	石錘	C 7	15	花崗岩	7.8	10.6	3.0	210.0
	117	石錘	D 4	15	花崗岩	8.8	9.4	2.8	270.0
	118	石錘	B 2	15	花崗岩	8.1	8.5	1.4	160.0
	119	石錘	B 6	15	花崗岩	7.4	7.8	2.0	190.0
	120	石錘	B 3	13・14	花崗岩	21.5	14.3	4.1	1150.0

第3章 弥生時代前期から中期の調査

第1節 概要

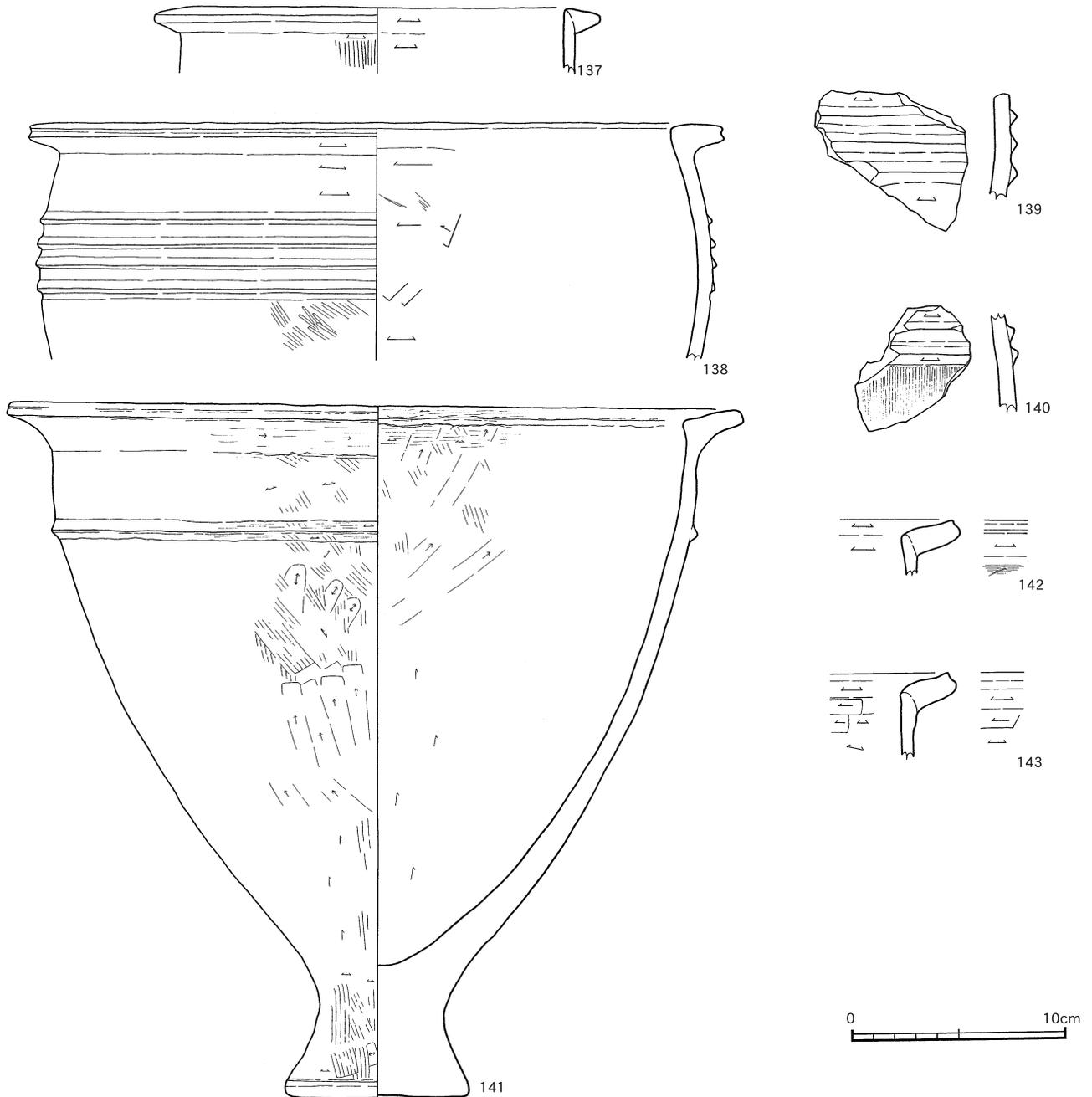
弥生時代前期から中期の遺物は、広い範囲に散布しているが、主として2～5区の北側に多い。13・14、15層で出土しているが、15層で主として出土しており、13・14層での出土数は少なかった。ほとんどが土器片であり、特徴のある14点の土器を図下した。137～143は甕形土器、144～150は壺

形土器である。石器は、この時期に該当する磨製石鏃が1点出土している。

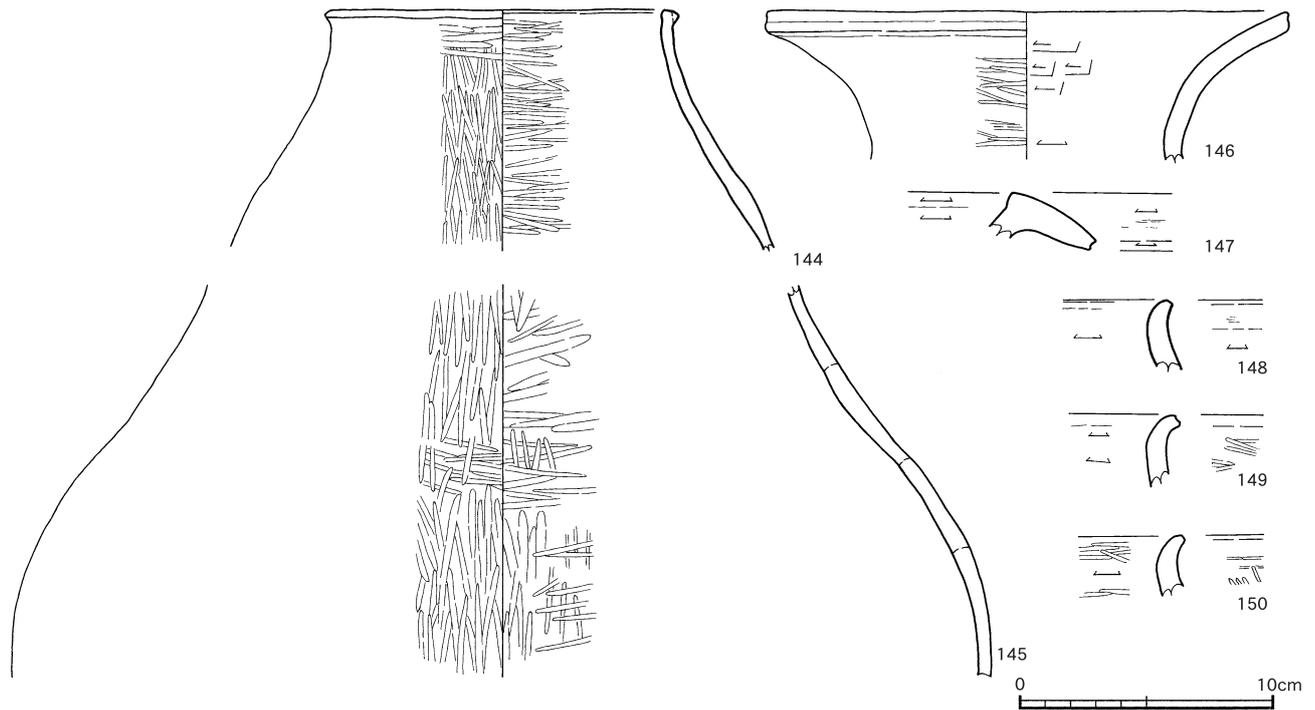
第2節 土器

1 甕形土器

137は、口縁部の断面が三角形を呈する逆L字形のもので、上面は外がやや下がっている。138は口縁直径が33cmあり、口縁部は口唇部が窪む逆



第28図 弥生土器(1)



第29図 弥生土器(2)

L字形で肩部に4条の低い三角突帯が貼り付けられている。139・140は肩部に突帯が巡るもので、138と同じタイプになると考えられる。141は口縁直径が35cm、高さ33.2cmの充実高台をもつものである。口縁部はやや細長く、内面がやや下がり、内側にやや張り出している。肩部に一条の三角突帯が貼り付けられている。142・143は、口唇断面が台形を呈し、口唇端部が窪む。上面はやや跳ね上がる。

2 壺形土器

144・145は、調整・色調から同一個体の可能性が高い。口縁直径が14cmで、口縁部に三角突帯を貼り付けて肥厚させている。口縁部から外へ広が

り、胴中央部がふくらんでいる。内面・外面ともにミガキによる調整がされている。146は口縁部が強く外反し、端部が窪む。147は、口縁部が逆L字形に外反し、口唇端部は窪む。148～150は如意状に外反する口縁部である。

第3節 石器 (第15図 S12)

B-2区で出土した長さ3.9cm、基部幅2.2cm、厚さ2.5mm、重さ2.09gの二等辺三角形を呈した磨製石鏃である。先端は鋭くとがっており、基部は少しへこんでいる。先端から途中まで、中央に稜があり、その下は左右に広がっている。両面とも主として斜方向に磨いている。

第9表 弥生土器観察表

挿図No.	掲載No.	出土区	層	器種	部位	調整・文様		色調		胎土
						外面	内面	外面	内面	
28	137	B 2	13・14	甕形土器	口縁	ナデ・ハケ目	ナデ	明赤褐	明赤褐	角閃石・輝石
	138	C 7	15	甕形土器	口縁	ミガキ・ナデ・四条突帯	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	角閃石・輝石
	139	B・C 10・11	15	甕形土器	胴部	ナデ・突帯	ナデ・ハケ目	にぶい褐	にぶい赤褐	金雲母・輝石
	140	B 5	13・14	甕形土器	胴部	ナデ・ハケ目・突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	金雲母
	141	B 2	13・14	甕形土器	完形	ハケ目後ナデ・一条突帯	ハケ目後ナデ	暗赤褐	にぶい黄褐	金雲母・輝石
	142	B10	13・14	甕形土器	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	角閃石・輝石
	143	C 9	15	甕形土器	口縁	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石・輝石
29	144	D 4	15	壺形土器	口縁	ミガキ・突帯	ミガキ	橙	にぶい黄橙	輝石
	145	D 4	15	壺形土器	胴部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	輝石
	146	B 2	13・14	壺形土器	口縁	ミガキ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	金雲母・輝石
	147	C 6	13・14	壺形土器	口縁	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	金雲母
	148	B 5	15	壺形土器	口縁	ナデ	ナデ	橙	褐	角閃石・輝石
	149	C 5	15	壺形土器	口縁	ミガキ	ナデ	橙	橙	角閃石・輝石
	150	C 5	15	壺形土器	口縁	ミガキ	ミガキ・ナデ	橙	橙	角閃石・輝石

第4章 弥生時代後期から古墳時代の調査

第1節 遺構

(別添図「遺構・遺物出土状況図」参照)

この時期の遺構は、甕棺墓1基、壺棺墓16基、円形周溝墓12基、土坑墓72基、立石(板石)25基である。この時期、この場所が墓地として利用されていたことが判明した。これらの遺構は、平成17年度調査区では全く検出されていないことから、墓地は7区以東の東側(海岸側)を中心に広がっていると言える。立地は、黒ヶ岡という小丘陵地の北側裾野、緩斜面である。

壺棺墓及び甕棺墓は9c層で検出され、丘陵地の緩斜面、調査区の北西側(A~D-7~9区)を中心に広がりを見せる。円形周溝墓は9c層下で検出され、調査区の南側、丘陵地の中腹(C・D-8~9区)を中心に広がりを見せる。土坑墓は9c層及び15層上面で検出されており、9c層検出土坑墓は調査区東側(C・D-8・9区)を中心に、15層上面検出土坑墓は、更に海岸側に近い所(C・D-9・10区)を中心に広がりを見せた。立石(板石)は、調査区のほぼ中央部(A~D-7・8区)を中心に北向きにほとんど倒れた状況で検出された。

この遺構調査に当たっては、9b層が暗黒褐色土を呈し、遺構検出が非常に困難であったため、下層の9c層下層まで掘り下げた段階で9b層を埋土とする遺構ラインを検出した。このことから、本来、これらの遺構は検出面より上の層を掘り込み面として形成された墓地群であることを念頭におきたい。また、土坑墓に関しては異なる二層の検出面であるが、これらはいずれも9b層を埋土とすること、遺構内遺物がこの時期に該当する遺物であることから、これらの土坑墓はそれほど時期差のない遺構として判断した。

遺構内遺物及び人骨の出土は非常に少なかった。人骨は、四つの壺棺墓からの検出のみであった。その他の壺棺墓や甕棺墓は、本体に土が充填した状況であった。また、円形周溝墓や土坑墓には人骨が残存していなかった。

遺構内の遺物は、鉄製品や丹塗研磨土器の埴

及び破碎した状況で検出された壺形土器が見られたものの、全般的に少ない状況であった。

1 壺棺墓と甕棺墓

調査区のほぼ中央部(A~D-7~9区)で壺棺墓16基、甕棺墓1基が集中して発見された。これらは、9b層下部で壺棺・甕棺本体の土器を検出し、それをもとにして9c層上面で遺構ラインを検出した。これら全ての壺棺墓・甕棺墓が9b層の黒褐色土を埋土としているため、同色での9b層遺構検出は非常に難しい状況であった。

掘り込みの平面形ラインは楕円形状をしており、長径の平均は1m、深さの平均である。掘り込み内の壺や甕は、口縁部を斜め上にして斜位方向に埋設されている状況であった。軸方向としては16基中壺・甕の口縁部が西向きに埋設されているのが11基、東向きに埋設されているのが5基である。蓋は16基中12基にあり、その他はない。その中には、高環形土器を転用したものや壺形土器や甕形土器の底部を転用したものがある。

壺棺・甕棺は器高約60cm、最大径42cmほどの大型のものが多く、厚さは大きさのわりには薄く、土器の造り等を観察すると埋葬用として製作されていると思われる。更に、壺棺・甕棺には線刻を施したり、丹塗りを施したりするものがあり、これらからも埋葬用として特別に製作されたと思われるものもある。

壺棺・甕棺のほとんどが、土の重さによって押しつぶされ、壺棺・甕棺本体の中に土が入り込んでいる状況であった。人骨の有無について検出状況は非常に厳しかったが、数基の壺棺から人骨片が発見された。

遺構検出の状況から本来、壺棺墓・甕棺墓は9b層で掘り込まれた墓である可能性が高く、調査段階では大分下のレベルで検出されたことを留意していただきたい。

1) 1号壺棺墓 (第30図, 図版3, 21)

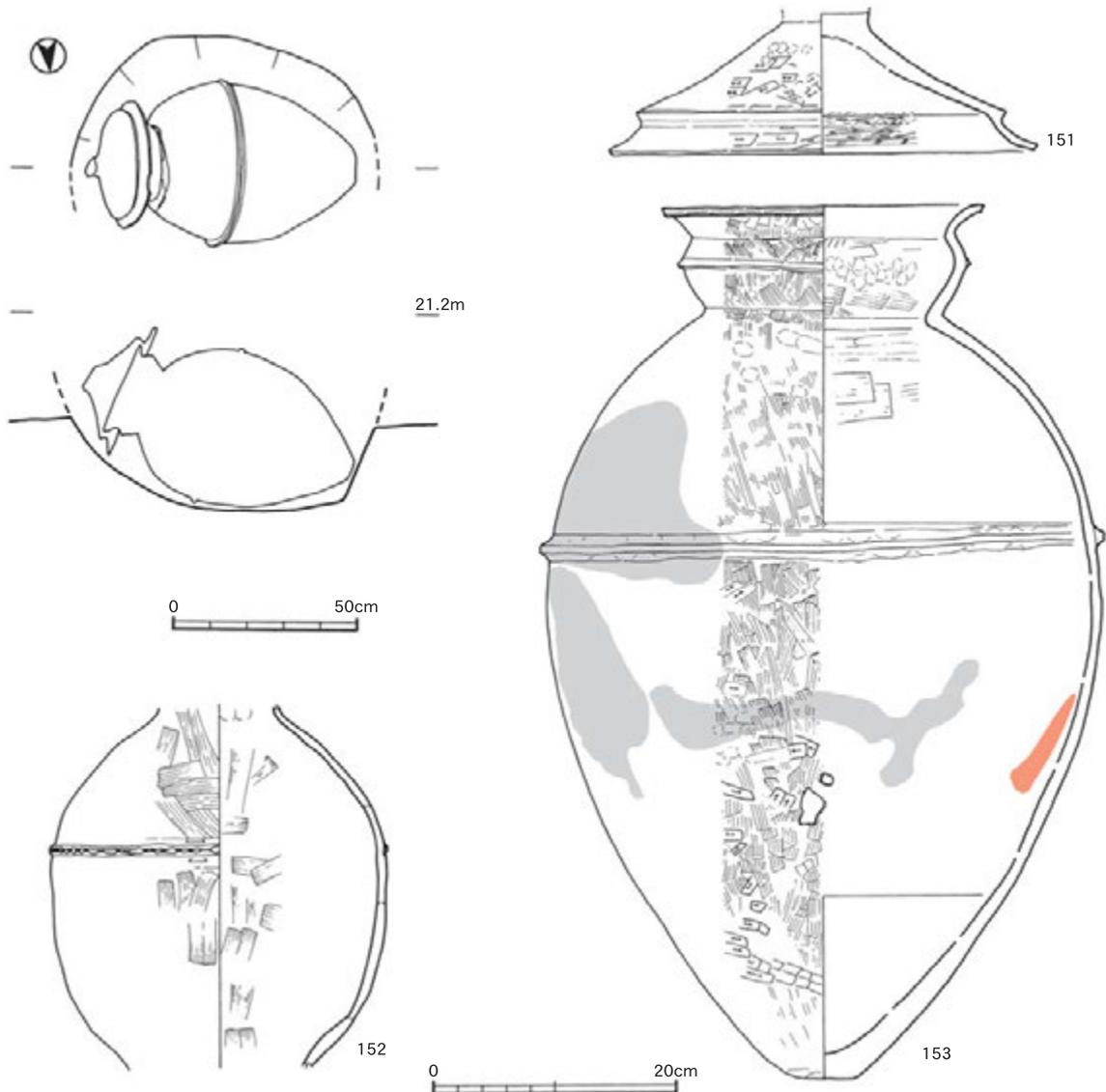
①遺構

C-8区, 9c層上面で検出された。脚部が折れた高环形土器を蓋にしている状態で検出された。付近には立石14が斜位に立った状態で検出され, その近くに一条刻目突帯で穿孔のある土器が9a層と9b層の境で検出されている。掘り込みの平面形は楕円形状を呈し, 長径0.9m, 短径0.7m強, 床面までの深さ0.6mである。埋土は9b層の黒褐色土であり, この壺本体の口縁部は残っていた。その中に器高約75cm, 最大径約30cm, 一条突帯を呈した土器の口縁部に脚を折った高环形土器を蓋に転用したものが口縁部に合わせるような形で発

見された。中には土が少量入っていたものの, 人骨や副葬品は検出されなかった。

②遺物 (151~153)

本体 (153) の壺形土器は, 器高72.3cm, 最大径46.4cm, 口縁径26.6cm, 底径4.7cmの平底を呈する。口縁部に特徴があり, ソロバン玉のような形状に短く口唇部がラッパ状に外反する。頸部から肩部にかけなだらかに膨らみ, 底部にかけてほぼ直線上にすぼむ。肩部から胴部にかけてM字状の一条突帯を巡らす。内外面ともにナデや工具ナデを施した後, 全体的に丁寧な刷毛目調整を施す。器部の継ぎ目に指頭圧痕が観察できる。これらは, 中津野式土器に該当すると考える。



第30図 1号壺棺墓

蓋に転用されている高坏形土器(151)は、口縁部径35.5cmで指ナデ、工具ナデ、指頭圧痕を観察することができる。坏部はラッパ状に外反して広がり、口縁から坏部の底まで非常に浅い。この蓋も、口縁形状から中津野式土器段階において、古い時期に該当するものと考えられる。

周辺遺物として、(第63図)が検出されている。

2) 2号壺棺墓(第31図, 図版3, 21)

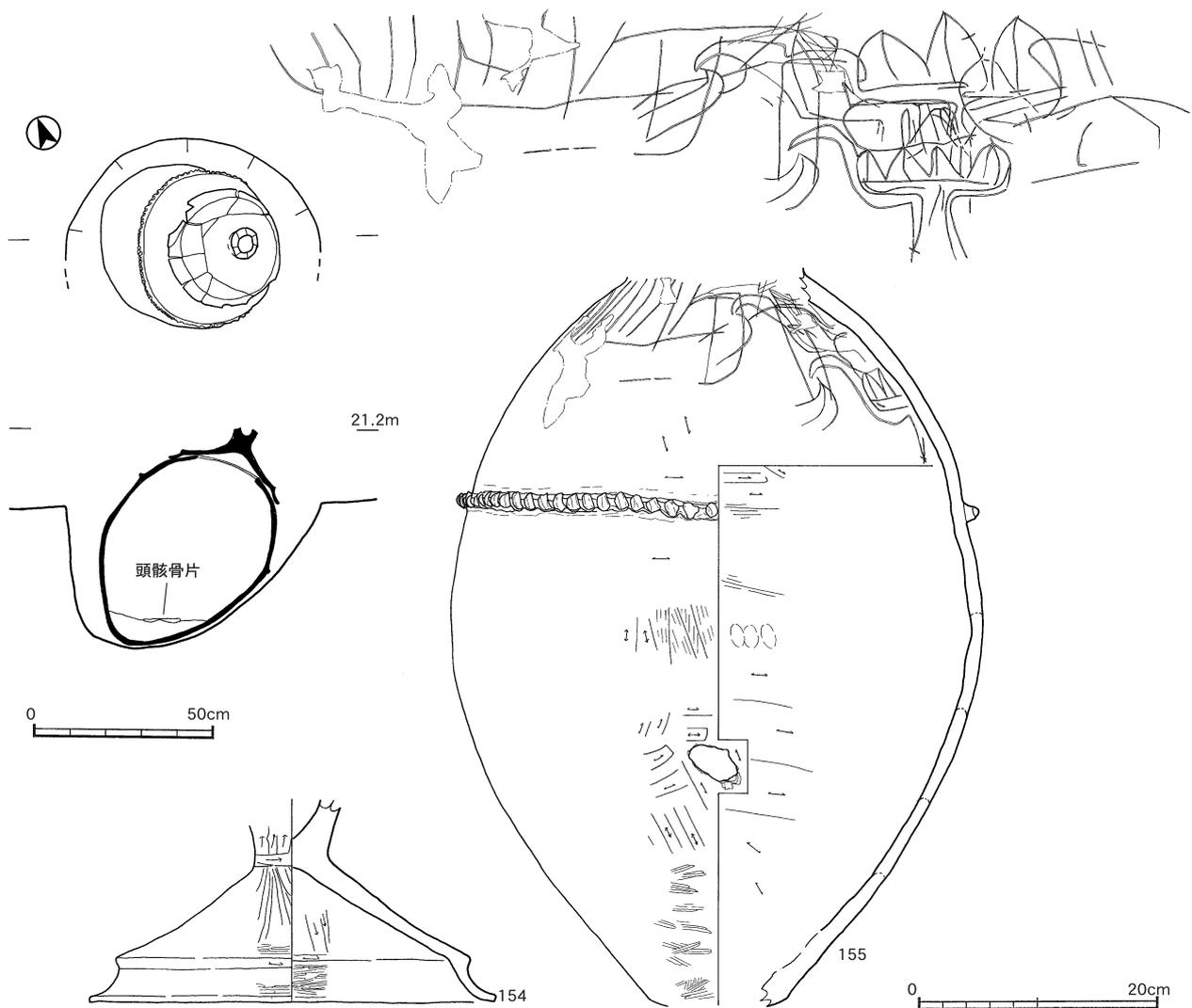
①遺構

1号壺棺墓とさほど遠くないC-8区の丘側で、口縁部がない大型壺本体に脚部の折れた高坏形土器を蓋に転用した壺棺が9b層で検出され、9c層上面で遺構ラインが検出された。付近に立石は

ないが、指宿特有の赤みがかかった色を呈した土器が9b層上面で検出されている。

土坑は長径が0.8m、短径が約0.5m、検出面からの深さが0.4mある楕円形を呈しており、9b層の黒褐色土を埋土としていた。

壺棺は一条刻目突帯を呈した壺形土器の口縁部に、高坏の坏部口縁部を合わせたような状況で検出された。壺形土器は口縁部を上にして斜位にした状況で埋設されていた。壺形土器は口縁部が打ち欠かれ、高坏形土器と密接に合せてあった。壺形土器の中には土が若干入り込んでいたが、頭骸骨片、および白歯と思われる歯が検出された。その他の部位の人骨は検出されなかった。



第31図 2号壺棺墓

②遺物 (154・155)

本体の壺形土器は、器高64cm、底径11cmの平底を呈する。全体的に卵形のように胴部がふくらみ、緩やかに底部へと楕円状にすぼむ。外面調整は、ナデを中心に一部刷毛目調整も施す。底部には、ケズリもみられる。内面調整は、剥離が激しく不明瞭であるが、ナデ調整である。肩部から胴部にかけて、一条の刻目突帯を巡らす。特筆することは、頸部から突帯部の間に、線刻が施してあるが、何が描かれているか不明である。口縁部形態は不明であるが、平底を呈していることや、プロポー

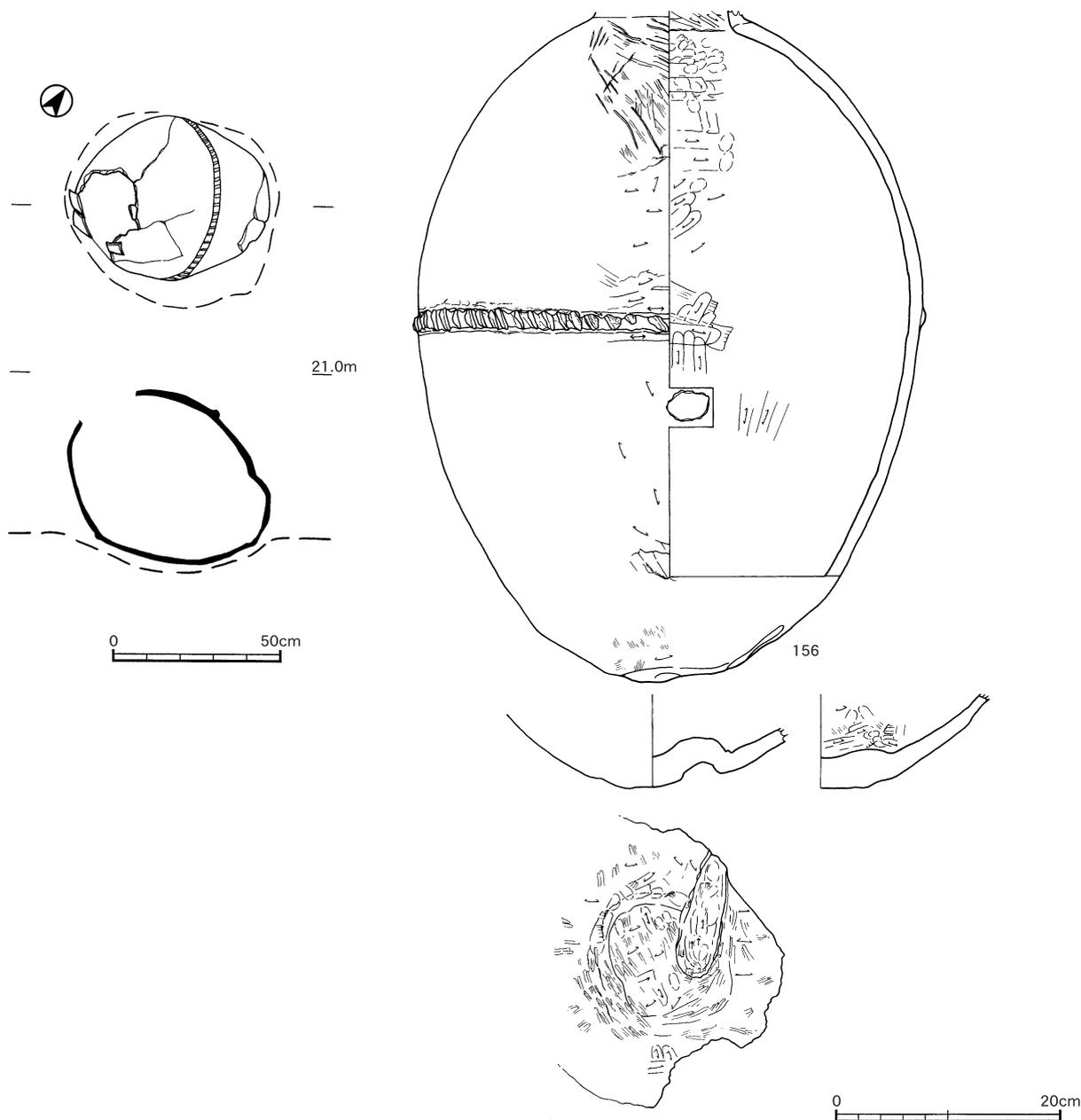
ション、刻目突帯、蓋形土器の形状から、中津野式土器の時代に該当するものと考えられる。

蓋に転用されている高坏形土器は、口縁部径が34cm、器高17.1cmで、脚部が折られている。形状は、壺棺1の蓋と類似している。

3) 3号壺棺墓 (第32図, 図版14)

①遺構

器高約70cm強の大型壺 (第64図, 247) が青ゴウをかぶった状態でB-8区9c層中ほどで検出された。口縁の直下約40cmの9c層で検出された。



第32図 3号壺棺墓

掘り込み面の検出が難しく、プランが不明瞭であったが、長径0.6m、短径約0.6m、遺構検出面からの床面までの深さ0.11mで、おそらく楕円状を呈していたものと思われる。

1・2号壺棺墓と異なり、蓋と思われる土器が見られず、壺棺本体の中には土が充填し、人骨は発見できなかった。

②遺物 (156)

本体の壺形土器は、器高60cm、最大径46.3cmで卵形の器形を呈する。底部は、丸みを帯びており、樹木の枝と思われる圧痕がある。口縁部は欠損していた。胴部のほぼ中央に一条の刻目突帯を廻らせ、その下に焼成後の穿孔を施す。頸部から肩部にかけ、線刻と思われる2条から3条の線が斜位に施されているが、意図的であるか否かについては不明である。全体的に刷毛目調整を施すが、底部はケズリ状のミガキも見られる。この壺形土器は、中津野式土器該当の壺形土器と思われる。

周辺遺物は、第64図に記載する。

4) 4号壺棺墓 (第33図, 図版4, 22)

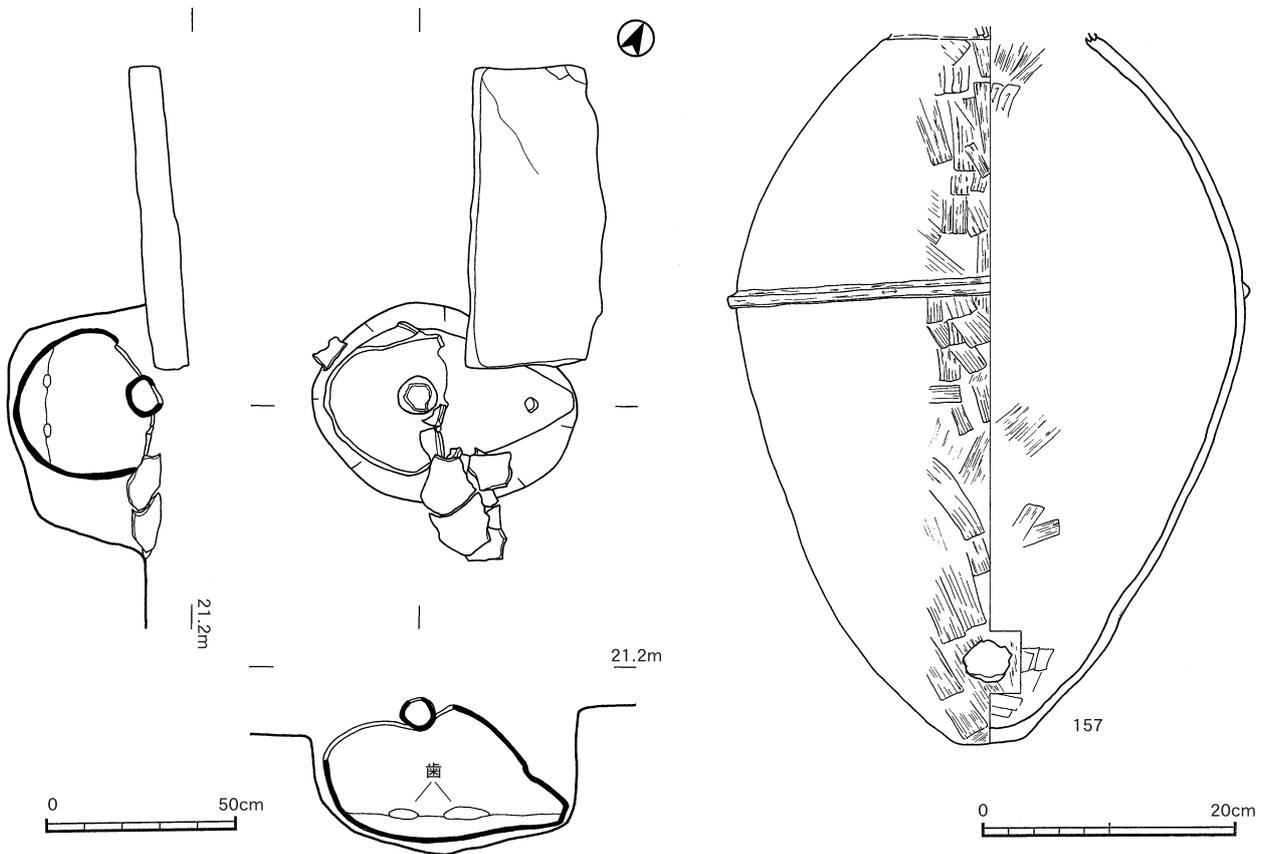
①遺構

C-8区, 9c層で検出された。すぐ近くに立石4が横たわり、その立石の床着とほぼ同じレベルで本体遺物が検出された。土坑は楕円形を呈し、長径0.7m、短径0.5m、検出面から床面まで0.3mある。この壺棺墓の特徴は縦1m、横0.4m、厚さ0.1mの人力でも移動可能な板石が平置き状態にあること、壺棺の頸部から胴部にかけて、何らかの形でこわれ、その土器片が横にあり、土が充填している上に埴形土器が口縁を上にして置かれたような状況で検出されたことである。

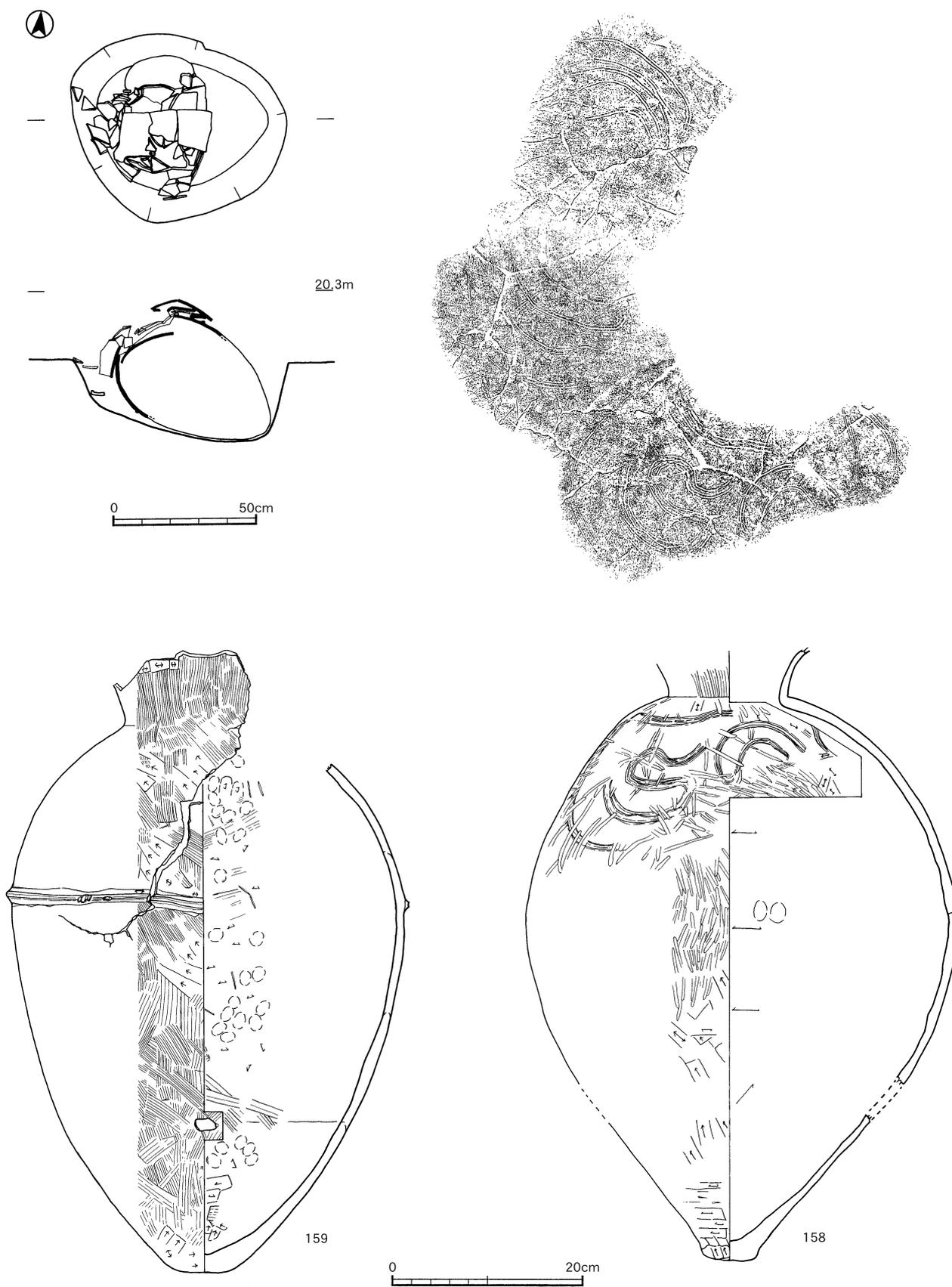
②遺物 (157)

本体の壺形土器は、器高58cm、底径6cm、最大幅41cmで口縁部はない。頸部には頸部から肩部にかけ、なで肩状に膨らみ、突帯部分から底部にかけ、逆三角形状にすぼむ。底部は平底である。胴部の最大径の位置に一条のM字状突帯が巡る。調整は丁寧で、外面は刷毛目、内面はヘラナデを施す。底部付近には穿孔がある。

周辺遺物は、第65図である。



第33図 4号壺棺墓



第34图 5号壶棺墓

5) 5号壺棺墓 (第34図, 図版4, 22)

①遺構

A-8区, 9c層上面で検出され, 近くには立石12が横たわっており, その周辺には土器集中が見られた。

壺棺は (159), 一条刻目突帯を施す。口縁部が斜位上面の状態検出された。本体の口縁部は打ち欠かれたと思われ欠損している。その口縁部のすぐ上に壺形土器の胴部から底部が重なるように圧破された状態で検出された。おそらく蓋用として用いられたものと考えられる。土坑は長軸0.7m強, 短軸0.6mの長方形を呈し深さは0.3mであった。長軸方向は東西方向を向いており壺棺内で人骨は検出されなかった。

②遺物 (158・159)

本体の壺形土器は (159), 器高65.5cm, 底径6cm, 最大径42.8cmで口縁部が欠損している。器形は, 肩部がなで肩状で, 突帯部分から底部にかけてなだらかにすぼむ長胴形である。突帯は, 一条のM字突帯を巡らし, 底部近くに焼成後穿孔が施さ

れる。外面調整は, 丁寧で密な刷毛目調整を施し, 内面調整は粘土継ぎ目に指頭圧痕, 底部は工具ナデを施す。これらの器形から, 東原式土器段階の該当の壺形土器と思われる。

周辺遺物は, 第66図にある。

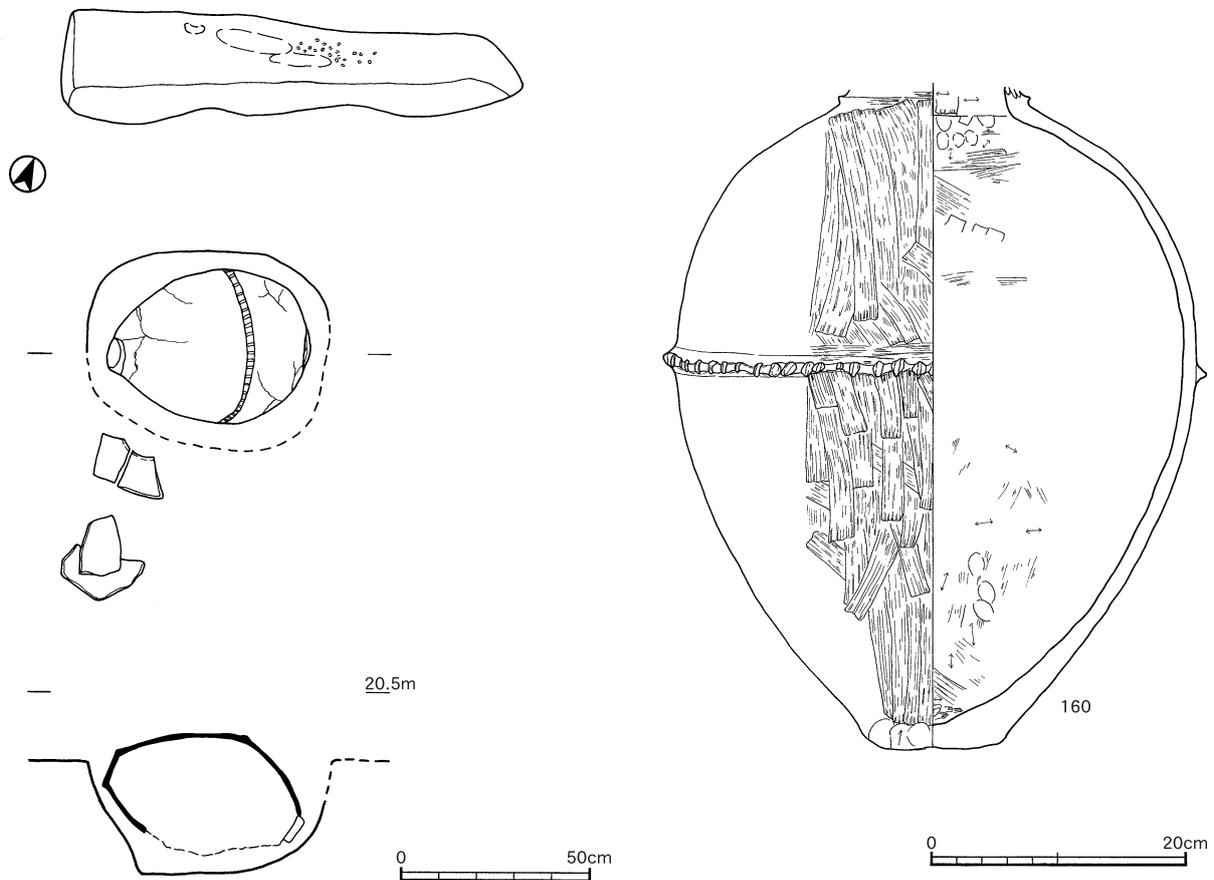
蓋形土器 (第34図, 158) は, 検出時, 器形不明の土器であったが, 壺形土器となった。器高約64cm, 底径5.5cm, 最大幅45.5cmで逆卵形で平底を呈する。無文であるが肩部に二本平行沈線の文様が施されている。全体的にミガキを施し, 丁寧なつくりである。この沈線文様が何を表すのか不明であるが, 2号壺棺同様何を意図するのか大変興味深い。

6) 6号壺棺墓 (第35図, 図版5, 22)

①遺構

B-9区, 9c層上面で検出されすぐ北側に円柱状の立石16が横たわった状態であった。

この壺棺は, 他の壺棺とは異なり, 口縁部を斜位下部にした状態で検出された。一条刻目突帯が



第35図 6号壺棺墓

あり、平底を呈す。蓋は検出されなかった。土坑は、長軸方向を東西方向を向き、長径0.6m、短径0.5m、深さ0.3mの楕円形状を呈している。人骨は検出されなかった。

②遺物 (160)

本体の壺形土器は、器高52.3cm、底径9.5cm、最大径42.2cmで口縁部がない。器形は、卵形をしており、平底を呈する。頸部に一段の平坦面があり、胴部には一条の刻目突帯を巡らす。穿孔はない。調整は、外面が刷毛目調整を施すが、内面は、剥離が激しく、不明瞭である。これらの器形の特徴から、中津野式土器該当の壺形土器と考える。

周辺遺物は、第66図である。

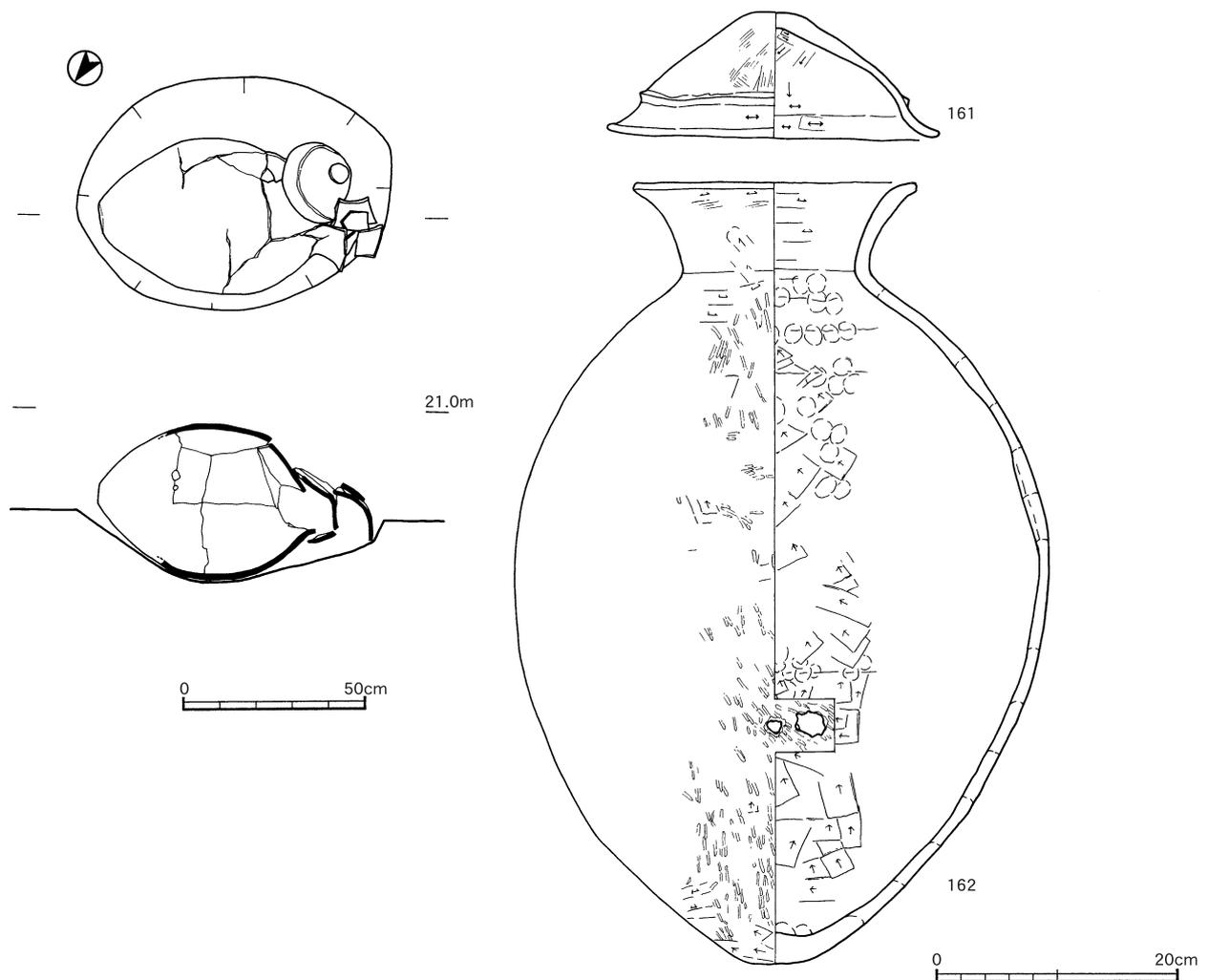
7) 7号壺棺墓 (第36図, 図版22)

①遺構

C-9区, 9c層上面で検出された。壺棺本体は平置きで、口縁部が残存している。上面には高坏形土器を転用したと思われる蓋が口縁からはずれた状態で検出された。土坑は長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.3mほどで、長軸方向は東西向きである。検出面上には完形の中小壺等が検出されていた。

②遺物 (161・162)

本体の壺形土器は、器高66cm、口径24cm、底径4cm、最大径44.5cmで口縁部が残存していた。器形は、なで肩の長胴形で平底を呈する。突帯は無い。胴部下部には大小2つの穿孔がある。特筆は、実則図の裏面に、全体的な丹塗りを施した痕が見



第36図 7号壺棺墓

られることである。また、調整では、外面にナデ調整後、ミガキを施す。

蓋形土器は、口径28cm、底径4cm、器高11cmの鉢形土器を蓋に転用したものである。二等辺三角形の器形をし、口縁部は二重口縁状にラッパ状に外反する。

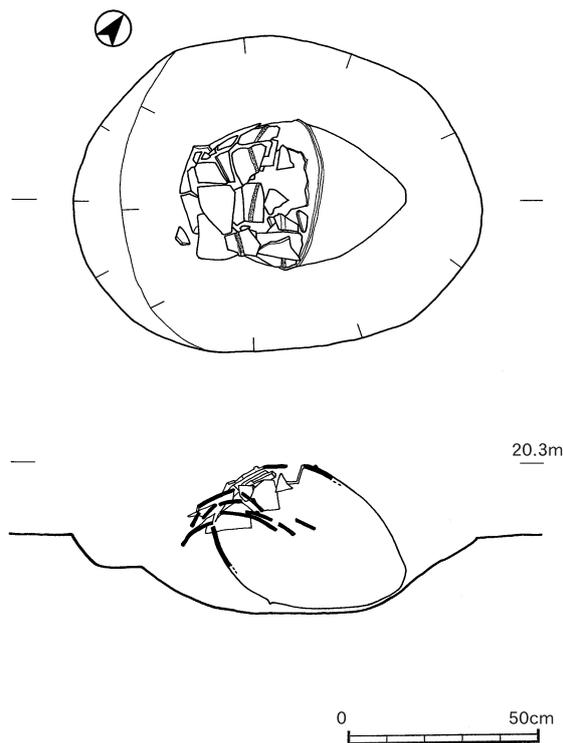
これらの土器の器形から、中津野式土器段階の土器と想定される。

周辺遺物は、第67図である。

8) 8号壺棺墓 (第37図, 図版5, 23)

①遺構

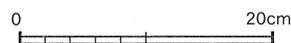
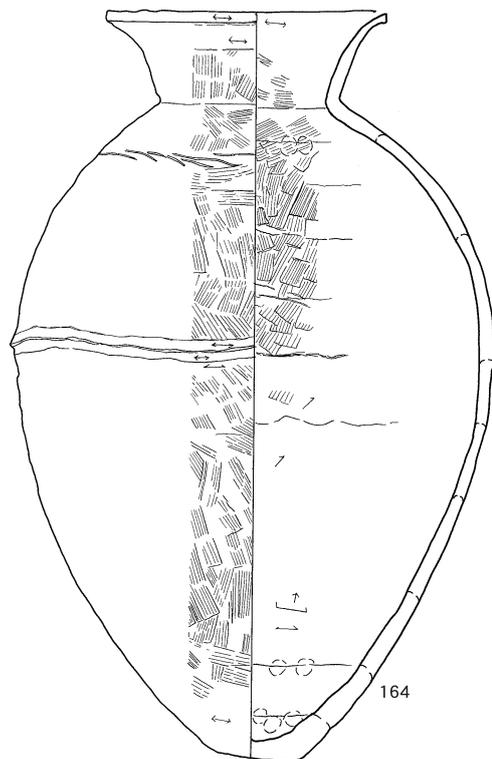
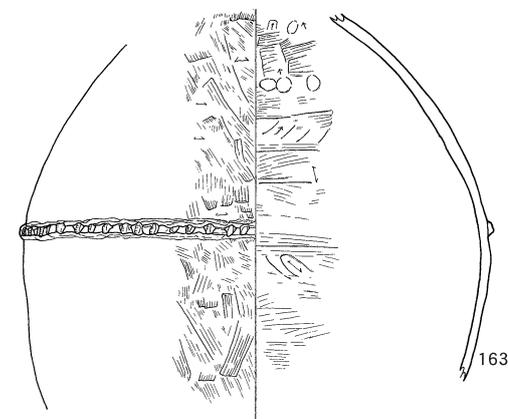
A-9・10区, 9c層上面で検出された。壺棺



本体は口縁部を斜位上部に置き、一条刻目突帯を呈したもので、口縁部から胴部にかけて破損し、その上に蓋と考えられる壺形土器の集中が見られた。土坑は長径0.95m、短径0.85m、深さ0.2mの楕円状を呈していた。中には土が充填しており、人骨は発見されなかった。

②遺物 (163・164)

本体の壺形土器は、器高60.5cm、口径22.7cm、底径6.5cm、最大径39.2cmを計る。器形は、頸部から口縁部にかけてやや外側に直線状に開き、口唇部で大きく外反する。また口唇部は平坦面を呈す。頸部から肩部はなで肩状で突帯部で最大となり突帯からほぼ逆二等辺三角形にすぼむ。底部は平



第37図 8号壺棺墓

底である。突帯部は断面三角の突帯を巡らす。穿孔はない。頸部より下部に締縄状の沈線文が鋭いもので施されている。そのほかの部位には見られないことから、抽象的絵画ではないかと思われる。調整は、外面が刷毛目、内面は胴部から口縁にかけて刷毛目、底部にかけてはナデである。口縁部、底部形態全体的はプロポーションなどから東原式土器該当の壺形土器と思われる。

周辺遺物は第67図である。

9) 9号壺棺墓 (第38図, 図版5, 23)

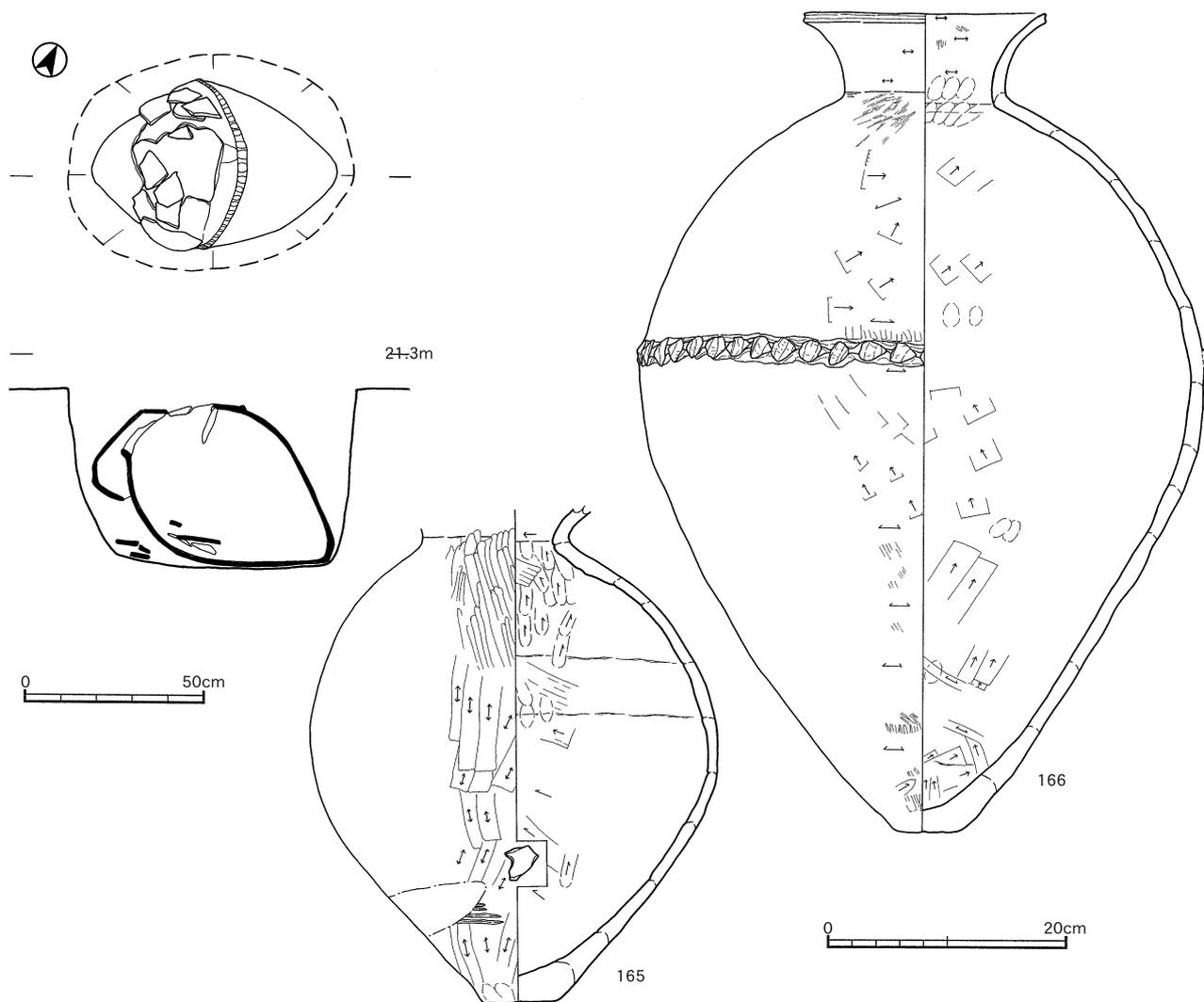
①遺構

B-9区, 9c層上面で検出され, すぐ北側に

は本遺跡で最大級の立石15と259 (第68図) の土器があり, その下で発見された。壺棺は口縁部を斜位上部にしている。器高が70cm, 最大径が46cmで, 一条の刻目突帯を呈し, 口縁部が打ち欠かれていた。口縁部には胴部から底部にかけて, 壺形土器が履いかぶさるようになり, 蓋として転用したのではないかと考えられる。壺棺内は土が充填しており, 人骨は検出されなかった。土坑部は長軸が東西方向を向き, 長径0.8m, 短径0.6m, 深さ0.5mの楕円形状を呈している。

②遺物 (165・166)

本体は壺形土器, 蓋部壺形土器を転用している。まず, 本体の器高は69.7cm, 口径20.4cm, 底径5



第38図 9号壺棺墓

cm, 最大径は48.5cmを計る。頸部から口縁にかけて短くラップ状に外反し, 口唇部はM字状を呈す。頸部から突帯部に大きく膨らみ底部にかけ逆二等辺三角形にすぼむ。底部は平底である。

突帯部は胴部中央より, やや上に一条の刻目突帯を巡らす。穿孔はない。調整は内外とも明瞭ではないがナデまたは工具ナデを基本に施す。ただ外面の頸部にミガキ状のナデが施される。次に, 蓋転用の壺形土器は器高42cm強, 底径6cm, 最大径34cmを計る。

器形は, 口縁部が欠けて不明であるが胴部中央で大きく膨らみ底部にかけすぼむ。底部は平底である。突帯はないが底部近くに穿孔がある。調整は外面が頸部から肩部にかけミガキを施す。胴部から底部にかけ丁寧に工具ナデを施す。穿孔より下部に4本の鋭いもので線を刻んでいる。抽象的絵画ではないかと思われるが, 欠損している為全容は見る事ができない。これらの2つの壺形土器の形状等から中津野式土器該当と思われる。

周辺遺物は, 第68図である。

10) 10号壺棺墓 (第39図, 図版5, 24)

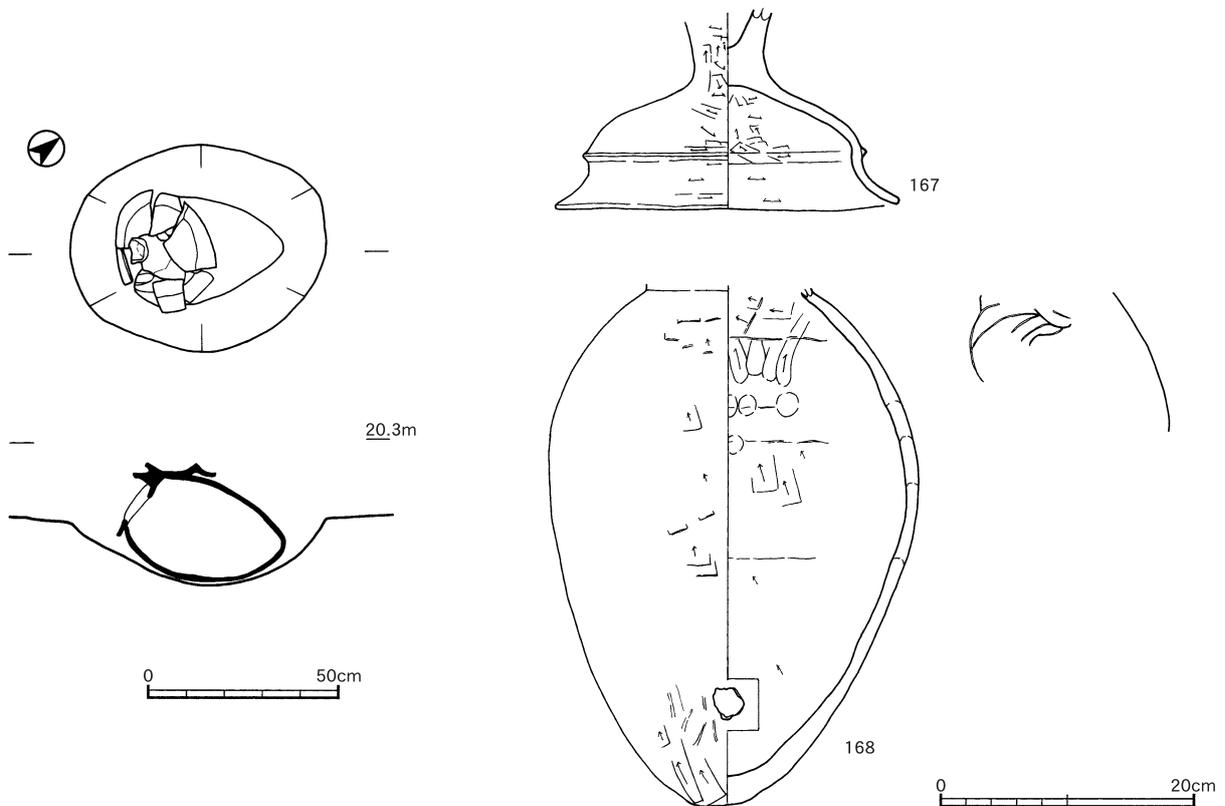
①遺構

A-8区, 9c層上面にあり, 東側の少し離れた所に立石9が斜位に立った状態で検出された。これらの周辺には, 透のある高坏形土器等の検出が見られ, これらの下層からこの壺棺が発見された。土坑は長軸が東西方向を向き, 長径0.7m, 短径0.6m, 深さ0.2mで楕円形状を呈する。

壺棺は器高が41cm強, 最大径が29.5cmで, 口縁部を斜位上部にして発見された。口縁部は打ち欠かれ, その上に高坏形土器を転用したと思われる蓋が発見されている。中には, 土が充填し, 人骨は検出されなかった。

②遺物 (167・168)

本体の壺形土器は, 口縁部が欠損している。肩部はナデ肩をし, 緩やかに膨らみをもちつつ底部へ卵形をなしながらすぼまる。底部は, 平底である。調整は全般的に不明瞭であるが, 外面はナデ後, 工具ナデを, 内面は粘土継ぎ目と思われる箇所指頭圧痕が見られ, ナデ調整を行う。頸部付



第39図 10号壺棺墓

近は、指ナデである。168の断面側に線刻が施されていた。記号的なものか、絵画的なものか何が描かれているかは不明である。

蓋形土器（167）は高坏形土器を転用したものである。擬以口縁から緩やかに外反し、坏底部へ膨らみをもちつつ脚部へと続く。脚部は、打ち欠かれている。

これらの遺物から、中津野式土器該当と思われる。

11) 11号壺棺墓（第40図，図版5，6，24）

①遺構

A-7区，9c層上面で検出された。東側には本遺跡最大級の立石18が，近隣には北側に立石17・13があり，これらの周辺にも土器集中が見られ，その下層から検出されている。土坑は長軸が東西方向を向き，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.4mの楕円形状を呈している。

壺棺は，器高62cm，最大径43cm，口縁部を斜位上部に向け，その口縁部の上に蓋に利用したと思

われる壺形土器の胴部から底部が壊れた状態で置かれて検出された。

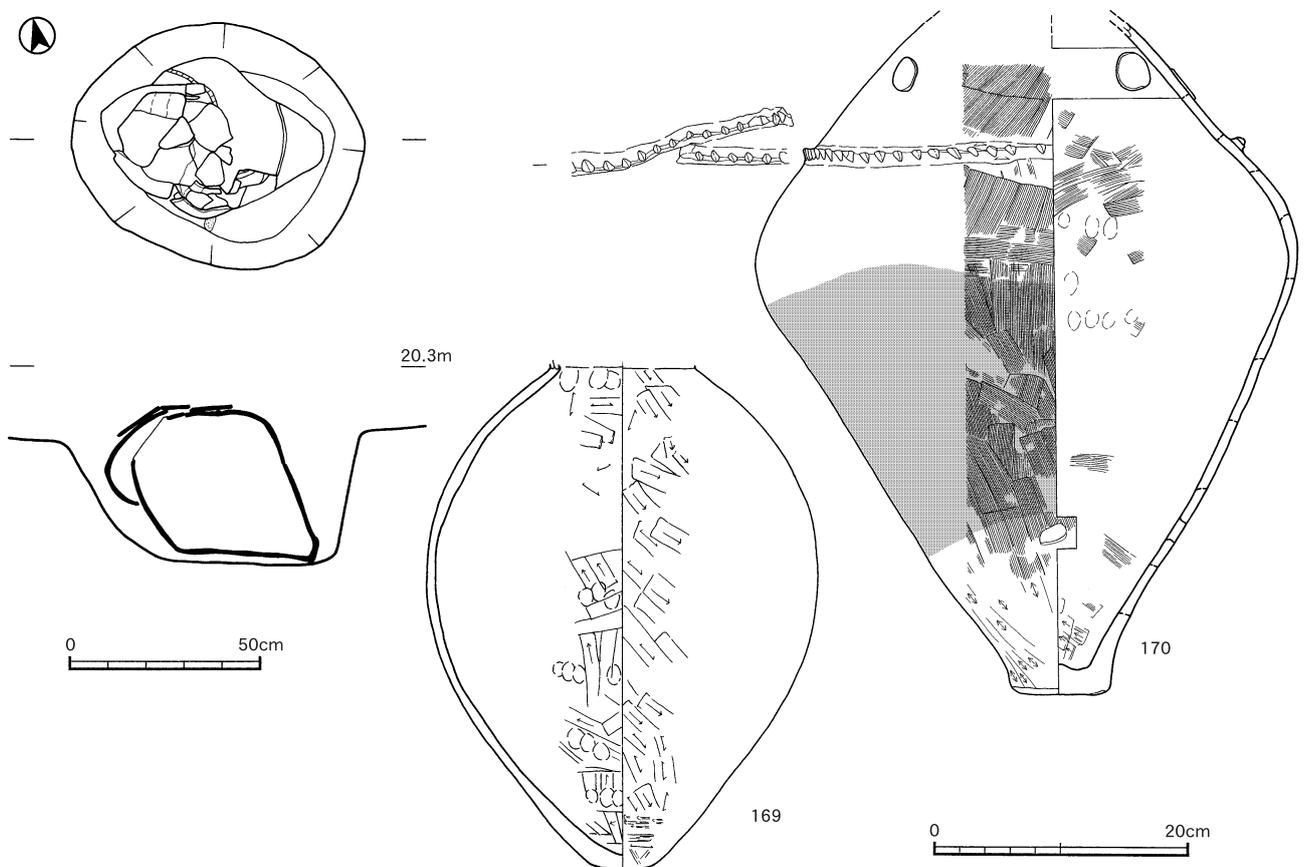
壺棺の中は土が充填し，人骨は検出されなかった。

②遺物（169・170）

本体遺物の蓋形土器は，器高53cm強，底径8cm，最大径43cmを計る。

器形は他の壺棺本体と比べ特徴的である。口縁部は欠損しており不明であるが頸部から底部にかけて菱形凧のような形状を呈し底部は平底である。突帯は，最大径の胴部ではなく頸部と最大径の中間に一条の刻目突帯を巡らす。しかし，これらの突帯は連続せず左上りと右下りで互い違いとなっている。また突帯より頸部寄りに，対の円盤状の浮文が4ヶ所あり底部近くに穿孔もある。調整は外面に丁寧な刷毛目を細かく施し，底部は工具ナデを施す。

蓋形土器（169）は，検出時器種，器形とも不明瞭であったが，口縁部が欠損した壺形土器であった。



第40図 11号壺棺墓

器形はナデ形の少し膨らみをもった逆卵形をなし、平底を呈す。突帯はない。検出時、本体(170)にかぶせてあったのは蓋形の底部であり、周辺にあった土器片が接合し1個の壺形土器となったことから、この墓のすぐ近くで壺を割り、蓋として適当な大きさにしたものではないかと想像される。形状や突帯などから中津野式土器の古い段階該当と思われる。

12) 12号壺棺墓 (第41図, 図版23)

①遺構

C-11区で検出された。この区は丘陵地であったと思われるが、宅地造成のため、9層はほとんど削平をうけていた。遺構自体の掘り込み面は不明瞭で検出されず、壺形土器内部の埋土が9b層の黒褐色土であることや、壺と蓋であろうと考えられる遺物を検出したことから壺棺墓とした。

壺棺は、中が空洞の状況で早い時期につぶれたと考えられる。器高62cm、最大径49.6cmで、口縁部は残存しなかった。口縁部から底部にかけてつぶれた状況で検出された。人骨は検出されなかった。

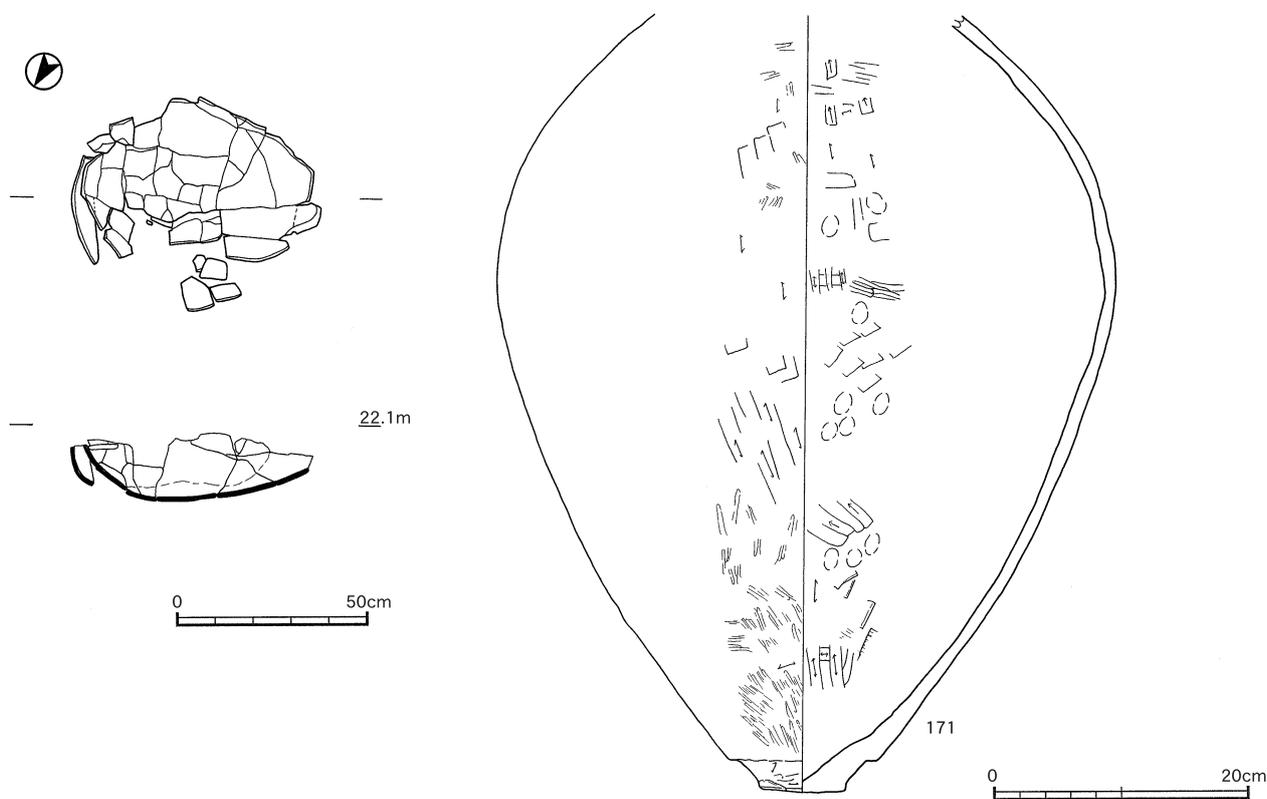
口縁部が西方向を向いているため、遺構の長軸は東西方向と思われる。

②遺物 (171)

削平を受けている影響で本体が半分欠損している。口縁部もない。また、蓋部もない。本体の壺形土器は器高約62cm、底径7cm、最大幅49.6cmを越える大型土器である。

器形は頸部から胴部にかけて、緩やかに膨らみ、胴部最大幅の所から底部にかけて逆二等辺三角形状にすぼまる。底部は一旦平坦面を呈した後、再度逆三角形状にすぼまり平底を呈すといった二段の平底状を呈す。突帯はない。

調整は外面が全体的に丁寧なナデ調整を施した後、胴部はヘラナデを、頸部と底部はミガキを施す。内面は全体的に風化の影響か調整が全体的に不明瞭であった。底部はナデ仕上げを、胴部は工具ナデを斜方向に、頸部は工具ナデを施す。粘土継ぎ目と思われる所には指頭圧痕がある。色調は、外面が浅黄橙色、内面がにぶい橙色をしている。この壺形土器の時期は難しいが古い段階のものと思われる。



第41図 12号壺棺墓

周辺遺物は第69図にある。

13) 13号壺棺墓 (第42図, 図版6, 25)

①遺構

A-10区, 9c層上面で検出された。この壺棺の両脇には器高70cm強の大型壺が壺棺をはさむように対にあり, 斜位に立った状態で検出された。これら対の大型壺の底部付近には鉢形土器や高环形土器が, 壺を支えるかのように検出された。

土坑は長軸が東西方向を向き, 長径1m, 短径0.9m, 深さ0.3mの楕円形状を呈し, 本遺跡の壺棺の中では最大級のものである。

壺棺は, 長さ80cm, 最大径49cmで水平に置かれていた。口縁部が打ち欠かれ, その上に壺形土器

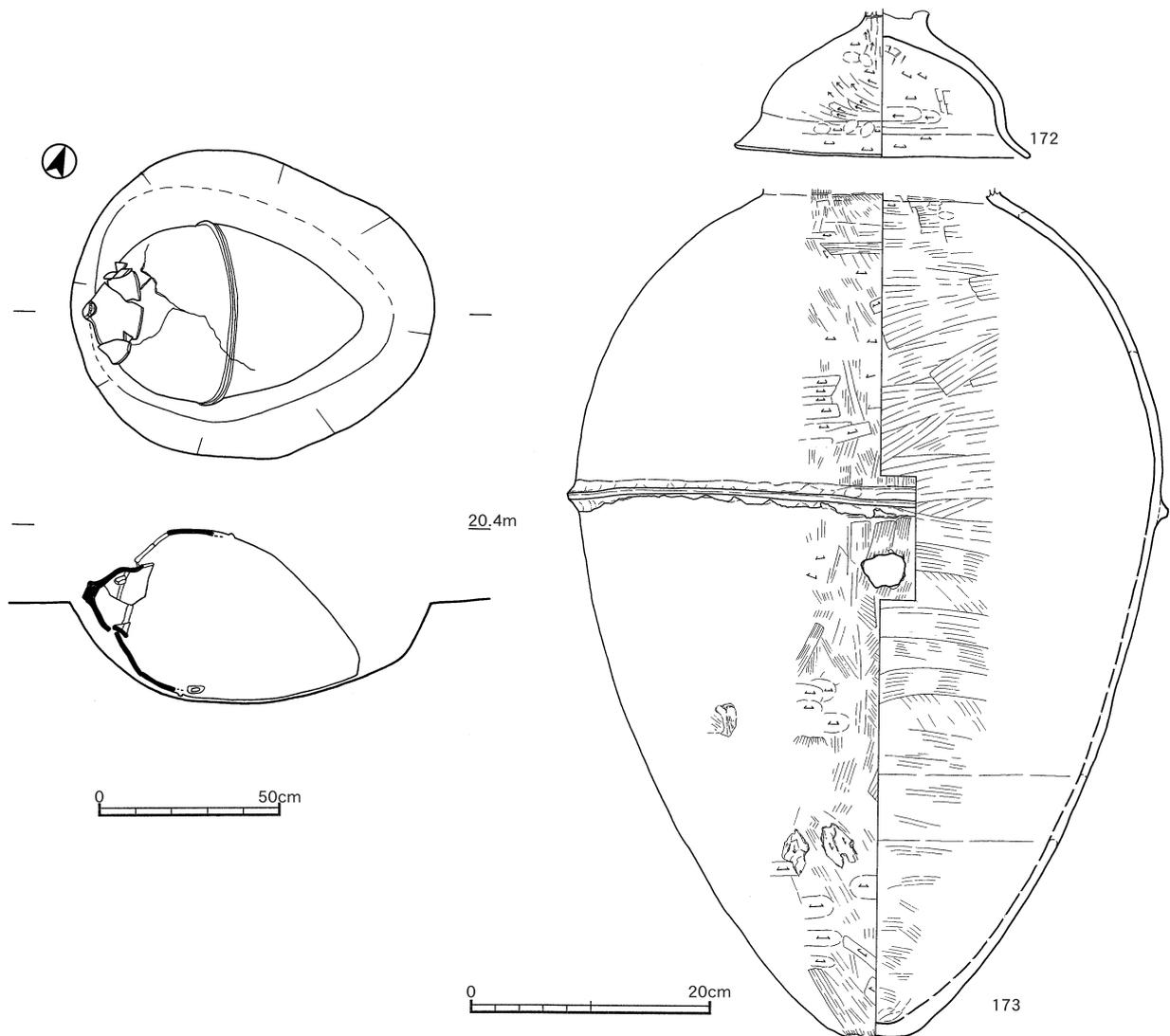
に比べると小さな高环形土器を転用した蓋が検出された。胴上半部にM字状突帯が一条貼付けてある。壺形土器内部には2/3程度が入り込んでおり, 人骨は検出されなかった。

②遺物 (172・173)

高环形土器を転用した蓋と大型の壺形土器の組合せである。

壺形土器 (173) は器高71.8cm, 底径5cm, 最大径51cmの壺棺の中でも大型の土器である。口縁部は打ち欠かれ欠損しているが, 頸部から胴部の突帯まで緩やかに膨らみ, 底部にかけ逆二等辺三角形にすぼまる。長胴形で底部は平底である。

胴部中央よりやや上に断面台形状の突帯が一条巡る。ほぼ胴部中央に穿孔がある。調整は外面が



第42図 13号壺棺墓

刷毛目調整を施した後、所々へうあるいは指ナデを施す。内面は刷毛目調整である。

胴部の内面下部に黒ズミのようなものが観察できるが、何を意味するかは不明である。

次に蓋(172)は高坏形土器の口縁を壺本体の口縁に合わせるようにして使用されていた。大型の壺に対し、かなり小さな蓋である。器高は12.2cm、口径25cmである。器形は、脚部を欠損しており坏部のみだが、付け根から鉢状に外へ大きく開き、一担上に伸びそして急に外反するが、稜は明瞭でなく緩やかに屈曲する。口唇部は丸味を帯びる。

全体的にナデ調整を施す。蓋・壺形土器の器形等から東原式土器該当と思われる。

周辺遺物は第70図である。

14) 14号壺棺墓(第43図, 図版23)

①遺構

C-9・10区, 9c層上面で検出された。この遺構検出上面(9b層)では壺などが多く検出され、これらの遺物の下層から検出されている。ま

た、立石21も近くで検出された。

土坑は長軸が東西方向を向き、直径約0.6m、深さ0.3mのほぼ円形状の掘り込みを呈している。

壺棺は器高43cm、最大径38cmで、口縁部が壺棺本体の横で検出された。一条の刻目突帯を施し、中には土が充填しており、人骨は検出されなかった。

②遺物(174)

本体の壺のみである。器高56.5cm、底径4.5cm、最大径37.5cmである。

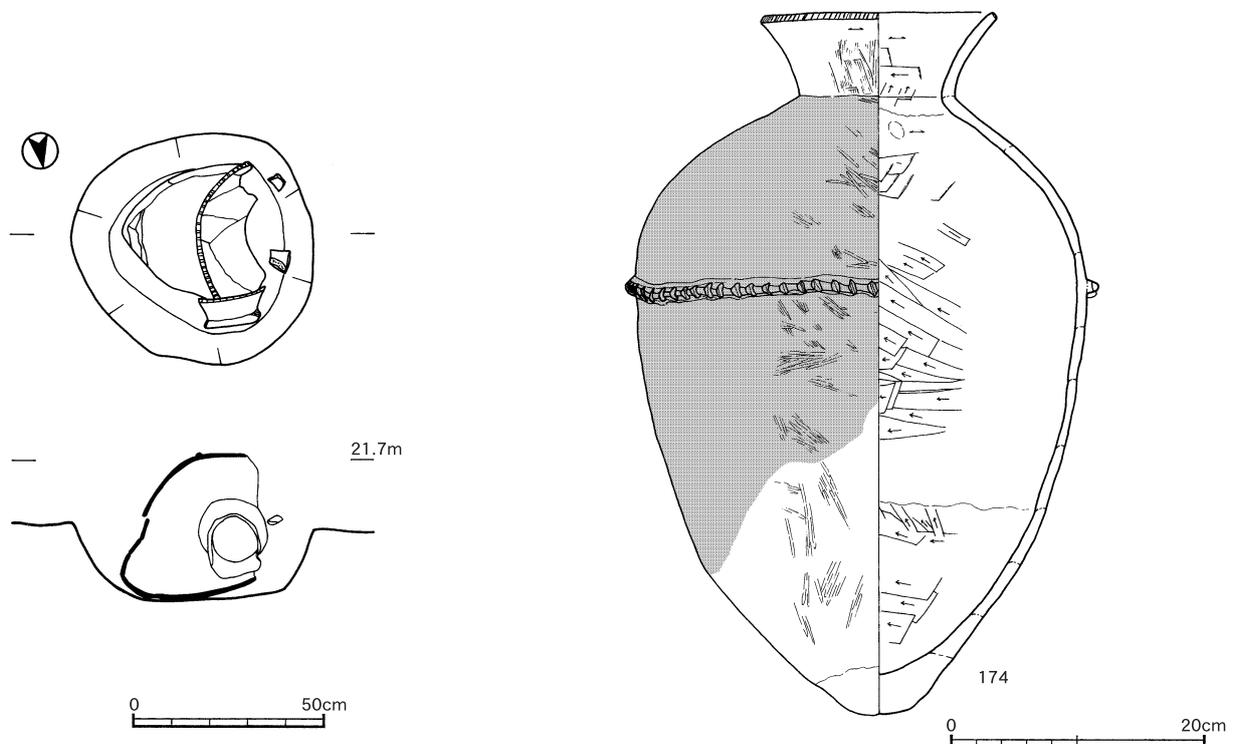
器形は、肩部から口縁部にかけて一部欠損し不明であるが、全体的に卵形を呈し、底部は平底である。

突帯は、胴部の最大径の部分に一条の刻目突帯を巡す。穿孔はない。

調整は、外面が非常に不明瞭であるが、刷毛目調整を施し、内面は工具ナデを斜位に施す。

突帯上部から左側の底部付近まで丹塗り痕が観察できる。器形等から中津野式土器該当の壺形土器と思われる。

周辺遺物は第71図である。



第43図 14号壺棺墓

15) 15号壺棺墓 (第44図, 図版6, 25)

①遺構

14号壺棺墓より南西方向に隣接した, C-9区, 9c層上面で検出された。上層の遺物出土状況は14号壺棺墓同様である。

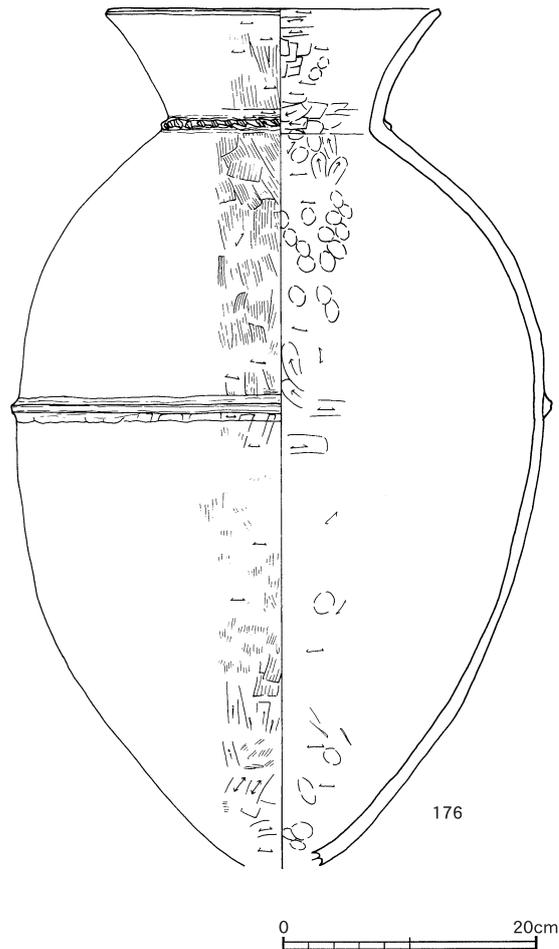
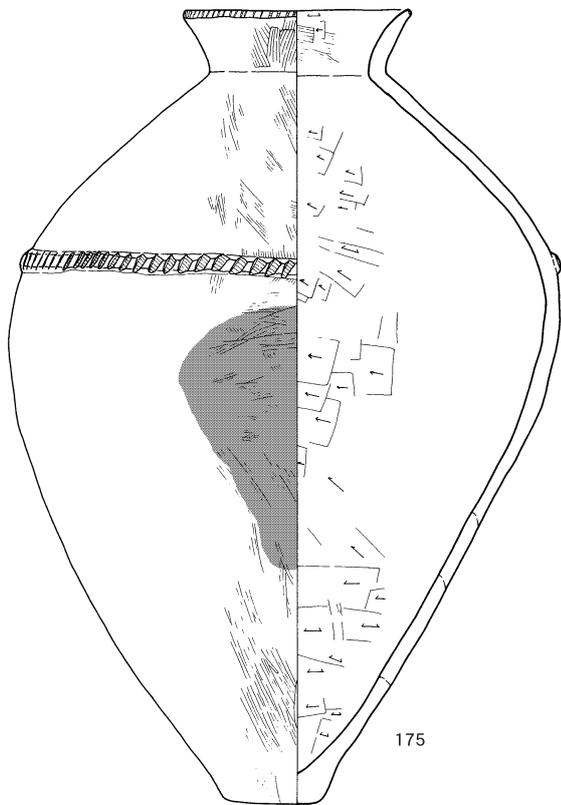
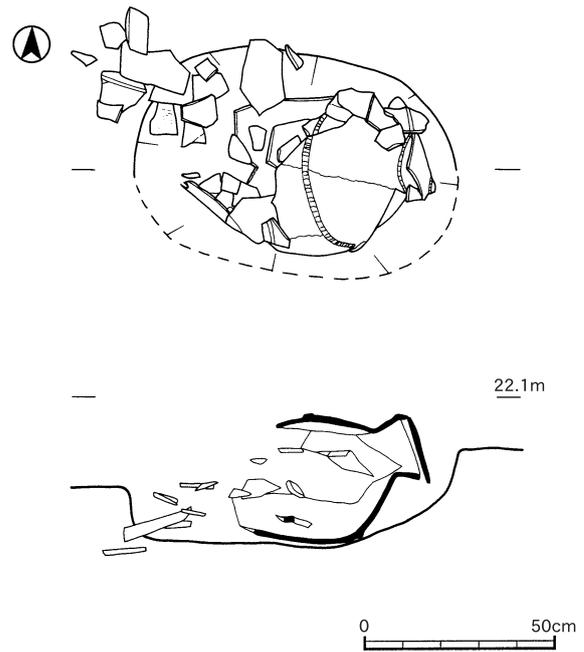
土坑は, 長軸が東西方向を向き, 長径0.9m, 短径0.6m, 深さ0.3mの楕円形状を呈する。

壺棺本体は早い時期に壊れた状況で内部に土器片があると共に, 蓋に用いられたと思われる別個体の壺形土器の破片が入り込んでいた。この壺は, 貝殻押圧突帯文を呈しており, 特異な土器の組み合わせである。

壺棺は, 器高53cm, 最大径37cmで, 一条の刻目突帯文を呈している。口縁部は残存し, 口縁を斜位上位に置かれてあった。中は土が半分ほど入りこみ, 人骨は検出されなかった。

②遺物 (175・176)

175の本体の壺形土器は, 口縁部が短く, くの字状に外反し, 口唇部は平坦面をなし, 刻目を施



第44図 15号壺棺墓

す。胴部器形はなで肩で丸味のある菱形凧の形状をなし平底を呈す。肩部下位に一条の刻目突帯を施す。176の壺形土器は、本体の底部付近で検出されたもので、口縁部はやや長く外反し、口唇部はM字状をなす。胴部器形はなで肩で逆卵形を呈す。底部は欠損しており形状は不明である。頸部には一条の刻目突帯を、胴部中央に一条の台形状の突帯を施す。両者とも中津野式土器段階の遺物と思われる。

周辺遺物は第72図である。

16) 16号壺棺墓 (第45図, 図版24)

①遺構

D-8区, 9c層上面で、本遺跡最大級の立石1及び、絵画土器等が集中した9b層下層で検出された。

壺棺は器高71cm, 最大径52cmで、口縁部は残存し、ほぼ水平に平置き状で検出された。一条刻目突帯を呈し、上面は圧力で壊れている状況であり、中に半分土が入り込んでいることから、しばらく

後に壊れたことが推測できる。人骨は検出されなかった。

土坑は、他と異なり、長軸方向が南北方向を向いている。長径0.7m, 短径0.5m, 深さ約0.3mの楕円形状を呈している。

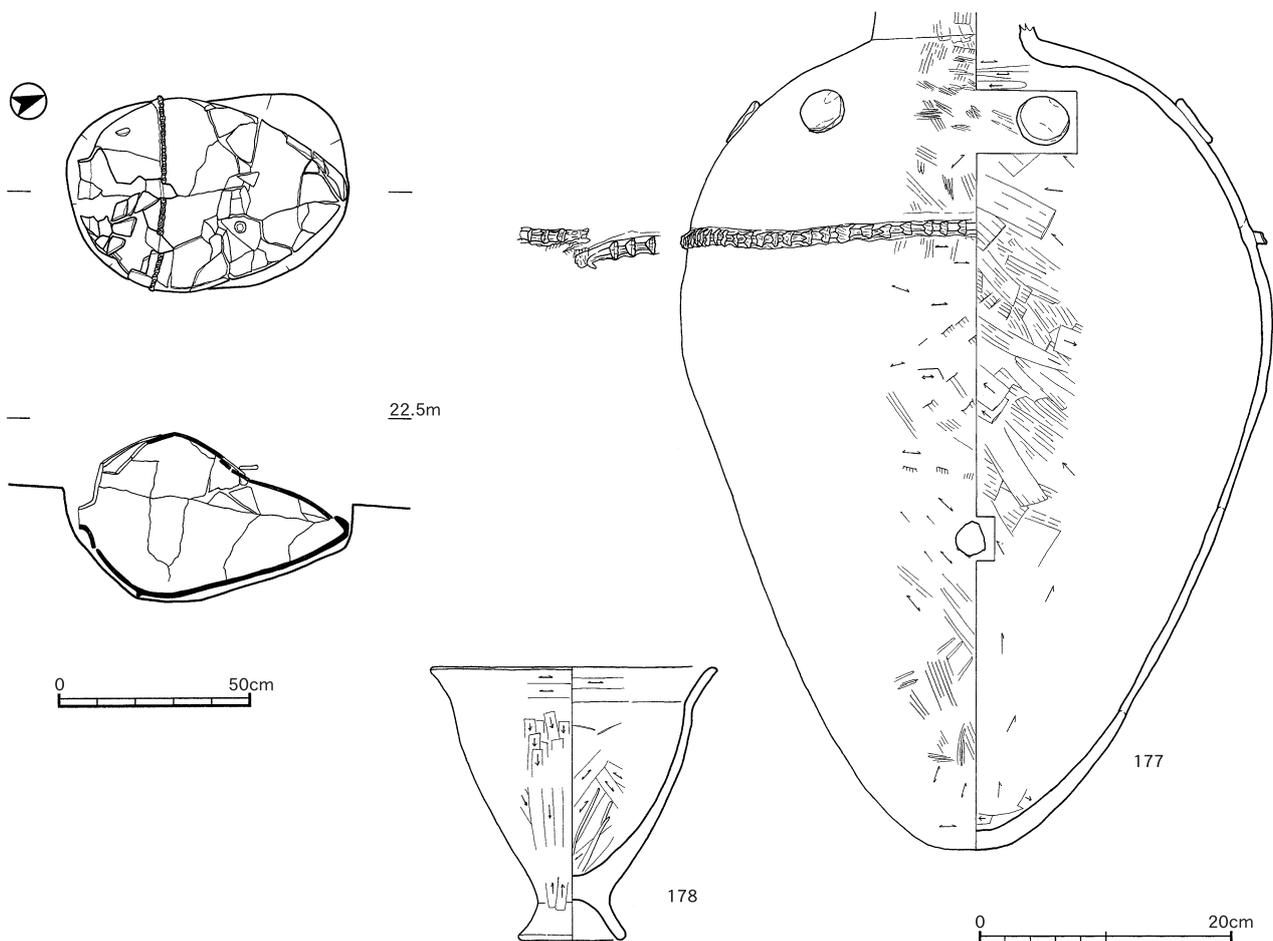
②遺物 (177・178)

本体の口縁部は打ち欠かれており不明である。壺形土器の器高は約67cm, 底径約6cm, 最大幅約47cmである。

器形は、肩が張り胴部上方で膨らみ、底部にかけ逆二等辺三角形状にすぼまる。肩部に近いところに一条の刻目突帯を施す。この突帯も連結せず左下互い違いに切れている。また肩部には対の円形浮文が4ヶ所にある。胴部下方には穿孔を施す。調整は、全体的に不明瞭であるが、刷毛目調整を施す。

この遺物は、中津野式土器でも古い段階の遺物と考えられる。

周辺遺物は第73図～第75図である。



第45図 16号壺棺墓

17) 1号甕棺墓 (第46図, 図版6, 25)

①遺構

C-8区, 9c層上面で検出された本遺跡唯一の甕棺墓である。周辺には1号, 2号壺棺が隣接し, 密集した状況で検出された。土坑は, 長軸方向が東西方向を向き, 長径0.9m, 短径0.7mの楕円形状を呈する。

甕棺は, 器高78cm, 最大径34cmで, 口縁を斜位上向に向け, 口縁には, 小型の壺形土器を蓋に転用した状況で, 口縁に胴部を合わせていた。蓋は上面が欠け, 中には土が充填しており, 人骨は検出できなかった。

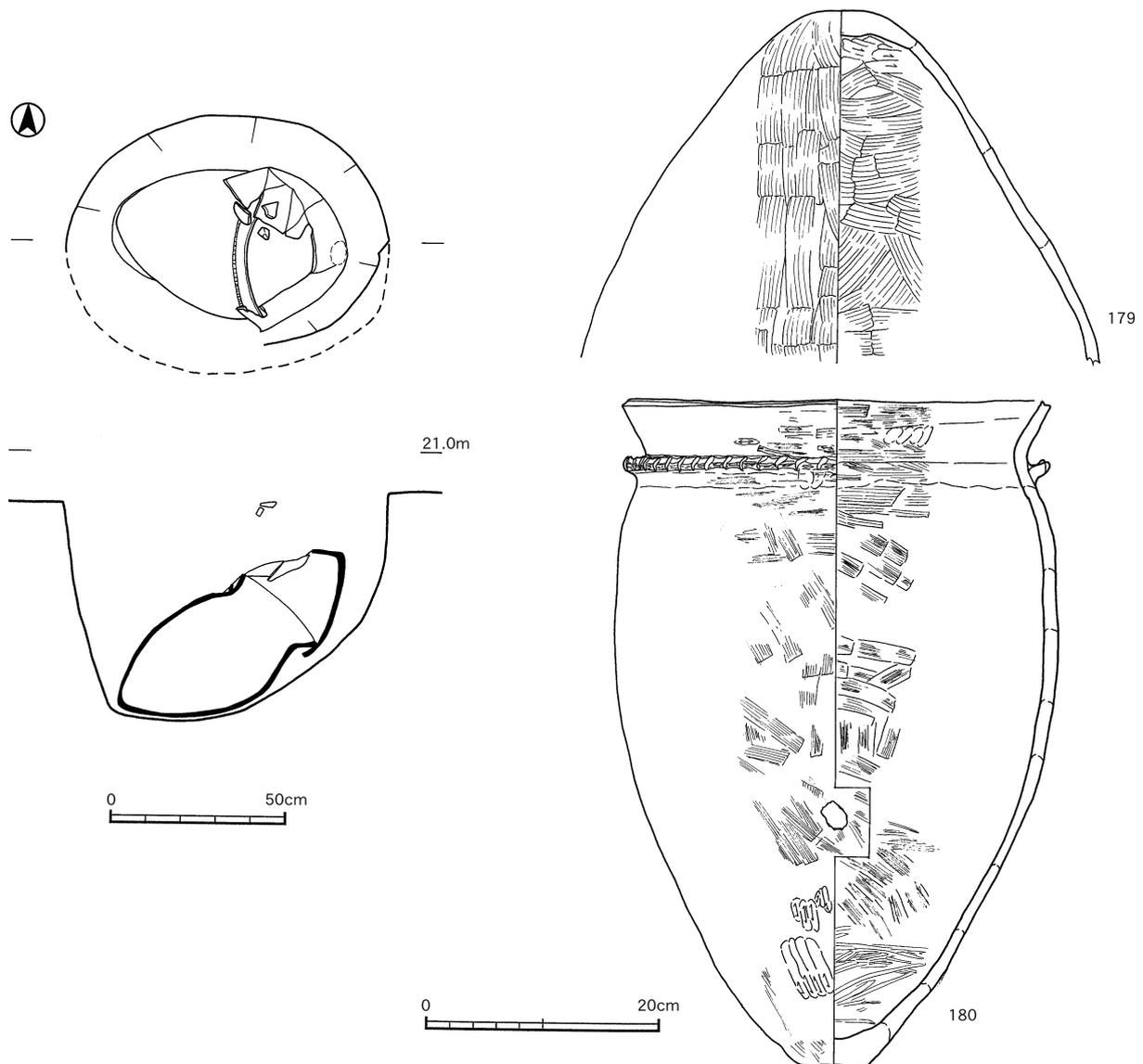
②遺物 (179・180)

本体の甕形土器 (180) では, 器高57.5cm, 口

径35.8cm, 底径5.6cmである。器形は, 胴部から頸部にかけて緩やかに内傾し, 頸部から口唇にかけて直線状に緩やかに外反する。口唇部はM字状を呈す。頸部から胴部にかけて, 緩やかに膨らみ, 底部にかけて長胴形状に緩やかにすぼむ。突帯は, 頸部に一条の刻目突帯が巡り, 胴部下位に穿孔を施す。調整は, 内外面ともに刷毛目が中心である。内面底部にはミガキが観察できる。

蓋形土器 (179) は, 壺形土器の底部である。全体的に丁寧な刷毛目調整を行っている。

これらの器形等から, 中津野式土器の古い段階に該当すると思われるが, 中津野式土器特有の脚台はない。



第46図 1号甕棺墓

第10表 壺棺墓・甕棺墓遺構観察表

挿図No	棺墓種	検出区	軸方向	土坑部				記載No	土器棺部									
				掘込有無	最大長(cm)	最小長(cm)	深さ(cm)		本体		蓋		副葬品	人骨		備考		
									器種	置き方	有無	形状		有無	内容			
30	壺棺墓	1	C	8	EW	○	85.0	+50.0	25.0	151・152・153	壺	口縁上部斜位	○	高坏転用	×	×		立石14
31		2	C	8	EW	○	73.0	+60.0	43.0	154・155	壺	口縁上部斜位	○	高坏転用	×	○	頭蓋骨片	
32		3	B	8	WE	△	64.0	+60.0	11.0	156	壺	口縁上部斜位	×	×	×	×		
33		4	C	8	WE	○	70.0		54.0	157	壺	横平置き	×	×	×	○	歯	立石4
34		5	A	8	WE	○	+75.0		66.0	158・159	壺	口縁上部斜位	○	壺型土器転用	×	×		立石12
35		6	B	8	EW	○	64.0	+53.0	30.0	160	壺	底部上位斜位	△	×	×	×	×	立石16
36		7	C	9	WE	○	86.0		66.0	161・162	壺	横平置き	○	高坏転用	×	×		
37		8	A	910	WE	○	95.0		85.0	163・164	壺	口縁上部斜位	○	壺型土器転用	×	×		立石19, 立石20
38		9	B	9	WE	○	80.0		60.0	165・166	壺	口縁上部斜位	○	壺型土器転用	×	×		立石15
39		10	A	8	WE	○	68.0		55.0	167・168	壺	口縁上部斜位	○	高坏転用	×	×		立石9
40		11	A	7	WE	○	78.0		65.0	169・170	壺	口縁上部斜位	○	壺型土器転用	×	×		立石13, 立石18, 立石25
41		12	C	11	WE	×				171	壺	横平置き	○	壺型土器転用	×	×		
42		13	A	10	WE	○	101.0		87.0	172・173	壺	横平置き	○	高坏転用	×	×		大型壺2個体にはさまれる
43		14	C	910	WE	○	65.0		63.0	174	壺	口縁上部斜位	×	×	×	×		立石21
44		15	C	9	EW	○	86.0	+63.0	25.0	175・176	壺	口縁上部斜位	○	壺型土器転用(貝殻押圧突帯文)	×	×		
45		16	D	8	SN	○	73.0		52.0	177・178	壺	口縁上部斜位	×	×	×	×		立石1
46	甕棺墓	1	C	8	EW	○	93.0	+75.0	64.0	179・180	甕	口縁上部斜位	○	甕	×	×		

第11表 壺棺墓・甕棺墓土器観察表

挿図No	掲載No	棺墓No	分類	大きさ (cm)				出土区	層	調整		色調				胎土		文様		穿孔有無	口縁有無	備考			
				大	中	小	器高			口径	底径	最大径	外面	内面	外面	内面	ベンガラ有無	金運母有無	その他				突帯	その他	
																			長石						角閃石
30	151	壺棺1	I D	12.0	35.5	7.3	35.5	C8	9c	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	ナデ, ケズリ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	-	-	-	-	-	-			
30	152	壺棺1	I A	a			27.6	C8	9b	ナデ, ナデ後ハケメ	ハケメ, 指頭圧痕	黄橙	黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯	-	-	-	-	-			
30	153	壺棺1	I A	a	72.3	26.6	4.7	46.4	C8	9c	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	ハケメ	赤橙	赤橙	○	-	長石, 角閃石, 輝石	一条突帯	-	-	○	M状口縁, 黒斑			
31	154	壺棺2	I D		17.1	34.0	-	34.5	C8	9c	工具ナデ, ミガキ	ナデ	黄橙	にぶい黄褐	-	-	長石, 角閃石, 雲母	-	-	-	-	-			
31	155	壺棺2	I A	a	64.0	-	11.0	44.7	C8	9c	ナデ, ハケメ状ナデ, ミガキ	ナデ (剥離多い)	明黄橙	黄褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 雲母	一条刻目	-	-	○	絵画(肩部)			
32	156	壺棺3	I A	a	60.0	-	11.0	46.3	B8	9c	ナデ, ハケメ	ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	黄橙	明黄褐	-	-	長石, 角閃石	一条刻目突帯	-	-	○	底部棒状圧痕, ミガキあり, 絵画肩部に3本線有			
33	157	壺棺4	I A	a	58.0	-	6.0	41.0	B7	9c	ヘラナデ, ハケメ	ヘラナデ	灰褐	灰褐	-	-	長石, 角閃石	一条突帯	-	-	○	-			
34	158	壺棺5	II A	b +	64.0	-	5.5	45.5	A8	9c	工具ナデ, ミガキ	ナデ, 指頭圧痕	橙	明赤褐	-	○	雲母, 赤色粒子	線刻	-	-	-	内部剥落, P420と接合溝まき状の文様			
34	159	壺棺5	II A	a +	65.5	-	3.5	45.5	A8	9c	ナデ, 工具ナデ, ハケメ	ハケメ後ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	明黄褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 雲母	-	線刻	○	内部穿孔より上部黄変色, 人骨痕?				
35	160	壺棺6	I A	a +	52.3	-	9.5	43.3	A9	9c	工具ナデ, ハケメ	工具ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	黄橙	暗赤褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯	-	-	-	内部剥落			
35	161	壺棺7	I C		11.0	28.0	4.0	28.0	C9	9	工具ナデ, ハケメ	工具ナデ	赤褐	にぶい黄褐	-	○	雲母, 輝石	-	-	-	-	-			
36	162	壺棺7	I A	b	66.0	24.0	4.0	44.5	C8	9c	工具ナデ, 指ナデ, 工具ナデ後ミガキ	工具ナデ, 指頭圧痕	にぶい赤褐	赤褐	-	-	長石, 角閃石	-	-	-	2	○ 全体的に丹塗か?			
36	163	壺棺8	II A	a	-	-	-	38.0	A10	9b	ナデ, ハケメ	ハケメ後ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯	-	-	-	-			
37	164	壺棺8	II A	a	60.5	22.7	6.5	39.2	A10	9b	ナデ, 工具ナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	突帯上明褐 突帯下黒褐	淡橙	-	-	長石, 角閃石	一条突帯	肩部に線刻	-	○	沈線文(絵画か?)が肩部を同じように環る			
38	165	壺棺9	I A	b +	42.0	-	6.0	34.0	B9	9c	工具ナデ, ミガキ, 指頭圧痕	工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	明橙	橙	-	○	長石, 角閃石, 雲母	-	-	○	絵画				
38	166	壺棺9	I A	a	69.7	20.4	5.0	48.5	B9	9c	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, ミガキ, ミガキ後ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	明黄橙	暗赤橙一部 明赤橙	-	-	長石, 角閃石	一条刻目突帯	-	-	○	-			
39	167	壺棺10	I D		15.7	27.0	-	27.0	A9	9c	工具ナデ, ミガキ後ナデ	ナデ, ミガキ後ナデ	にぶい橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	-	-	-	-	-			
39	168	壺棺10	I A	b +	41.0	-	3.5	29.5	A10	9	工具ナデ	工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい橙	-	-	長石	-	肩部に線刻あり	○	-	-			
40	169	壺棺11	I A	b +	39.6	-	3.4	30.8	A8	9	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	-	○	長石, 角閃石, 輝石, 雲母	-	-	-	-	-			
40	170	壺棺11	I A	a +	53.0	-	8.0	43.0	A8	9c	工具ナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	明黄褐	暗赤褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯	浮文4ヶ所	○	-	黒色研磨			
41	171	壺棺12	I A	b +	62.2	-	7.0	49.6	C10	9b	ミガキ, ミガキ後ナデ	工具ナデ, ハケメ後ナデ, 指頭圧痕	浅黄橙	にぶい橙	-	○	長石, 角閃石, 輝石, 雲母	-	-	-	-	-			
41	172	壺棺13	II D		12.2	25.0	-	25.0	A10	9c	ケズリ後ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	-	-	-	-	-			
42	173	壺棺13	II A	a	71.8	-	5.0	51.0	A10	9c	ナデ, 指ナデ, ハケメ	ハケメ	上明黄褐 下にぶい赤褐	明黄褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条突帯	-	-	-	-			
43	174	壺棺14	I A	a	56.5	18.7	4.5	37.5	C10	9	工具ナデ, ハケメ, ハケメ後ミガキ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	明褐	明橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯	-	-	○	突帯上部丹塗, すす黒色研磨			
44	175	壺棺15	I A	a	63.3	18.1	7.3	43.9	C9	9b	ハケメ後ミガキ	ナデ, 工具ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目	口唇部にも刻目	-	○	黒斑			
44	176	壺棺15	I A	a +	68.5	26.9	-	43.2	C9・10	9b	ナデ, 工具ナデ, ハケメ後ナデ, ミガキ	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	にぶい赤褐	にぶい橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 赤色粒子	一条突帯	頸部に一条刻目	-	○	黒斑, 部分的に丹あり			
45	177	壺棺16	I A	a	67.0	-	6.0	47.0	D8	9c	ナデ, ハケメ後ナデ, ミガキ, ケズリ後ナデ	ナデ, ハケメ	にぶい橙	赤橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目	浮文	○	-	-			
45	178	壺棺16	I B		21.5	23.0	8.5	23.0	D8	9c	ナデ, 工具ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	-	-	-	-	-			
45	179	甕棺1	I A		-	-	4.0	-	B8	9c	ハケメ	ハケメ	黄褐	明褐	-	-	長石, 輝石	-	-	-	-	-			
46	180	甕棺1	I B		57.5	35.8	5.6	38.1	B8	9c	工具ナデ, 指ナデ, ヘラナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ, ハケメ, ミガキ, 指頭圧痕	灰褐	灰褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 石英	-	-	-	-	○ 黒斑			

2 立石 (第47図, 180~203)

(折込み「検出状況図」参照)

立石はA~D-7~11区で25基検出された。石材は全て安山岩である。最大のもはD-8区で検出された長さ2.9m, 幅0.84m, 厚さ0.1mのものである。これらのうち, 2・9・14・15・17は斜位に立った状態で, それ以外は全て横倒し状態で検出された。

斜位に立っているものは, 9 a層もしくは青ゴラ中で検出され, 横倒しのもは, 9 b層で検出された。このことは, 少なくとも9 b層の時期に, 横倒しになったと推測される。これらの立石は, 配置状況から, 甕棺墓, 壺棺墓に伴っているのではないかと考えられる。

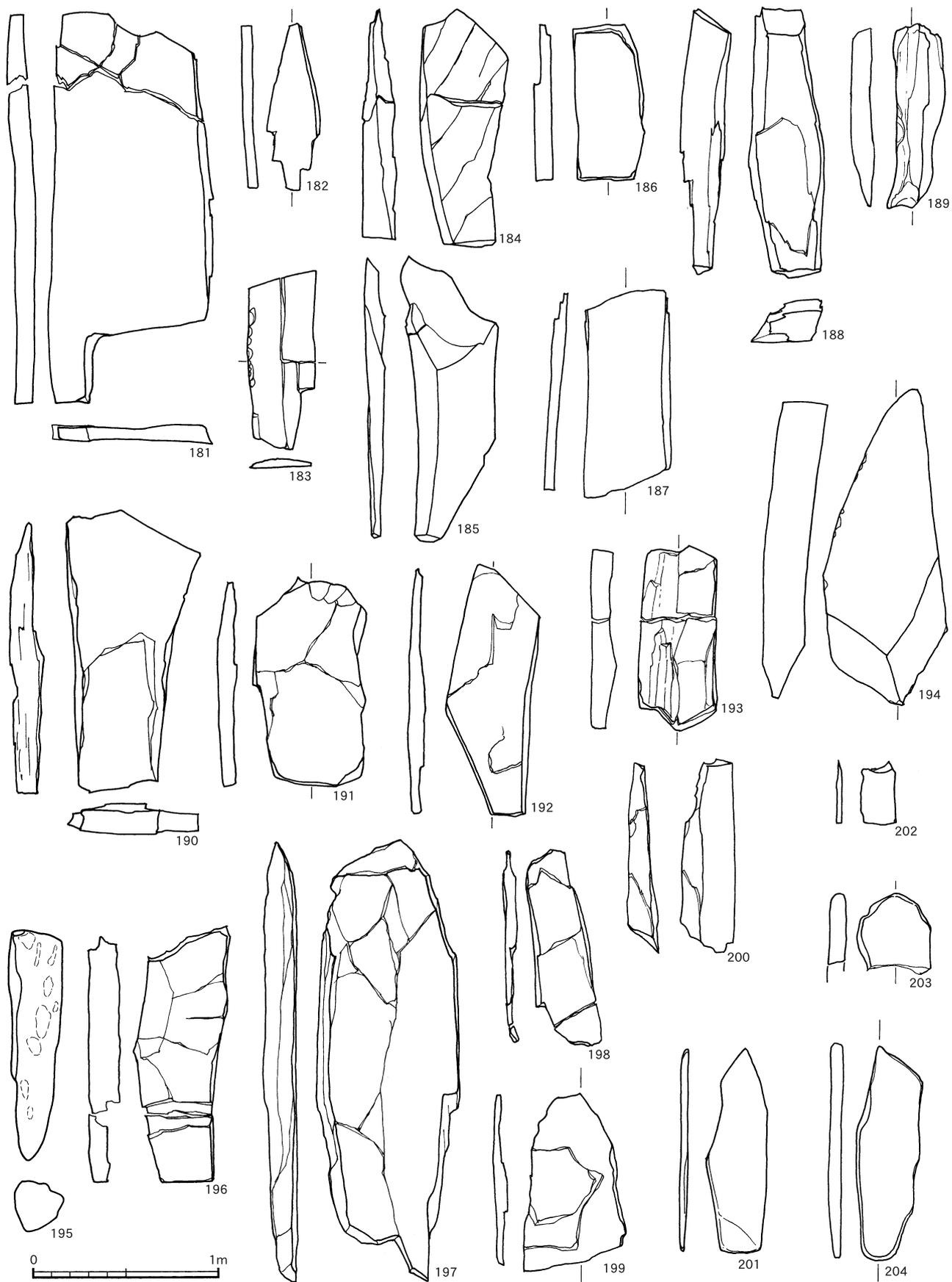
立石の出土状況から, いくつか特殊な出土状況を示すと考えられる立石を取り上げる。

まず, 立石2は青ゴラ直下で検出され, 墓標のような形をしていた。その根元には, 同じ石材の石が検出され, これらの石は立石2と完全に接合できた。同じような意味をもちそうなのは, 立石8であるが, 近くにある立石7とは接合できなかった。

次に立石13・17・18・25である。立石13・17は何らかの力が加わったのか, 折れた状態で検出された。中でも, 立石17の根元には, 完形の免田式土器が置かれた状態で検出された。これらの石材は, 接合することができたことから, もともとは, 一個体の立石であったと思われる。立石18は, 倒れた衝撃で割れた状態で検出された。そして, この下に一枚の立石が下敷きになっている状態で検出された。

第12表 立石観察表

挿図 No.	掲載 No.	名称	出土区		最大長 (m)	最小長 (m)	厚さ (m)		石材	備考
							最大幅	最小幅		
47	180	立石1	D	8	2.90	0.84	0.10	0.10	安山岩	壺棺16に伴う
	181	立石2	C	8	2.09	0.29	0.07	0.07	安山岩	
	182	立石8	B	7	0.97	0.36	0.05	0.02	安山岩	
	183	立石3	C	8	1.29	0.47	0.16	0.04	安山岩	
	184	立石10	B	8	1.56	0.51	0.10	0.03	安山岩	
	185	立石4	B	7	0.85	0.37	0.11	0.03	安山岩	壺棺4に伴う
	186	立石11	D	8	1.13	0.47	0.12	0.06	安山岩	
	187	立石5	C	8	1.47	0.41	0.23	0.09	安山岩	
	188	立石6	D	9	1.00	0.27	0.13	0.01	安山岩	
	189	立石7	B	7	1.52	0.72	0.16	0.02	安山岩	
	190	立石9	A	8	1.12	0.60	0.10	0.03	安山岩	壺棺10に伴う
	191	立石12	A	8	1.37	0.45	0.12	0.04	安山岩	壺棺5に伴う
	192	立石13	A	8	0.80	0.43	0.18	0.10	安山岩	壺棺11に伴う
	193	立石15	B	9	1.72	0.67	0.21	0.24	安山岩	壺棺9に伴う
	194	立石16	B	9	1.24	0.29	0.29	0.21	安山岩	壺棺6に伴う
	195	立石17	A	9	1.36	0.45	0.20	0.10	安山岩	
	196	立石18	A	9	2.39	0.77	0.16	0.19	安山岩	壺棺11に伴う
	197	立石19	A	9・10	1.08	0.33	0.05	0.02	安山岩	壺棺8に伴う
	198	立石20	A	9	1.14	0.59	0.10	0.40	安山岩	壺棺8に伴う
	199	立石14	C	8	1.04	0.03	0.14	0.07	安山岩	壺棺1に伴う
200	立石21	C	10	1.16	0.34	0.05	0.05	安山岩	壺棺14に伴う	
201	立石22	C	10	0.35	0.18	0.02	0.01	安山岩		
202	立石23	D	10・11	0.43	0.40	0.11	0.08	安山岩		
203	立石25	A	9	1.11	0.33	0.03	0.02	安山岩	壺棺11に伴う	
204	立石24	C	11	1.16	0.34	0.06	0.05	安山岩		



第47图 立石

3 円形周溝墓

(別添「遺構遺物検出状況図」参照)

円形周溝墓は、C～D-8・9区の黒ヶ岡の緩斜面上に集中して検出された。6号、7号及び8号円形周溝墓以外は、おそらくこの調査区地形の一番高い位置を取り巻くように弧を描くような状況で発見されている。本来ならば、壺棺墓・甕棺墓と同様、9b層からの掘り込みがあったものと考えられる。それは、主体部及び周溝部とも、9b層の黒褐色土を埋土として発見されたからである。しかしながら、9b層での遺構検出は非常に難しく、遺構造成レベルからかなり下の9c層上面の暗褐色土面で発見した。

遺構プランとして、まず、周溝部は、ほぼ円形状をなしているものの、全てが北もしくは東方向で大きく途切れており、中には数ヶ所周溝部が途切れるなど完全に周溝の掘り込みが巡らないものもある。いわゆる、陸橋部をもつ円形周溝墓がほとんどである。主体部は楕円形状を呈し、軸は東西方向を向いている。9b層での検出が難しかったため、これらの円形周溝墓が墳丘をもつものか否かは残念ながら不明である。遺構内遺物は少なく、主体部で人骨は検出されていない。

これらの遺構のうち3基は、壺棺墓に切られて検出されている状況から壺棺・甕棺墓より時期は古いと考えられる。また、いくつかの土坑墓とも切り合いを見せており、土坑墓との新旧関係が見られる。円形周溝墓同士の切り合いは見られないことから、ほぼ同時期に造成されたものと思われる。

1) 1号円形周溝墓 (第48図)

①遺構

D-8区の9c層上面、緩やかな斜面上で検出された。周溝部は、長径5.4m、短径4.7m、溝幅0.48m、溝の深さ0.21mで、北東側(海側)が大きく開く。また、南西方向では溝が互い違いの状態で見られていることから、陸橋と思われる。主体部は、長径2.2m、短径1.1m、深さ0.3mの楕円形状プランで、床面は瓢箪形を呈す。床面近くに壺形土器の底部が検出されたが、人骨は検出されなかった。軸方向は北東方向である。

②遺物 (205～208)

205・206・208は、周溝部埋土中より出土した。205・207・208は、それぞれ壺形土器の口縁部から頸部と底部である。205の壺形土器は、口縁部がくの字状に外反し、口唇部はM字状の平坦面を呈す。横ナデ後若干のミガキが入る。207・208の壺形土器は、平底を呈し、207は楕円形状の胴部、208は直線状に底部へすぼまる器形をなす。207は、外面をナデ後ミガキの調整を施す。208は、外面・内面共に刷毛目調整を施している。206は甕・鉢・高坏形土器の脚部付け根部分である。いずれも指宿地方特有の橙を基調とする色調で、在地土器と考えられる。これらの遺物は、中津野式土器段階該当と考えられる。

2) 2号円形周溝墓 (第48図)

①遺構

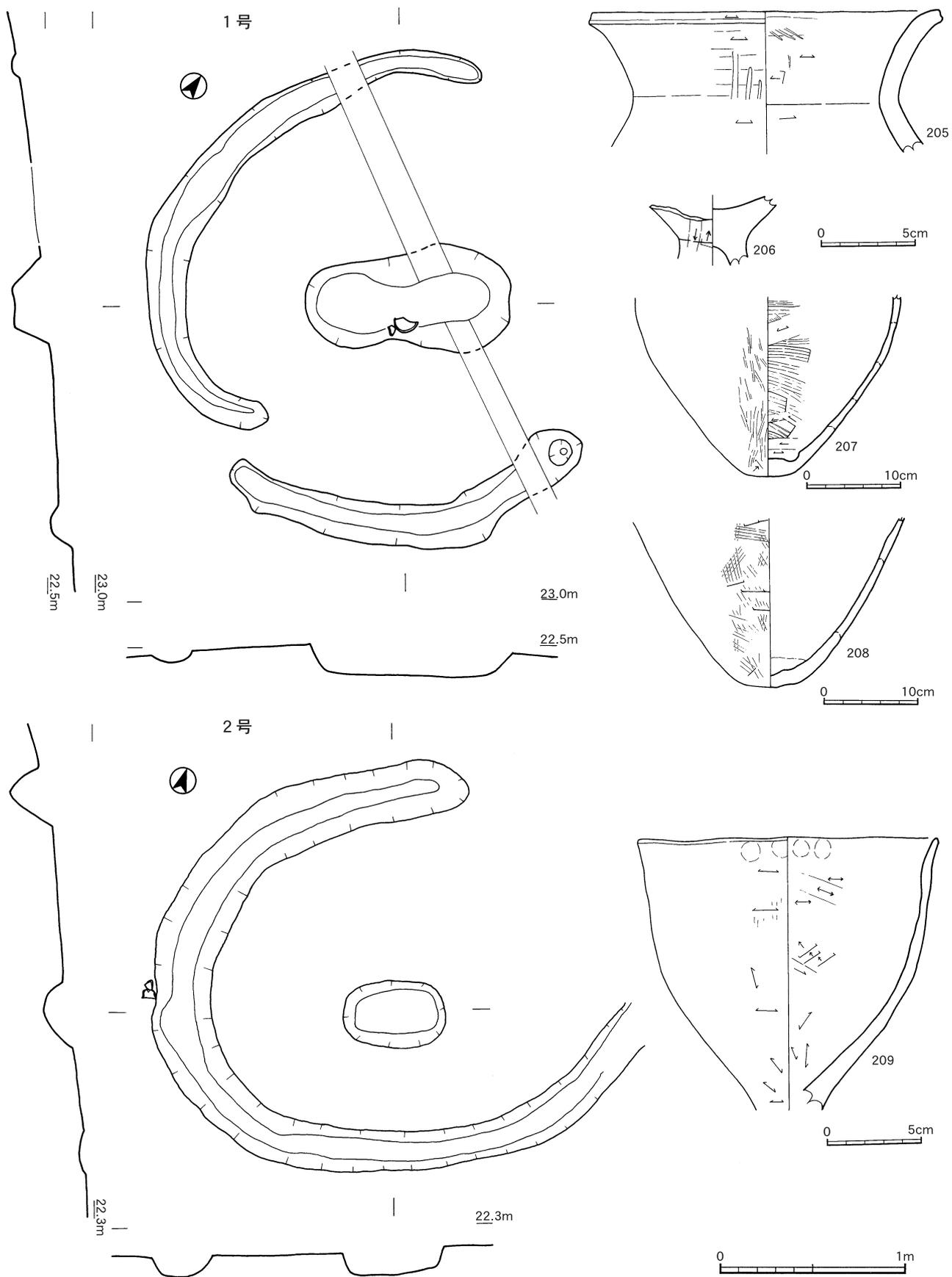
1号円形周溝墓に近いD-8・9区の9c層で検出された。埋土は主体部、周溝部とも9b層の黒褐色土である。

主体部は楕円形状を呈し、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.3mである。人骨及び遺物は検出されなかった。長軸方向は北東-南西方向を向く。

周溝は、外回りで長径5.5m、短径4.7m、周溝幅0.4m、深さ0.2mの楕円形状を呈す。北東方向は互い違いでつながっておらず、陸橋部をもつ円形周溝墓と思われる。周溝部先端は、3号円形周溝墓の周溝部と近接しているが、切り合いではなく3号円形周溝墓が2号円形周溝墓の周溝部を活用しながら造成されたのではないかと思われる。

②遺物 (209)

周溝内から脚台の欠けた甕形土器を検出した。口縁部が長く緩やかに外反し、口縁部先端でかすかに外反する。調整は外面がヘラナデ、刷毛目後ヘラナデ、指頭圧痕を施し、内面が指頭圧痕、ヘラナデ、工具ナデである。209の甕形土器は、口縁部形状から辻堂原式土器段階の遺物と考えられる。



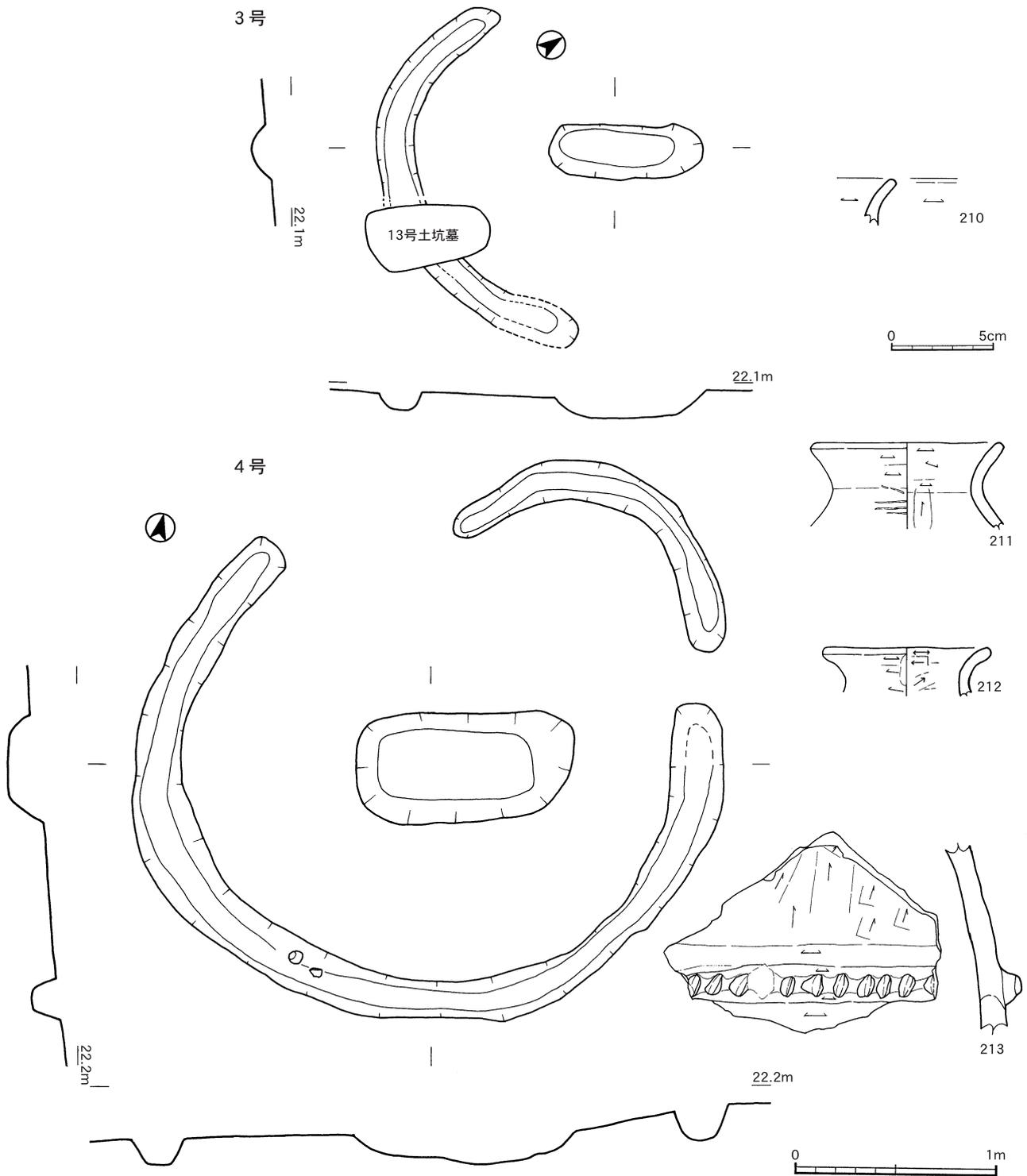
第48图 円形周溝墓(1)

3) 3号円形周溝墓 (第49図)

①遺構

第2号, 第4号円形周溝墓に隣接した所, D-9区の9c層上面で検出された。

周溝は, 長軸3.3m, 短軸3.3m, 溝幅0.3m, 深さ0.2mであるが, 他の円形周溝墓とは異なり, 三日月状を呈す。主体部は, 長径1.5m, 短径0.5m, 深さ0.25mの長楕円形を呈する。軸方向は北



第49図 円形周溝墓(2)

東-南西を向く。内部から人骨及び遺物は検出されなかった。土坑が両円形周溝墓を切っている為、この円形周溝墓は、13号土坑墓との切り合いを見せているが、13号土坑墓が3号円形周溝墓の周溝部を切っていることから、13号土坑墓の方が新しい時期と思われる。

②遺物 (210)

周溝から、甕・鉢形土器の口縁部片と思われる土器片が出土したが、全体器形等観察できなかった。

4) 4号円形周溝墓 (第49図)

①遺構

C・D-9区, 9c層で検出された。2・3・9号円形周溝墓に近接している。

主体部は、長径2.1m, 短径1.1m, 深さ0.2mの隅丸形状を呈し、軸方向は、東北東-西南西を向く。主体部からの人骨及び遺物は検出されなかった。

周溝は、長軸5.8m, 短軸3.8m, 周溝幅0.5m, 深さ0.2mあり、北方向で2ヶ所に途切れた部分があり、これは陸橋部と考えられる。本遺跡の円形周溝墓の中では大きい方である。

②遺物 (211~213)

遺物は、周溝の埋土中から出土した。211は壺形土器の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は、くの字状に外反し、口唇部は丸味を帯びる。外面調整は横ナデを基本とするが、頸部の一部にミガキが見られる。内面はナデである。212も壺形土器の口縁部である。口縁部が直線状に立ち上がり、端部で急に外反する。口唇部は丸味を帯びる。内面・外面ともナデ調整である。213は壺形土器の肩部から胴部にかけての破片である。粘土貼付による刻目突帯が一条みられる。調整はナデを施す。これらの遺物から、中津野式土器該当と思われる

5) 5号円形周溝墓 (第50図)

①遺構

B・C-8区で検出された。主体部を1号壺棺墓が、周溝部先端を1号甕棺墓が切る状態で検出

されている。

主体部の長軸が短軸とも1m, 深さ0.5mで、ほぼ円形状を呈する。主体部内で人骨・遺物は検出されなかった。軸方向は、ほぼ東西方向である。

周溝部は、長軸4.4m, 短軸3.4m, 溝幅0.5m, 深さ0.2mで、東方向が途切れており、陸橋部と思われる。周溝部では、確認トレンチでの調査を行った為、周溝及び主体部の一部が不明となってしまっている。また、1号壺棺墓及び1号甕棺墓とも切り合いを見せており、これらの状況から壺棺墓及び甕棺墓の方が時期的に新しいことが分かる。周溝部南側で周溝に沿って破碎された状態の高坏、壺形土器、鉄剣の剣先が出土しており、主体部では遺物は検出されなかった。これらの遺物が祭祀に関わるものか否かは不明であるが、興味深いところである。

②遺物 (214~216)

214は、器高46cm, 底径5.5cmの平底を呈した壺形土器で、胴部から底部と思われ、口縁部が欠けている。底部は平底を呈し、丁寧な刷毛目調整を施す。内面は剥離が激しく、調整痕が不明瞭である。なで肩で大きく膨らみをもつ逆卵形の胴部を呈する。215は、壺形土器の胴部から底部と思われ、216の高坏形土器は、肩部から緩やかに外反し、内面の稜線が明瞭である。脚部は欠損し不明である。全体的に丁寧なナデを施す。

Fe1は周溝部北側埋土中で出土された鉄剣で、基部を欠いている。長さが約15cm, 幅約2.3cm, 厚さ約0.3cmある。

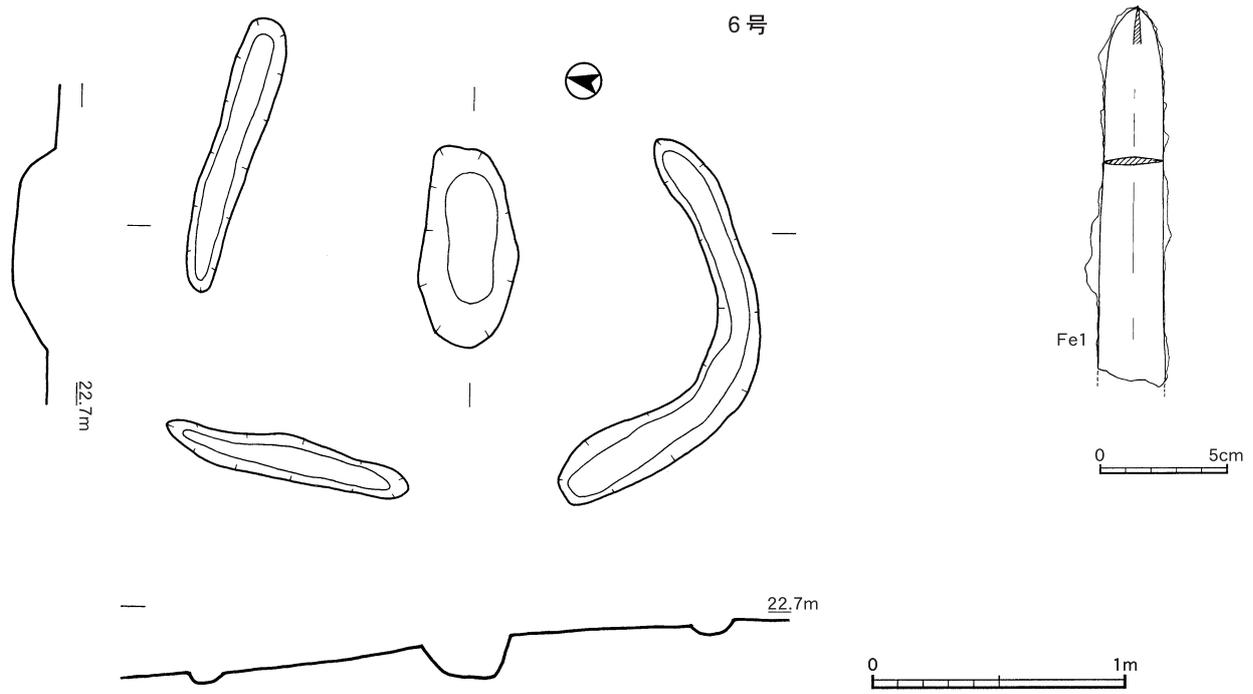
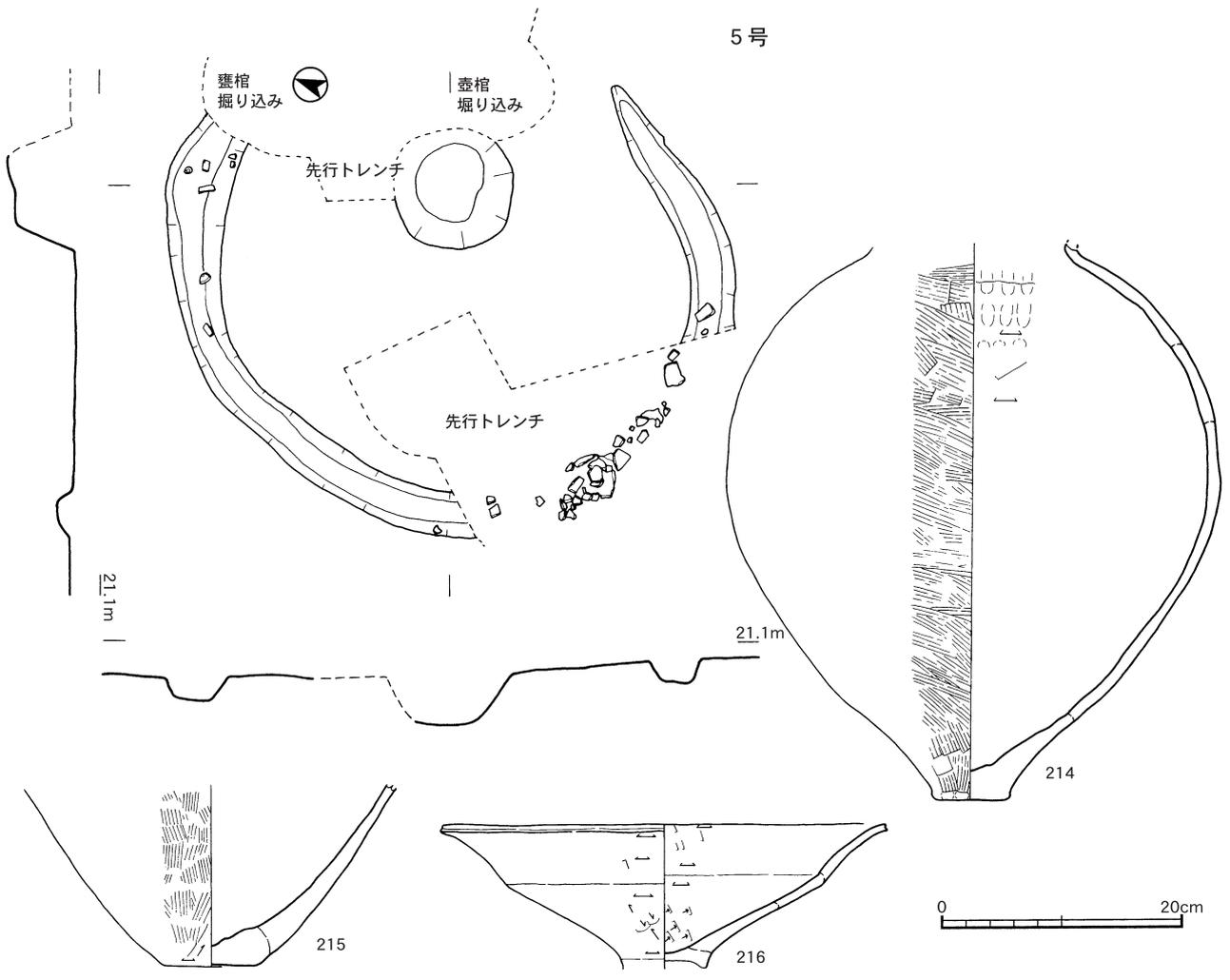
これらの遺物から、中津野式土器該当と考えられる。

6) 6号円形周溝墓 (第50図)

①遺構

C-8・9区で検出された。

周溝は、方形周溝状とも思われる形状を呈するが、南側の周溝が弧状を呈しているため円形周溝墓と判断した。南側が三日月形の溝、西・北側がほぼ直線状の溝の計3本から成り、それぞれは連結していない。これらは陸橋部と考えられる。東側は、大きく開いている形状である。長軸約4m, 短軸3m, 溝幅0.5m, 深さ0.05mである。周溝



第50図 円形周溝墓(3)

部内から遺物は出土していない。

主体部は、長径1.6m、短径0.8m、深さ0.3mの長楕円形を呈し、軸方向は、ほぼ東西方向を向く。内部から人骨・遺物等は検出されなかった。

7) 7号円形周溝墓 (第51図)

①遺構

A-9区の丘陵地の裾野に、他の円形周溝墓から約10m強離れた場所で検出された。また、8号円形周溝墓と連なる状況で検出された。切り合いは確認できなかった。

周溝部は、長径4.6m、短径3.3m、周溝幅0.4m、深さ0.2mで東側には溝がなく、西方向で途切れている。遺物は出土していない。

主体部は、長径2.2m、短径1.1m、深さ0.14mで長楕円形状を呈する。軸方向は東西方向を向いている。内部から人骨・遺物は検出されていない。

8) 8号円形周溝墓 (第51図)

①遺構

7号円形周溝墓のすぐ横A-9・10区で7号円形周溝墓と向き合うような形で検出された。双方の周溝部とは切り合っておらず、意図的にこのような形状で造成されていると思われる。

周溝部は、7号円形周溝墓の周溝部と連結しそのような状況で南側が大きく開き、東側も大きく開いている。これらは、陸橋部と思われる。長径5.6m、短径3.8m、溝幅0.5m、深さ0.2mで三本の溝が弧を描くように配置されている。周溝内から遺物は出土していない。

主体部は、長径1.7m、短径0.9m、深さ0.4mの隅丸形状を呈し、軸方向はやや北寄りの東西方向を向く。内部から、人骨・遺物とも検出されなかった。

9) 9号円形周溝墓 (第51図)

①遺構

C-9・10区の4号円形周溝墓に隣接した所で検出された。4号周溝墓とは切り合いは見られなかった。本遺跡では、一番他の遺構との切り合いを見せており、複雑な遺構である。

周溝は、長径4.8m、短径4.4m、溝幅0.5m、深さ0.2mの、北方向を大きく開いた状況で検出された。これらは陸橋部と思われる。

主体部は、長径2.1m、短径1m、深さ0.4mの楕円形状を呈する。軸方向は北東-南西方向を向く。14号壺棺墓と切り合いとなり、壺棺墓が主体部を切っている。また、南西方向には46号土坑墓があるが切り合いはなく、新旧関係は不明である。人骨は検出されなかった。

②遺物 (217~221)

主体部及び周溝から遺物が出土した。

主体部の埋土中からは、壺形土器の口縁部(217)が出土した。口縁部がくの字状に外反し、口唇部はM字状をなす。220は主体部周辺9c層で検出された壺形土器の胴部から底部である。口縁部が外反し、口唇部は丸味を帯びる。218と219は、周溝埋土中より検出された。218は鉢・高坏形土器の口縁部、219は壺形土器の口縁部と思われる。221は鉢形土器の胴部から底部にかけての土器片である。これらは、中津野式土器段階の遺物と考えられる。

10) 10号円形周溝墓 (第52図)

①遺構

D-10区の13・14層上面で検出された。この区は旧地形が丘陵地であったと考えられる。埋土は9b層である。主体部は不明であるが、溝が弧を描いていることから円形周溝墓と判断した。

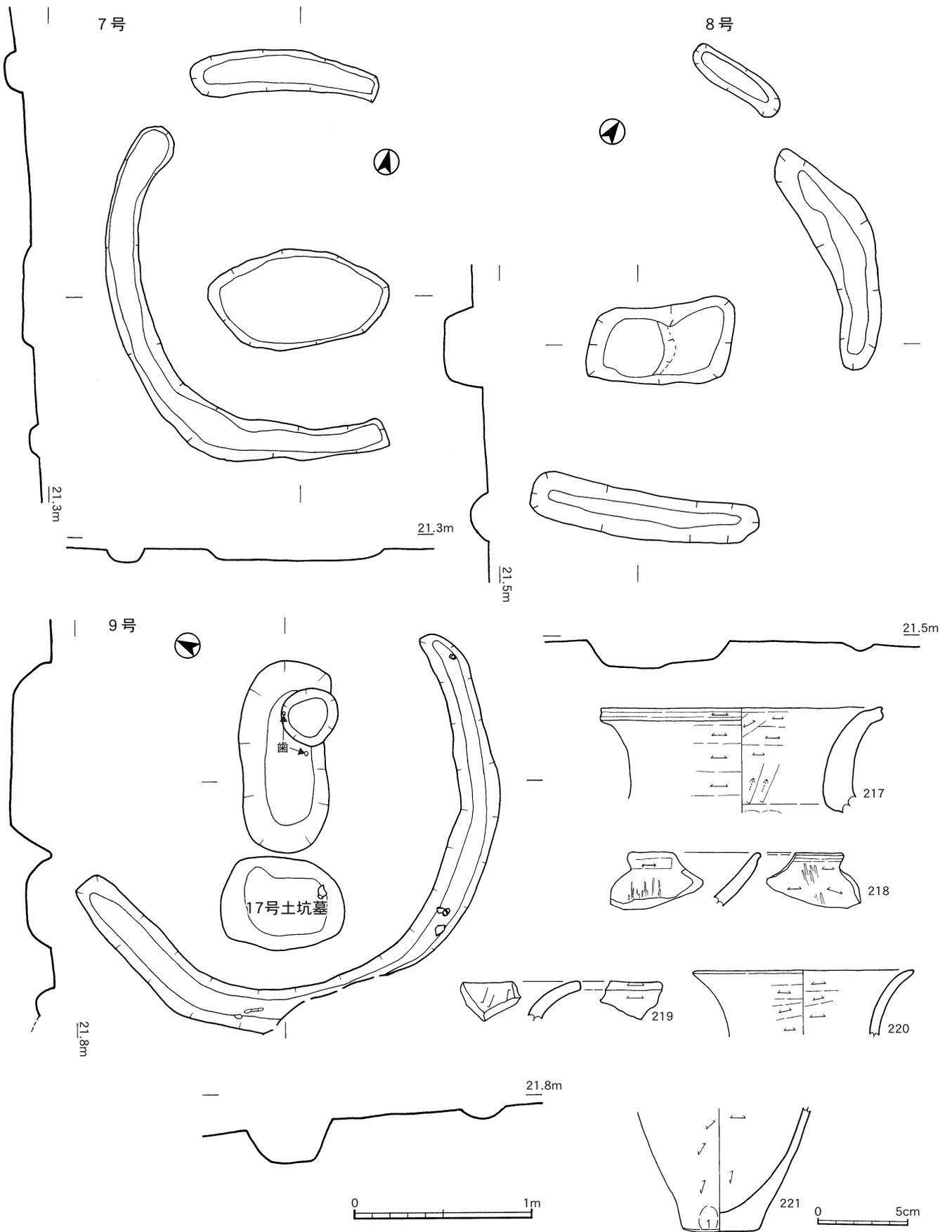
周溝部は、長軸3.2m、溝幅0.5m、深さ0.18mで三日月状を呈す。すぐ近くに土坑が見つまっているが、規模、位置等から主体部とは判断できない。

②遺物 (222)

周溝内から甕形土器の口縁から胴部(222)が出土した。口縁部はくの字形に外反し、口唇部は丸味を帯びる。口縁部は横ナデ調整、胴部外面は刷毛目、内面はヘラナデ調整である。中津野式土器段階の遺物と考えられる。

11) 11号円形周溝墓 (第52図)

①遺構



第51图 円形周溝墓(4)

C-10・11区の海側の丘陵地斜面上と考えられる所より検出された。10号と同じく、13・14層上面で9b層を埋土としている。また、確認トレンチを入れたため、半分は不明である。さらに、主体部は42号土坑墓が主体部を切っている。

主体部は、長軸1.1m、深さ0.3mである。形状は不明である。人骨・遺物は検出されなかった。

周溝は、長軸4m、短軸3m、溝幅0.4m、深さ0.08mの三日月状を呈す。おそらく、この孤状の溝がそれぞれ終結している為、東西方向で周溝が切れていると思われる。遺物は出土していない。

12) 12号円形周溝墓 (第52図)

①遺構

B・C-11区の海側、調査区壁際で検出された。

周溝部は、長軸2.6m、短軸2.3m、溝幅0.3m、深さ0.2mで三日月状を呈している。他の周溝は、確認トレンチ及び調査区外ににあたり、不明である。

主体部は、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.2mの楕円形状を呈す。長軸方向は東西である。人骨・遺物は検出されなかった。

②遺物 (223~225)

周溝の埋土中より検出された223は壺形土器の口縁部、224は鉢形土器の口縁部である。223は緩やかに外反し、口唇部は角ばった形をしている。224は緩やかに外反し、口唇部は三角形状を呈す。いずれもナデ調整を施す。225は埴形土器の胴部

から口縁部である。頸部から口縁部まで、ほぼ一直線上に長く広がる。全般的にナデ調整を施す。

225は、東原式土器段階該当遺物と考えられる。

4 溝状遺構

本遺跡においては、1基のみの検出である。D-9区の丘側の調査区と調査区外の際で検出された。攪乱の及ばない9c層で検出され、9b層を埋土とする。この周辺には大型土器(第64図、247)が直立した状態で検出されている。また、547、剣製品等が検出されている。検出状況から調査区外に延びていることもあり、明確に円形周溝墓と判断できないため、溝状遺構として取り扱った。

①遺構

長径2m、幅0.5m、深さ0.2mの三日月状を呈する。軸は南北方向にある。

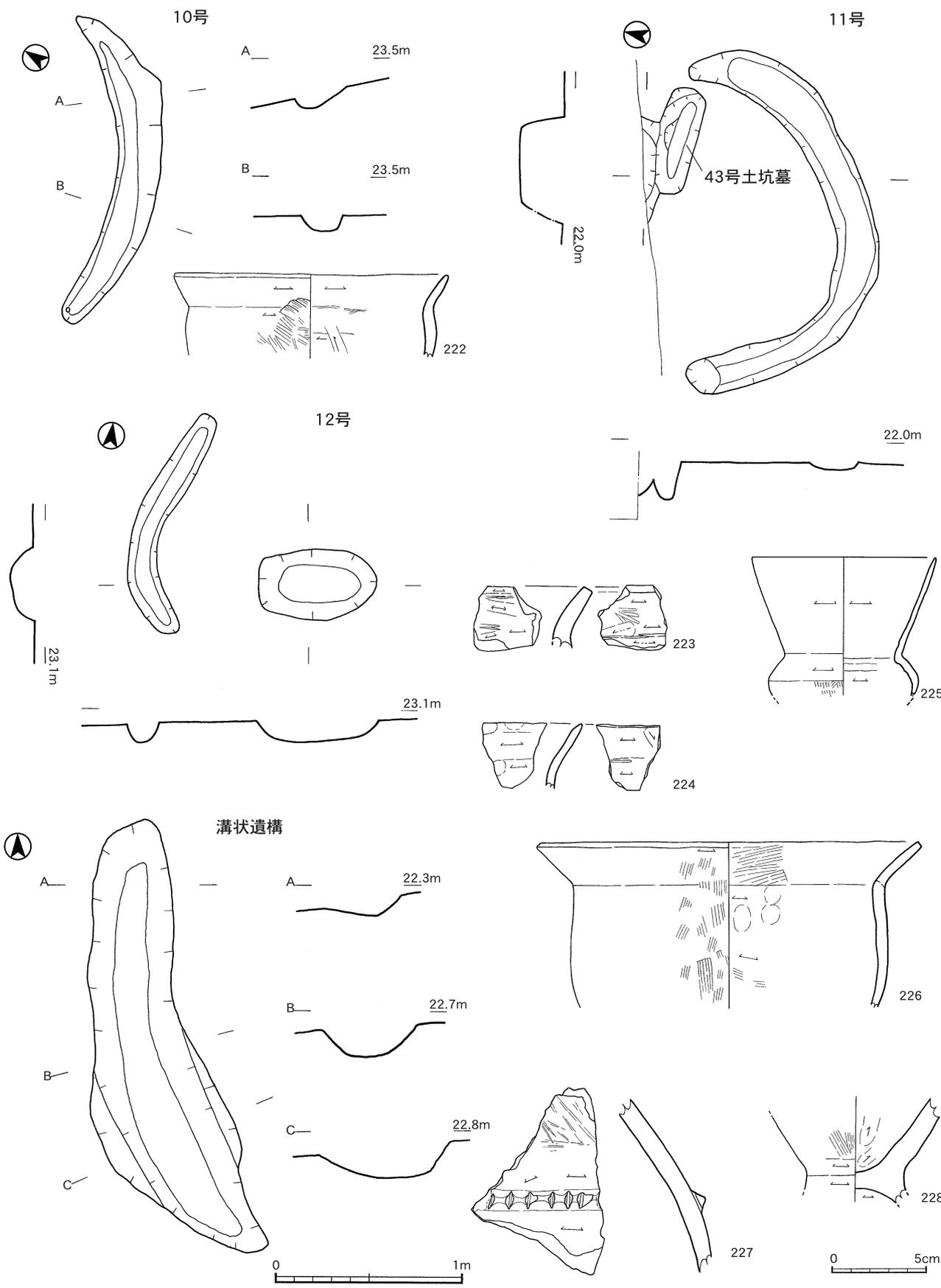
②遺物 (226~228)

全て埋土での出土である。226は甕形土器の口縁部から胴部、227は壺形土器の胴部である。228は甕あるいは鉢形土器の脚部である。226は口縁部がくの字状に大きく開き、口唇部はナデでコの字状を呈す。全体的に刷毛目調整を施す。227は一条の刻目突帯を施す。

227の甕形土器の器形から、中津野式土器段階の遺物と考えられる。

第13表 円形周溝墓観察表

挿図 No.	円形周溝墓No.	区	軸 方向	主体部				周溝部				
				最大長 (m)	最小長 (m)	深さ (cm)	人骨有無	最大長 (m)	最小長 (m)	溝幅 (cm)	深さ (cm)	
48	円形周溝墓1	D 8	EW	2.20	1.16	32.0	×	5.45	4.70	48.0	21.0	
	円形周溝墓2	D 8・9	EW	1.12	0.72	30.0	×	5.60	4.42	68.0	40.0	
49	円形周溝墓3	D 9	SN	1.55	0.55	25.0	×	3.35	3.30	35.0	20.0	
	円形周溝墓4	C・D 9	EW	2.15	1.13	26.0	×	5.85	5.70	30.0	27.0	
50	円形周溝墓5	B・C 8	EW	1.00	1.00	55.0	×	4.45	3.44	50.0	20.0	
	円形周溝墓6	C 8・9	EW	1.62	0.82	34.0	×	4.30	3.80	50.0	5.0	
51	円形周溝墓7	A 9	EW	2.20	1.17	14.0	×	4.60	3.30	37.0	20.0	
	円形周溝墓8	A 9・10	EW	1.74	0.95	42.0	×	5.60	3.82	54.0	22.0	
	円形周溝墓9	C 9・10	EW	2.13	1.00	43.0	×	4.88	4.45	50.0	23.0	
52	円形周溝墓10	D 10	不明	主体部なし				×	3.26	0.90	55.0	18.0
	円形周溝墓11	C 10・11	EW	1.10	0.30	35.0	×	3.82	2.53	45.0	8.0	
	円形周溝墓12	B・C 10・11	EW	1.25	0.80	25.0	×	2.60	2.35	30.0	20.0	



第52図 円形周溝墓(5)

5 土坑墓

A～D-8～11区に計72基検出された。9c層検出土坑墓は46基、15層上面検出土坑墓は、26基である。いずれの層の検出土坑墓も9b層の黒褐色土を埋土としていることから、この時期の土坑墓と判断した。発見された土坑墓は、土坑墓同士及び円形周溝墓と切り合いを見せる。特にB-10区、C～D-8～10区において、この状況が顕著に見られる。長軸方向で遺構の向きを総覧すると、地形ラインに沿うというより方角を意識してつくられた可能性が高いと考える。

土坑内から遺物が出土している例は少ないが、壺・鉢・甕・高杯形土器や、丹塗研磨土器、鉄鏃及び曲剣などが出土している。残念ながら、人骨は検出されなかった。

しかしながら、科学分析によると埋土中からリンが検出され、人骨の可能性が高いことも判明し

ており、埋葬用であることは間違いないようである。前述の他の遺構と同様9b層の黒褐色土中では、遺構検出が非常に困難であり、9c層下層でようやく遺構ラインを確認できた。よって、本来の土坑墓の深さはもっと深いと考える。

ここでは、これらの土坑墓について、平面プランを基本に次のように分類した。

- ・ 大型隅丸方形状
- ・ 円形状
- ・ 中型隅丸方形状
- ・ 長楕円形状
- ・ 楕円形状
- ・ その他

以上の六類型である。この分類を基に土坑墓をまとめたのが次の表である。

第14表 土坑墓分類表

平面プラン	大型隅丸方形状	円形状	中型隅丸方形状	長楕円形状	楕円形状	その他
土坑番号	47 49 54	2 5 12 18	4 8 11 16	3 9 10 42	1 7 13 17	6 14 15
	55 62 63	31 44 72	19 22 27	59 68 69	20 21 25	23 24 26
	67		28 30 32		29 34 35	33 41 45
			37 38 39		36 43 46	58 60 64
			40 48 50		53 57 61	
			52 56		65 66 70	
					71	

1) 大型隅丸方形状土坑墓

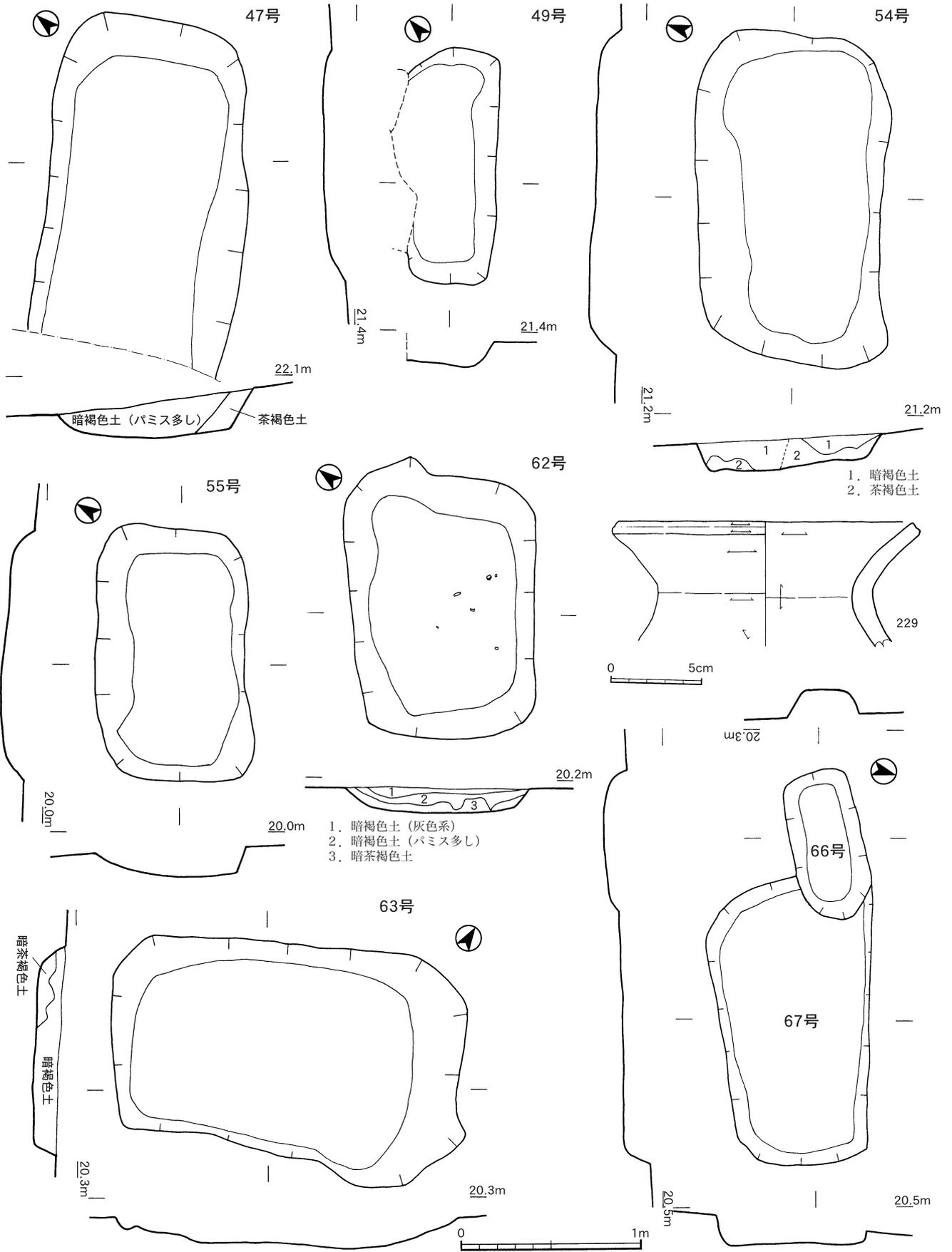
大型隅丸方形状の土坑墓は7基あり(第53図)、全て15層上面で発見されたものの、9b層の黒褐色土が埋土であった。このことから、少なくとも縄文時代晩期の遺構ではなく、弥生終末期から古墳時代中期の遺構と判断した。これらの土坑は長軸平均3.3m、短軸平均1.8mと大型である。54号と62号土坑墓は、若干ながら埋土の色調の差異があったものの、9c層と13・14層の土が混在した埋土と思われる。

遺構内遺物が少ないため、時期認定は難しいが、54号土坑墓埋土中に一点のみ、壺形土器と思われる口縁部(第53図、229)が検出されている。胴部から頸部にかけて、くの字状に外反し、口縁部は短い。口唇部は、中央部に弱干の窪みをつけては

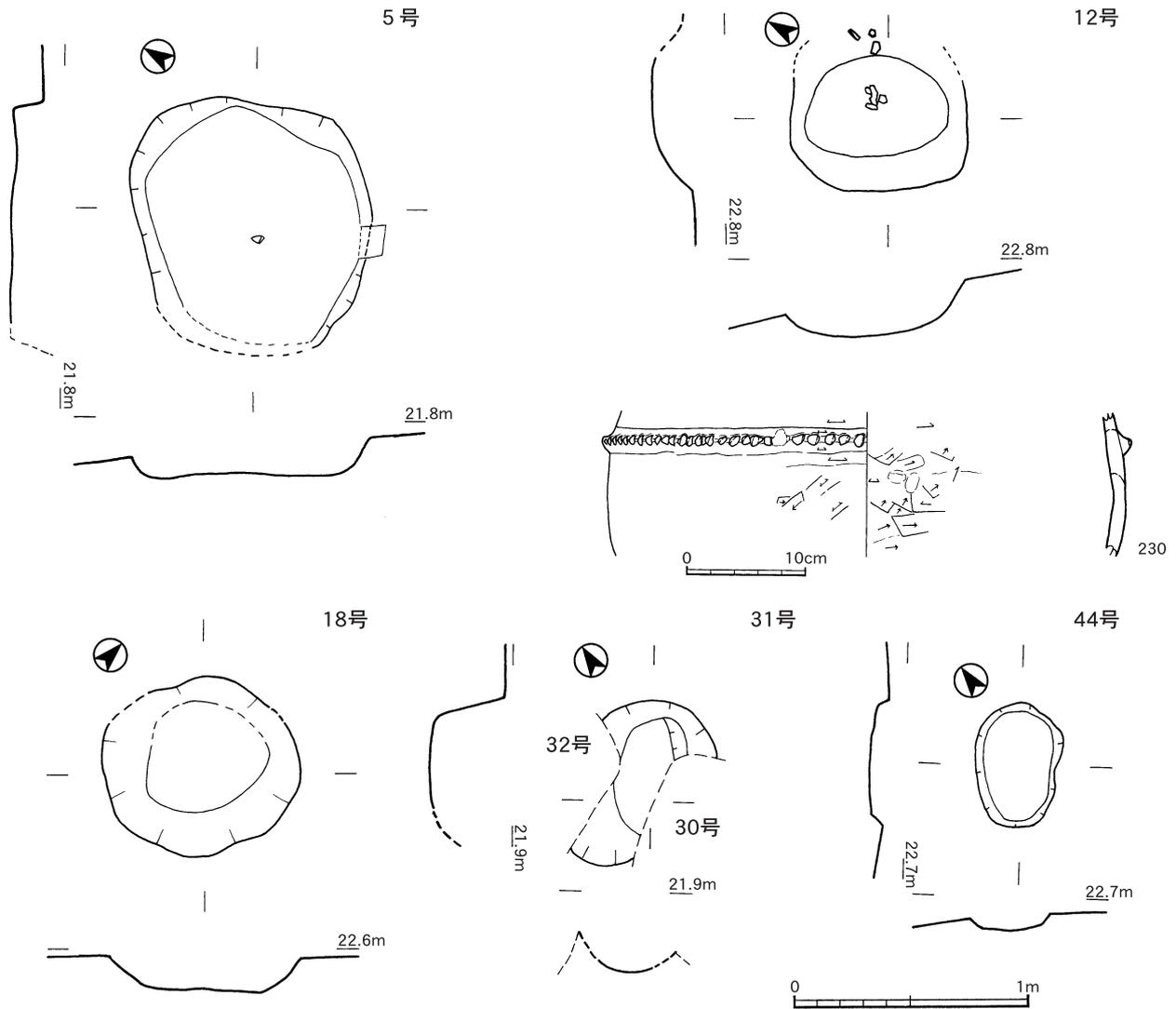
いるものの、平坦面を呈する。これらのことから、中津野式土器の古い段階の壺形土器ではないかと思われる。

2) 円形状土坑墓

円形状の土坑墓は(第54図)7基あり、全て9c層下面で発見されたものである。埋土は9b層の黒褐色土であった。これらの土坑墓の長軸平均は1.6m、短軸平均が1.3mである。遺構内遺物は少ないものの、12号土坑墓埋土中で壺形土器の胴部(第54図、230)が一点出土している。口縁部、底部はないが、胴部最大幅の所よりやや頸部寄りに一条の刻目突帯を貼付けている。胴部の幅から大型の壺形土器であることが予想される。器面は工具ナデを中心に施す。口縁部、底部がないこと



第53図 土坑墓(1)



第54図 土坑墓(2)

からはっきりと時期比定はできないが、器形及び突帯形状から、中津野式土器の段階と考えられる。

また、31号土坑墓は、30・32号土坑墓と切り合いを見せているが、31号土坑墓を30・31号土坑墓が切っていることから、31号土坑墓の方が古い遺構であると判断した。

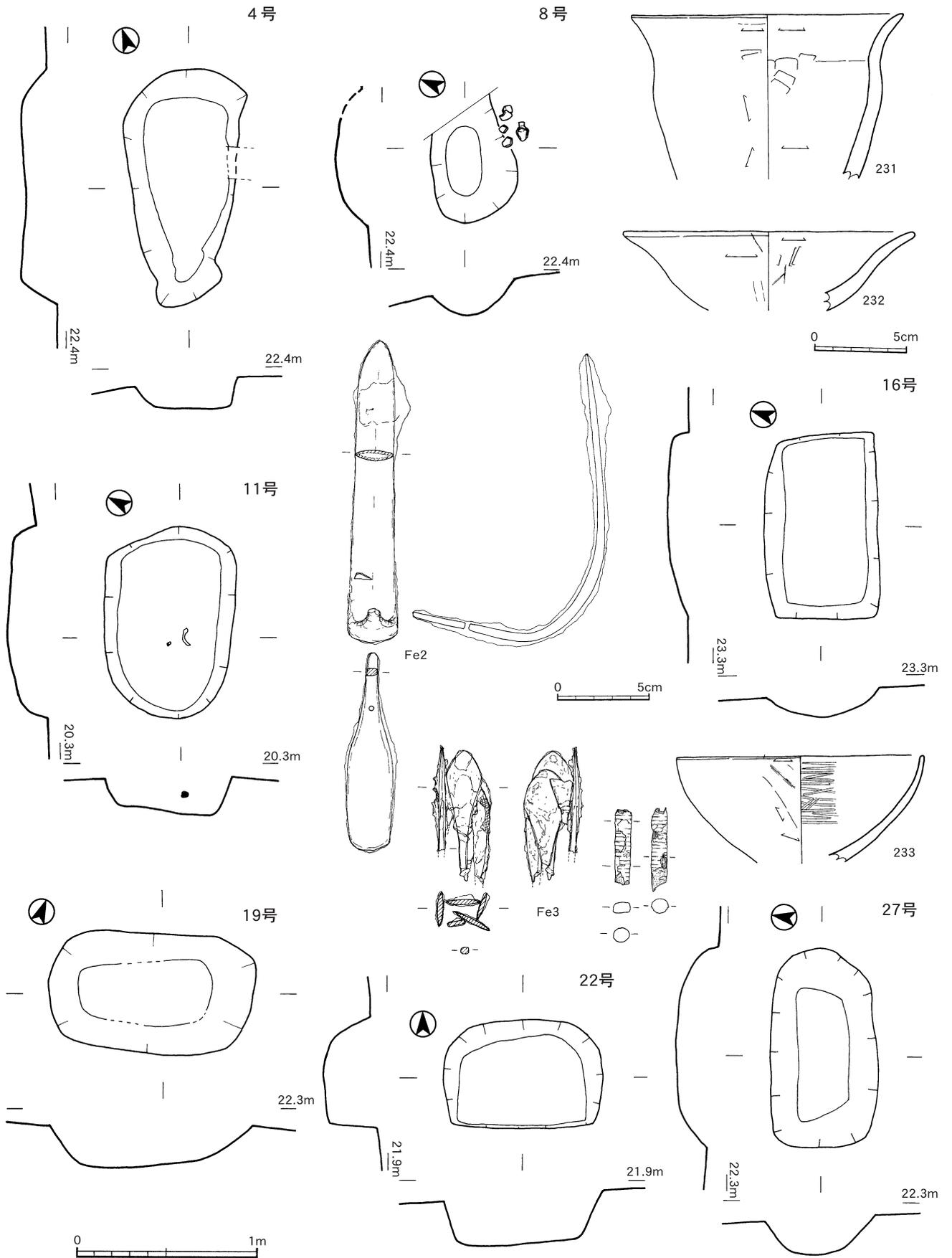
3) 中型隅丸方形土坑墓

中型隅丸方形土坑墓は18基あり(第55図～第57図)、9c層下面発見の土坑墓は14基、15層上面発見の土坑墓は4基ある。図面では17基を記載しているが、残りの2基は切り合いを見せ、他の形状分類に記載してある。32号土坑墓は段堀状態を呈しているため、木棺土坑墓の可能性も考えられる。残念ながら遺構内で木片や木片痕は発見できなかった。これらの土坑墓の長軸平均は、約2

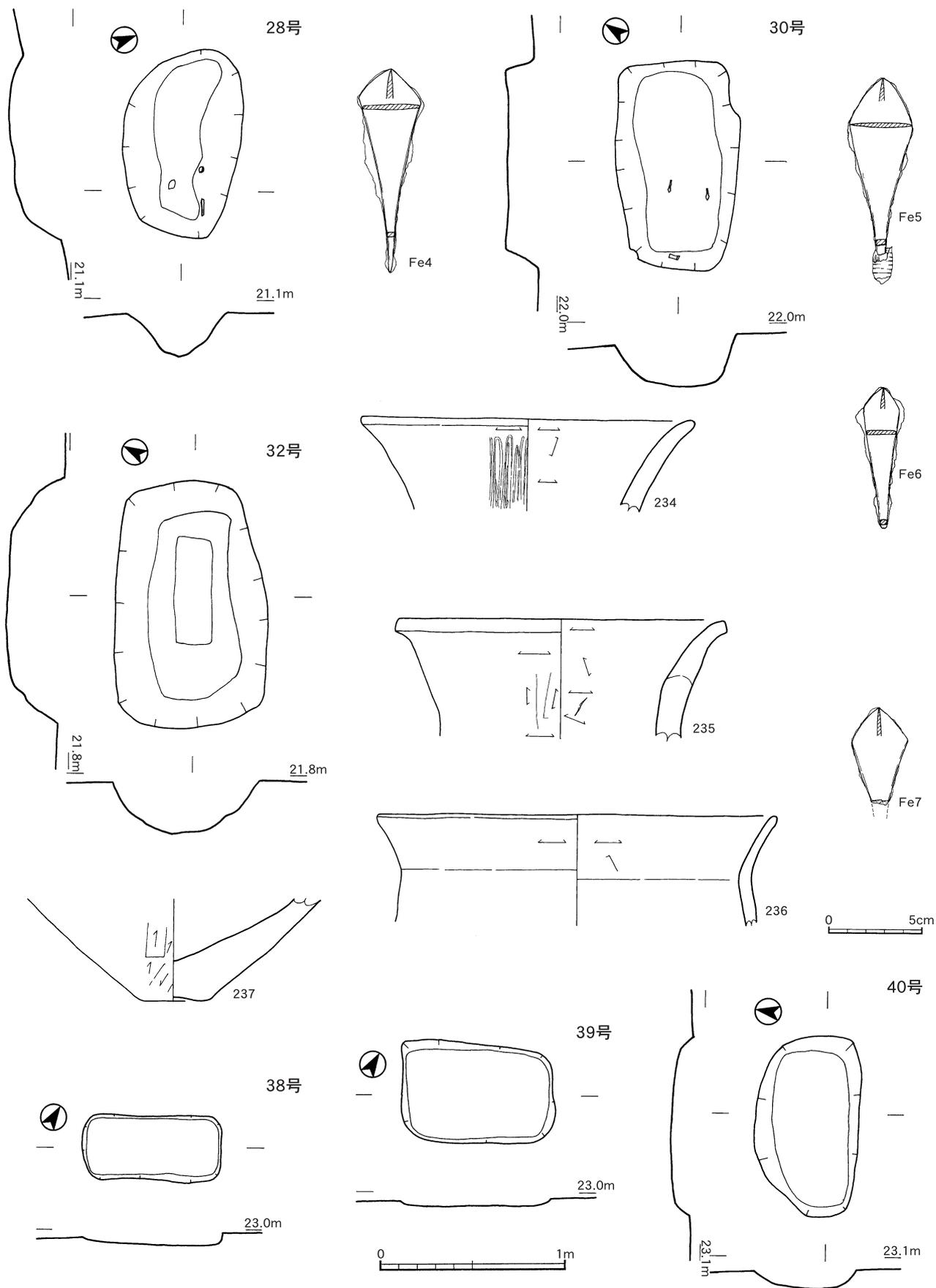
m、短軸平均は1.1mである。遺構内遺物及び近隣遺物の割合が多く、鉄製品の出土もある。

8号土坑墓の縁辺部では、甕形土器(第55図, 231)、高環形土器(232)が出土した。甕形土器は、口縁部がくの字状に外反し、厚さも先端までほとんど変わらない。口唇部は丸みを帯びる。器面調整はナデである。高環形土器は、口縁部のみであるが、肩部が丸みを帯び、そこから外反する。口唇部は丸みを帯びる。

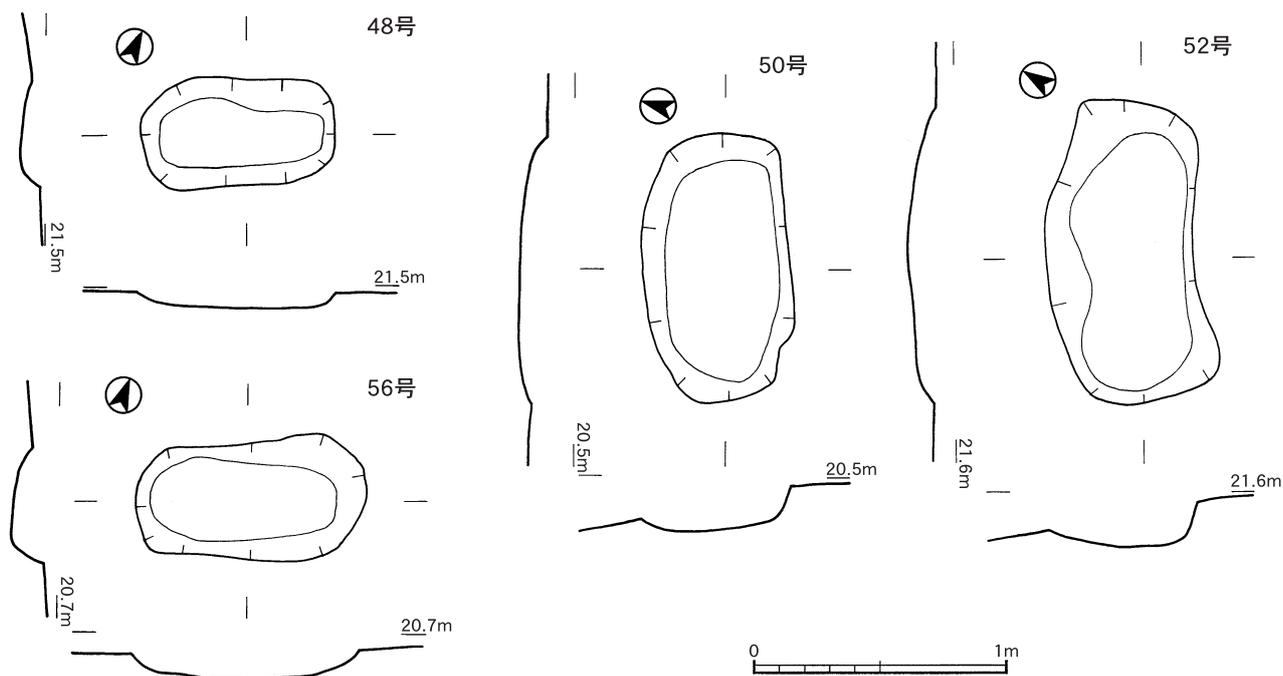
11号土坑墓には曲剣(第55図, Fe2)が、16号土坑墓では四本が錆着した圭頭鏃が床着で検出されたとともに、口縁部が内弯した鉢形土器(233)が埋土中で出土している。Fe2の曲剣は、弥生終末期該当と思われる。また、Fe3は、茎部に布目状のものが付着している。弥生時代終末該当の鉄鏃と思われる。



第55图 土坑墓(3)



第56图 土坑墓(4)



第57図 土坑墓(5)

28号と30号土坑墓では床着で有茎鏃が (Fe 4 ~ Fe 7), 30号土坑墓では壺形土器の口縁部 (234) が出土している。さらに, 32号土坑墓では壺形土器と思われる口縁部 (235) と底部 (237), 甕形土器の口縁部 (236) が出土している。Fe 4 ~ Fe 7 は, 圭頭鏃である。Fe 6 は刃部が長く, Fe 4 は, 小さな腸袂をもつ長三角の鏃身が特徴である。これらは, 古墳時代中期該当と考えられる。このことから, 28・30号土坑墓は, 古墳時代中期該当の遺構と判断できる。

32号土坑墓の壺形土器の口縁部 (235) は, 口縁部が外反し, 口唇部が丸みを帯びる。236の甕形土器の口縁部は, 口縁部がくの字状に外反し, 口唇端部は丸味を帯びる。237の壺形土器の底部は, 平底をなす。これらの遺物から, 中津野式土器~東原式土器段階と考えられる。

4) 長楕円形状土坑墓

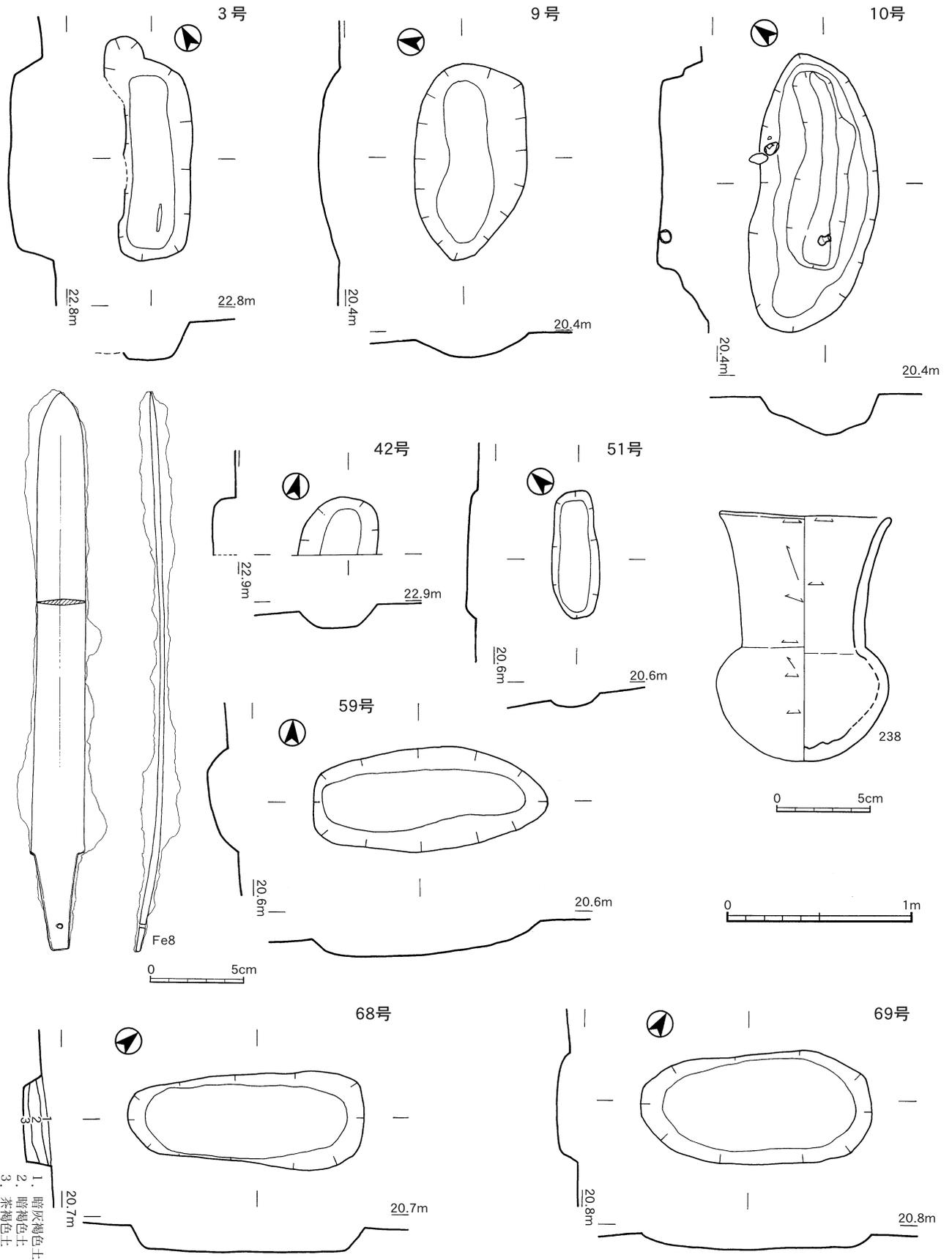
長楕円形状の土坑墓は (第58図, 238) 8基ある。1基は切り合いを見せているため, 他に記載してある。長軸平均が2.2m, 短軸平均が1m程である。遺構内遺物としては, 31号土坑墓で鉄剣 (Fe 8) が出土している。また10号土坑墓には,

指宿地方特有の明赤色の埴形土器 (238) が出土している。

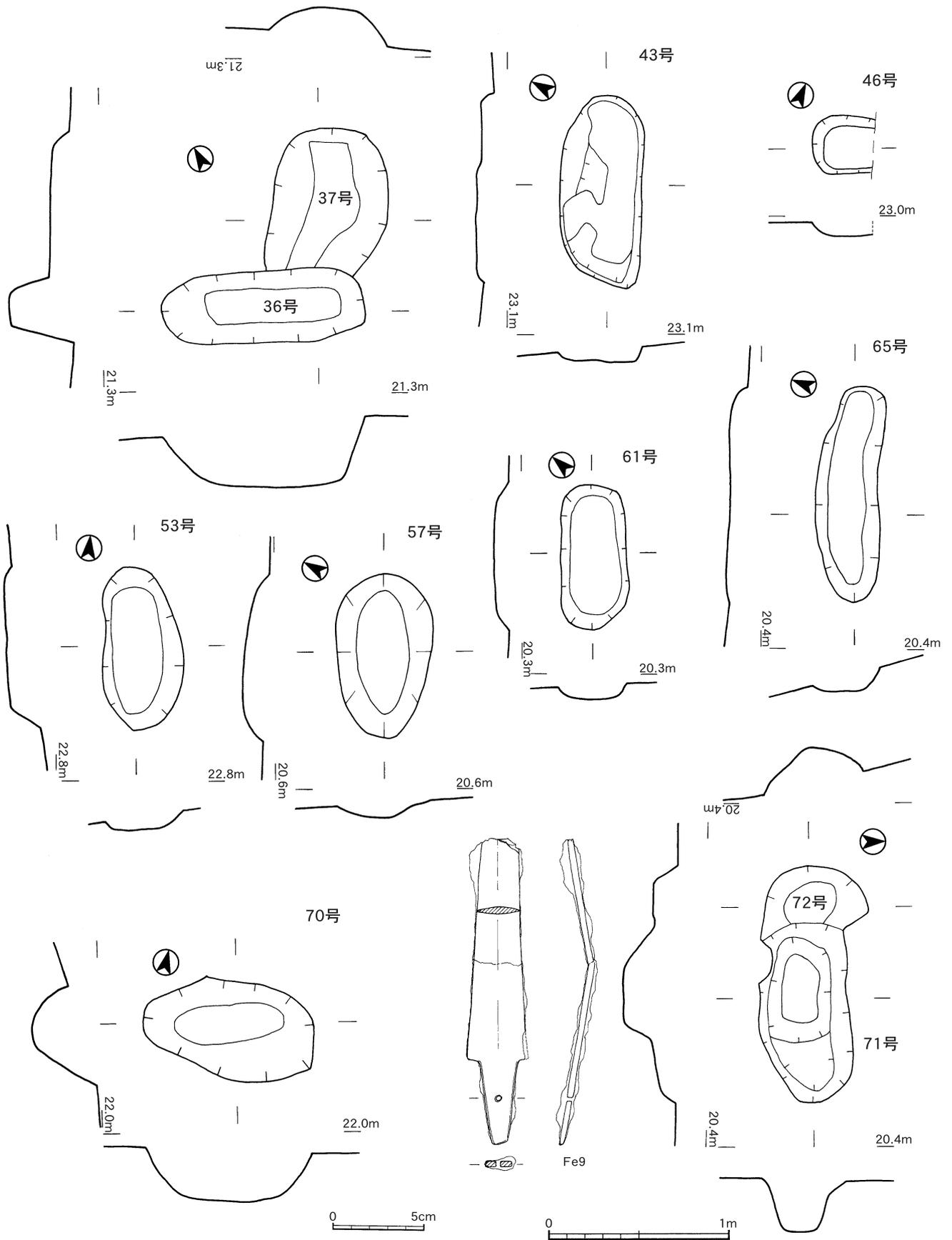
これらの遺物から中津野式土器段階該当と思われる。

5) 楕円形状土坑墓

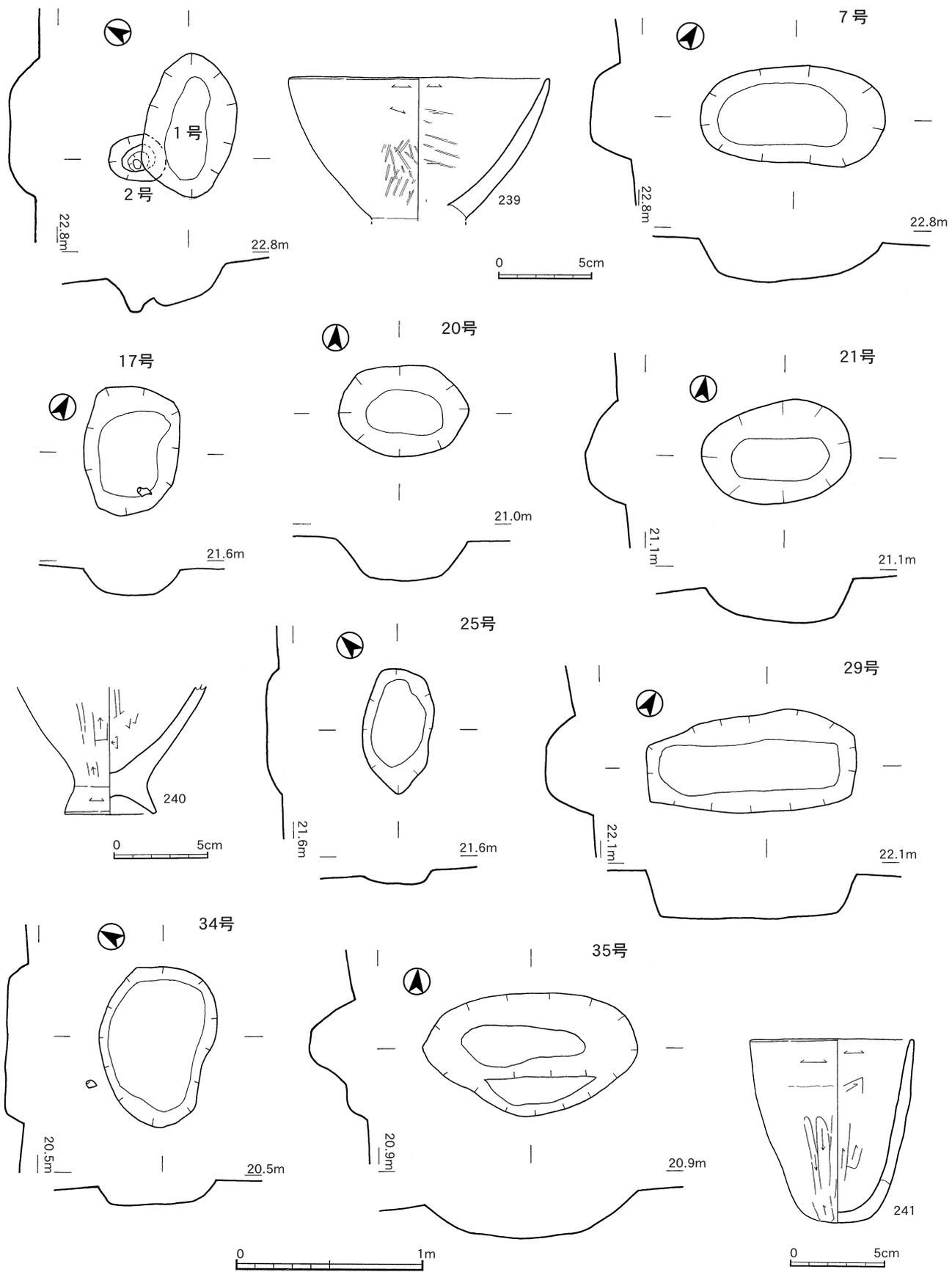
楕円形状の土坑墓は20基あり (第59図・第60図), 長軸平均が約1.6m, 短軸平均が0.8m程である。9層発見土坑墓が13基, 15層発見土坑墓が7基である。遺構内遺物は少ないが, 埋土中出土として70号土坑墓から鉄剣 (Fe 9) が出土している。この剣は両関のもので先端が欠損している。長さが17.6cm, 幅が3.3cm, 厚さ0.5cmあり, 途中で屈曲している。茎に目釘穴がある。把を細長い台形状に削り, 把縁, 把頭との間に明瞭な差をもつ。時期は, 弥生時代終末から古墳時代中期該当で細かい時期判断は難しい。1号土坑墓からは, 口縁が内弯する鉢形土器の口縁部 (239) が, 17号土坑墓からは甕形土器と思われる底部片 (240) が, 35号土坑墓からは丸底を呈し口縁まで直行して立ち上がる鉢形土器 (241) が出土している。いずれの遺物も土器片であるため, 明瞭な時期は難しいが, 中津野式から東原式土器該当と思われる。



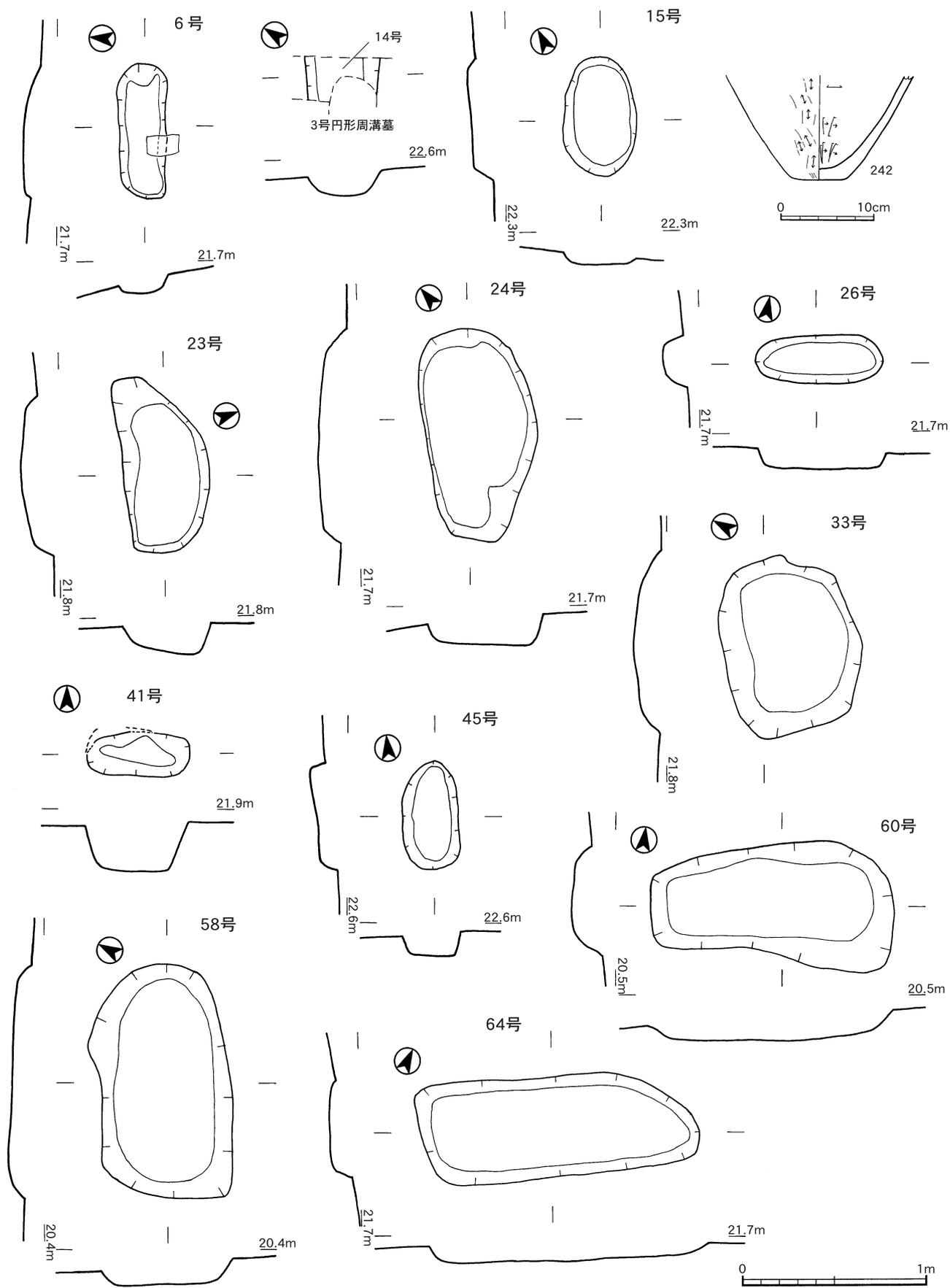
第58图 土坑墓(6)



第59图 土坑墓(7)



第60图 土坑墓(8)



第61图 土坑墓(9)

第15表 土坑墓観察表

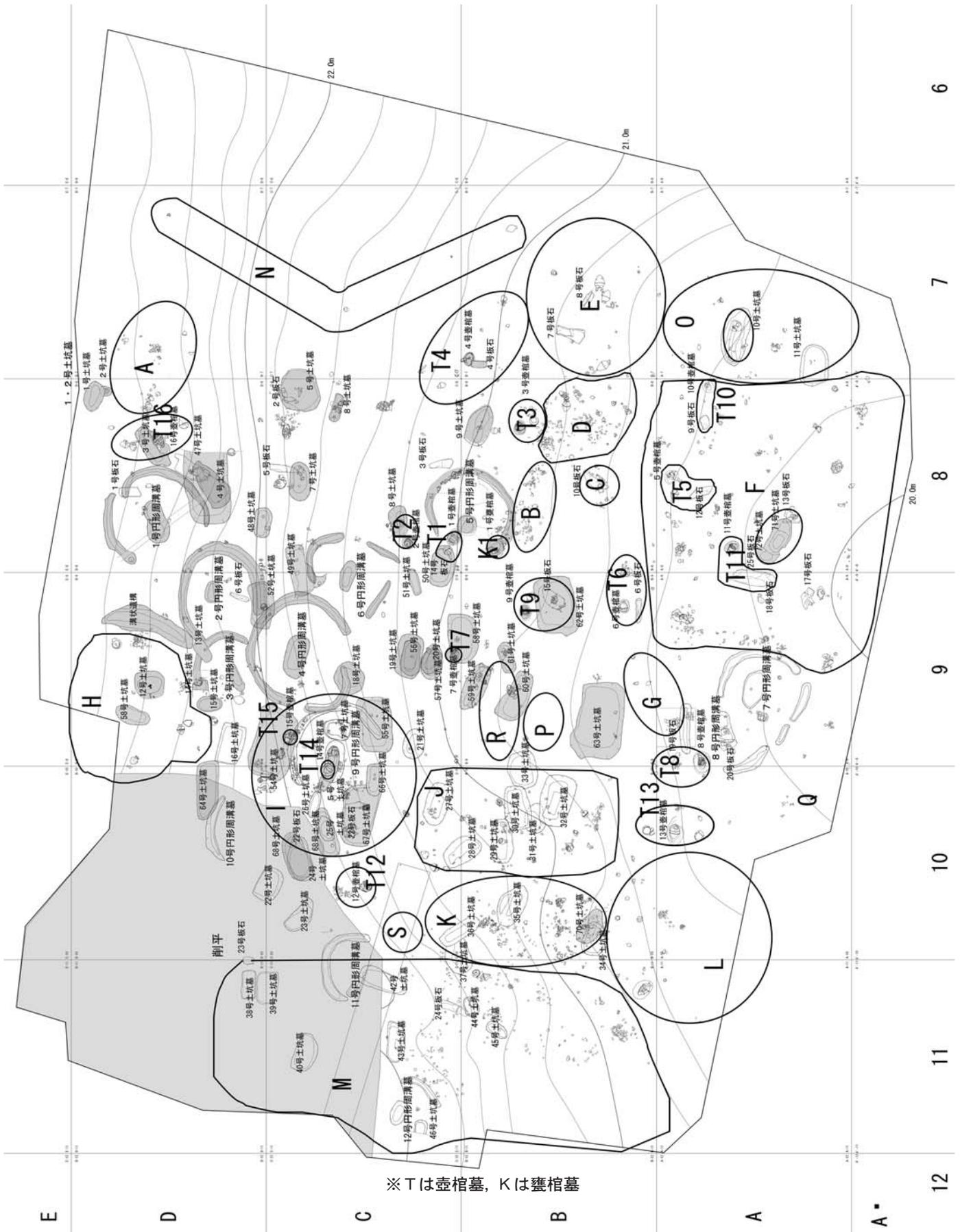
挿図 No.	土坑 墓No.	検出区	層	方	分類	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	形状	人骨 有無	備考	挿図 No.	土坑 墓No.	検出区	層	方	分類	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	形状	人骨 有無	備考	
53	47	D 8	15	EW	A	+3.65	2.25	0.4	大型隅丸方形	×		59	36	B・C 10	9	EW	E	2.3	0.8	0.8	楕円形	×	切合。36が新しい	
	49	C 8・9	15	EW	A	2.63	+1.0	0.3	大型隅丸方形	×			37	B・C10・11	9	EW	C	+1.7	1.3	0.3	中型隅丸 方形	×		
	54	C・D9・10	15	EW	A	3.5	2.0	0.35	大型隅丸方形	×			43	C 11	9	EW	E	2.05	0.9	0.15	楕円形	×		
	55	C 9	15	EW	A	2.8	1.65	0.3	大型隅丸方形	×			46	B 11	9	EW	E	+0.7	0.6	0.2	楕円形	×		
	62	B 9	15	EW	A	3.5	2.1	0.25	大型隅丸方形	×			53	D 9	15	SN	E	1.8	0.85	0.3	楕円形	×		
	63	B 9	15	EW	A	4.0	2.3	0.25	大型隅丸方形	×			57	C 9	15	EW	E	1.81	1.03	0.26	楕円形	×		
	66	C 10	15	EW	E	1.67	0.8	0.3	楕円形	×	切合。66が新しい		61	B 9	15	EW	E	1.6	0.72	0.16	楕円形	×		
54	5	C 7・8	9	EW	B	+2.15	2.0	0.3	円形	×		65	C 9・10	15	EW	E	2.45	0.72	0.17	楕円形	×	溝状も可能性有り		
	12	D 9	9	EW	B	1.5	+1.32	0.3	円形	×		70	B 10	15	EW	E	1.85	1.1	0.6	楕円形	×			
	18	C 9	9	EW	B	1.7	1.5	0.3	円形	×	円周4 溝切合	71	A 7	15	EW	E	1.15	+0.8	0.4	楕円形	×			
	31	B 10	9	SN	B	1.6	+1.0	0.6	円形	×	SD30, 32切合	72	A 7	15	SN	B	1.8	1.0	0.65	円形	×	段堀		
55	44	B 11	9	SN	B	1.05	0.7	0.15	円形	×		60	1	D 8	9	EW	E	1.6	0.9	0.4	楕円形	×		
	4	D 8	9	SN	C	2.7	1.2	0.4	中型隅丸方形	×			2	D 8	9	EW	B	+0.62	0.5	0.4	円形	×		
	8	C 8	9	EW	C	+1.6	0.9	0.3	中型隅丸方形	×			7	C 8	9	EW	E	2.0	1.0	0.5	楕円形	×		
	11	A 7・8	9	EW	C	2.2	1.5	0.4	中型隅丸方形	×			17	C 9	9	SN	E	1.4	1.1	0.3	楕円形	×	円周9 主体横	
	16	D 9	9	EW	C	2.1	1.3	0.2	中型隅丸方形	×			20	C 9	9	EW	E	1.4	9.7	0.5	楕円形	×		
	19	C 9	9	EW	C	2.3	1.4	0.5	中型隅丸方形	×	近接		21	C 9	9	EW	E	1.6	1.2	0.4	楕円形	×		
	22	C・D 10	9	EW	C	1.8	1.2	0.6	中型隅丸方形	×	近接		25	C 10	9	SN	E	1.4	0.8	0.2	楕円形	×		
56	27	C 10	9	EW	C	2.2	1.2	0.4	中型隅丸方形	×		61	29	B 10	9	EW	E	2.2	1.1	0.6	楕円形	×		
	28	B・C 10	9	EW	C	2.1	1.3	0.5	中型隅丸方形	×	段堀		34	B 10	9	EW	E	1.8	1.3	0.2	楕円形	×		
	30	B 10	9	EW	C	2.2	1.3	0.6	中型隅丸方形	×			35	B 10	9	EW	E	2.4	1.4	0.5	楕円形	×	一段段堀	
	32	B 10	9	EW	C	2.7	1.7	0.6	中型隅丸方形	×	木棺土壙墓 の可能性		6	C 8	9	EW	F	1.5	0.5	0.2	その他	×		
	38	D 11	9	EW	C	1.5	0.7	0.2	中型隅丸方形	×			14	D 9	9	EW	F	+0.6	0.8	0.2	その他	×		
	39	C・D 11	9	EW	C	1.7	1.1	0.1	中型隅丸方形	×			15	D 9	9	NS	F	1.3	0.8	0.2	その他	×		
57	40	C 11	9	EW	C	2.0	1.1	0.2	中型隅丸方形	×		23	C 10	9	EW	F	1.9	0.9	0.3	その他	×			
	48	C・D 8	15	EW	C	1.5	0.85	0.15	中型隅丸方形	×		24	C 10	9	EW	F	2.3	1.3	0.3	その他	×			
	50	C 8・9	15	EW	C	2.13	1.18	0.25	中型隅丸方形	×	近接	26	C 10	9	EW	F	1.4	0.5	0.2	その他	×			
58	52	C・D 9	15	EW	C	2.4	1.17	0.28	中型隅丸方形	×		33	B 9・10	9	EW	F	2.0	1.6	0.3	その他	×	SD30, 32近		
	56	C 9	15	EW	C	1.83	0.92	0.25	中型隅丸方形	×	近接	41	C 11	9	EW	F	1.2	0.4	0.45	その他	×	円周11主体部切る		
	3	D 8	9	SN	D	2.5	+0.8	0.4	長楕円形	×		45	B 11	9	SN	F	1.15	0.6	0.2	その他	×			
	9	B 8	9	EW	D	2.1	1.2	0.2	長楕円形	×		58	B・C 9	15	EW	F	2.5	1.4	0.23	その他	×			
	10	A 7	9	EW	D	3.0	1.3	0.6	長楕円形	×	二段堀	60	B 9	15	EW	F	2.36	1.2	0.35	その他	×			
	42	C 11	9	SN	D	+0.6	0.85	0.2	長楕円形	×		13	D 9	9	SN	E	1.3	0.8	0.2	楕円形	×	円周2, 3際		
	51	C 8・9	15	EW	C	1.4	0.53	0.15	中型隅丸方形	×		64	D 9・10	15	EW	F	3.1	1.05	0.15	その他	×			
	59	B 9	15	EW	D	2.55	1.1	0.26	長楕円形	×														
68	C 10	15	EW	D	2.55	0.95	0.34	長楕円形	×															
69	C 10	15	EW	D	2.5	1.15	0.2	長楕円形	×															

第16表 遺構内遺物観察表

挿図 No.	掲載 No.	遺構名	分類			区	層	器高	口径	底径	外調	内調	外色	内色	文様	胎土	備考
			大分類	中分類	小分類												
48	205	円形周溝墓1溝内	I	A		D8	埋土	-	18.7	-	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	黄橙	明橙	-	長石, 角閃石, 石英	
	206	円形周溝墓1溝内	I	B・C・D		D8	埋土	-	-	-	工具ナデ	ナデ	黄褐及明橙	黒色	-	長石, 角閃石, 石英	一度成形焼成後粘土貼付
	208	円形周溝墓1主体部	I	A		D8	埋土	-	-	5.0	ハケメ	ナデ	明橙	橙	-	長石, 角閃石, 輝石	
	207	円形周溝墓1主体部	I	A		D8	埋土	-	-	4.8	ミガキ 工具ナデ	ハケメ, ナデ	明黄褐	明橙	-	長石, 角閃石	
	209	円形周溝墓2溝内	III	B		D8・9	周辺	-	16.0	-	ナデ, ハケメ後 ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	暗赤褐	赤味がかった 黄橙	-	長石, 角閃石 輝石, 石英	スス付着
49	210	円形周溝墓3				D9	周辺	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐	明黄褐	-	角閃石, 輝石	
	211	円形周溝墓4溝内	I	A		C9	埋土	-	9.3	-	ナデ, ミガキ	ナデ, 指ナデ	明黄褐	明黄褐	-	角閃石, 輝石	
	212	円形周溝墓4溝内	I	A		C・D9	埋土	-	8.0	-	ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ	明赤橙	明橙	-	角閃石, 輝石	
	213	円形周溝墓4溝内	I	A		C・D9	埋土	-	-	-	工具ナデ, ナデ	ハケメ 工具ナデ	明黄褐	明黄褐	一条刻目突帯	角閃石, 輝石	
50	214	円形周溝墓5溝内	I	A	b	B・C8	埋土	46.0	-	5.5	ハケメ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	明黄褐	淡暗橙	-	長石, 角閃石, 輝石	※左半分上に丹塗のあとあり。その他ふたもある。ツボ楕だった可能性あり。スス左半分, 黒斑
	215	円形周溝墓5溝内	I	A		B・C8	埋土	-	-	7.5	ハケメ, ナデ	-	明赤褐	明橙	-	長石, 角閃石 輝石, 石英	
	216	円形周溝墓5溝内	I	D		B・C8	埋土	-	36.7	-	ナデ, 指ナデ 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	明赤橙	明赤橙	-	長石, 角閃石 輝石, 石英	口縁付近にスス
51	217	円形周溝墓9溝内	I	A		C9・10	埋土	-	15.9	-	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	明黄橙	明橙	-	角閃石, 輝石	
	219	円形周溝墓9溝内	I	A		C9・10	埋土	-	-	-	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	-	長石, 角閃石, 輝石	
	218	円形周溝墓9溝内	I	C・D		C9・10	埋土	-	-	-	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	黄橙	明橙	-	長石, 角閃石	
	220	円形周溝墓9溝内	I	A		C9・10	埋土	-	12.4	-	ナデ	ナデ	明赤橙	明赤橙	-	角閃石, 金雲母	
	221	円形周溝墓9溝内	I	C		C9・10	埋土	-	4.3	-	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	明黄橙	淡橙	-	角閃石	
52	222	円形周溝墓10溝内	I	B		D10	埋土	-	14.7	-	ナデ, ハケメ	ナデ	明橙	明赤橙	-	長石, 角閃石, 輝石	
	223	円形周溝墓12		A		C11・12	埋土	-	-	-	ナデ, 指ナデ ミガキ	ナデ, ミガキ	明黄褐	明黄褐	-	角閃石, 輝石	
	224	円形周溝墓12		B		C11・12	埋土	-	-	-	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	明赤橙	明赤橙	-	長石, 角閃石	
	225	円形周溝墓11	II	E		C10	埋土	-	9.8	-	ナデ, ハケメ	ナデ	黄橙	明赤橙	-	長石, 角閃石, 輝石	※一部に丹塗あとあり
	226	溝状遺構1	I	B		D9	埋土	-	20.2	-	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ 指頭圧痕	赤褐	橙	-	長石, 角閃石 輝石, 石英	
	227	溝状遺構1	I	A		D9	埋土	-	-	-	ミガキ状ナデ ナデ	ナデ	明赤橙	明黄橙	一条刻目突帯	長石, 角閃石, 輝石	
	228	溝状遺構1	I	C		D9	埋土	-	-	-	ハケメ, ナデ	指ナデ, ナデ	暗赤橙	黒褐	-	長石, 角閃石, 輝石	スス付着(内, 底部)
53	229	土坑墓54	I	A		C9・10	埋土	-	16.3	-	ナデ ミガキ状ナデ	ナデ	淡橙	灰黄褐	-	長石, 角閃石, 石英	
54	230	土坑墓12	I	A		D9	埋土	-	-	-	工具ナデ, ナデ 指頭圧痕 指ナデ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕 指ナデ, ナデ	暗黄橙	明橙	一条刻目突帯	角閃石, 輝石	
55	231	土坑墓8	I・II	B		C8	埋土	-	15.0	-	ナデ	ナデ	暗赤褐	明赤褐	-	長石, 角閃石 輝石, 石英	
	232	土坑墓8	I・II	D		C8	埋土	-	16.0	-	ナデ	ナデ	暗黄橙	明黄橙	-	角閃石, 輝石	スス付着
	233	土坑墓16	I・II	C		C8	埋土	-	13.6	-	ナデ	ミガキ	明黄橙	明黄橙	-	長石, 角閃石, 輝石	
56	234	土坑墓30	I・II	A		B10	埋土	-	18.1	-	ナデ, ミガキ	ナデ	明赤褐	明赤褐	-	長石, 角閃石 輝石, 石英	
	235	土坑墓32	I・II	A		B10	埋土	-	17.5	-	ナデ	ナデ	暗赤褐	にぶい 赤褐	-	長石, 角閃石	
	236	土坑墓32	I・II	B		B10	埋土	-	21.6	-	ナデ	ナデ	明赤褐	黄褐 明赤褐	-	長石, 輝石	スス付着
	237	土坑墓32	I・II	A		B10	埋土	-	-	3.5	ナデ	ナデ	にぶい 赤褐	明赤褐	-	長石, 角閃石 輝石, 石英	
58	238	土坑墓10	I	E		A7	埋土	13.3	9.3	1.5	ナデ	ナデ	明赤	明赤	-	長石, 角閃石 輝石, 石英	表面がザラザラ, 赤が強い 底部・胴部に黒斑
60	239	土坑墓1	I・II	C		D8	埋土	-	14.1	-	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	明赤橙	明赤橙	-	長石, 角閃石, 輝石	
	240	土坑墓17	I・II	B		C9	埋土	-	-	4.8	工具ナデ	工具ナデ	明赤橙	淡赤橙	-	長石, 角閃石, 輝石	
	241	土坑墓35	I・II	C		B10	埋土	10.0	8.7	3.0	ナデ, 工具ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	-	長石, 角閃石, 輝石	底部に黒斑
61	242	土坑墓15		A		D9	周辺	-	-	5.5	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐	明橙	-	長石, 角閃石, 輝石	

第17表 遺構内鉄製品観察表

挿図 No.	記載 No.	出土区	層	遺構出土 ブロック	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
50	Fe 1	-	-	埋土	ES5溝埋土中	鉄剣	15.3	2.8	0.3	55.0
55	Fe 2	-	-	埋土	SD27埋土中	曲剣	17.1	2.8	0.6	106.4
	Fe 3	-	-	埋土	SD16埋土中	鉄鏃3点	7.4	2.3	0.3	48.0
56	Fe 4	C	10	埋土	SD28遺構内	鉄鏃	11.3	3.6	0.3	45.5
	Fe 5	C	9	埋土	SD30埋土中	鉄鏃	11.3	3.5	0.3	27.9
	Fe 6	B	10	埋土	SD30埋土中	鉄鏃	7.8	2.0	0.2	13.3
	Fe 7	C	9	埋土	SD30埋土中	鉄鏃	5.3	3.2	0.4	9.3
58	Fe 8	-	-	埋土	SD3埋土中	鉄剣	30.5	2.9	0.5	217.3
59	Fe 9	-	-	埋土	SD70埋土中	折剣	17.6	3.3	0.5	102.8



※Tは壺棺墓, Kは甕棺墓

第62図 遺物ブロック範囲図 (10mグリッド表示)

2. 遺物及び遺構

本節は、発掘調査の状況から「遺構と遺物の関係」は非常に重要なことと考える。遺構内遺物が少ない状況であったため、遺構の時期的な解明及び遺構と遺物のセット関係が不明瞭であった。全体的に遺構の発見状況はレベル的にもっと上の層で作られた可能性が高いと思われるが、発掘調査時、遺物取り上げ後、遺構が発見されたことから、従来の「遺物の分類」という記載では、上記の遺物のセット関係が解明できないと考えた。そこで、本報告書の本節では、これら「遺構と遺物のセット関係」を再考するに当たり、次の観点で遺物の整理を行った。

・遺構検出面が本来の検出面より下のレベルで発見されたことから、遺構の上面もしくは、周辺遺物がこれらの遺構に伴う可能性が非常に高い。

したがって、遺物を「遺構と供献遺物との関係」としての「遺構」として捉えることで墓域の変遷を可能な限り捉えていく。

・土器集中区があるが、これを単なる土器集中区ではなく、それらの集中区の遺物には例えば、祭祀遺構といった「遺構」としての意味合いが強いと思われる。そこで、調査区全体を「遺構」とし、遺物の位置を重視しながら遺構と遺物の相互関係を捉えていく。

・出土遺物を時期編年上で捉え、遺構の時期を検討していく。

以上のことから、墓と遺物の共伴関係や土器集中区の遺構としての意味合いの手がかりとなる可能性を踏まえ、次のように四つの「遺構」とそれに伴う「遺物」として分け、遺物の実測図を記載した。

- (1) 壺棺墓及び甕棺墓の周辺遺物
- (2) 円形周溝墓の周辺遺物
- (3) 土坑墓の周辺遺物
- (4) 土器集中区ごとの周辺遺物

土器集中区に関しては、A～Sの19ブロックに

分けたが、次のような観点で分けた。

- 発掘調査時及び出土状況配置図作成時において、遺物の集中度合いを見て、大まかに分けた。
- 遺物が散布状況ではなく、集中していることから、グリッド毎になるべくまとめて、遺物の類似性を鑑みグループ分けを行った。
- 遺物のグループ分けの際、ほぼ同じ検出レベルであることを留意した。

以上のような観点で、土器集中区のブロック分けを行った。このように遺物をブロック毎に分け、各ブロックの遺物の時期を土器編年と照合することで、遺構と遺物の関係や遺構の意味合い、遺構の時期及び墓域の変遷をつかむきっかけになるのではないかと考えた。(第62図)

土器分類に関しては、遺跡の特徴を鑑み、成川土器様式編年を基に大きくI～IV類に分類することで、この遺跡の墓地としての占地の時期が見えてくると考えた。

そこで、中村直子氏の成川土器様式の編年を基に、成川様式I(中津野式土器段階)、成川様式II(東原式土器段階)、成川様式III(辻堂原式土器段階)、成川様式IV(笹貫式土器段階)の大分類で遺物を記載する。また、器種分類に関してはA「壺形土器」、B「甕形土器」、C「鉢形土器」、D「高坏形土器」、E「罌形土器」、F「蓋形土器」、G「丹塗研磨土器」、H「須恵器」の8分類に分けた。

なお、各大分類における器種分類及び分類の特徴は第18表のとおりである。

上記のように分類することで、調査時の課題であった本遺跡の遺構と遺物のセット関係や墓域の変遷等が解明できると考える。また、鉄製品については、大分類として、I類剣、II類鏃、III類その他で記載する。鉄製品の実測図については、全体が錆等で覆われた資料であることから、X線透過検査によるものとした。

記載方法としては、先の土器出土ブロックに準じて記載し、時期認定の一助としたい。最後に、磨製石鏃も同様、ブロック毎に記載する。

これらの出土状況をまとめて述べるが、墓という特性から、遺物の伝世品もあるということを踏まえるとともに、器形等まとめていきたいと考える。

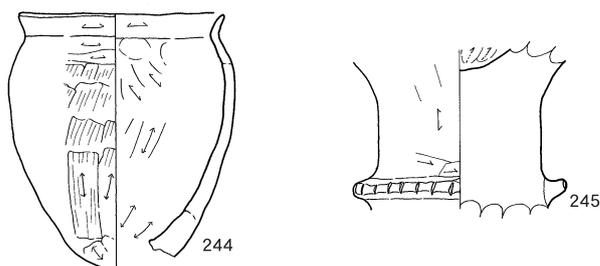
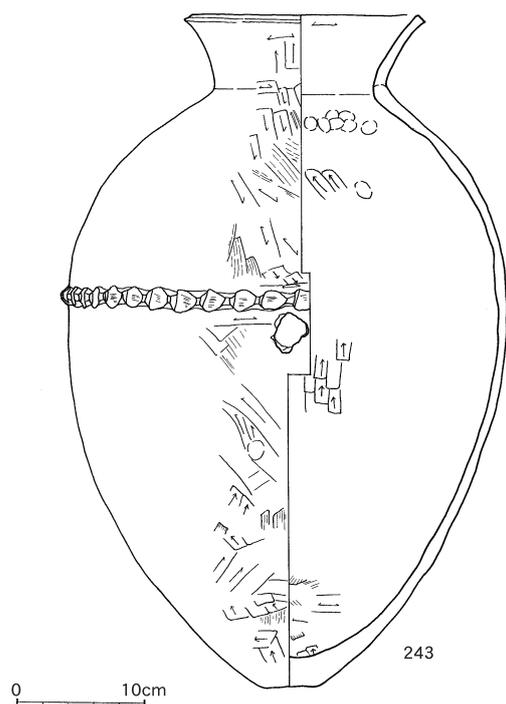
第18表 土器分類表（時期毎）

大分類	器種大分類		特徴		器種小分類	
成川様式 I (中津野式 土器段階)	壺	A	口縁	くの字状外反, 円筒状頸部に口唇部外反	a	有文
			胴部形状	楕円, 円形, 逆卵形	b	無文
			底部	平底及びレンズ状	c	長頸
	甕	B	口縁	くの字状に外反, 口唇部にかけて細まる	d	小型丸底
			底部	湾曲度合いは緩く直線的で高い		
	鉢	C				
	高坏	D	坏部	疑似口縁接合及び途中で大きく外反するもの		
脚部			直線上に外反及び底部が上方に反るもの。透あり			
脚内部						
埴蓋形	F					
その他	G					
成川様式 II (東原式 土器段階)	壺	A	口縁	直立円筒状で, 口唇部は緩やかに外反	a	有文
			胴部形状	なで肩状の逆卵形	b	無文
			底部	丸底及び尖底状	c	長頸
	甕	B	口縁	くの字状に外反, ハケ目状で胴部境に段を持つ	d	小型丸底
			底部	外反しながら開き, 端部は平坦		
	鉢	C				
	高坏	D	坏部	屈曲部より斜め上方向に直線的に伸びる		
脚部			直線上に外反し, 接合部で屈曲外反する			
脚内部						
埴蓋形	F					
その他	G					
成川様式 III (辻堂原式 土器段階)	壺	A	口縁	内傾気味に直立し, 口唇部で急に外反	a	有文
			胴部形状	なで肩状で, 逆二等辺三角形状	b	無文
			底部	平底及びレンズ状	c	長頸
	甕	B	口縁	長く緩やかに外反及び先端でかすかに外反	d	小型丸底
			底部	湾曲度合いは緩く直線的で高い		
	脚内部	天井部平坦なものと同天井部が下方に膨らむもの				
	鉢	C				
高坏	D	坏部	内湾			
		脚部	ラッパ状に外反し, 坏底部外面に段をもつ			
		脚内部				
埴蓋形	F					
その他	G					
成川様式 IV (笹貫式 土器段階)	壺	A	口縁	直線的に斜位に外反	a	有文
			胴部形状	なで肩及び肩張り状の逆二等辺三角形状	b	無文
			底部	丸底及び尖底状	c	長頸
	甕	B	口縁	内湾	d	小型丸底
			底部	湾曲度合いは緩く直線的で, 高い		
	脚内部	天井部が下方に膨らむもの				
	鉢	C				
高坏	D	坏部	内湾			
		脚部	ラッパ状に外反し, 坏底部外面に段をもつ			
		脚内部				
埴蓋形	F					
丹塗 研磨 須恵	G			a	高坏	
				b	甕	
	H			c	埴器台	
				d	高坏 甕 坏 身	

(1) 土器棺墓と周辺遺物 (第63図～第75図)

1) 1・2号壺棺墓周辺遺物

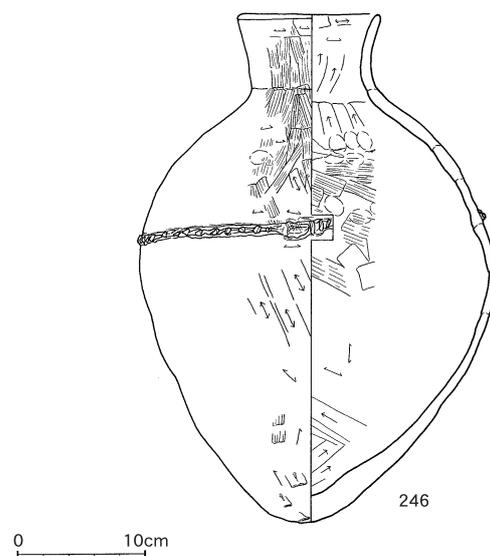
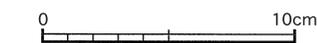
B-8区, 1号壺棺墓周辺遺物 (第63図) は, 壺形土器が3点 (243~246), 鉢形土器と思われる脚部1点 (245) を掲載した。243の壺形土器は, 口縁部が短く, く字状に外反し, 胴部器形はなで肩の逆卵形をなし, 平底を呈す。胴部中央よりやや上位に一条の刻目突帯を施す。胴部中央に穿孔も施す。246の壺形土器は, 口縁部が外傾気味に直行し, なで肩で少し膨らみをもちながら逆卵形をした胴部に, レンズ状の底部をしている。胴部中央よりやや上位に一条の刻目突帯を施す。穿孔はない。244の小型丸底壺は, 口縁部が欠損しているが, 口縁部が短く, く字状に外反し, 胴部は底部にかけ楕円形状にすぼまる。245は高杯か鉢形土器の脚部と思われるが, 脚部中央に一条の刻目突帯を施す。これらの遺物の器形等からI期該当遺物と考えられる。



2) 3号壺棺墓周辺遺物

B-8区, 3号壺棺墓周辺遺物 (第64図, 247~250) は, 4点掲載した。247の壺形土器は, 青ゴラを重機で剥ぎ取る際, 口縁部を欠損してしまっただが, 肩部から口縁部まで青ゴラに覆われ直立した状況で検出された (検出状況図参照)。不明瞭ではあるが, 掘り込みも見られた。

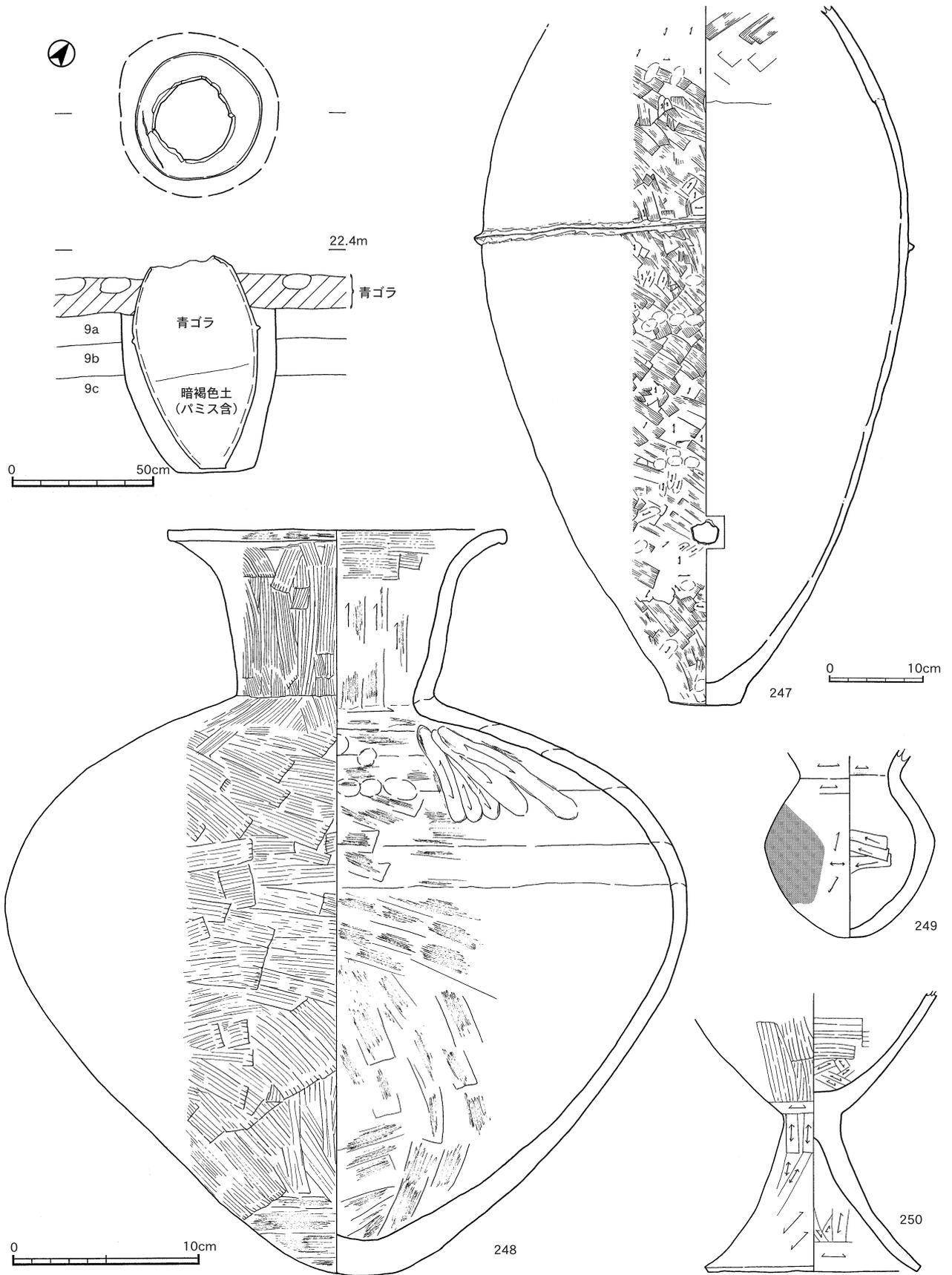
この土器は, 立石同様何かしらのシンボリックな意味合いで立てられた可能性がある。器形はナデ肩でスリムな長胴形をなし, 底部が平底の大型土器である。胴部中央部より肩部より一条のM字状突帯を施す。底部付近には穿孔も施す。248は口縁部が直立円筒状にやや広がり, 口唇部で急に外反する。口唇端部は平坦面をなし, 胴部器形は肩部が張り, 短胴形をなす。さらに, 底部はレンズ状を呈す。色調は, 指宿特有の赤褐色をしている。その他には, 高杯もしくは鉢形土器 (250) と小型丸底壺 (249) を検出した。時期的には古手のI段階と考えられる。



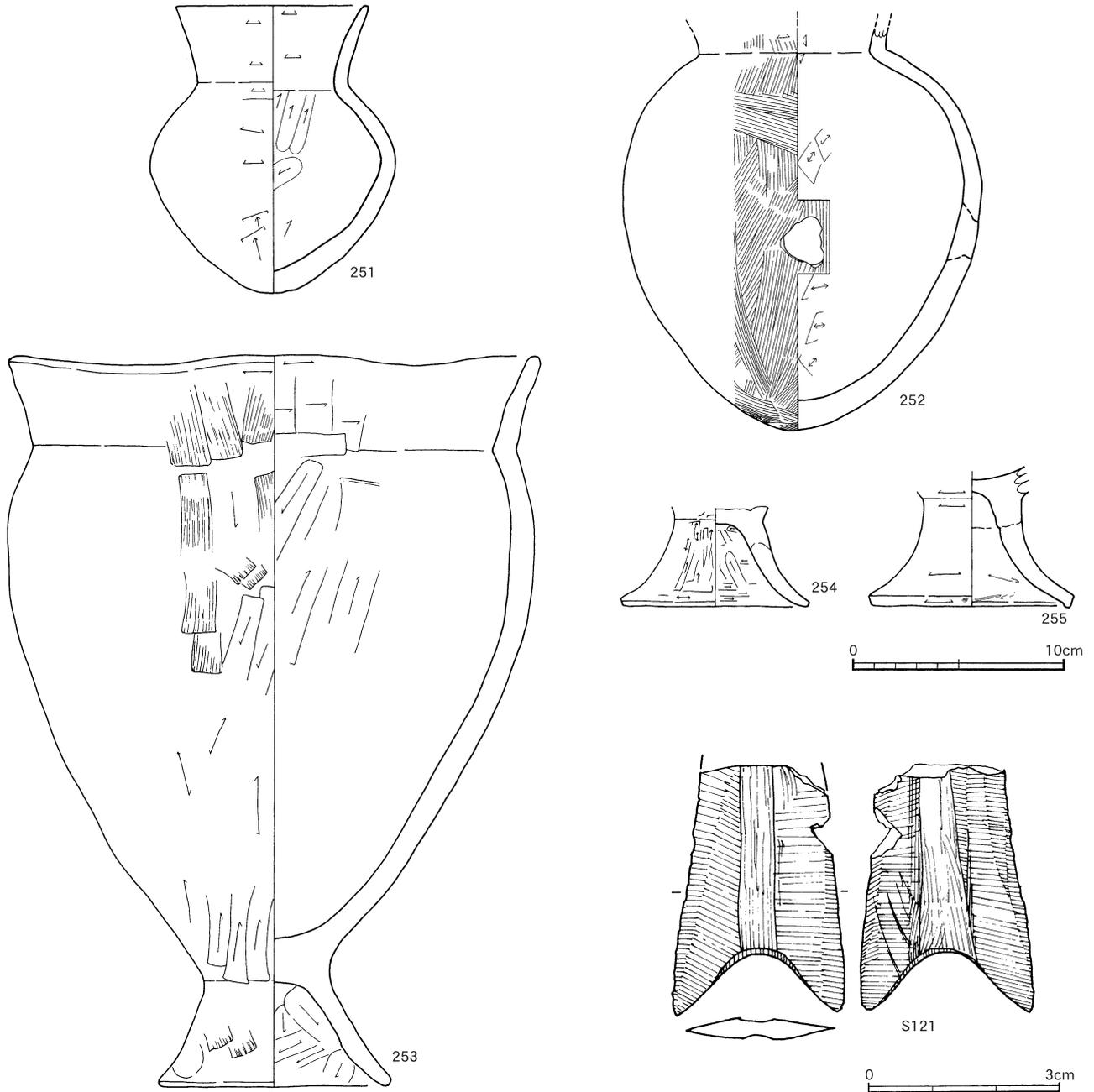
3) 4号壺棺墓周辺遺物

B-7区, 4号壺棺墓周辺遺物 (第65図, 251~255, S121) は, 壺形土器, 小型壺, 甕, 鉢と思われる脚2点, 磨製石鏃1点が検出された。

第63図 1・2号壺棺墓周辺遺物



第64図 3号壺墓周辺遺物



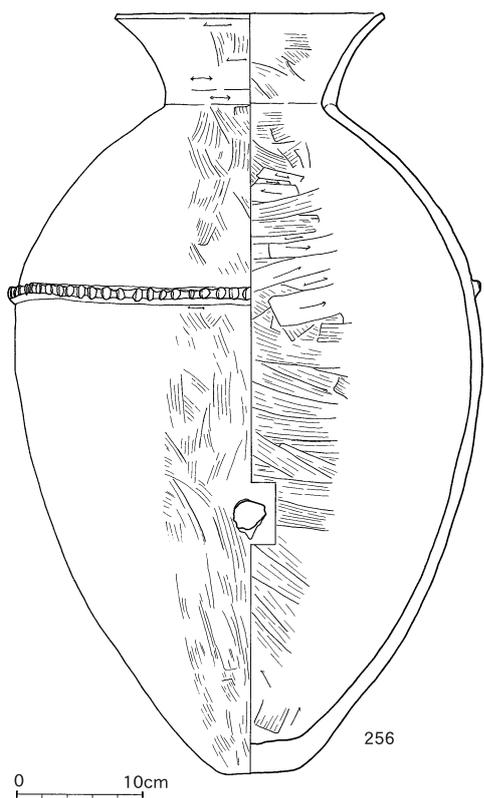
第65図 4号壺棺墓周辺遺物

253は甕形土器で、口縁部がくの字状に外反し内面の稜線が明瞭にある。口唇部は丸味を帯び、波打った形状をなす。底部も外反し脚内部が平坦である。252の壺形土器は、口縁部形状は不明であるが、ほぼ球形の器形にレンズ状の底部をなす。胴部中央に穿孔が施される。251の小型丸底壺は、壺棺4の壺内に口縁部を上意図的に置かれたと思われる状態で検出された遺物である。(第33図、4号壺棺墓参照)

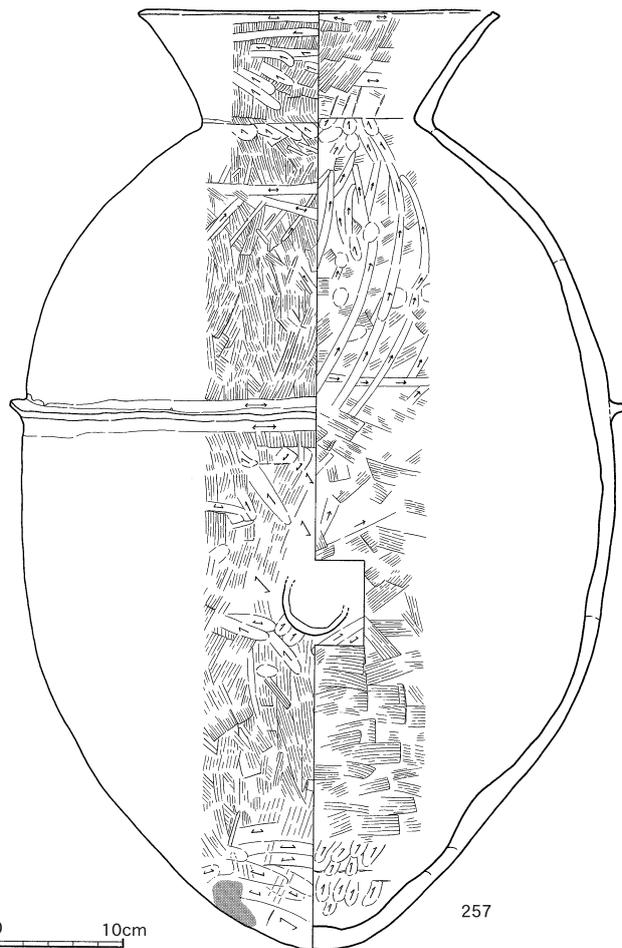
口縁部が直線状に外傾して開き、口唇端部は丸い。底部はレンズ状をなす。これらの遺物からI期該当遺物と考えられる。

4) 5号壺棺墓周辺遺物

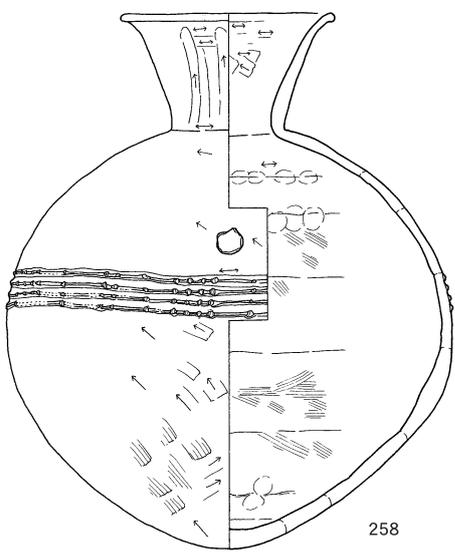
A-8区、5号壺棺墓周辺遺物(第66図、256)は、壺形土器1点のみ掲載した。口縁部がくの字状に短く外反し、口唇端部は平坦面をなす。胴部器形はナデ形状の逆卵形をし、平底を呈す。大型



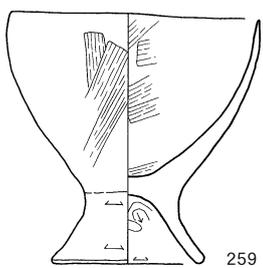
256



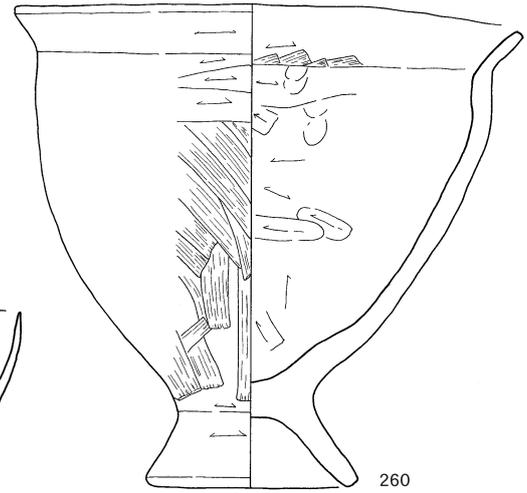
257



258

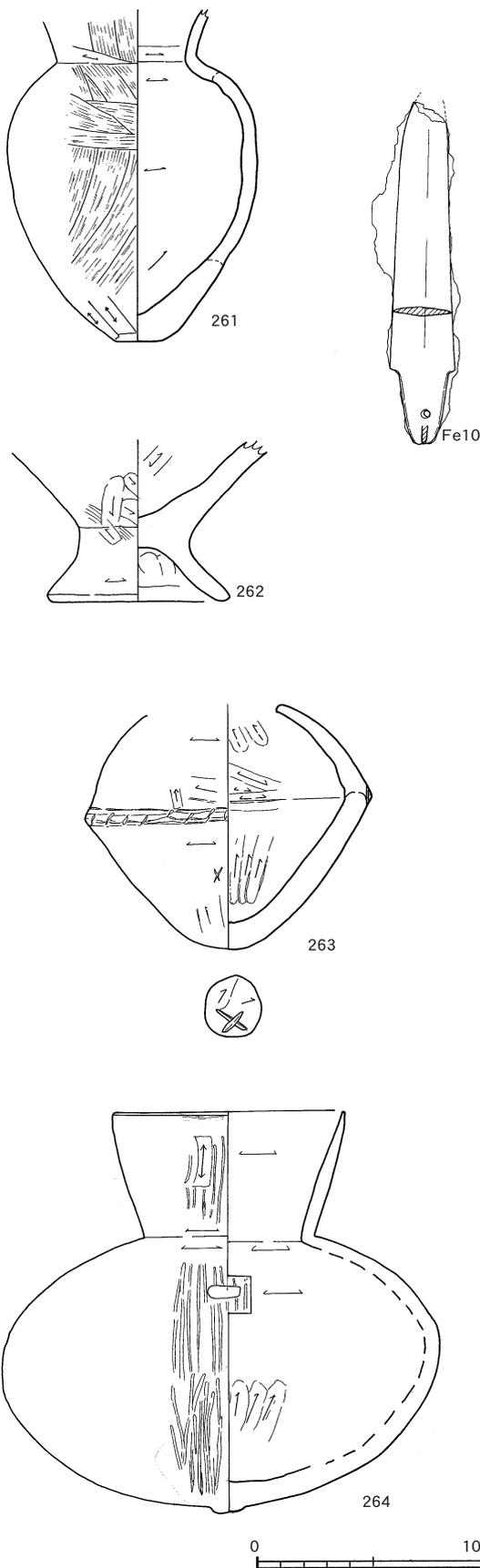


259



260

第66图 5·6号壶棺墓周边遗物



第67図 7・8号壺棺墓周辺遺物

壺で、胴部中央部よりやや上位に一条の刻目突帯文を施す。胴部下方に穿孔を施す。検出時は口縁部が欠損した状況であった。時期的にはI期に該当すると思われる。

5) 6号壺棺墓周辺遺物

B-9区の6号壺棺墓周辺遺物は(第66図, 257~260), 257の大型の壺形土器が横倒しでつぶれた状態で検出され, その下で258の壺形土器が検出された。甕形土器(260)と鉢形土器(259)は, ほぼ完形の状態で検出されている。257の壺形土器は, 口縁部がくの字状に外反し, 口唇端部は平坦面をなす。胴部器形はなで肩をしているものの, 肩部から胴部下位までほぼ直線状に下り, 底部にかけ逆三角形状に急にすぼまる。底部はレンズ状をなし, 底部付近には黒班が観察できる。胴部中央よりやや上位に台形状の一条突帯を, 胴部下位に穿孔を施す。258の壺形土器は, 口縁部が直線状に外傾して立ち上がり, 口唇部で急に外反する。口唇端部は平坦面をなす。胴部器形は球形をなし, レンズ状の底部をなす。胴部中央には4条の刻目突帯を, その上位に穿孔を施す。260の甕形土器は, くの字状に外反し胴部は緩やかに広がり底部は外反しながら開く。形は図面上の右側が傾いているような状況である。259の鉢形土器は, 口縁部が内弯し, 底部は直線状に開く。これらの遺物から, I期該当遺物と思われる。

6) 7号壺棺墓周辺遺物

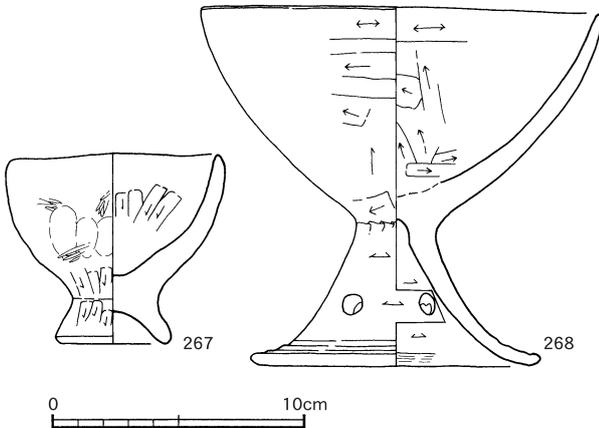
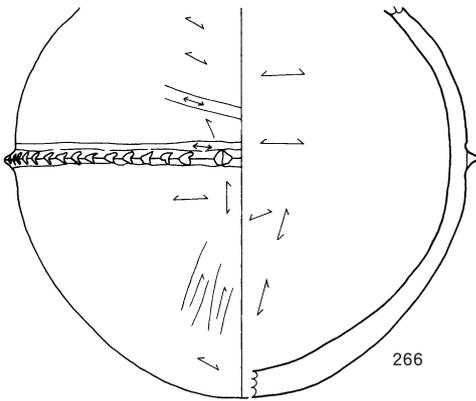
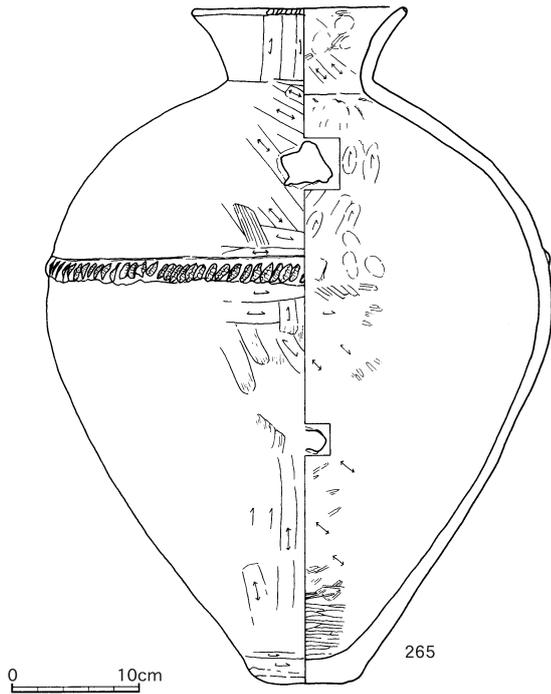
C-9区の7号壺棺墓周辺遺物として(第67図, 261・262), 壺形土器, 甕・鉢形土器の底部の2点を記載した。

261は, 小型丸底壺で, くの字状に外反し平底を呈す。262の甕・鉢形土器は外反しながら天井部が平坦である。遺物の欠損が大きいため時期は不明である。

7) 8号壺棺墓周辺遺物

A-9・10区8号壺棺墓周辺遺物として(第67図, 263・264・Fe10), 壺形土器2点, 鉄製品1点を掲載した。

264は小型丸底壺で, 口縁部が直行しながらやや開く。底部には円形状の突起があり胴部は球形を呈す。調整は, 丁寧なミガキが中心である。



第68図 9号壺棺墓周辺遺物

263は、長頸壺の胴部で胴部の屈曲部が緩やかなソロバン形をなし、底部は、レンズ状を呈す。一条の刻目突帯を施す。底部には、太めの「×」の記号が、胴部下位には細めの「×」の記号が施してある。Fe10は、短剣で茎部は台形状にすぼまり、把部境に段をもつ。目釘穴が一カ所に確認できる。鹿児島大学准教授の橋本達也氏によると鉄剣の時期認定は非常に難しいとのことであるが、土器の様相からI期該当遺物と考えられる。

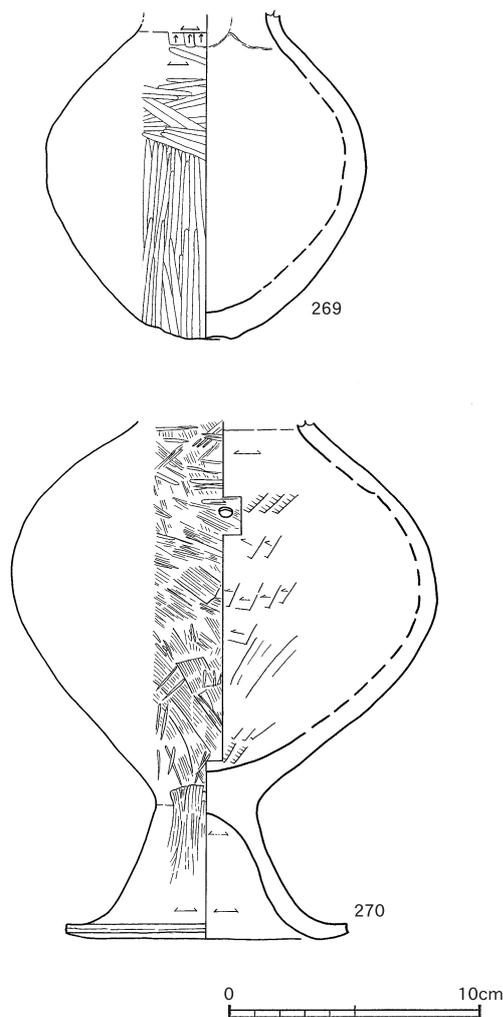
8) 9号壺棺墓周辺遺物

B-9区、9号壺棺墓周辺遺物(第68図, 265~268)は、壺棺より約1m弱上層で265の壺形土器と板石15が検出された。この板石15の下より土器6点検出され、その中の壺形土器(266)、高杯形土器(268)、鉢形土器(267)各1点を掲載した。(出土状況図参照)

265の壺形土器は、口縁部が短く、くの字状に外反し、ナデ形状に膨らみをもつ逆卵形の器形をなし、平底を呈す。胴部最大幅の位置に一条の刻目突帯を施し、底部近くに穿孔も施す。266の壺形土器は、肩部より上の口縁部が欠損しているが、球形の器形を呈し、胴部中央に一条の刻目突帯を施す。268の高杯形土器は、杯部が碗形で、口唇部がやや内湾する。脚部は緩やかに広がり底部で外反する。底部は工具と思われる道具で三条の段を施し、脚部には対の透が施される。壺形土器は、I期に該当すると思われるが、高杯形土器は、在地の土器と少し異なり、瀬戸内系土器の土師器に類似する。その土師器編年で見ると、I期該当と思われる。

9) 12号壺棺墓周辺遺物

C-10区の12号壺棺墓周辺遺物(第69図, 269・270)は、削平を受けていたものの、辛じて包含層が残っていた。269の壺形土器と270の特殊土器の2点掲載した。269は、小型丸底壺と思われる。口縁部は欠損しているが、胴部器形は球形をなす。270も口縁部が欠損し、全体器形は不明であるが、ほぼ球形の胴部に、直線状に開き、脚端部が上方に外反する。肩部には焼成前の穿孔が施される。この土器は、他地域の土師器を模した台付壺と思われる。これらの遺物から、I期該当遺物と考えられる。



第69図 12号壺形墓周辺遺物

10) 13号壺形墓周辺遺物

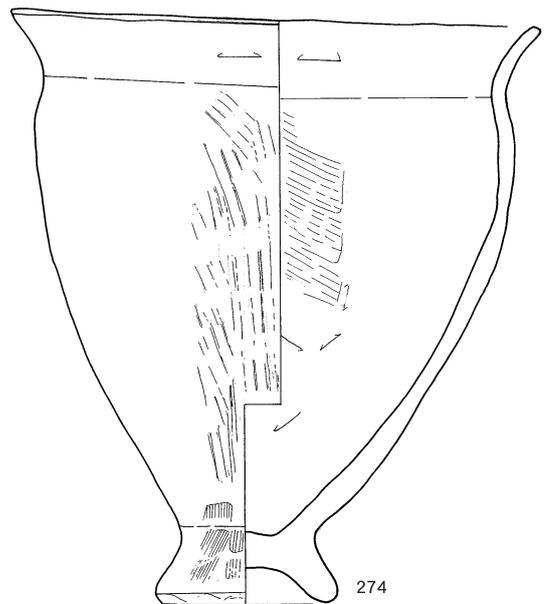
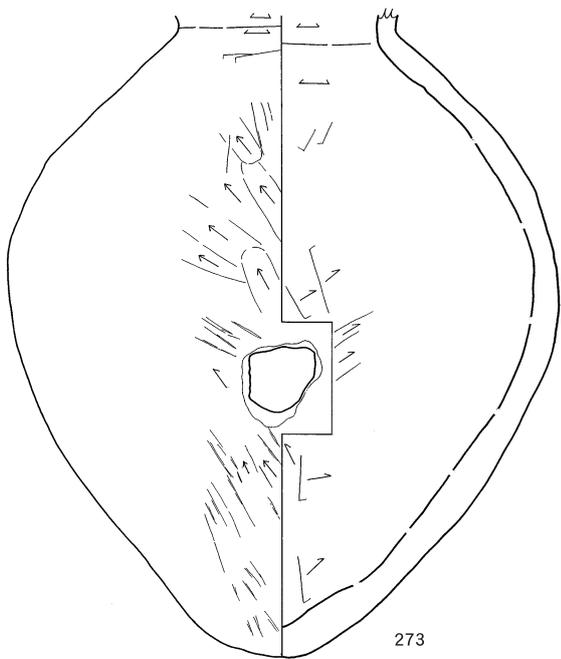
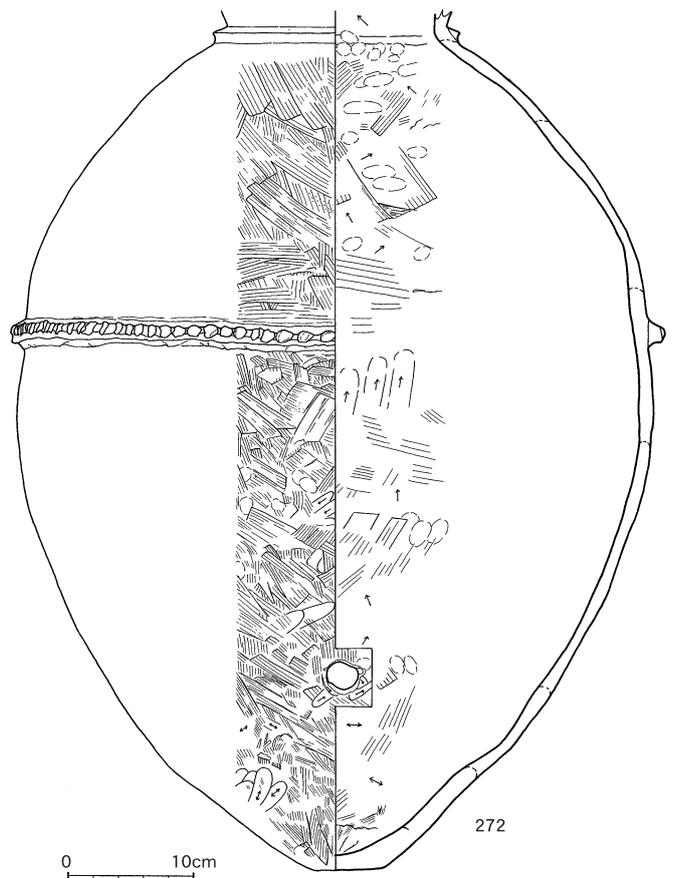
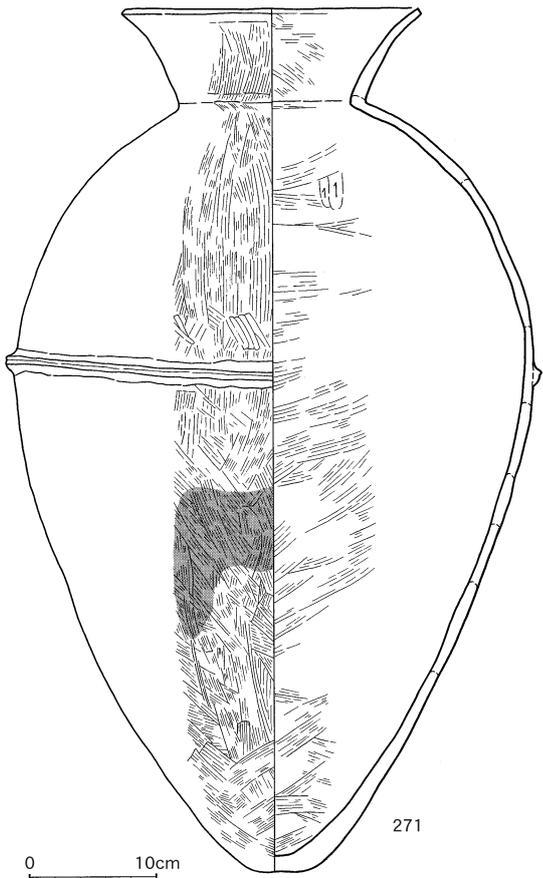
A-10区, 13号壺形墓周辺遺物(第70図, 271~274)は, 壺形墓本体の両脇に大型の壺形土器(271, 272)が対になり東側方向に斜位に立った状態で検出され, 271の壺形土器の胴部下方には甕形土器(274)や壺形土器(273)が寄り添うように検出された。272の壺形土器は, 口縁部が欠損しているが, 頸部に一担一段の平坦面をなし, なで肩で長胴卵形の胴部に平底を呈す。ほぼ胴部中央に一条の台形状刻目突帯を施す。穿孔はない。胴部中央には, 丹塗痕が観察できる。もともとは, 肩部に丹塗りを全体的に施していたのであろうか。271の壺形土器は, 口縁部がくの字に外反し, 口唇部は平坦面をなす。胴部器形はナゲ肩の逆卵形をなし, 平底を呈す。胴部中央よりやや上位に断面台形状の一条突帯を施す。穿孔はない。274の甕形土器は, 口縁部がくの字に外反し, 口縁内部

に稜線がはっきりと観察できる。底部は外反し天井部は平坦である。273の壺形土器は, 口縁部が欠損しており, 不明であるが, 丸味を帯びた菱形状の器形にレンズ状の底部を呈す。突帯はないが, 胴部中央に大きな穿孔はない。これらのことからI期の新しい時期該当と思われる。

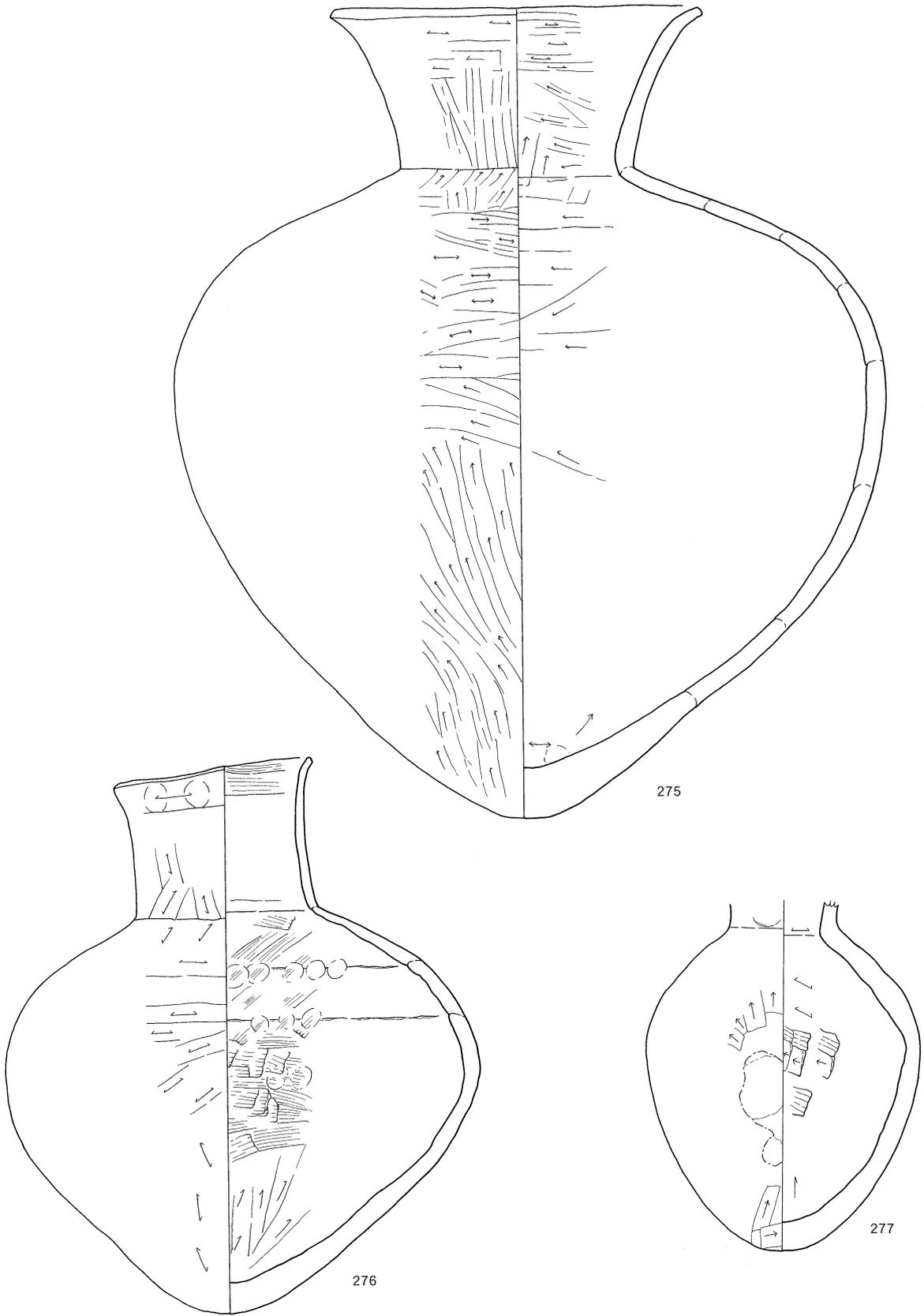
11) 14号壺形墓周辺遺物

C-10区, 14号壺形墓周辺遺物(第71図~第72図, 275~282)は, 9号円形周溝墓との切り合いを見せる為ブロック分けは難しいが, 壺形土器7点, 埴形土器1点, 蓋形土器1点を掲載した。検出時, 275と278が上に, 277と280と283が, これらの壺を下支えするような形で検出された。意図的に置いたとしか思われなような検出状況であったが, どのような意味なのか不明である。(遺物出土状況図参照)

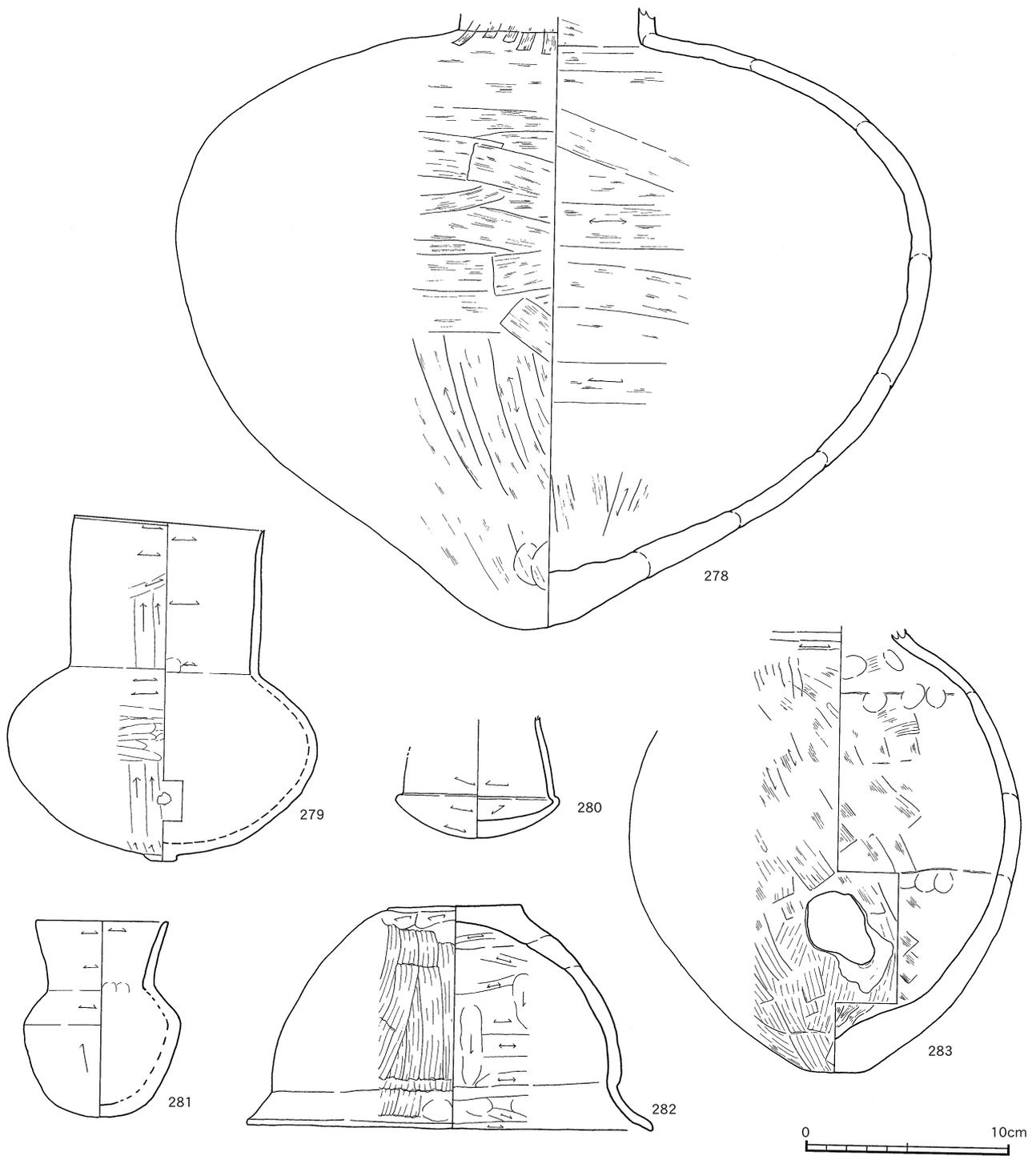
275と278の壺形土器は, 類似器形であるが, 円筒状の口縁で口唇部が外反し, 口唇部は平坦面をなす。肩が大きく張り, 底部は尖底を呈す。色調は, 指宿特有の赤褐色である。275の壺形土器より, 278の壺形土器の方が肩が大きく張る。これらの壺を支えるように検出した277, 280, 283の土器であるが, 276の壺形土器は, 口縁部が円筒形状にほぼ直行して立ち上がり, 口唇部でやや外反する。胴部器形は, 肩が大きく張り, 底部にかけ急にすぼまる。277の小型丸底壺は, 口縁部が欠損して不明であるが, 長胴形をなし, レンズ状の底部をなす。279の小型丸底壺は, 口縁部が直行して立ち上がり, 口唇部は三角形をなす。胴部は球形をなし, 底部には円形の突起を, 胴には四角形状の穿孔を施す。282の蓋形土器は, 鉢形土器の転用と思われ口縁部は大きく外反し, 底部は平底である。内面口縁部にススが付着している。これらは, 全てI期該当の遺物と思われる。



第70图 13号壶棺墓周边遗物



第71图 14号壶棺墓周边遗物



第72図 14・15号壺棺墓周辺遺物

12) 15号壺棺墓周辺遺物

C-9区, 15号壺棺墓周辺遺物(第72図, 283)は, 9号円形周溝墓の周溝部を切っている為, ブロック分けするのが難しい。壺形土器1点

のみの(283)掲載である。器形からして, I期該当遺物と思われる。

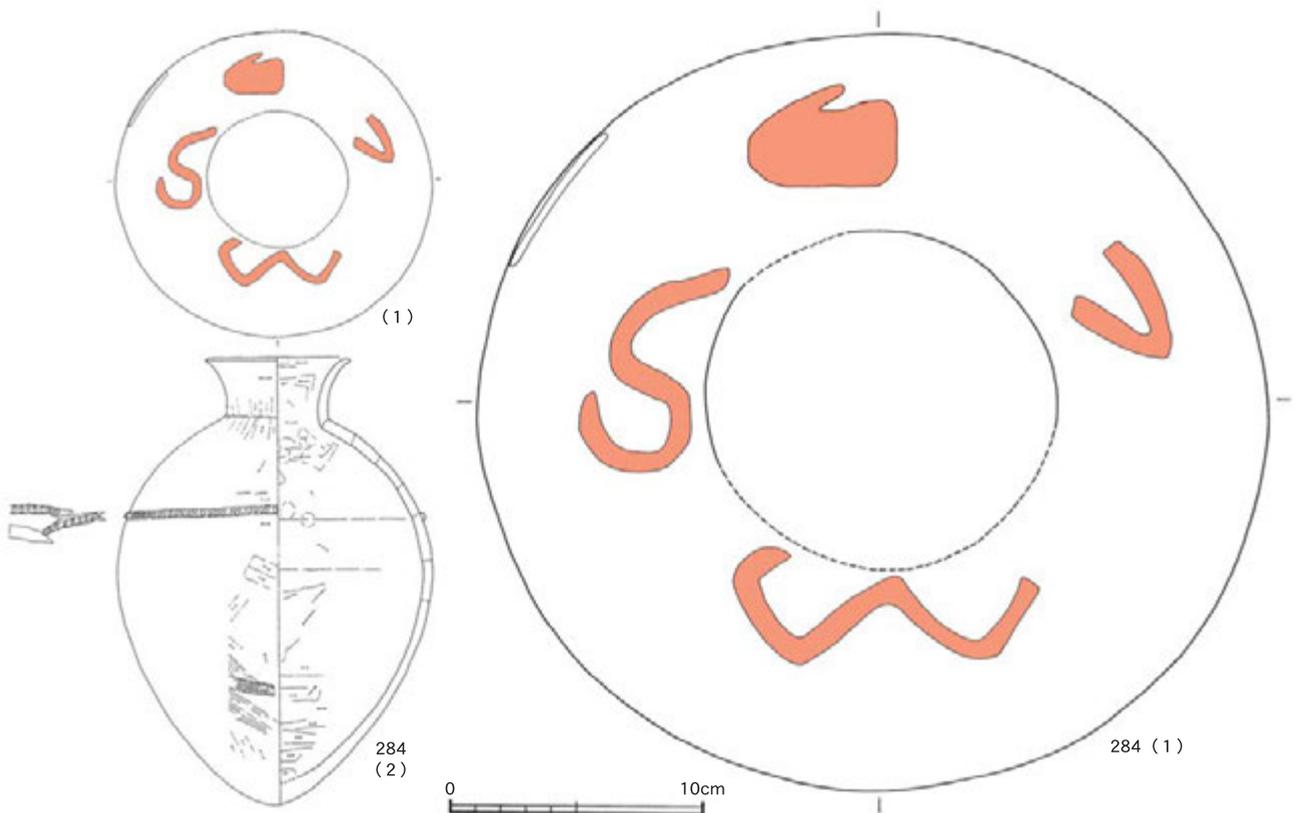
13) 16号壺棺墓周辺遺物

D-8区, 16号壺棺墓周辺遺物(第73図~第75図, 284~288)は, 3号土坑墓を切るように検出されている為, 周辺遺物認定が難しい。壺形土器2点, 甕形土器1点, 埴形及び蓋形土器各1点掲載した。

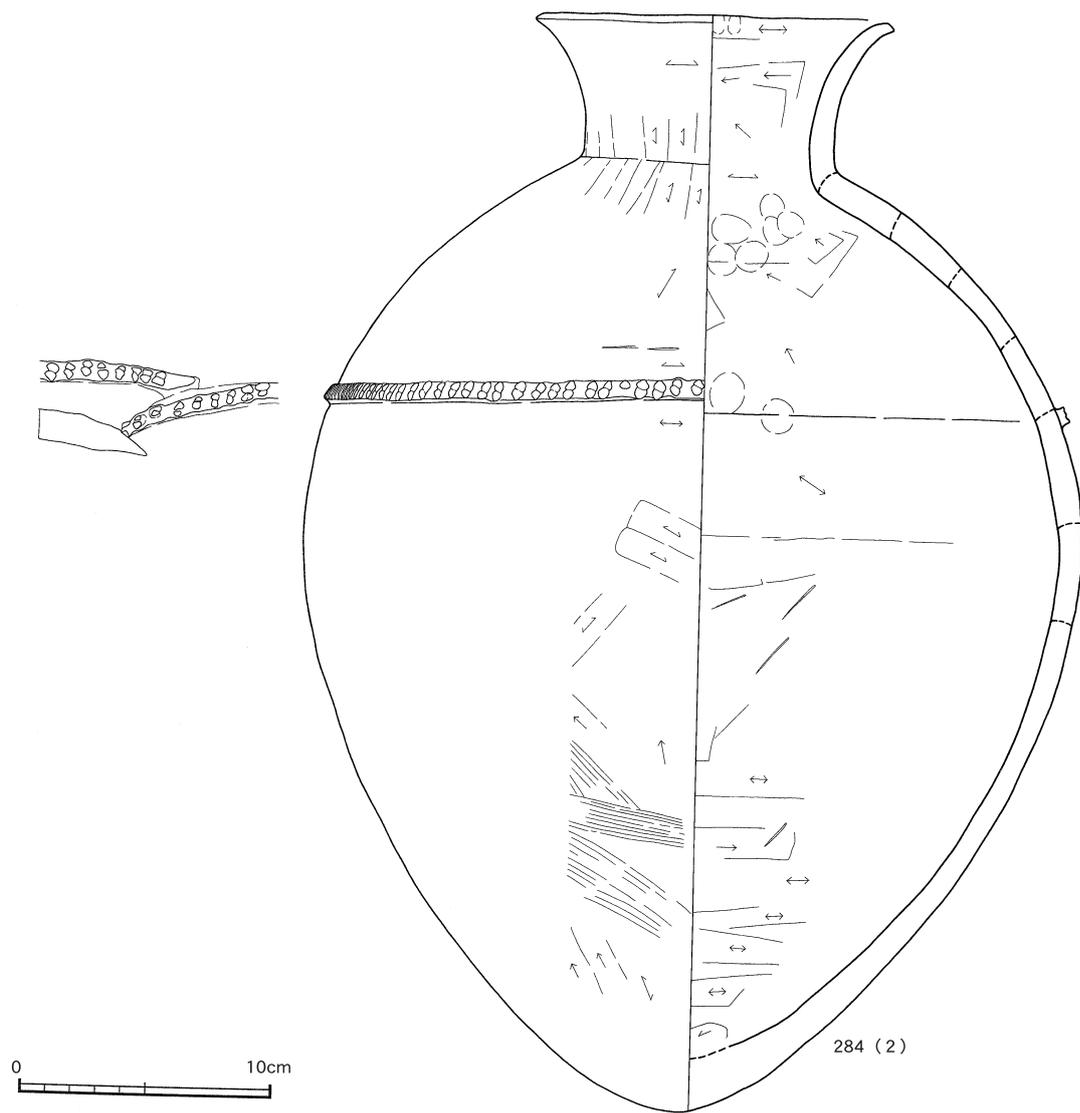
284の壺形土器は, 口縁部が短く, く字状に外反する。口唇端部は平坦面を呈す。胴部器形はなで肩で, 膨らみをもった逆卵形をなし, 尖底をなす。肩部よりやや下位に一条の刻目突帯を施すが, 穿孔はない。この壺形土器の特徴は, 肩部に「S」, 「M」, 「㊟」, 「へ」という形に類似し, 対の状態でベンガラ文様が施されている。記号的なものか絵画的なものか, そして, これらの文様のもつ意味は何か非常に興味深い遺物である。285の壺形土器は, 口縁部がくの字状に外反し, 口唇

端部は丸味を帯びる。胴部器形はなで肩のスリムな逆卵形をなし, 平底を呈す。ほぼ胴部中央に一条の刻目突帯を, 胴部下位に穿孔を施す。286の埴形土器は, 指宿特有の赤色をしている。この壺形土器の特徴は, 頸部から胴部下位の全面に線刻と思われる刻みが見られることである。しかしながら, 線刻を施した後, ナデ消した痕が観察でき, 線刻の表現内容は不明である。287の甕形土器は, 口縁部がくの字状に外反し, 胴部境に段をもつ。底部は外反しながら開き, 天井部は平坦である。口唇部は波打つような形状をなす。288の蓋形土器は, 疑似口縁より外反し, 底部はレンズ状をなす。器高はさほど高くない。

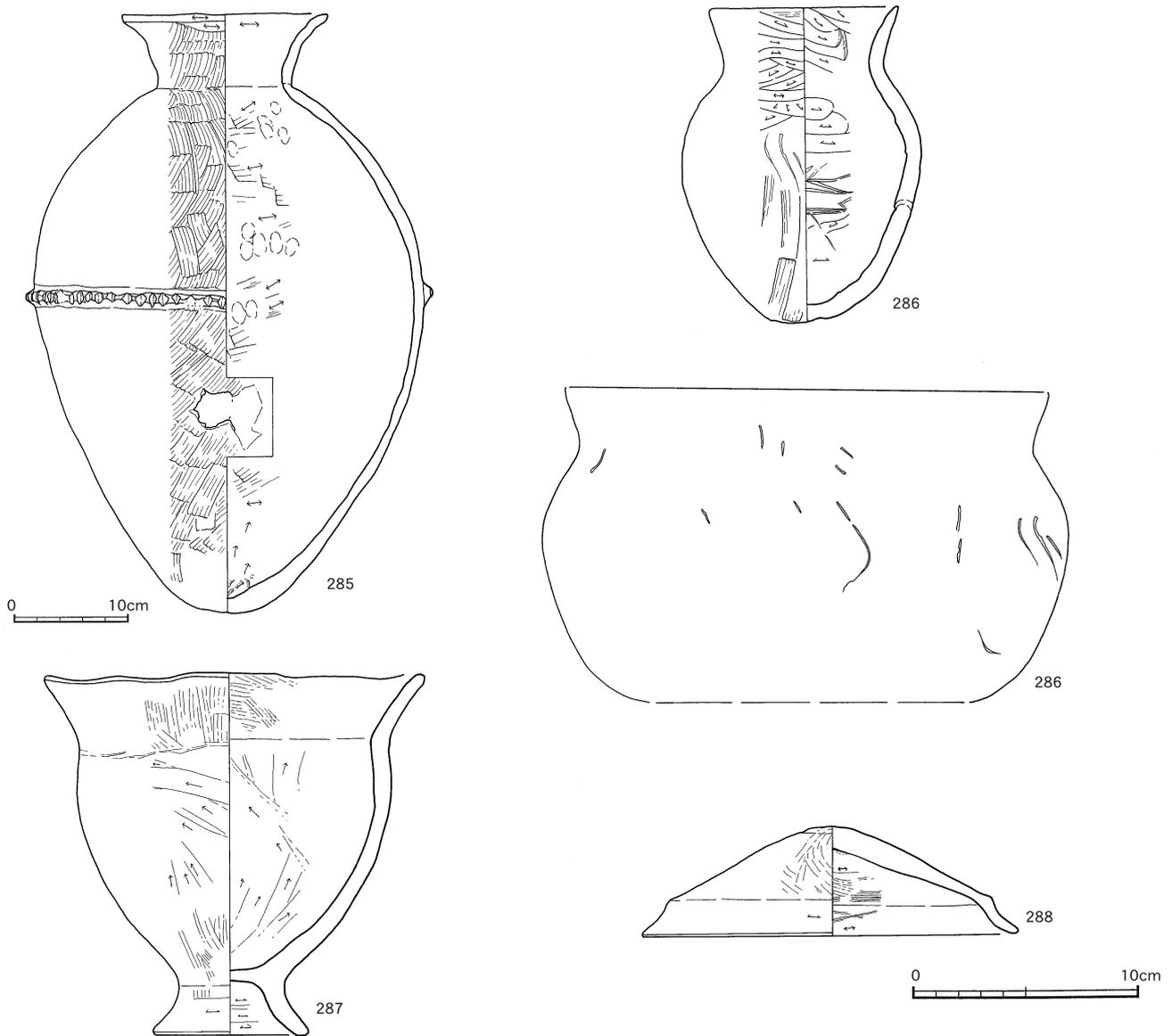
これらの遺物から, I期の終わりからII期のはじめにかけての遺物と考えられる。



第73図 16号壺棺墓周辺遺物(1)



第74图 16号壺棺墓周边遺物(2)



第75図 16号壺棺墓周辺遺物(3)

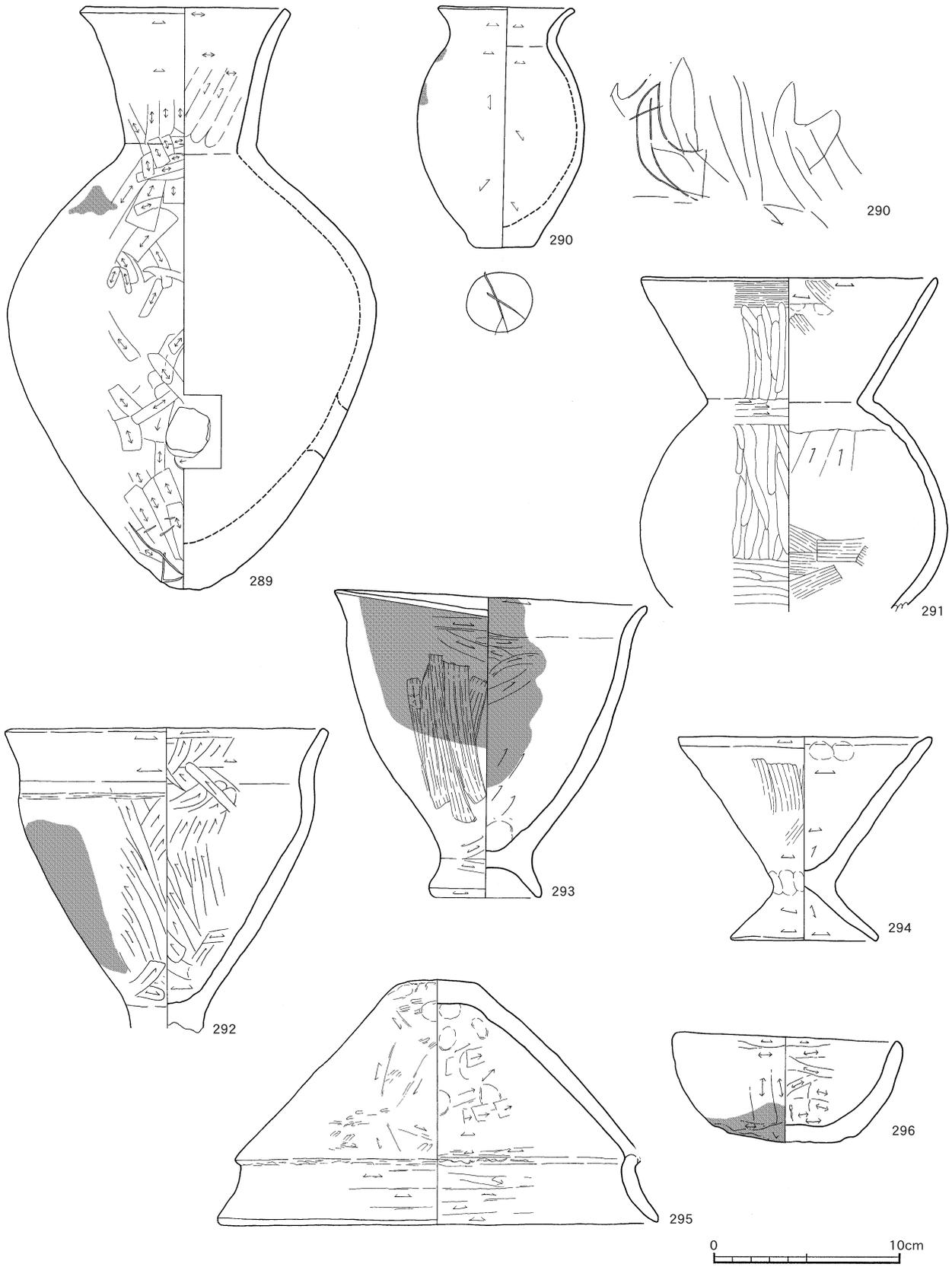
(2) 円形周溝墓周辺遺物 (第76図～第85図)

1) 1号円形周溝墓周辺遺物 (第76図, 289～296)

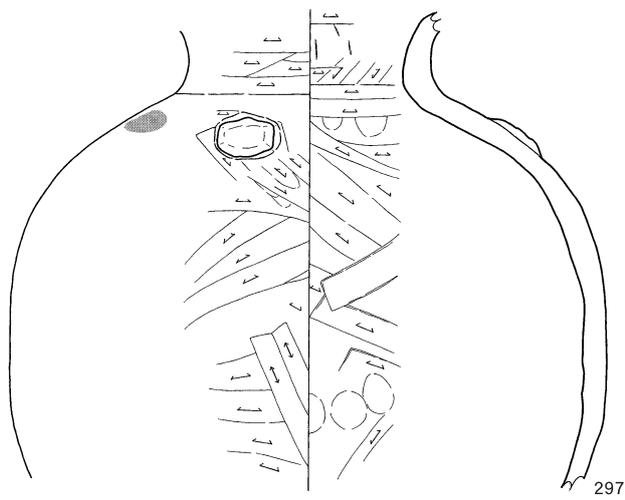
壺形土器 3点, 甕形土器 2点, 鉢形土器 2点, 蓋形土器 1点を掲載した。290・293・295は主体部上面で, 291は周溝部で検出された。289の壺形土器は口縁部が外傾気味に直行して立ち上がり, 口唇部でやや外反する。口唇部は平坦面を呈す。胴部は縦長菱形状で, 底部は丸底である。290の壺形土器は赤橙色をし, 胴部に線刻を施してある。この線刻は, 絵画的なものと思われるが, 不明である。また, 底部には「×」印のような記号的線刻が施されている。口縁部が強く外反し, 平底で

ある。291の壺形土器は底部が欠損しているが, 口縁部が外傾して直線状に大きく開き, 胴部は円形状を呈す。厚さが薄く, ミガキを施す。小型丸底壺と思われる。292の甕形土器は, 口縁部がくの字状に外反し, 胴部との境に段をもつ。底部は欠損している。293の甕形土器は, 口縁部が緩やかに外反し, 底部は弯曲が緩やかで, 天井部が平坦である。

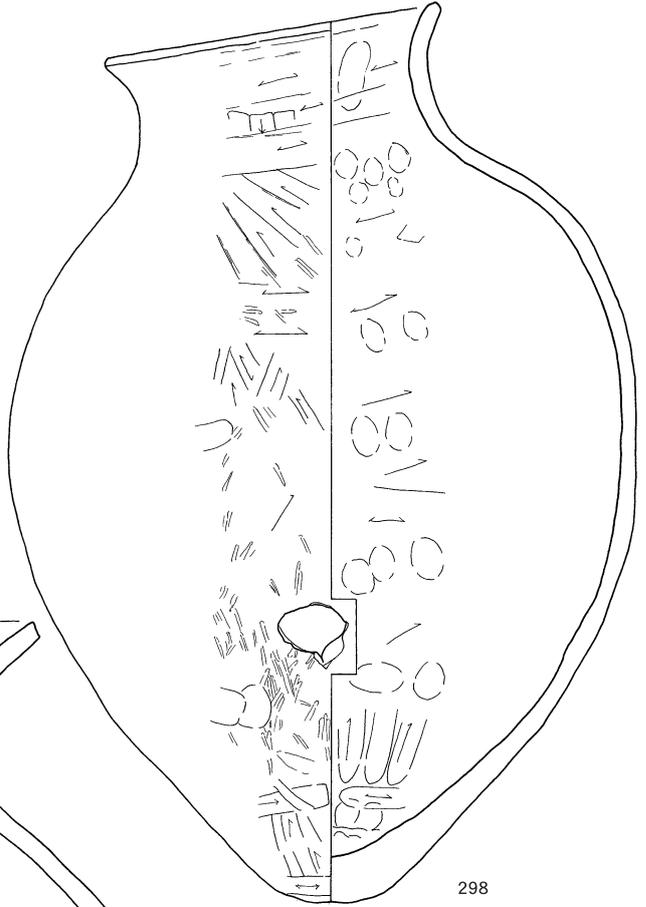
295の蓋形土器は, すり鉢状の形をなす。口縁部は擬似口縁をなし, 外反する。口唇部は丸味を帯び, 平底をなす。受け部内面にススが付着する。これらから, II期の該当遺物が291・294・295で, あとはI期であると思われる。



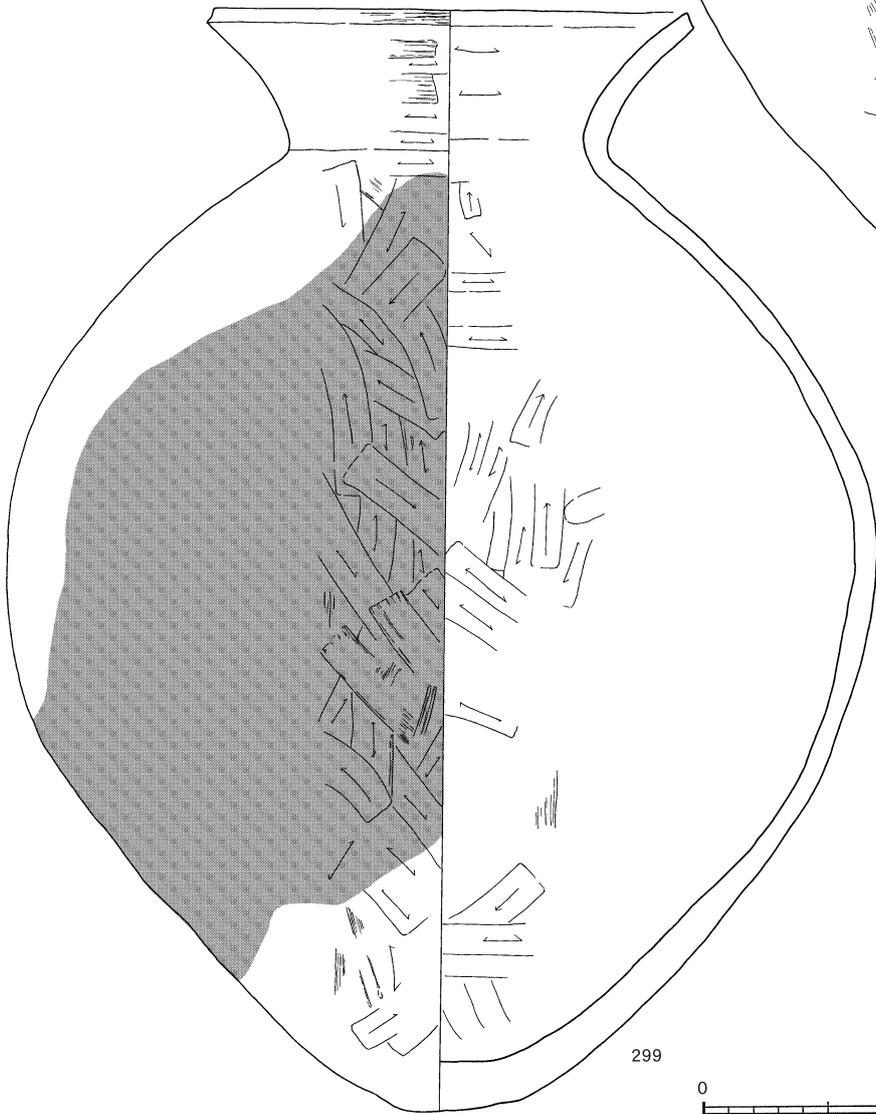
第76图 1号円形周溝墓周辺遺物



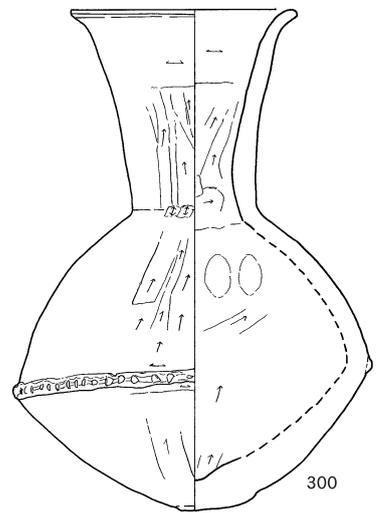
297



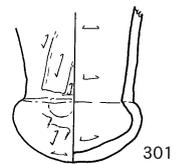
298



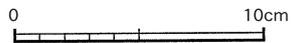
299



300



301



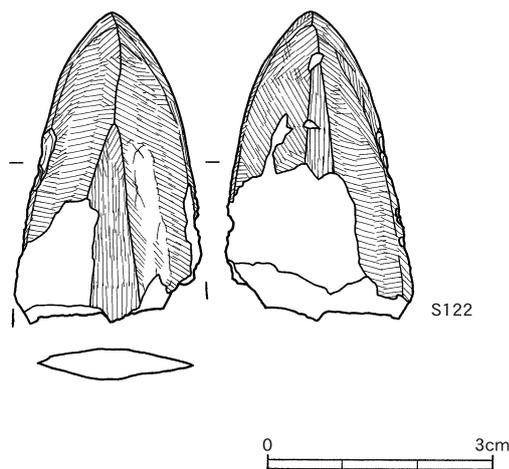
第77图 2号円形周溝墓周辺遺物(1)

2) 2号円形周溝墓周辺遺物

(第77図～第78図, 297～301)

壺形土器は、297～300の4点、埴形土器は301の1点、磨製石鏃1点を掲載する。壺形土器は全て無文である。297の壺形土器は、口縁部と底部が欠損しているが、肩の張った器形を呈し、肩部に、3カ所の円形浮文を施す。全体的に工具ナデを施す。298の壺形土器は、口縁部が斜位に傾き、不安定な形状をなす。口縁部は短く緩やかに外反し、なで肩の長胴形をなす。底部は安定した丸底である。底部近くに穿孔を施し、工具ナデ及びナデ後、胴部下位に細かなミガキを施す。299の壺形土器は口縁部が短く、くの字状に外反し、口唇部が平坦面を呈す。胴部はなで肩の楕円形状で不安定な平底を呈す。内外面とも丁寧な工具ナデである。胴部には黒班が観察できる。300は長頸壺で、胴部屈曲が鈍く、不安定な平底を呈する。胴部屈曲部に一条の刻目突帯を施している。屈曲部がやや下方に下がった状態である。301は、口縁部が外傾しながら長く立ち上がり、胴部は丸味をもつ。埴形土器と思われる。S122の磨製石鏃は剥離面があるが、非常に丁寧な作りをなす。

これらの遺物から、I期該当の遺物と思われる。



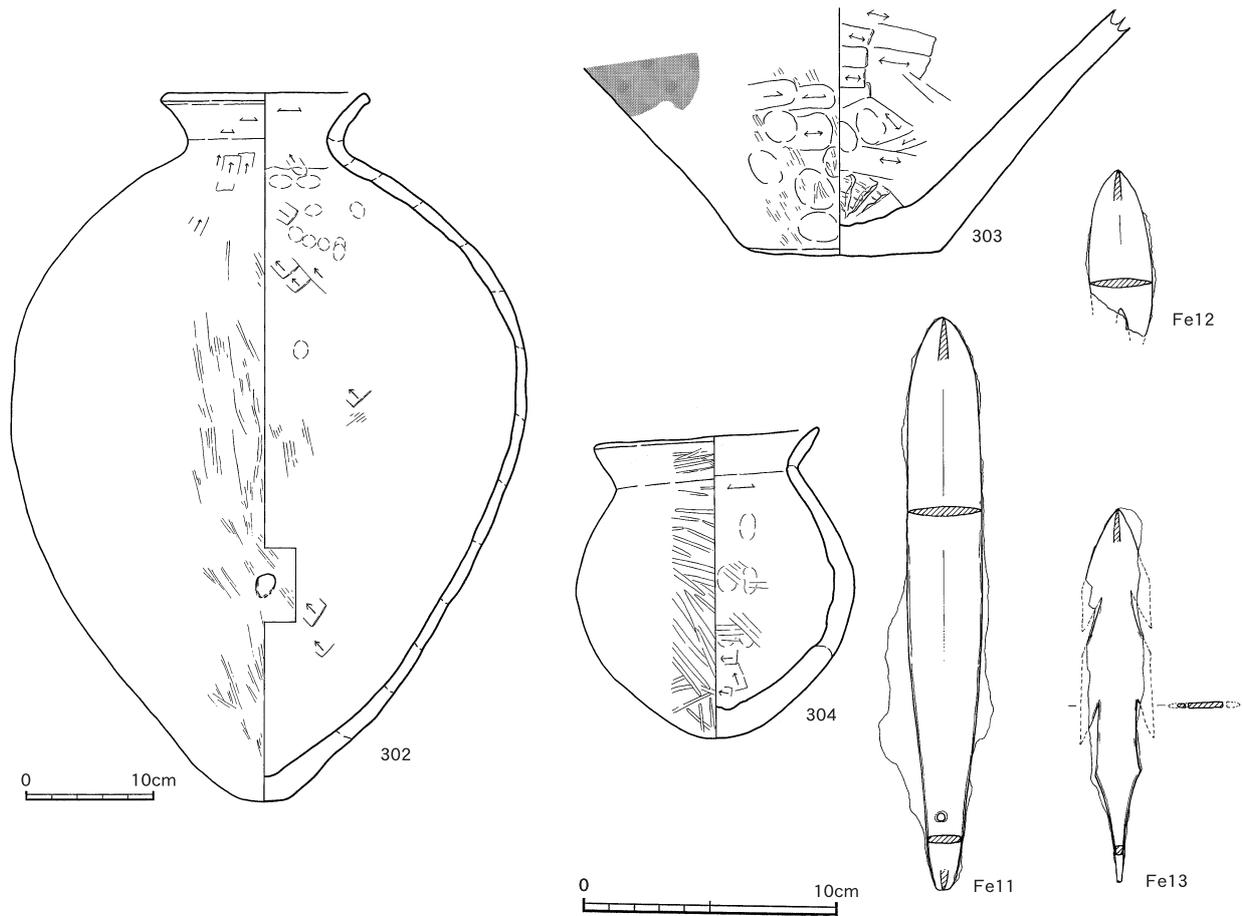
第78図 2号円形周溝墓周辺遺物(2)

3) 3号円形周溝墓周辺遺物

(第79図, 302～304, Fe11～Fe13)

壺形土器3点、鉄製品3点を掲載した。302の壺形土器は口縁部が短く、くの字状に外反し口唇部は平坦面を呈す。胴部器形はナデ肩のやや長胴気味の逆卵形で平底を呈す。胴部下方には穿孔を施し、全体的な調整は不明瞭であるが刷毛目調整が観察できる。304の小型丸底壺は、口縁が短く、くの字状に外反する。口唇部は断面三角形状をなす。胴部器形は、楕円形状をなし、底部は丸底である。外面はナデ後全体的にミガキを施す。Fe11は関のない剣で、目釘穴が一ヶ所ある。長さ23cm、鋒先は鋭利で剣身には鑄を有す。関部から茎部尻へ細く仕上げている。Fe12は柳葉透孔鉄鏃の鏃身部である。尖根式に属し、鏃身部は両丸造りである。Fe13は、腸扶鏃である。腸扶部分を欠損しているが、二段腸扶柳葉鏃である。全長14.7cmで腸扶部は欠落している。鏃身部関部は二段の逆刺を呈し茎部は茎部端で細くなる。断面は方形である。

以上のことから土器は、I期該当であるが、鉄製品に関してはIV期、5c中期のものと思われる。このことから、円形周溝墓の時期(弥生時代終末期)と祭祀(5c代)の二つの場の利用が考えられる。



第79図 3号円形周溝墓周辺遺物

4) 4号円形周溝墓周辺遺物

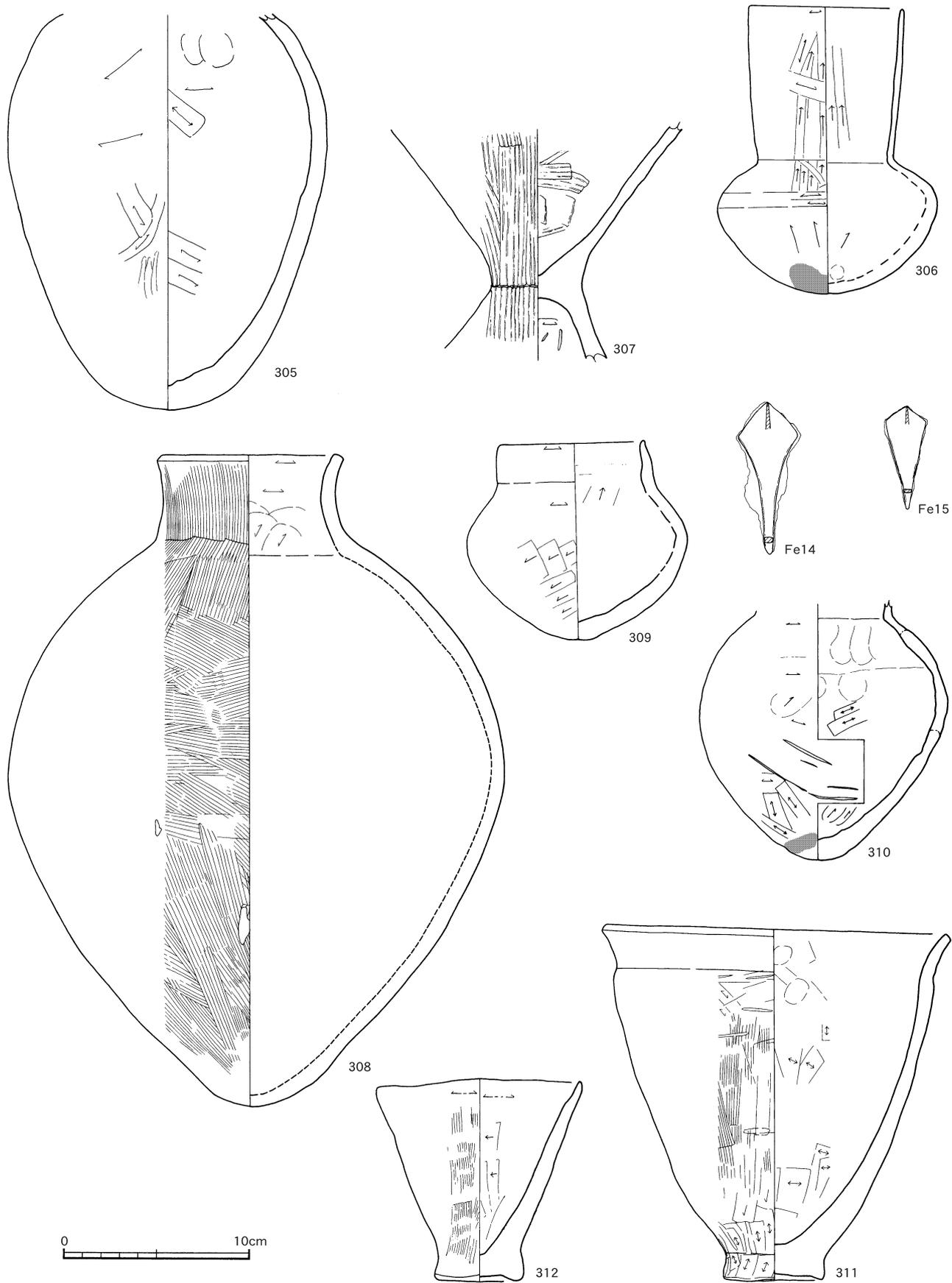
(第80図, 305~307, Fe14・Fe15)

壺形土器2点, 鉢形土器1点, 鉄鏃2点を掲載する。305は, 口縁部が欠損しているが, ナデ肩で長胴形の丸底である。306は長く直行する口縁部と丸底の胴部をもつ小型丸底壺である。この小型丸底壺は, 口縁部が外へ開いて直行して立ち上がり, 胴部は球形をなし脚台が付く。Fe14, 15とも圭頭鏃で, 14は長三角鏃で, 15は刃部が短い。これらから, II期該当遺物と考えられる。

5) 5号円形周溝墓周辺遺物(第80図, 308~312)

壺形土器3点, 小型丸底壺, 甕形土器・鉢形土器各1点を掲載した。308は口縁部が短く内傾気

味に立ち上がり, 口端部で緩やかに外反する。口唇端部は平坦面を呈す。頸部から胴部へは段はなく, ナデ肩の丸味を帯びた菱形の器形で, 丸みのある底部を呈する。刷毛目状の丁寧なナデを施し, 胴部中央下に, 鋭利なもので打ち欠いたと思われる穿孔がある。309は丸みを帯びた胴部から, 頸部でやや内側にまっすぐ伸びる小型丸底壺と思われる。310の壺形土器は, 胴部に直線状の線刻と思われる線がある。これが記号なのか, 絵画を描いたあと, ナデ消したのかはつきりしない。311の甕型土器は, 口縁部がくの字状に外反しているが, 脚部が非常に短く, 底部天井面がレンズ状をしており, 上げ底のような感じである。これらの遺物から, I期該当遺物と思われる。



第80图 4·5号円形周溝墓周辺遺物

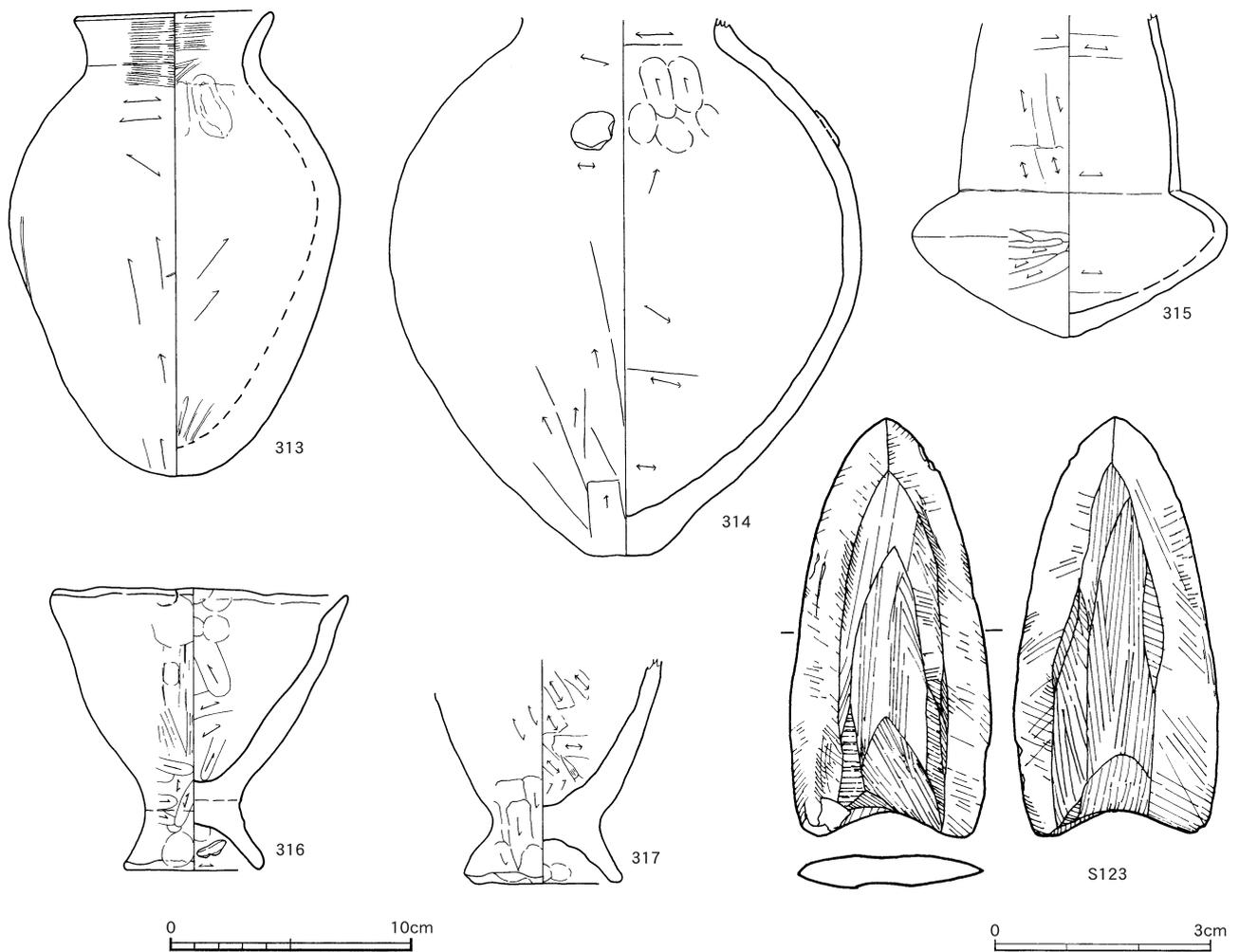
6) 6号円形周溝墓周辺遺物

(第81図, 313~317, S123)

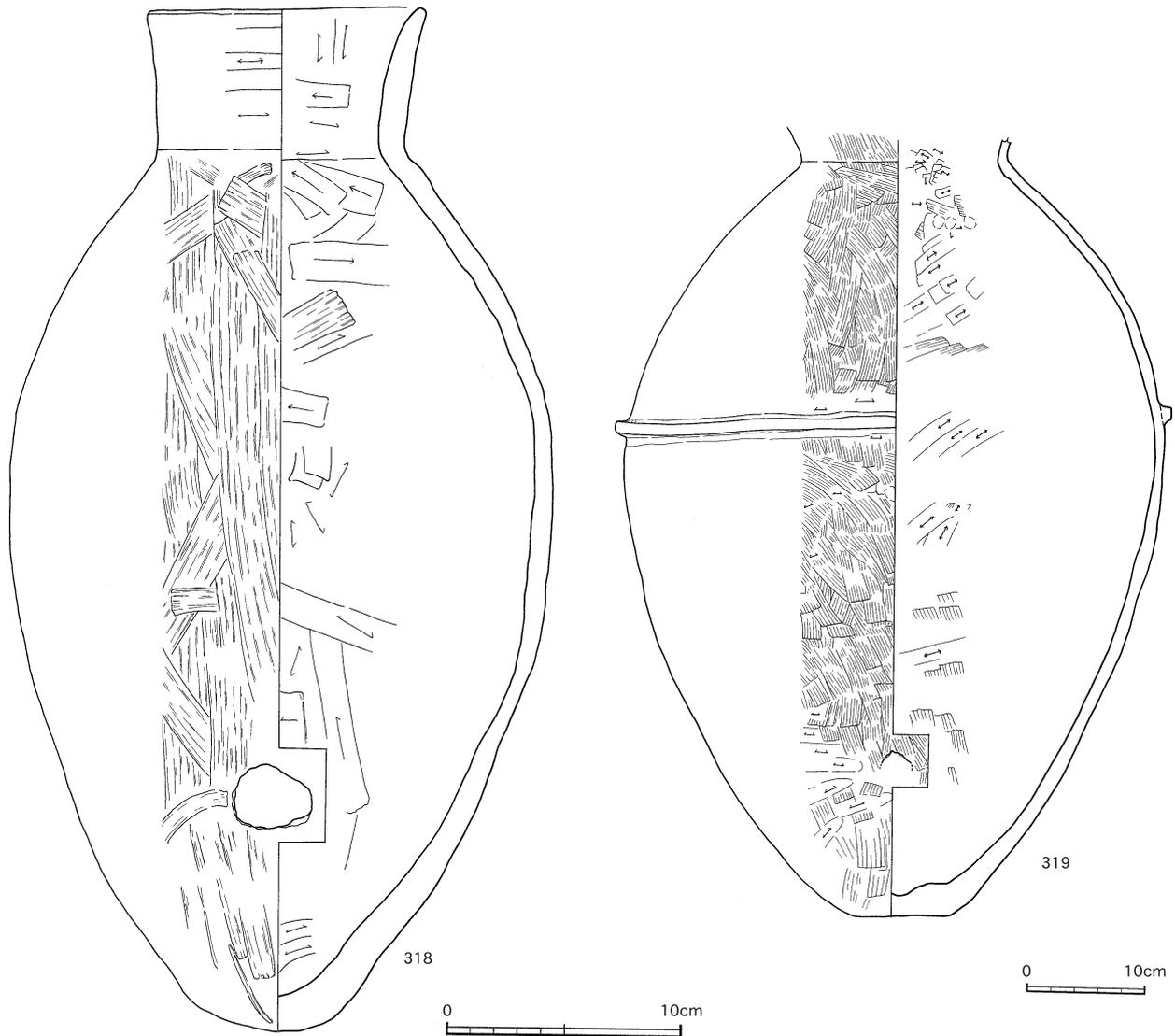
壺形土器3点, 鉢形土器2点, 磨製石鏃1点を掲載した。313は, 口縁部が短く, く字状に外反し, 菱形凧のような胴部に丸みを帯びたレンズ状の底部をなす。314は口縁部が欠損しているが, なで肩で胴部中央が膨らむ楕円状をし, 底部は不安定な平底である。肩部に円形浮文を施す。315は, 埴形土器と思われるが, 口縁部が内傾気味に

直行し, 尖底を呈す。

316の甕・鉢形土器は, 口縁部がやや外反し, 底部は外に開き端部は丸い。317は甕形もしくは, 鉢形土器と思われるが, 口縁部が欠損している為, 形状は不明である。脚部は, 八の字状に外傾し, 端部は丸い。つくりの荒い遺物である。S123の磨製石鏃は抉痕がしっかりしており, 全体的に丁寧にミガキをかけてある。これらから, I期該当と考えられる。



第81図 6号円形周溝墓周辺遺物



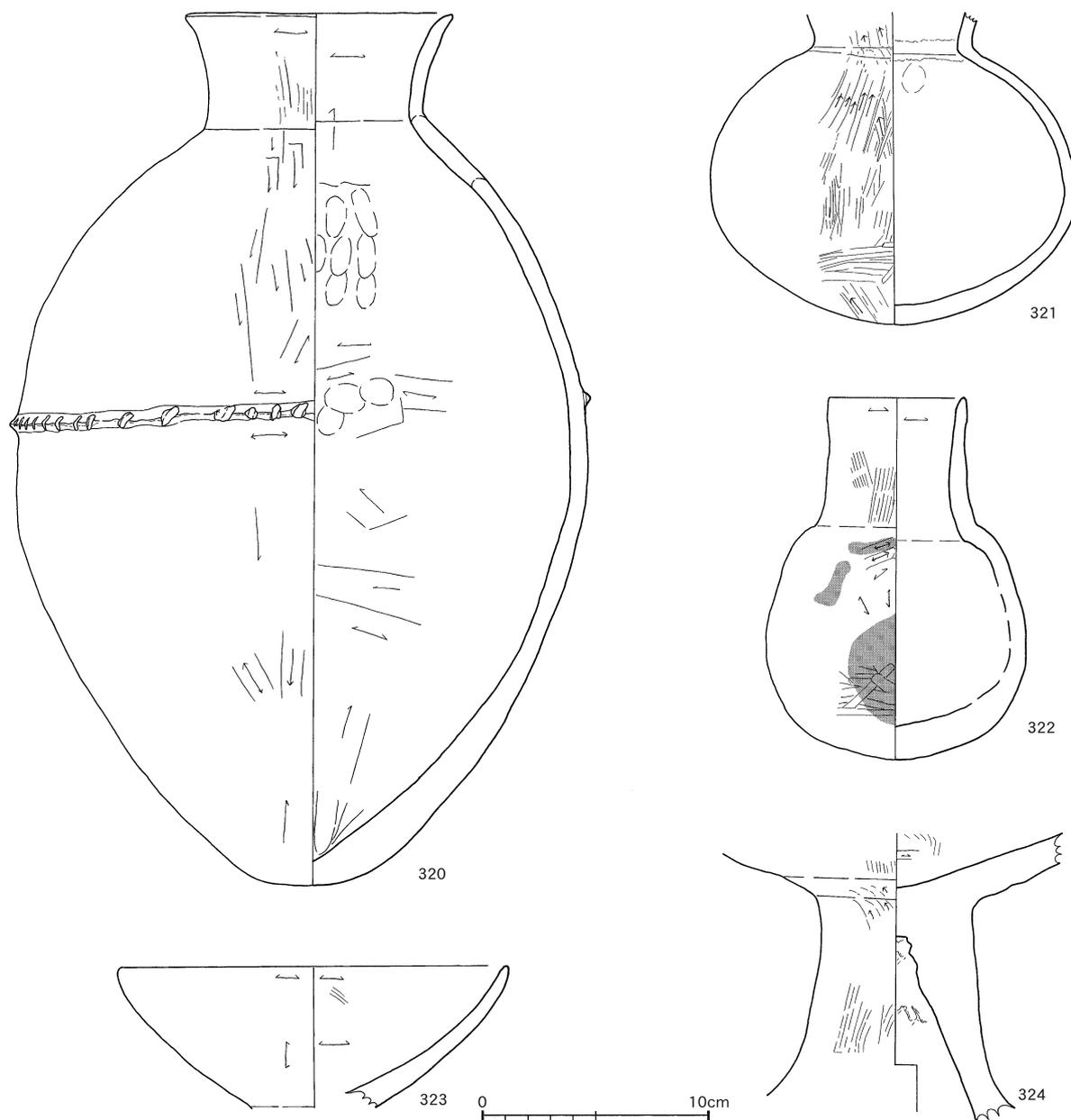
第82図 7号円形周溝墓周辺遺物(1)

7) 7号円形周溝墓周辺遺物

(第82図～第83図, 318～324)

壺形土器3点, 高坏形土器2点を掲載した。318は, 口縁部がほぼ直行して立ち上がり, なで肩の長胴形をなす。底部は, 平底であるが明瞭ではない。風化が激しいが, 外面は丁寧な刷毛目を, 内面は工具ナデを施す。胴部下位に穿孔を施す。320は, 口縁部が短く, く字状に外反する。口唇部は尖っている。なで肩で卵形の胴部に不安定な平底を呈する。胴部中央に一条の刻目突帯を施す。319の壺形土器は, 口縁部が欠損しているため形状は不明であるが, 胴部器形はなで肩で少し膨らみのある逆卵形をなし, 平底を呈す。胴部中央よりやや上位に一条の台形状突帯を施す。外面調整は全体的に丁寧な刷毛目調整を施してある。

内面は, ナデ後, 工具ナデを施す。胴部下位に穿孔を施す。321は, 小型の丸底壺である。口縁部は欠損して不明であるが, 円形の胴部に細かなミガキを施す。その他, 322は長頸気味の壺形土器。323は, 高坏形土器の坏部, 324は高坏形もしくは器台の脚部と思われる。321の小型丸底壺はII期, その他の壺形土器はI期に該当すると思われる。



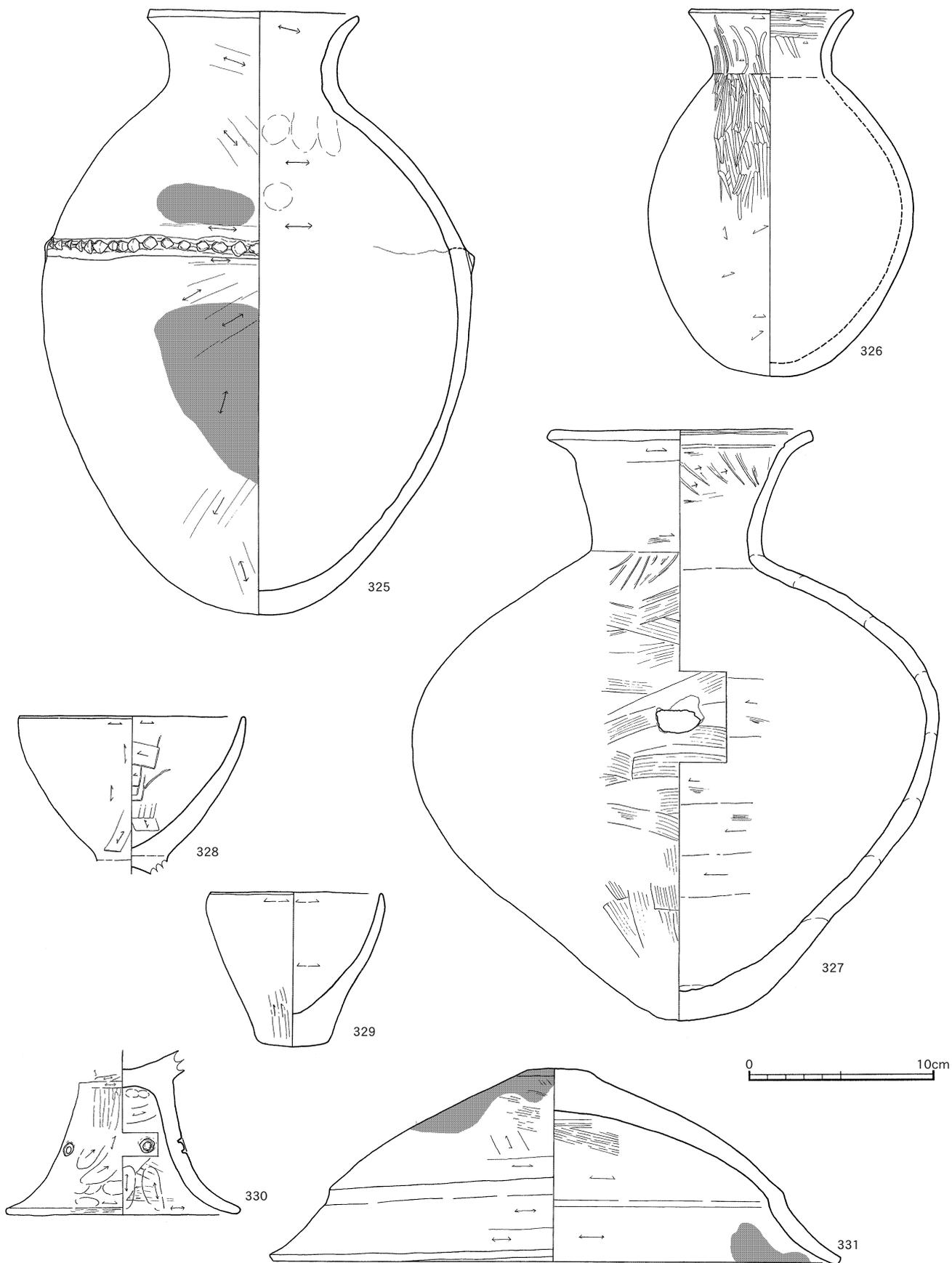
第83図 7号円形周溝墓周辺遺物(2)

8) 8号円形周溝墓周辺遺物

(第84図, 325~331)

壺形土器3点, 鉢形土器2点, 高坏形土器・蓋形土器各1点を掲載した。325の壺形土器は, 口縁部が短く, くの字に外反し, 卵形の胴部, 丸底を呈す。胴部のやや上部に一条の刻目突帯を施す。口唇部は, 平坦面を呈す。全体的に丁寧な作りである。326の壺形土器は, 口縁部がくの字に外反し, 長胴形で不安定な平底を呈す。全体的に丁寧なミガキの調整を施す。327の壺形土器は口縁部が円筒形状で外傾気味に立ち上がり, 端部近くで急に強く外反する。胴部は, 大きく膨らみ, 丸

みのある菱形状を呈す。底部は丸底である。中央部に穿孔を施す。頸部には, ミガキ状の痕が観察できるが, もしかすると, 線刻の可能性もある。330の高坏形土器は, 坏部が無いが, 脚部が外反し, 端部は丸い。透状文様が対に, 4ヶ所施してある。331の蓋形土器は, 丸味を帯びた器形に擬似口縁部より, 急に外遊する。天井部は小さな平底を呈す。器高がやや高めである。内面口縁部にススが付着する。328は, 鉢形もしくは高坏形土器と思われる。329は, 鉢形土器である。これらからI期該当の遺物と考えられる。



第84图 8号円形周溝墓周辺遺物

9) 9号円形周溝墓周辺遺物

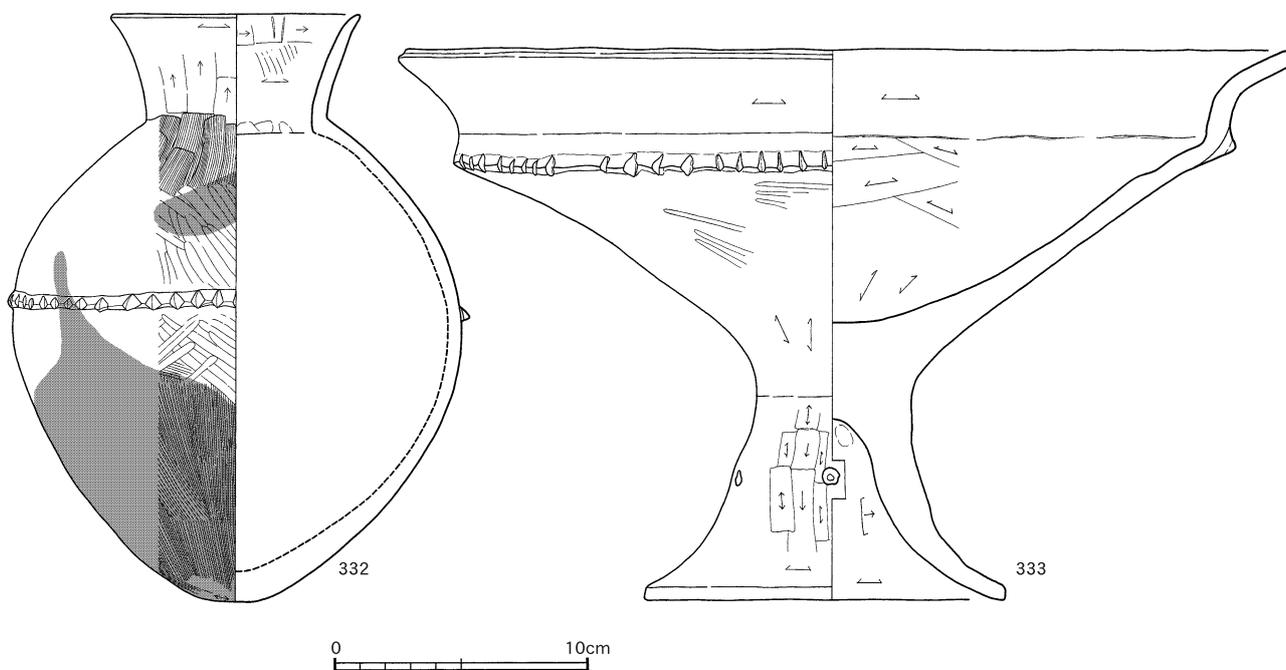
(第85図, 332・333)

壺棺墓や土坑墓, 遺物集中区が密集し混在したところで, 区分が非常に難しい。あえて, この周辺遺物として2点のみ掲載した。

332の壺形土器は口縁部が頸部からまっすぐ外に伸び, 口唇部は丸みをもつ。胴部は球形をなして, 底部は若干の平底を呈すが, ほとんど丸底と考えてよい。胴部ほぼ中央には一条の刻目突帯を施す。全体的に丁寧な刷毛目調整を施した後, 胴部中央部にミガキを施す。また胴部下位から底部にかけて黒班が観察できる。333の高環形土器の坏部は, まっすぐ底部から口縁へ外傾して大きく

広がりながら立ち上がる。口縁端部から一段内弯し, 口唇部付近で大きく外反する。口唇部はM字状に平坦面をなす。屈曲部に一条の刻目突帯を施し, 全体的に丁寧なナデを施す。坏部底部に若干のミガキが観察できる。脚部は, 弯曲度合いが緩く, 底部で外反する。対に4カ所の透を施し, 天井部は丸味を呈す。脚部端部は丸味を帯びる。この遺物は, 高環形土器と判断はしているが, 他地域の土器, いわゆる土師器を模して作られた器台とも考えられる。

これらの遺物は, I期でも古い段階の遺物と思われる。



第85図 9号円形周溝墓周辺遺物

(3) 土坑墓周辺遺物 (第86図～第105図)

1) 1・3・4号土坑墓周辺遺物

(第86図～第87図, 335～339)

335の壺形土器は口縁部が欠損している為形状は不明である。胴部器形はなで肩の少し膨らみをもち、長胴形の逆卵形をなす。底部は少し上げ底になった平底を呈す。胴部中央に一条の刻目突帯を、胴部下位に穿孔を施す。336の壺形土器は口縁部から頸部が欠損しているため形状は不明である。胴部器形は少し膨らみをもった逆卵形をなし、不安定な平底を呈す。全体的に工具ナデを施し、胴部下位に穿孔を施す。これらの遺物から、I期該当と思われる。

337の壺形土器は、口縁部が短く、くの字状に外反し、口唇部はM字状の平坦面を呈す。胴部器形は、やや膨らみのある卵形をなし、不安定な平底を呈す。胴部中央には穿孔を施し、全体的に工具ナデを施す。338の埴形土器は、口縁部が外傾し、直行して立ち上がる。胴部は球形をなし、底部に穿孔を施してある。339の壺形土器は、口縁部から頸部が欠損しているため形状が不明である。胴部器形は長胴化した逆卵形の器形に不安定な平底を呈す。胴部のやや上位に一条の刻目突帯を施す。全体的に工具ナデを施すがミガキ状の調整痕も観察できる。340は器台である。口縁部及び底部が外反し、円筒状をなす。口唇部はやや細くなり、底部端部はM字状の平坦面をなす。全体的に丁寧な工具ナデを施す。

これらの遺物から、I期該当遺物と思われる。

2) 5・6号土坑墓周辺遺物

(第87図～第89図, 341～357)

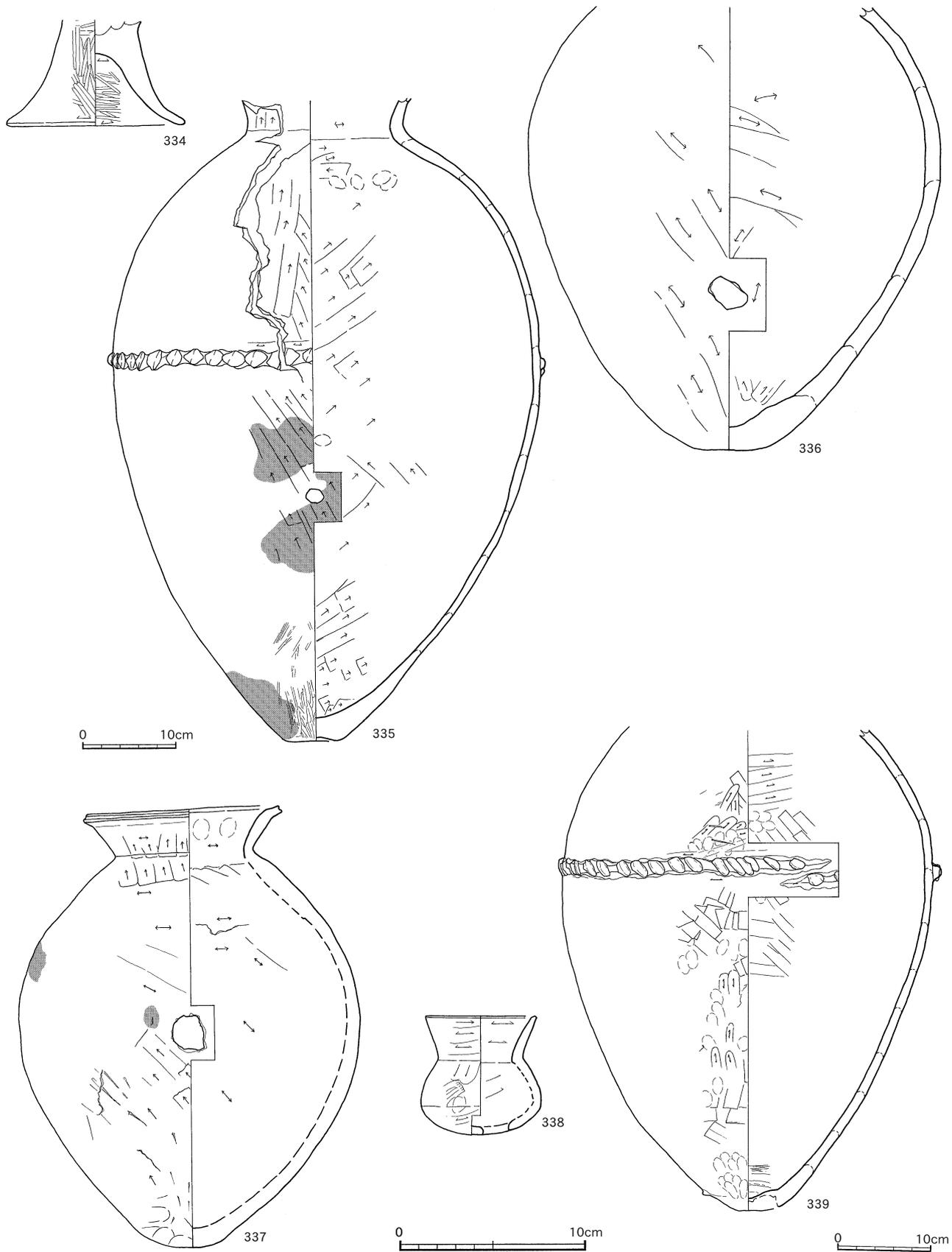
壺形土器 (341・342・345～351) 9点、甕形土器 (352・353) 2点、鉢形土器 (343・354・356) 3点、高坏形土器 (355) 1点、蓋形土器 (344・357) 2点を掲載した。

341と345は同一箇所です。押し潰された状況で検出された (第62図)。341の壺形土器は口縁部が欠損しているため形状が不明である。胴部器形は、肩がやや張った長胴形の逆二等辺三角形形状をなし、広めの平底を呈する。胴部よりやや上位に二条の刻目突帯を施し、肩部には円形浮文を4ヶ所施す。全体的に細かな刷毛目調整を施す。345の壺形土

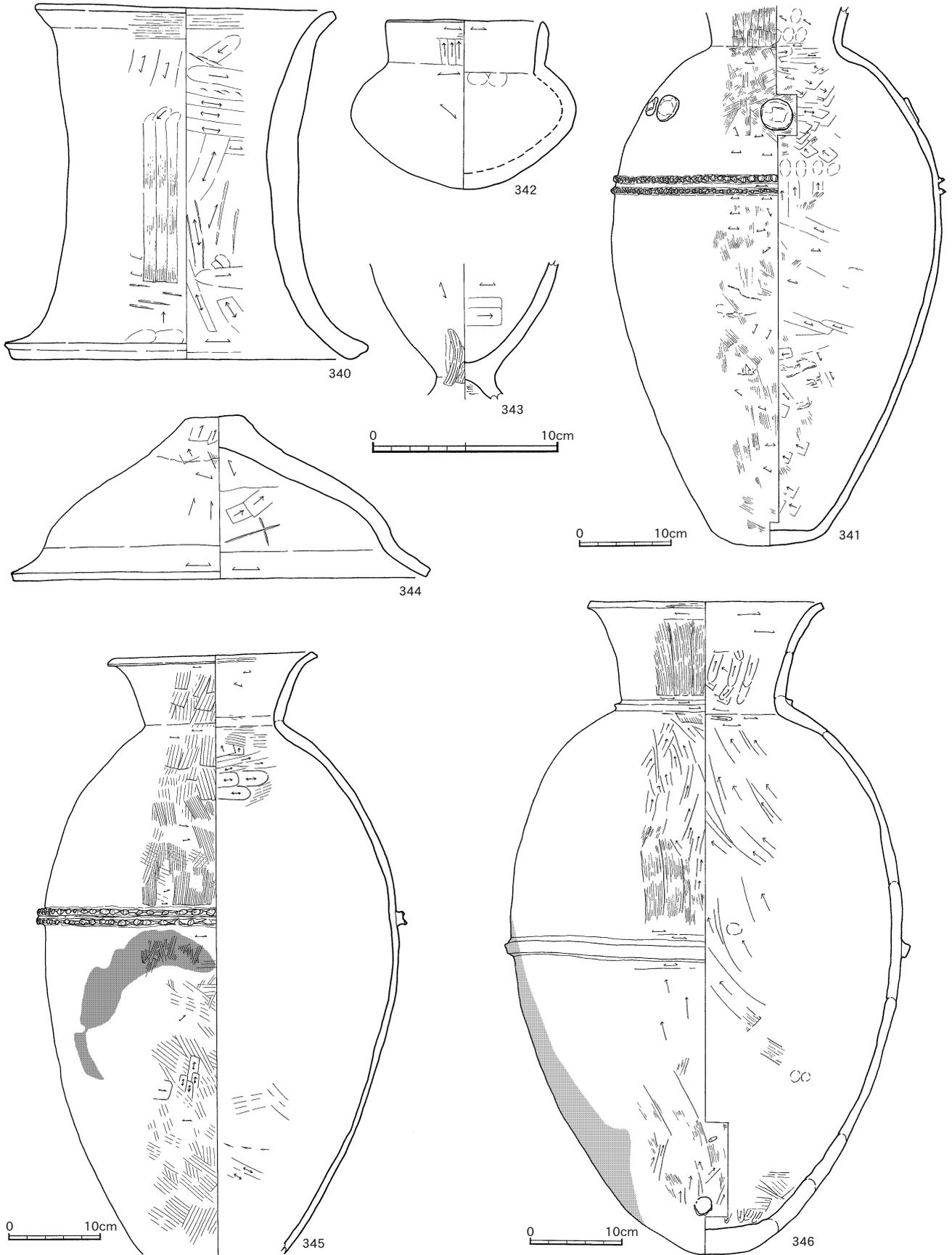
器は、やや長めに口縁部がくの字状に外反し、口唇部は平坦面を呈す。胴部器形は、ナデ肩状のスリムな逆卵形をなす。底部は欠損し不明である。胴部中央よりやや上位に一本の粘土を貼り付け、中央に凹線を施し、二条に見える刻目突帯を施す。全体的に丁寧な刷毛目調整を施す。胴部中央には黒班が観察できる。346の壺形土器は、少し長めの口縁部で直線状に外傾し、口唇部でやや外反する。口唇部は平坦面を呈す。頸部には断面三角形形状に上部が平坦面を有する突帯を施す。胴部器形は長胴化した卵形の器形に、不安定な平底を呈す。胴部中央には断面台形状の突帯を施し、底部付近に穿孔が施される。この壺形土器の底部近くには丹塗痕が観察できる。一部分だったのか全体的だったのかは不明である。全体的に丁寧な刷毛目調整を施す。347の壺形土器は、口縁部が短く、くの字状に外反し、逆卵形の器形で、不安定な平底である。外面は丁寧な刷毛目調整を施す。胴部には黒班が観察できる。348は口縁部が外傾気味に直行して立ち上がり、口唇部が丸い長頸壺である。胴部は、逆おにぎり形状をし、平底を呈す。胴部屈曲部に穿孔を施す。352・353は甕形土器である。352は、口縁部がくの字状に外反し、脚台は直線的で高く、天井部は丸い。353は口縁部が緩やかに外反し、口唇端部は丸味を帯びる。胴部は膨らみをもち、底部は外反しながら開く。全体的に丸みのある器形である。356の鉢形土器は口縁端部が欠損しているが、丸みのある器形をし、口縁部から急に外反し、小さな平底を呈す。器高がやや高い。357は蓋形土器である。356を逆にした形状で口唇部は断面三角形形状を呈す。

その他、349は壺形土器の口縁部から肩部、350は壺形土器の底部で平底、351は壺形もしくは鉢形土器の底部、354は甕形もしくは鉢形土器の底部及び脚部である。355は、高坏形土器と思われるが、在地の土器ではなく、他地域の土器、土師器を模して作られた土器ではないかと思われる。

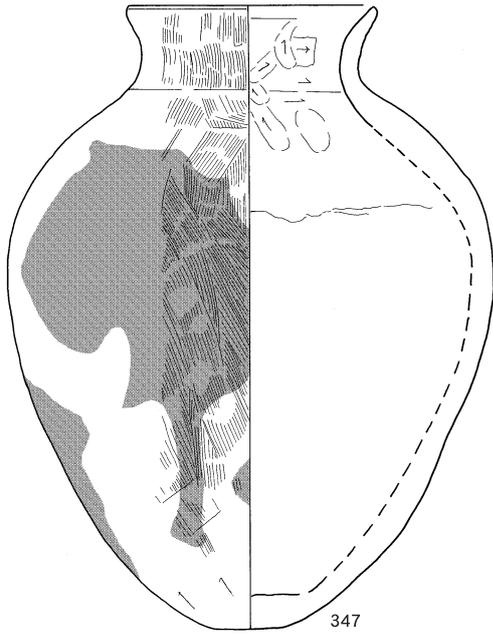
これらから、壺形土器は概ねI期該当遺物と思われるが、甕形・鉢形・高坏形・蓋形土器はI期からII期該当遺物と思われる。



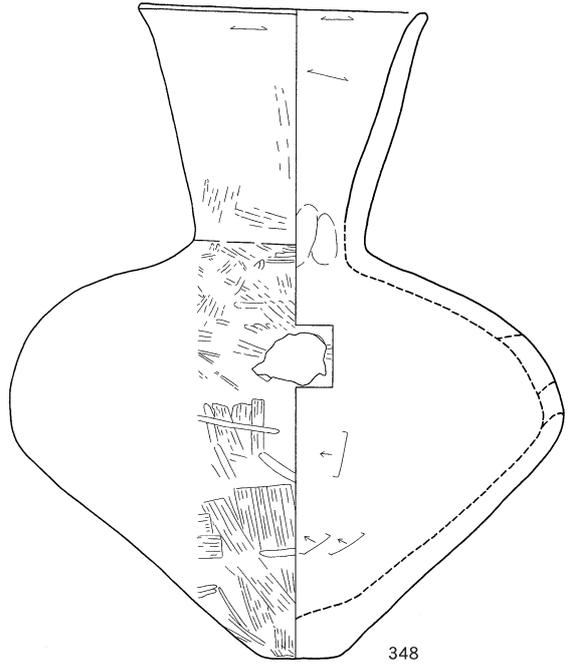
第86图 1·3·4号土坑墓周边遗物



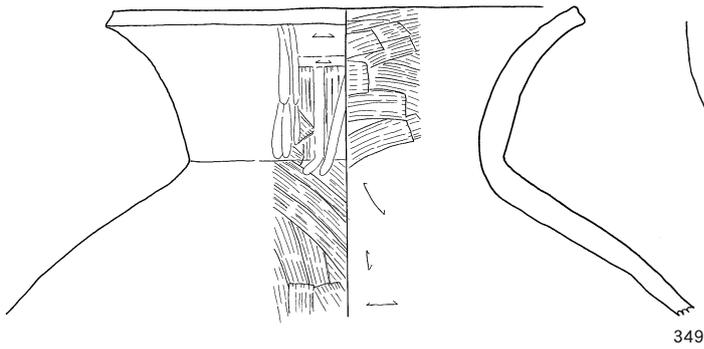
第87图 4·5·6(1)号土坑墓周边遗物



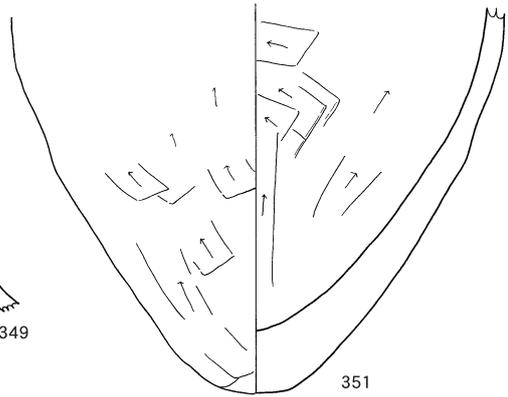
347



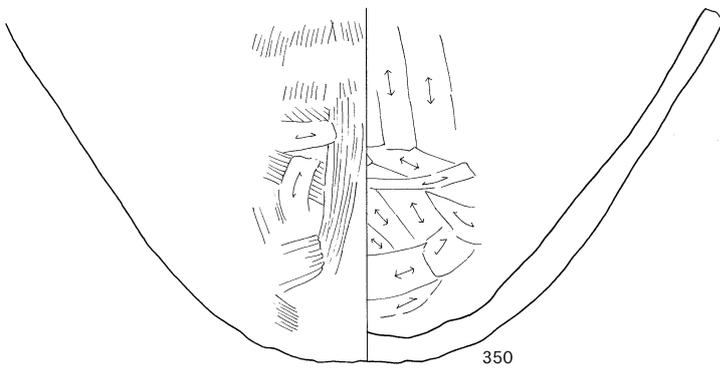
348



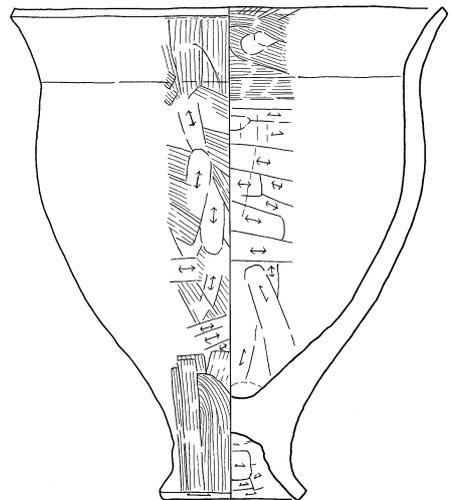
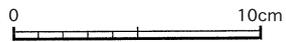
349



351

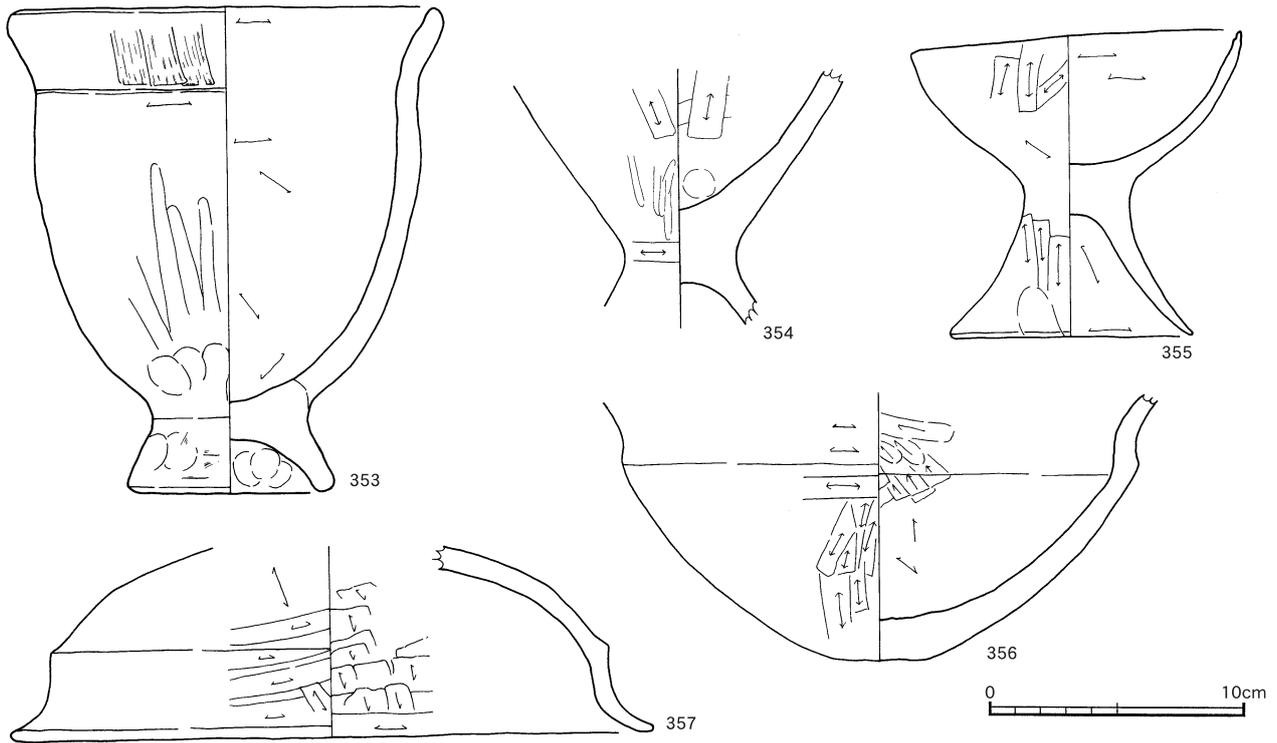


350



352

第88图 6号土坑墓周边遗物(2)



第89図 6号土坑墓周辺遺物(3)

3) 7・8号土坑墓周辺遺物

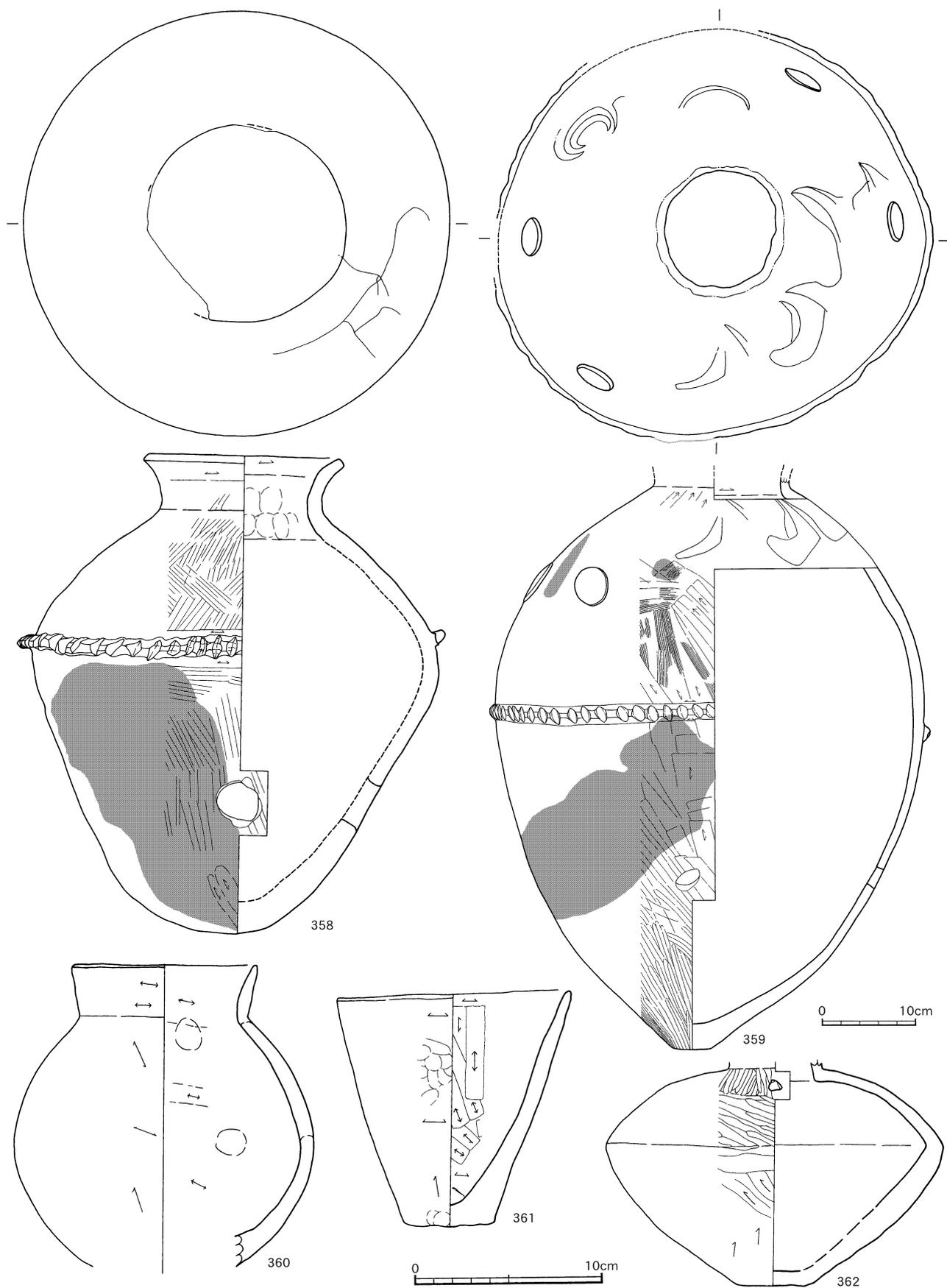
(第90図～第91図, 358～366, S 124)

壺形土器 (358～360・362～364) 6点, 甕形土器 (365) 1点, 鉢形土器 (361・366) 2点, 磨製石鏃 1点を記載した。

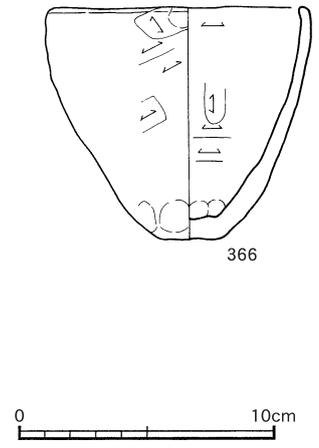
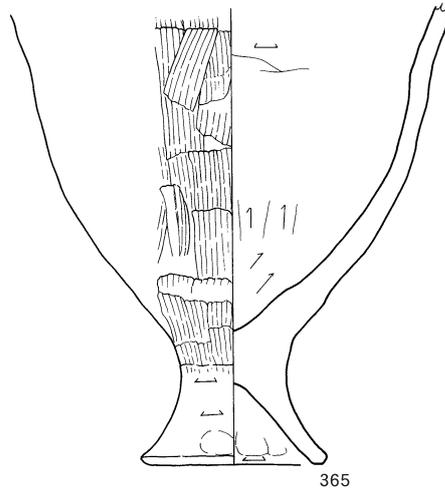
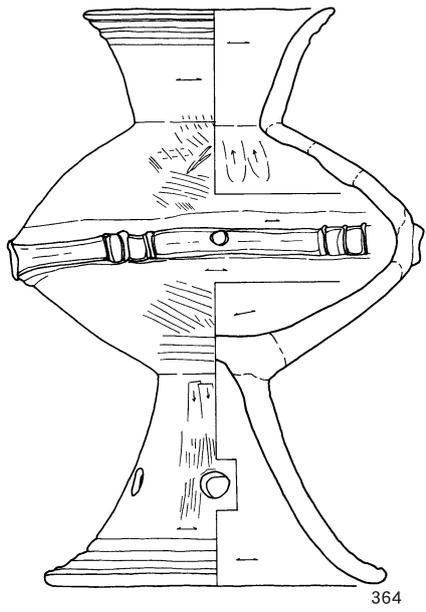
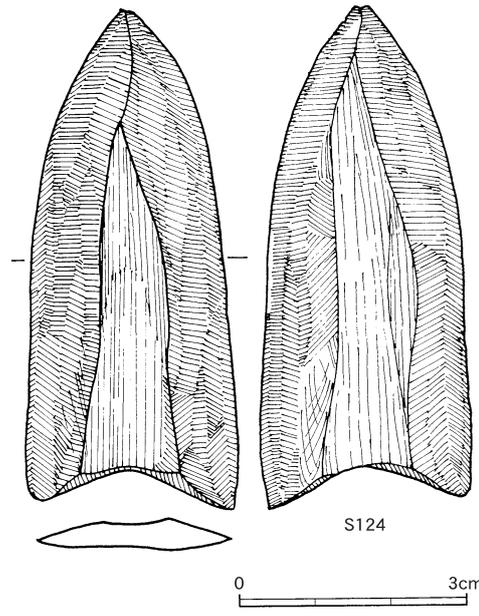
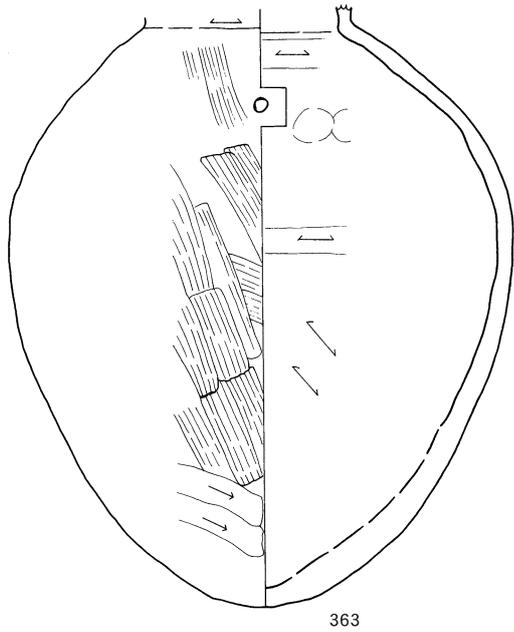
358の壺形土器は、短頸でくの字状に外反し、菱形凧のような胴部に丸みを帯びた底部を呈する。胴部最大幅の所に取手のように上向き状の刻目突帯を一条施す。肩部には線刻が施されている。何か動物を描いたのではないかと思われる。359は立石5のすぐ近くで半分欠損して壊れた状況で検出された(第62図)。口縁部が欠損しているが、ナデ肩の少し膨みをもつ逆卵形の器形をし、小さな平底を呈す。胴部中央には一条の刻目突帯を施し、肩部に対となる円形浮文が付される。その上には、羽状もしくは半弧状の細い線刻が施される。おそらく絵画的なものであると思われるが、何が描かれているかは不明である。360の小型丸底壺は、口縁部が短く外傾気味に立ち上がり、胴部は球形をなす。362は口縁部が欠損している長頸壺である。ソロバン形の胴部で屈曲が鋭く、平底を呈する。頸部近くに穿孔があり、調整はミガキを

施す。363の壺形土器は、口縁部が欠損して不明であるが、なで肩で少し膨らみをもった逆卵形をなし、レンズ状の底部をなす。頸部下位に焼成前穿孔を施す。364は、非常に特徴のある台付の壺形土器である(図版48)。口縁部は外傾してまっすぐに立ち上がり、口唇部は丸く、端部近くに数条の段をもつ。胴部はソロバン形を呈しているが、屈曲部分に幅広の突帯を施し、焼成前の穿孔や横方向の突帯を施す。脚部は緩やかに外反し、端部は丸みを帯び、口縁端部同様数条の段をもつ。また、対に4カ所の透も施す。この遺物は、県内においても出土例が無く、他県での「台付注口壺」と同じような器形をしていることから、おそらくこの手の遺物と考えられる。361の鉢形土器は、直線状に外傾して開き、底部は平底をなす。S 124は長さ6.6cmで基部に浅い抉りのある大きめの磨製石鏃である。これらの様相から、I期古相のものと考えられるが、これらの遺物の集中から、祭祀に関わる遺物の可能性も考えられる。

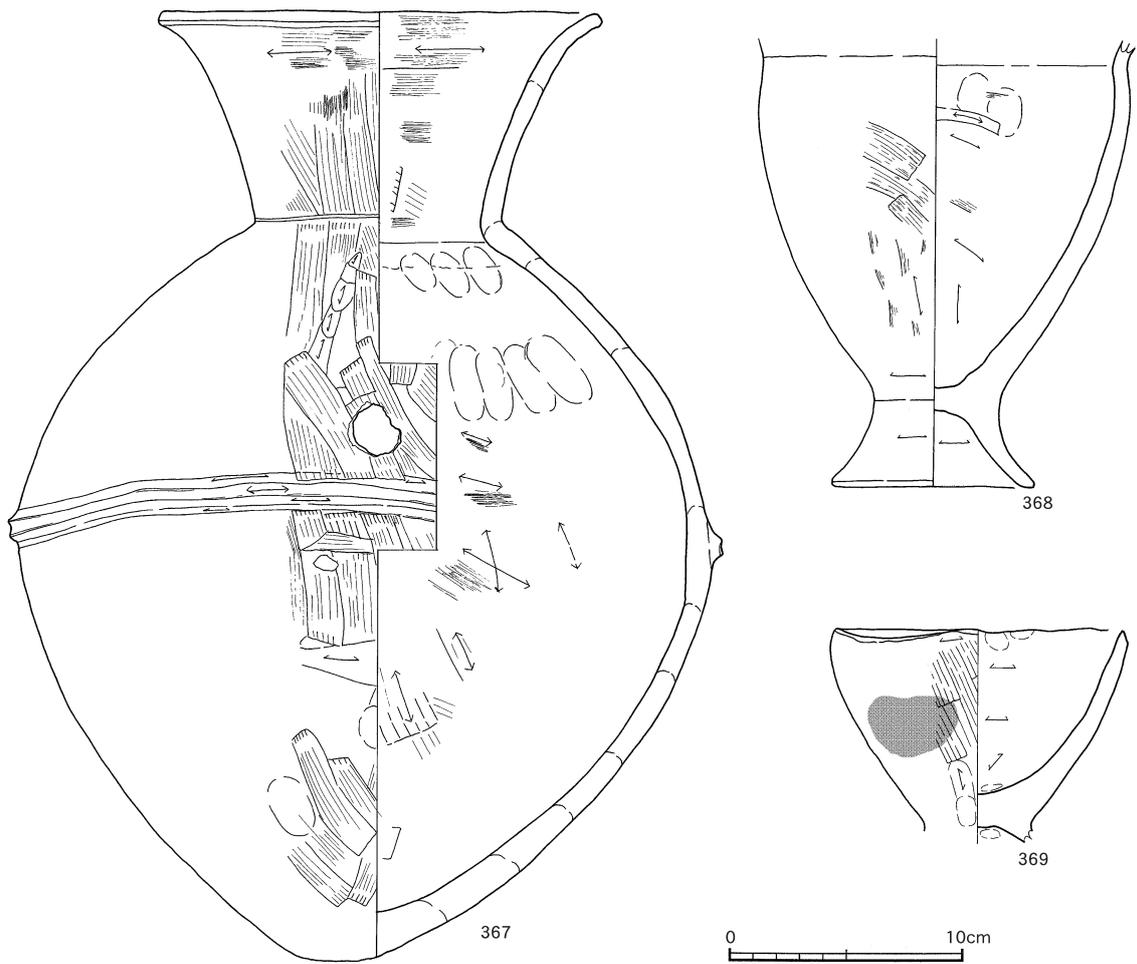
8号土坑墓上面では、365の甕形土器と361の鉢形土器を掲載したが、甕形土器の器形からI期該当の遺物と思われる。



第90图 7号土坑墓周边遗物(1)



第91图 7(2)·8号土坑墓周边遗物



第92図 9号土坑墓周辺遺物

4) 9号土坑墓周辺遺物

(第92図～第93図, 367～373)

壺形土器 (367) 1点, 甕形土器 (368・370) 2点, 鉢形土器 (369・371) 2点, 蓋形土器 (372・373) 2点を掲載した。

367は、口縁部が長く、外傾気味に直行して立ち上がり、口縁端部で外反し、口唇部は平坦面を呈す。胴部は球状で平底を呈す。胴部中央には、M字状の突帯を一条施し、突帯上位に穿孔も施す。368・370は、口縁部が欠損しているが、口縁部が外反する器形で、低い脚台が付く。369は脚台付鉢である。また、368は胴部が丸味を、370はほぼ直行気味に開き、口縁部へ立ち上がる。371も脚台の付く碗形の鉢で、口縁端部が内弯気味である。脚台は外反し、端部は丸みを帯びる。脚台天井部

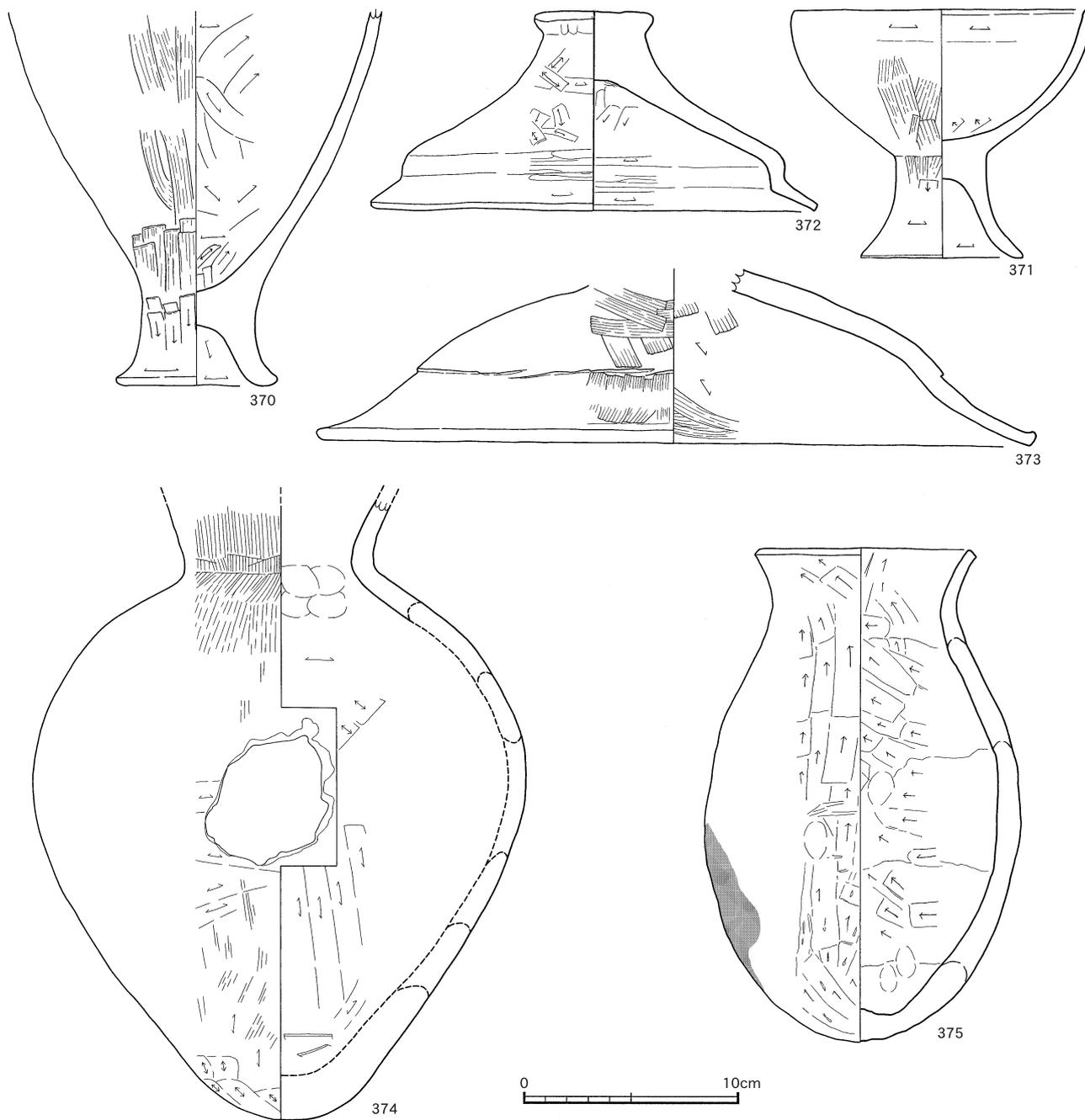
は平坦面を呈す。この高坏形土器も本来、器台なのかもしれない。372は、肩部から急に外反する。天井部は平坦となり、つまみ状を呈する。器高が高い。373は、372に比して、肩部から外反することが緩やかで、全体的に丸味を帯びる。天井部は欠損して不明である。

これらの形態等から、I期該当の遺物と思われる。

5) 10号土坑墓周辺遺物 (第93図, 374・375)

374は、口縁部が欠損しているが、くの字状に外反し、なで肩で逆卵形の器形をなし、丸底部を呈する。胴部中央には大きな穿孔を施す。375は、全体的に緩やかな長胴形をなし、丸底である。

これらの遺物から、I期該当の遺物と思われる。



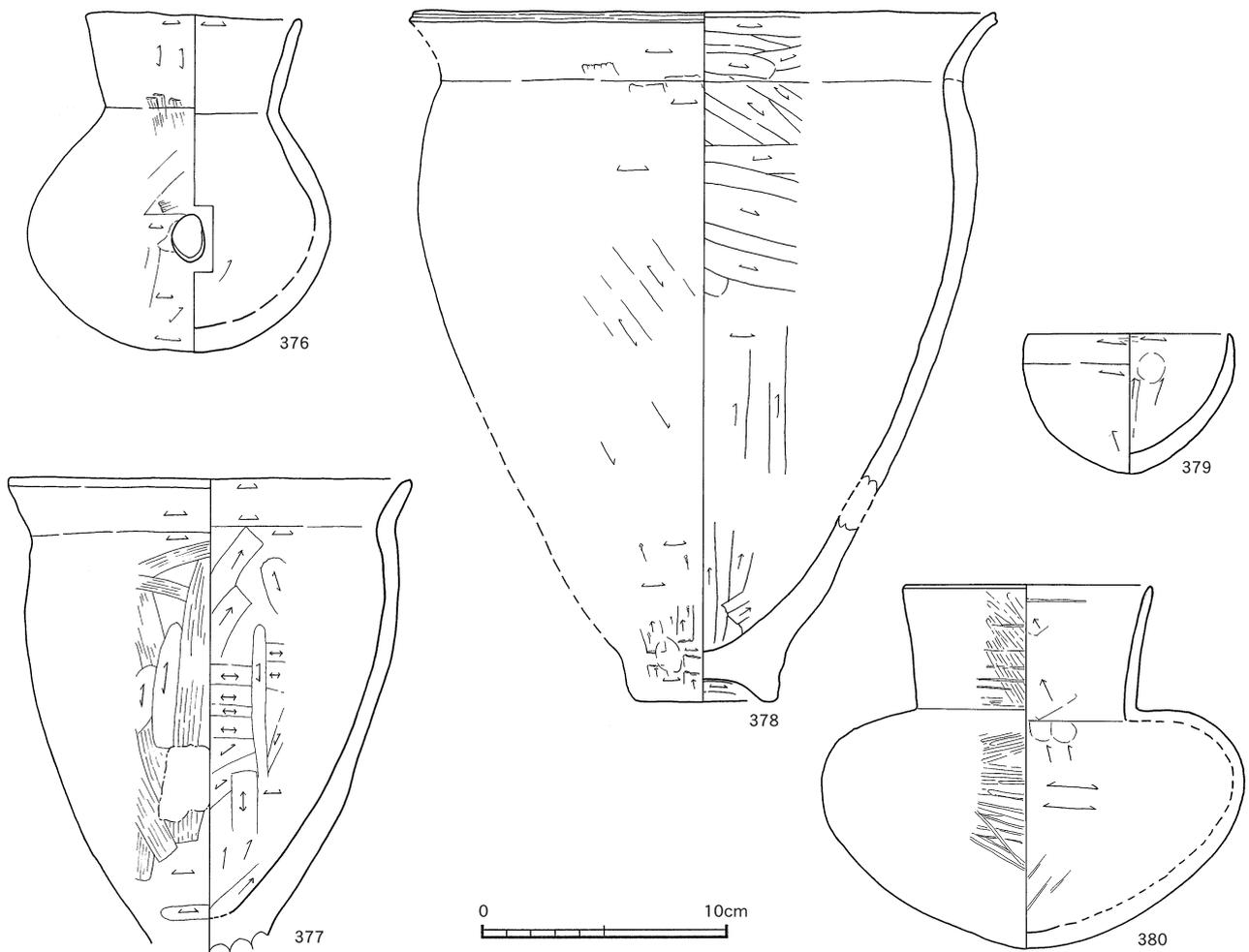
第93図 9・10号土坑墓周辺遺物

6) 13・17・19号土坑墓周辺遺物
(第94図, 376~380)

13号土坑墓出土の埴形土器(376)は、口縁部が外傾して開き、胴部は球形をなす。底部は平底である。17号土坑墓では、377・378の甕形土器がある。377の甕形土器は口縁部がくの字状に外反し、直線状に底部へと下る。底部は欠損しており不明である。378の甕形土器は、口縁部がくの字状に外反し、直線状に底部へすぼまる。底部は短

く直線的である。377の口唇端部は丸味を、378の口唇端部はM字状をなす。19号土坑墓出土の小型丸底壺(380)は、口縁部が直行して立ち上がり、胴部はハート形をなす。

これらはI期該当遺物と考えられる。



第94図 13・17・19号土坑墓周辺遺物

7) 20・21・27号土坑墓周辺遺物
(第95図, 381~387)

20号土坑墓周辺の遺物は381の壺形土器を掲載した。この土器は、口縁部が短く、くの字状に外反し、口唇部に凹線を施す。胴部器形はなで肩で、少し膨らみをもつ逆卵形をなし、平底を呈す。肩部に円形浮文を、胴部ほぼ中央に穿孔を施す。外面調整は、丁寧なミガキを施す。

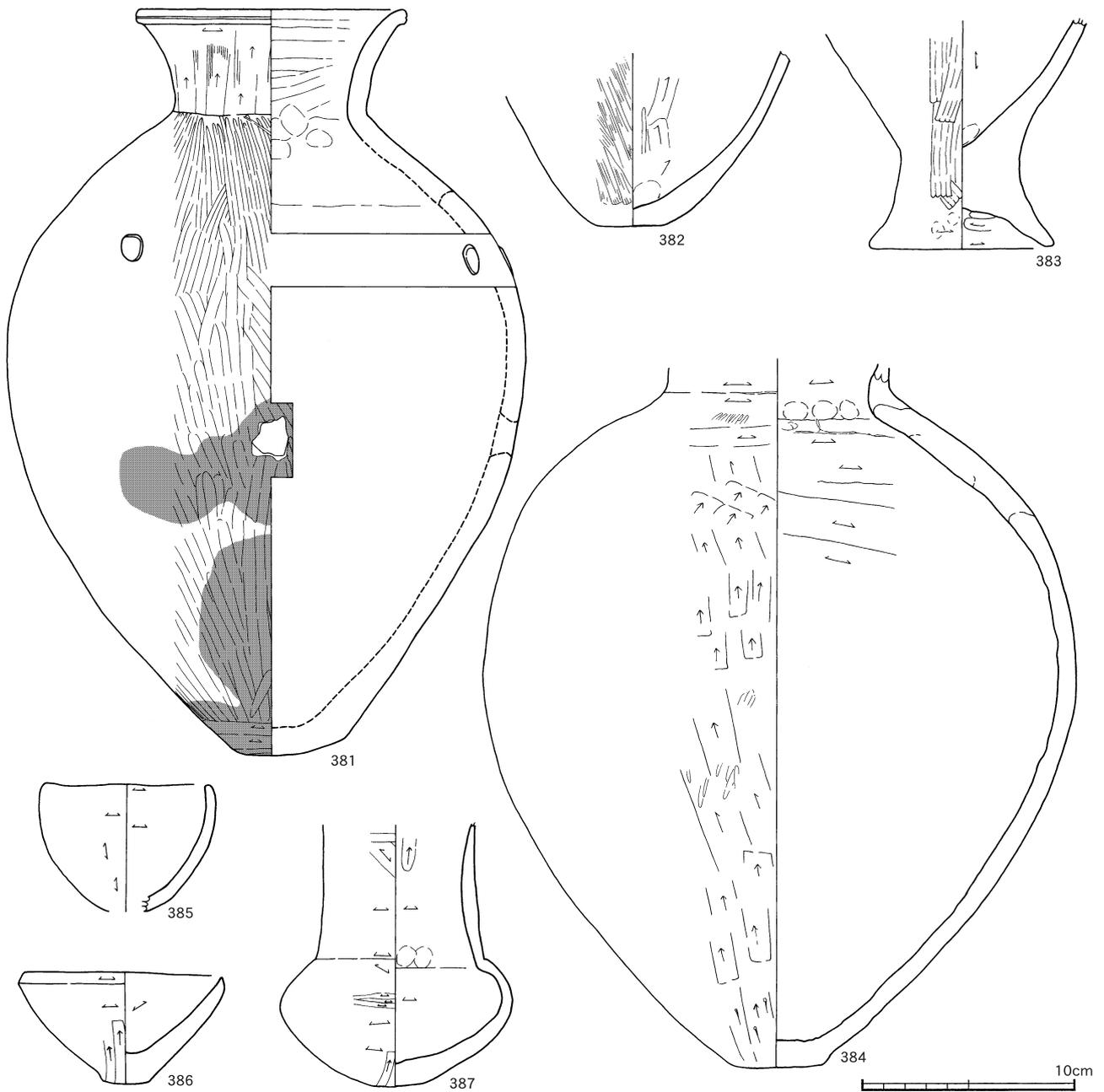
27号土坑墓周辺の遺物は4点あるが、384の壺形土器は、口縁部が欠損している。胴部器形は、なで肩で膨らみをもつ逆卵形をなし、平底を呈す。387は埴形土器で、口縁部が内傾気味に直行し、胴部は球形をなし、丸底を呈す。

これらは、いずれもI期該当遺物である。

8) 29号土坑墓周辺遺物
(第96図~第97図, 388~398)

壺形土器3点、丹塗研磨土器7点、須恵器1点を掲載した。この区は丹塗研磨土器や須恵器等が集中して出土したところで、J・K・31~35号土坑墓上面遺物と総合して検討する必要のあるところでもある。

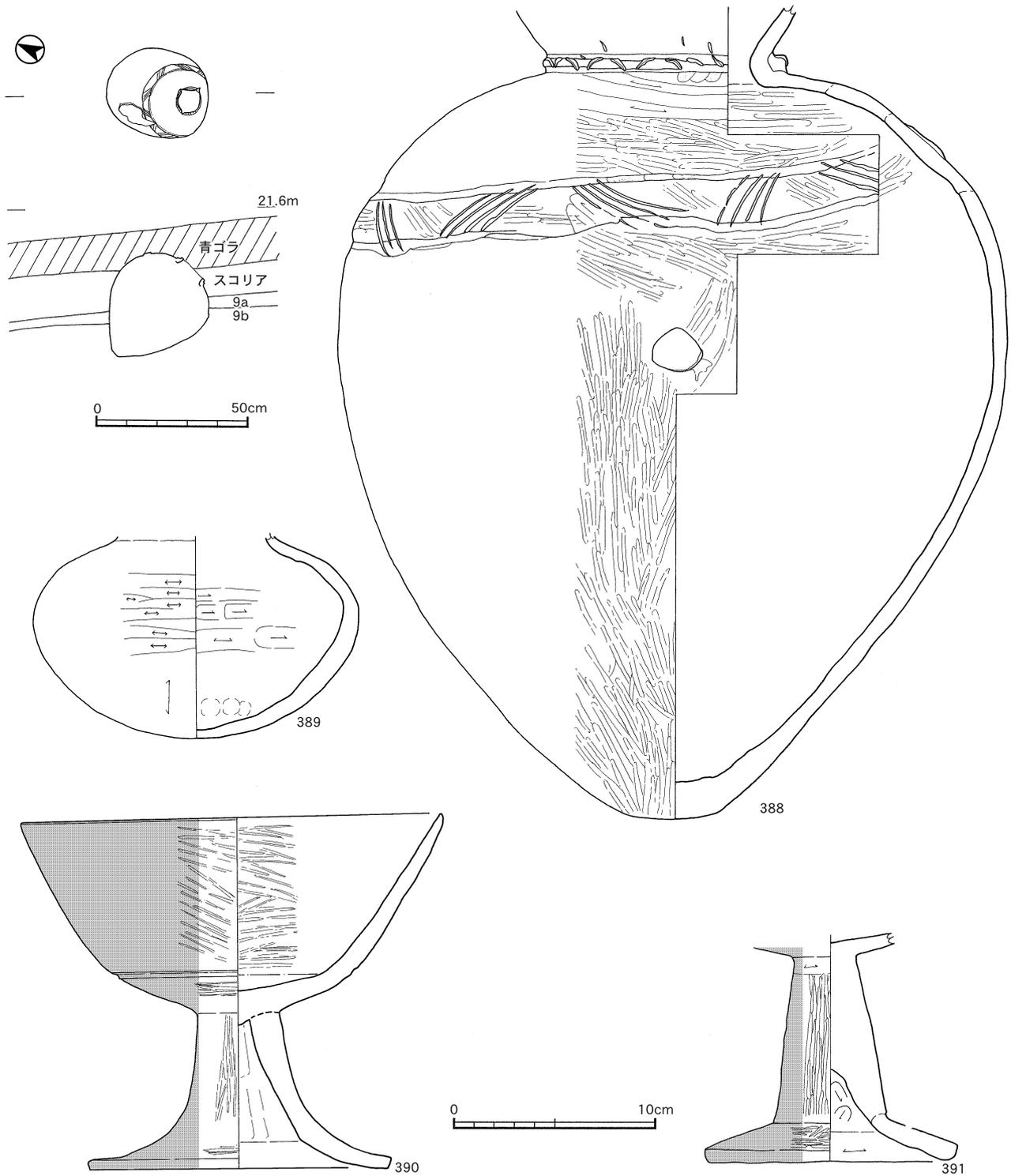
388の壺形土器は、第96図左上に記載したとおり、口縁部から肩部にかけて青ゴラを直接かぶった状態で、検出された。口縁部は欠損しているが、肩部が張り、膨らみをもった逆卵形の胴部器



第95図 20・21・27号土坑墓周辺遺物

形に平底をなす。頸部には一条のハの字状刻目突帯を、肩部には幅広突帯格子文を、胴部中央に穿孔を施す。389は口縁部が欠損した小型丸底壺と思われる、胴部は球形をなす。390～395は丹塗研磨土器である。390は高坏形土器である。坏部は椀形をなし、口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。坏底部には一条の窪みを施す。脚部は外傾気味に開き、底部は外反する。391も390と同じ高坏形土器であるが、坏部が欠損している。脚部は棒状に外

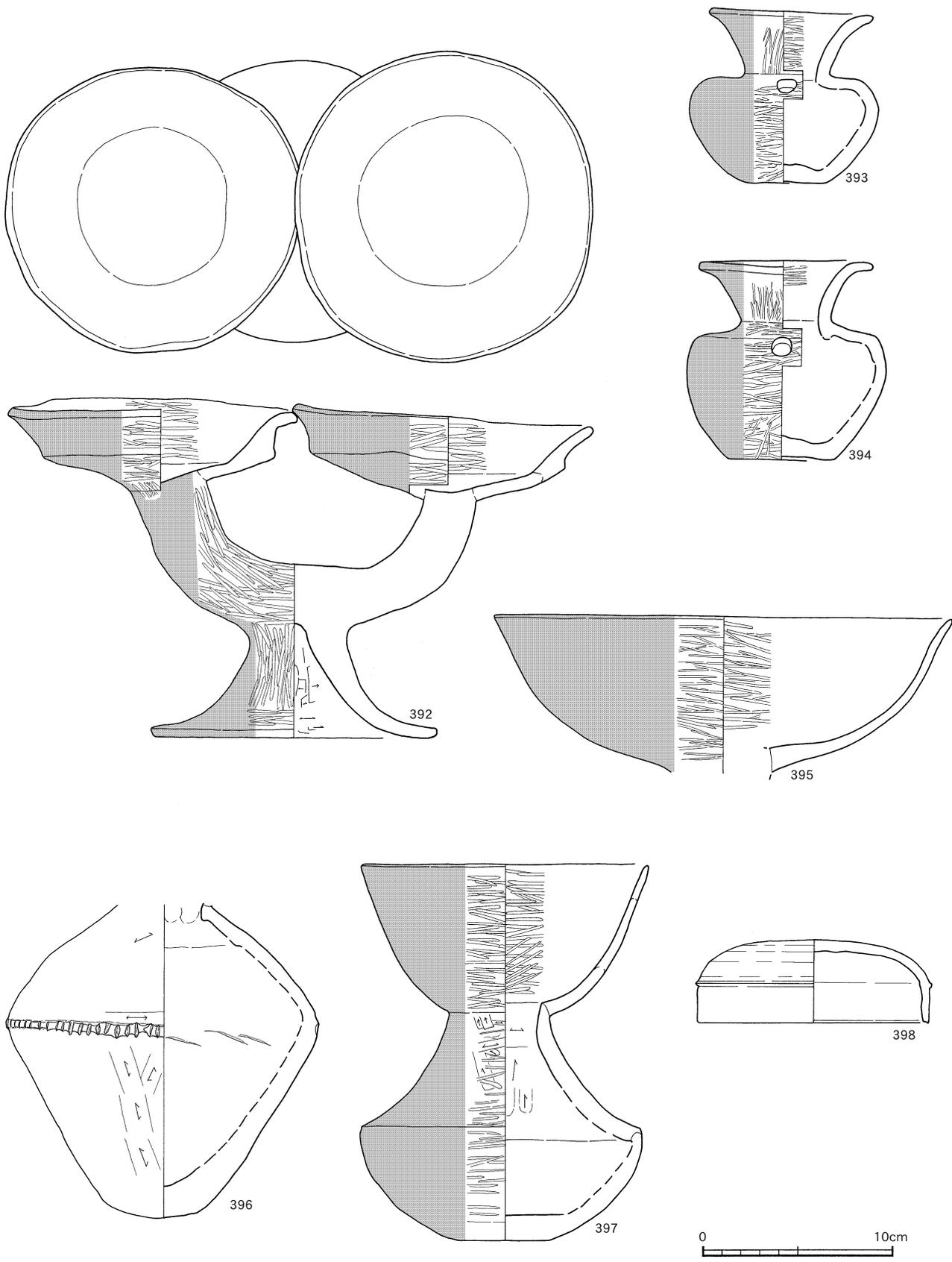
傾し、底部はくの字状に外反する。395は高坏形土器の坏部で椀形をなすが、口唇部で微かに外反する。393・394は甗でほぼ同じ形状をなす。口縁部は外傾して直線状に立ち上がり、口唇部で外反する。胴部は大きく盛り上がったように肩が張り、底部は平底をなす。392は器台であるが、2カ所に台をもつもので、これまでに県内での出土例はない。台は高坏の坏部のような形で擬似口縁より外反する。古手の高坏形土器の坏部形状をなす。



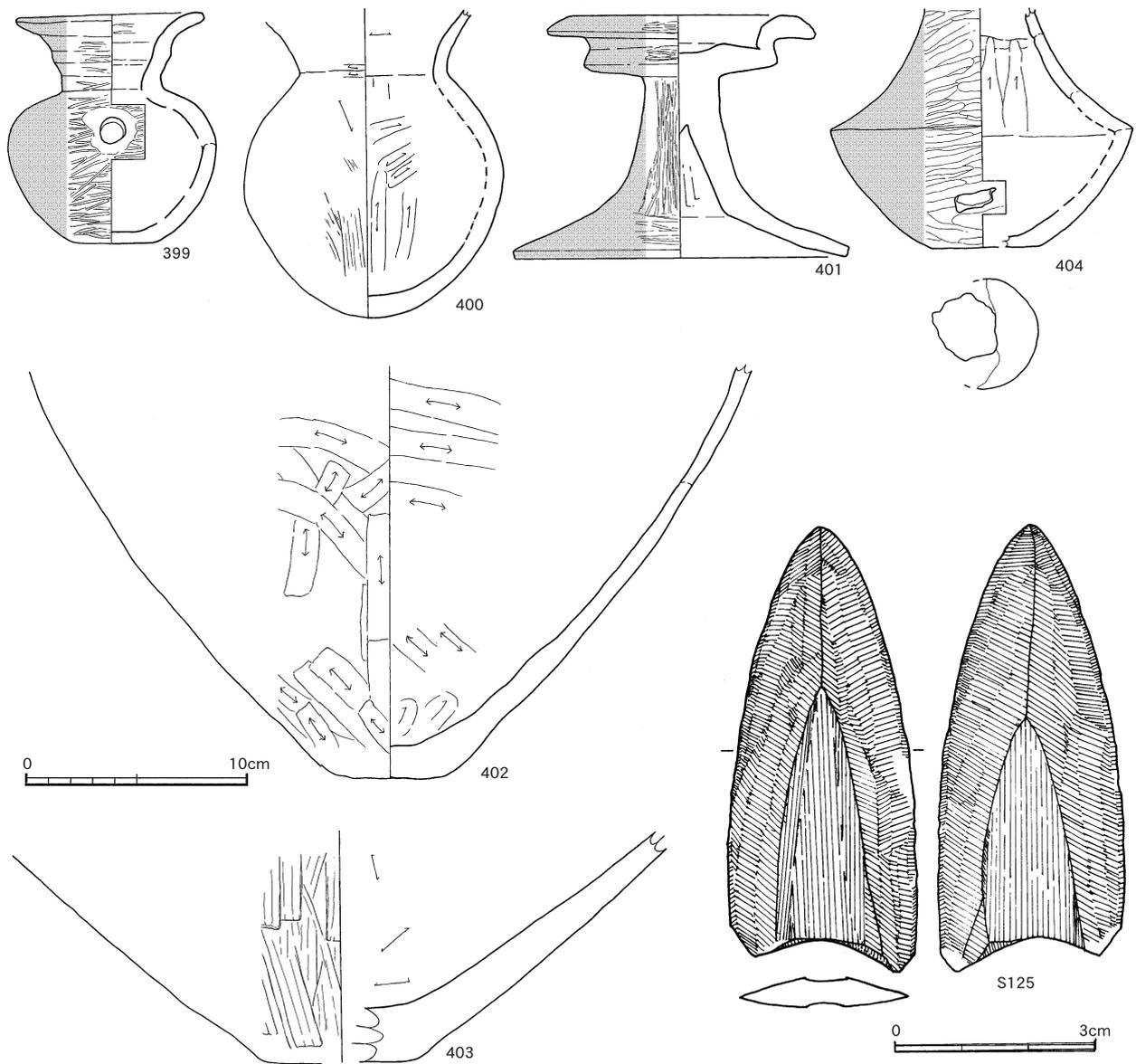
第96図 29号土坑墓周辺遺物(1)

このすぐ近くに先の393・394の壺があり、393の底部は円形状にすれていることから、この2個の壺と392の器台はセットと思われる(図版46)。397は埴で、口縁部が大きく深い椀形状をなし、

頸部から屈曲部にかけて外反し、屈曲部から底部へ一端膨らみながら底部へすぼまる。396は免田系の長頸壺と思われるが、口縁部が欠損している。緩やかな屈曲部で器高も高い。屈曲部には一



第97图 29号土坑墓周边遗物(2)



第98図 31・32・34・35号土坑墓周辺遺物

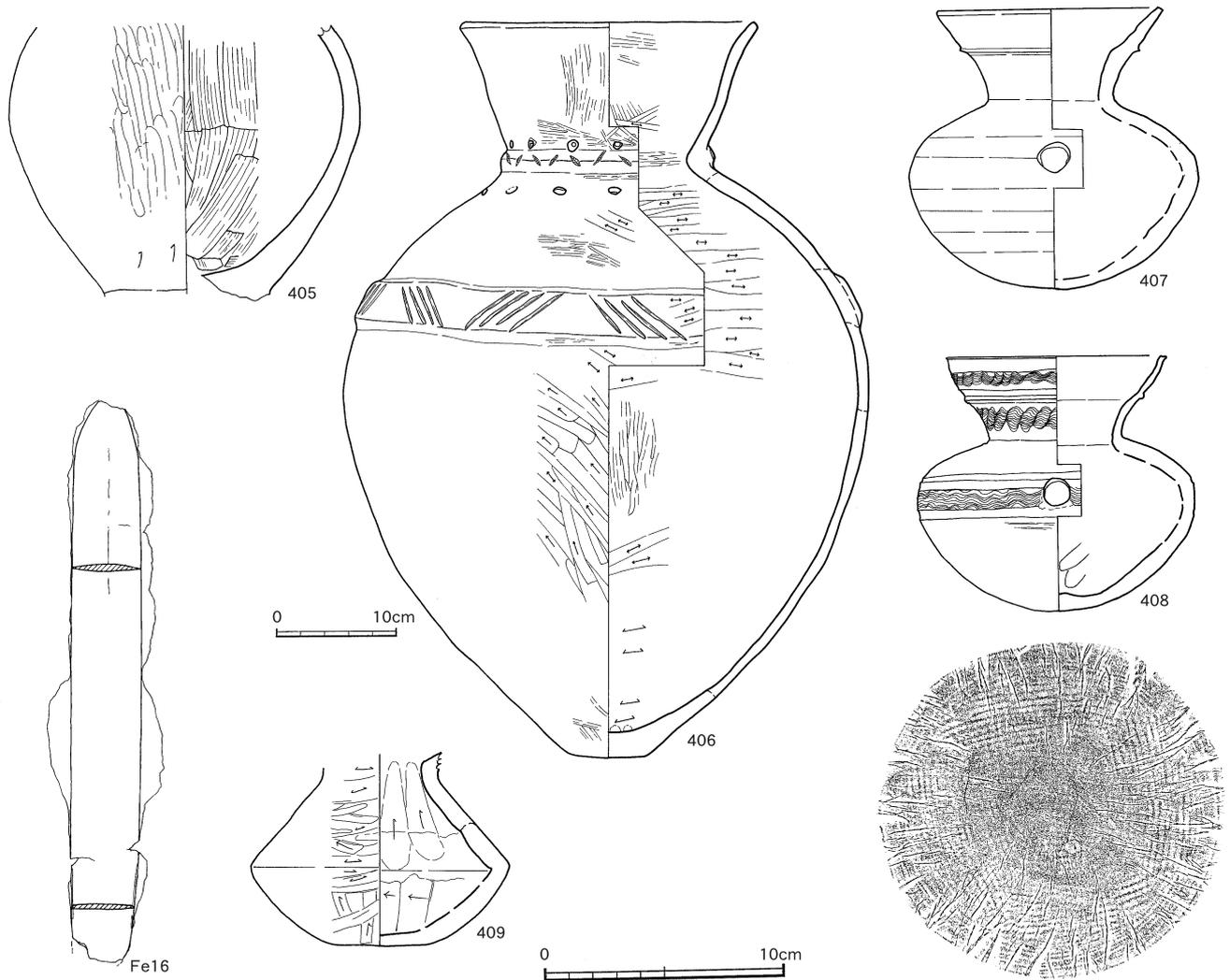
条の刻目を施す。398は、須恵器の蓋坏である。口縁端部はやや窪みながら内傾し、立ち上がり部はほぼ垂直に立つ。TK208段階の須恵器と思われる。

これらの遺物から、IV期該当遺物と思われるが、磨製石鏃はI期、389・400はII期ではないかと思われる。

9) 31・32・34・35号土坑墓周辺遺物
(第97図, 399~403, S125)

31号土坑墓周辺出土の399は、丹塗研磨の甗である。32号土坑墓周辺出土の400の小型丸底壺、401は丹塗研磨の器台である。これは口縁部が急に花びら状に開き、脚部は底部にかけ大きく外反する。34号土坑墓周辺出土の404は口縁部欠損の丹塗研磨の埴形土器で底部付近と底部に穿孔を施す。402と403は小さい平底の壺形土器である。35号土坑墓周辺出土のS125は長さ6.8cmで、基部が浅い抉りの磨製石鏃である。

これらの遺物は、IV期の時期である。



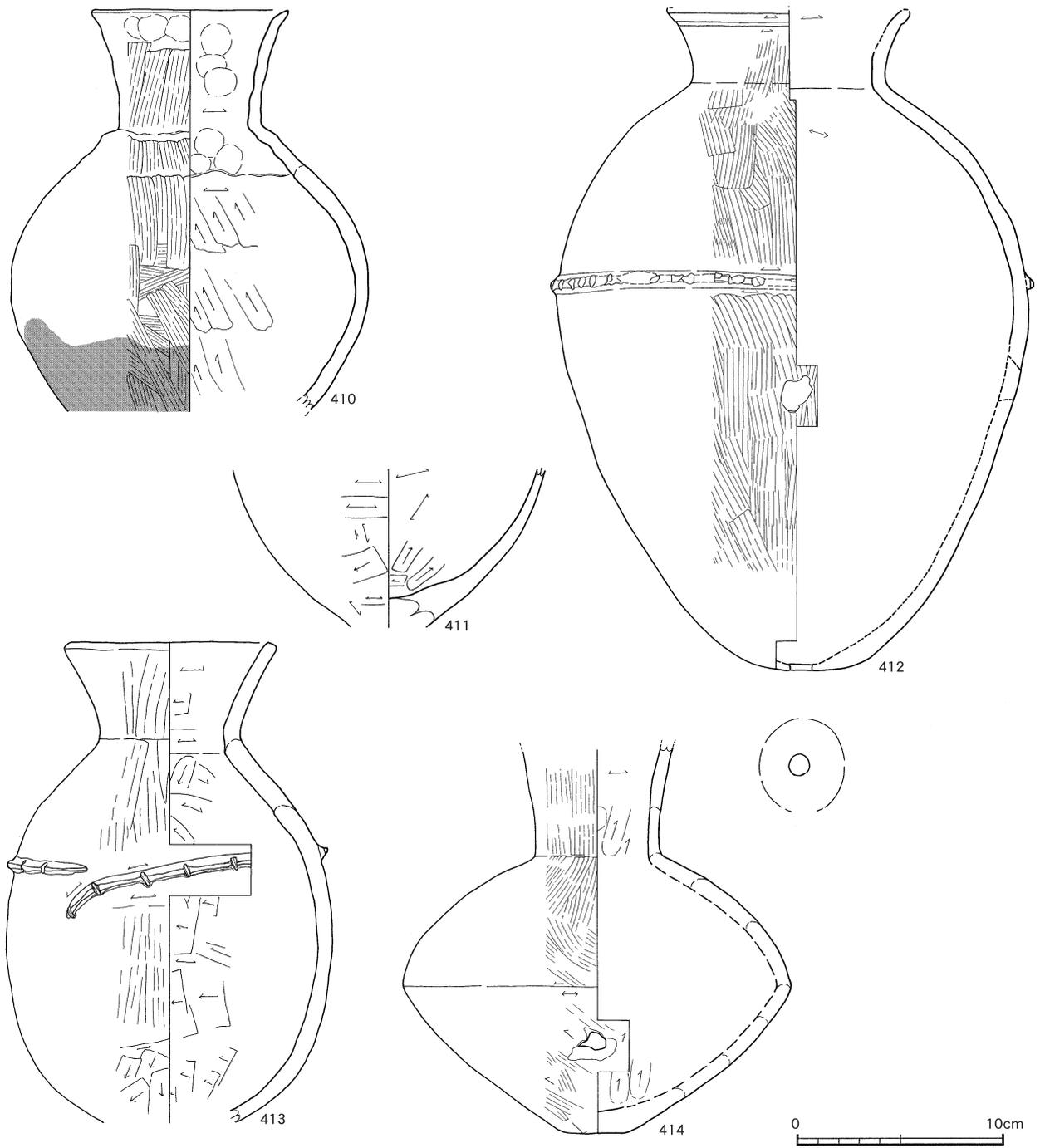
第99図 42・44号土坑墓周辺遺物

10) 42・44号土坑墓周辺出土遺物
(第98図, 405~409, Fe16)

42号土坑墓では、405の壺形土器と、Fe16の鉄剣を記載した。44号土坑墓の406は、口縁部が直線的に斜位に外反し、頸部に一条のハの字状格子文のある突帯を施す。頸部には斜位に6カ所、焼成前の穿孔が施される。これは、何かしら、紐をとおすといった行為を行うためのものではないかと考えられる。胴部器形はなで肩の膨らみをもつ逆卵形をなし、平底を呈す。肩部には帯広突帯の格子文を施す。407・408は須恵器の甗である。407は、口縁部が上外方に伸び、口縁部と頸部に明瞭な稜が観察できる。肩、胴部は横に張った球形で丸みを帯びる。408は、口唇部がやや内傾気

味で、器形は407と同じである。口唇部近くと頸部近く及び胴部中心に櫛目状の波状紋を巡らす。底部にはタタキ痕がみられ、三角形状のヘラ記号もみられる。このいずれもTK208段階の須恵器と思われる。この406の壺形土器の下に、この壺を支えるように上記の2つの須恵器の甗と409の丹塗研磨土器の坩が検出された。この状況も意図的に置いたものと思われるが、何を意味するか不明である。(図版17)

これらの遺物からIV期該当遺物と思われる。次からの土坑墓は、先に述べたように15層上面で検出されたものである。したがって、今までのように直接遺構と遺物の時期的な関係が曖昧になる感は否めないが、周辺遺物として取り上げる。



第100图 47·48·49(1)号土坑墓周边遗物

11) 47・48・49号土坑墓周辺遺物

(第100図～第101図, 410～417, S 126)

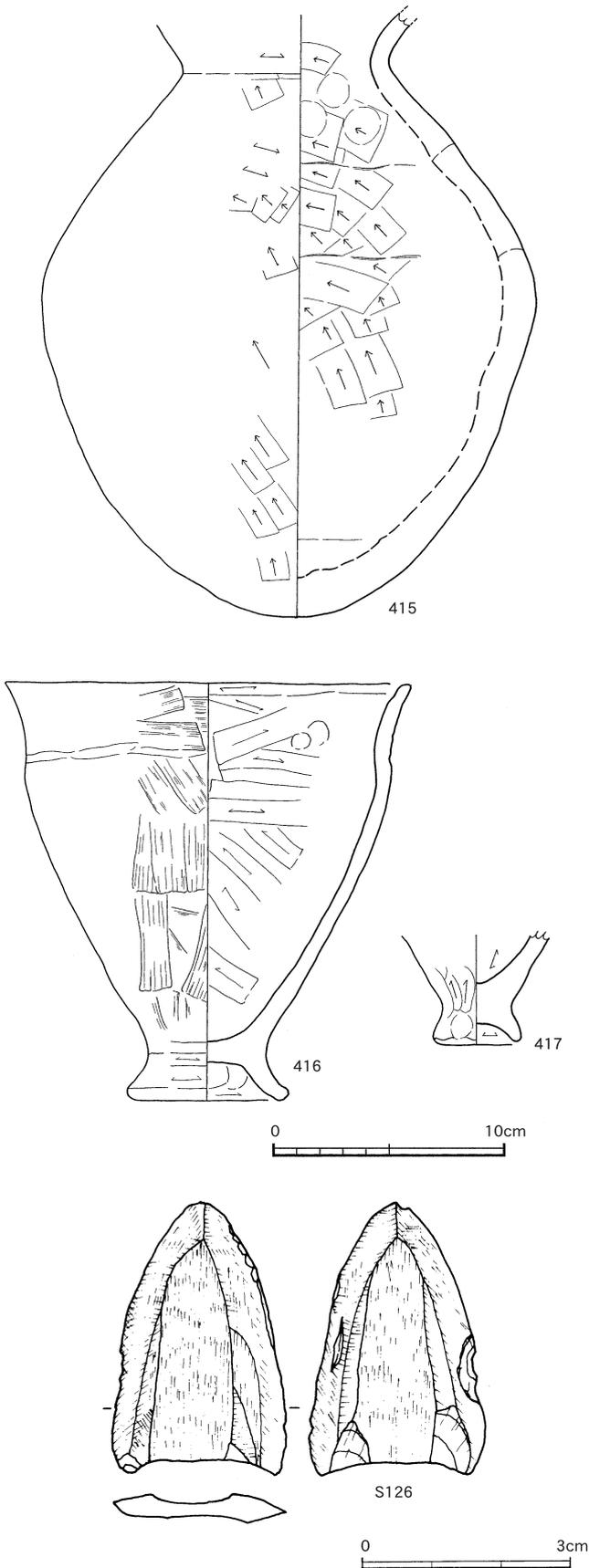
47号土坑墓周辺出土の410は長頸気味の壺形土器である。48号土坑墓周辺出土の412の壺形土器は、口縁部が短く、くの字状に外反し、なで肩の逆卵形をなし、不安定な平底を呈す。胴部のやや上に一条の刻目突帯を、胴部ほぼ中央に穿孔を施す。底部には、焼成前の穿孔もある。49号土坑墓周辺出土の413の壺形土器は口縁部がくの字状に外反し、楕円形状の器形をなす。肩部よりやや下に一条の刻目突帯を施すが、左下がりで連結しない。414は長頸壺で、口縁部は欠損しているが、胴部は屈曲部が鋭く、平底である。底部付近には穿孔を施す。415の壺形土器は口縁部が欠損している為、口唇部形状は不明であるが、胴部器形が丸味を帯びた菱形状をなし、底部はレンズ状を呈す。全体的に作りが荒い。416の甕形土器は、口縁部がくの字状に外反し、頸部で段をもつ。脚台は外反しながら開き、外底部は平坦である。417は、甕形もしくは鉢形土器の底部である。底部は外傾して短く開くが、端部でやや内弯する。S 126は、磨製石鏃である。本遺跡出土の磨製石鏃の中では小さい方である。

これらの遺物は、I期該当が中心と考えられるが、甕形土器に関しては、II期該当遺物と思われる。

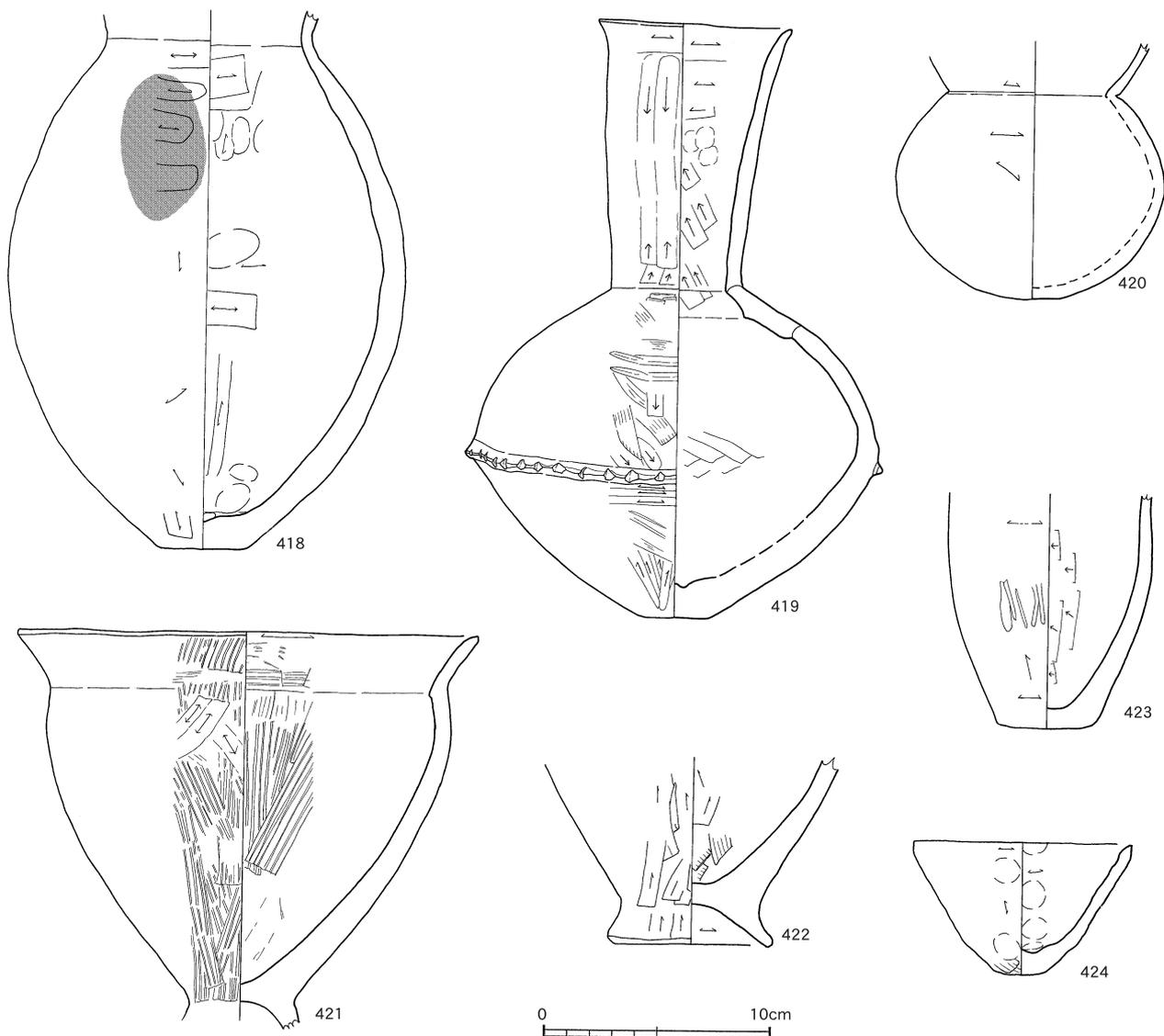
12) 50号土坑墓周辺遺物

(第102図, 418～424)

418の壺形土器は、口縁部が欠損しているが、長胴形で平底を呈す小型丸底壺である。419は長頸壺で、口縁部が直行して立ち上がり、端部で外反する。胴部は、ソロバン形で屈曲部が鋭く、平底を呈す。屈曲部には一条の刻目突帯を施す。420は、小型の丸底壺である。口縁部が欠損して口唇部形状は不明であるが、頸部から口縁部にかけてくの字状に屈曲する。口縁部にかけてやや内弯して立ち上がる。胴部器形は球形をなし、底部は僅かながらへ平底をなす。421の甕形土器は、口縁部がくの字状に外反し稜線が明瞭である。頸部から底部にかけて一度膨らみをもちつつ、急にすぼまる。脚部は欠損し不明である。423は、口縁部が欠損しているが鉢形土器と思われる。口縁部から胴部にかけて垂直状に下り、胴部下位ですぼまる。



第101図 49号土坑墓周辺遺物(2)



第102図 50号土坑墓周辺遺物

底部は平底を呈す。風化のため調整痕は不明瞭であるが、細かなミガキを施してあるのが観察できる。424も鉢形土器である。すり鉢状の器形に平底を呈す。口唇部は三角形状を呈す。422は、甕形もしくは鉢形土器の底部である。

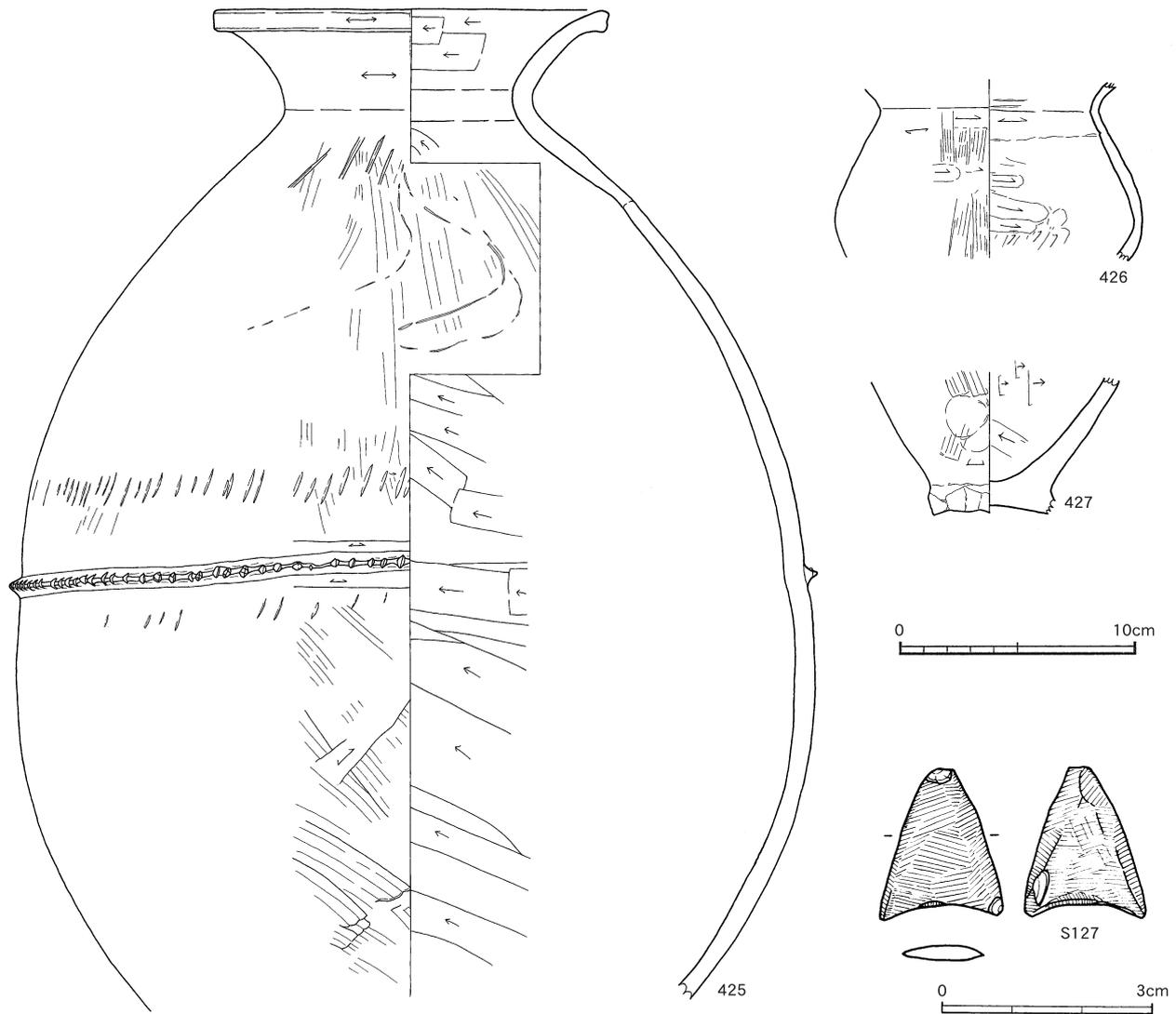
これらは、I期該当遺物と考えられる。

13) 54・55号土坑墓周辺遺物

(第103図, 425~427, S 127)

425の壺形土器は、54号土坑墓遺物で、底部が欠損している。口縁部は短く、くの字状に外反し、口唇部はM字状を呈す。頸部がかなりすぼまり、屈曲度合いが大きい。胴部はなで肩の寸胴形の楕

円形状を呈す。胴部中央に一条の刻目突帯を施す。肩部には、4本の斜位の短直線と蛇行した線の刻みが施される。おそらく絵画的なものであると思われるが、何を描いてあるかは不明である。55号土坑墓周辺遺物には、壺形土器(426)と鉢形土器の底部(427)、小振りな磨製石鏟(S 127)がある。426は、口縁部、底部と共に欠損しており全体的な器形は不明瞭であるが、小型丸底壺と思われる。427は甕形もしくは鉢形土器と思われる底部である。脚部がほとんどないと思われるほど短い。S 127の磨製石鏟は本遺跡の当該時代の出土遺物で一番小さいものである。形状は二等辺三角形を呈し、細かい調整を施す。425の壺形土器



第103図 54・55号土坑墓周辺遺物

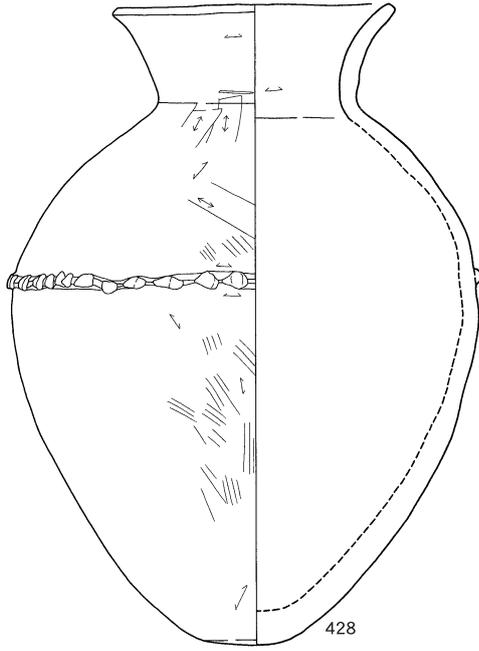
以外はいずれも欠損があり時期的な判断は難しいが、I期の遺物ではないかと思われる。

14) 58・59・61号土坑墓周辺遺物
(第104図, 428~433)

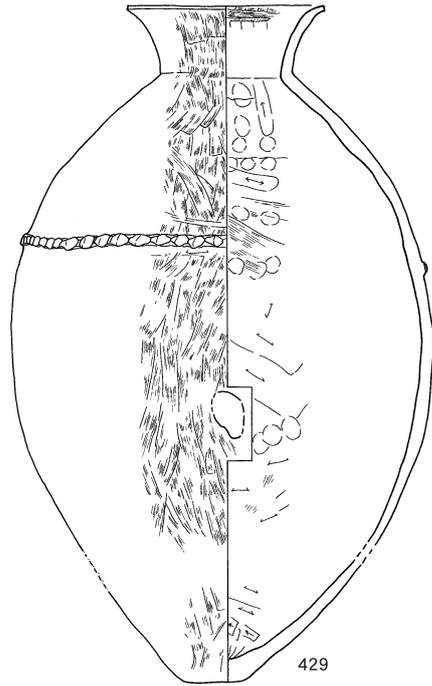
58号土坑墓周辺遺物は、壺形土器(428)のみである。これは、口縁部が短く、くの字状に外反し、口唇部が平坦面を呈す。胴部はなで肩の少し膨らみのある、逆卵形をなし、平底を呈す。胴部中央に一条の刻目突帯を施す。

61号土坑墓周辺遺物は、429の壺形土器と432の甕形土器がある。429の壺形土器は口縁部が短く、くの字状に外反し、口唇部は平坦面をなす。肩部

はなで肩で長楕円形状のスリムな器形をなし、平底を呈す。胴部上位には一条の刻目突帯を、胴部やや下位に穿孔を施し、全体的に丁寧な刷毛目を施す。432の甕形土器は、底部が欠損しているため形状は不明である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は丸味を帯びる。胴部はほぼ直線状で底部にかけ緩やかにすぼまるようである。その他、59号土坑墓周辺遺物の430は、甕形もしくは鉢形土器の底部、高坏形土器の底部と思われる433がある。431と433の高坏形土器は、在地特有の土器ではなく、他地域の形状を模したものであるかと思われる形状をなす。おそらく土師器の器台を模したものである。

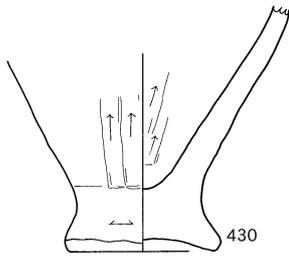


428

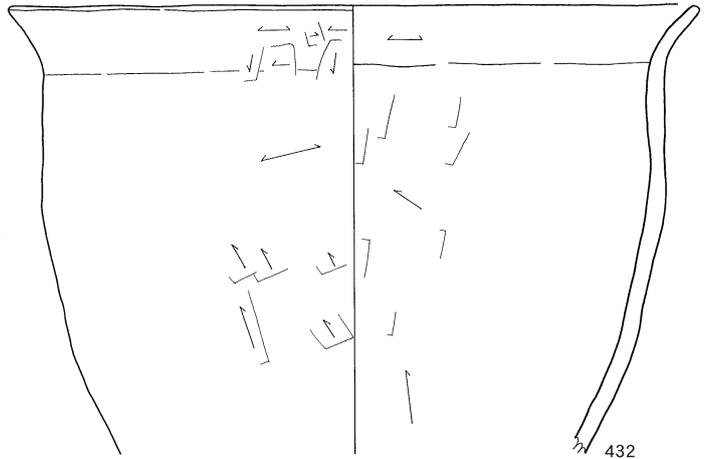


429

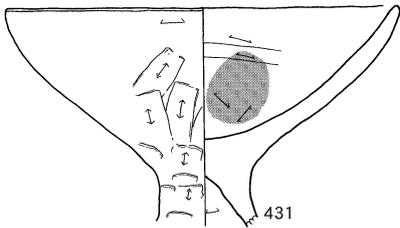
0 10cm



430

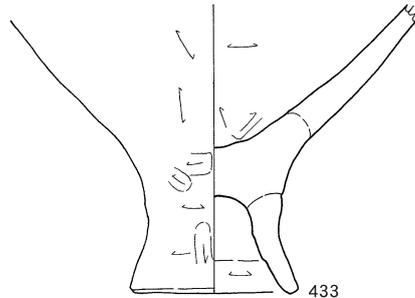


432



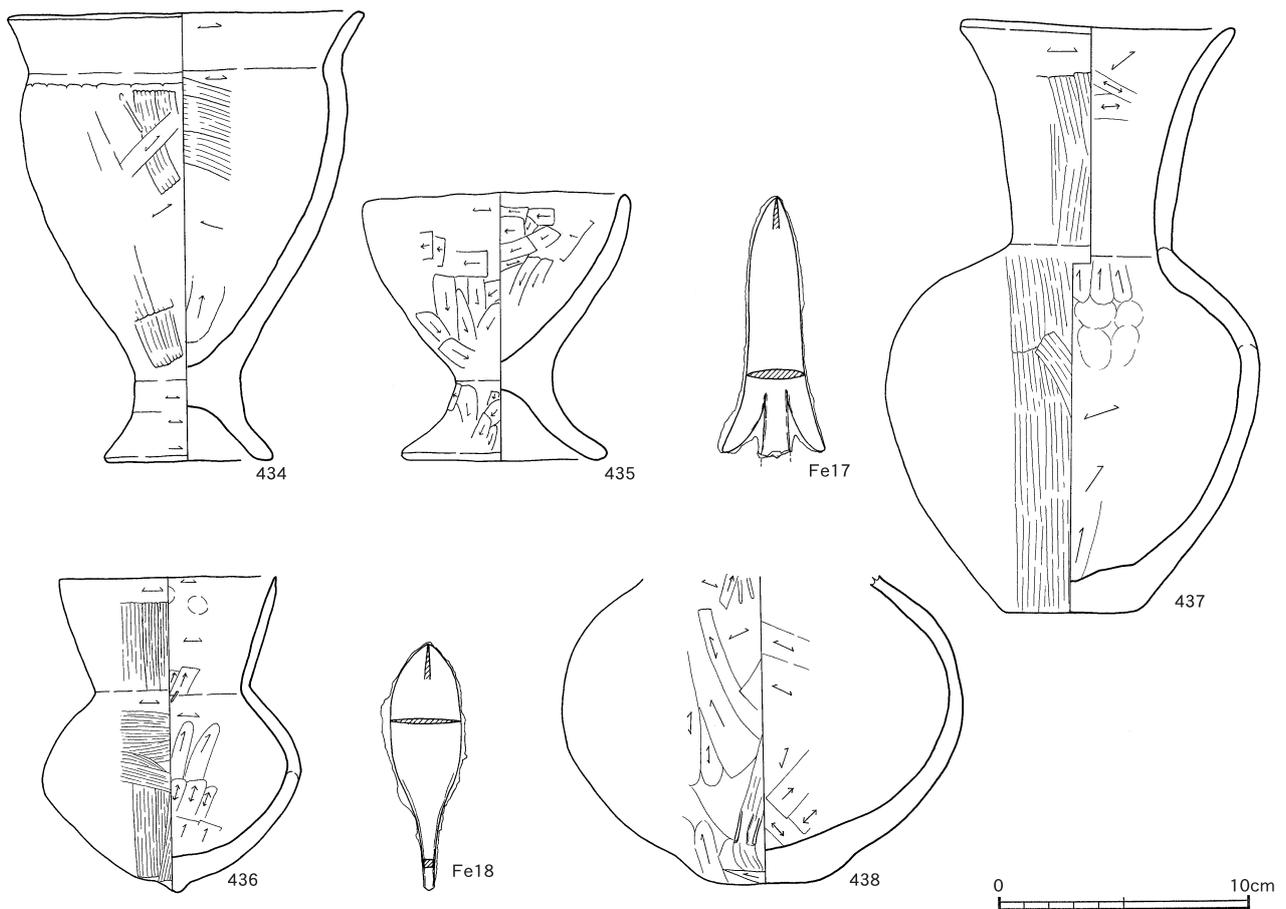
431

0 10cm



433

第104图 58·59·61号土坑墓周边遗物



第105図 63・66・67号土坑墓周辺遺物

これらのことから、428はⅠ期、429、432はⅠ～Ⅱ期該当と思われるが、430・431・433はⅡ期該当遺物と思われる。

15) 63・66・67号土坑墓周辺遺物

(第105図, 434～438, Fe17・Fe18)

63号土坑墓周辺で3点(434・435・Fe17)、66号で2点(436・Fe18)、67号土坑墓周辺で2点(437・438)記載した。

434は、口縁部がくの字状に外反し、頸部に段をもつ甕形土器で、脚部が外反しながら開き、外底部は平坦面を呈す。435は脚付鉢形土器と思われる。底部から口縁部まで碗形状をなし、口唇部は丸い。脚部はハの字状に外反し端部は丸い。Fe17は、長三角腸快鏃である。434は、Ⅱ期該当遺物と思われるが、Fe17は古墳時代中期、Ⅳ期該

当遺物と考えられる。レベル的にも434は低いレベルで検出された。

66号土坑墓周辺出土遺物の436は、小型壺形土器で、底部に突起をもつ。Fe18は柳葉鏃で、弥生時代終末期のものである。しかしながら、436の形状から436はⅡからⅢ期該当遺物と思われる。

67号土坑墓周辺出土の437は長頸壺で、長く外反する口縁部で肩の張った丸みのある胴部に平底を呈する。全体的に丁寧な刷毛目を施す。また、438は口縁部が欠損しており全体器形は不明であるが、小型丸底壺と思われる。これらの遺物からⅠ期該当遺物と思われる。

このように、これらの上面遺物では海岸側(東側)に面した所で表土がほとんど削平されている上、旧地形では丘陵地緩斜面で9層薄いことから流れ込みの可能性もありえる。

(4) 土器集中区ごとの遺物 (第106図～第150図)
(第62図参照)

1) D-8区, Aブロック出土遺物

(第106図～第108図, 439～449, Fe19)

これらは, 1号立石に近いところで列状に並んで出土した。439・442～444・446の土器がまず出土し, これらの遺物を取上げた後, 447・448・449の遺物が出土した。(遺構遺物出土状況図参照)

壺形土器は, 439・441・442・444が刻目突帯を有するもの, 440・443・445・448は, 無文土器である。

439は, 口縁部が短く, く字状に外反し, なで肩で菱形風状の胴部に平底を呈す。胴部やや上位に一条の刻目突帯を, 胴部下位に穿孔を施す。441は, 口縁部が欠損して不明であるが, なで肩で球形に近い胴部に平底を呈す。肩部下位に二条の刻目突帯を, 胴部下位に穿孔を施す。442も, 口縁部が欠損して不明であるが, なで肩で楕円形状の胴部に平底を呈す。ほぼ胴部中央に一条の刻目突帯を施し, 胴部下位に穿孔を施す。特徴は, 肩部に絵画的な線刻を施してあることである。鳥とも船とも, はたまた柵状のものとも思われる絵画であるが, 何を表現してあるかは不明である。444は長頸壺と思われる。口縁部が欠損しているが, 外傾気味に口縁部が立ち上がり, 胴部はほぼ球形をなす。胴部やや上位に一条の刻目突帯を, 胴部下位に穿孔を施す。440・443・445の無文の壺形土器は, いずれも口縁もしくは口唇部が欠損しているため, 口縁部形状は不明である。440と445は胴部が丸味を帯びた菱形状を, 443はなで肩の長胴形をなし, いずれも平底を呈す。443の胴部下位には穿孔を施す。448は台付鉢形土器である。底部から口縁部までほぼ直線状に外傾して立ち上がるが, 肩部で若干外反している。口唇部はM字状をなす。脚部も外傾して開き, 端部は平坦面をなす。肩部に一条の刻目突帯を施す。449は蓋形土器であるが, 全般的に作りが粗い。肩部から急に外反し, 端部は平坦面をなす。天井部は丸みをもち, 逆浅鉢形である。Fe19は, 調査区境の攪乱層と包含層境で検出された槍身銚である。攪乱層一括として取り上げたものの, 鹿児島大学橋本准教授によると, この槍身銚は大変珍しく, えびの市「島内65号地下式横穴墓」か

ら出土しており, 須恵器のTK208～TK47段階のものではないかというご指摘を受けた。この槍身銚は時期的には新しい。

これらは, 鉄銚以外がI期該当遺物と考えられる。

2) B-8区, Bブロック出土遺物 (第108図, 450～453)

このブロックは, 破碎行為を行ったのか, 土器片が集中した所であった。その中で, 完形となった遺物は, 450と451の壺形土器, 453の高環形土器, 452の鉢形土器である。450と451は器形がほぼ同じで, 451は口縁部が欠損している。口縁部はく字状に外反し, 胴部は楕円状をなし, 底部は平底である。突帯はない。453は口縁部が外反し, 脚部は直線状に外傾し, 端部付近で急に外反し上方へ反る。対の4つの透が施される。

壺形土器の器形からI期に該当すると思われるが, 高環形土器は, 外来の土器の可能性もある。

3) B-8区, 立石10の周辺及び立石下で出土したCブロック出土遺物 (第109図, 461～464)

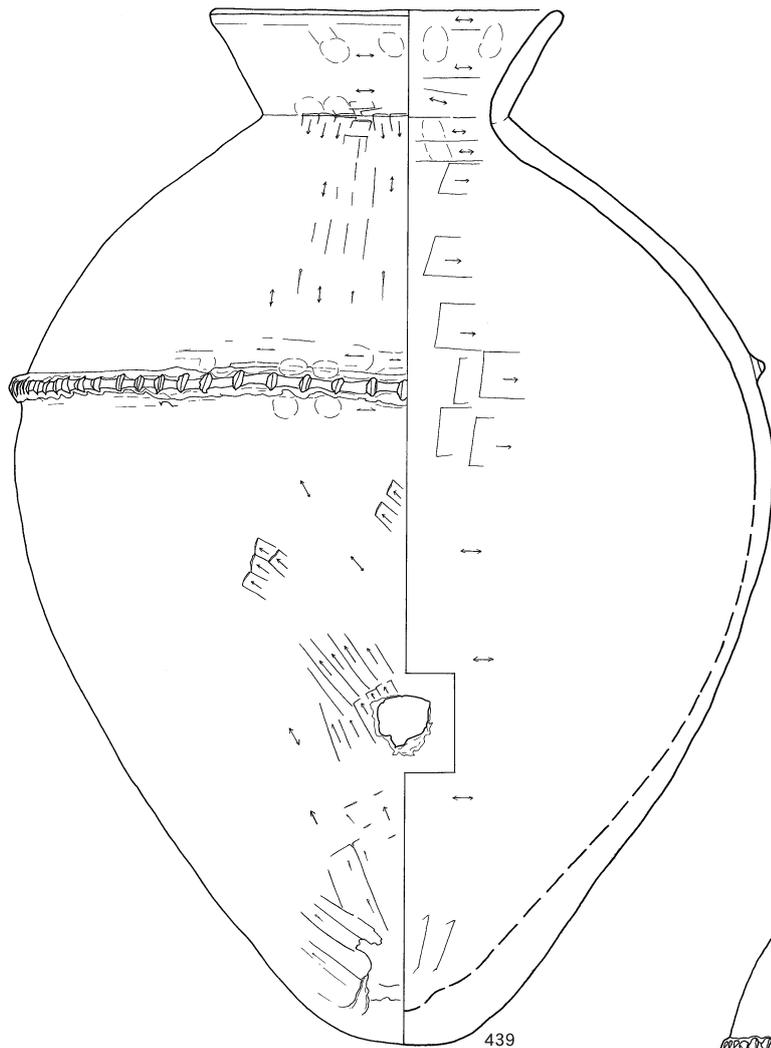
ここも破碎行為か自然か不明であるが, 土器片が集中した所であった。461の壺形土器は, 口縁部がく字状に外反し, 口唇部は丸みをもつ。胴部は膨らみのある楕円状をなし, 平底を呈す。底部には樹木等を台にし, 土器を成形したと思われる圧痕がある。462～464は完形とならなかったが, 壺形土器の口縁部及び底部である。

これらの遺物はI期該当と考えられる。

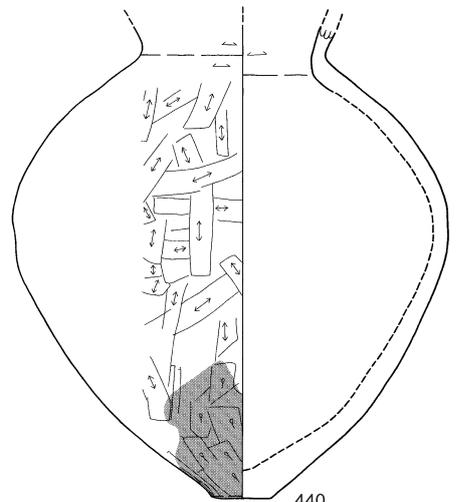
4) B-8区, 3号壺棺墓近辺のDブロック出土遺物 (第110図～第112図, 458～476)

このブロックは, 破碎行為を意図的に行ったと思うような土器片が散乱している所であった(図版15)。いくつかの遺物は, 接合し復元できるものもあった。

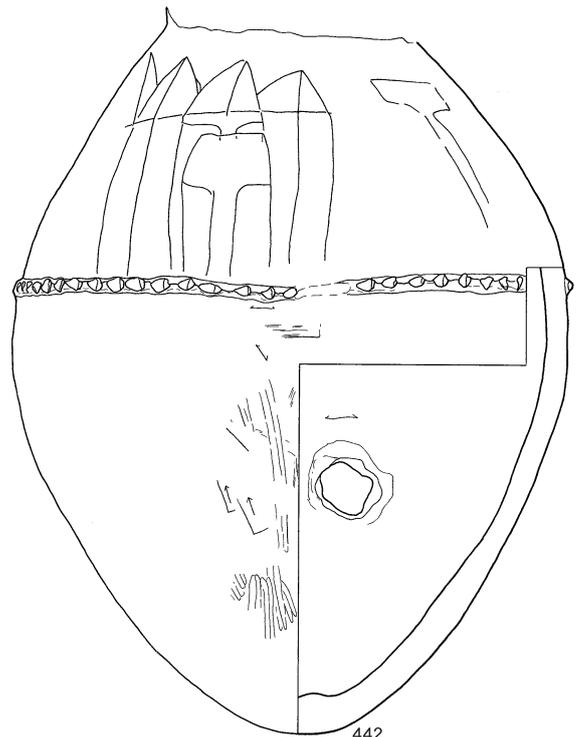
458～466は壺形土器である。458は口縁部がく字状に外反し, 端部で更に外反する。口唇部は平坦面を呈する。なで肩で逆卵形のスリムな器形に, 不安定な平底を呈する。胴部中央よりやや上



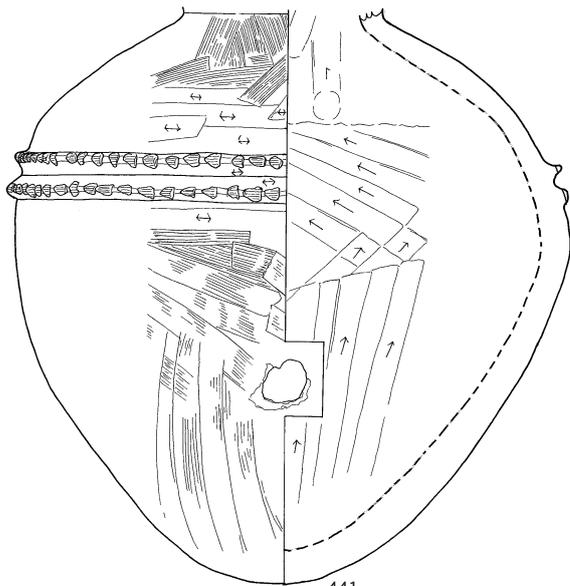
439



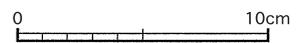
440



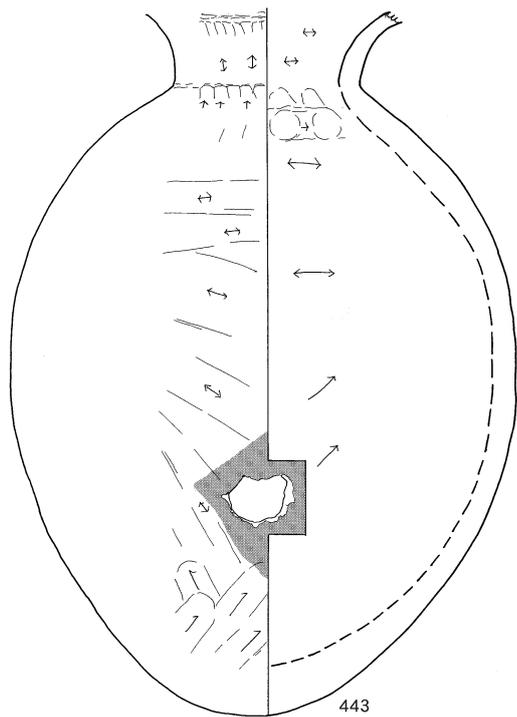
442



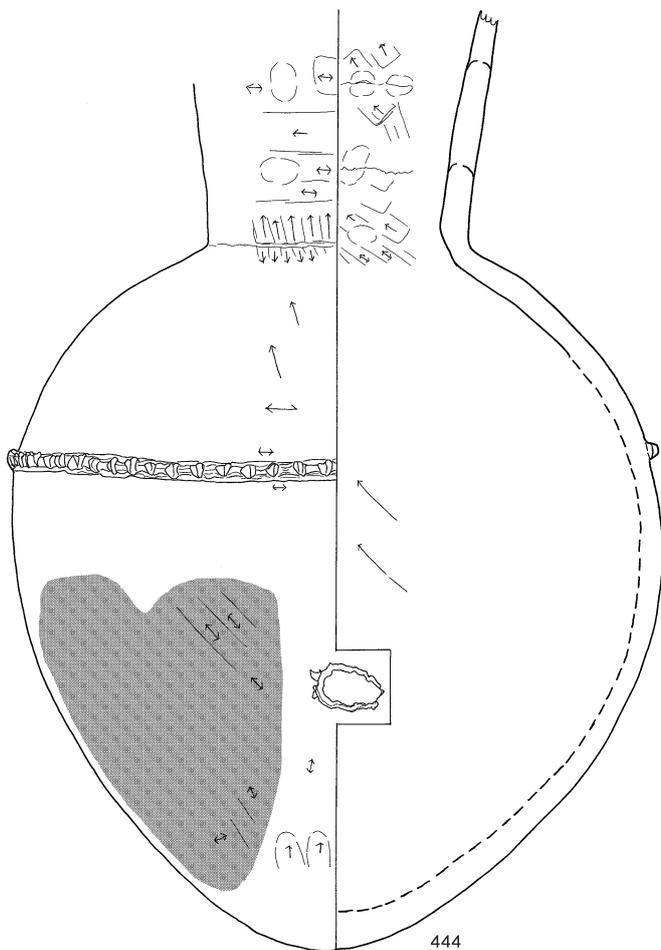
441



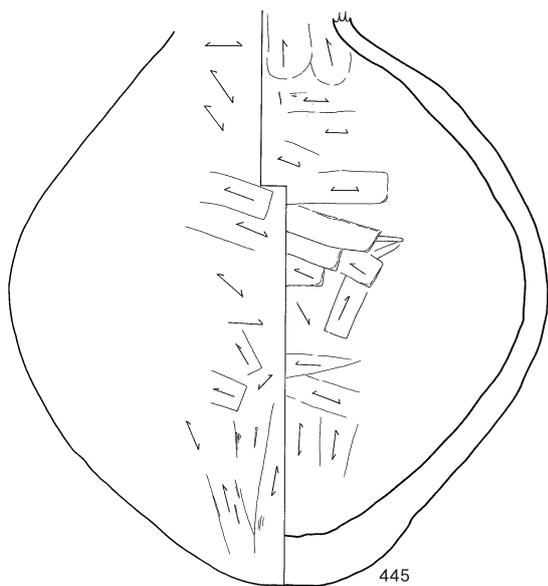
第106図 Aブロック周辺遺物(1)



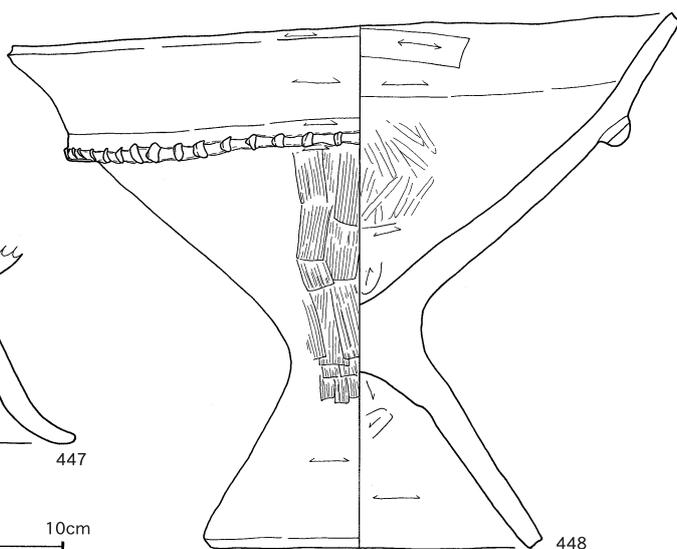
443



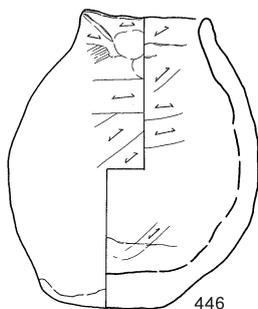
444



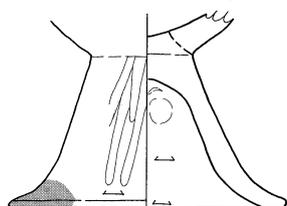
445



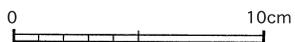
448



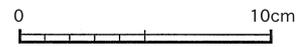
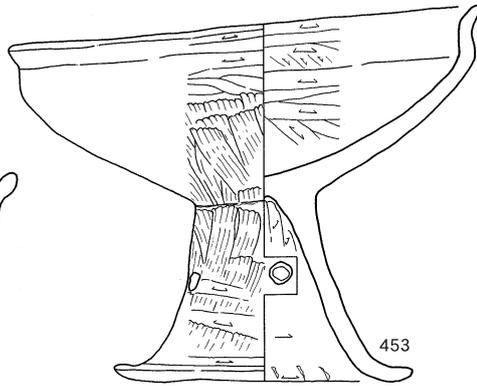
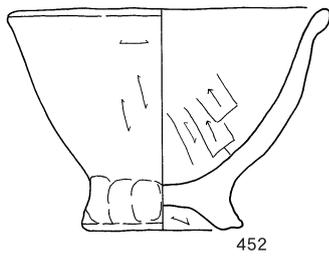
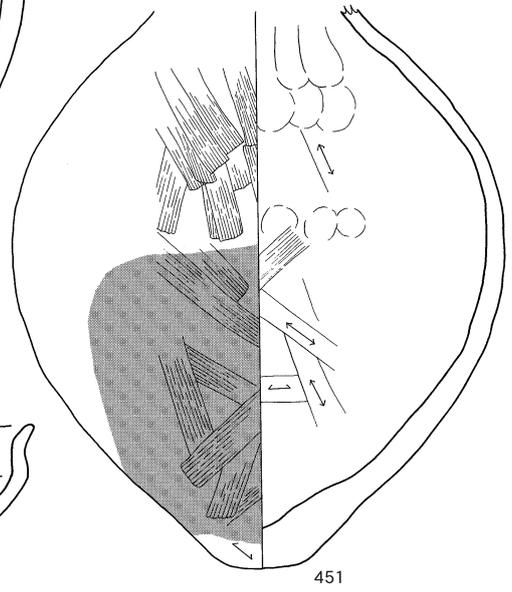
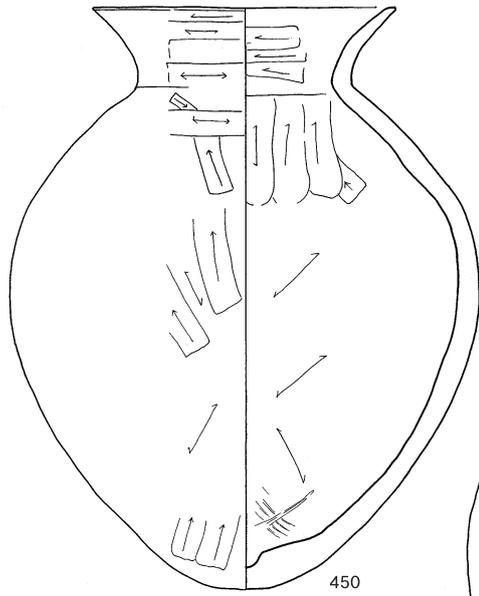
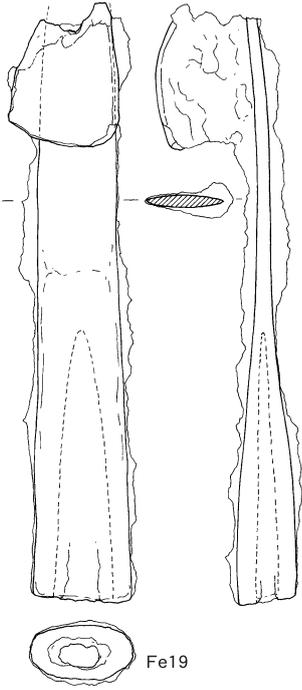
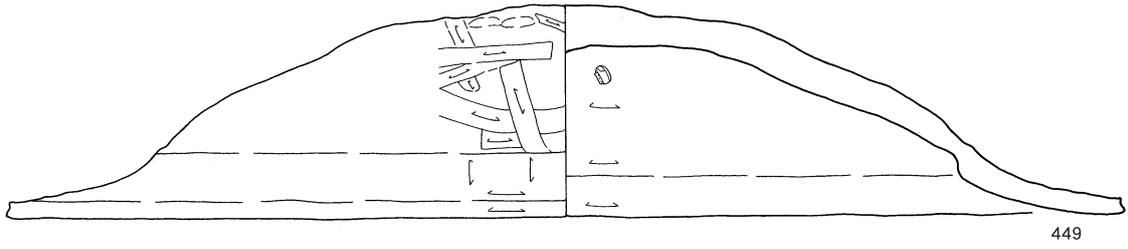
446



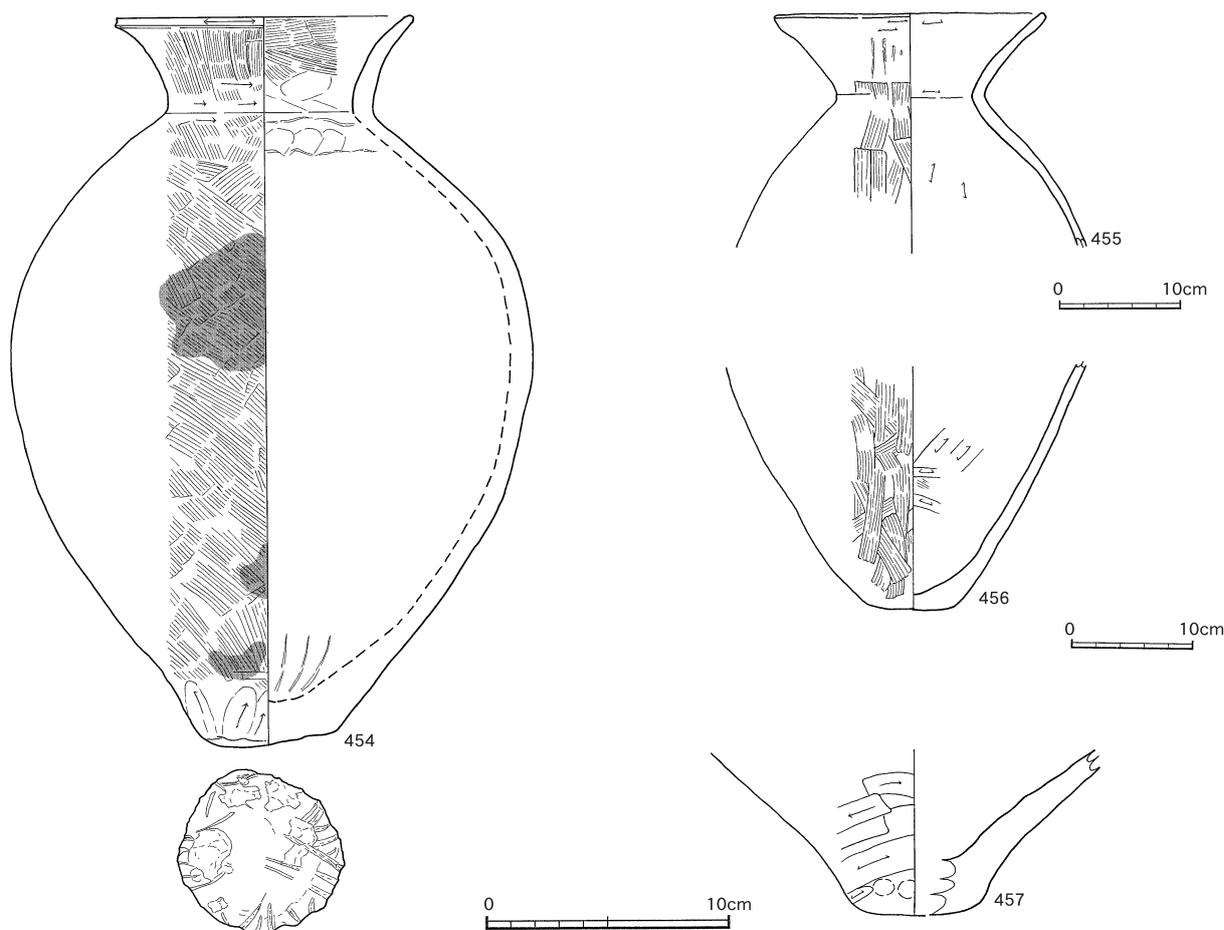
447



第107図 Aブロック周辺遺物(2)



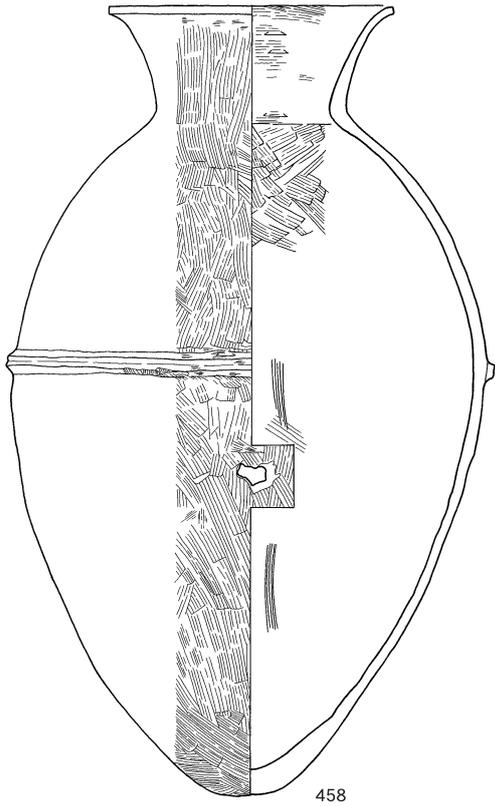
第108図 A(3)・Bブロック周辺遺物



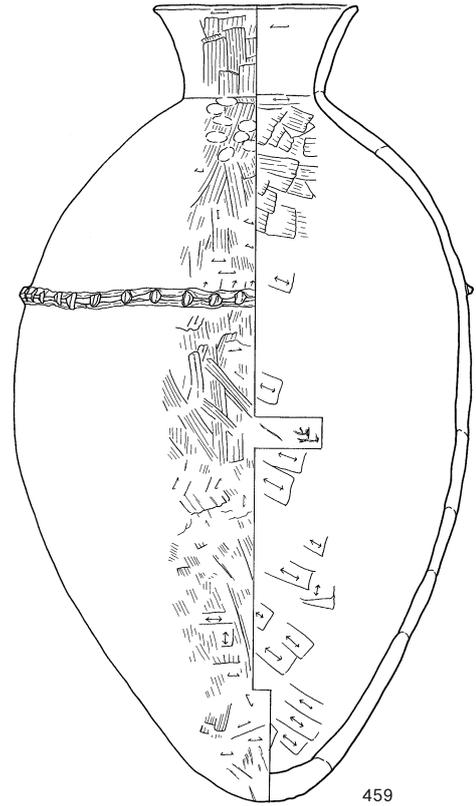
第109図 Cブロック周辺遺物

に一条のM字状突帯があり、胴部ほぼ中央には穿孔を施す。459は口縁部が短く、くの字状に外反し、端部は丸味を帯びる。なで肩の逆卵形でスリムな器形をなし、底部は丸みを帯びる。肩部に一条の刻目突帯を施す。460と461は完形でない。460は口縁部から胴部突帯部まで欠損しているが、少し膨らんだ逆卵形の器形に不安定な平底を呈す。胴部には一条のM字状突帯を施す。461は胴部下から底部のみで、底部は厚い平底を呈す。462は口縁部が欠損しているが、ほぼ球形の器形に平底を呈す。ほぼ胴部中央に一条の突帯を施し、底部付近に穿孔を施す。底部には、記号と思われる放射線状に描かれた線刻が施される。463は突帯がないが、口縁部がくの字状に外反し、口唇部は丸味を帯びる。胴部は楕円形状で平底を呈す。464は口縁部が外傾気味に長く立ち上がり、端部で外反する。口唇部は丸味を帯びる。胴部は楕円形状

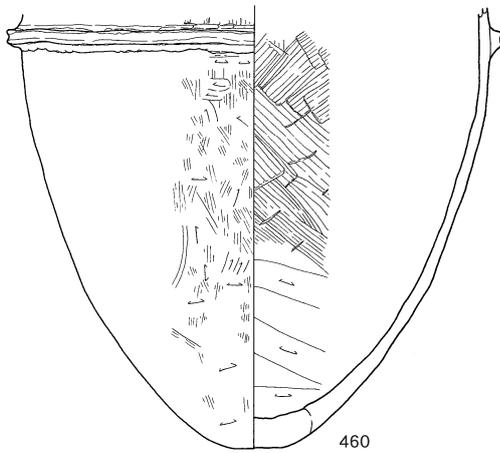
で丸底を呈す。胴部中央に一本の幅広の紐状突帯を貼り付け、中央に凹線を施した二条の三角突帯にみせた突帯を施す。突帯の上部に穿孔を施す。465と466は丸底壺である。両者とも口縁部が欠損しているが、胴部は、465が丸みを帯びたソロバン形を、466は球形を呈す。470～472は甕形土器である。470は口唇部が欠損しているが、口縁部がくの字状に外反し、膨らみをもった胴部に脚部がほぼ直線状に伸び、端部で外反する。471も口縁部が欠損しているため、全体的な器形は不明であるが、脚台は短く外反し、外底部は平坦である。472は脚台が欠損しているが、口縁部が外反し、口縁部内面に稜線が明瞭に残る。475は高環形土器の脚部と思われるが、外傾しながら端部で外反する。端部は平坦面をなし、上方へ反っている。対に2カ所透を施す。476の鉢形土器は、肩部から外反し、小さい平底を呈す。口縁部は欠損して



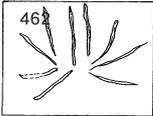
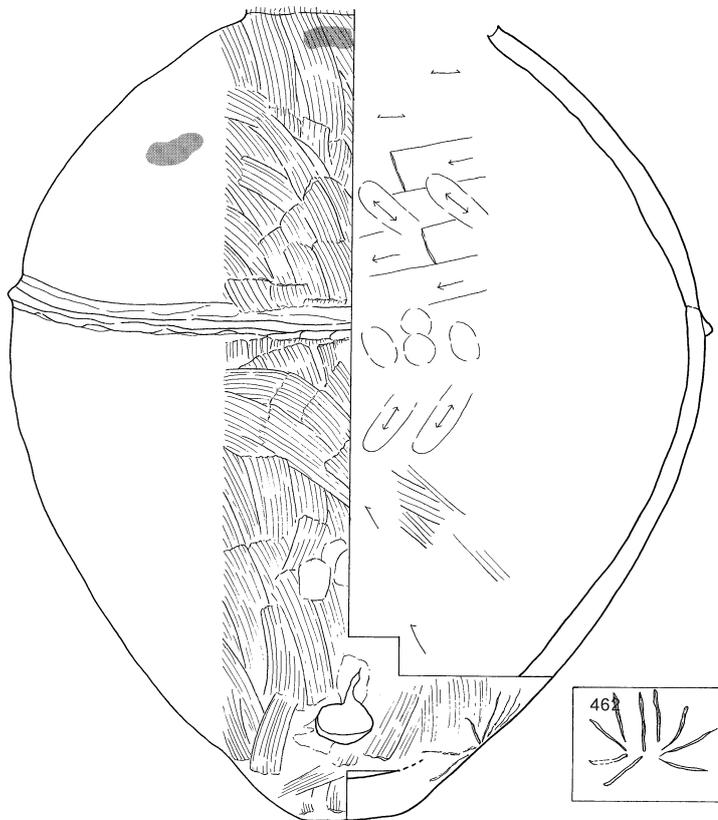
458



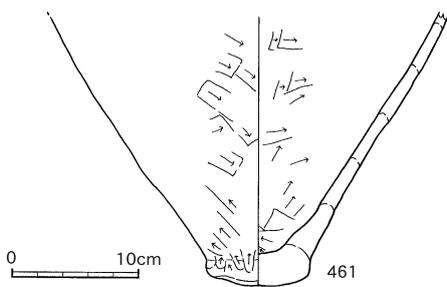
459



460



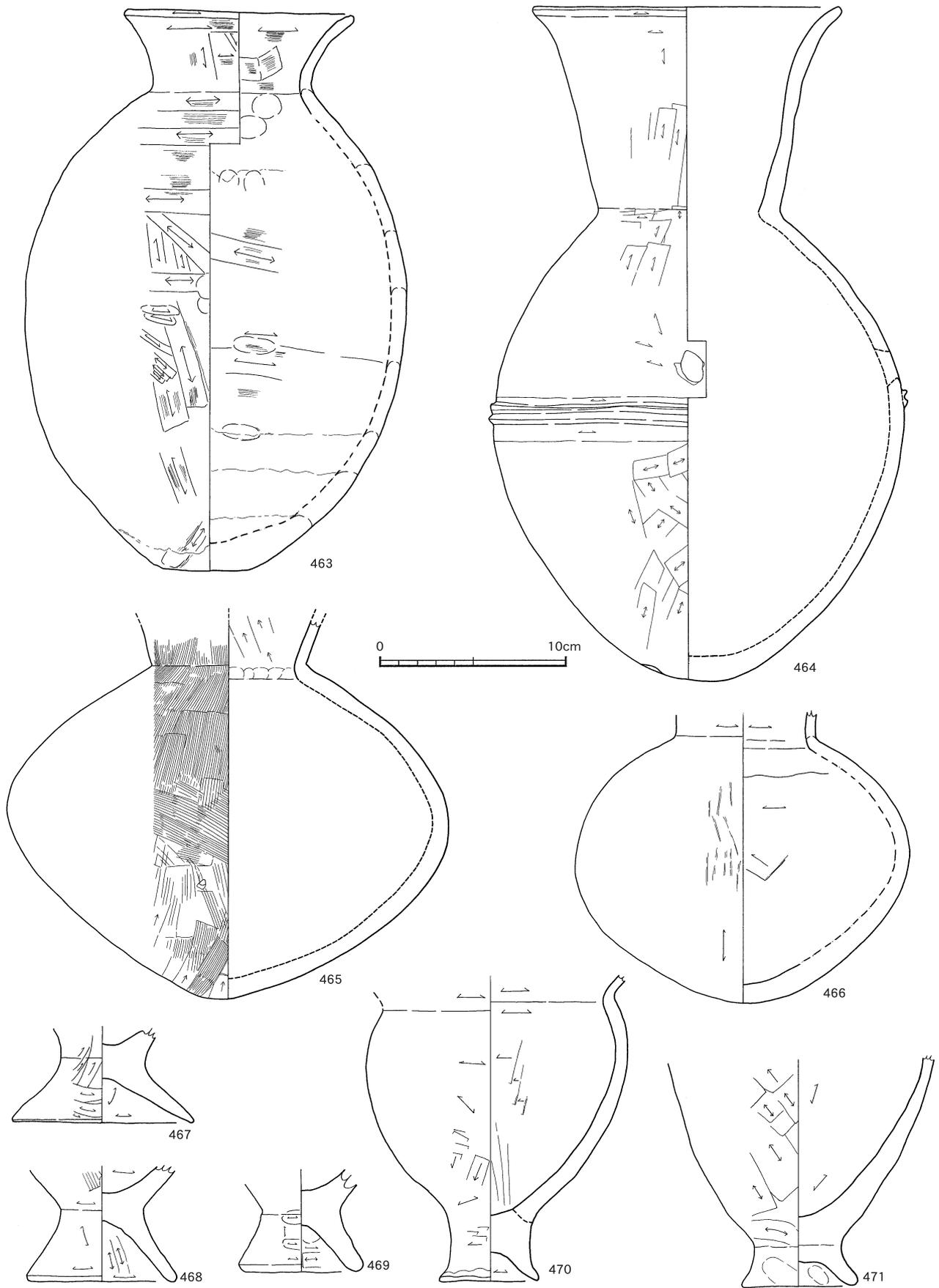
0 10cm



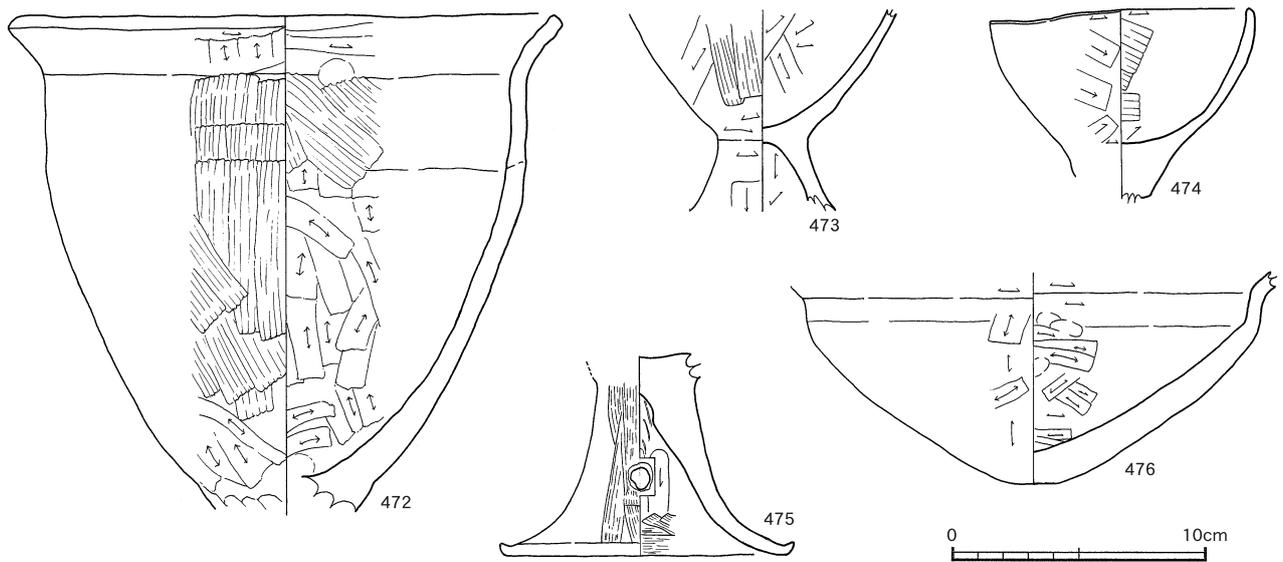
0 10cm

461

第110図 Dブロック周辺遺物(1)



第111図 Dブロック周辺遺物(2)



第112図 Dブロック周辺遺物(3)

おり不明である。これらの遺物は、I期終わり頃～II期の初めの頃のものではないかと思われる。

5) B-7区のEブロック出土遺物

(第113図～第114図, 477～488)

立石7の周辺で、ほぼ完形の状態で壺形土器(477～483)、甕形土器(484・486)、鉢形土器(485)、高坏形土器(487・488)などが出土している。477は口縁部が外傾気味に立ち上がり、端部で外反する。口唇部は平坦面を呈す。頸部には、一条の三角突帯を貼り付け、胴部の器形はなで肩のスリムな楕円形状をなし、平底を呈す。胴部中央に一条のM字状突帯を貼り付け、その上に穿孔を施す。底部には、植物の圧痕と思われる痕が観察できる。478は口縁部がくの字状に外反し、口唇部は平坦面を呈す。頸部には、一条の三角突帯を貼り付け、胴部の器形はなで肩状の逆卵形をなし、小さな平底を呈す。胴部中央よりやや上に一条の台形状突帯を、底部近くに穿孔を施す。突帯下位には丹塗痕が観察できる。480は口縁の端部が欠損しているが、口縁部がくの字状に外反し、なで肩の逆卵形の器形で平底を呈す。胴部のやや上に一条の粘土紐を二条の刻目突帯を施し、底部付近に穿孔を施す。481は突帯のない壺形土器であるが、口縁部が短く、くの字状に外反し、口唇部は平坦面をなす。胴部の器形は、少し膨らみをもつ楕円形状で不安定な平底を呈す。胴部下位に

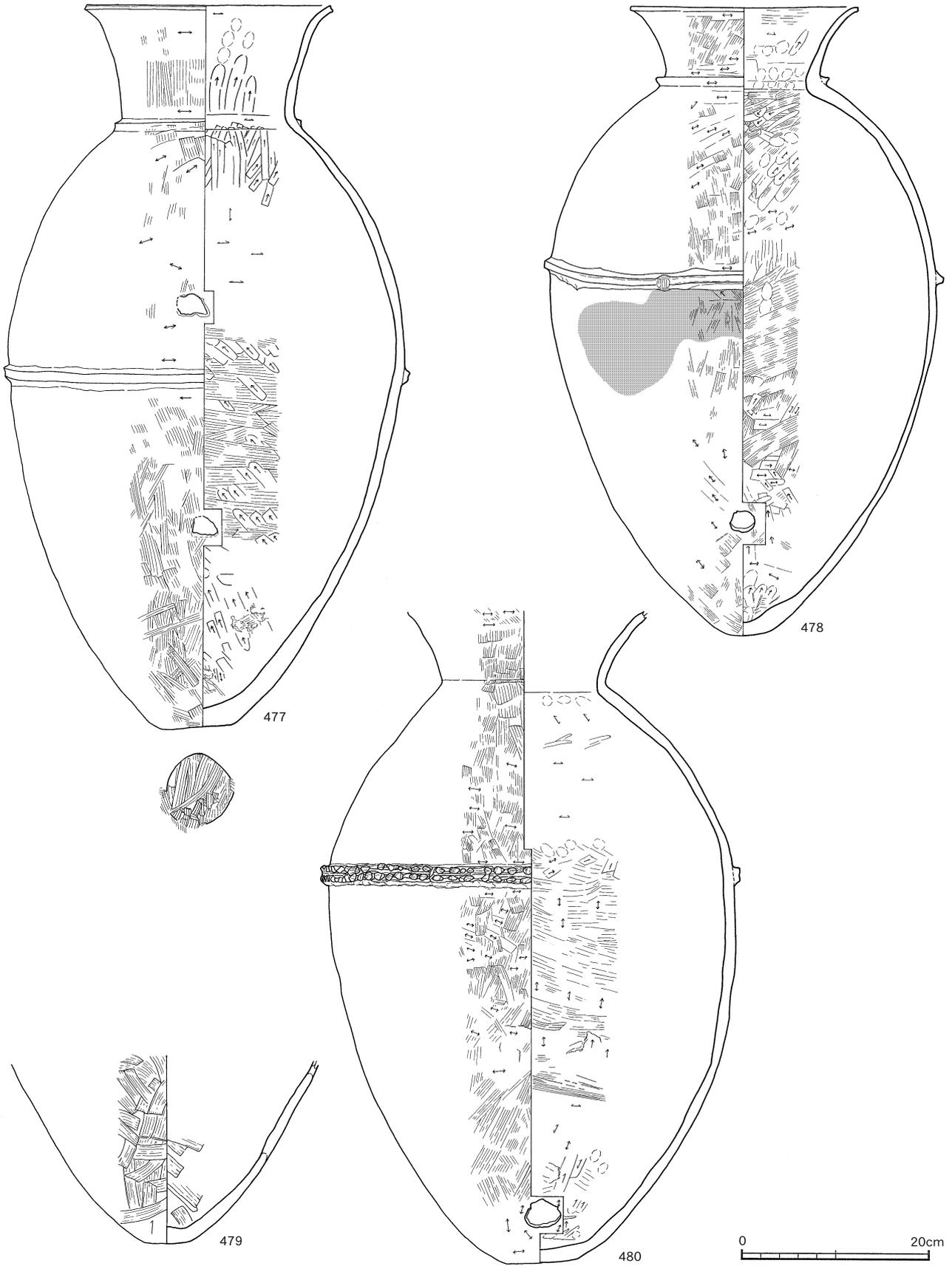
穿孔を施す。482の長頸壺は、口縁上部が欠損しているが、外傾して立ち上がり、胴部はほぼ球形をなし、小さな平底を呈す。肩部付近に二条の刻目突帯を、胴部中央に穿孔を施す。484は口縁部がくの字状に外反し、口縁部内面に稜線が明瞭に観察できる。脚台はハの字状に開く。外底部は平坦である。487は、坏部が碗形状で、脚部は直線状に外反するが、裾部が欠損している。対の透が4つ施される。488は高坏形土器の脚部と思われるが、直線状に外へ開く。対に2カ所の透が施される。

これらの遺物から、I期～II期の変遷期と思われる。

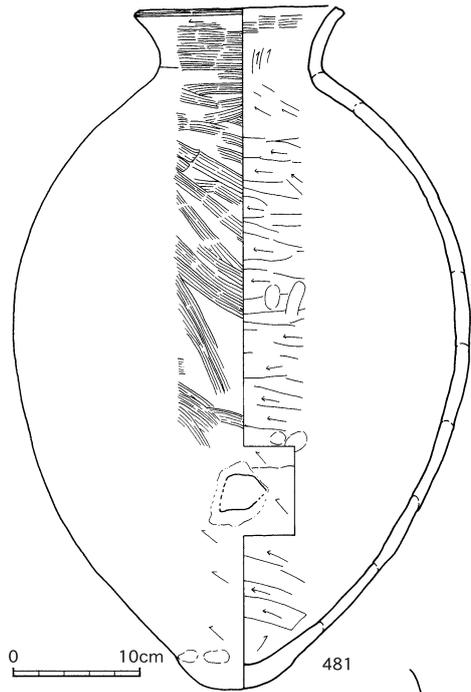
6) A-8～9区のFブロック

(第115図～第123図, 489～539, Fe20, S128)

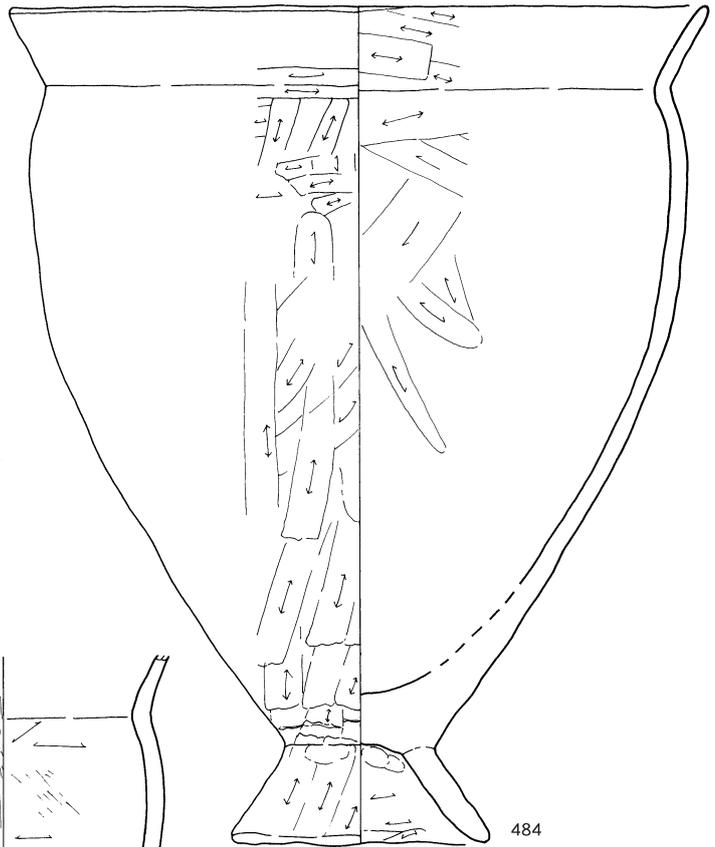
2グリッド分(400㎡)の範囲に区分した。発掘調査時に長頸壺や高坏形土器、甕形土器の類似性が見られたことから、大きめのブロック分けとした。この中には、5・10・11号壺棺墓も含まれている。489・491・495～497・500～502・504・505は、突帯のある壺形土器である。489は口縁部がくの字状に外反し、口唇部は平坦面で、刻目を施す。胴部器形は、肩が張った逆卵形を呈し、底部は丸みを帯びている。肩部よりやや下に四角形状の刻目突帯を一条施す。491は、口縁上部が欠損しているが、口縁部が外反し、胴部器形は楕円



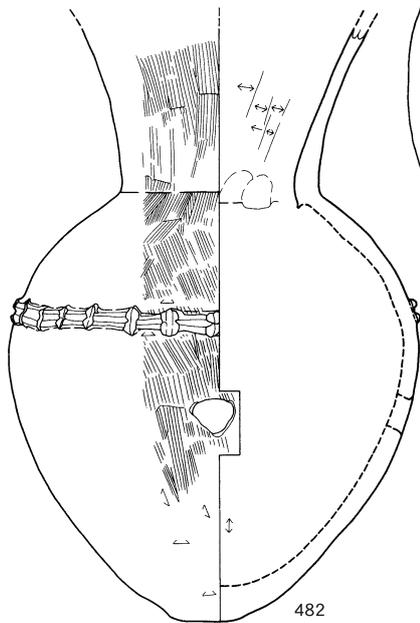
第113図 Eブロック周辺遺物(1)



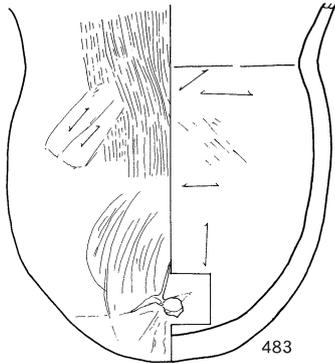
481



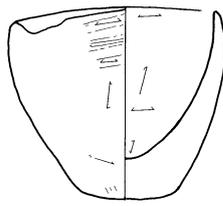
484



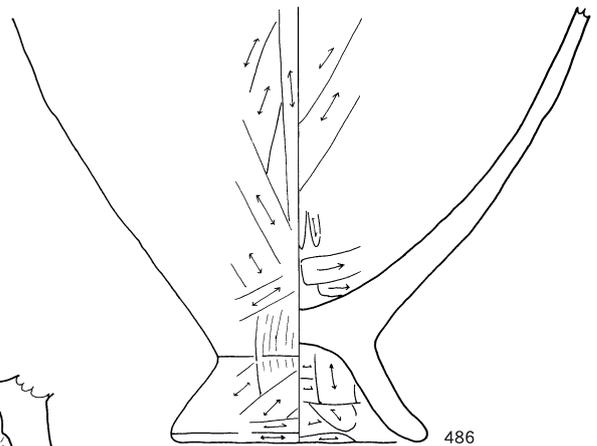
482



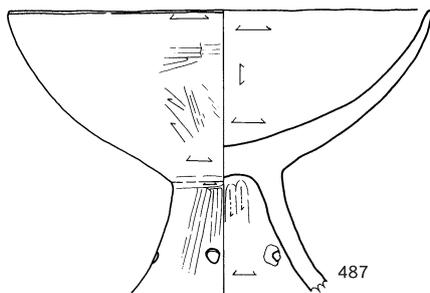
483



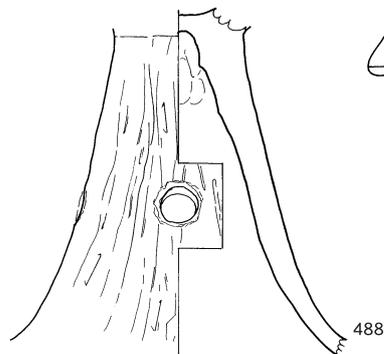
485



486



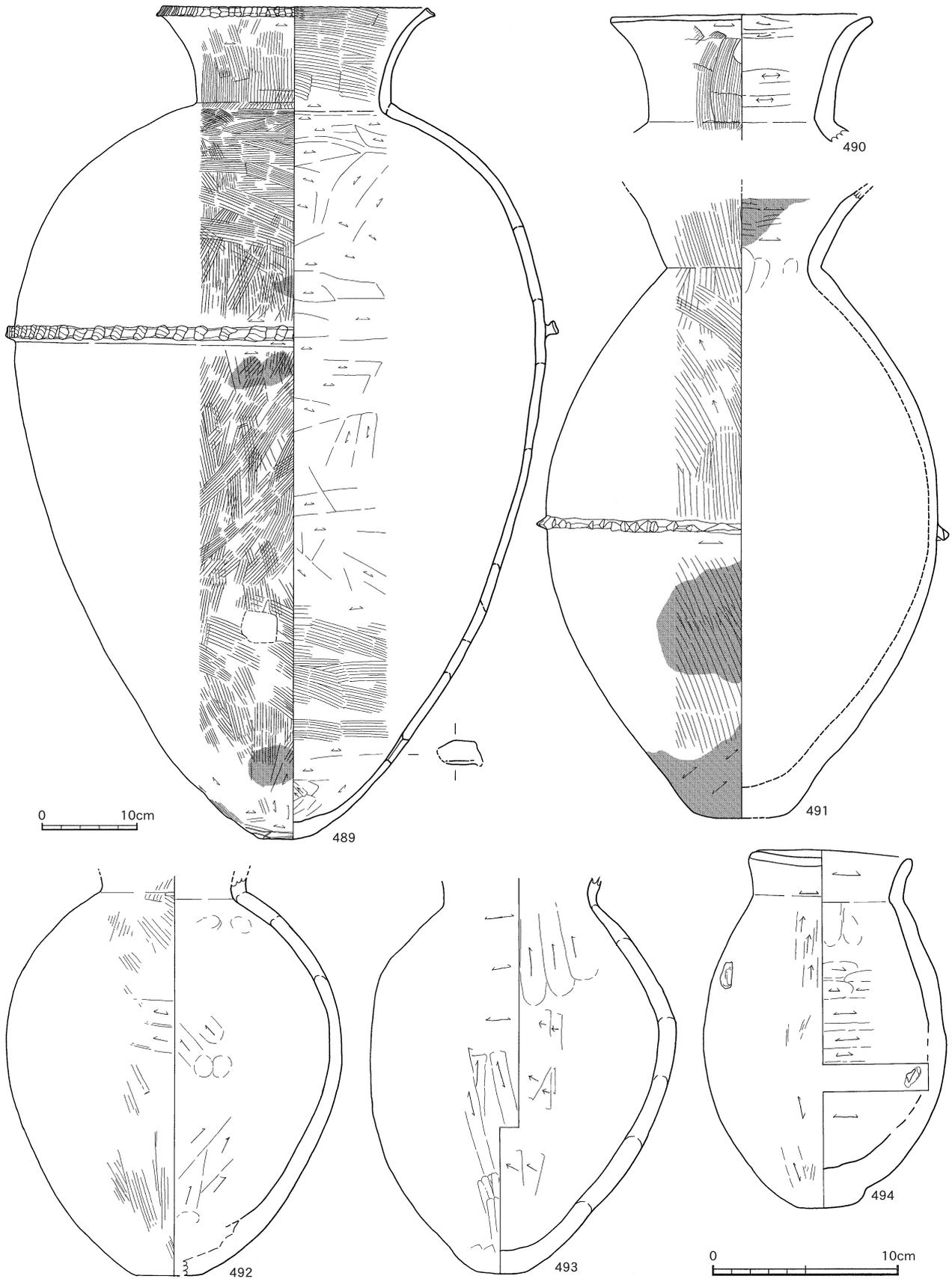
487



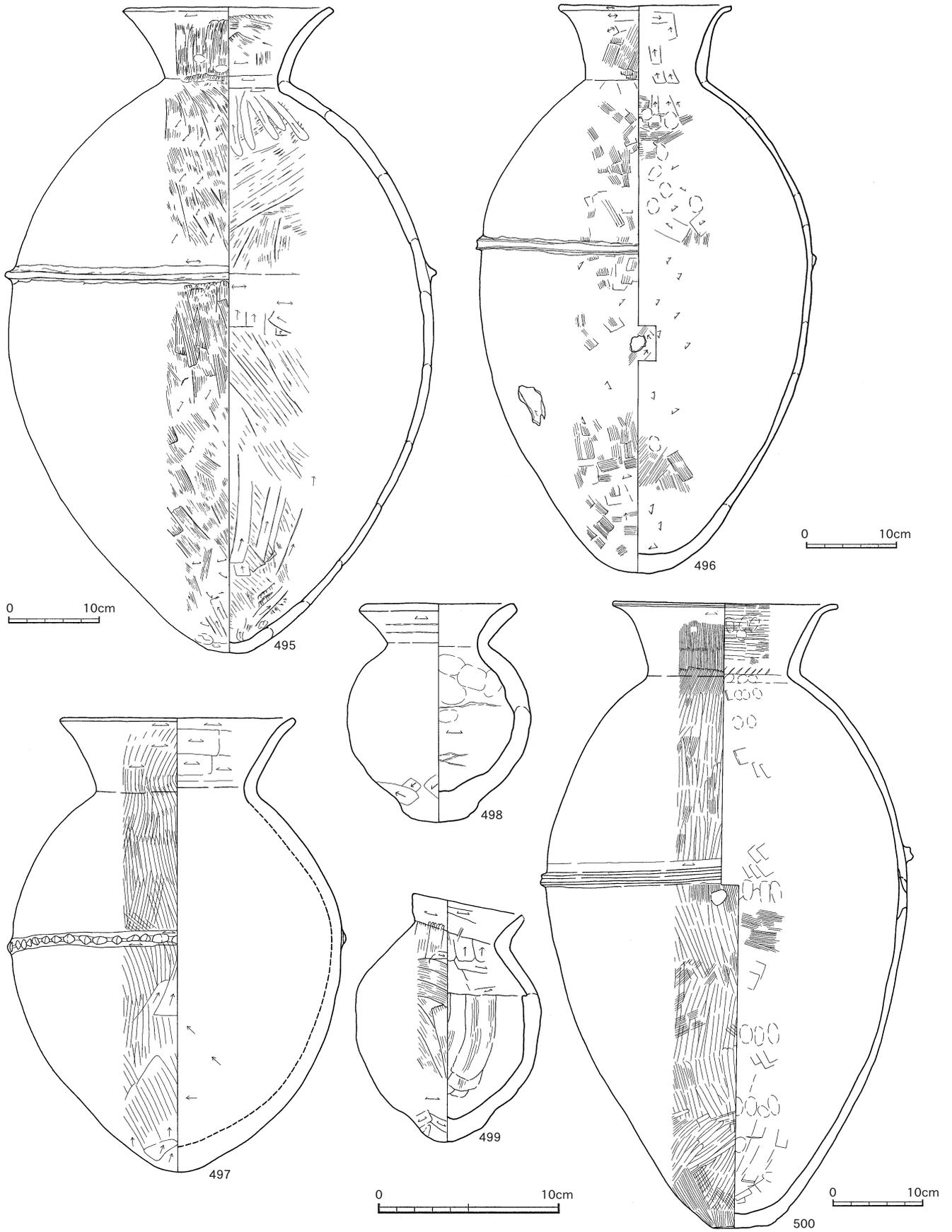
488

0 10cm

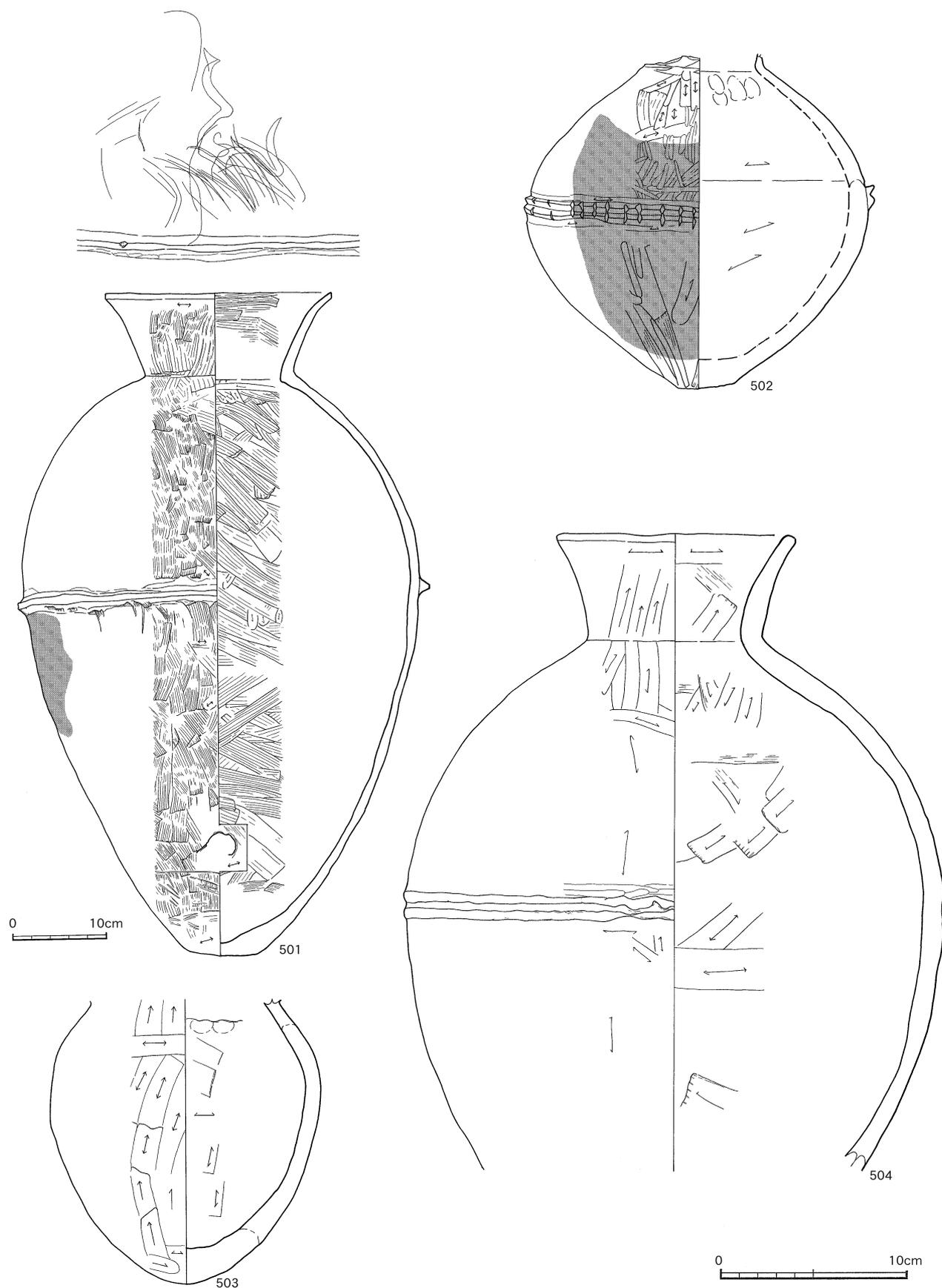
第114図 Eブロック周辺遺物(2)



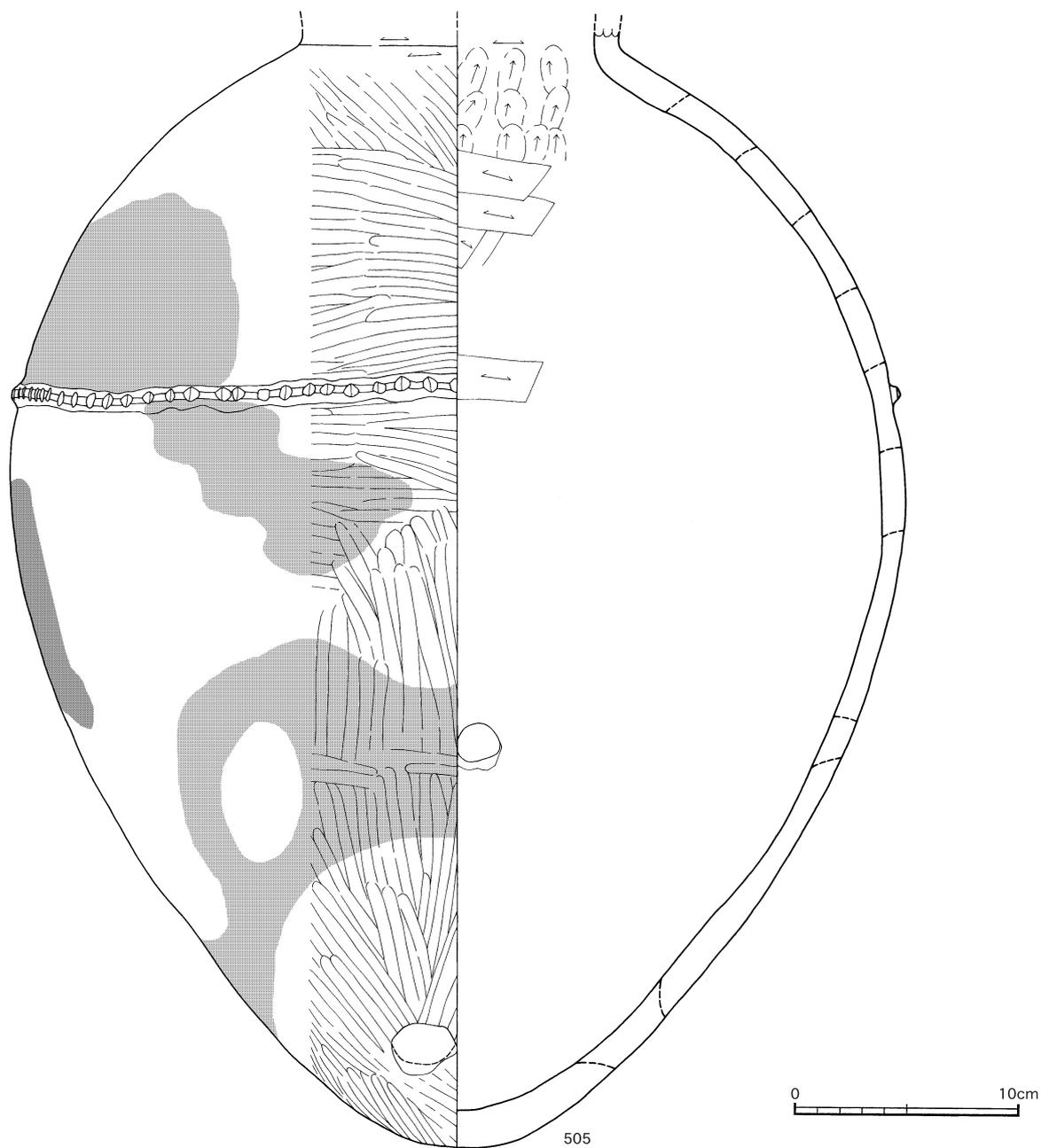
第115図 Fブロック周辺遺物(1)



第116図 Fブロック周辺遺物(2)



第117図 Fブロック周辺遺物(3)

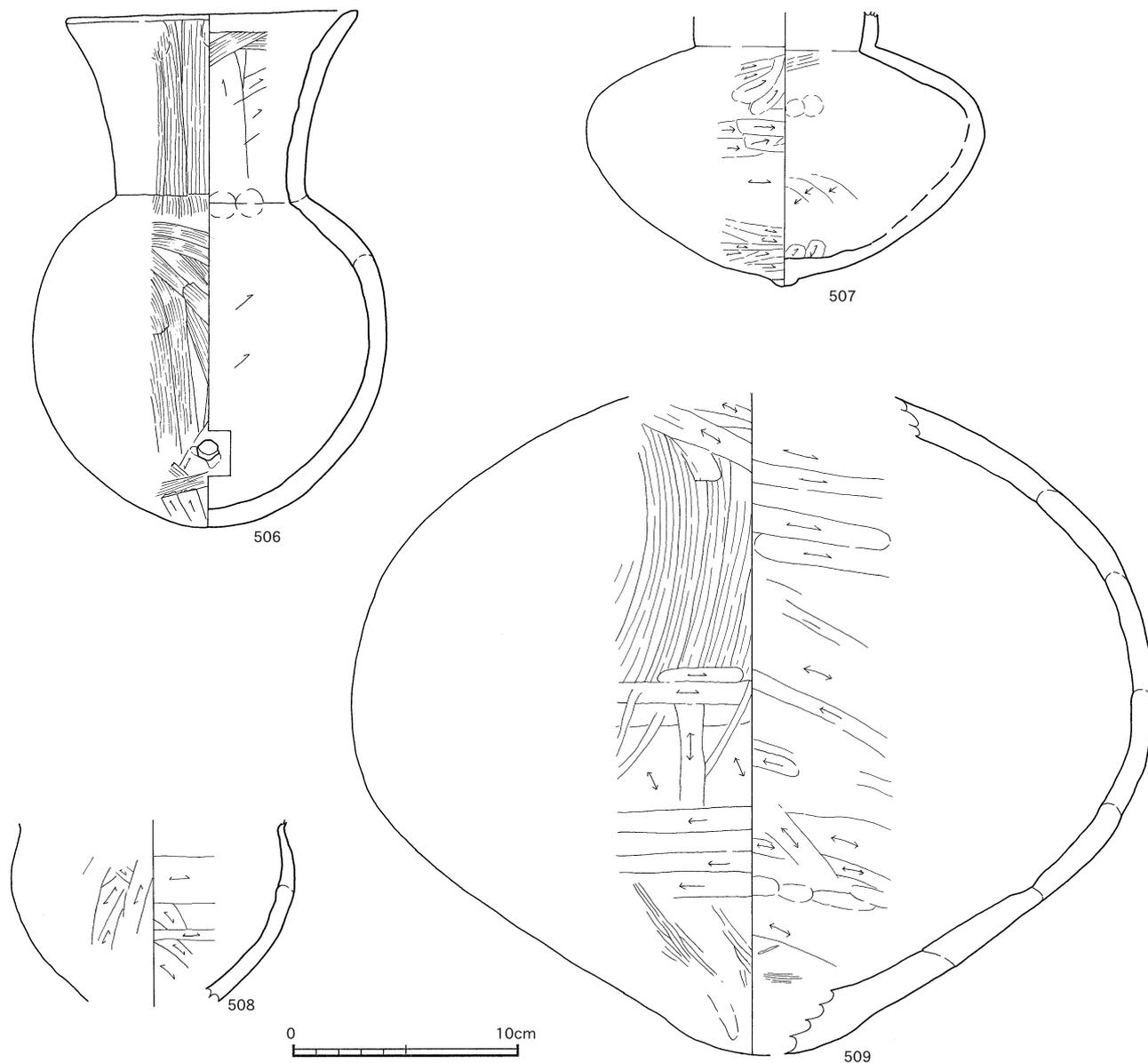


第118図 Fブロック周辺遺物(4)

形状をなし、平底を呈す。胴部中央に一条の三角状刻目突帯を施す。495と504は口縁部がくの字状に外反し、口唇部は平坦面を呈す。胴部はなで肩ではあるが、少し膨らみをもった卵形で、小さな平底を呈す。504は、胴部下が欠損して不明である。495は、一条の台形状刻目突帯を、504は、二条の半円形状の突帯を施す。

496・500・501は口縁部がくの字状に外反し、端部で更に外反する。口唇部は平坦面を呈す。胴

部器形はなで肩のスリムな逆卵形で平底を呈す。496は三角形状突帯、500はM字状突帯を一条施し、穿孔はそれぞれ、胴部下方と突帯下、底部近くに施す。497と516は、516の方は口縁部が欠損していないが、くの字状に外反し、胴部は膨らみをもつ楕円形状をなし、丸みをもった底部を呈す。胴部最大幅の位置に一条の刻目突帯を施す。505と515は口縁部を欠損しているが、胴部はなで肩状で膨らみをもった逆卵形で、丸みのある底部である。

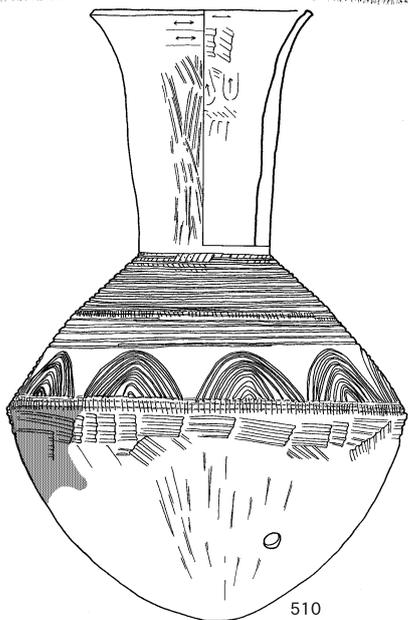
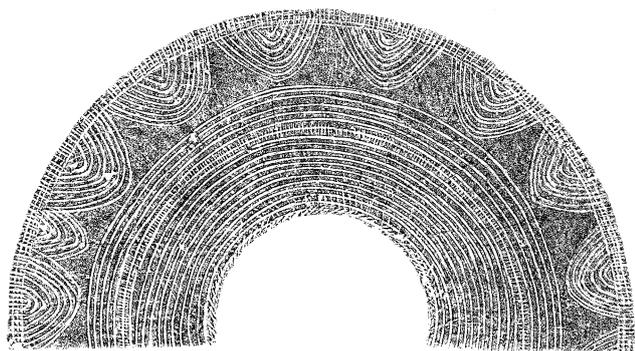


第119図 Fブロック周辺遺物(5)

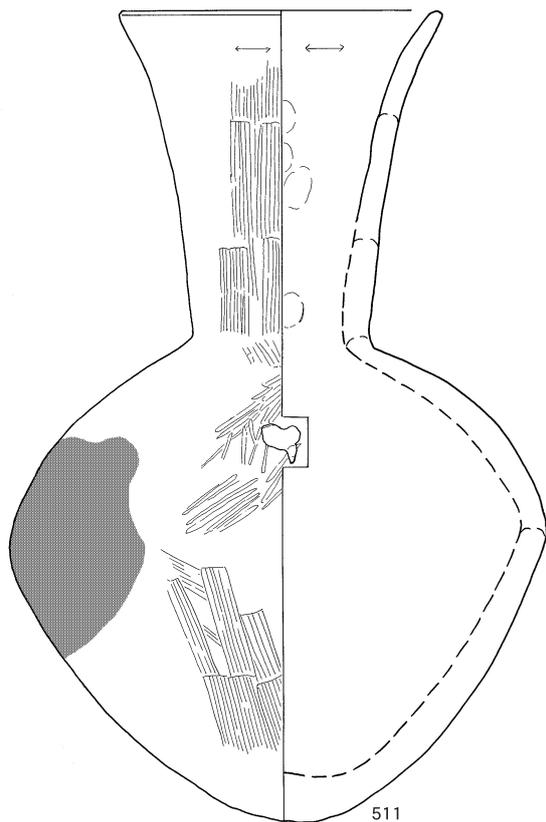
胴部中央よりやや上に一条の刻目を施す。505には、胴部下方と底部付近の2カ所に穿孔が施される。505の肩部から底部にかけては丹塗痕が観察できる。502はおそらく長頸壺と考えられるが、胴部形態は丸味を帯びたソロバン形に平底を呈す。胴部には、一本の粘土紐に凹線を加えて二条の刻目突帯にみせている。506は口縁部が外傾気味に開き、球形の器形をなす。突帯のないなかで、509は肩部が大きく張る。長頸壺のなかには、免田系のものがある。510は免田式土器の長頸壺で、口縁部が円筒形状に伸び、端部で外反する。胴部器形はソロバン形で、屈曲部が緩やかで丸底を呈

す。頸部下には多条の沈線と縦位の刻みを施し、胴部屈曲部上位に重弧文を施す。511は、510と器形がほぼ同じであるが、無紋である。512は、口縁部形状は類似しているが、屈曲が鋭く平底である。屈曲部にM字状突帯を施す。514は、胴部の屈曲部が若干下がる。あとの形状等は512に類似する。

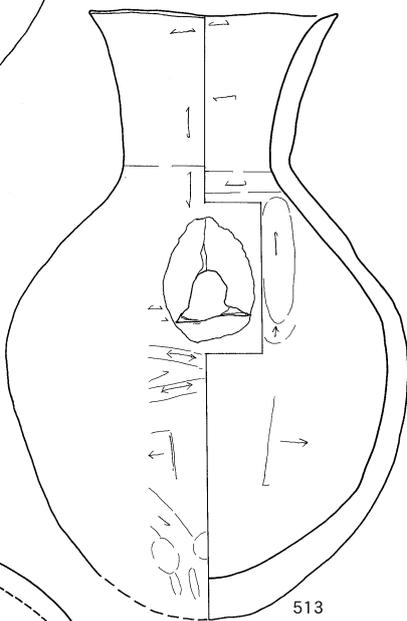
517～529は甕・鉢形土器である。甕形土器(517～525)は、口縁部がくの字状に外反し、脚台はハの字状に開く器形の517・518、口縁部が長く緩やかに外反する520、口縁部がくの字状に外反し、刷毛目状で胴部境に段をもつ521・524、口



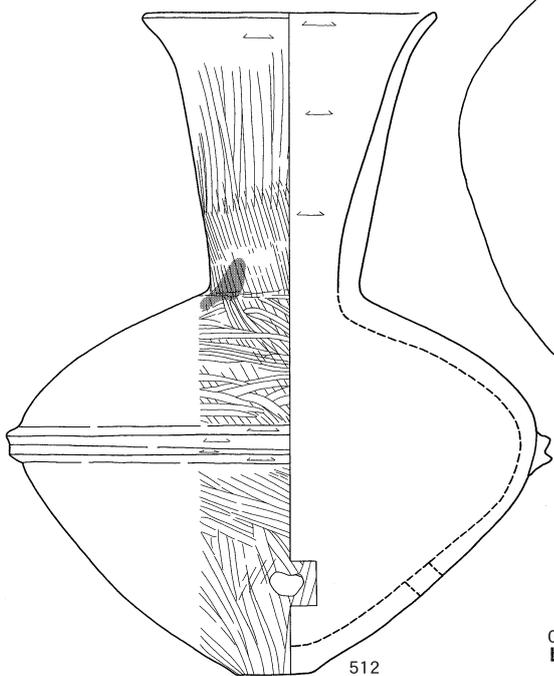
510



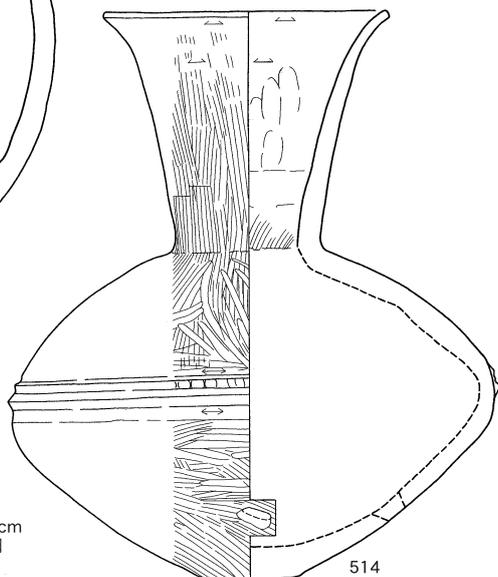
511



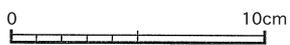
513



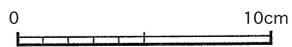
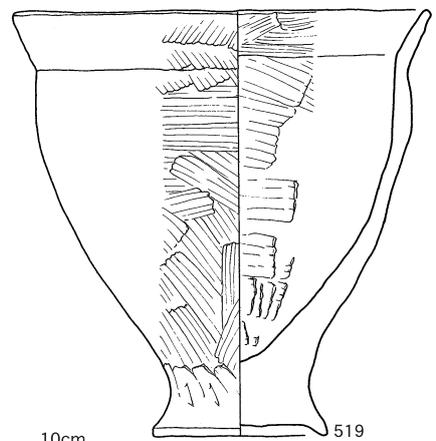
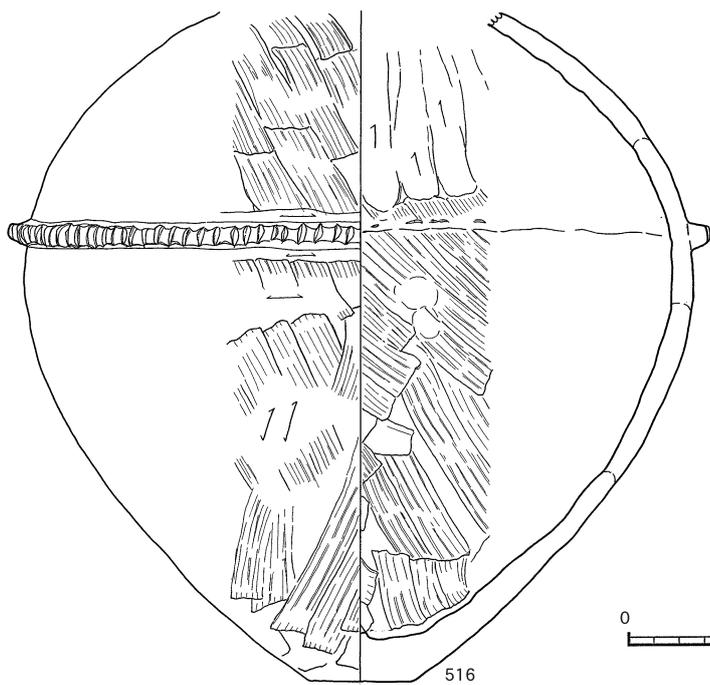
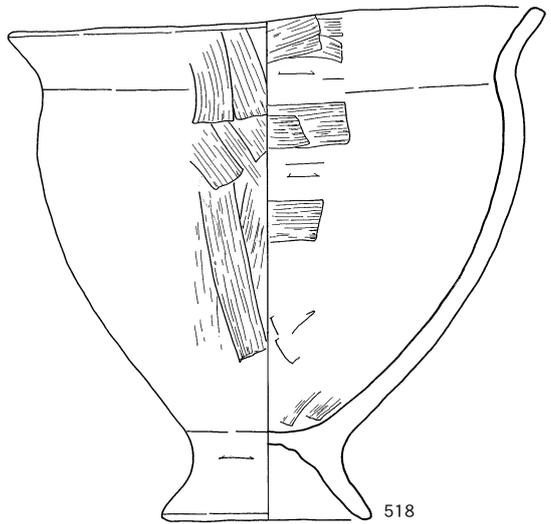
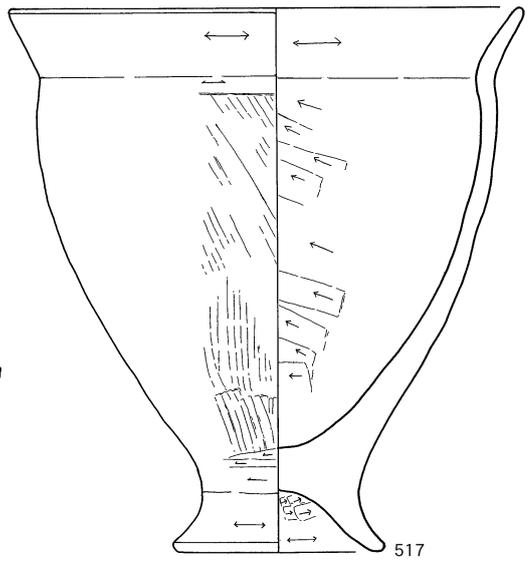
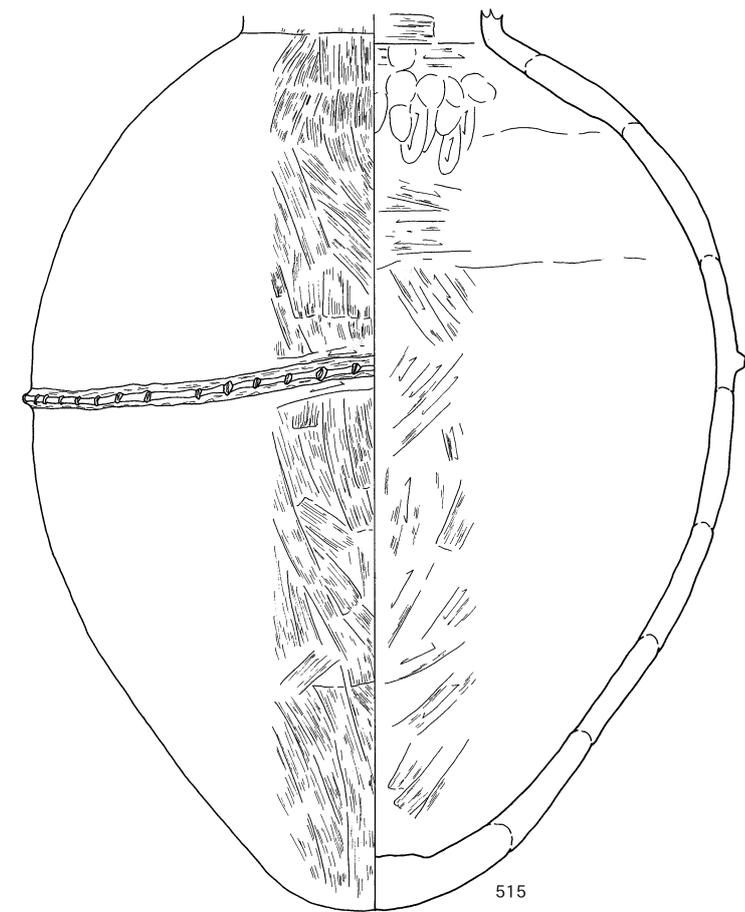
512



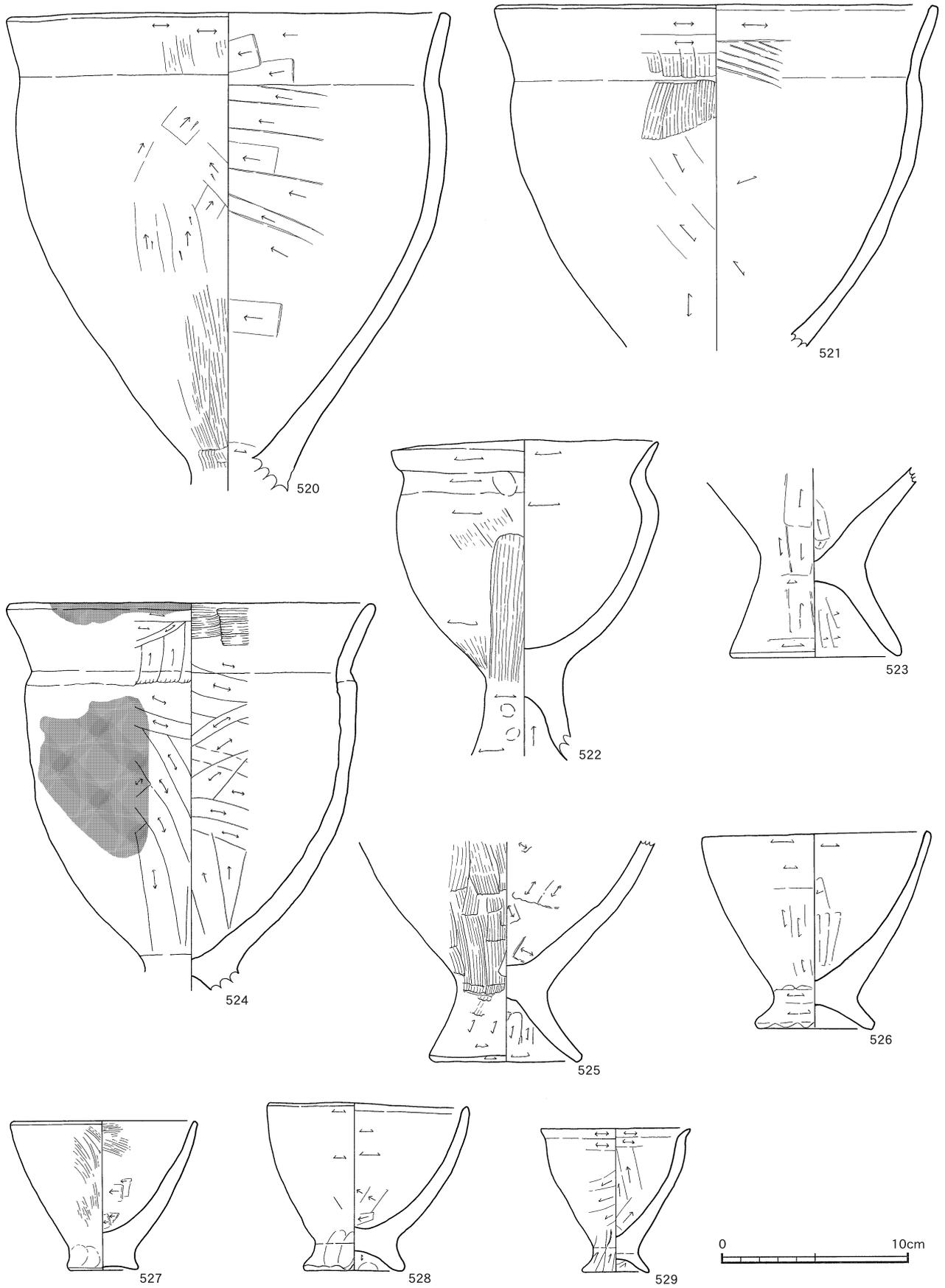
514



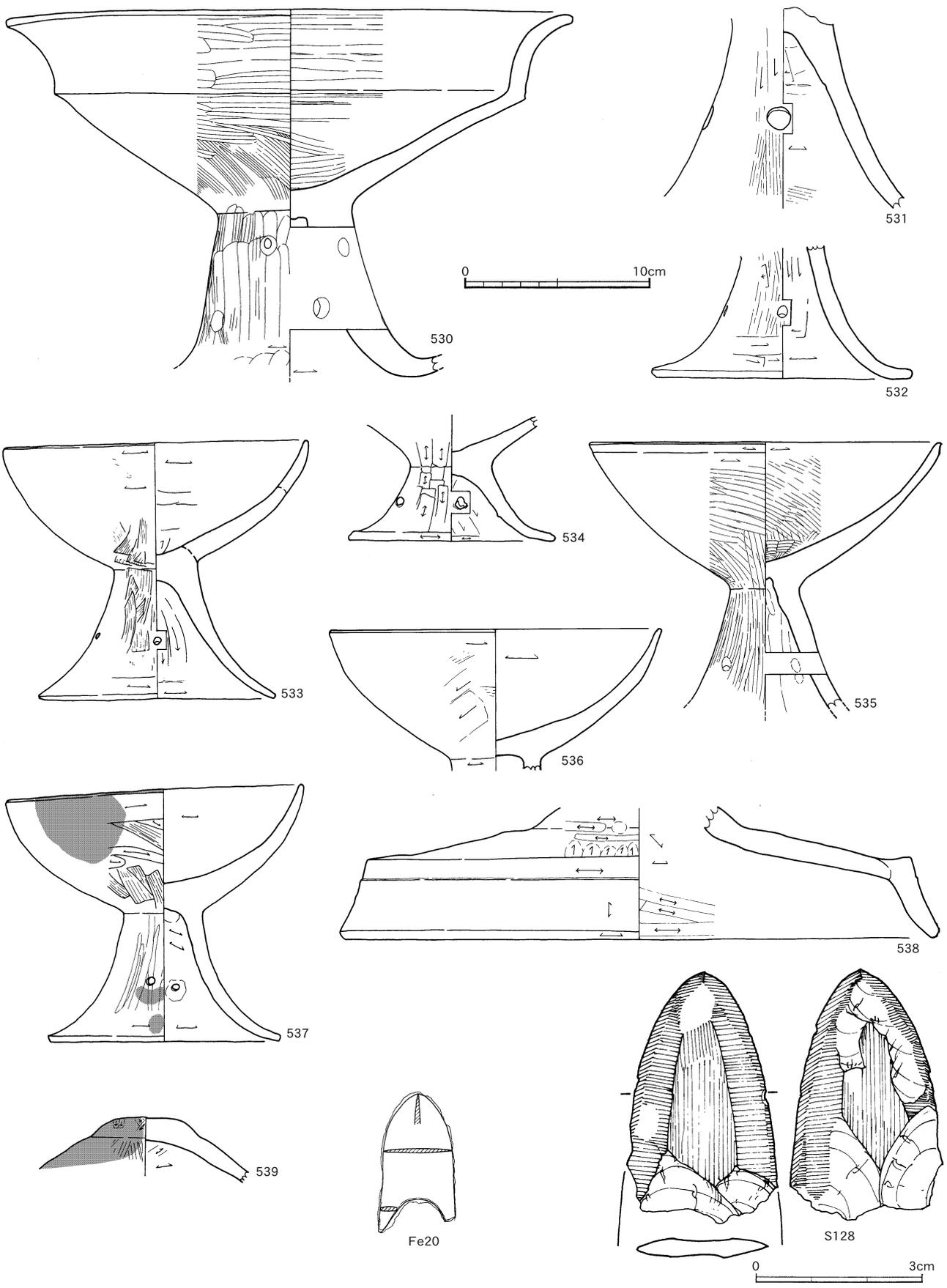
第120図 Fブロック周辺遺物(6)



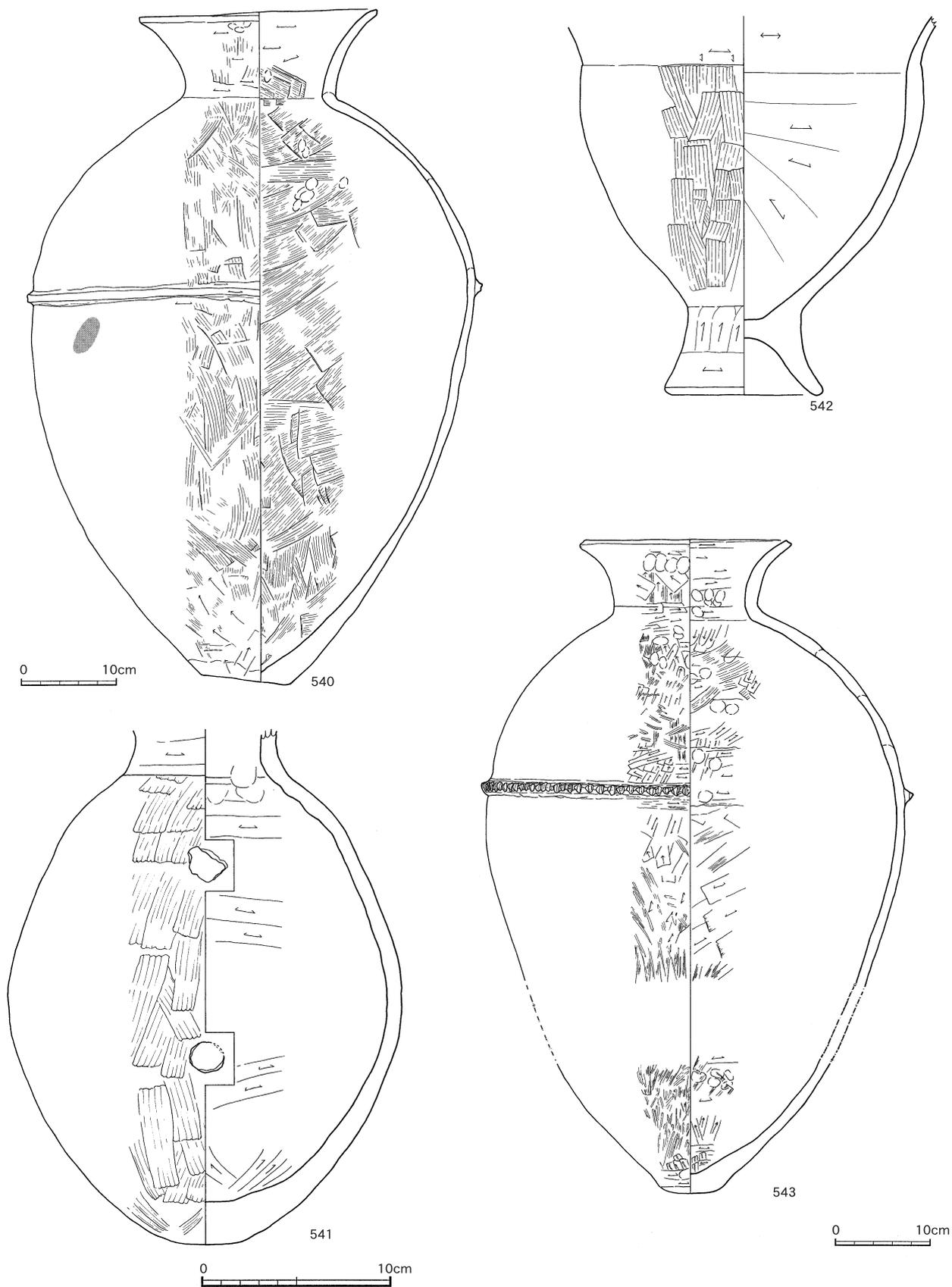
第121図 Fブロック周辺遺物(7)



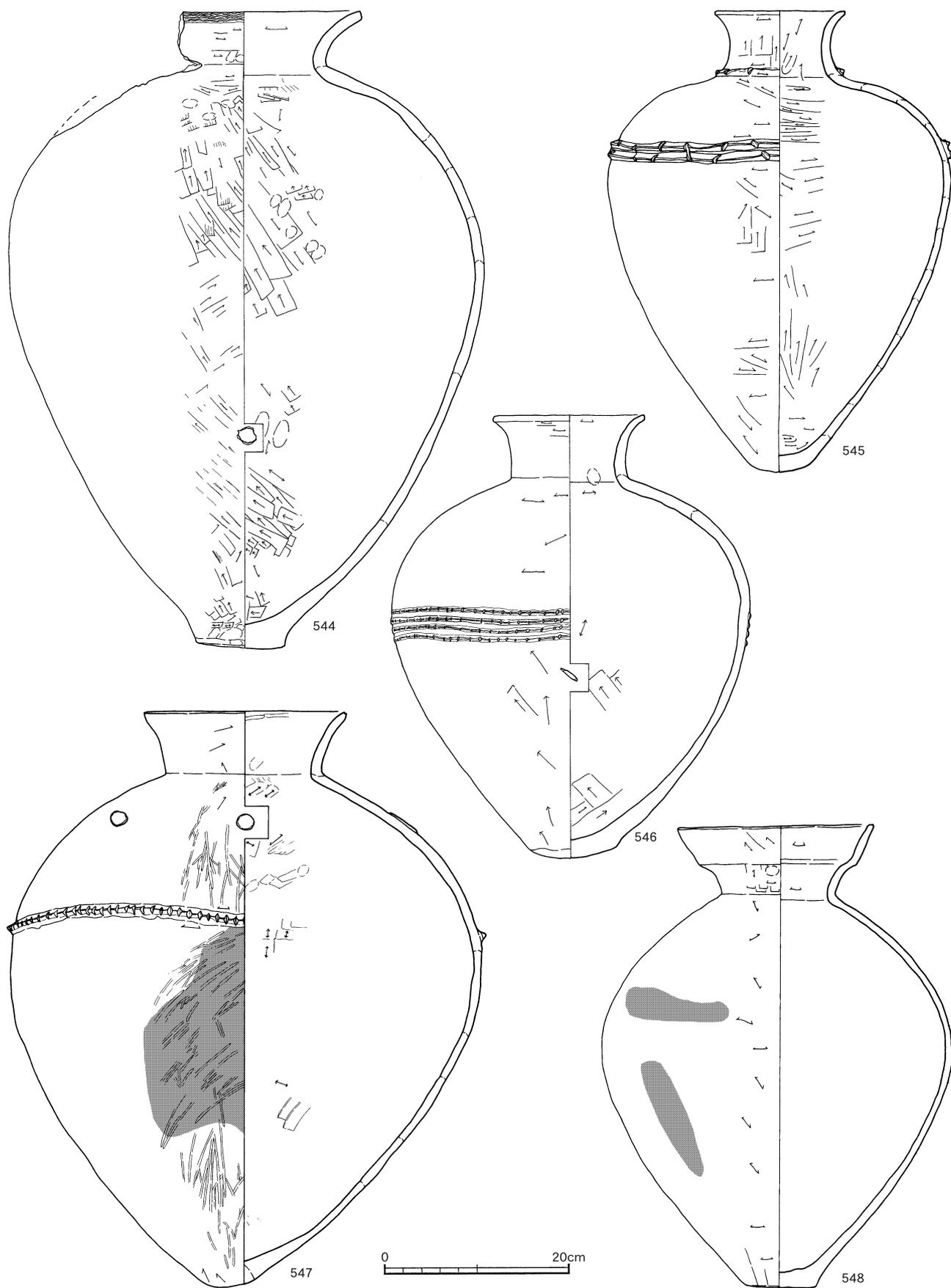
第122図 Fブロック周辺遺物(8)



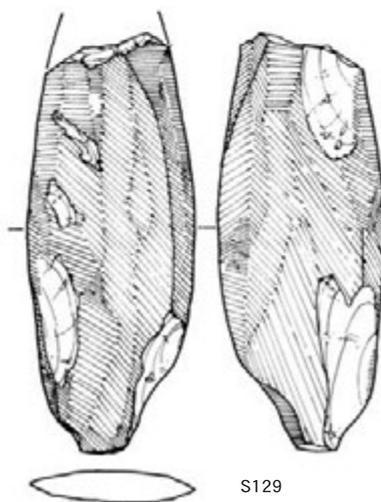
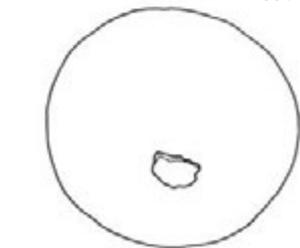
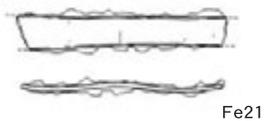
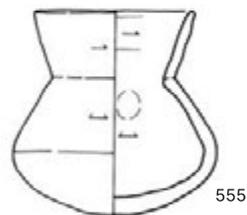
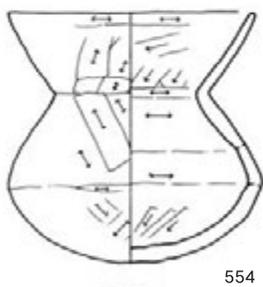
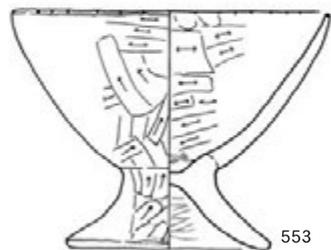
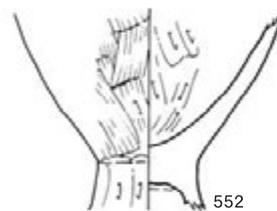
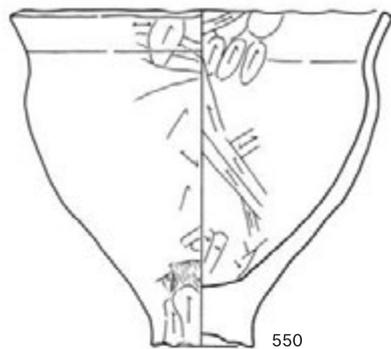
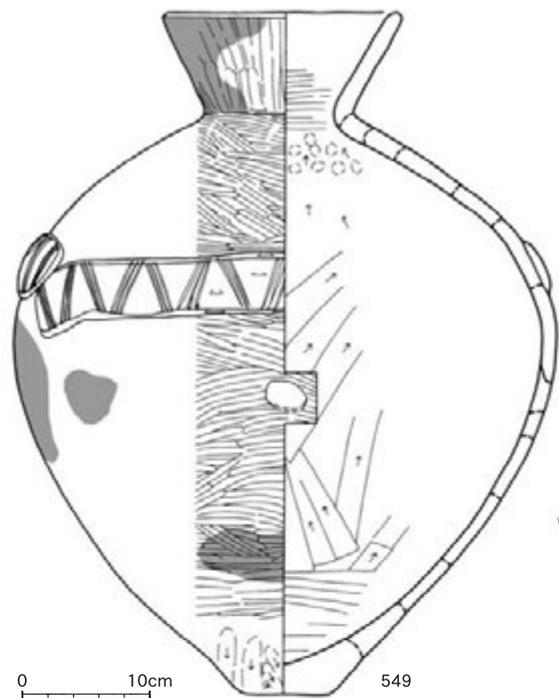
第123図 Fブロック周辺遺物(9)



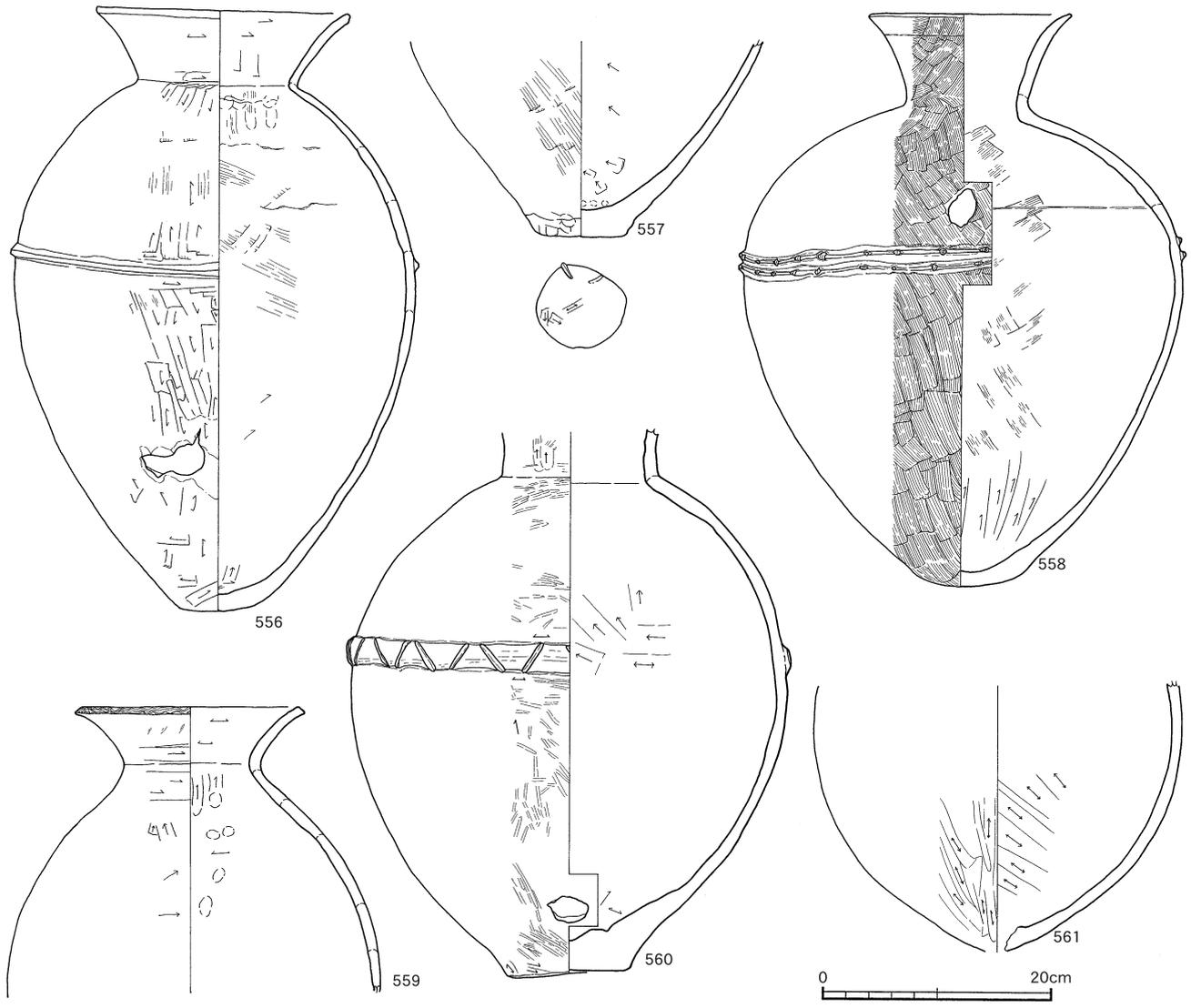
第124図 G・H(1)ブロック周辺遺物



第125図 Hブロック周辺遺物(2)



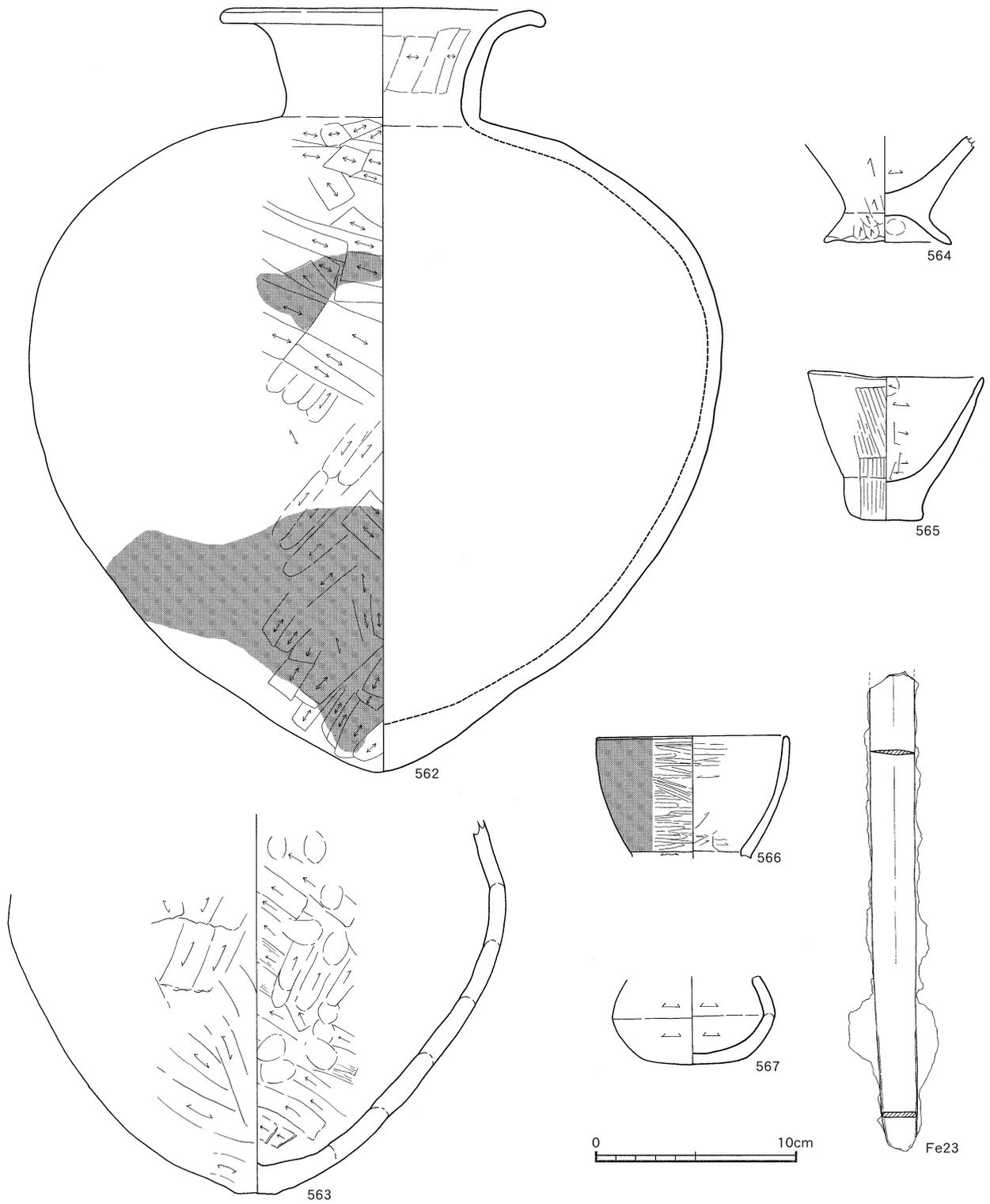
第126図 Hブロック周辺遺物(3)



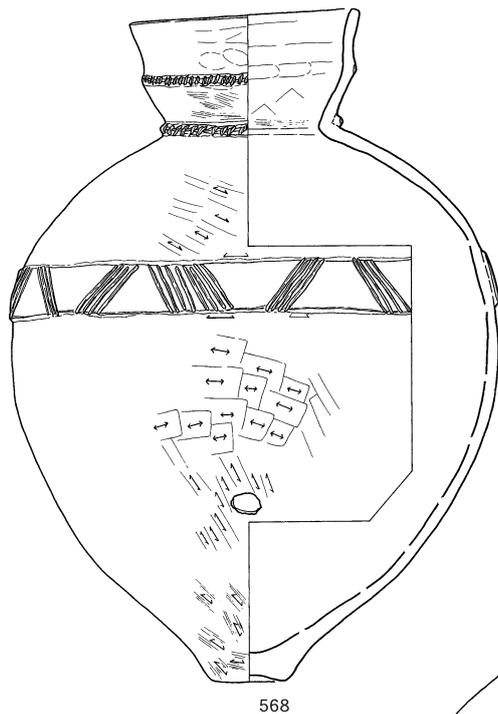
第127図 Iブロック周辺遺物(1)

縁部がくの字状に外反し、胴部が膨らみ、脚台が直線的で高い小形の522がある。
 鉢形土器（526～529）は口縁部が内弯気味に開き、底部の弯曲度合いが緩く、外に開く。脚台は低い。530～537は高坏形土器である。530は口縁部が大きく外反し、底部は直線状になり脚部が上方に反る。斜位列に2つずつ計8個の透が施される。533・536・537は、536以外完形である。これらは、坏部が内弯し、脚部がラッパ状に外反する。穿孔が対に4カ所施されている。535は、坏部が直線的に開き、端部で若干内弯する。脚部は端部が欠損しているが、外へまっすぐ開き、対に4カ所の透を施す。ただし、533・535・536・537の土

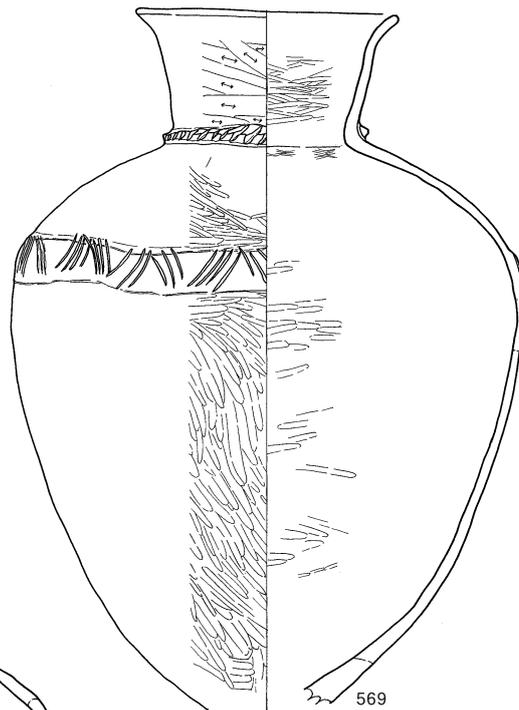
器器形は、他地域の器形の可能性もあり、器台としての可能性もありうると考える。
 538は脚部であるが、端部を直に近く貼り付けており非常に特徴的な器形である。瀬戸内系土師器の可能性も考えられる。Fe20は、無茎の鉄鏃であるが、5c前半該当と思われる。
 以上の遺物等から、複数の時期の遺物があるように思う。530の高坏形土器や免田系の長頸壺、495・497・505といった壺形土器はI期該当遺物と思われる。496・500の壺形土器や521・524の甕形土器はII期該当遺物と考える。高坏形土器は、III期該当遺物の可能性も考えられる。鉄鏃は、IV期該当遺物と多くの時期の遺物が検出されている。



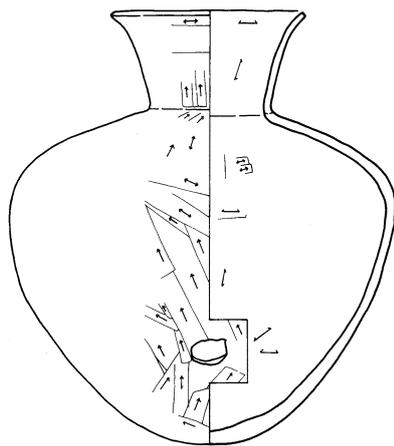
第128図 Iブロック周辺遺物(2)



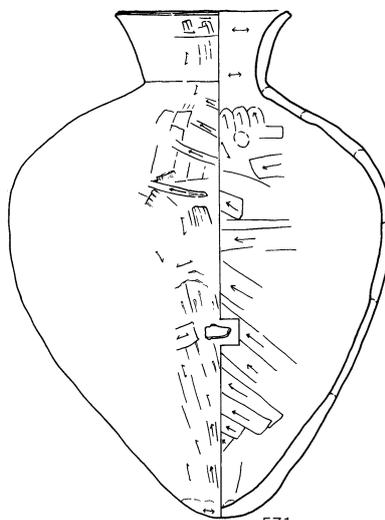
568



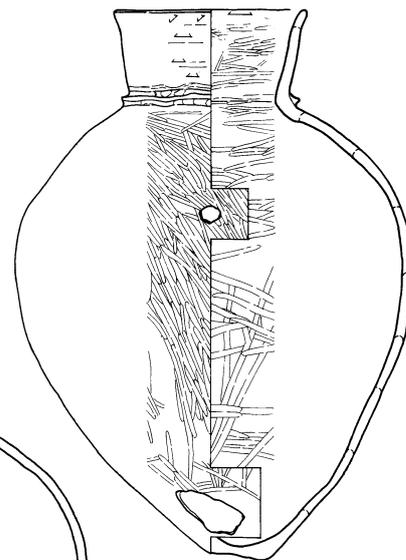
569



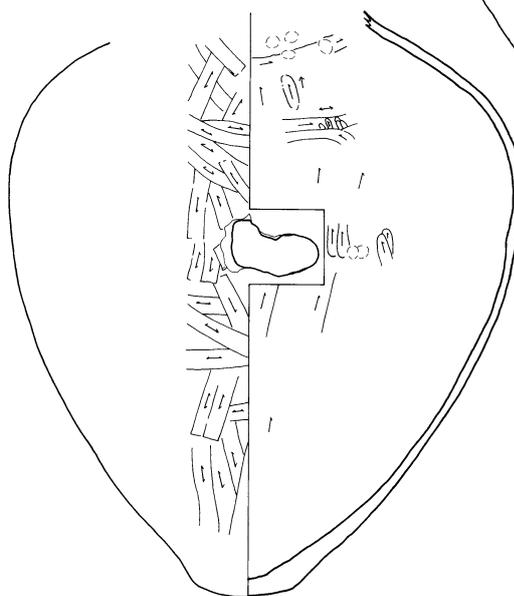
570



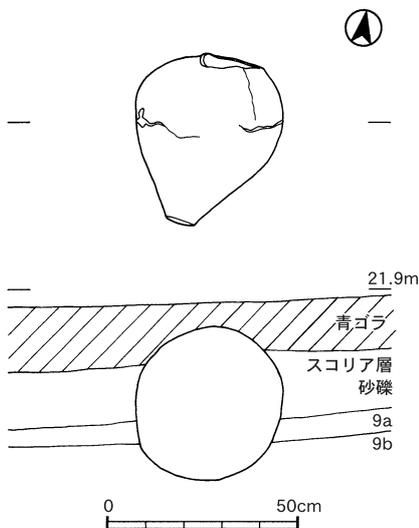
571



572



573



21.9m

青ゴラ
スコリア層
砂礫

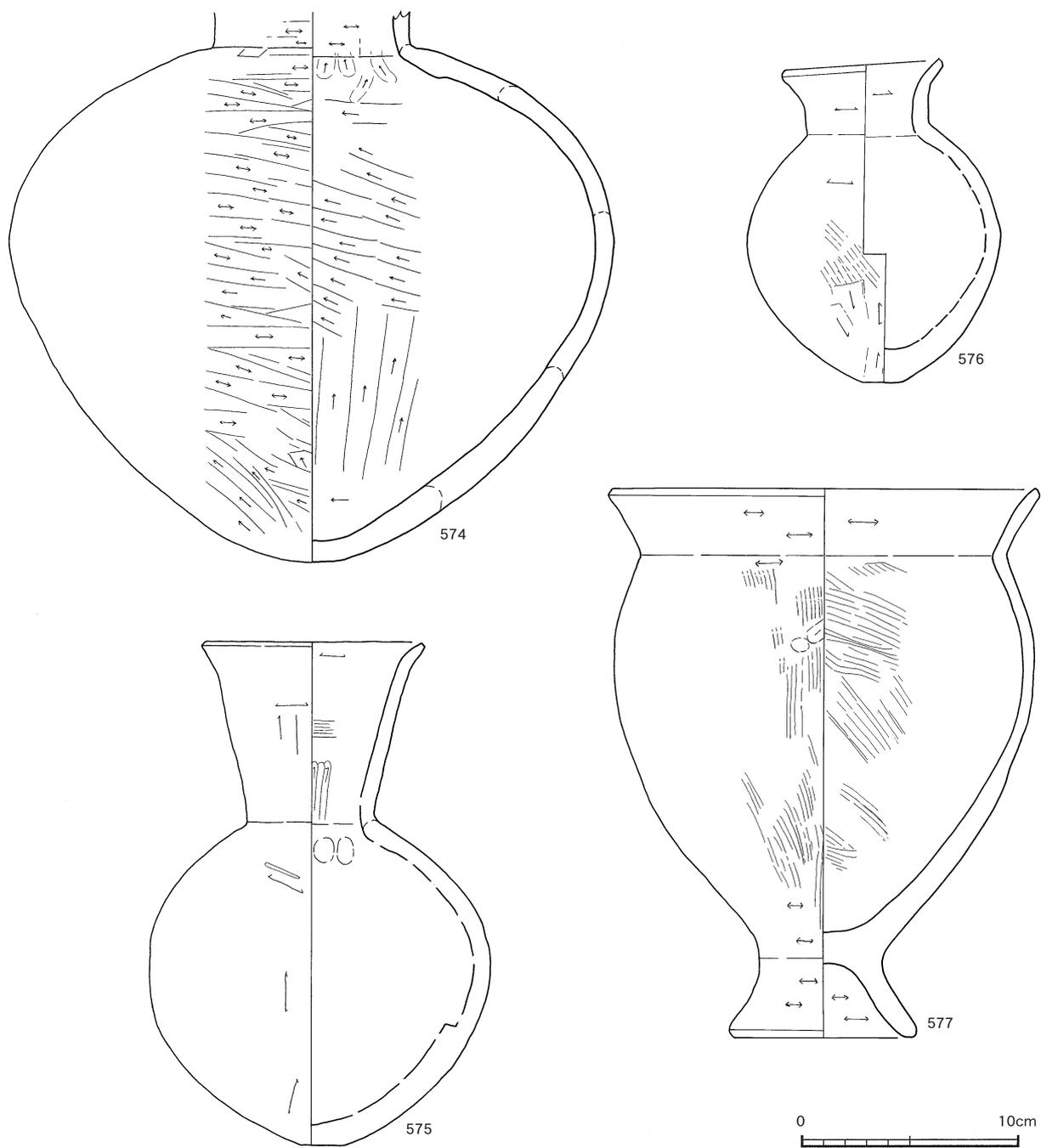
9a

9b

0 50cm

0 20cm

第129図 Jブロック周辺遺物(1)



第130図 Jブロック周辺遺物(2)

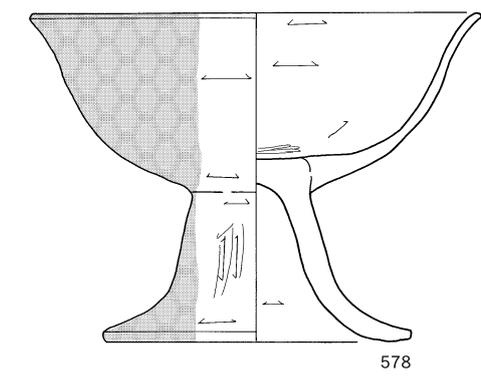
7) A・B-9区のGブロック出土遺物(第124図, 540~542)

540の壺形土器は、壊れた状態で検出されたが、ほぼ完形となった。口縁部はくの字状に外反し、なで肩の膨らみをもった逆卵形をなし、平底を呈す。胴部よりやや上に一条のM字突帯を施す。541の壺形土器は、穿孔を2カ所に施す。

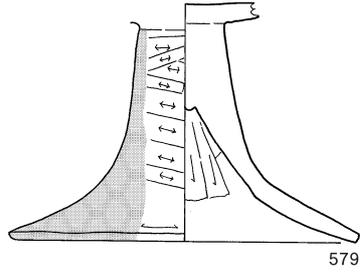
上記の遺物や542の口縁端部が欠損の甕形土器の口縁部や脚台の形状からI期該当遺物と考えられる。

8) D-9区のHブロック出土遺物(第124図~第126図, 543~555, S129, Fe21・Fe22)

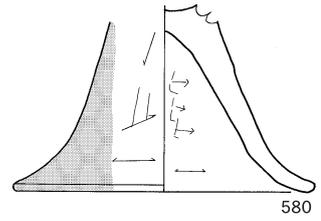
溝状遺構周辺である。この場所は旧宅地の道が



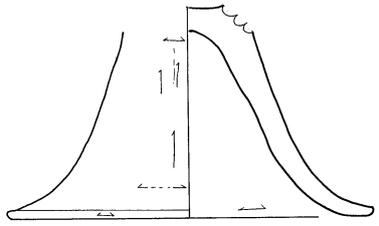
578



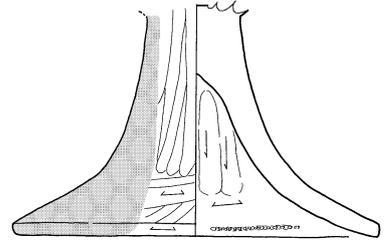
579



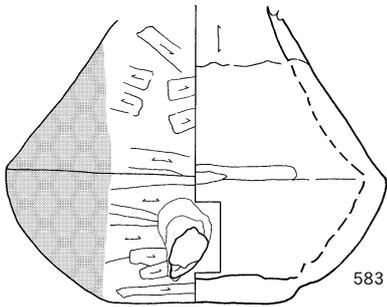
580



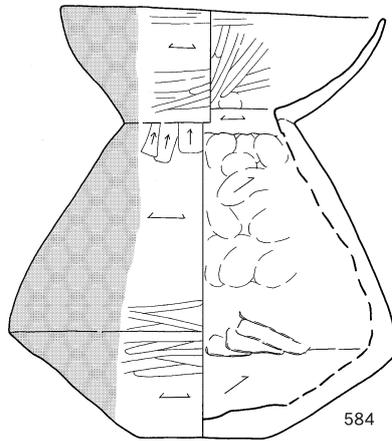
581



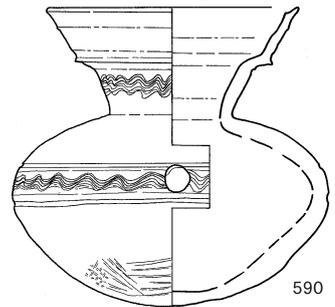
582



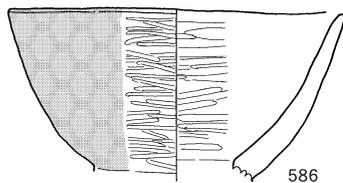
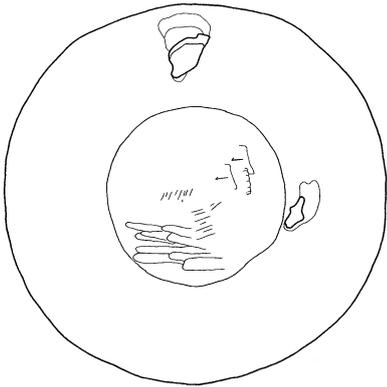
583



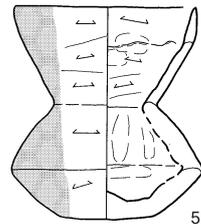
584



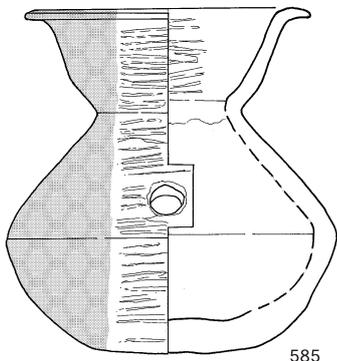
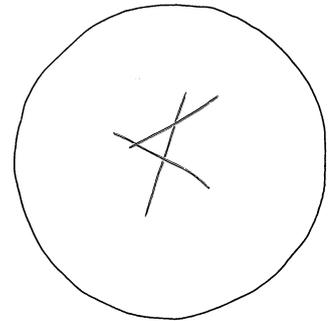
590



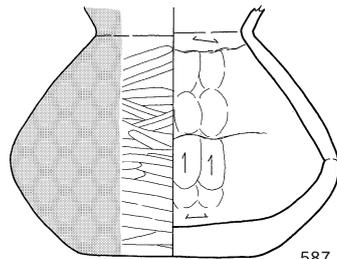
586



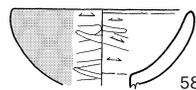
588



585



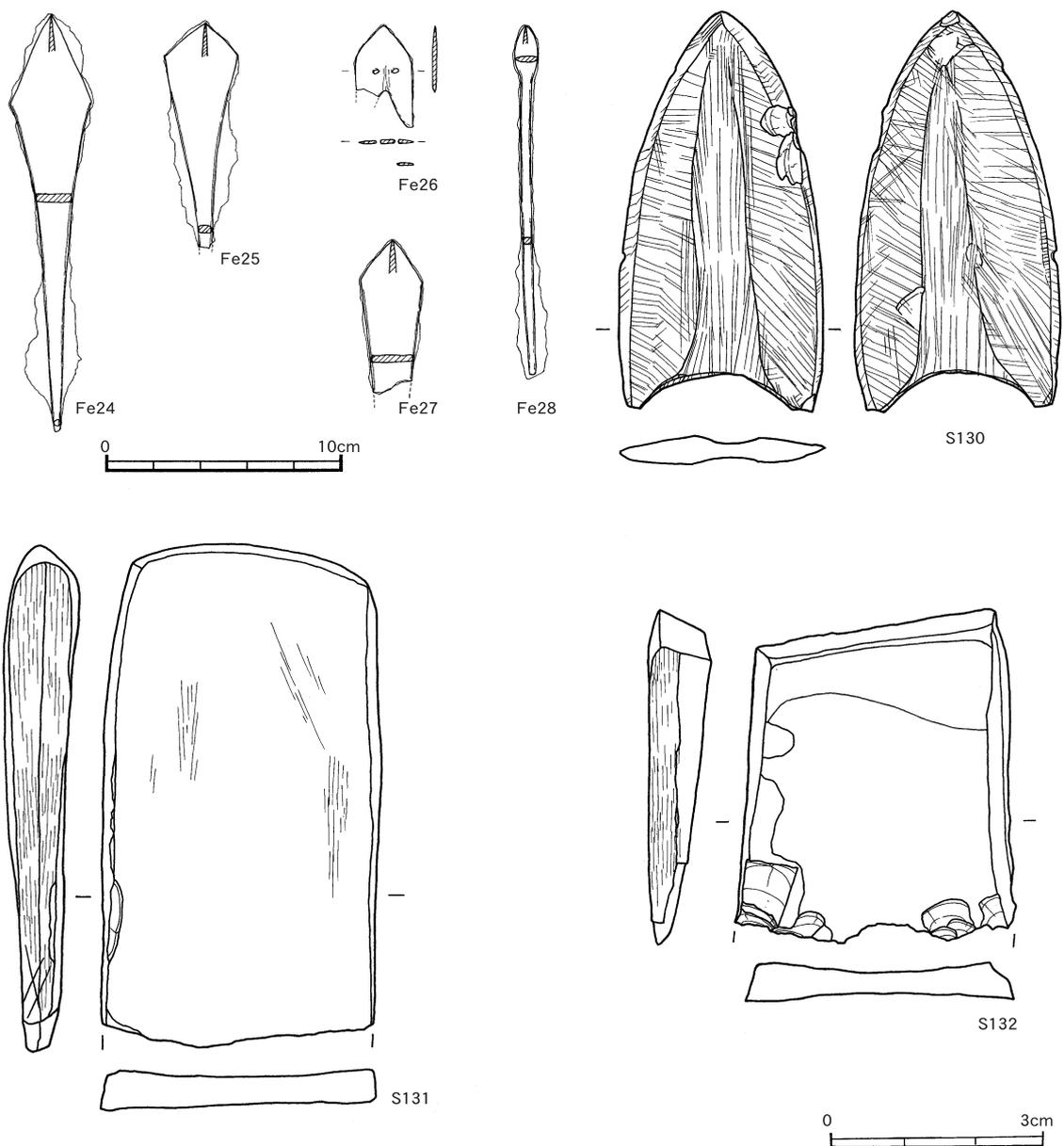
587



589



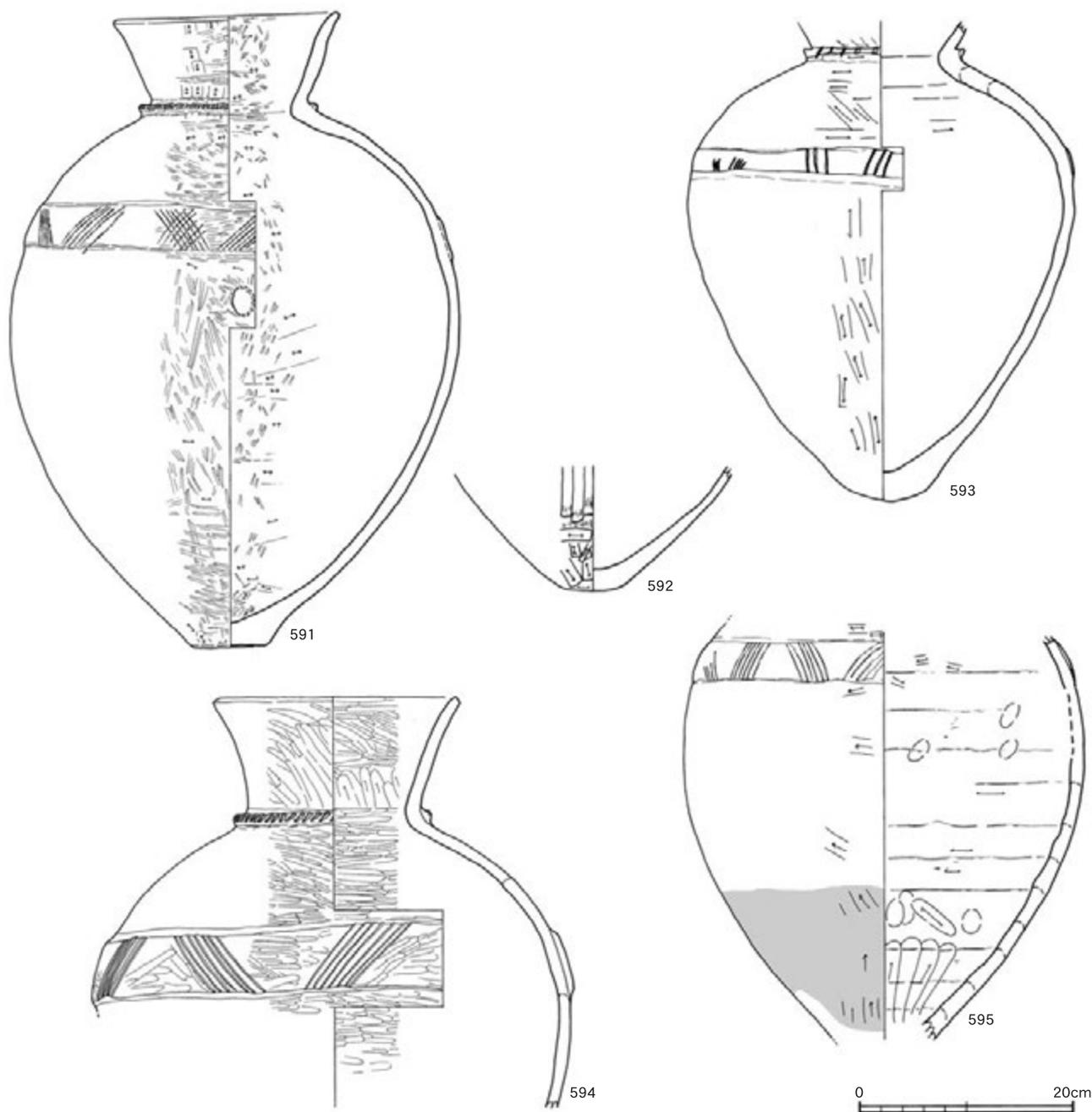
第131図 Jブロック周辺遺物(3)



第132図 Jブロック周辺遺物(4)

すぐ上面にあり、青ゴラの途中まで攪乱を受けていた所であるが、辛うじて遺物が壊されずに残存していた。543の壺形土器は、口縁部がくの字状に外反し、口唇部は平坦面を呈す。なで肩でスリムな逆卵形の胴部器形に、厚みのある平底を呈す。肩部よりやや下位に一条の刻目突帯を施す。544の壺形土器は、口縁部が短く、くの字状に外反し、肩の張った逆三角形状で、平底を呈す。口縁端部には、櫛描状の波状文が施され、胴部下位に穿孔を施す。545は、口縁部が内傾して立ち上がり、

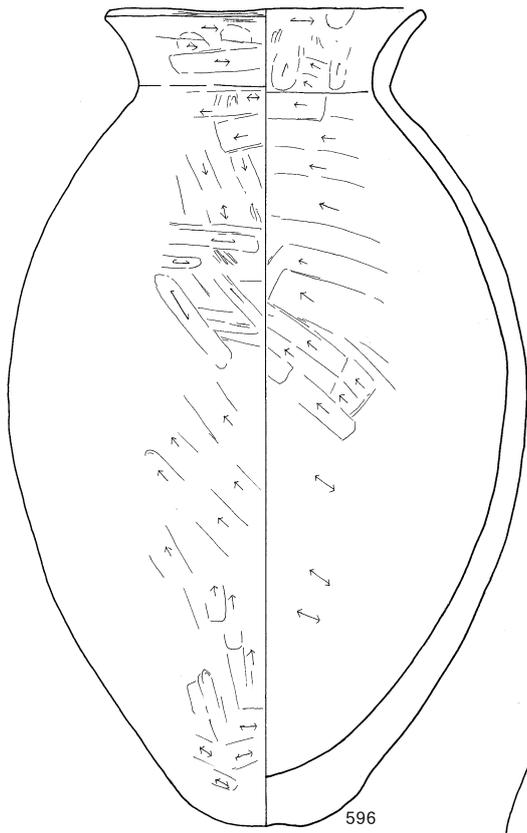
口縁端部で外反する。胴部は肩が張った逆三角形状で、平底を呈す。頸部には一条の刻目突帯を、肩部には一本の粘土紐から二条の突帯に格子文を施す。546は、口縁部が円筒形状に立ち上がり、口縁端部で外反する。肩部が張り、膨らみをもつ逆卵形で平底を呈す。胴部中央に四条の刻目突帯を施し、突帯下には鋭利な道具で開けたと思われる細長い穿孔が施される。547の壺形土器は、口縁部が短く、くの字状に外反し、口唇端部は丸味を帯びる。胴部器形はなで肩で膨らみの大きい逆



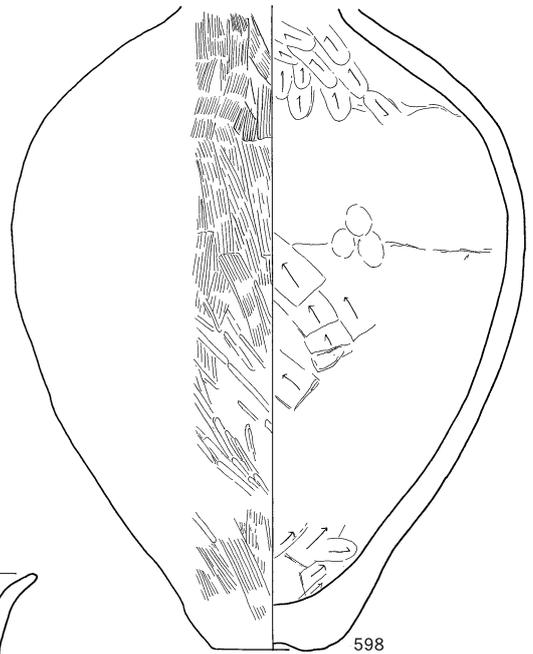
第133図 Kブロック周辺遺物(1)

卵形をなし、尖底気味の底部を呈す。肩部下位に一条の刻目突帯を、また、肩部に対に4カ所の円形浮文を施す。548は、二重口縁を呈し、なで肩で膨らみのある胴部に平底を呈す。この壺形土器は庄内式土器に近いとも思われるが、平底を呈することや指宿特有の粘土色をしていることから、在地で作られた土器の可能性が高いと考える。549の壺形土器は口縁部が直線的に開き、なで肩

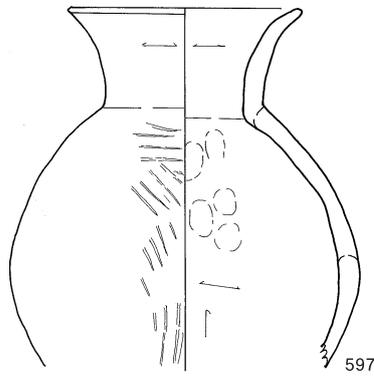
で膨らみのある逆卵形をなし、平底を呈す。肩部には格子の施された幅広の貼付突帯文が、胴部中央に穿孔を施す。指宿特有の赤色をし、全体的にミガキを施す。554や555は埴形土器、553は、高坏形土器か、器台かである。554の底部には穿孔が施される。Fe21は、鹿児島大学の橋本准教授の見解によると「带状鉄器と思われ、古墳時代中期中葉以降の遺物の可能性がある。」という。



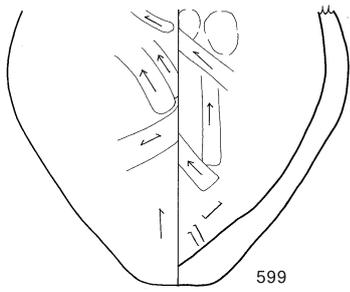
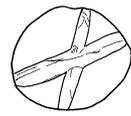
596



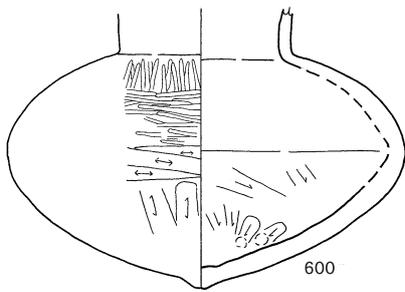
598



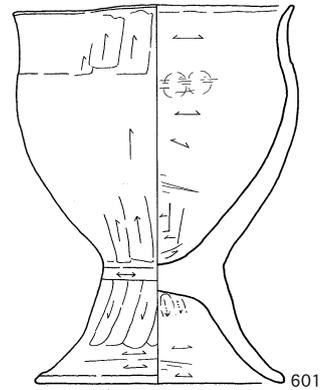
597



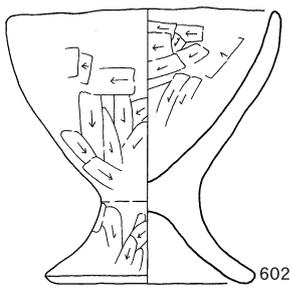
599



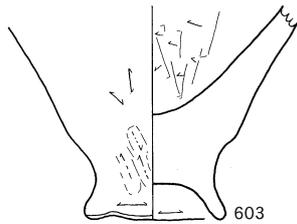
600



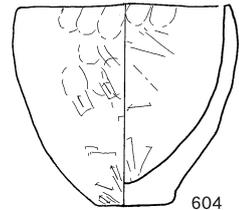
601



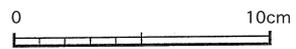
602



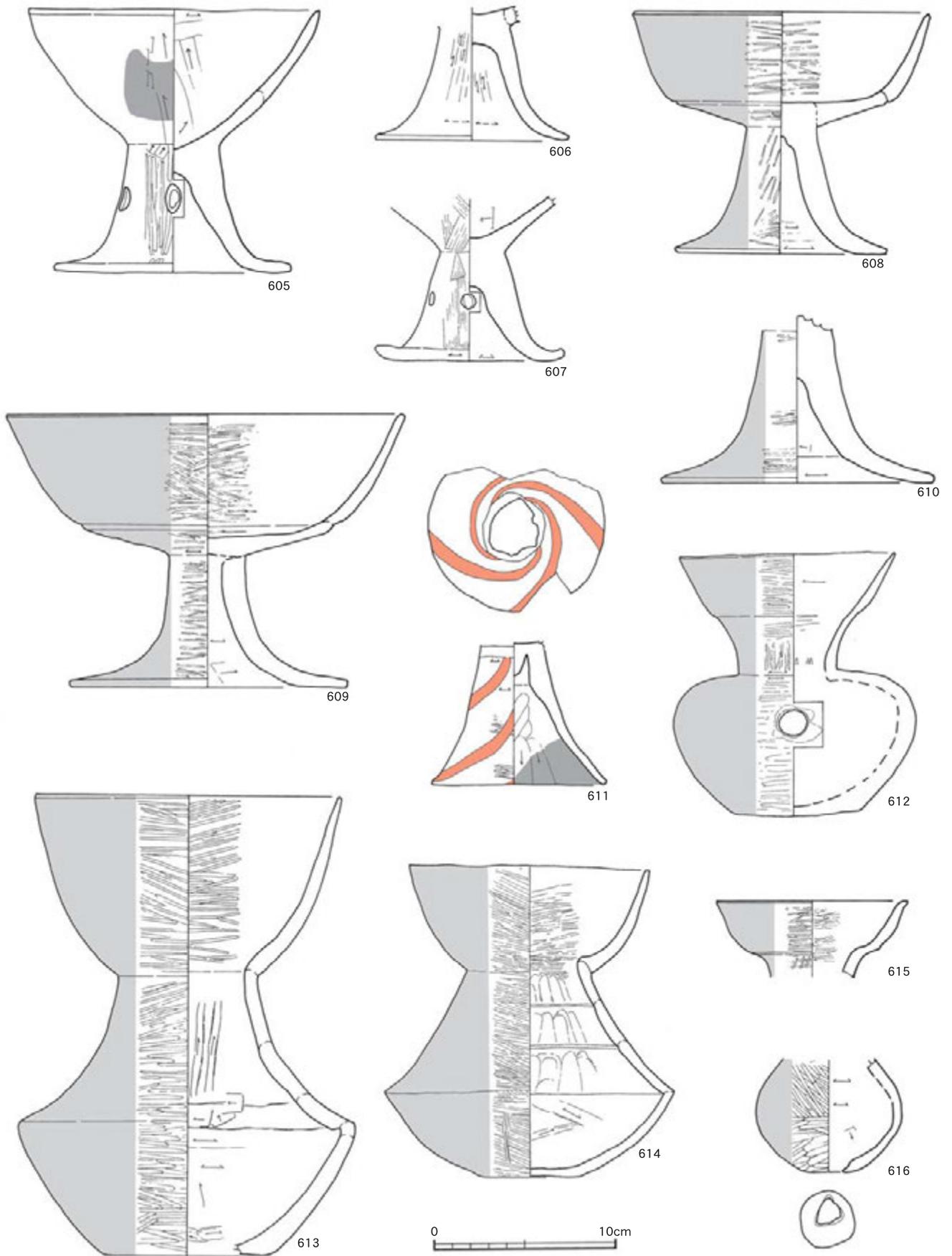
603



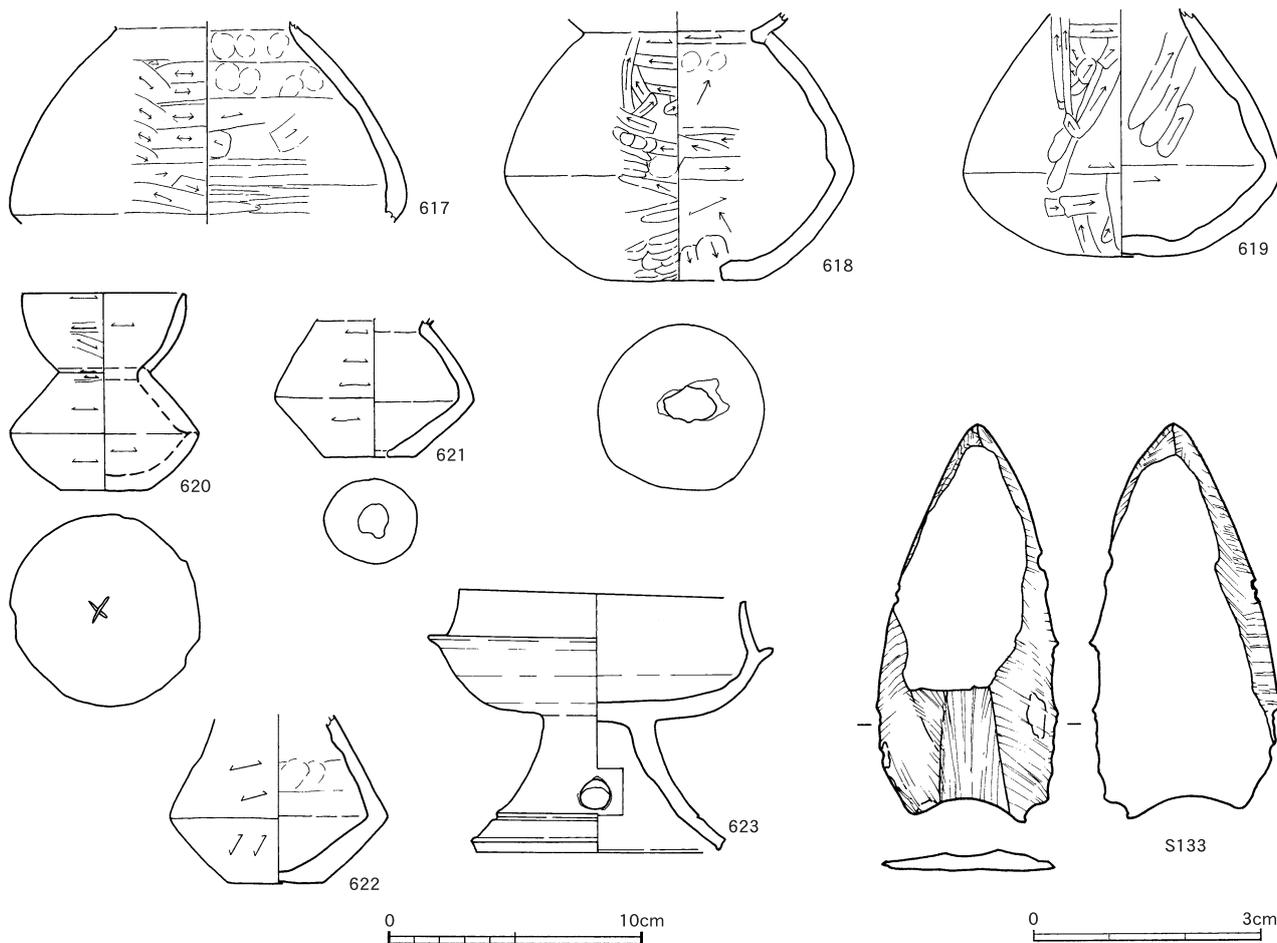
604



第134図 Kブロック周辺遺物(2)



第135図 Kブロック周辺遺物(3)



第136図 Kブロック周辺遺物(4)

これらの遺物は、544・547の壺形土器、550・551の甕・鉢形土器、S129はI期該当遺物、543・548の壺形土器はII期該当遺物、545・546の壺形土器はIII期、549の壺形土器や554・555の埴形土器やFe21はIV期該当遺物と思われ、このブロックも多時期の遺物が混在していると思われる。

9) C・D-9・10区のIブロック出土遺物 (第127図～第128図, 556～567, Fe23)

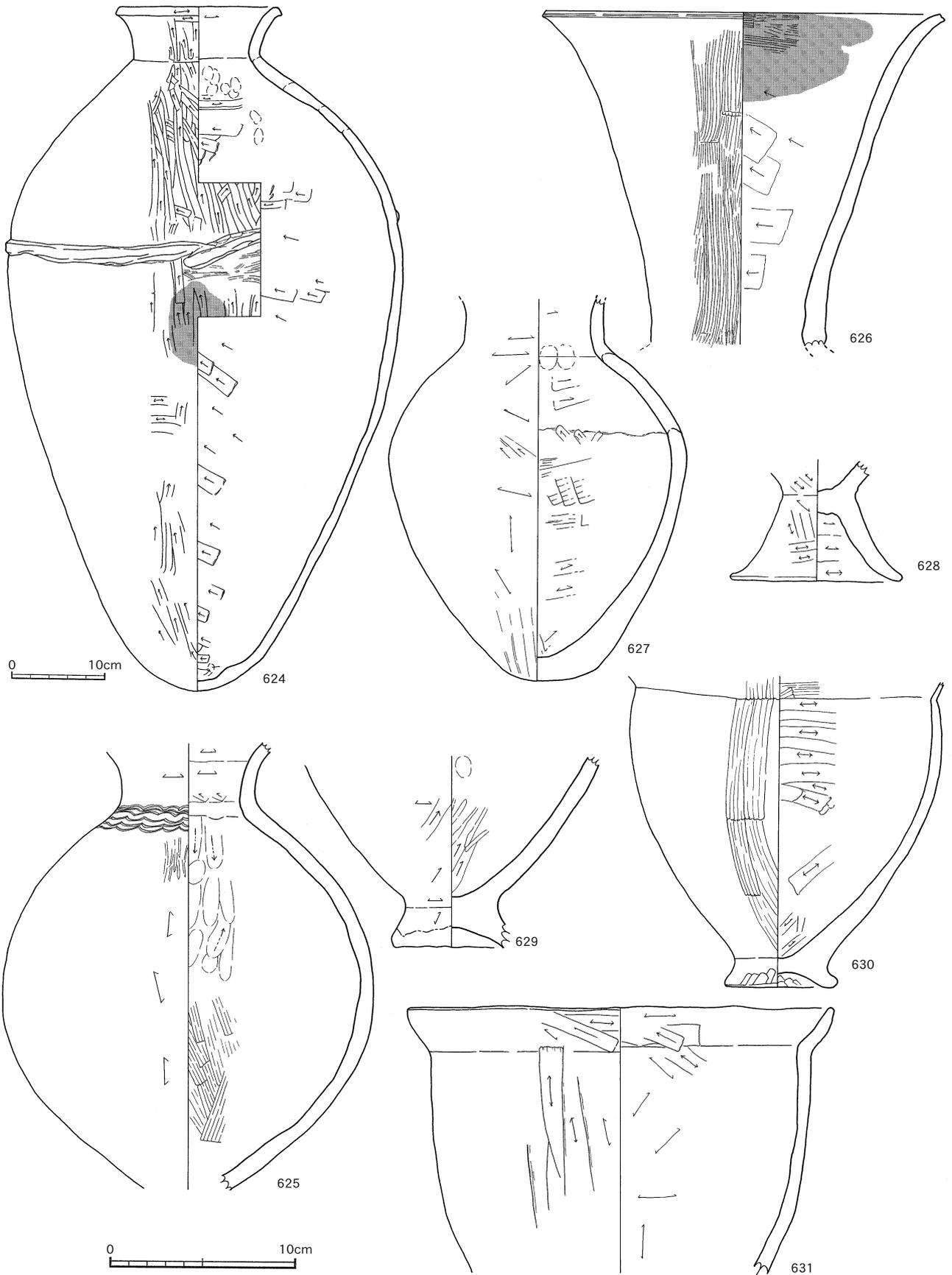
9号円形周溝墓や14・15号壺棺墓、土坑墓と遺構が複雑に切り合っているところで、土器破片の集中が多く検出された所である。このことから、どの遺構と遺物と関係があるか非常に分かりづらい所でもある。

556は、口縁部がくの字状に強く外反し、楕円形状の胴部、小さな平底を呈し、一条の三角突帯を施す。559は、口縁部がくの字状に外反し、口唇部に櫛描波状文を施す。562は口縁部が円筒状

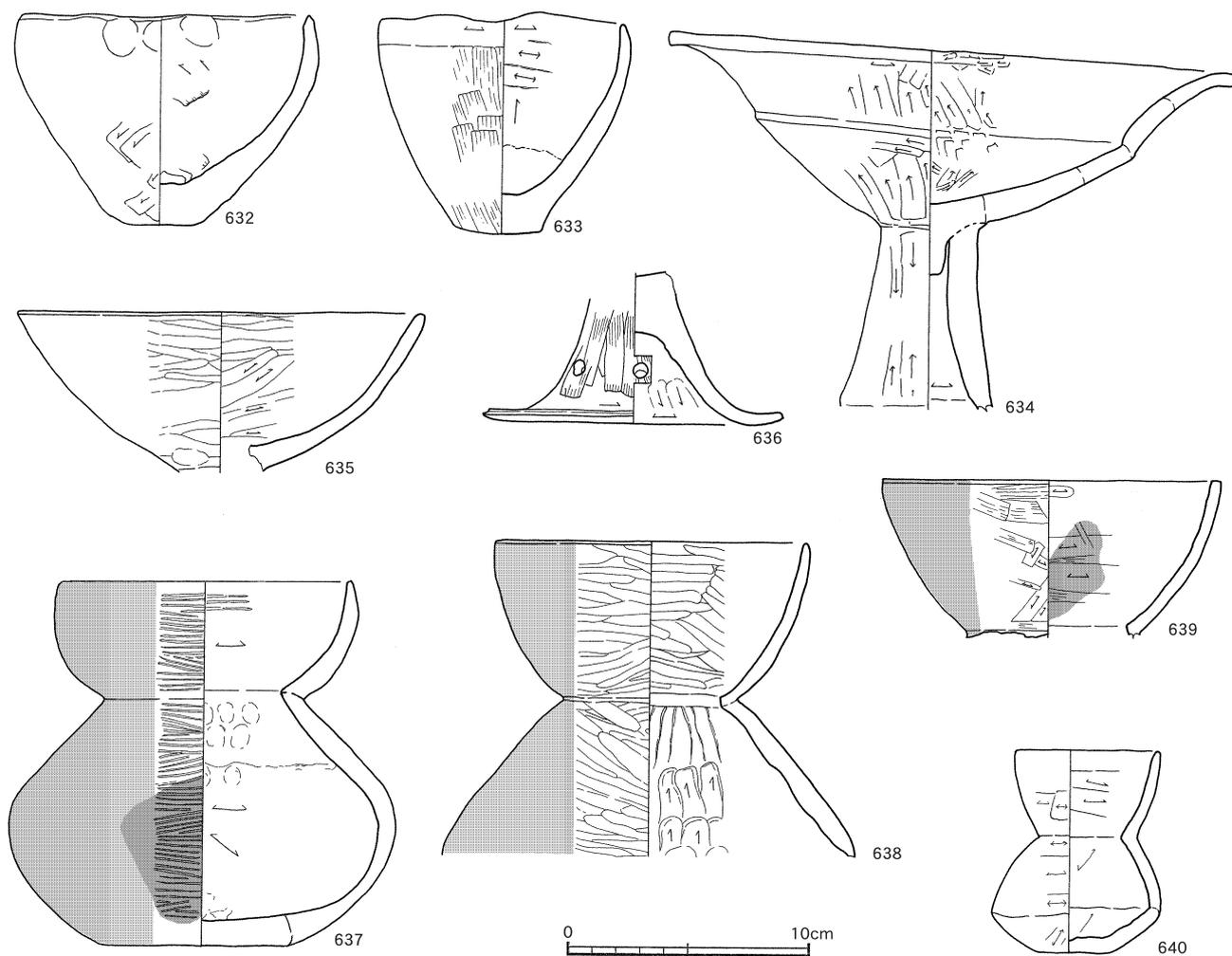
に立ち上がり、端部で急に外反する。胴部は肩が張り大きく膨らみ底部は尖底を呈す。これらの壺形土器は、I期該当遺物と考えられる。558は、口縁部が外反しながら立ち上がり、肩が張り逆三角形にすぼまる。底部は丸みを帯びている。胴部には二条の刻目突帯を施す。これは、II～III期該当遺物と思われる。560は、口縁部が欠損しているが、胴部はほぼ球形で平底を呈し、肩部下に格子文のある幅広突帯を貼り付けている。これは、III～IV期該当遺物と考えられる。566は、丹塗研磨土器の甕か埴形土器の口縁部である。Fe23は鉄剣である。これらのことから、幅広い時期の遺物がある。

10) B・C-10区, Jブロック出土遺物 (第129図～第132図, 568～590, Fe24～Fe28, S130～S132)

青ゴラを直接かぶった状態で検出された573や568の壺形土器の床着面から、丹塗研磨土器や須



第137図 Lブロック周辺遺物(1)

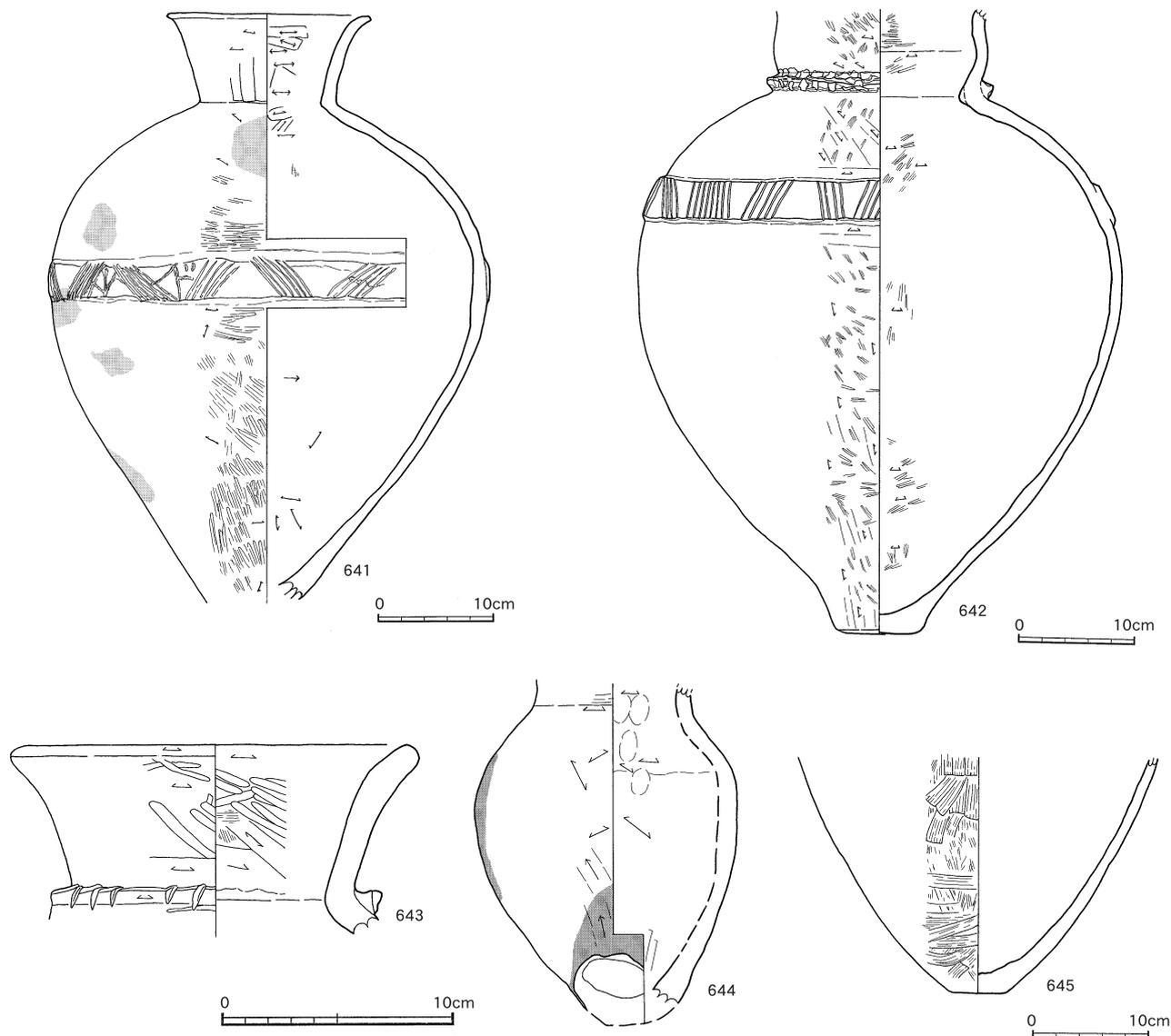


第138図 Lブロック周辺遺物(2)

恵器が集中して検出された場所である。27～33号土坑墓周辺遺物で記載した遺物も合わせもち、検討する必要もある。

568・569の壺形土器は、幅広突帯の土器である。568は、口縁部に特徴をもつ。口縁部は二重口縁状に一端外傾して立ち上がり、擬似口縁部より若干外反しながら立ち上がる。口唇端部では丸味を帯びる。胴部器形はなで肩の楕円形状をなし、底部は窪みをもった平底である。擬似口縁部及び頸部には一条の刻目突帯を、肩部やや下位に幅広突帯格子文を、胴部やや下位に穿孔を施す。569は、底部が欠損して形状は不明であるが、口縁部は外傾しながら立ち上がり、口唇部で外反する。口唇端部は丸味を帯びる。胴部器形は、肩部の張った逆卵形をなし、肩部には幅広突帯格子文を、頸部には一条の刻目突帯を施す。570と574の壺形土器はほぼ同じ器形をなす。574は口縁部が欠損し形

状は不明であるが、570は外傾して直線状に立ち上がり、口唇部で外反する。口唇端部は平坦面を呈す。胴部器形は、大きく肩が張った逆三角形状をなし、レンズ状の底部をなす。571と573の壺形土器もほぼ同じ器形をなす。口縁部が外傾して立ち上がり、胴部器形は肩の張った逆卵形をなし、571はレンズ状を、573は平底をなす。575は長頸壺で、外傾して直線状に立ち上がり、口唇部で外弯する。胴部器形は球形をなし平底を呈す。577の甕形土器は、口縁部がくの字状に外反し、明瞭な稜線が観察できる。胴部は少し膨らみをもち、底部は弯曲度合いが緩く直線的で高い。578から589は丹塗研磨土器、590は須恵器の甗である。578から582は高坏形土器、583から589は埴形土器である。590の須恵器甗は、頸部上位と胴部中央に櫛描波状文が施され、底部はタタキ調整を、更に三角形状のヘラ記号がある。これは、TK208



第139図 Mブロック周辺遺物(1)

段階の遺物と考えられる。Fe26は、無茎鏃で弥生終末該当遺物、Fe25・27は圭頭鏃とFe28の長圭鏃は古墳中期該当遺物とのご指摘を受けた。

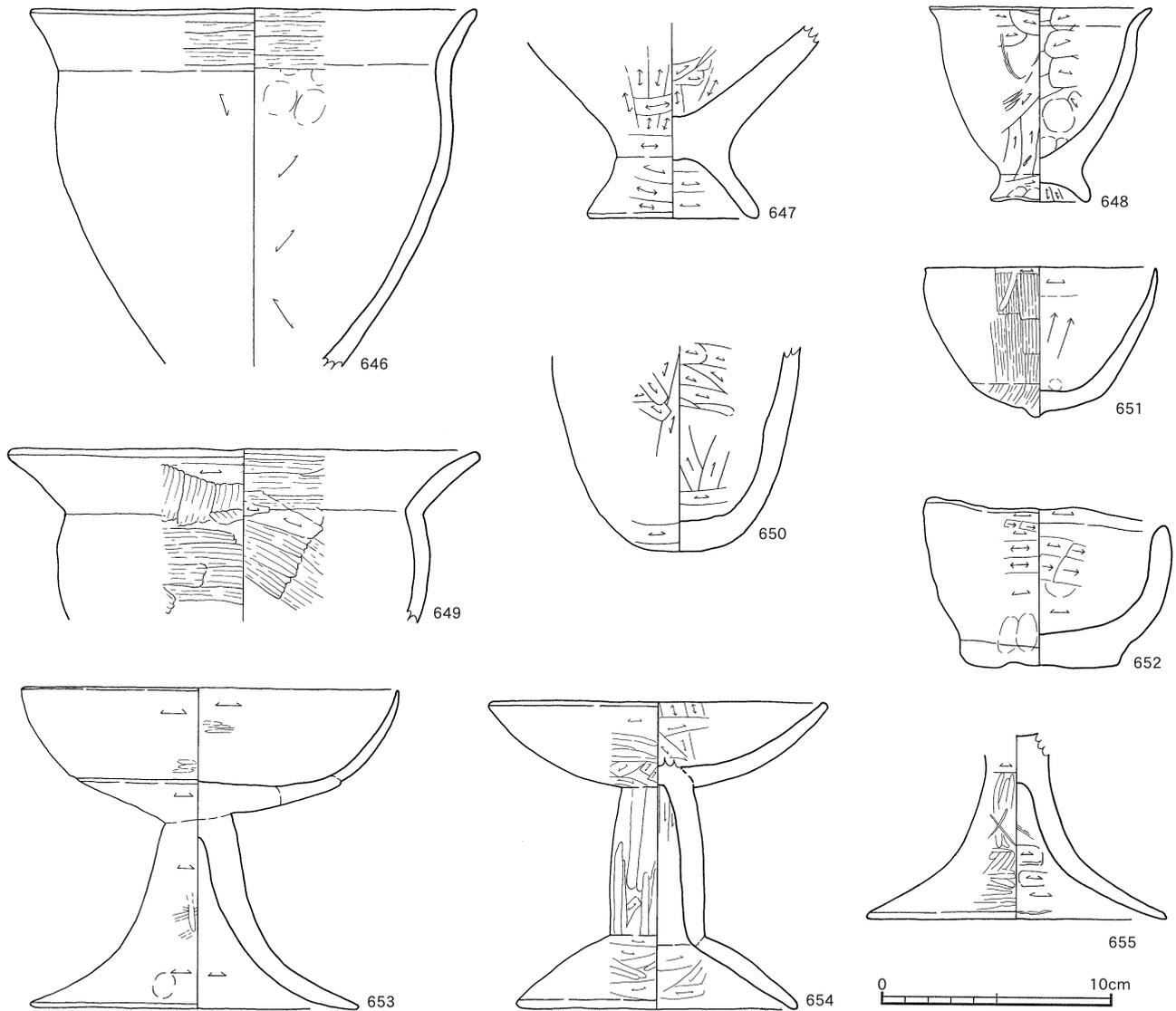
以上のことから、このブロックはIV期段階、古墳時代中期後葉（5c中頃）の遺物と考えられる。

11) A・B-9・10区のKブロック出土遺物
(第133図～第136図, 591～623, S133)

Jブロックのすぐ東側、Jブロック同様、IV期の遺物が多く出土したところである。このブロックも土器片の集中やほぼ完形の丹塗研磨土器や須恵器等が検出されたところである。

591, 593～595の壺形土器はいずれも、口縁部

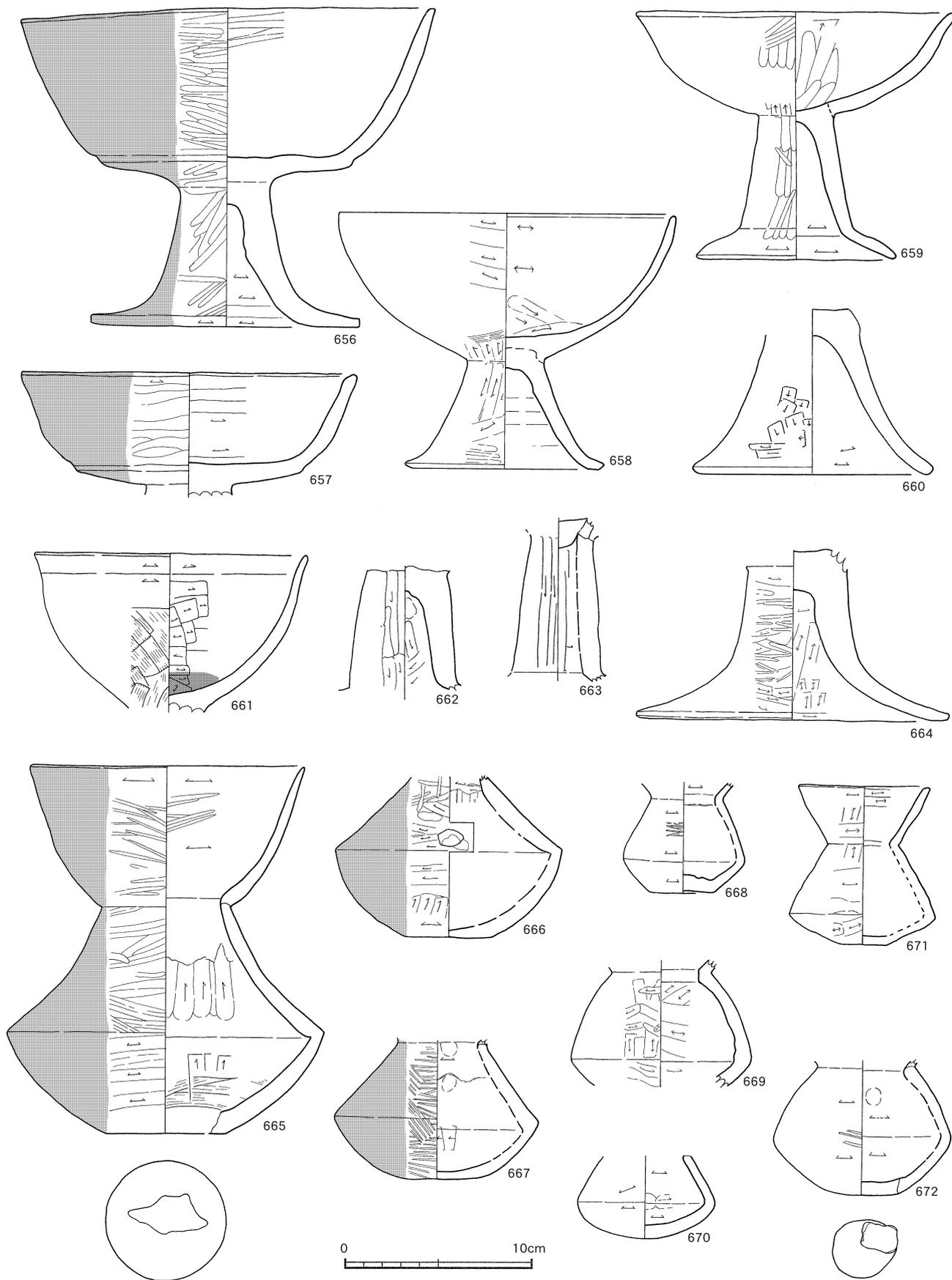
が直線状に外傾して立ち上がる。頸部には一条の刻目突帯を、肩部には複数沈線によるハの字状文を付した幅広突帯を貼り付けている。593は肩が張った逆卵形にレンズ状の底部をなす。591・594・595はなで肩で逆卵形の胴部器形である。591は平底を呈すがその他は欠損して形状は不明である。596の壺形土器は、口縁部が短く、くの字状に外反し、口唇端部は平坦面を呈す。598の壺形土器は、口縁部が欠損して形状は不明であるが、肩部がやや張った逆卵形の胴部器形で平底を呈す。底部には「×」印の樹木の枝と思われる圧痕が観察できる。600は小型丸底壺で、口縁部が欠損して形状が不明であるが、楕円形状の器形で



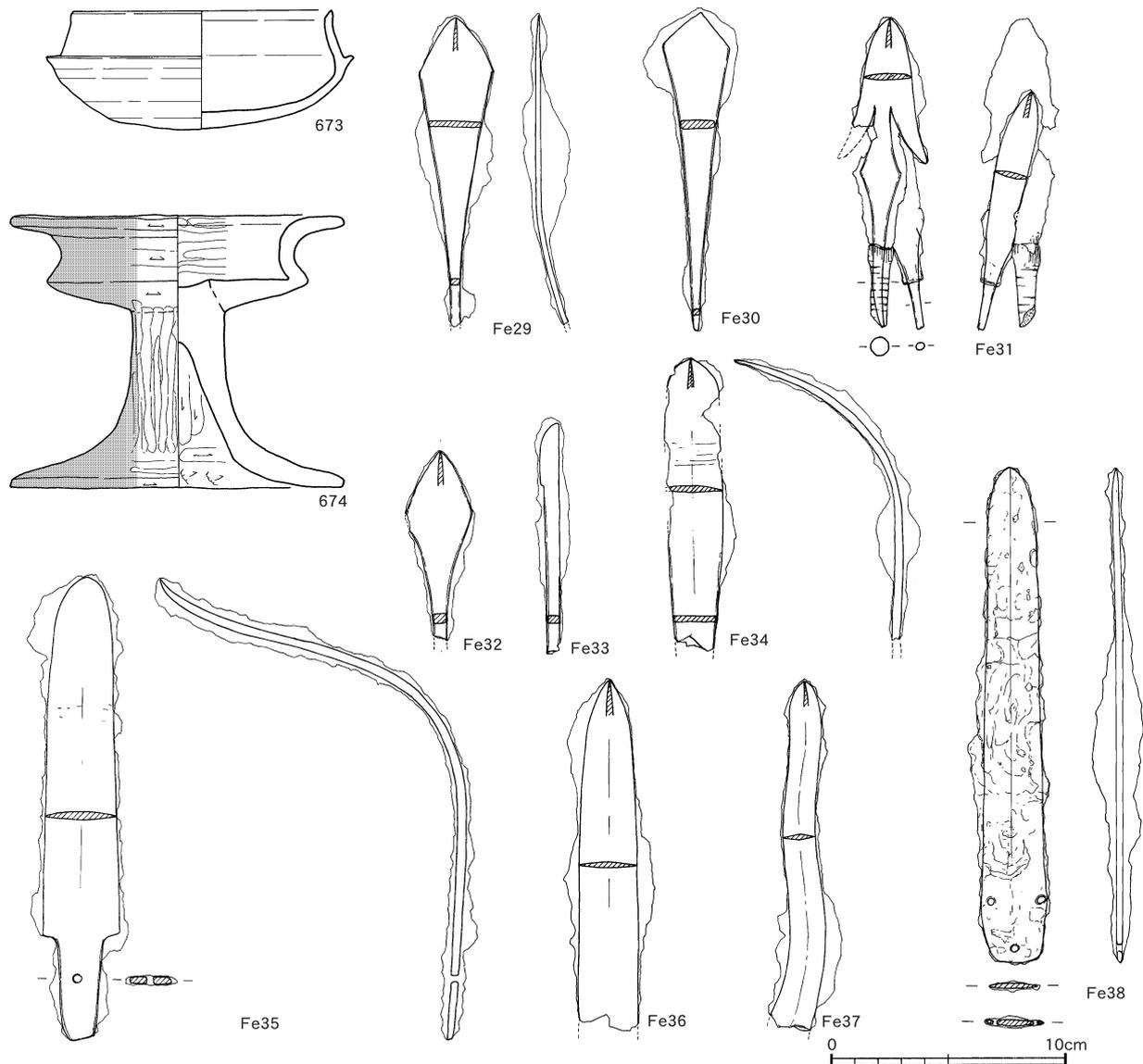
第140図 Mブロック周辺遺物(2)

底部に突起を施す。601は台付鉢と思われるが、特徴ある器形をなす。口縁部はくの字に緩やかに外反し、脚部は外反しながら開く。605は高坏形土器であるが、坏部が外傾して開き、口唇部がやや内弯する。脚部は外傾して開き、底部で外反する。対に4カ所の透を施す。611は高坏形土器の脚部であるが、螺旋状のベンガラ文様が施される。残念ながら坏部はない。606・607は脚部であるが、606は開きながら外反し、607は外傾して開き底部で大きく外反する。608から616は丹塗研磨土器である。608・609・610は高坏形土器、613・614・616は埴形土器、612・615は甗である。617から

622は埴形土器である。620の底部には「×」の記号と思われる線刻画が施される。また、623は須恵器の高坏形土器で、口縁部がやや内傾して立ち上がり、口唇部で若干外反する。坏底部は丸味を帯び、脚部は外傾して開く。低端部は平坦面を呈す。TK208段階の須恵器と思われる。569は、高坏形土器の脚部と思われるが、螺旋状のベンガラ文様が施される。621の埴形土器は、底部に「×」のへう記号が施される。このブロックもJブロック同様のIV時期該当遺物と思われる。



第141図 Mブロック周辺遺物(3)



第142図 Mブロック周辺遺物(4)

12) A・B-10・11区のLブロック出土遺物 (第137図～第138図, 624～640)

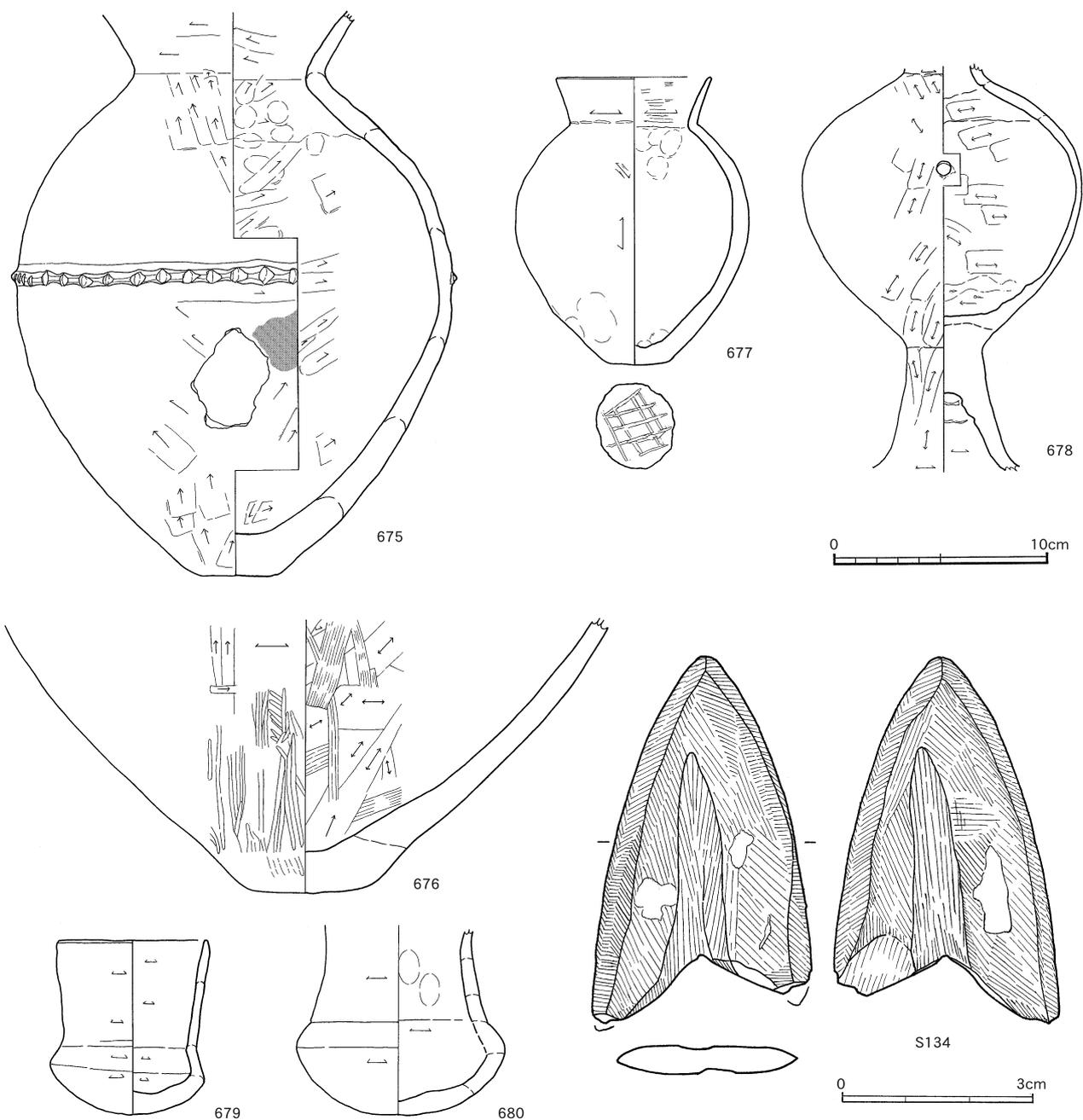
古相と新しい時期の遺物が混ざっている状況である。ほぼ完形の遺物が出土している。

壺形土器には624・625・627がある。624の壺形土器は口縁部が短く、くの字状に外反し、なで肩で長胴形の逆卵形の胴部器形にレンズ状底部をなす。肩部下位に一条の丸味をもった突帯を施す。625の壺形土器は口唇部及び底部が欠損しているため形状は不明であるが、胴部器形は楕円形状をなす。頸部に櫛搔波状文を施す。630の甕形土器、634の高環形土器は、形状からI期該当遺物と考えられる。631の甕形土器は、底部が欠損し不明

であるが口縁部形状からII期該当遺物と思われる。636, 638～640は丹塗研磨土器の埴形土器である。これらは、IV期該当遺物と思われる。これらのことから、A区側にI～II期該当遺物が、B区にIV期該当遺物が検出されている。

13) A～C-11区のMブロック出土遺物 (第139図～第142図, 641～674, Fe29～Fe38)

IV期該当遺物が中心である。641～643は、幅広貼付突帯の壺形土器である。641の壺形土器は丹塗痕が点在する。646・649は甕形土器であるが、649は口縁部形状からI期該当遺物と思われる。653～655・658～660・662～664は高環形土器で、



第143図 Nブロック周辺遺物

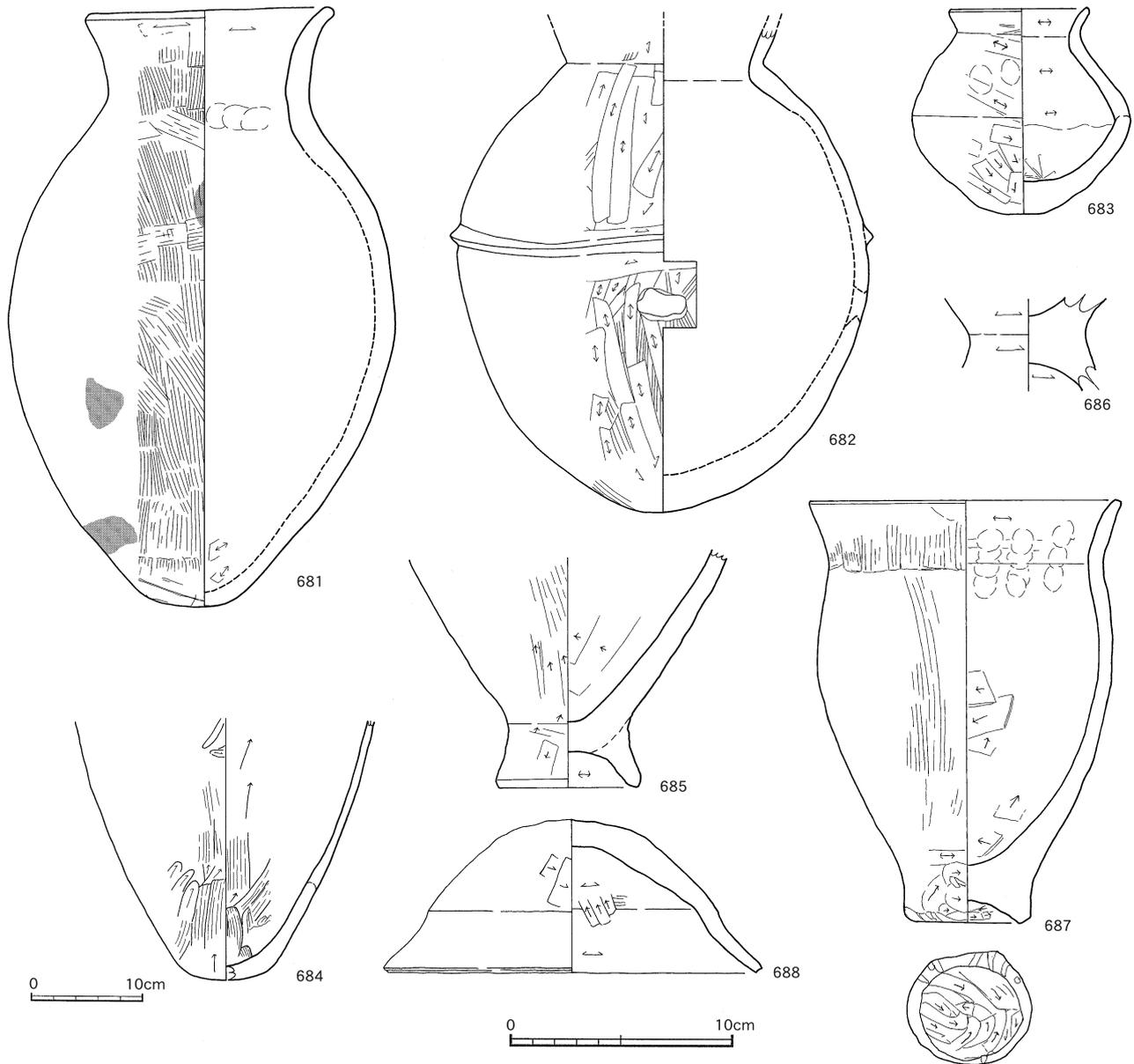
653・664はIV期該当遺物，654・659はIII期該当遺物と思われる。655の脚部には「×」の線刻が施される。656・657・665～667は丹塗研磨土器で，656・657は高坏形土器，665・667は埴形土器，666は高坏形土器の脚である。674は丹塗研磨土器の器台である。673は須恵器の坏身で口縁部が内傾して立ち上がり，口唇部で外反する。底部は丸味を帯びながらすぼまる。TK208段階の須恵器で

ある。Fe29・Fe30は圭頭鏃，Fe31は鳥舌鏃と長三角腸扶鏃が錆着したもの，Fe32・Fe35は圭頭鏃，Fe33は長圭鏃で5c中頃該当の鉄製品である。また，Fe34とFe35は曲剣，Fe36・Fe38は剣，Fe37は蛇行剣である。これらの遺物からおおよそIV期該当遺物と思われるが，先に述べた高坏形土器や甕形土器にはI期及びIII期該当遺物も混在する。

14) B～D-7区, Nブロック遺物(第143図, 675～680, S134)

I期該当遺物が中心と考える。675の壺形土器は、口縁端部が欠損しているものの、くの字状に外反し、胴部は球形で、平底を呈す。胴部中央には一条の刻目突帯を、胴部下方には穿孔を施す。679・680の罌形土器やS134の磨製石鏃もこの時

期該当遺物と思われる。678は台付壺形土器である。口縁部が欠損しているが、球形の胴部に脚台が付く。胴部やや上方に焼成前穿孔を施す。台付注口壺の可能性もある。胎土は在地のものであるが、この遺物も瀬戸内系の土師器と類似したものである。

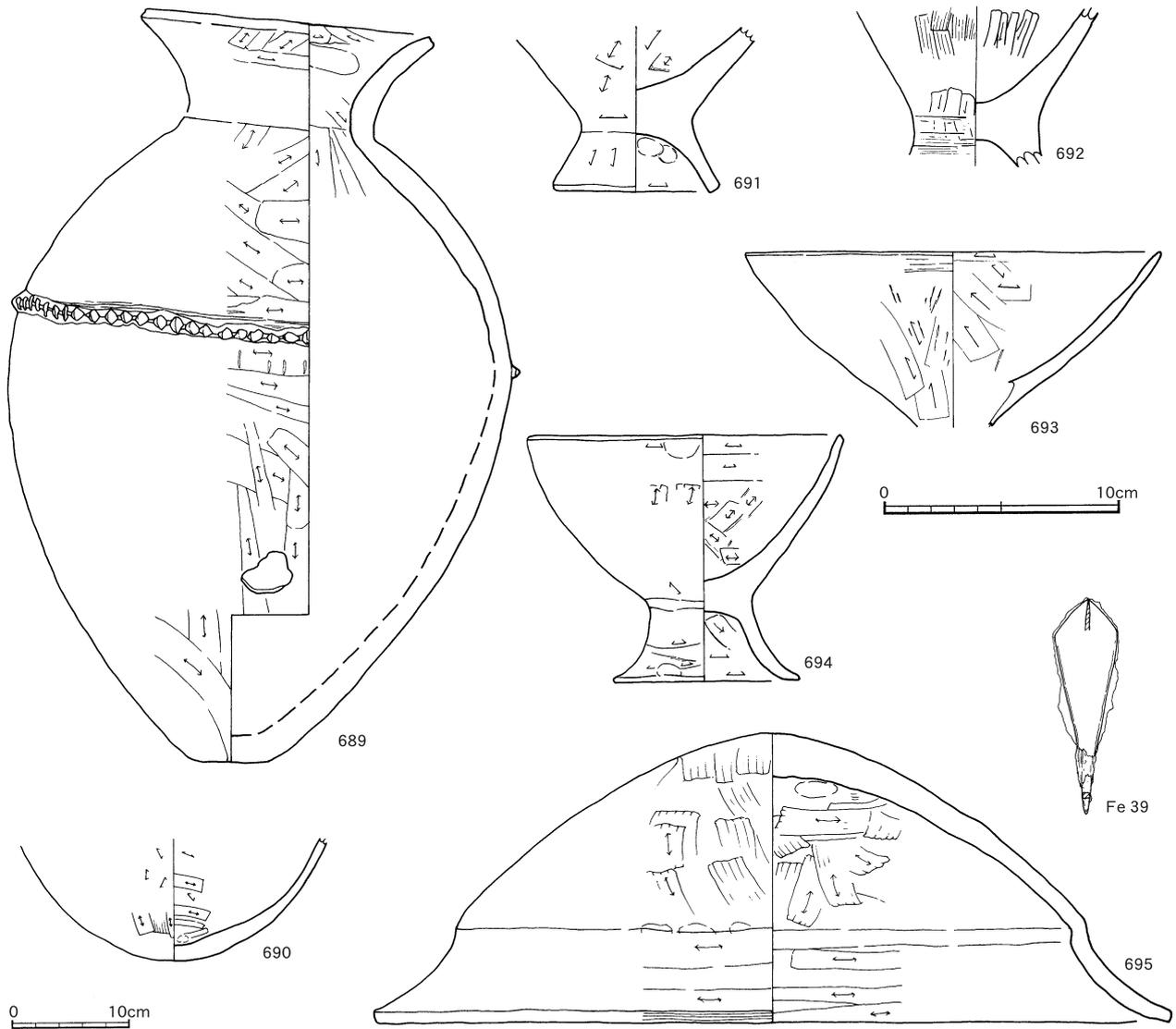


第144図 Oブロック周辺遺物

15) A-7区のOブロック出土遺物(第144図, 681～687)

681の壺形土器と687の甕形土器、688の蓋形土器は口縁部形態や器形からII期該当遺物と考えられる。682の壺形土器は頸部から口縁部がくの字

状に外反し、球形の胴部に丸底を呈し、一条の三角突帯と穿孔を施す。この遺物はI期該当と思われる。687の甕形土器の底部には植物圧痕と思われるものと特徴ある調整痕が観察できる。



第145図 Pブロック周辺遺物

16) B-9区のパブロック出土遺物(第145図, 689~695, Fe39)

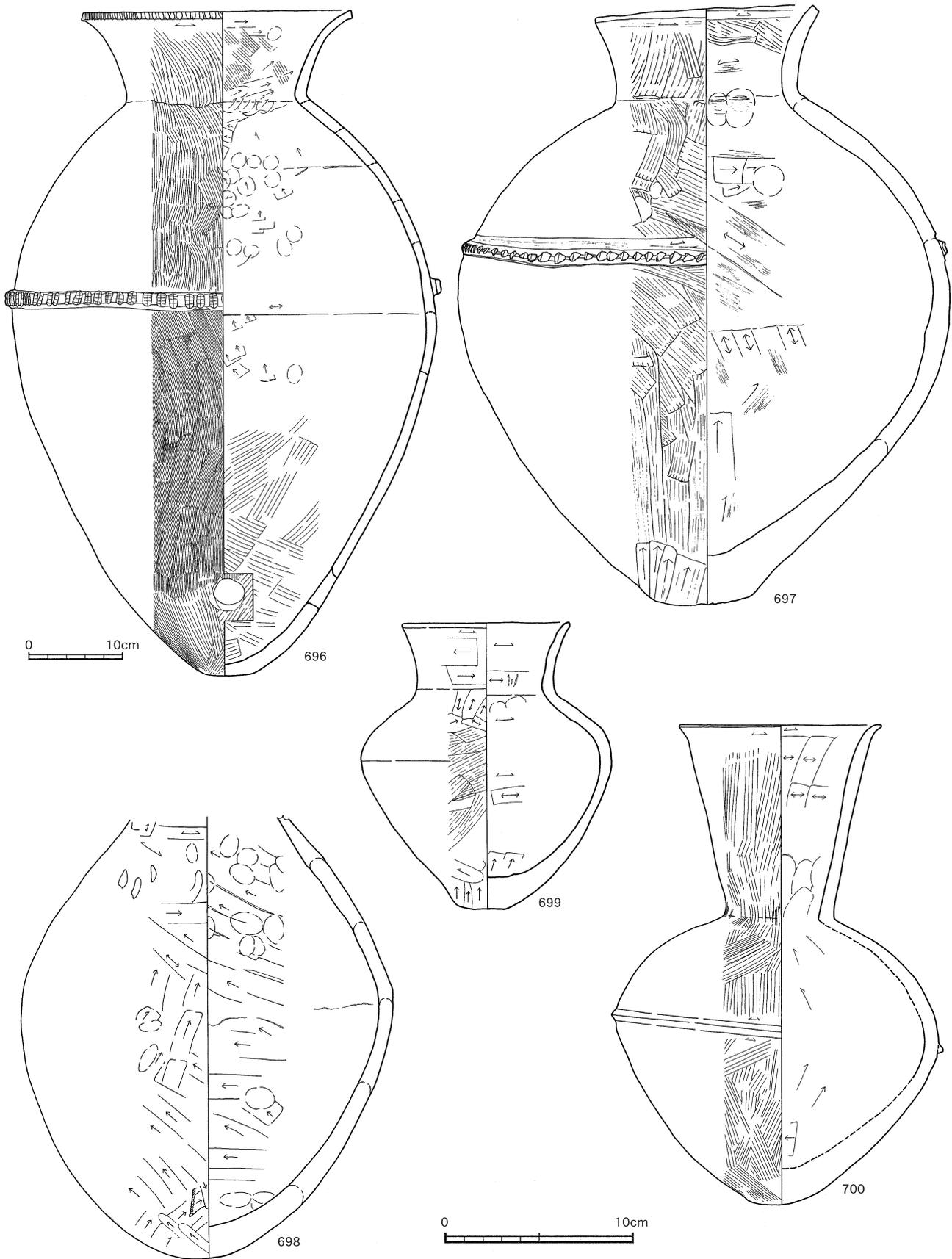
総じてI期該当遺物と考えられる。694は、高坏形土器ではなく、器台の可能性もある。

689の壺形土器は、口縁部がやや長く、くの字状に外反し、口唇部は平坦面を呈す。胴部はなで肩で逆卵形をなし、平底を呈す。胴部よりやや上位に一条の刻目突帯を施す。690は壺形もしくは鉢形土器の底部片と思われる。691は甕形もしくは鉢形土器の底部である。693・694は台付鉢形もしくは高坏形土器である。これらも在地土器とは異なる形状を呈し、土師器を模した土器と思われる。695の蓋形土器は、口縁部にススと思われるシミ状のものが微かに付着していることから蓋形

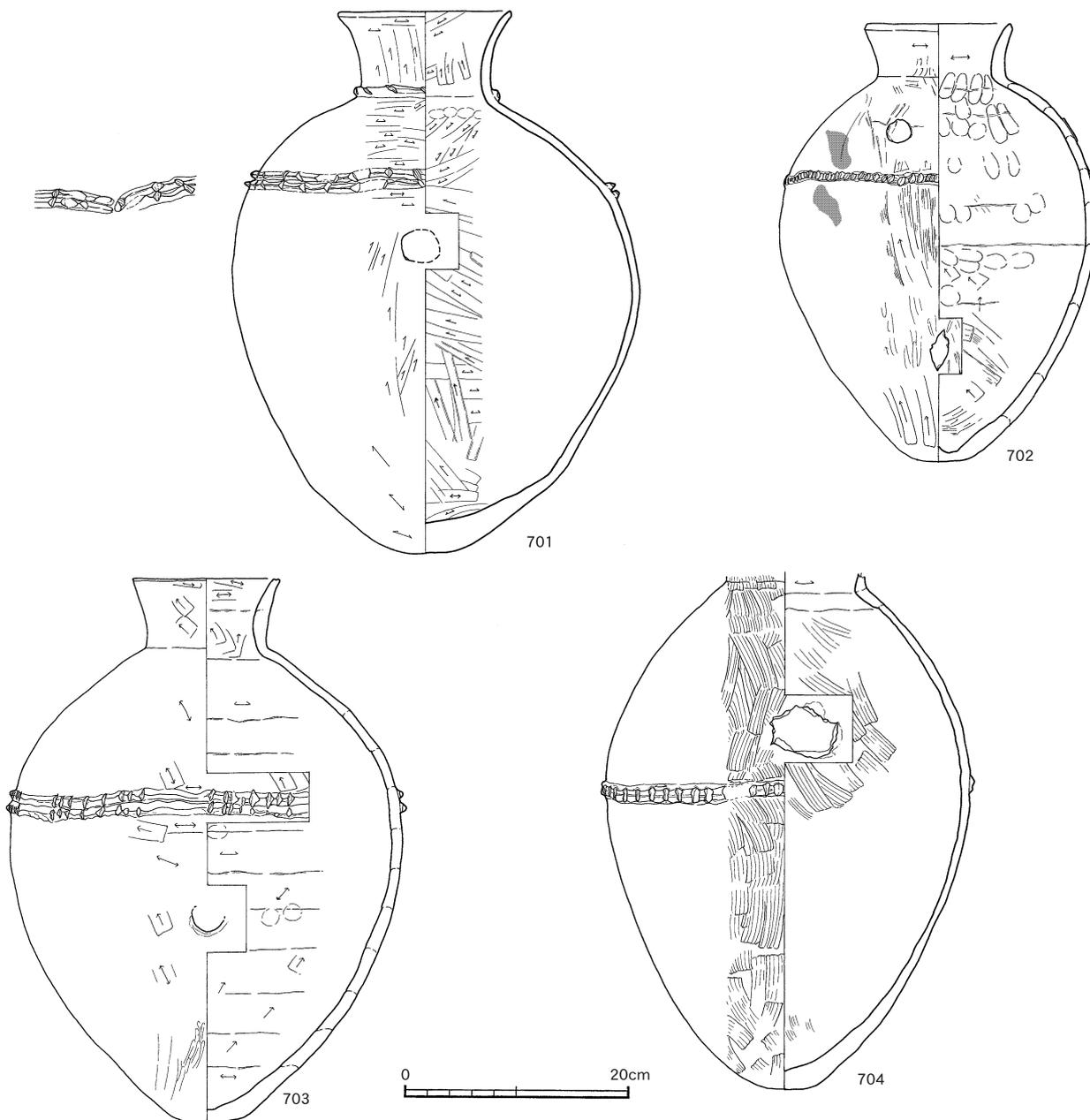
土器とした。

17) B-9区のパブロック出土遺物(第146図~第148図, 696~713)

59号土坑墓周辺に集中して検出された。壺形土器と甕形土器が主な遺物である。696・697・701~704は一条の刻目突帯を施す壺形土器である。696の壺形土器は口縁部がくの字状にやや長めに外反し、口唇部は平坦面を呈す。胴部はなで肩の逆卵形で平底を呈す。胴部中央に一条の刻目突帯を施し、胴部下位に穿孔を施す。また、口唇部にも刻目を施す。全体的に丁寧な刷毛目調整である。704も696同様の器形及び突帯・調整を施す。697の壺形土器は口縁部が短く垂直状にやや外傾して



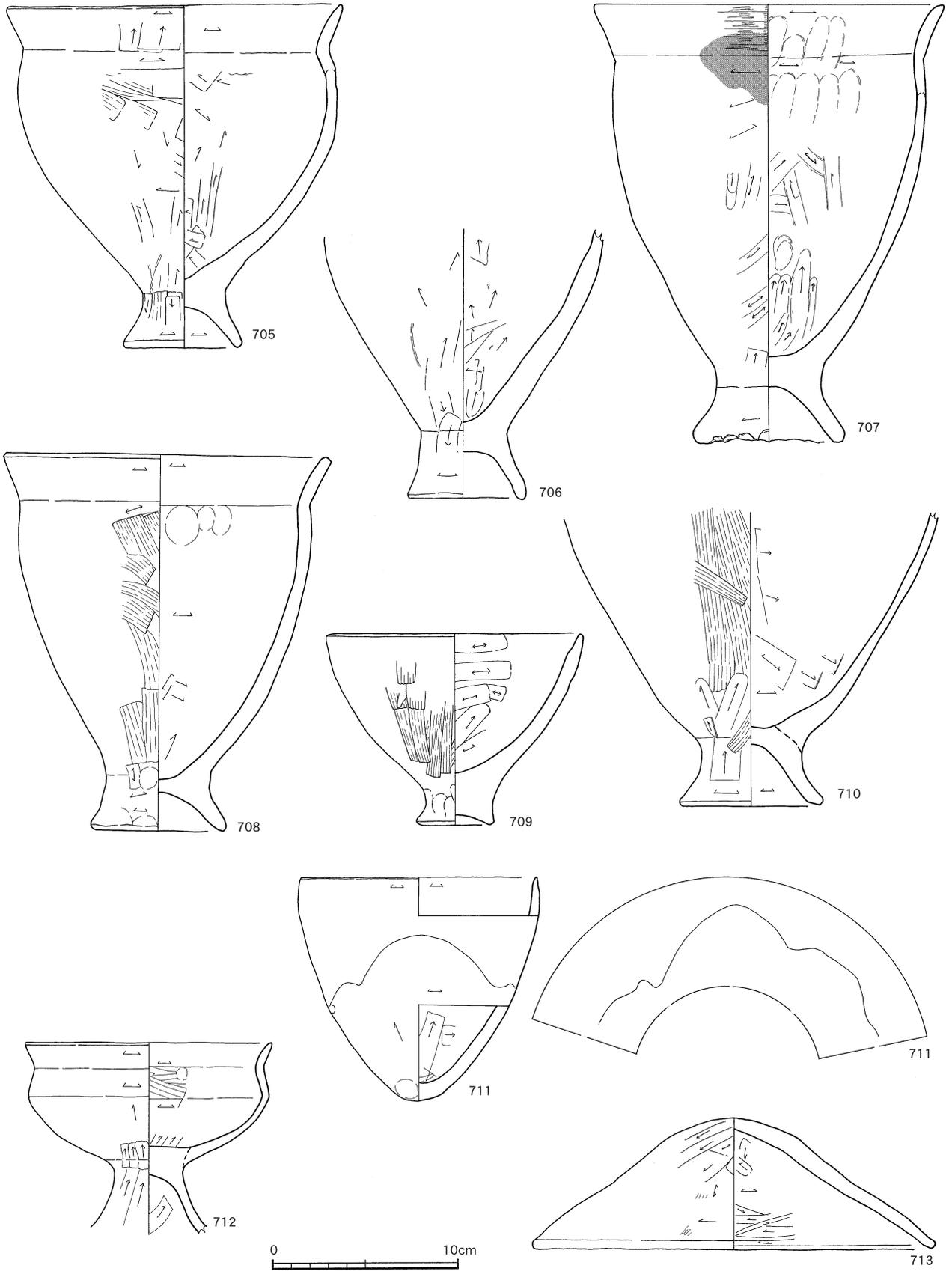
第146図 Rブロック周辺遺物(1)



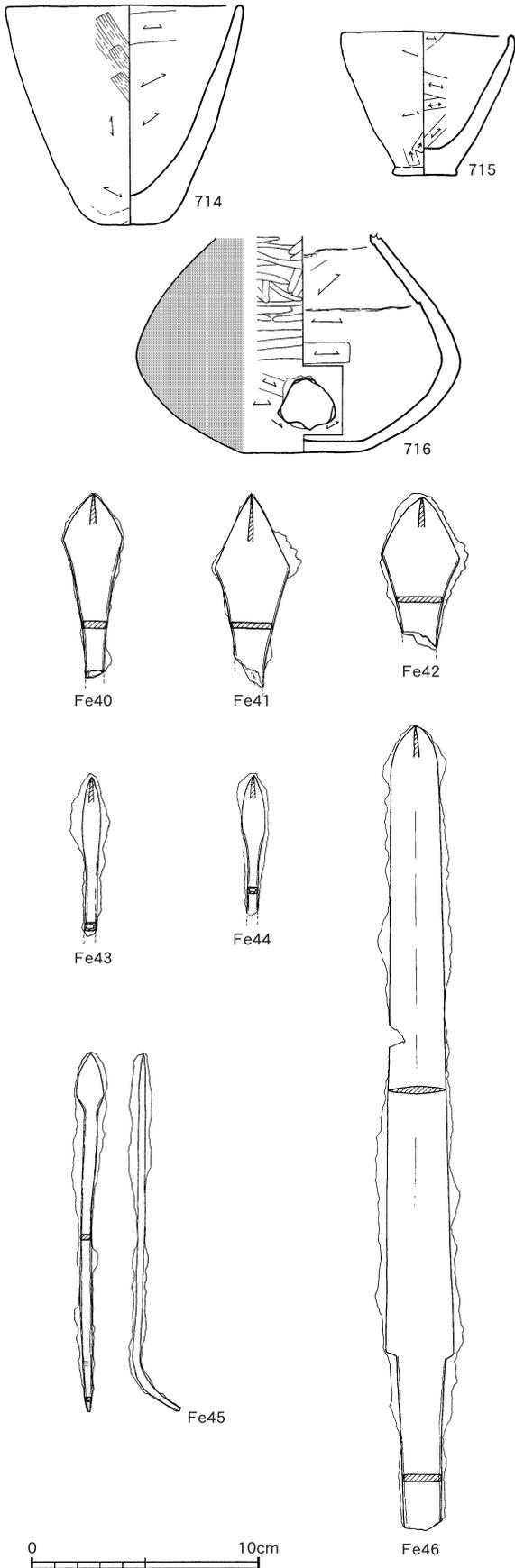
第147図 Rブロック周辺遺物(2)

立ち上がり、口唇部は平坦をなす。胴部はなで肩であるが大きく膨らみ、球形に近い形をなす。底部は平底である。胴部やや上位に一条の刻目突帯を施し調整は丁寧な刷毛目調整である。702の壺形土器は697の口縁形状と類似しているが、胴部はなで肩の逆三角形状をなし、平底を呈す。胴部やや上位に刻目突帯を施す。701と703の壺形土器は二条の突帯にハの字状の刻目を施す。どちらも口縁部が狭く、外傾気味に立ち上がる。701は口縁端部でやや外反し、口唇部は共に丸味を帯び

る。胴部は701がやや肩の張る器形で、703はなで肩の器形、両者とも逆卵形をなし平底を呈す。701は頸部にも一条の刻目突帯を施し、穿孔は胴部中央より上下にそれぞれ施されている。700の長頸壺は、口縁部端部でやや外反し、口唇部は三角形状をなす。胴部は屈曲度合いが緩やかで屈曲部に断面三角形状の突帯を施し、平底を呈す。699は平底の小型丸底壺、698は長胴で丸底の壺形土器である。705・707・708は甕形土器である。707・708は共に口縁部が緩やかに外反し、スリム



第148図 Rブロック周辺遺物(3)



第149図 Sブロック周辺遺物

な胴部に脚部は外傾してやや開く。違いは口唇部が丸味を帯びていることと平坦面を呈していることである。706・710は甕形もしくは鉢形土器の底部である。709・711は鉢形土器で、特に711は胴部に波状の線刻が施してある。何を表現しているのかは不明である。712は高环形土器であると思われる。口縁形状から古手と思われるが、他地域の土器を模して作られた可能性もある。713の蓋形土器は口縁部が段を有する形状をなす。

これらの遺物からI期からIII期相当の遺物が混在していると思われる。I期は、697・702・705が、II期は、696・704・700・707・708が、III期は701・703がそれぞれ該当遺物と思われる。高环形土器及び鉢形土器はI期からIII期該当と思われる。

18) B-10・11区のSブロック出土遺物(第149図, 715~717, Fe40~Fe46)

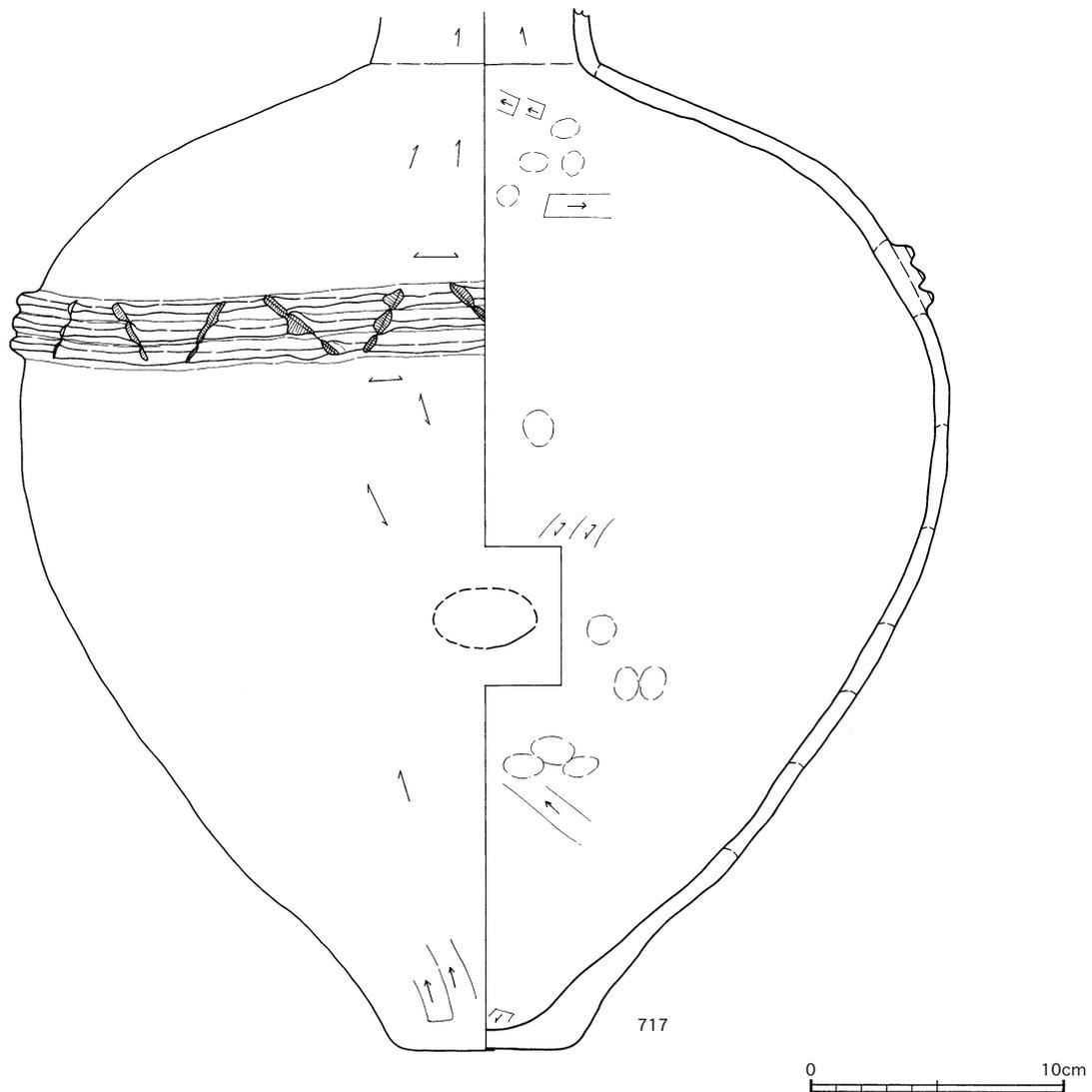
J・K・Mブロックの狭間にある。

714・715は鉢形土器, 716は丹塗研磨土器の礎である。鉄製品は, Fe40~Fe42は, 圭頭広根斧箭式のもので茎部は欠損している。Fe43は現存長7.3cm, 頸部中程以下は欠損する。細根篋被鑿箭式である。鍬身部の断面は平造りである。Fe44は長頸鍬で細根篋被鑿箭式に属すると思われる。鍬身部はやや柳葉状に細長い。茎部は半分欠損している。Fe45も長頸鍬で細根篋被鑿箭式である。茎部端で弯曲している。Fe46は剣である。長さ35.6cmで剣身は両鑄造りで鑄が微かに認められる。剣先は鋭利となる。削り関風で茎尻はやや平坦となり, 茎部の断面は方形をなす。剣身には土器片が錆着している。

これらの鉄製品を見ると古墳時代中期該当と思われる。

19) 溝状遺構周辺遺物(第150図, 717)

溝状遺構ブロック遺物として1点を掲載した。壺形土器であるが, 口縁部が欠損し全体形状は不明であるものの口縁部が内弯気味に垂直状に立ち上がると思われる。胴部は肩が大きく張った逆卵形をなし平底を呈す。胴部上位の一番張った箇所三条の突帯を施しその上にハの字状の刻目を施す。穿孔は胴部やや下位に施し色調はいわゆる指宿色をなす。この遺物はIII期からIV期該当遺物と思われる。



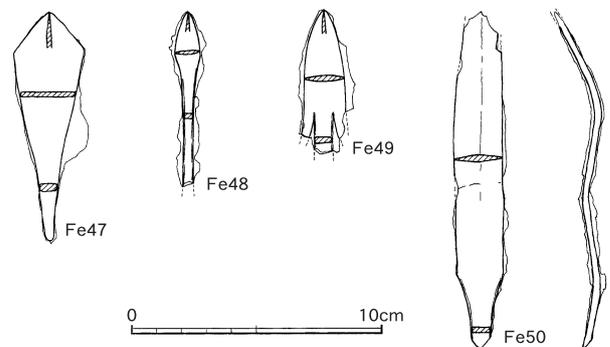
第150図 溝状遺構周辺遺物

20) 鉄製品一括 (第151図, Fe47~Fe50)

遺構上面で記載できなかった鉄製品を記載した。Fe47はB-10区でFe48はC-10区で、Fe49・Fe50はC-11区で検出された。いずれも海側の調査区で9層検出である。Fe47は圭頭鏃で、全長9.3cm圭頭広根斧箭式である。Fe48は、長頸鏃の細根篋被鏃箭式で茎部は半分欠損している。Fe49は、長三角腸扶鏃で鏃身部は細長く腸扶部は深い。断面は両丸造りで頸部は一部欠損しているが山形を呈するものと思われる。断面は方形をなす。Fe50は鋒先から劍身にかけて欠損し、現在長13.6cmである。撫角な関で、茎部端は三角形状を呈す。劍身には鑄があり菱形断面となる。劍中央部及び咳付近の3カ所で屈曲している。

これらの遺物は、Fe47が弥生時代終末期該当、Fe

48とFe49は5c中頃の古墳時代、Fe50は弥生時代終末期から古墳時代該当遺物と思われる。Fe47の存在が何を意味するか興味深いものである。



第151図 鉄製品一括

第19表 遺物観察表(1)

種図 No.	掲載 No.	掲載 プロック	時期	時期分類		大きさ (cm)				出土区	層	調整		色調			胎土		文様		穿孔 有無	口縁 有無	備考	
				器種 (大)	器種 (小)	器高	口径	底径	最大径			外面	内面	外面	内面	ベンガラ 有無	金運母 有無	その他	突帯	その他				
63	243	T 1	I	A	a	54.5	19.0	4.0	35.5	C 8	9b	工具ナデ, ヘラナデ, ミガキ 指頭圧痕	ヘラナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	浅黄	にぶい黄褐	-	-	輝石, 長石, 角閃石	一条刻目突帯		○	○		
	244	T 1	I	A	d	+ 10.1	8.0	-	9.1	C 8	9b	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 赤色粒子			-	○		
	245	T 1	I	C・D		-	-	-	-	C 8	9b	ナデ	指ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 赤色粒子	一条刻目突帯		-	-		
	246	T 2	I	A	a	41.0	11.5	2.0	28.1	C 8	9	ハケメ後ナデ	ハケメ, 指ナデ, 工具ナデ 指頭圧痕	赤橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯		-	○		
64	247	T 3	I	A	a	+ 76.5	-	7.5	47.5	B 8	9a ~b	ハケメ, ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	ハケメ, 工具ナデ	明黄	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条突帯		○	-	内面に3本の スズ状	
	248	T 3	I	A	b	40.8	18.5	3.0	37.0	C 8	9b	ハケメ, ナデ	工具ナデ, 指ナデ, ハケメ 指頭圧痕	赤褐	暗赤褐	-	-	長石, 角閃石			-	○		
	249	T 3	I	A	d	+ 10.0	-	1.4	9.4	B 8	9	ナデ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	-	黒斑	
	250	T 3	I	C・D		-	-	12.0	-	B 8	9b	ナデ, ハケメ, 工具ナデ	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	明黄褐	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	-		
65	251	T 4	I	A	d	13.8	9.2	-	11.8	B 9	9b	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 指ナデ	明橙	明黄褐	-	-	長石, 角閃石, 石英			-	○	-	黒斑
	252	T 4	I	A	b	+ 19.4	-	-	17.2	B 7	9b	ナデ後ハケメ, ナデ	ナデ, 工具ナデ	浅黄橙	浅黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			○	-		
	253	T 4	I	B		35.4	25.2	11.2	25.2	B 7	9c	ナデ後ハケメ, ナデ	ナデ, 指ナデ	にぶい橙	明黄褐	-	-	長石, 角閃石, 砂粒			-	○		
	254	T 4	I	C		-	-	9.0	-	C 7	9b	工具ナデ	工具ナデ, ナデ	明赤橙	-	-	長石, 角閃石			-	-			
	255	T 4	I	C		-	-	9.8	-	B 7	9c	ナデ	ナデ	淡橙	淡黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 石英			-	-		
66	256	T 5	I	A	a	+ 62.0	22.0	5.5	38.5	A 8	9a	ハケメ, 工具ナデ, ナデ	ハケメ, ナデ	にぶい橙	淡赤橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯		○	○		
	257	T 6	I	A	a	76.5	29.5	-	50.0	B 8	9b	ハケメ, ハケメ後ナデ	ハケメ, ハケメ後工具ナデ, ナデ 指ナデ	橙	明赤褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条突帯		○	○	内面に丹塗痕	
	258	T 6	I	A	a	44.0	17.5	-	36.0	B10	9	ハケメ後ナデ, ナデ	ハケメ, ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい橙	-	○	長石, 角閃石, 輝石, 雲母	四条刻目突帯		-	○		
	259	T 6	I	C		10.4	10.0	6.2	10.2	B 8	9c	ナデ後ハケメ, ナデ	ナデ後ハケメ	黄橙	橙	-	-	輝石, 砂粒			-	○		
	260	T 6	I	B		20.0	20.6	8.6	20.6	B 8	9c	ハケメ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕, ハケメ	明黄橙	明黄橙	-	-	角閃石, 砂粒			-	○		
	261	T 7	I	A	d	+ 14.6	-	2.0	10.8	C 8	9c	ハケメ, 工具ナデ	ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	-		
67	262	T 7		B・C		-	-	8.0	-	C 9	9c	ハケメ, ナデ, 指ナデ	ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい橙	-	-	長石, 角閃石			-	-		
	263	T 8	I	A	c	-	-	2.5	10.5	A 9	9b	ナデ, 工具ナデ	工具ナデ, 指ナデ	浅黄橙	明黄褐	-	-	長石, 角閃石	一条刻目突帯		-	-	胴部, 底部に ×印あり	
	264	T 8	I	A	d	17.7	10.2	-	19.0	B10	9	ナデ, ミガキ, 工具ナデ	ナデ, 指ナデ	明黄褐	明黄褐	-	-	長石, 角閃石			-	○		
68	265	T 9	I	A	a	54.5	17.5	7.0	40.5	B 9	9b	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 指ナデ, ミガキ後ナデ	にぶい橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯		口唇部に 刻目	2ヶ所	○	
	266	T 9	I	A	a	-	-	-	19.0	B11	9	ナデ, 工具ナデ	ナデ	明赤褐	暗橙	-	-	角閃石			-	-		
	267	T 9	I	C		7.8	8.4	4.8	8.8	B 9	9c	ナデ, ミガキ, 指頭圧痕	ナデ	浅黄橙	橙	-	-	輝石			-	○		
	268	T 9	I	D		14.4	16.0	11.7	16.0	B 9	9	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	-	丹塗痕あり 透4カ所	
	269	T12	I	A	d	-	-	2.0	12.9	C10	9	ナデ後ハケメ, 工具ナデ	指頭圧痕	明赤橙	明橙	-	-	長石, 角閃石, 石英			-	-	黒斑	
70	270	T12	I	A	a	-	-	11.3	17.0	C10	9	ミガキ, ナデ, ハケメ	ハケメ, 工具ナデ	明橙	明橙	-	-	長石, 角閃石, 石英			○	-	黒斑	
	271	T13	I	A	a	70.0	24.0	4.0	43.0	B10	9	ナデ後ハケメ, ナデ	ハケメ	明黄橙	明赤橙	-	○	長石, 角閃石, 輝石, 石英	一条突帯		-	○	黒斑	
	272	T13	I	A	a	+ 69.6	-	5.5	52.5	A10	9	ハケメ後ナデ, 指頭圧痕	ハケメ, ナデ, 指頭圧痕	明黄橙	黄橙	-	-	角閃石, 輝石	一条刻目突帯		○	-	内面黒色帯状	
	273	T13	I	A	b	+ 26.0	-	-	22.0	A10	9b	ナデ, 工具ナデ, ミガキ状ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	○		
	274	T13	I	B		23.8	21.4	7.4	21.4	B10	9	ナデ, ミガキ, ハケメ	ナデ, ハケメ	にぶい橙	にぶい褐	-	-	角閃石, 輝石			-	○		
	275	T14	I	A	b	41.4	19.0	2.0	36.0	C 9	9b	ナデ, 工具ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕, ナデ	明黄橙	明橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	○		
	276	T14	I	A	b	28.0	10.2	-	24.0	C 9	9b	ナデ, 指頭圧痕	ハケメ, ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	明赤褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	○		
72	277	T14	I	A	d	+ 18.0	-	-	13.9	D 8	9b	ナデ後工具ナデ	ナデ, ハケメ, 工具ナデ	黄橙	浅黄橙	-	-	長石, 角閃石			-	-		
	278	T14	I	A	b	+ 31.0	-	-	37.7	C 9	9c	工具ナデ, ハケメ	ナデ	明赤褐	明赤褐	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	-		
	279	T14	I	A	d	17.6	9.5	-	15.4	C 9	9b	ナデ, 工具ナデ, ケズリ	ナデ, 指頭圧痕	明橙	明橙	-	-	長石, 角閃石			○	-	黒斑	
	280	T14	I	E		-	-	-	8.2	C 9	9b	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	長石, 角閃石			-	-		
	281	T14	I	A	d	10.0	6.7	-	7.8	C 9	9b	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石, 角閃石			-	○		
	282	T14	I	F		11.4	28.2	6.6	28.2	C9, 10	9b	ハケメ, 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	○		
	283	T15	I	A	b	-	-	2.8	19.7	C 9	9b	ハケメ, ミガキ, ナデ	丁寧なナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石, 角閃石				-	胴部沈線	
	73- 74	284	T16	I・II	A	a	44.6	14.1	-	31.4	D 8	9b	ナデ, 工具ナデ, ハケメ	工具ナデ, ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	明赤橙	暗橙	○	-	長石, 角閃石	一条刻目突帯			-	-
75	285	T16	I・II	A	a	54.0	18.5	4.5	36.5	D 8	9b	ハケメ, 工具ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	橙	淡橙	-	-	長石, 角閃石	一条刻目突帯		4ヶ所	-	-	
	286	T16	I・II	E		14.1	8.4	2.4	10.7	D 8	9b	工具ナデ, ハケメ	工具ナデ, ナデ	明黄橙	明黄橙	-	-	砂粒				-		
	287	T16	I・II	B		16.4	17.1	7.0	17.1	D 8	9b	ハケメ, 工具ナデ	工具ナデ, ハケメ	明橙	明赤橙	-	-	長石, 角閃石			-	○		
	288	T16	I・II	F		5.0	17.0	-	17.0	D 8	9b	ハケメ, ナデ	ハケメ, 工具ナデ	明橙	黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	-		
76	289	ES 1	I	A	b	31.8	11.2	-	19.8	C 9	9b	ナデ, 工具ナデ	指ナデ, 工具ナデ	橙	浅黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 石英, 雲母			○	○		
	290	ES 1	I	A		13.2	7.4	3.2	9.0	D 8	9b	ナデ	ナデ	赤橙	にぶい黄橙	-	-	長石, 角閃石, 雲母	胴部絵画		-	○		
	291	ES 1	II	A	d	+ 18.4	16.0	-	16.7	D 8	9b	ナデ後ミガキ	ナデ, 指頭圧痕, ハケメ	橙	明黄橙	-	-	角閃石			-	○		
	292	ES 1	I	B		+ 16.5	17.2	-	17.2	D 9	9a	工具ナデ, 指ナデ	工具ナデ, 指ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石, 角閃石			-	○	黒斑	
	293	ES 1	I	B		16.5	17.0	6.0	17.0	D 8	9b	ハケメ, ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	浅黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	○	黒斑	
	294	ES 1	II	C		11.0	13.6	8.0	13.6	D 8	9b	ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	淡黄橙	淡黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	-		
	295	ES 1	II	F		13.3	23.6	4.5	23.6	D 8	9b	ミガキ後ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	明黄橙	明黄橙	-	-	長石, 角閃石			-	○		
	296	ES 1	I	C		5.9	12.0	6.0	12.6	D 9	9b	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	にぶい橙	浅黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石			-	○	黒斑	
	297	ES 2	I	A	a	-	-	-	24.0	D 9	9b	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ	ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石				-	黒斑	
	298	ES 2	I	A	b	36.0	13.8	-	25.2	D 9	9b	ミガキ後ナデ, 工具ナデ, 指ナデ	ナデ, 指頭圧痕, 指ナデ	浅黄橙	淡赤橙	-	-	長石, 角閃石			○	-	黒斑	
299	ES 2	I	A	b	44.6	19.4	3.0	35.0	C 9	9b	ナデ, 工具ナデ, ハケメ後ナデ	ナデ, 工具ナデ, ハケメ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石, 赤色粒子			-	○	黒斑		
300	ES 2	I	A	c	20.2	9.0	2.5	14.6	D 8	9b	工具ナデ, ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	明橙	黄橙	-	-	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯		-	○			

第19表 遺物観察表(2)

種図	掲載	掲載 フロッグ	時期分類		大きさ (cm)				出土区	調整		色調		胎土			文様		穿孔有無	口縁有無	備考
			時期	器種(大)	器種(小)	器高	口径	底径		最大径	外面	内面	外面	内面	ベンガラ有無	金蓮母有無	その他	突帯			
77	301	ES 2	I	E			1.3		D 9	9	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙			長石, 角閃石, 輝石				
	302	ES 3	I	A	b	57.2	16.8	3.0	41.3	D 9	9a	工具ナデ, ミガキ	ハケメ, 工具ナデ, 指頭圧痕, 指ナデ 指頭圧痕	明赤褐	橙			長石, 角閃石, 輝石, 赤色粒子			
	303	ES 3	I	A				7.8		D 9	9c	ミガキ後ナデ, 指頭圧痕, 指ナデ	ケズリ, 工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	明黄褐			長石, 角閃石			
	304	ES 3	I	A	d	12.1	9.0		11.1	D 9	9c	ナデ後ミガキ	ハケメ, 工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	明黄橙	明黄褐			長石, 角閃石			
79	305	ES 4	II	A	b	+ 21.4			17.2	C 9	9	ナデ, ミガキ状工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい黄橙			長石, 角閃石, 輝石			
	306	ES 4	II	A	d	15.4	8.2		11.8	C 9	9b	工具ナデ, ナデ	工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	淡橙			長石, 角閃石			黒斑
	307	ES 4	II	C						C 9	9	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	にぶい橙	にぶい橙			長石, 角閃石, 輝石			2ヶ所
	308	ES 5	I	A	b	35.5	9.9		27.0	B 8	9b	ハケメ, ナデ	ナデ, 指ナデ	橙	橙			長石, 角閃石, 石英			
	309	ES 5	I	A	d	10.6	7.9		11.7	B 8	9b	ナデ, 工具ナデ	ナデ	黄橙	橙			長石, 角閃石, 輝石			
	310	ES 5	I	A	b	+ 13.9			13.4	C 8	9b	工具ナデ, ナデ, 指ナデ	工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕, 指ナデ	橙	黄橙			長石, 角閃石, 輝石			線刻?
	311	ES 5	I	B		19.0	18.7	5.3	18.7	B 8	9b	ナデ, ハケメ後ナデ, 工具ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	橙	明黄橙			長石, 角閃石, 石英			
	312	ES 5	I	C		10.8	11.0	4.8		C 8	9c	ハケメ, 指ナデ	工具ナデ, 指ナデ	淡赤橙	黄褐			長石, 角閃石			
	313	ES 6	I	A	b	19.8	7.2		13.8	C 9	9b	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ, 指頭圧痕	赤橙	淡赤橙			長石, 角閃石, 輝石			黒斑
	81	314	ES 6	I	A	a	+ 22.0		3.0	19.5	C 8	一括	工具ナデ	指ナデ, 工具ナデ	明赤橙, 黄	黄橙			長石, 角閃石, 輝石, 石英		
315		ES 6	I	E				13.4		C 8	9c	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙			長石, 角閃石, 石英			
316		ES 6	I	B		11.8	12.3	5.6	12.3	C 8	9b	指頭圧痕, ハケメ, 工具ナデ	指頭圧痕, 指ナデ, ナデ	にぶい橙	にぶい橙			長石, 角閃石			脚の内に植物圧痕か?
317	ES 6	I	B-C		+ 9.3		6.0		C 8	9c	ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	橙	黄橙			長石, 角閃石, 輝石				
82	318	ES 7	I	A	b	43.6	11.9	1.3	23.0	A 8	9	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, ハケメ	にぶい橙	にぶい黄橙			長石, 角閃石, 輝石			
	319	ES 7	I	A	a	+ 68.2		8.0	47.6	A 9	9b	ハケメ, ナデ, 指ナデ	ナデ, 工具ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	橙	橙			長石, 角閃石, 輝石			一条突帯
83	320	ES 7	I	A	a	38.7	11.8	2.6		A 9	9	ナデ, 工具ナデ, ミガキ	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい橙			長石, 角閃石, 輝石			一条刻目突帯
	321	ES 7	II	A	d	14.0	+ 7.5		16.0	A 8	9b	ミガキ, 工具ナデ	指頭圧痕	浅黄橙	にぶい橙			長石, 角閃石			底部に黒斑
	322	ES 7	I	A	b	16.5	6.0		11.6	A 8	9c	ナデ, ハケメ, 工具ナデ ミガキ状ナデ	ナデ	浅黄橙	明黄褐			長石, 角閃石, 輝石			口唇変色, 黒斑
	323	ES 7	I	D			17.2			A 9	9c	ナデ	ナデ	明赤橙	明赤橙			角閃石, 輝石			
84	324	ES 7	I	D-G					A 8	9b	ハケメ, 工具ナデ	ハケメ後ナデ	明橙	明橙			長石, 角閃石			透	
	325	ES 8	I	A	a	30.0	11.1		23.3	A10	9	工具ナデ, 指ナデ	工具ナデ, 指ナデ	明橙	明橙			長石, 角閃石			一条刻目突帯
	326	ES 8	I	A	b	19.9	8.8		14.4	B 7	9a	ナデ後ミガキ, ナデ	ナデ後ミガキ, ナデ, 指頭圧痕	にぶい赤褐	明赤褐			長石, 角閃石			黒斑
	327	ES 8	I	A	b	32.1	14.3	1.7	29.2	A10	9a	ハケメ, ナデ	ナデ, 工具ナデ	赤橙	赤橙			長石, 角閃石, 輝石			
	328	ES 8	I	C-D		+ 8.2	12.2		12.2	B10	9	ナデ	ナデ	明橙	明橙			長石, 角閃石, 輝石			
	329	ES 8	I	C		8.3	9.3	3.7		A 9	9	ナデ	ナデ	浅黄橙	明赤橙			長石, 角閃石, 輝石			
	330	ES 8	I	D		+ 9.0		12.6		A10	9b	ミガキ, ナデ	工具ナデ, 指ナデ	橙	橙			長石, 角閃石, 輝石			透は貫通しない竹筴状
	331	ES 8	I	F		10.5	30.7	3.8	30.7	A10	9	ハケメ, 工具ナデ	ハケメ, 工具ナデ	明橙	明橙			角閃石, 輝石			
85	332	ES 9	I	A	a	23.2	9.8		18.2	C 9	9	ナデ, 工具ナデ, ハケメ, ミガキ	ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	にぶい橙, 明赤褐	にぶい橙			長石, 角閃石, 輝石, 雲母			一条刻目突帯
	333	ES 9	I	D		21.6	35.4	12.5	35.4	C 9	9b	工具ナデ, ナデ, ハケメ	ナデ, 指頭圧痕	橙	黄橙			長石, 角閃石, 輝石			一条刻目突帯
	334	SD 1	I				9.5			D 8	9c	ナデ後ミガキ, ナデ	ナデ	明橙	明橙			長石, 角閃石, 輝石, 石英			
86	335	SD 3	I	A	a	+ 72.0	47.3	5.6	48.0	D 8	9b	工具ナデ, ミガキ, ナデ	工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	黄橙	黄褐, 明橙			長石, 角閃石, 輝石			一条刻目突帯
	336	SD 3	I	A	b	+ 24.2		3.4	22.4	D 8	9b	工具ナデ	工具ナデ, 指ナデ	にぶい黄橙	黄橙			長石, 角閃石, 輝石			
	337	SD 4	I	A	b	24.3	10.7	2.0	37.4	D 8	9c	工具ナデ, ナデ, ケズリ, 指ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙			長石, 角閃石			口唇部軸轆成形か, 黒斑
	338	SD 4	I	E		6.5	6.0	1.5	6.6	D 8	9b	ナデ, 指ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	ナデ	赤褐	にぶい橙			角閃石, 雲母			
	339	SD 4	I	A	a	+ 53.7		4.0	42.2	D 8	9b	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ 指頭圧痕	工具ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	明灰褐			長石, 角閃石, 輝石			一条刻目突帯
87	340	SD 4	I	G		19.4	16.2	17.5	17.5	D 8	9	ハケメ, ナデ, 工具ナデ, 指ナデ 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, ハケメ	橙	橙			長石, 角閃石, 輝石			内面に「へろ記号様」の「メ」有
	341	SD 5	I	A	a	+ 58.0		10.9	36.5	C 8	9b	ハケメ, ナデ	工具ナデ, ナデ, ミガキ, 指ナデ 指頭圧痕	赤褐	赤褐			長石, 角閃石, 輝石			二条刻目突帯
	342	SD 5	I	A	d	9.2	8.3		12.2	C 9	9b	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 指頭圧痕	にぶい黄橙	明橙			長石, 角閃石			
	343	SD 5	I・II	C						C 8	9c	ナデ, ハケメ	ナデ	黄橙	明黄橙			長石, 角閃石, 輝石			
	344	SD 5	I・II	F		8.9	22.0	3.2	22.0	C 8	9b	工具ナデ, ナデ	工具ナデ, ナデ	暗橙	暗橙			長石, 角閃石, 石英			
	345	SD 5	I	A	a	+ 66.0	23.4		40.5	C 8	9b	ハケメ, ナデ	ハケメ, 工具ナデ, 指ナデ	明黄橙	明黄橙			角閃石 (少), 砂粒			一条刻目(M字状)
88	346	SD 6	I	A	a	72.8	25.2	4.8	44.4	C 8	9b	工具ナデ, ハケメ ハケメ後工具ナデ	工具ナデ, ハケメ, 指ナデ, 指頭圧痕	明黄橙	黄橙			長石, 角閃石, 輝石			頸部, 胴部一条突帯
	347	SD 6	I	A	b	25.4	9.7	2.8	19.6	C 7	9b	ハケメ, ナデ	ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	明橙	明橙			長石, 輝石			
	348	SD 6	I	A	c	26.6	11.7	3.2	22.3	C 8	9b	ナデ, ナデ後ミガキ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	明赤褐	明赤褐			角閃石, 雲母			黒斑
	349	SD 6	I	A			19.4			C 8	9	ミガキ, ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	赤橙	赤橙			長石, 角閃石, 輝石			
	350	SD 6	I	A		+ 14.3		4.8		C 8	9	ハケメ, ナデ	工具ナデ, ナデ	橙	橙			長石, 角閃石, 輝石			布目圧痕あり
	351	SD 6	I	A		+ 16.0		2.3	19.5	C 8	9b	工具ナデ	工具ナデ	橙	橙			角閃石, 輝石			
	352	SD 6	I・II	B		20.0	17.5	5.8	17.5	C 8	9	工具ナデ, ハケメ, ナデ	工具ナデ, 指ナデ, ハケメ	橙	橙			長石, 角閃石, 輝石			
	353	SD 6	I・II	B		19.2	17.2	8.0	17.2	C 8	9b	ミガキ, ハケメ, ナデ	ナデ	にぶい赤橙	にぶい赤橙			長石, 角閃石, 輝石			
	354	SD 6	I・II	C		+ 10.2				C 8	9	ナデ, 工具ナデ, ミガキ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	橙	橙			長石, 角閃石, 輝石			
	355	SD 6	I・II	D		12.1	13.0	9.5	13.0	C 8	9b	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	ナデ	橙	にぶい橙			長石, 角閃石, 輝石			炭化物付着
89	356	SD 6	I・II	C				4.0		C 8	9	丁寧な工具ナデ, ナデ	工具ナデ, ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	橙	橙			長石, 輝石			
	357	SD 6	I・II	F		7.5	25.4		25.4	C 8	9b	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙			輝石			
	358	SD 7	I	A	a	25.9	10.7	3.5	23.2	C 8	9b	ナデ, ハケメ	ナデ, 指頭圧痕	橙	明黄褐			長石, 角閃石, 輝石			一条刻目突帯
	359	SD 7	I	A	a	+ 61.3		4.3	37.2	C 8	9b	工具ナデ, ナデ, ミガキ	ナデ	橙	にぶい橙			長石, 角閃石, 輝石, 雲母			一条刻目突帯
	360	SD 7	I	A	d	+ 16.5	10.0		16.0	C 8	9c	ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	橙	橙			角閃石			
	361	SD 7	I	C		12.5	12.6	4.8	12.6	C 8	9c	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ	橙	明橙			長石, 角閃石, 輝石, 石英			
	362	SD 7	I	A	c	+ 12.0		3.6	18.0	C 8	9c	ミガキ, ナデ	ナデ	赤橙	暗黄橙			長石, 角閃石, 石英, 雲母			
	363	SD 7	I	A	b	+ 23.6			19.8	C 8	9c	工具ナデ, ハケメ	指頭圧痕, ナデ	橙	橙			長石, 角閃石, 輝石, 雲母			焼成前

第19表 遺物観察表(3)

種図	掲載	掲載 プロック	時期分類			大きさ (cm)				出土区	層	調整		色調			胎土			文様		穿孔有無	口縁有無	備考
			時期	器種 (大)	器種 (小)	器高	口径	底径	最大径			外面	内面	外面	内面	ペンガラ有無	金運母有無	その他	突帯	その他				
91	364	SD 7	I	A		22.8	10.0	13.5	16.4	C 8	9c	ナデ, ナデ後ハケメ, ミガキ 工具ナデ	ナデ, 指ナデ	赤橙	黄橙	-	-	角四石, 石英	変形M字突帯	沈線	○	○	透4カ所	
	365	SD 8	I	B	+	17.2	-	7.2	-	C 8	9c	ハケメ, ナデ, 指頭圧痕	ナデ	明黄橙	浅橙	-	-	角四石, 輝石			-	-		
	366	SD 8	I	C		9.2	10.2	2.0	10.2	C 8	9c	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	橙	明橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	367	SD 9	I	A	a	40.8	19.0	3.0	30.2	B 8	9b	ハケメ, 指ナデ, 指頭圧痕	ハケメ, 工具ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	暗橙	-	-	長石, 角四石, 輝石	一条突帯		○	○		
92	368	SD 9	I	B		-	-	8.5	-	B 8	9c	ハケメ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	369	SD 9	I	C	+	9.2	12.3	-	12.3	B 8	9c	ナデ後ハケメ, 指ナデ	指頭圧痕, ナデ	橙	にぶい橙	-	-	長石, 角四石			-	-	黒斑	
	370	SD 9	I	B		-	-	7.6	-	B 8	9c	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	371	SD 9	I	C		11.7	13.7	7.7	13.7	B 8	9c	ナデ, ハケメ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	黄橙	黄橙	-	-	角四石, 輝石, 石英			-	-		
93	372	SD 9	I	F		9.8	21.0	5.6	21.0	B 8	9c	ナデ, 工具ナデ, ミガキ後ナデ	ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	373	SD 9	I	F	+	8.4	34.1	-	34.1	B 8	9	ハケメ, ナデ	工具ナデ	橙	橙	-	-	長石, 輝石			-	-		
	374	SD10	I	A	b	29.3	-	-	23.2	A 7	9a	ハケメ, ハケメ後ナデ, 工具ナデ	ナデ, 指頭圧痕, 工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	角四石, 雲母			○	-		
	375	SD10	I	A	b	23.1	10.0	-	14.7	A 7	9c	工具ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	明褐	明褐	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-	黒斑	
	376	SD13	I	E		13.8	8.8	3.0	12.1	D 9	9b	ナデ	ナデ, 底部に棒状圧痕	明橙	明赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石, 石英			○	○	丹塗り	
94	377	SD17	I	B	+	19.4	16.4	-	16.4	C 9	9c	ナデ後ハケメ, ナデ, 指ナデ	ナデ後工具ナデ, ミガキ状ナデ 指ナデ	にぶい橙	明橙	-	-	角四石, 輝石			-	-		
	378	SD17	I	B		28.3	24.0	6.0	24.0	C 9	9	ケズリ後ナデ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	379	SD19	I	C		5.2	8.4	-	8.6	C 9	9b	ナデ, 指頭圧痕, 工具ナデ	ナデ, 指頭圧痕, 工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石, 角四石			-	-		
	380	SD19	I	A	d	15.0	10.0	-	17.2	C 9	9b	ミガキ, 頸部に沈線	ナデ, ケズリ, 指頭圧痕	明黄褐	明黄褐	-	-	角四石			-	-	黒斑, 頸部に横沈線	
95	381	SD20	I	A	a	35.1	12.6	5.3	24.5	B 8	9b	ナデ, 工具ナデ, ミガキ	ミガキ, 指頭圧痕	明黄褐	明赤褐	-	-	長石, 石英, 角四石, 雲母	浮文3ヶ所 (肩部)		○	○	黒斑	
	382	SD21	I	A		-	-	3.0	-	C 9	9c	ハケメ	ナデ, ケズリ, 指頭圧痕	淡黄	明黄褐	-	-	長石, 角四石			-	-		
	383	SD21	I	B		-	-	8.7	-	C 9	9	ハケメ, ナデ, 指頭圧痕, 指ナデ	ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	384	SD27	I	A	b	33.5	-	4.4	27.5	C10	9	ミガキ後工具ナデ ケズリ後工具ナデ	ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	明赤褐	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	385	SD27	I	C	+	6.0	7.8	-	7.8	C10	9	ナデ	ナデ	淡赤橙	明黄橙	-	-	長石, 角四石, 石英			-	-		
	386	SD27	I	C		5.3	9.3	2.0	9.3	C10	9	ナデ, 工具ナデ	ナデ	明橙	にぶい橙	-	-	長石, 角四石			-	-		
	387	SD27	I	E	+	12.5	-	2.5	10.9	C10	9	ナデ, ミガキ状ナデ, 工具ナデ	指ナデ, ナデ, 指頭圧痕	黄橙	橙	-	-	長石, 角四石			-	-		
	388	SD29	IV	A	a	41.0	-	4.5	33.0	B10	9	ヘラミガキ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, ミガキ	明赤橙	浅黄	-	○	長石, 角四石, 輝石	帯広突帯格子文		○	-	-	
96	389	SD29	II	A	d	10.3	-	2.1	16.2	B10	9c	工具ナデ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	にぶい褐	-	-	輝石			-	-		
	390	SD29	IV	G		17.5	21.0	15.0	21.0	B10	9	ミガキ	ミガキ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石, 角四石			-	-		
	391	SD29	IV	G		-	-	12.6	-	B10	9c	ミガキ	指ナデ, ナデ	橙	にぶい橙	-	-	輝石			-	-		
	392	SD29	IV	G		18.1	15.0 16.0	14.8	30.6	B10	9c	ナデ後ミガキ	ミガキ, ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	-			-	-		
97	393	SD29	IV	G		9.1	8.5	4.3	10.0	B10	9	ナデ後ミガキ	ミガキ, ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	角四石, 輝石			○	-		
	394	SD29	IV	G		10.3	9.1	5.5	10.5	B10	9	ナデ後ミガキ	ミガキ	明赤橙	明赤橙	-	-	角四石, 砂粒			○	○	392の器台に乗るもの	
	395	SD30	IV	G		-	-	24.2	-	B10	9	ミガキ	ミガキ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石, 角四石, 石英			-	-		
	396	SD30	I	A	c	16.6	-	4.6	16.4	B10	9	工具ナデ, ハケメ	指頭圧痕, ミガキ	淡赤橙	浅黄橙	-	-	角四石, 長石	一条刻目突帯 (付帯なし)		-	-	-	
	397	SD30	IV	G		19.9	15.0	4.7	15.0	B10	9	ナデ後丁寧ミガキ, ナデ	ナデ, 指ナデ	明赤橙	暗橙	-	-	長石, 角四石, 雲母			-	-		
	398	SD30	IV	H		4.5	12.4	-	12.6	B10	9	ナデ	ナデ	緑灰	灰オリーブ	-	-	砂粒密, 白粒			-	-		
98	399	SD31	IV	G		10.3	8.4	3.8	9.3	B10	9c	ミガキ	ミガキ, ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石, 角四石			○	-		
	400	SD32	II	A	b	13.3	9.2	-	-	B10	9	ナデ, ハケメ	指ナデ, ナデ	明赤褐	明黄褐	-	-	長石, 角四石			-	-	黒斑	
	401	SD32	IV	G		11.0	9.7	14.8	14.8	B10	9	ミガキ	ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	角四石, 輝石			○	○	394のはそがか乗る	
	402	SD34	I	A		-	-	5.0	-	B10	9	工具ナデ	工具ナデ	赤橙	赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石, 赤色粒子			-	-		
	403	SD34	I	A		-	-	-	-	B10	9	丁寧なハケメ	ナデ	橙	橙	-	○	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	404	SD34	IV	G		-	-	4.8	-	B10	9a	ミガキ	ナデ, 指ナデ	明赤橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			○	-		
	405	SD42	IV	A	b	-	-	-	14.7	C11	9	ミガキ	ハケメ	浅黄橙	灰黄褐	-	-	角四石, 輝石			-	-		
99	406	SD44	IV	A	a	63.0	25.2	6.5	44.4	B11	9	工具ナデ, ミガキ	工具ナデ, ミガキ	赤橙	赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石	一条帯広突帯		○	○	肩に穿孔4カ所	
	407	SD44	IV	H		11.8	9.4	-	12.0	B11	9	ナデ	ナデ	灰オリーブ	浅黄	-	-	砂粒密, 白粒			○	○		
	408	SD44	IV	H		10.7	9.2	-	11.6	B11	9	ヘラミガキ, ナデ	底タタキ	口縁, オリーブ 黄, 黄	浅黄	-	-	角四石	櫛描波状文		○	○		
	409	SD44	IV	G		-	-	4.2	11.0	B11	9	ナデ後工具ナデ, ミガキ	工具ナデ, 指ナデ	明赤橙	淡赤橙	-	-	長石, 角四石			-	-		
	410	SD47	I	A	b	19.5	9.6	-	17.2	D 8	9c	ハケメ, 指頭圧痕, ナデ	指頭圧痕, ナデ	橙	明黄橙	-	-	角四石, 輝石, 石英			-	-	黒斑	
100	411	SD47	II			-	-	-	-	D 8	9	ナデ	ナデ, 指ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	長石, 角四石			-	-		
	412	SD48	I	A	a	32.3	11.7	-	23.4	CD 8	9b	ナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	にぶい黄橙	-	-	長石, 石英, 雲母	一条刻目突帯	底部, 焼成前 穿孔	○	○		
	413	SD49	I	A	a	23.3	10.2	-	15.8	C 9	9c	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石, 赤色粒子	一条刻目突帯		-	-		
	414	SD49	I	A	c	18.5	-	2.9	18.7	C 8	9b	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 指ナデ	橙	橙	-	○	長石, 雲母			○	-		
	415	SD49	I	A	b	26.0	-	2.4	21.1	C 8	9	ナデ, 工具ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
101	416	SD49	II	B		18.0	17.6	6.4	17.6	C 9	9b	ナデ, 工具ナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-		
	417	SD49	II	B-C		-	-	3.7	-	C 8	9c	指ナデ, 指頭圧痕	ナデ	明黄橙	明橙	-	-	長石, 角四石			-	-		
	418	SD50	I	A	b	23.5	-	3.6	17.4	C 9	9	工具ナデ, 指ナデ, ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい橙	-	-	長石, 角四石, 輝石			-	-	黒斑	
	419	SD50	I	A	c	14.7	5.5	3.0	18.3	C 9	9b	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	明黄褐	-	○	角四石, 雲母	一条刻目突帯		-	-		
	420	SD50	I	A	d	12.0	-	-	-	C 9	9b	ナデ	ナデ	淡橙	明黄褐	-	-	長石			-	-		
	421	SD50	I	B	+	17.4	20.3	5.8	20.3	C 9	9b	ハケメ, 工具ナデ, ナデ	ハケメ, ナデ	明黄褐	明橙	-	○	角四石, 雲母			-	-		
	422	SD50	I	B		-	-	7.2	-	C 8	9	工具ナデ, ナデ	工具ナデ, ナデ, ハケメ	橙	橙	-	-	長石, 輝石			-	-		

第19表 遺物観察表(4)

種図	掲載	掲載	時期分類			大きさ (cm)				出土区	層	調整		色調				胎土		文様		穿孔有無	口縁有無	備考
			時期	器種(大)	器種(小)	器高	口径	底径	最大径			外面	内面	外面	内面	ベンガラ有無	金蓮母有無	その他	突帯	その他				
102	423	SD50	I	C		—	—	4.2	—	C9	9b	ナデ, ケズリ, 指ナデ	ナデ, 指ナデ	明橙	明橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	ケズリ痕あり	
	424	SD50	I	C		5.8	9.5	1.5	9.5	C9	9c	ハケメ, ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	にぶい黄橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—		
103	425	SD54	I	A	a	+	42.0	16.8	—	33.9	C9	9c	ハケメ, 工具ナデ	工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	明橙	明橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石, 石英	一条刻目突帯	絵画	—	—	胴部に突帯を中心とした刻み痕あり
	426	SD55	I	A		—	—	—	—	C9	9b	ハケメ, ナデ, 指ナデ	指ナデ, ナデ, 指頭圧痕	明黄褐	明黄褐	—	—	角閃石			—	—		
	427	SD55	I	C		—	—	—	—	C9	9b	指頭圧痕後ハケメ, ナデ	工具ナデ	明赤橙	明赤橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—		
104	428	SD58	I	A	a		25.8	11.3	3.4	19.1	B9	9b	ナデ, 工具ナデ後ナデ	ナデ, 工具ナデ後ナデ	橙, 黄橙	にぶい褐	—	—	長石, 角閃石, 雲母	一条刻目突帯		—	—	
	429	SD59	I・II	A	a	+	55.0	16.2	4.4	32.8	C9	9b	工具ナデ, ナデ	工具ナデ	黄橙	明橙	—	—	長石, 角閃石, 石英			—	—	
	430	SD59	II	B・C		—	—	6.1	—	C9	9b	工具ナデ, ナデ	工具ナデ	黄橙	明橙	—	—	長石, 角閃石, 石英			—	—		
	431	SD59	II	D		+	8.8	15.5	—	15.5	B9	9	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	—	—	長石, 角閃石			—	—	黒斑, 内面黒斑
	432	SD61	I・II	B		—	27.7	—	—	27.7	B9	9c	ナデ	ナデ	橙	黄橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	
105	433	SD61	II	D		—	—	6.8	—	B9	9c	ナデ, 指ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—		
	434	SD63	II	B		17.9	14.2	6.6	14.2	B9	9c	ナデ, ハケメ	ナデ, ハケメ	明橙	黄橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—		
	435	SD63		C		10.8	10.7	8.2	10.8	B9	9	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	—	—	角閃石, 輝石, 赤色粒子			—	—		
	436	SD66	II・III	A		12.6	8.5	—	10.3	C10	9	工具ナデ, ハケメ	ナデ, 指頭圧痕, 工具ナデ, 指ナデ	明橙	淡褐	—	—	長石, 角閃石			—	—		
	437	SD67	I	A	c	23.8	10.8	5.2	15.0	C10	9	ナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	赤褐	赤褐	—	—	長石, 角閃石, 輝石, 石英			—	—		
106	438	SD67	I	A		+	12.3	—	4.0	16.0	C10	9	ナデ, ハケメ, 指ナデ	ナデ, 工具ナデ	にぶい赤褐	明橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石, 石英			—	—	
	439	A	I	A	a		41.9	14.2	—	30.4	D8	9b	工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	明赤橙	明黄褐	—	—	長石, 角閃石			○	○	
	440	A	I	A	b	+	19.0	—	2.4	17.5	B8	9c	ナデ, ケズリ状工具ナデ	ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	明赤褐	—	—	長石, 石英			—	—	黒斑
	441	A	I	A	a	+	23.2	—	—	22.2	D7	9b	ハケメ, ナデ, ナデ後ハケメ	指ナデ, 工具ナデ	明黄褐	明橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石	二条刻目突帯		○	—	
	442	A	I	A	a	+	29.4	—	—	21.2	D8	9b	ナデ, ナデ後ミガキ, 工具ナデ	ナデ (剥離激しい)	明橙	明橙	—	—	長石, 角閃石	一条刻目突帯	絵画	○	—	
107	443	A	I	A	b	+	28.4	—	—	20.1	D8	9b	工具ナデ, 指ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	明赤橙	にぶい褐	—	—	長石, 角閃石			○	—	黒斑
	444	A	I	A	c	+	37.6	—	—	25.6	D8	9a	工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ, 指頭圧痕	淡黄橙	明橙	—	—	長石, 角閃石	一条刻目突帯		○	—	胴部に黒斑2カ所
	445	A	I	A	b	+	22.5	—	2.8	21.5	D8	9b	ナデ	ナデ, 指ナデ	橙	にぶい橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	
	446	A	I	A	b		12.0	5.0	4.8	9.5	D8	9b	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	橙	橙	—	—	長石, 角閃石			—	—	
	447	A	I	C・D		—	—	11.0	—	—	D8	9c	ナデ後ミガキ, ナデ	ナデ	黄橙	黄褐	—	—	長石, 角閃石, 石英			—	—	黒斑
108	448	A	I	C		20.9	26.3	12.6	26.3	D8	9c	ハケメ, ナデ	ナデ, 指ナデ, ミガキ状ナデ, ハケメ	明赤橙	明赤橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯		—	—		
	449	A	I	F		8.5	45.0	14.5	45.0	D7	9b	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	—	—	角閃石, 砂粒			—	—	瀬戸内系	
	450	B	I	A	b	23.2	11.1	1.4	18.5	B8	9c	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ	橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—		
	451	B	I	A	b		—	2.4	19.8	B8	9c	ハケメ, ナデ	ナデ, 指ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	黒斑	
	452	B	I	C		8.8	12.4	8.8	12.4	B8	9c	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	手捏土器のよう	
109	453	B	I	D		15.0	18.6	11.0	18.6	B8	9	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	橙	橙	—	○	長石, 輝石			○	○		
	454	C	I	A	b	30.4	12.0	4.8	20.8	B8	9c	ハケメ, ナデ	ハケメ, 丁寧なナデ	明赤橙	明黄褐	—	—	長石, 角閃石, 輝石					底部に植物痕らしきもの	
	455	C	I	A		—	22.5	—	—	B8	9	ハケメ, ナデ	ナデ	にぶい赤褐	赤橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	黒斑	
	456	C	I	A		—	—	4.7	—	B8	9c	ハケメ	ナデ	橙	明赤褐	—	—	長石, 角閃石, 輝石	線刻		—	—	蓋として取用の可能性あり	
	457	C	I	A		—	—	—	—	B8	9c	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	内面剥離	にぶい橙	黄橙	—	—	長石			—	—	白色粉付着	
110	458	D	I・II	A	a	68.9	23.0	5.0	39.2	B8	9c	丁寧なハケメ, ナデ	丁寧なハケメ, ナデ	にぶい黄橙	暗黄橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石	一条突帯		○	—		
	459	D	I・II	A	a	64.5	16.8	2.6	36.7	B8	9c	ハケメ, ミガキ, 工具ナデ, 指ナデ	ハケメ, 工具ナデ, 指ナデ	にぶい橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石	一条刻目突帯	線刻あり	—	—	丹あり	
	460	D	I・II	A	a	—	—	5.0	39.3	B8	9	ハケメ後ナデ	ハケメ, ナデ	にぶい橙	にぶい橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石, 赤色粒子	一条M字状突帯		—	—		
	461	D	I・II	A		—	—	8.0	—	B9	9c	工具ナデ	工具ナデ	明橙	明橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—		
	462	D	I・II	A	a	+	32.3	—	1.9	28.0	B8	9b	ハケメ, ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指ナデ, ハケメ	にぶい橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石	一条突帯	絵画 (底部, 肩部)	○	—	黒斑, 肩部に線刻らしきものあり
111	463	D	I・II	A	b	30.3	12.3	5.0	20.7	B8	9c	ハケメ, 工具ナデ, ナデ, 指ナデ	工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	赤褐	—	—	雲母			—	—	黒斑	
	464	D	I・II	A	a	36.2	16.5	—	22.6	B8	9b	ナデ	ナデ	橙	明褐	—	—	長石, 石英, 輝石	M字状突帯		○	○		
	465	D	I・II	A	b	+	25.4	—	—	23.7	B8	9b	ハケメ	工具ナデ, 指頭圧痕	黄橙	黄橙	—	—	長石, 石英, 雲母			—	—	
	466	D	I・II	A	b	+	6.7	—	—	17.9	B8	9b	ハケメ, ミガキ後ナデ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	黒斑
	467	D	I・II	B・C		—	—	9.7	—	B9	9	工具ナデ	ナデ	橙	橙	—	—	角閃石, 輝石, 長石			—	—	部分的に丹あり	
	468	D	I・II	B・C		—	—	8.0	—	B8	9a	ハケメ, ナデ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—		
	469	D	I・II	B・C		—	—	6.2	—	B8	9	指ナデ, ナデ	指頭圧痕, ナデ, 工具ナデ	黄橙	橙	—	—	角閃石, 輝石			—	—		
	470	D	I・II	B		+	16.5	—	5.4	14.0	B8	9b	工具ナデ, ナデ	工具ナデ, ナデ	明赤橙	明橙	—	—	角閃石, 石英			—	—	
112	471	D	I・II	B		+	12.2	—	6.3	—	B8	9b	工具ナデ, 指頭圧痕	ナデ	明黄褐	淡橙	—	—	長石, 角閃石, 石英, 雲母			—	—	
	472	D	I・II	B		+	20.0	21.0	—	21.0	B8	9	ハケメ, ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	ハケメ, ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	
	473	D	I・II	C		+	7.8	—	—	B8	9	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	—	—	長石, 輝石			—	—		
	474	D	I・II	C		+	7.5	10.5	—	—	B8	9c	ナデ, 工具ナデ	ナデ, ハケメ	暗黄橙	黄橙	—	—	角閃石			—	—	
	475	D	I・II	D		—	—	11.1	—	B8	9	ミガキ後ハケメ	指ナデ, ハケメ	橙	橙	—	—	長石, 輝石			○	—	透あり	
113	476	D	I・II	C		+	8.4	—	1.8	—	B8	9b	ナデ, 工具ナデ	工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			—	—	
	477	E	I・II	A	a	78.4	26.8	8.0	43.0	B7	9a	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	明黄橙	明橙	—	—	長石, 角閃石	一条突帯		○	○		
	478	E	I・II	A	a	68.0	24.6	2.3	42.5	B7	9a	ハケメ, 工具ナデ	ナデ, 指ナデ, ハケメ, 工具ナデ	淡明黄橙	明黄橙	—	—	長石, 角閃石	頸部, 胴部	一条突帯	○	○	丹塗痕あり	
	479	E	I・II	A		—	—	4.3	—	B7	9c	ナデ後ハケメ	ハケメ	橙	黄橙	—	—	石英, 砂粒			—	—		
	480	E	I・II	A	a	+	70.6	25.0	7.8	44.0	B7	9a	ナデ, 工具ナデ, ハケメ	指頭圧痕, ミガキ, ナデ, 工具ナデ	明黄橙	明黄橙	—	—	角閃石, 輝石, 長石	一条刻目M字突帯		○	—	突帯→M字突帯のち刻目施す
114	481	E	I・II	A	b	53.3	16.6	—	35.7	B7	9	ハケメ, 工具ナデ, 指頭圧痕	ハケメ, ヘラナデ, 工具ナデ, 指ナデ	明赤橙	明赤橙	—	—	長石, 角閃石, 輝石			○	○		

第19表 遺物観察表(5)

種別	No.	掲載	掲載	時期	器種	器種	大きさ (cm)				出土区	層	調整		色調		胎土			文様		穿孔有無	口縁有無	備考	
							器高	口径	底径	最大径			外面	内面	外面	内面	ベンガラ有無	金運母有無	その他	突帯	その他				
							調整	調整	調整	調整			調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整				
114	482	E	I・II	A	c	+	23.5	-	2.3	16.3	B7	9b	ハケメ、ハケメ後ナデ	工具ナデ、指ナデ、ナデ、指頭圧痕	橙、明黄橙	浅黄橙	-	-	長石、角四石	二条刻目突帯		○	-		
	483	E	I・II	A	b	+	13.0	-	-	-	B7	9b	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石、石英			○	-		
	484	E	I・II	B			33.0	27.6	9.9	26.0	B7	9	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	○	布目圧痕	
	485	E	I・II	C			7.5	8.4	3.4	8.7	B10	9	ハケメ後ナデ	ナデ	明橙	明橙	-	-	長石、角四石			-	○		
	486	E	I・II	B			-	-	10.0	-	B7	9	ハケメ、ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-		
	487	E	I・II	D			+	11.0	16.8	-	16.8	B7	9b	ナデ、ハケメ	ナデ	明橙	明橙	-	-	角四石、輝石			-	○	透は5ヶ所(正五角形状)
488	E	I・II	D			-	-	-	-	B7	9c	ナデ	ヘラミガキ	明橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石、石英			-	-			
115	489	F	I	A	a		90.3	49.9	5.8	59.0	A9	9b	ハケメ、ナデ、工具ナデ	ハケメ、ナデ、指ナデ、工具ナデ	橙、黄橙	橙	-	-	長石、輝石	一条刻目突帯	口唇部に刻目2ヶ所	○	○	内部水溜り? 痕	
	490	F	I	A			-	14.0	-	-	A9	9c	ハケメ、ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	角四石			-	○		
	491	F	I	A	a	+	34.0	-	5.1	22.2	A8	9a	ハケメ、工具ナデ、ナデ	ハケメ、ナデ、指ナデ	橙	にぶい黄橙	-	-	長石、角四石、石英、雲母	一条刻目突帯		-	-		
	492	F	I	A	b	+	21.6	-	3.7	18.0	A9	9c	ハケメ、ナデ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕	明黄橙	淡明橙	-	-	角四石、長石			-	-		
	493	F	I	A	b	+	21.5	-	-	16.4	A8	9c	荒いナデ、ミガキ	指ナデ、工具ナデ	明橙	明橙	-	-	長石、角四石、石英			-	-		
	494	F	I	A	b		19.0	8.8	3.0	13.0	A9	9c	工具ナデ、ナデ	ナデ、指ナデ	赤褐	明黄橙	-	-	長石、角四石、輝石			2カ所	○	不安定平底。手捏土器のよう	
116	495	F	I	A	a		73.0	23.8	5.0	48.0	A8	9a	ハケメ、ナデ	ハケメ、工具ナデ、指ナデ、指頭圧痕	明赤褐	明赤褐	-	-	長石、角四石、雲母、石英	一条突帯		-	○		
	496	F	II	A	a		66.3	19.5	2.5	38.0	A8	9a	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、指頭圧痕	橙	明黄橙	-	-	長石、角四石、輝石	一条突帯		2カ所	○		
	497	F	I・II	A	a		25.4	13.0	2.9	18.7	A8	9a	ハケメ、ナデ、工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	にぶい橙	にぶい褐	-	-	長石、角四石、雲母	一条刻目突帯		-	○		
	498	F	I	A	b		12.2	8.8	3.0	10.2	B11	9	ナデ、工具ナデ	ナデ、指頭圧痕	にぶい赤橙	にぶい赤橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-		
	499	F	I	A	b		13.9	6.4	-	10.3	A8	9c	ハケメ、ナデ	ナデ、工具ナデ、ヘラナデ	明橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、石英			-	○		
	500	F	II	A	a		69.9	45.0	6.3	41.5	A9	9c	ナデ、ハケメ後ミガキ	工具ナデ、ハケメ、指頭圧痕	にぶい橙	明黄橙	-	-	長石、角四石、石英	一条M字突帯		○	○	丹塗り痕	
117	501	F	I	A	a		72.0	24.4	6.0	44.1	A8	9	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石	一条突帯		○	○	黒斑	
	502	F	I	A	c	+	17.8	-	3.5	-	A9	9	ハケメ、ミガキ、ナデ、工具ナデ	ナデ、指頭圧痕	暗赤褐	にぶい黄橙	-	-	長石、角四石	二条刻目突帯		-	-		
	503	F	I	A	b	+	15.3	-	-	14.4	B9	9c	工具ナデ、指ナデ	指頭圧痕、ナデ	淡黄橙	赤橙	-	-	角四石、石英			-	-		
	504	F	I	A	a		-	12.9	-	29.2	A8	9a	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい橙	橙	-	-	角四石、輝石	二条刻目突帯	浮文剥落痕?	-	○		
118	505	F	I	A	a	+	44.0	-	-	39.0	A8	9a	ナデ後ミガキ、ナデ	指ナデ、工具ナデ	にぶい橙	明橙	-	-	長石、角四石、輝石、石英、雲母	一条刻目突帯		2カ所	-		丹塗り痕あり
	506	F	I	A	c		23.0	12.9	-	15.7	A8	9c	ハケメ、工具ナデ	指頭圧痕、工具ナデ、ハケメ	橙	橙	-	-	角四石、輝石			○	-		
	507	F	I	A		+	12.0	-	0.7	17.6	A8	9a	丁寧なナデ後指ナデ、工具ナデ	工具ナデ、ナデ、指ナデ、指頭圧痕	明黄橙	明黄褐	-	-	長石、角四石、輝石			-	-	底に円盤状突起物	
119	508	F	I	A	b		-	-	-	-	B7	9a	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-		
	509	F	I	A	b		-	-	3.0	-	B7	9c	ミガキ状ナデ、ナデ	工具ナデ、ミガキ、指ナデ	赤橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-		
	510	F	I	A	c		24.2	8.3	-	15.6	A8	9c	ミガキ、ナデ、ハケメ、板ナデ	ナデ、指ナデ、板ナデ	明赤橙	明橙	-	-	角四石、石英		重丸文	○	○	兔台式土器、黒斑	
120	511	F	I	A	c		32.0	12.6	-	21.2	A7	9c	ハケメ、ナデ、ハケメ後ナデ	ナデ、指頭圧痕	明赤橙	明黄褐	-	-	長石、角四石			-	○		
	512	F	I	A	c		26.2	11.5	3.0	21.2	A8	9a	ナデ、ハケメ、ハケメ後ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、雲母	M字状突帯		○	○		
	513	F	I	A	d		23.9	9.7	-	15.7	A9	9c	ナデ、工具ナデ、ケズリ、指頭圧痕	ナデ、指ナデ、工具ナデ	明褐	明褐	-	-	長石、角四石			-	○		
	514	F	I	A	c		22.4	11.2	3.8	19.5	A9	9c	ナデ、ハケメ後ナデ、ハケメ、ミガキ	ナデ、指ナデ、ハケメ	にぶい褐	にぶい褐	-	-	角四石、輝石、雲母	二条三角突帯		○	○		
	515	F	I	A	a	+	35.4	-	2.0	28.3	A8	9b	ハケメ、ナデ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕	赤褐	暗赤橙	-	-	長石、角四石	一条突帯		-	-		
	516	F	I	A	a	+	26.5	-	4.0	27.5	A9	9c	ハケメ、ナデ、ケズリ状ナデ	ハケメ、指ナデ	赤橙	赤橙	-	○	雲母、長石	一条刻目突帯		-	-		
121	517	F	II	B		21.6	20.1	8.2	20.1	A8	9a	ハケメ、工具ナデ	工具ナデ	明橙	明橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-			
	518	F	II	B		19.7	20.8	8.2	20.8	A8	9c	ナデ後ハケメ、ナデ	ナデ、ハケメ	明橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、石英			-	○			
	519	F	II	B		16.8	16.2	6.8	16.2	A8	9b	ハケメ、指ナデ	ハケメ、工具ナデ、ナデ	にぶい赤褐	橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	○			
	520	F	II	B		+	25.0	23.8	-	23.8	A8	9c	ハケメ、工具ナデ、ケズリ	工具ナデ、指ナデ	明黄橙	明黄橙	-	-	長石、角四石、石英			-	○		
122	521	F	II	B		-	24.0	-	24.0	A9	9c	ハケメ、ナデ、工具ナデ	ハケメ、ナデ、工具ナデ	赤橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石、石英			-	○			
	522	F	II	B		+	14.4	14.5	-	14.5	B7	9c	ナデ、ハケメ、指頭圧痕	ナデ	明橙	明橙	-	-	長石、角四石、輝石、石英			-	○	内面底部に黒斑	
	523	F	II	B		-	-	9.0	-	-	A9	9b	ナデ、指ナデ、工具ナデ	ナデ、指ナデ、工具ナデ	黄橙	にぶい褐	-	-	長石、角四石、輝石			-	-		
	524	F	II	B		+	20.7	19.2	-	19.2	A8	9b	工具ナデ、ナデ	ハケメ、工具ナデ	明黄褐	橙	-	-	長石、角四石、輝石、石英			-	○	黒斑	
	525	F	II	B		+	11.8	-	7.8	-	A9	9	ハケメ、ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-		
	526	F	I・II	C			10.5	12.3	6.0	12.3	A9	9c	指ナデ、ナデ	工具ナデ	赤褐	黄橙	-	-	長石、角四石、輝石、石英			-	○		
	527	F	I・II	C			8.0	9.9	3.8	9.9	A8	9c	ハケメ、指頭圧痕	ハケメ、工具ナデ	黄褐	黄褐	-	-	角四石、輝石			-	-		
	528	F	I・II	C			9.1	10.5	5.3	10.5	B8	9b	ナデ、指ナデ	ナデ、工具ナデ	淡赤橙	淡赤橙	-	-	長石、角四石			-	○		
123	529	F	I・II	C			7.8	8.0	3.6	8.0	A8	9a	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-	ミニチュア土器	
	530	F	I	D			14.1	30.5	-	30.5	A8	9b	ナデ、ミガキ、ハケメ、指頭圧痕	ナデ、ミガキ、ナデ	橙	にぶい褐	-	-	長石、石英、雲母			-	-		
	531	F	II・III	D			-	-	-	-	B8	9c	工具ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	明赤橙	明赤橙	-	-	角四石、石英			○	-	透2カ所	
	532	F	II・III	D		+	7.0	-	14.0	-	A8	9a	ハケメ、ナデ	ナデ	橙	橙	-	-	輝石			-	-	透4カ所	
	533	F	II・III	D			14.9	16.4	12.7	16.4	A8	9	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、工具ナデ	にぶい橙	橙	-	-	角四石、輝石		線刻	-	○	透4カ所	
	534	F	II・III	D			-	-	11.0	-	B8	9	工具ナデ	工具ナデ	橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-	透4カ所	
	535	F	II・III	D		+	14.4	19.0	-	19.0	A8	9c	ナデ、ハケメ、ミガキ	ナデ、ハケメ	黄褐	黄橙	-	-	長石、角四石、雲母			-	-	透4カ所	
	536	F	II・III	D		+	7.9	18.0	-	18.0	A9	9	ナデ、ハケメ	ナデ	明赤橙	明橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-		
	537	F	II・III	D			16.0	13.8	12.2	13.8	A8	9b	ハケメ、工具ナデ、ナデ、指ナデ、ミガキ	ナデ、指頭圧痕	橙	橙	-	-	角四石、長石			-	○	透	
	538	F	I	F			-	32.6	-	32.6	A8	9c	ナデ、工具ナデ、指ナデ、指頭圧痕	ナデ、丁寧な工具ナデ	橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	○	高回転用か?	
539	F	I	F			-	-	-	-	A8	9a	ハケメ、工具ナデ	指ナデ	明赤橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石			-	-			
124	540	G	I	A	a		72.5	25.4	9.4	48.3	B10	9b	ハケメ、ナデ、工具ナデ、指ナデ	ハケメ、工具ナデ、ナデ、指頭圧痕	黄橙	淡黄橙	-	○	長石、角四石、輝石	一条突帯		-	○	ベンガラ頸部に残	

第19表 遺物観察表(6)

挿図 No	掲載 No	掲載 プロ ツク	時期分類		大きさ (cm)				出土区	層	調整		色調			胎土		文様		穿孔 有無	口縁 有無	備考	
			時期	器種 (大)	器種 (小)	器高	口径	底径			最大径	外面	内面	外面	内面	ペンガ ラ有無	金運母 有無	その他	突帯				その他
124	541	G	I	A	b	+	27.4	-	2.4	20.7	B9	9b	ハケメ、ミガキ状ナデ	ナデ、指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	-	-	角四石、赤色粒子	浮文	○	-	丹塗痕あり
	542	G	I	B		+	20.0	-	8.4	-	C11	9	ハケメ、ナデ、指ナデ	板ナデ、ナデ	黄橙	黄橙	-	-	角四石、石英		-	-	
	543	G	II	A	a		70.0	22.7	7.0	44.0	C9	9c	指ナデ、工具ナデ、ハケメ状ナデ ミガキ、指頭圧痕	板ナデ、工具ナデ、指頭圧痕、ハケメ ケズリ	浅黄橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石、 雲母	一条刻目突帯	-	○	黒斑
125	544	H	I	A	a		69.5	-	9.8	50.5	D9	9b	ナデ、工具ナデ、指頭圧痕	ケズリ後ナデ、ハケメ状ナデ 指頭圧痕	にぶい橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石、 雲母		○	○	
	545	H	III	A	a		49.5	14.0	5.5	37.0	D9	9b	工具ナデ	指ナデ、工具ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石、角四石、輝石	頭・一条刻目突 帯	-	○	
	546	H	III	A	a		47.7	16.2	2.1	38.3	D9	9a	ナデ、工具ナデ	工具ナデ、指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石	四条刻目突帯	○	○	
	547	H	I	A	a		62.5	22.0	-	46.9	D9	9	ナデ、ミガキ	ナデ、工具ナデ、指頭圧痕	赤橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石	一条刻目突帯	-	○	黒斑
548	H	II	A	b		49.6	21.0	7.5	37.5	D9	9	ナデ、指頭圧痕	ナデ	にぶい赤橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石	浮文(大、小)	-	○	黒斑	
126	549	H	IV	A	a		53.9	18.9	7.0	43.0	D9	9b	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	赤褐	赤褐	-	-	長石、角四石、石英、 雲母	帯広突帯格子文	○	○	
	550	H	I	B-C			13.3	15.0	4.0	15.0	D10	9	指ナデ、ナデ、ハケメ	指頭圧痕、指ナデ、工具ナデ	明黄橙	明橙	-	-	長石、角四石、輝石		○	○	
	551	H	I	B-C		+	10.5	-	8.0	-	D9	9c	ナデ、工具ナデ、指頭圧痕	ハケメ、ナデ、工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	-	
	552	H	I	B-C			-	-	-	-	D9	9	ナデ、ハケメ	ナデ	橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	-	
	553	H	I	G			9.3	12.5	7.9	12.5	D10	9	ナデ、工具ナデ、指頭圧痕	指頭圧痕、工具ナデ、ナデ、ミガキ	明黄橙	明黄橙	-	-	長石、角四石		-	○	
	554	H	IV	E			10.0	9.7	-	10.0	D9	表採	工具ナデ、指ナデ	ナデ	浅黄橙、明 赤褐	明赤褐	-	-	長石、角四石、石英		○	○	
	555	H	IV	E			8.2	6.3	1.5	8.0	D9	掘乱	ナデ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕	にぶい赤橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	○	
	556	I	I	A	a		52.3	21.6	6.0	34.9	C9	9b	ナデ、工具ナデ、指ナデ	ナデ、指頭圧痕、ハケメ	赤橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石	一条突帯	○	○	
127	557	I	I	A			-	-	7.6	-	C10	9c	ハケメ、工具ナデ、指頭圧痕	工具ナデ、指頭圧痕	明橙	明橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	-	底部に棒圧痕の ようなものあり
	558	I	II・III	A	a		50.5	17.7	7.0	59.0	C10	9b	板ナデ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	明赤褐	明赤褐	-	-	長石、角四石	二条刻目突帯	○	○	
	559	I	I	A	a	+	24.7	19.6	-	-	C10	9c	工具ナデ、ナデ、指ナデ	工具ナデ、指ナデ	明橙	明橙	-	-	長石、角四石、輝石	口唇、波状沈線	-	○	
	560	I	III・IV	A	a	+	47.0	-	10.8	38.0	C10	9	ナデ、ミガキ、ヘラミガキ後ミガキ	工具ナデ	明黄橙	橙	-	-	角四石、石英、雲母	帯広突帯格子文	○	-	突帯刻みは布目 状痕有、黒斑
	561	I	I	A			-	-	-	-	C10	9b	ナデ、工具ナデ	工具ナデ	橙	橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	-	
128	562	I	I	A	b		38.5	16.3	-	34.8	C10	9b	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	赤橙	にぶい黄褐	-	-	長石、角四石、石英、 雲母		-	○	
	563	I	I	A			-	-	2.1	-	D10	9	ナデ	ナデ、工具ナデ、指ナデ、指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石、輝石		-	-	
	564	I	I	B-C			-	-	6.3	-	C10	9	指ナデ、ナデ	ナデ	黄橙	橙	-	-	長石、角四石		-	-	
	565	I	I	C			7.4	8.7	3.5	8.7	C10	9	ナデ及指ナデ後ハケメ	指頭圧痕、ナデ、工具ナデ	明橙	明橙、黄褐	-	-	長石、角四石		-	○	黒斑
	566	I	III・IV	E-G		+	6.0	9.6	-	-	C10	9c	ミガキ	ミガキ、ナデ	橙	にぶい橙	-	-	角四石		-	○	丹塗り痕
	567	I	III・IV	E		+	6.0	-	5.0	8.1	C9	9b	ナデ	ナデ	淡橙	明橙	-	-	角四石、輝石		-	-	
129	568	J	IV	A	a		53.7	18.4	5.6	38.8	C10	9b	工具ナデ、指ナデ、指頭圧痕	ナデ	明黄褐	暗赤褐	-	-	長石、角四石、輝石	帯広突帯格子文	-	○	
	569	J	IV	A	a	+	54.5	20.5	-	40.9	B10	9a	ヘラミガキ	ミガキ	にぶい橙	明赤橙	-	-	長石、角四石、輝石	頭・一条刻目突帯	○	○	
	570	J	IV	A	b		34.1	15.2	3.3	30.2	C10	9b	工具ナデ	ナデ、工具ナデ	赤橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石	貼付突帯	-	○	
	571	J	IV	A	b		39.9	13.8	4.0	30.1	B10	9c	工具ナデ、ケズリ、指ナデ、ナデ	工具ナデ、指ナデ	赤橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石		○	○	
130	572	J	IV	A	a		43.3	15.2	4.3	31.2	C10	9	ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、ナデ	明赤褐	明黄褐	-	-	長石、角四石	頭・一条突帯	○	○	
	573	J	IV	A	b	+	46.3	-	1.7	41.3	C10	9b	ナデ	ナデ、指頭圧痕	明赤橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	2ヶ所	
	574	J	IV	A	b	+	25.6	-	-	28.0	C9	9a	工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	淡赤橙	赤褐	-	-	長石、角四石、輝石		-	-	
	575	J	IV	A	c		23.5	10.3	2.0	15.6	B10	9a	ナデ	ナデ、ハケメ、指ナデ、指頭圧痕	明赤橙	明橙	-	-	長石、角四石、石英		-	○	黒斑
	576	J	IV	A	b		14.9	7.4	1.8	11.7	B10	9	ハケメ、ナデ、ハケメ後ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	-	-	長石、角四石		-	○	
	577	J	IV	B			25.6	19.9	8.6	19.9	B10	9	ハケメ、工具ナデ、指ナデ	ハケメ、工具ナデ	明黄橙	明黄橙	-	-	角四石		-	○	
131	578	J	IV	G			13.1	17.3	12.2	17.3	B10	9	ナデ	ナデ、ミガキ	明赤橙	淡灰赤	-	-	長石、角四石		-	○	
	579	J	IV	G		+	9.0	-	13.8	-	C10	掘乱	工具ナデ、ナデ	ナデ	赤橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石、 赤色粒子		-	-	丹塗り痕
	580	J	IV	G			7.4	-	11.6	-	B10	9	ナデ、ケズリ	工具ナデ、ナデ	明赤橙	浅赤橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	-	
	581	J	IV	D		+	8.4	-	14.2	-	B10	9	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	-	-	長石、角四石		-	-	
	582	J	IV	G			-	-	14.3	-	C10	9b	ナデ後ミガキ、丁寧なナデ	指ナデ、ナデ	明赤橙	橙	-	-	長石、角四石、砂粒		-	-	
	583	J	IV	G			-	-	6.8	-	B10	9	ナデ、ミガキ	ナデ	橙	にぶい橙	-	-	長石、輝石		2カ所	-	丹塗痕あり
	584	J	IV	G			17.0	12.8	5.3	15.3	C10	9	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、指頭圧痕、指ナデ ナデ	明赤橙	淡黄橙	-	-	角四石、輝石		-	○	
	585	J	IV	G			13.6	11.3	6.5	13.1	B10	9	ミガキ、ナデ	ミガキ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石、角四石		○	○	
	586	J	IV	G		+	6.9	13.2	-	-	B10	9	ミガキ	ミガキ	赤	赤橙	-	-	長石		-	○	丹塗り
	587	J	IV	G		+	9.9	-	6.6	13.0	C10	9	ナデ後ミガキ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕	明赤橙	黄橙	-	-	角四石、砂粒		-	-	
133	588	J	IV	G			8.5	7.3	3.8	7.6	B10	9c	ナデ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕	橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	○	部分的に丹
	589	J	IV	G			-	7.3	-	-	C10	9	ナデ後ミガキ	ナデ、ミガキ	明橙	明橙	-	-	長石、角四石		-	○	
	590	J	IV	H			11.9	10.0	-	12.5	B10	9	ナデ	ナデ	緑灰	緑灰	-	-	角四石、砂粒	櫛描状波状文	-	○	
	591	K	IV	A	a		59.5	21.3	7.0	42.5	B10	9	ミガキ、ナデ	ミガキ後ナデ	明橙	明赤褐	-	-	角四石、石英、輝石	頭・一条刻目突帯	○	○	
	592	K	IV	A			-	-	4.5	-	B10	9	ハケメ、工具ナデ、ナデ	-	にぶい黄橙	にぶい橙	-	-	長石、角四石、輝石、 角四石、石英、輝石、 長石	帯広突帯格子文	○	-	部分的に丹
	593	K	IV	A	a	+	45.5	-	-	36.0	B10	9	ミガキ状ナデ、工具ナデ	工具ナデ	赤橙	明赤褐	-	-	長石、角四石、輝石	頭・一条刻目突帯	-	○	
	594	K	IV	A	a		-	23.0	-	45.0	B10	9b	ミガキ	ミガキ	橙	赤橙	-	-	長石、角四石、輝石	頭・一条刻目突帯	-	○	
	595	K	IV	A	a		-	-	-	37.5	B10	9a	丁寧な工具ナデ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕	明黄褐	明橙	-	-	長石、角四石、雲母、 輝石	帯広貼付突帯	-	-	丹塗痕あり
	596	K	IV	A	b		32.1	12.4	3.0	20.4	B11	9	ミガキ後ナデ、指ナデ、工具ナデ ケズリ状ナデ	ミガキ後ナデ、指ナデ、工具ナデ	明赤橙	明褐	-	-	長石、角四石、輝石、 石英		-	○	
	597	K	IV	A	b		-	9.0	-	13.8	B10	9	ナデ、ハケ状ミガキ	ナデ、指頭圧痕	明黄褐	明橙	-	-	長石、角四石		-	○	
	598	K	IV	A	b	+	25.2	-	4.8	20.2	B10	9	ハケメ、ミガキ	指ナデ、工具ナデ、指頭圧痕	明赤橙	明黄褐	-	-	長石、角四石、輝石	底部ヘラ記号 「x」	-	-	
599	K	IV	A			-	-	2.8	13.4	B10	9	ナデ、工具ナデ	工具ナデ、指頭圧痕	黄橙	明橙	-	-	長石、角四石、輝石		-	-	黒斑	

第19表 遺物観察表(7)

挿図 No	掲載 No	掲載 フロッ ク	時期分類			大きさ (cm)				出土区	層	調整		色調		胎土			文様		穿孔 有無	口縁 有無	備考		
			時期	器種 (大)	器種 (小)	器高	口径	底径	最大径			外面	内面	外面	内面	ベング ラ有無	金運母 有無	その他		突帯				その他	
134	600	K	IV	A	d	+	11.0	-	-	15.5	B10	9b	ミガキ、ナデ、丁寧な工具ナデ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕	黄橙	にぶい黄橙	-	-	長石、輝石			-	-	黒斑	
	601	K	IV	C			15.0	10.9	9.7	11.0	B9	9	ナデ、工具ナデ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕	橙	にぶい橙	-	-	角閃石、輝石			-	-	台付ツボ	
	602	K	IV	C			10.8	10.7	8.2	10.7	B9	9	ナデ、工具ナデ、指ナデ	ナデ、工具ナデ	橙	橙	-	-	角閃石、輝石			-	-		
	603	K	IV	C			-	-	5.3	-	B10	9	ナデ、指ナデ	工具ナデ、ナデ	淡橙	橙	-	-	長石、角閃石			-	-		
	604	K	IV	C			7.9	8.3	3.0	8.9	B10	9	ナデ、工具ナデ、指頭圧痕	ナデ、工具ナデ、指頭圧痕	暗橙	明橙褐	-	-	長石、角閃石			-	-	手捏土器のよう	
135	605	K	IV	D			14.5	15.9	13.2	15.9	B10	9	脚部ミガキ、ナデ	ナデ	赤褐	黒	-	-	角閃石、輝石			-	-	透4カ所	
	606	K	IV	D			-	-	10.5	-	B10	9	ナデ	工具ナデ	明黄橙	明黄褐	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	坯部内面にミガキ	
	607	K	IV	D			-	-	10.5	-	B10	9	ミガキ	ナデ	明赤橙	明赤橙	-	○	長石、雲母、角閃石			-	-		
	608	K	IV	G			13.2	16.3	11.6	16.3	B10	9	ミガキ	ミガキ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
	609	K	IV	G			15.0	21.8	15.3	21.8	B10	9	ミガキ、ナデ	ミガキ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
	610	K	IV	G			-	-	15.0	-	B10	9	ハケメ、ナデ	ナデ	明赤橙	明赤橙	-	○	長石、角閃石、輝石			-	-		
	611	K	IV	G			-	-	9.6	-	B10	9	ナデ、ミガキ	指ナデ	明赤橙	明赤橙	○	-	角閃石、輝石、石英	ベンガラ螺旋状文様		-	-		
	612	K	IV	G			14.4	11.8	6.8	13.4	B10	9	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ、工具ナデ	明赤橙	浅橙	-	-	長石、角閃石			○	○		
	613	K	IV	G			25.2	16.8	9.0	19.0	B10・11	9	ミガキ	ミガキ、丁寧なナデ、工具ナデ、指ナデ	赤	赤橙	-	-	角閃石、輝石			-	-		
	614	K	IV	G			17.0	13.0	5.0	16.0	B10	9	ヘラナデ、ヘラミガキ、底部丁寧なナデ	丁寧なナデ、ヘラミガキ、指頭圧痕	明橙	明橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
	136	615	K	IV	G			-	10.2	-	B10	9	ミガキ	ミガキ	赤橙	明赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
616		K	IV	G			-	-	3.0	8.0	B10	9	ミガキ	ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	角閃石、石英			-	-		
617		K	IV	E			-	-	-	-	B11	9	工具ナデ	ナデ、ハケメ、指頭圧痕	赤	にぶい橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
618		K	IV	E			+	10.5	-	6.5	-	B10	9	ナデ、ケズリ状ナデ、ケズリ	指頭圧痕、工具ナデ	赤橙	赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	
619		K	IV	E			+	9.8	-	4.0	12.4	B10	9	工具ナデ、指ナデ、ナデ	指ナデ、ナデ	黄橙	黄橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	
620		K	IV	E			-	7.8	6.5	3.6	7.6	B10	9	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	-	-	長石、角閃石	底部ヘラ記号「×」		-	-	
621		K	IV	E			+	5.4	-	3.6	8.0	B10	9	ナデ	-	明黄褐	明黄褐	-	-	長石、角閃石			-	-	
622		K	IV	E			+	6.6	-	3.8	8.7	B10	9b	ナデ	指頭圧痕	赤橙	にぶい黄橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	内面に丹
623	K	IV	H			-	10.2	11.3	9.6	13.6	B10	9	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	オリーブ灰	灰白	-	-	砂粒密			-	-	脚部・透3カ所	
137	624	L	I・II	A	a		76.4	18.4	1.5	43.6	C11	9	ミガキ、工具ナデ、丁寧な工具ナデ	工具ナデ、指頭圧痕	明黄橙	明黄橙	-	-	長石、角閃石、輝石	一条突帯		○	○	口縁～底部に丹塗痕あり、黒斑	
	625	L	I・II	A	a	+	24.0	-	-	20.0	B10	9	ミガキ、ナデ	ナデ、指ナデ、指頭圧痕、ハケメ	明橙	明橙	-	-	長石、角閃石、石英	頭部、櫛形波状文		-	-		
	626	L	I・II	G			-	21.6	-	-	A10	9	ハケメ、工具ナデ	ハケメ、工具ナデ	赤橙	赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	内面黒斑	
	627	L	I・II	A	b	+	20.8	-	3.8	-	B10	9	ナデ、工具ナデ	ナデ、指頭圧痕	浅明赤橙	明赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
	628	L	I・II	B・C			+	6.5	-	9.2	-	B11	9	丁寧な工具ナデ、工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	橙	橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	
	629	L	I・II	B・C			-	-	-	-	B10	9	工具ナデ、ナデ	ナデ後ミガキ、指頭圧痕	明橙	黒褐	-	-	長石、角閃石			-	-		
	630	L	I	B			+	16.7	-	5.8	16.7	B10	9	ハケメ、ナデ	ナデ、工具ナデ、指頭圧痕	橙	にぶい黄橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	
138	631	L	II	B			-	23.2	-	23.2	B10	9	丁寧な工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	橙	橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
	632	L	I・II	C			8.8	12.0	2.3	12.0	B10	9b	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石、角閃石、輝石、赤色粒子			-	-		
	633	L	I・II	C			-	9.3	10.3	3.5	10.3	B7	9c	ハケメ、ナデ	工具ナデ、ナデ	明黄褐	明黄橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	
	634	L	I	D			+	15.0	23.6	-	23.6	B10	9	工具ナデ	工具ナデ	赤橙	橙	-	-	長石			-	-	破片に穴、底部に朱あり
	635	L	I	D			-	16.8	-	16.8	C11	9	ミガキ	ミガキ	浅橙	赤橙	-	-	長石、石英、輝石			-	-		
	636	L	IV	E			-	-	12.4	-	B10	9	ハケメ、ナデ	ナデ、指ナデ	橙	橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	透4カ所、黒斑	
	637	L	IV	G			-	15.2	12.0	8.5	16.0	B10	9	ミガキ	ナデ、ミガキ、指頭圧痕	淡明赤橙	淡橙	-	-	角閃石			-	-	黒斑
	638	L	IV	G			+	13.0	12.8	-	-	C11	9	ミガキ	ミガキ、指ナデ	橙	淡橙	-	-	長石、角閃石			-	-	
139	639	L	IV	G			+	6.5	14.0	-	-	A11	9	ハケメ、ケズリ、ナデ	ナデ、ハケメ	にぶい橙	橙	-	-	角閃石			-	-	
	640	L	IV	E			-	8.8	5.9	2.8	6.9	B11	9	丁寧な工具ナデ、ナデ	ナデ	にぶい赤橙	にぶい黄橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	
	641	M	IV	A	a	+	51.2	17.6	-	38.3	B11	9	ミガキ後工具ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい橙	にぶい赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石	帯広突帯		-	-	頭部と胴部接合部の一部に丹	
	642	M	IV	A	a	+	55.5	-	7.8	42.8	B11	9	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	にぶい赤橙	赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石	帯広突帯格子文		-	-		
	643	M	IV	A	a		-	17.6	-	-	B11	9	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石、角閃石、雲母	頭部、一条刻目突帯		-	-		
140	644	M	IV	A	b	+	15.6	-	-	11.4	C11	9	工具ナデ、ハケメ	ナデ、指頭圧痕	橙	にぶい橙	-	-	長石、角閃石、石英			-	-	黒斑	
	645	M	IV	A			-	-	4.9	-	C11	9	ハケメ	-	にぶい橙	橙	-	-	長石、輝石			-	-		
	646	M	IV	B			-	19.7	-	19.7	C11	9	ハケメ、ナデ	指頭圧痕、ナデ、ハケメ	橙	にぶい橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
	647	M	IV	B・C			+	8.4	-	7.2	-	A11	9	丁寧な工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	橙	橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-	
	648	M	IV	B・C			-	8.5	9.6	4.2	9.6	C11	9	工具ナデ、ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石、角閃石			-	-	
	649	M	I	B			-	20.5	-	20.5	C11	9	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	橙	橙	-	-	長石、角閃石、輝石			-	-		
	650	M	IV	A	b	+	9.0	-	3.0	-	C11	9	工具ナデ、ナデ	工具ナデ	黄橙	橙	-	-	長石、輝石			-	-		
	651	M	IV	C			-	6.6	10.0	-	6.6	C10	9	ハケメ、ナデ	ナデ、工具ナデ	明赤橙	淡赤橙	-	-	長石、角閃石、石英			-	-	
	652	M	IV	C			-	6.8	10.7	6.5	10.7	B9	9c	ナデ後工具ナデ、指頭圧痕	ナデ後工具ナデ、指頭圧痕後工具ナデ	淡黄橙	黄橙	-	-	長石、角閃石			-	-	
141	653	M	IV	D			14.0	16.2	14.0	16.2	C11	9	ナデ、ナデ後ミガキ、ミガキ、指頭圧痕	ナデ、ミガキ	淡橙、灰白	浅黄橙	-	-	角閃石、輝石			-	-		
	654	M	III	D			-	13.4	14.6	12.0	14.6	B11	9	工具ナデ、ミガキ	工具ナデ、ミガキ	赤橙	淡橙	-	-	長石、角閃石			-	-	
	655	M	IV	D			+	8.0	-	12.9	-	C11	9	ナデ、ミガキ	工具ナデ、ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	輝石、砂粒			-	-	
	656	M	IV	G			-	17.3	22.1	16.8	22.1	B11	9	ナデ後ミガキ、ナデ	ナデ、ミガキ	明赤褐	明赤褐	-	-	角閃石、輝石			-	-	
	657	M	IV	G			+	6.5	17.6	-	-	B11	9	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	明赤橙	明赤橙	-	-	長石、角閃石			-	-	
	658	M	IV	D			-	13.7	18.0	10.6	-	B11	9	ナデ、ミガキ	縦方向のハケメ後工具ナデ、指ナデ	明黄橙	明赤橙	-	-	長石、角閃石、輝石、石英			-	-	

第19表 遺物観察表(8)

挿図 No.	掲載 No.	掲載 フロック	時期分類		大きさ (cm)				出土区	層	調整		色調		胎土		文様		穿孔 有無	口縁 有無	備考			
			時期	器種 (大)	器種 (小)	器高	口径	底径			最大径	外面	内面	外面	内面	ベンガラ 有無	金運母 有無	その他				突帯	その他	
141	659	M	III	D		13.5	17.0	10.2	17.0	C11	9	ナデ後ミガキ, 工具ナデ	ナデ後ミガキ, 工具ナデ	明赤橙, 淡黄橙	黄橙	-	-	角四石, 輝石		-	○			
	660	M	IV	D		+ 8.8		-	12.8	-	B11	9	ナデ, 工具ナデ	ナデ	にぶい赤橙	にぶい赤褐	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-	丹塗痕あり	
	661	M	IV	C-D		+ 8.5	14.5		-	-	C11	9	ナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ	明赤橙	明橙	-	-	長石, 角四石		-	○	黒斑	
	662	M	IV	D							C11	9	ミガキ	ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	橙	赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-		
	663	M	IV	D							B11	9b	ナデ	ナデ	赤橙	にぶい赤橙	-	-	角四石, 輝石		-	-		
	664	M	IV	D					16.6	-	B11	9	丁寧な工具ナデ, ミガキ	工具ナデ, ナデ	明赤橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-		
	665	M	IV	G		6.4	14.6	6.4	16.9	-	B11	9	ナデ後ミガキ, ハケメ, ナデ	指ナデ, ハケメ	橙	淡橙	-	-	角四石, 輝石, 石英		○	○	底部に穿孔	
	666	M	IV	G					4.6	-	B11	9	ナデ後ミガキ	指ナデ	淡赤橙	橙	-	-	角四石		○	-	黒斑	
	667	M	IV	G					4.0	-	C11	9	ナデ後ミガキ	工具ナデ, ナデ, 指頭圧痕	明赤橙	橙	-	-	長石, 角四石		-	-		
	668	M	IV	E					3.4	-	C11	9	ナデ, ミガキ	ナデ	橙	明黄橙	-	-	角四石		-	-		
	669	M	IV	E						-	A11	9	工具ナデ, ナデ	工具ナデ, ナデ	橙	にぶい黄橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-		
	670	M	IV	E					1.0	-	C11	9	ナデ	ナデ	淡橙	淡橙	-	-	角四石, 輝石, 石英		-	-		
671	M	IV	E		8.6	7.0	2.4	7.7	-	B11	9	工具ナデ, ナデ	工具ナデ	橙	橙	-	-	角四石, 輝石		-	○			
672	M	IV	E					3.0	-	C11	9	ナデ, ミガキ	ナデ, 指頭圧痕	浅黄橙	浅黄橙	-	-	角四石, 輝石		○	-	底部に穿孔		
673	M	IV	H			5.0	11.0		-	B11	表探	ハケメ, ミガキ	ハケメ, ミガキ	緑灰	灰オリーブ	-	-	砂粒密, 白粒		-	○			
674	M	IV	G			11.6	13.6	13.8	13.6	B11	9	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ, 工具ナデ	明赤橙	淡橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	○	中央に凹		
142	675	N	I	A	a	+ 26.7		3.3	21.0	C7	9a	工具ナデ	指ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	明橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		○	-	黒斑		
	676	N	I	A				6.0		D9	9c	工具ナデ, ミガキ	工具ナデ, ハケメ	明黄橙	黄橙	-	-	長石, 角四石		-	-			
	677	N	I	A	b		13.3	7.0	3.0	10.8	B7	9c	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	明橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石, 石英		-	-	底部ハケメ痕	
143	678	N	I	A		+ 19.0			13.1	D7	9b	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		○	-			
	679	N	I	E			8.2	7.0	1.3	7.2	A7	9c	ナデ	ナデ	淡赤橙	淡赤橙	-	-	長石, 角四石		-	○		
	680	N	I	E		+ 9.0			1.4	9.8	C7	9c	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい黄橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-		
	681	O	II	A	b		27.2	11.2	3.9	17.3	A7	9b	ナデ, ハケメ	ナデ, 指頭圧痕, 工具ナデ	浅黄橙	にぶい橙	-	-	角四石, 雲母		-	○	黒斑	
	682	O	I	A	a	+ 21.9				19.0	A7	9a	ハケメ後ナデ, ナデ後ハケメ, ナデ	ハケメ, ハケメ後ナデ, 指頭圧痕	赤橙	橙	-	-	長石, 角四石, 石英, 輝石		○	-	一条三角突帯	
	683	O	II	A	b		9.3	6.3	1.8	9.8	A7	9c	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	淡橙	暗黄褐	-	-	長石, 角四石		-	○		
	684	O	II	A	b		23.3			7.0	-	A7	9a	ハケメ, 工具ナデ, 指ナデ, ナデ	ハケメ, 指ナデ, 工具ナデ	明橙	橙	-	-	長石, 雲母		-	-	
	685	O	II	B-C					6.4		A7	9b	ハケメ, ハケメ後ナデ, ナデ	ナデ	明赤橙	明黄褐	-	-	長石, 角四石		-	-		
	686	O	II								A7	9b	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	-	-	長石, 角四石		-	-		
	687	O	II	B			19.2	14.1	5.6	14.1	A7	9c	ハケメ, 指ナデ, 一部ケズリ	工具ナデ, 指頭圧痕	明褐	明赤褐	-	-	角四石, 輝石		-	○		
	688	O	II	F			7.0	17.0		17.0	A7	9c	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	黄橙	明黄橙	-	-	長石, 角四石, 石英		-	○		
	689	P	I	A	a		32.2	12.8	3.7	21.8	A9	9	ナデ, 工具ナデ, 丁寧な工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	-	-	長石, 輝石		○	○	一条刻目突帯 布目圧痕	
144	690	P	I	A						B9	9a	ハケメ, ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	橙	明赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石, 赤色粒子		-	-			
	691	P	I	B-C		+ 7.1		7.2		B9	9c	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	-	-	角四石		-	-			
	692	P	I	B-C						B9	9	ナデ, ハケメ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-			
	693	P	I	C-D		+ 7.4	18.0			D8	9	ナデ, ミガキ状ナデ	ナデ, 工具ナデ	赤橙	にぶい赤橙	-	-	長石, 雲母		-	○			
	694	P	I	C-D			10.5	13.6	8.0	13.6	B9	9c	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-		
	695	P	I	F			12.4	33.6		33.6	A9	9	ハケメ, 指頭圧痕後ナデ, ナデ 工具ナデ	ハケメ, 指頭圧痕後ナデ, ナデ, ハケメ 指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	○		
145	696	R	II	A			70.9	28.5	5.2	46.2	B9	9c	ナデ, ハケメ	ハケメ, 工具ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	明赤橙	明赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		○	○	一条刻目突帯	
	697	R	I	A	a		31.8	11.7	5.2	26.1	B9	9c	ナデ後ハケメ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	明黄橙	明褐	-	-	長石, 角四石, 輝石, 石英		-	○	一条刻目突帯	
	698	R	I	A	b	+ 23.5		1.6	18.6	B9	9	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-	布目状圧痕		
	699	R	I~III	A	b		15.3	8.8	2.6	13.3	B9	9c	ナデ後工具ナデ, ハケメ, 指ナデ	ナデ, 指頭圧痕, 工具ナデ	明赤橙	黄橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	○		
	700	R	II	A	c		25.7	10.6		18.0	B9	9b	ハケメ後ナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ, 指頭圧痕	明黄褐, 橙	にぶい黄褐	-	-	長石, 雲母		-	○	黒斑	
146	701	R	III	A	a		48.3	15.4	2.9	36.1	D8	9a	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 指頭圧痕, 工具ナデ	赤橙	赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		○	○	一条刻目突帯	
	702	R	I	A	a		39.0	12.8	5.3	28.0	B9	9c	工具ナデ, ミガキ, ハケメ ヘラナデ	工具ナデ, 指ナデ	赤橙	橙	-	-	角四石, 輝石		○	○	一条刻目突帯 浮文3つ 線刻をナデ消した跡と思われる所2ヶ所有, 黒斑	
	703	R	III	A	a		48.4	13.0	2.5	34.4	C9	9c	工具ナデ, ミガキ状工具ナデ	ナデ, 指頭圧痕	赤橙	黒褐	-	-	長石, 角四石, 輝石		○	○	二条刻目突帯 内面黒斑	
	704	R	II	A	a	+ 46.1		3.7	32.9	B8	9c	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	長石, 輝石, 赤色粒子		○	-	一条刻目突帯		
	705	R	I	B			18.5	18.2	6.4	18.2	B9	9	ナデ, 工具ナデ, ハケメ	ナデ, 工具ナデ	橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	○		
	706	R	II	B-C		+ 13.9			5.4		B9	9b	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	にぶい橙	橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	-		
	707	R	II	B			23.7	18.7	7.8	18.7	B9	9	ナデ, ハケメ, 指ナデ, 工具ナデ	ヘラ押圧痕, ヘラナデ, ナデ	褐色	淡赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		-	○	黒斑	
	708	R	II	B			20.3	17.2	7.1	17.2	B9	9c	ナデ後ハケメ, 指頭圧痕, ナデ	指頭圧痕, ナデ	暗橙	黄橙	-	-	長石, 角四石		-	○		
	709	R	II	C			10.3	13.8	4.2	13.8	B9	9c	ハケメ, 指頭圧痕	ナデ, 工具ナデ	橙	にぶい橙	-	-	輝石, 雲母		-	○		
	710	R	II	B-C					7.5		B9	9b	ハケメ, 指ナデ, 工具ナデ	工具ナデ, ナデ	橙	明赤橙	-	-	長石, 角四石, 石英		-	-		
	711	R	I~III	C			12.1	12.8		12.8	B9	9c	丁寧なナデ	ナデ, 工具ナデ	淡黄橙	淡黄橙	-	-	角四石, 輝石		-	○	波状線刻 植物圧痕	
	712	R	I~III	D		+ 10.0	13.4				B9	9c	ナデ, 工具ナデ	指頭圧痕, ナデ後ミガキ, ナデ	黄橙	橙	-	-	長石, 角四石, 石英		-	○		
713	R	I・II	F			7.1	21.6		21.6	B9	9	ナデ, 工具ナデ	ナデ	にぶい橙	淡赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石, 赤色粒子		-	○			
147	714	S	III・IV	C			9.6	10.4	2.8	10.4	C10	9	ナデ, ハケメ	ナデ	明橙	明橙	-	-	角四石, 輝石		-	○		
	715	S	III・IV	C			6.3	7.6	2.9	7.6	C10	9	ナデ, 工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	明赤橙, 黄橙	黄橙	-	-	角四石, 輝石		-	○		
	716	S	III・IV	G		+ 9.3		5.0		A9	9c	ハケメ, ナデ	ナデ, 指ナデ, 指頭圧痕	明黄褐	明橙	-	-	長石, 角四石		○	-			
148	717	溝1	III・IV	A	a		41.2		7.0	37.5	D9	9	工具ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ	にぶい赤橙	にぶい赤橙	-	-	長石, 角四石, 輝石		○	-	帯広突帯	

第20表 鉄製品観察表

挿図 番号	掲載 No.	出土区		層	遺構出土 ブロック	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
67	Fe 10	C	9	9b	T 7	鉄剣	+ 15.0	3.0	0.4	+ 100.0	目釘穴 1
	Fe 11	D	9	9b	ES 3	鉄剣	23.0	3.0	0.4	162.0	目釘穴 1
79	Fe 12	D	9	9c	ES 3	鉄剣の剣先?	+ 6.7	2.5	0.5	+ 20.0	-
	Fe 13	D	9	9b	ES 3	鉄鏃	15.2	+ 2.8	0.5	37.5	-
80	Fe 14	C	9	9b	ES 4	鉄鏃	8.2	3.3	0.3	30.0	-
	Fe 15	D	9	9b	ES 4	鉄鏃	5.5	2.3	0.2	5.0	-
99	Fe 16	C	11	9b	SD42	鉄剣	+ 23.7	3.0	0.4	+ 199.3	-
105	Fe 17	B	9	9b	SD63	鉄鏃	+ 10.3	4.4	0.3	+ 51.2	-
	Fe 18	C	10	9c	SD66	鉄鏃	10.0	3.0	0.5	27.0	-
108	Fe 19					矛	+ 23.7	3.5	0.7	+ 320.0	
123	Fe 20	A	8	9c	F	鉄鏃	7.7	4.2	0.3	31.0	片脚欠損
126	Fe 21	D	9	9b	H	带状鉄製品	+ 8.5	1.3	0.3	+ 10.9	-
	Fe 22	D	9	9b	H	鉄剣の剣先?	+ 3.9	2.4	0.3	+ 7.6	-
128	Fe 23	C	9	9c	I	曲剣	+ 24.5	2.7	0.4	+ 132.0	-
132	Fe 24	C	10	9b	-	鉄鏃	17.8	3.4	0.3	70.0	-
	Fe 25	B	9	9b	J	鉄鏃	+ 9.6	2.9	0.3	+ 37.0	-
	Fe 26	B	10	9b	J	鉄鏃	4.3	2.5	0.2	3.7	片脚欠損
	Fe 27	B	10	9b	J	鉄鏃	+ 6.6	2.6	0.3	+ 21.0	-
	Fe 28	C	10	9c	J	細鉄鏃	14.5	0.5	0.4	18.0	-
142	Fe 29	C	11	9b	M	鉄鏃	13.5	3.2	0.3	60.0	-
	Fe 30	C・D	10・11	9確認T	M	鉄鏃	14.0	2.9	0.5	65.0	-
	Fe 31	C	11	9b	M	鉄鏃 2点	13.2	3.4	0.3	44.0	2本文書く
	Fe 32	C・D	10・11	9確認T	M	鉄鏃	8.4	2.9	0.5	28.0	-
	Fe 33	C	11	9	M	剣?	+ 9.6	0.8	0.3	+ 20.0	-
	Fe 34	C	11	9	M	曲剣	+ 12.7	3.0	0.5	+ 70.0	-
	Fe 35	B	11	9	M	曲剣	28.0	3.4	0.4	200.0	目釘穴 1
	Fe 36	C	11	9	M	鉄剣	+ 15.3	2.6	0.3	+ 86.0	-
145	Fe 37	B	11	9	M	蛇行剣	+ 9.3	1.5	0.3	+ 43.0	-
	Fe 38	C	11	9	M	鉄剣	21.4	2.9	0.3	110.0	目釘穴 3
	Fe 39	B	9	9b	Q	鉄鏃	9.5	2.8	0.3	20.0	-
	Fe 40	C	10	9b	S	鉄鏃	+ 8.2	2.7	0.3	+ 13.0	-
	Fe 41	C	10	9	S	鉄鏃	+ 8.6	3.3	0.3	+ 40.0	-
	Fe 42	C	11	9b	S	鉄鏃	+ 6.8	3.5	0.4	+ 40.0	-
	Fe 43	C	10	9b	S	鉄鏃	+ 7.3	1.8	0.4	+ 9.9	-
	Fe 44	C・D	10・11	9確認T	S	鉄鏃	+ 6.1	1.1	0.4	+ 10.0	-
149	Fe 45	C	10	9	S	鉄鏃	1.6	1.4	0.4	20.0	-
	Fe 46	C	10	9b	S	鉄剣	35.6	3.8	0.6	159.5	-
	Fe 47	B	10	9	-	鉄鏃	15.1	2.8	0.3	16.0	-
	Fe 48	C	10	9	-	細鉄鏃	+ 7.2	1.0	0.4	+ 7.9	-
	Fe 49	C	11	9	-	鉄鏃	+ 5.8	1.8	0.3	+ 9.0	-
151	Fe 50	C	11	9	-	鉄剣	13.6	2.1	0.4	29.4	-

※法量の「+」表示は、錆付着や欠損状況から、街頭数値以上あるという意

第21表 磨製石鏃観察表

挿図 No.	掲載 No.	出土 ブロック	出土区	層	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
65	S 121	T 4	B 8	9b	磨製石鏃	+4.0	2.8	0.4	3.9	頁岩	
78	S 122	ES 2	D 8	9b	磨製石鏃	4.2	2.5	0.4	4.3	頁岩	
81	S 123	ES 6	C 9	9b	磨製石鏃	6.0	2.8	0.4	9.6	頁岩	
91	S 124	SD 7	C 8	9c	磨製石鏃	6.5	2.8	0.3	10.9	頁岩	
98	S 125	SD 35	B 10	9c	磨製石鏃	6.8	2.8	0.4	9.3	頁岩	
101	S 126	SD 49	C 8	9b	磨製石鏃	4.0	2.5	0.3	5.1	頁岩	
103	S 127	SD 55	C 9	9c	磨製石鏃	2.2	1.8	0.2	0.9	頁岩	
123	S 128	F	A 8	9c	磨製石鏃	4.6	2.8	0.3	4.6	頁岩	
126	S 129	H	D 7	9c	磨製石鏃	5.7	2.3	0.4	7.4	頁岩	
132	S 130	J	B 10	9c	磨製石鏃	5.6	2.9	0.4	7.8	頁岩	
	S 131	J	B 10	9c	砥石	7.3	4.9	1.0	41.7	粘板岩	
	S 132	J	B 10	9c	砥石	4.5	3.9	0.9	20.4	粘板岩	
136	S 133	K	B 10	9b	磨製石鏃	5.3	2.4	0.3	3.6	頁岩	
143	S 134	N	D 7	9c	磨製石鏃	6.0	3.5	0.5	10.7	頁岩	

V 科学分析

第1章 リン・カルシウム分析

第1節 はじめに

本報告では、土坑墓や壺棺墓と考えられる遺構について、遺体が埋葬されていた可能性を検証することを目的としてリン酸・カルシウム分析を実施する。本調査では遺構埋土と比較用サンプルにおけるリン酸・カルシウム含量を比較することにより、遺体埋納の痕跡を確認する。

第2節

対象とする遺構は、土坑30、土坑7、土坑62および壺棺2の4基である。試料は、土坑30の中央底部埋土B（試料番号3）、土坑7の中央埋土（試料番号4）、土坑62の中央底部埋土③（試料番号5）、壺棺2の底部埋土（試料番号6）および比較用サンプルの土坑30近くの包含層土壌F（試料番号2）の計5点である。いずれも古墳時代初期～中期にかけての遺物包含層であるIXb層に対比される試料である。

第3節 分析方法

本調査では、土壌中に含まれるリン酸およびカルシウムの含量を測定する。リン酸はとくに骨に多量に含まれ、土壌中では比較的拡散・移動しにくいいため、その局所的な濃集状況から遺体、骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法とされている。また、カルシウムはリン酸とともに骨の主成分であることから、その濃集状況も遺体埋葬の手がかりとなる可能性がある。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光度法でそれぞれ行う（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃，5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P₂O₅）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

第4節 結果

分析結果を表1に示す。比較用サンプルである試料番号2のリン酸含量は1.62P₂O₅mg/gであり、カ

表1. 土壌理化学分析結果

試料番号	試料名	層位	土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO (mg/g)	備考
2	土坑30近くF	IXb層	SCL	10YR 3/2 黒褐	1.62	44.31	比較用サンプル
3	土坑30B	IXb層	SCL	10YR 3/2 黒褐	3.36	33.76	土坑内埋土
4	土坑7	IXb層	SCL	10YR 2/2 黒褐	1.34	44.53	土坑内埋土
5	土坑62	IXb層	SCL	10YR 2/2 黒褐	7.03	42.50	土坑内埋土
6	壺棺2	IXb層	SCL	10YR 3/1 黒褐	1.91	38.94	壺棺内土

注. (1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

(2)土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

SCL・・・砂質埴壤土（粘土15～25%、シルト0～20%、砂5～85%）

ルシウム含量は44.31CaOmg/gである。各遺構埋土の中で比較用サンプルのリン酸含量を上回る試料は、土坑30埋土B（試料番号3）、土坑62埋土③（試料番号5）、壺棺2埋土（試料番号6）である。中でも、土坑30埋土B（試料番号3）、土坑62埋土③（試料番号5）のリン酸含量はそれぞれ3.36P₂O₅mg/g、7.03P₂O₅mg/gと比較的高い。一方、各遺構埋土のカルシウム含量は比較用サンプルの土坑30近

くF（試料番号2）と同等かそれ以下であり、リン酸含量と相関するような傾向は認められない。

第5節 考察

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen, 1983； Bolt・Bruggenwert, 1980； 川崎ほか, 1991； 天野ほか, 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では $5.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ （川崎ほか, 1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では $6.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 $1\sim 50\text{CaOmg/g}$ （藤貫, 1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。

調査を行った4基の遺構の中で、遺構埋土試料のリン酸含量が比較用サンプルを上回ったのは、土坑30、土坑62、壺棺2の3基で、うち前述の天然賦存量を上回るものは土坑30、土坑62の2基である。特に、土坑62埋土③（試料番号5）における $7.03\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ のリン酸含量は特徴的であり、人為により富化された可能性が極めて高い。

ここで、土壤中に含まれるリン酸の給源としては動物遺体埋納や施肥などの人為的要因のほか、植物遺体に由来する自然蓄積がある。今回は、腐植含量の調査を実施していないので正確な評価は難しいものの、比較用サンプルと比べて壺棺2埋土（試料番号6）で土色の彩度が小さく、黒色味が強い傾向が認められることから、試料番号6には土壤腐植が比較用サンプルより多く含まれていると考えられる。したがって、試料番号6で検出された比較用サンプルより僅かに高いリン酸は、土壤腐植に由来するものと考えられる。

一方、土坑30埋土B（試料番号3）は天然賦存量上限付近のリン酸含量であるが、土色が比較用サンプルと同じであることを考慮すると、植物遺体由来のリン酸は比較用サンプルと大きくは変わらないものと考えられる。したがって、比較用サンプルを上回る量のリン酸は人為的に富化された可能性が高いと見ることが出来る。

以上のことから、自然状態の土壤に含まれる量よりも多いリン酸が含まれると判断される土坑30、土坑62の2基については外的な影響によってリン酸が富化されており、2基の遺構にヒトを含む動物遺体が埋納されていた可能性が高いと考えられる。一方、土坑7、壺棺2については、今回の分析結果から見る限り、遺体の存在を積極的には支持できない。今後、脂肪酸分析や、遺構内の複数試料の分析によるリン酸の局所的な濃集状況の調査等を実施することにより、遺体埋納についての情報が得られる可能性がある。さらに同様の遺構についての調査例も蓄積することが望まれる。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 28-36.
- Bowen, H. J. M., 1983, 環境無機化学—元素の循環と生化学—, 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297 p.
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M, 1980, 土壤の化学, 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 学会出版センター, 309 p.
- 土壤養分測定法委員会編, 1981, 土壤養分分析法, 養賢堂, 440 p.
- 藤貫 正, 1979, カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52, 57-61.
- 川崎 弘・吉田 滂・井上恒久, 1991, 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会, 1984, 野外土性の判定, ペドロジスト懇談会編 土壤調査ハンドブック, 博友社, 39-40.

第2章 南摺ヶ浜遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株)加速器分析研究所

第1節 測定対象試料

南摺ヶ浜遺跡は、鹿児島県指宿市十二町黒ヶ岡（北緯31° 13′ 38″，東経130° 39′ 08″）に所在する。測定対象試料は、土坑7の埋土から出土した炭化物（1：IAAA-80882）である。

第2節 測定の意義

土坑が作られた時期を特定する。

第3節 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が1N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

第4節 測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

第5節 算出方法

- (1) 年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。この値は， $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は，試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は，試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon)は，標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の¹⁴C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（ $1\sigma=68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma=95.4\%$ ）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ransley 1995 Bronk Ransley 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht

and Weninger 2001) を使用した。

第6節 測定結果

土坑7から出土した炭化物の¹⁴C年代は、2190±30yrBPである。試料の炭素含有率は63.7%であり、十分な値であった。暦年較正年代(1σ)は、356BC~286BC(46.0%)・234BC~196BC(22.2%)である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-8088 2	試料番号1	遺構：土坑7 層位：IXb層	炭化物	AAA	-26. ± 0.62 82	2,190 ± 30	76.1 ± 0.7 30

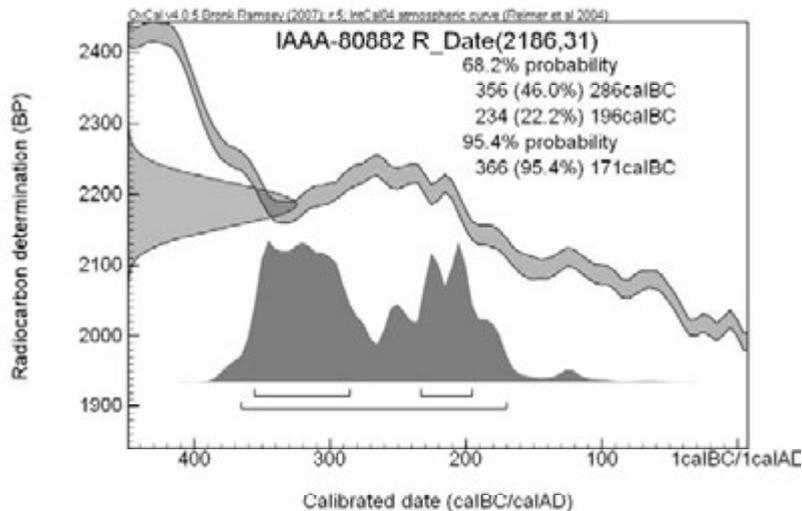
[#2386]

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-8088 2	2,210 ± 30	75.92 ± 0.27	2,186 ± 31	356BC - 286BC (46.0%) 234BC - 196BC (22.2%)	366BC - 171BC (95.4%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



VI ま と め

第1章 縄文時代晩期～弥生時代中期

縄文時代晩期は、土器が上加世田式土器から刻目突帯文土器まで出土し、石器も日常生活で使われたと考えられるものが多数出土している。目立つのは、打製石斧と石錘である。打製石斧は、そのもの自体の数だけでなく、破損したと考えられるものや、調整や製作の際に出たと思われる破片も多数出土している。材質は頁岩を主に使用しており、熱変成を強く受けているものから、ほとんど受けていないものまで大きく四種類に分けることができた。中でも、大きく熱変成を受けてきれいな材質のものが多く、製品・剥片ともに打製石斧全体の大部分を占めている。石錘は漁ろう具と考えられるが、南摺ヶ浜遺跡の目の前には鹿児島湾が広がっており、そこで漁を行っていたのではないかと考えられる。

土器・石器がこれだけ出土しているが、今回の調査では遺構を検出することができなかった。しかし、これだけ日常生活に使ったと考えられるものが出土していることから、南摺ヶ浜遺跡の近辺に人が住んだ場所があったと考えられる。

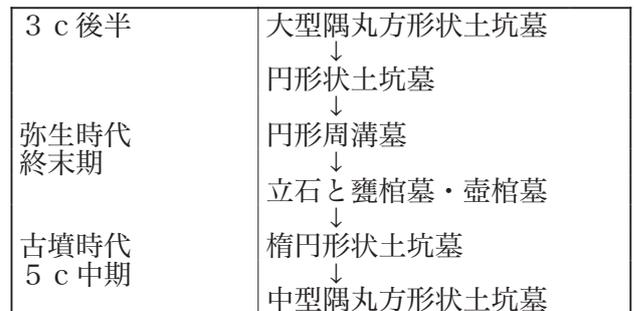
弥生時代前半の遺物は出土しているものの、全体的な量から見ると非常に少ない。土器・石器が見つまっていることから、生活の場ではあったと考えられる。

縄文時代晩期から弥生時代前半にかけて、この南摺ヶ浜遺跡は生活の場であった可能性が高いと思われる。しかし、弥生時代後半から古墳時代にかけては墓地として考えられる遺跡の性格からして、この間のどこかで生活の場から墓としての場への転換点があったと思われる。

第2章 弥生時代終末～古墳時代

第1節 遺構

本遺跡では、壺棺墓や甕棺墓、立石、円形周溝墓、土坑墓と狭い調査範囲の中で多様な形態の墓制が発見された。従来、薩摩半島南部の墓地としては、指宿市山川町の成川遺跡や枕崎市松之尾遺跡といった立石土坑墓が主流であり、弥生時代中期頃のものともいわれてきた。また、南九州市川辺町の堂園A遺跡では、内陸部という違いはあるが、立石を伴わない土坑墓群が発見されている。しかしながら、県内における調査の中でも特徴的な遺構として、壺棺墓や甕棺墓といった土器棺墓と円形周溝墓の発見が、本遺跡の最大の特徴である。土器棺墓では、薩摩半島西岸において、市ノ原・入来・白寿・下小路遺跡などで、弥生時代前・中期の甕棺や壺棺が、先述の成川遺跡では壺単棺の存在が知られているだけである。更に円形周溝墓は、曾於市松山町の京ノ峰遺跡で弥生時代中期頃の遺構が、湧水町の永山地下式板石積石室墓群でも古墳時代前期のものが検出されているが、本遺跡のように多くは検出されていない。本遺跡の墓域からは3世紀後半から5世紀中期にかけての遺物が出ていることや、層位及び遺構の切り合い関係等から、墓制の変遷は下記のようにまとめることができる。



まず、円形周溝墓は、少ないながら遺構内遺物や壺棺墓との切り合い関係から弥生時代終末期に

該当する遺構と考える。

立石は、従来、成川及び松之尾遺跡で解された弥生時代中期の立石土坑墓であるが、本遺跡では配置的に見て、壺棺墓・甕棺墓に伴うと考えられる。ただ、立石の検出状況から意図的に動かしたり加工したりしたと思われる状況から、旧大根占町山之口遺跡で発見された環状列石の可能性もあると思われるが、本遺跡では前者を考えたい。また、これらの石材は、近隣の指宿市山川町の竹山及び指宿市西部の山地、同市魚見岳等に安山岩質の露出した場所があることから、おそらくこれらの割合近い場所から持ち込まれたと思われる。

壺棺墓・甕棺墓は、土器の形状から在地の中津野式土器段階の壺形・甕形土器や1号壺棺墓のように庄内式土器を模して作られたと思われる土器などが見られることから弥生時代終末期から古墳時代初頭にこの土器棺墓が営まれていたと考えられる。このことから、立石もこの時期該当と考える。

土坑墓は、3世紀後半から5世紀中頃まで造られていたと思われる。科学分析のからも3世紀後半から4世紀中頃までの遺構であるという結果もあり、円形周溝墓や壺棺墓・甕棺墓と並行しながら造られていたと思われる。

5世紀代には、土坑墓及び祭祀の場の活用が考えられる。これらは、祭祀に使用されたと考えられる丹塗研磨土器をはじめ、高坏形土器や鉢形土器が集中して良好な状況で検出されたことからこの時期は上記の場の活用がなされていたと考える。

以上のことから、本遺跡の墓域の活用の変遷としては、3世紀終わり頃丘側を墓域として活用し、北の丘陵地斜面へ広がり、5世紀中頃には鹿児島湾側へと変遷していったと考えられる。

さらに、祭祀の跡と思われる土器集中区を見ても、破碎を行う行為から丹塗研磨土器等を置いて行って何らかの祭祀を行ったと思われる場所も同

様に変遷し、祭祀そのものも変化していつていると考えられる。

最後に、これらの遺構は、地形を意識して作られたのではなく、方位を意識して作られたのではないかとも思われる。ほとんどの遺構の軸方向は東西方向を向く。東には鹿児島湾、西には開聞岳がある。眺望としては、北方向には魚見岳が、遠方には桜島も見える場所である。

第2節 土器

本遺跡では、成川様式の土器がほぼ完形の状態で多く出土した。これまで、中村直子氏の土器編年を基に、時期と器種で分類してきた。本遺跡の特徴として、次のようなことがあげられる。

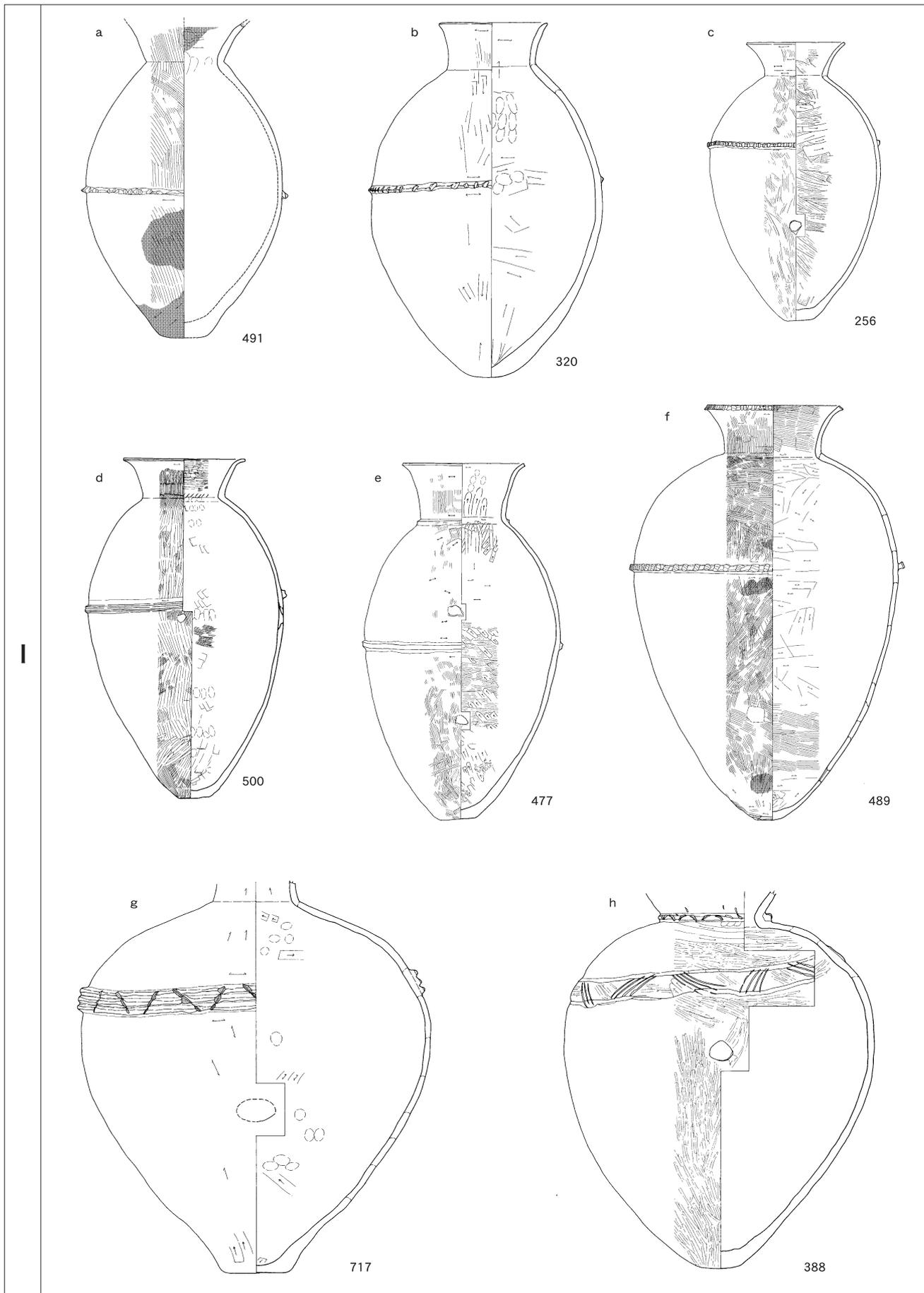
- ・多種多様な形態の土器があり、作りがよく、お墓専用に使われた土器と考えられること。
- ・出土土器に壺形土器の占める割合が非常に多く、時期編年と合致しないものがあること。
- ・従来の成川式土器とよばれる様式とは全く異なる、外来の土師器を模した遺物が見受けられるなど、外来技術の流入が考えられること。
- ・祭祀に伴う供献遺物が多く見られること。

以上のようなことから、本遺跡における遺物について再度、器種・器形を中心に土器の細分を試みた。しかし、この細分については遺構内一括資料ではないため時期的に不明瞭である。

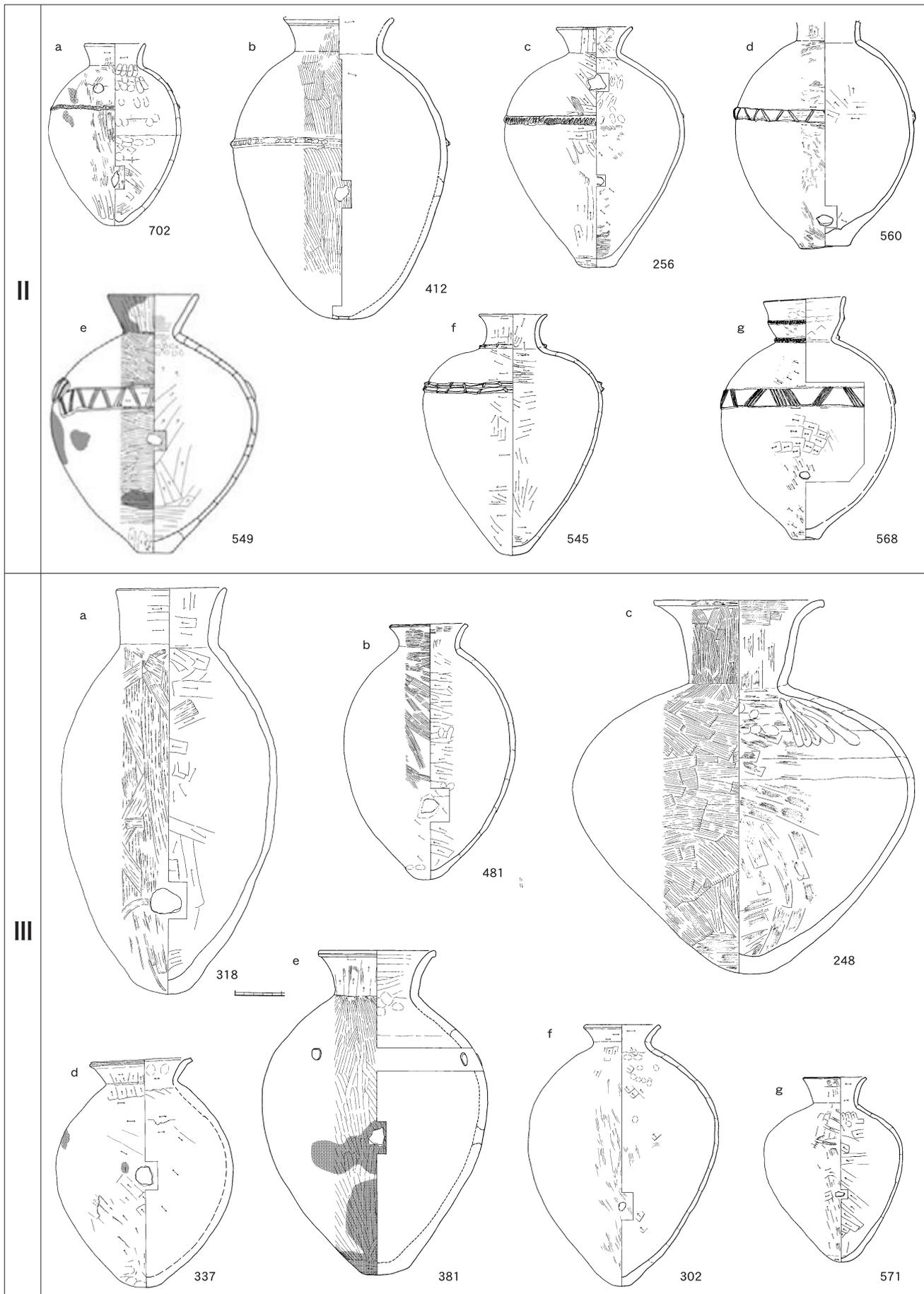
本遺跡の細分案については各部位の形態をもとに9つの器種に分類し、更に各形態の小分類に分け次頁の表のようにまとめた。壺形土器は、口縁部形態や胴部形態に特徴が見られる他、大型は平底を中型以下は丸底を呈する。突帯は刻目突帯とM字や三角形状もしくは台形状の突帯が多く、多条突帯や幅広突帯は少ない。ただ、突帯位置が非常に気に掛かる場所である。無紋の壺形土器は概して、長胴形と肩の張った逆卵形が多い。

第22表 土器分類表（器種毎）

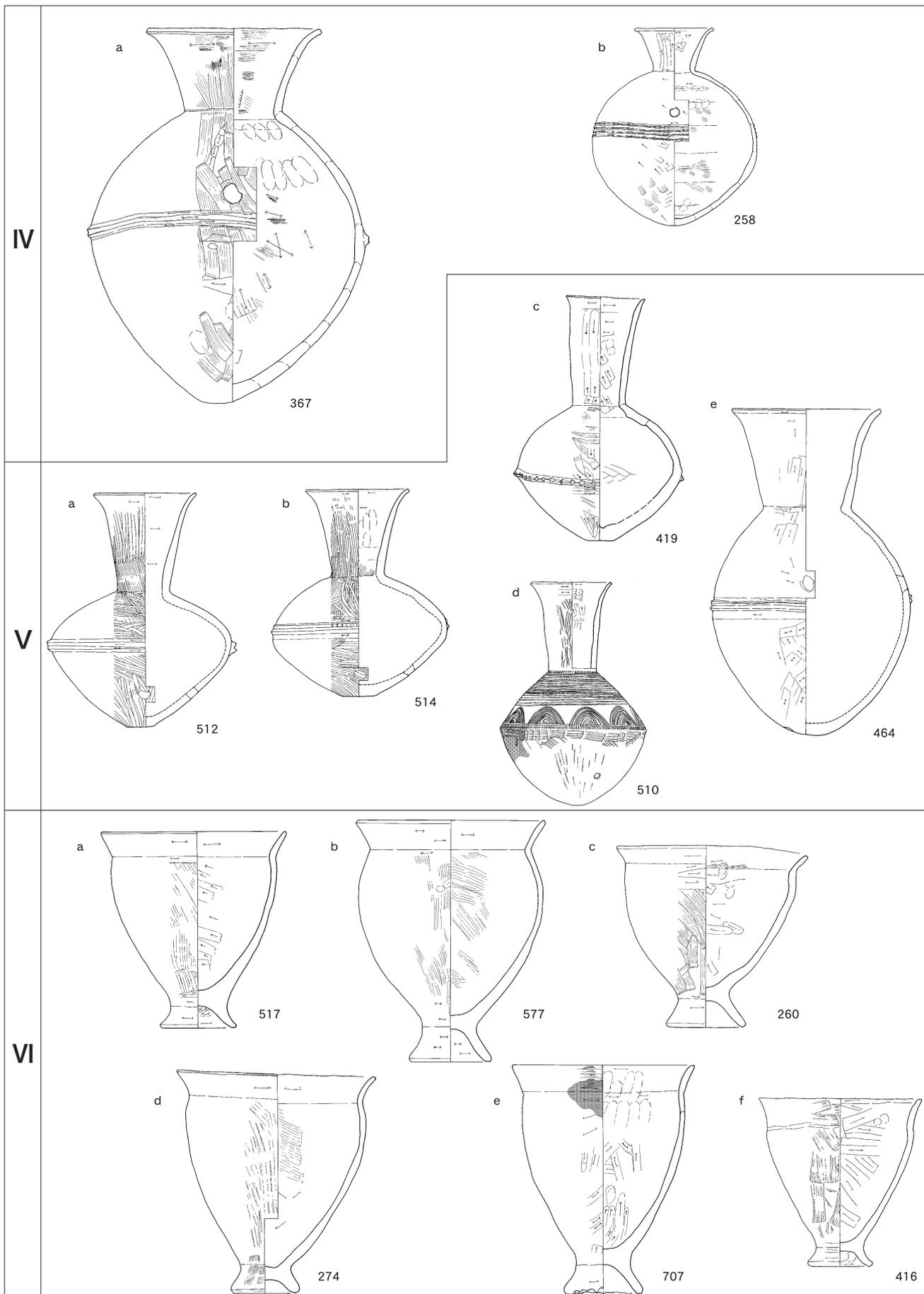
器種分類	小分類	器形				突帯		備考	
		口唇部	口縁部	胴部	底部	突帯種	突帯位置		
大型壺形土器	I	a	—	長くくの字状に外反	丸味を帯びた菱形	平底	刻目	胴部中央	
		b	丸	直線状に外傾	なで肩、長楕円形状	平底	刻目	胴部中央	
		c	平坦	くの字状に外反	なで肩、長楕円形状	平底	台形状	胴部やや上位	
		d	平坦	くの字状に外反	なで肩、丸味を帯びた長胴形の菱形	平底	M字・刻目	胴部やや上位	
		e	平坦	くの字状及び口唇部外反	なで肩、スリム長胴形の逆卵形、頸部に平坦面	平底	M字	胴部やや上位	
		f	平坦	外傾立ち上り、口唇やや外反	肩の張った逆卵形	レンズ状	刻目	胴部上位	
		g	丸	内湾後、口唇で外反	肩が張った逆三角形状	平底	幅広格子文	肩部やや下位	
		h	丸	直線状に外傾	肩が張った逆三角形状	平底	幅広格子文	肩部やや下位	
中型壺形土器	II	a	丸	直線状に外傾	なで肩、丸味を帯びた菱形	平底	刻目	胴部やや上位	
		b	丸	短頸、やや外反	なで肩、楕円形状	平底	刻目	胴部中央	
		c	平坦	短頸、くの字状外反	肩の張った逆卵形、底部で急にすばむ	平底	刻目	胴部やや上位	
		d	—	直線状で垂直	長楕円形状	平底	幅広	胴部やや上位	
		e	丸	直線状に外傾、口唇端部やや外反	なで肩、逆卵形	平底	刻目	頸部	
		f	丸	内湾後、口唇部で外反	肩の張った逆卵形	平底	多条刻目	頸部及び肩部	
		g	丸	直線状外傾及び疑似口縁より垂直	なで肩で膨らみのある長楕円形状	平底	幅広・刻目	肩部・頸部	
無紋壺形土器	III	a	丸	直線状に外傾	長楕円形	丸底	—	—	
		b	平坦	くの字状外反	なで肩、やや膨らみある長楕円形状	平底	—	—	
		c	平坦	円筒形で外傾、口唇部で外反	肩の張った逆三角形状	丸底	—	—	
		d	平坦	くの字状外反	なで肩、丸味のある菱形状	レンズ状	—	—	
		e	平坦	くの字状外反	なで肩、膨らみのある長胴形長楕円形状	平底	—	—	
		f	平坦	短頸、くの字状外反	肩が張った逆卵形	平底	—	—	
		g	平坦	直線状に外傾	肩が張った逆卵形	レンズ状	—	—	
球形壺	IV	a	平坦	やや長頸気味で外傾、口唇部外反	球形	やや平底	M字	胴部中央	
		b	丸	やや長頸気味で外傾、口唇部外反	球形	丸底	多条刻目	胴部中央	
長頸壺	V	a	丸	直線状外傾、口唇部やや外反	屈曲やや上位で鋭い	平底	多条M字	屈曲部	
		b	平坦	直線状外傾、口唇部やや外反	屈曲やや下位で鋭い	平底	多条M字	屈曲部	
		c	丸	ほぼ垂直、口唇部やや外反	屈曲やや緩い	平底	刻目	屈曲部	
		d	平坦	直線状外傾、口唇部やや外反	屈曲緩く球形状	平底	重弧文	頸部から屈曲部	
		e	平坦	長頸気味で外傾、口唇部で外反	楕円形状	やや平底	多条M字ほか	胴部中央	
器種分類	小分類	器形				底部天井		備考	
		口唇部	口縁部	底部					
甕形土器	VI	a	丸	くの字状外反	外傾及び外反、低い	平坦			
		b	平坦	くの字状外反	端部で外反、高い	平坦			
		c	平坦	くの字状外反	外傾して開く、やや高い	平坦			
		d	丸	くの字状外反	外傾して開く、低い	平坦			
		e	丸	直線的に外反	外傾して開く、高い	平坦			
		f	丸	直線的に外反	外傾して開く、低い	平坦			
器種分類	小分類	器形				底部		備考	
		口唇部	口縁部	脚部					
高坏形土器	VII	a	平坦	疑似口縁部より外反	外傾して開き円筒形状、底部	外反			
		b	平坦	疑似口縁部より緩やかに外反	直線状にやや外反し円筒形状	外反			
		c	丸	疑似口縁部より短く緩やかに外反	外傾して開く	外反			
		d	丸	やや外反	外傾	屈曲外反			
		e	丸	やや内湾	外反	やや外反			
		f	丸	やや内湾	外反	やや外反			
鉢形土器	VIII	a	丸	やや外反	—	外傾、短い			
		b	丸	やや内湾	—	平底			
		c	丸	緩やかに疑似口縁部より外反	—	外傾、高い			
		d	丸	やや内湾	—	丸底			
		e	—	疑似口縁部より外反	—	丸底			
		f	丸	やや内湾	—	平底			
蓋形土器	IX	a	平坦	疑似口縁部より外反	—	高台状平底			
		b	丸	緩やかに疑似口縁部より外反	—	—			
		c	平坦	緩やかに疑似口縁部より外反	—	丸底			
		d	平坦	緩やかに疑似口縁部より外反	—	平底			
		e	丸	直線状	—	丸底			
		f	丸	くの字状に外反外反	—	平底			



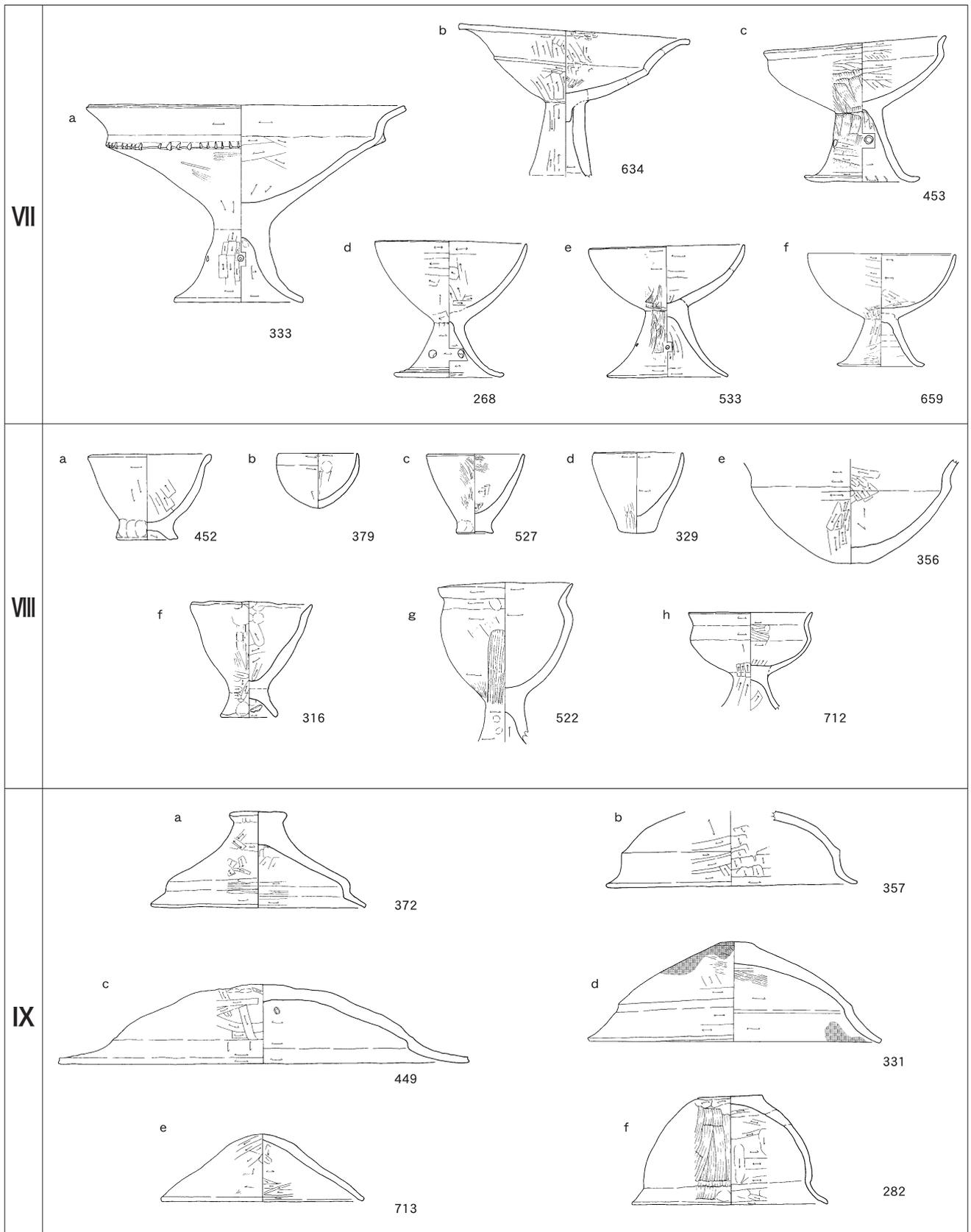
第152図 土器分類(1)



第153图 土器分類(2)



第154図 土器分類(3)



第155図 土器分類(4)

長頸壺は、屈曲部度合いから時期差がありそうである。甕形土器は、あまり従来の器形分類と差異がないように思われる。ただ、底部形態に特徴がある。

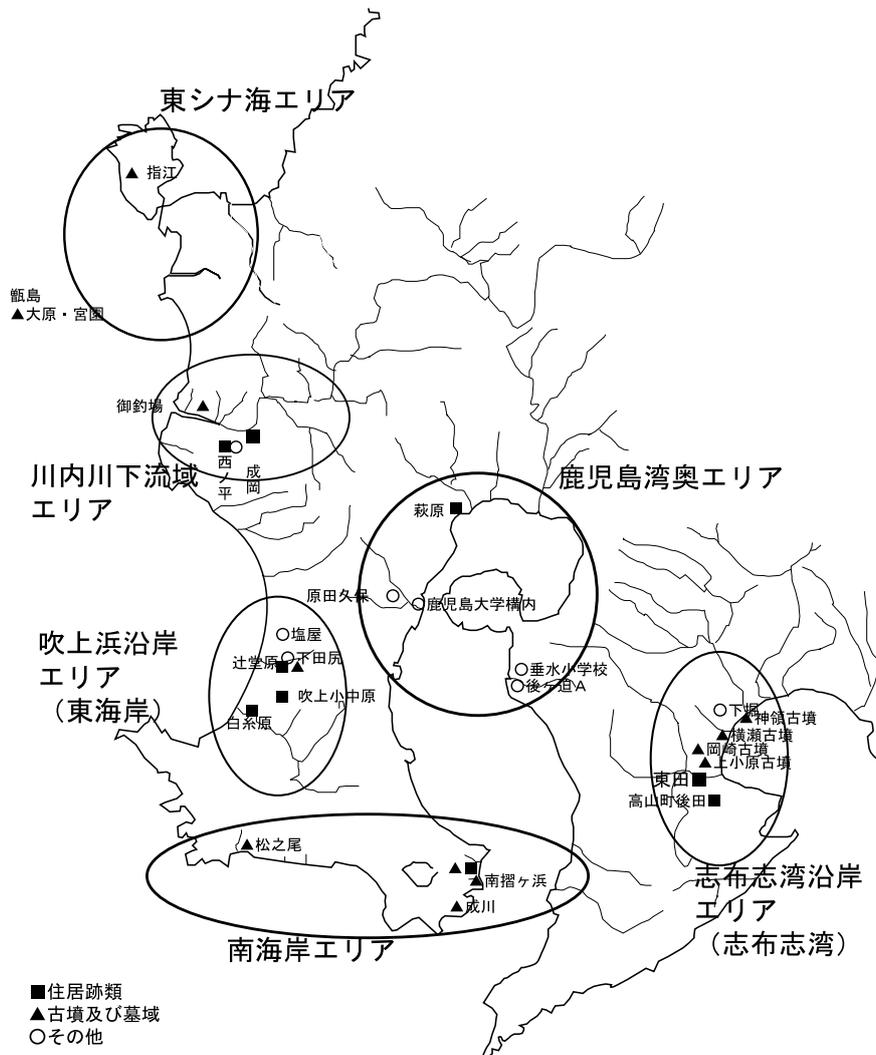
高環形土器は、疑似口縁という口縁部が段をもち外反する形状のものは従来の分類でよいと思われるが、その他の高環に関しては、土師器等でよく見られる器台に類似している。これらは、他地域からの影響を受けていると思われ注目したい。

以上の本遺跡における土器は、この墓に使用する目的で作られていると思われ、バリエーションに富んだ土器が多いのが特徴である。さらに、従来の成川式土器とは異なり、墓専用に造られた土

器や他地域から入ってきた技術の影響を受けた遺物も多く見られることも特徴であると言える。

第3節 須恵器

須恵器は、高環1点、甕2点、坏身1点、坏蓋1点の計5点検出された。いずれの須恵器もTK208段階の初期須恵器である。时期的には5世紀中期と判断できる。この状況から、この墓域の集団は、他地域との交流を行っていることの証である。鹿児島県内における初期須恵器の出土遺跡を見ると、吹上浜沿岸エリア、川内川下流域エリア、南沿岸エリア、鹿児島湾奥エリア、志布志湾沿岸エリアに集中していると言える。(下図参照)

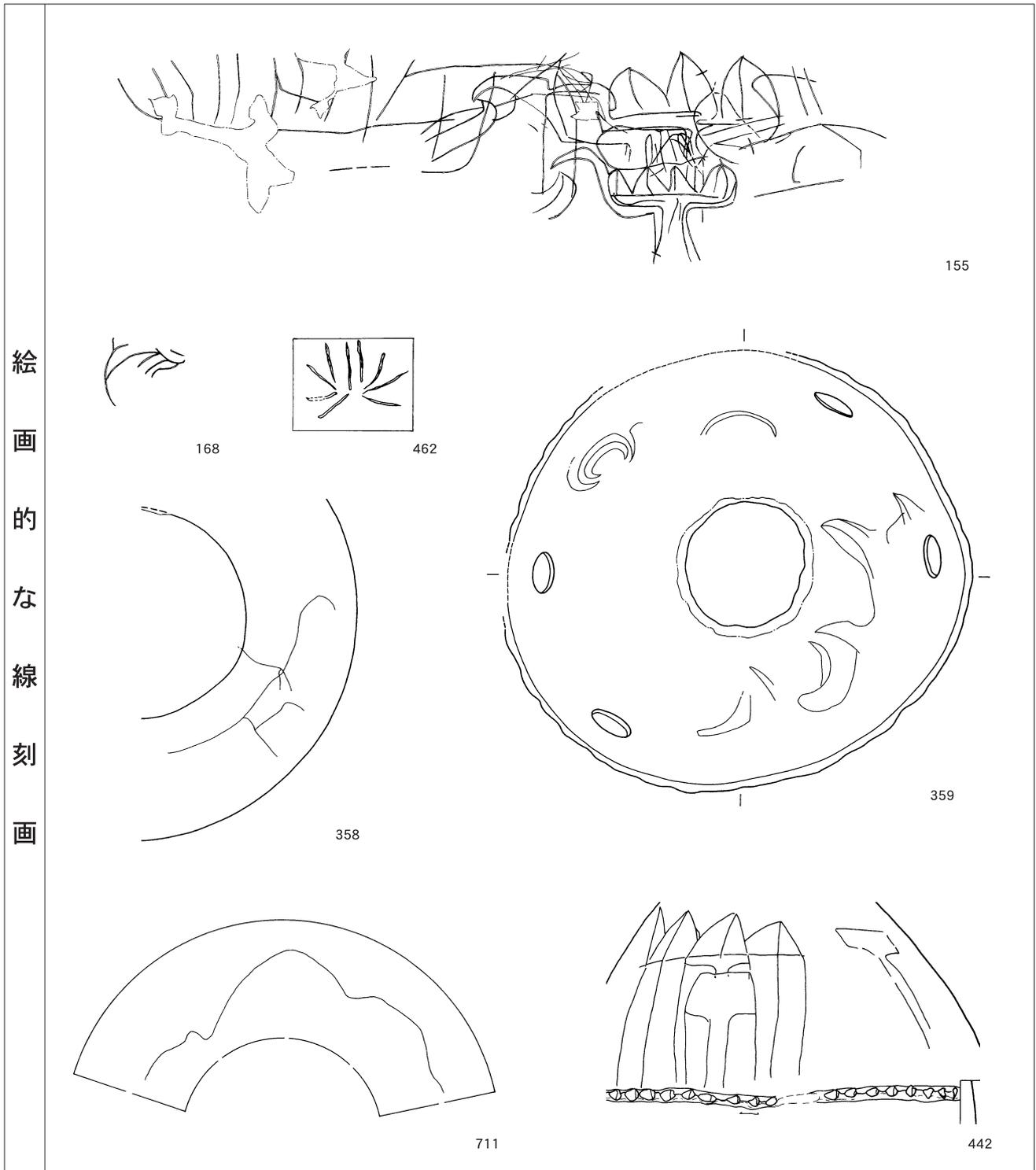


5世紀代における須恵器出土分布図 (H20.3 久保田昭二作成)

これらのことから、東シナ海ルートと太平洋沿岸ルートでの交流が考えられるが、本遺跡のある指宿市は鹿児島湾沿岸部の最南端にあり、どちらのルートの交流を示す物なのか非常に興味深い。先の土器や鉄製品の関連などから、時期毎に交流先が変わっているのか同じなのか、非常に興味深い。

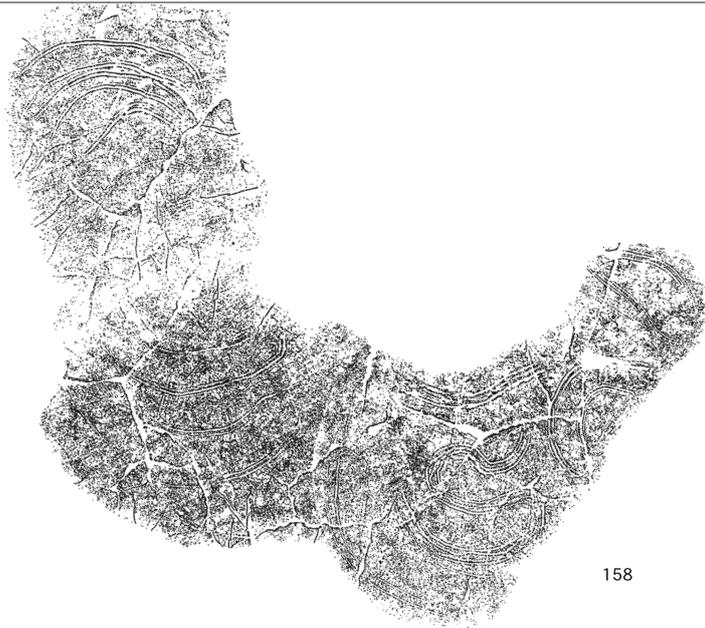
第4節 絵画土器

南九州において、絵画土器の出土は宮崎県に事例が多く見られるが、鹿児島県においては出土例が非常に少ない。しかしながら、本遺跡では多くの絵画土器が出土したことも最大の特徴でもある。本遺跡の絵画の意味については不明であるが、こ



第156図 絵画土器分類(1)

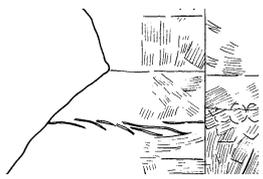
抽象的な線刻画



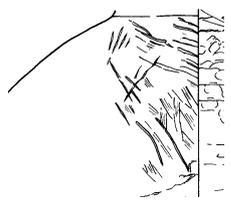
158



501



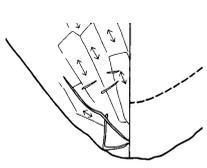
164



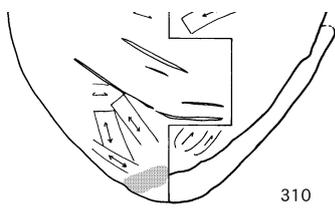
156



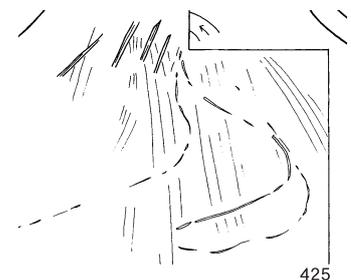
290



289

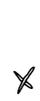


310



425

記号的な線刻画



620



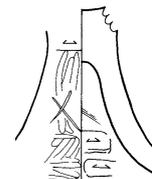
290



344



590

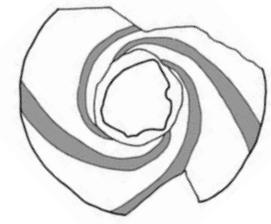


655

ベンガラ文様



284



611

第157図 絵画土器分類(2)

れらをまとめると「絵画的な線刻画」と「記号的な線刻画」「ベンガラ文様」の三種類に分類できそうである。それをもとに分けてみると次のように分けられる。

絵画的な線刻画とベンガラ文様を施す土器では概して中津野式土器段階の遺物が多いことから弥生時代終末期に該当すると思われる。また、記号的な線刻画の遺物は、辻堂原～笹貫式土器段階の遺物が多いことから古墳時代中期該当と思われる。

まず、絵画的な線刻画を見てみると、155・290・359・425・442は鹿屋市名主原遺跡で検出された線刻と同様、「ヨ」の模様がある。これらは、この当時の人々の生活の特徴を表しているものなのか、祭祀的な意味合いのあるものを表しているものなのか不明である。また、唐古遺跡等で見られる、いわゆる「龍」を表現しているといわれるような形状のものも見られる。358は、一本の線を抽象的に描いているが、動物の姿を描いたのではないかと思われる。462は、三叉状の線刻が放射線状に組み合わさっているようにも見受けられる。その他、168の樹木のような線刻、711の波を表現しているような線刻が見られる。501は非常に不明瞭ではあるが、ある場所から昇天しているような表現にも見られる。

文様的な線刻には、15号壺棺、158にある二本の沈線がS字状に描かれているものや、164のように垂れ枝のように描かれているものがある。

次に、記号的な線刻画では、「×」印が共通する。制作者のマークなのかどうか興味深い。

最後に、ベンガラ文様では、284のように「S字」のような模様をバランスよく配置してあり、611は螺旋状に描かれる。これらは祭祀のものと考えられるが、他の遺跡の事例を待ちたい。

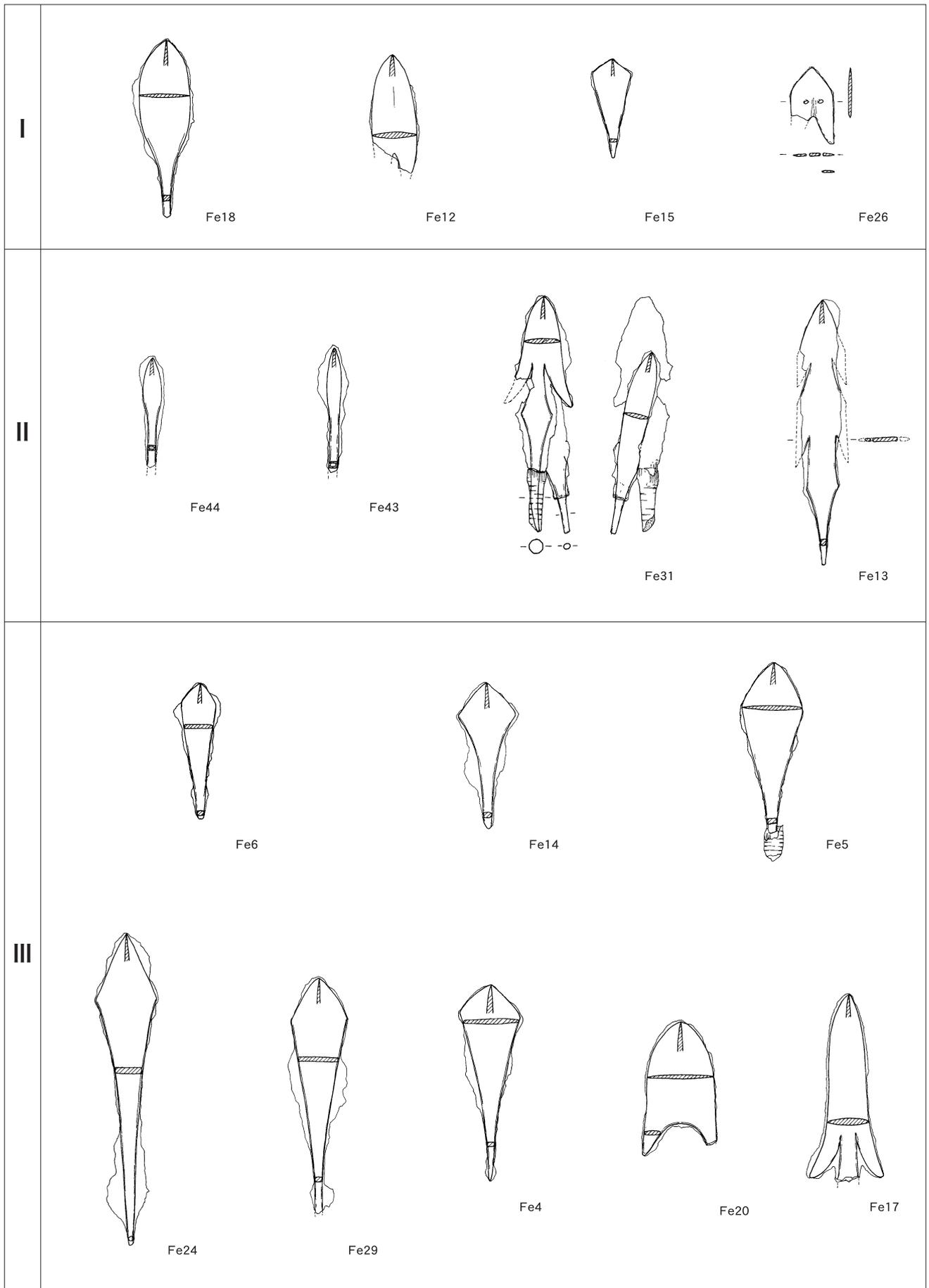
以上、様々な絵画土器が見られるが、これらの絵画土器が発見された場所や絵画が施された土器

には、祭祀的な意味合いが非常に強いのではないかと考える。今後の鹿児島県内における発掘事例が増えることを期待したい。

第5節 鉄製品

本遺跡の鉄製品は、鉄鏃と鉄剣が中心である。鉄鏃は大きく弥生時代終末期該当のものと古墳時代中期後葉該当のものに分かれる。時期的な分類については次頁の図のとおりであるが、Ⅰ期は弥生時代終末期、Ⅱ期は古墳時代中期中葉、Ⅲ期は古墳時代中期後葉として分類をした。Fe12・15・18・26は弥生時代終末期の代表的な鉄鏃で、無圭鏃・圭頭鏃・長三角鏃が中心である。Ⅱ期ではFe13の二段腸扶柳葉鏃、Fe31は鳥舌鏃と長三角腸扶鏃が錆着したものである。これらは須恵器のTK216段階と同時期と思われる。Ⅲ期ではFe5・6・14の長圭鏃とFe20無圭鏃Fe4は長三角腸扶鏃、fe17は二重腸扶鏃があり古墳時代中期後葉に位置づけられる。その他、剣では蛇行剣、曲剣等もあり、成川遺跡や松之尾遺跡との関連も伺わせる。また、Fe38は、双孔関をもつ鉄剣であると思われる（註：鹿児島大学橋本達也准教授のご教授による。）九州から関東までの出土はあるが、南九州では珍しい。その他、Fe19の槍身銚やFe21の帯状鉄器など県内でも出土例の少ない遺物も発見されている。

このように本遺跡の鉄製品は非常にバリエーションに富んだものが多い。圭頭鏃や鉄剣は在地産の可能性があるが、他地域との交流を示す鉄製品も見られる。これらは、弥生時代終末期には、在地産の鉄製品を、古墳時代中期の鉄製品は他地域からの交流でもたらされた鉄製品が多いと考えられる。



第158図 鉄製品分類

参考文献

- ・中村直子1987年12月「鹿大考古6号」『成川式土器再考』鹿児島大学法文学部考古学研修室
- ・枕崎市教育委員会1981年3月『松之尾遺跡』枕崎市松之尾土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財報告書(1)
- ・鹿児島県教育委員会平成18年3月『先史古代の鹿児島(通史編)』
- ・鹿児島県教育委員会平成17年3月『先史古代の鹿児島(資料編)』
- ・文化庁1973年『成川遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第七
- ・鹿児島県教育委員会1983年3月『成川遺跡』国道226号線成川バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- ・指宿市教育委員会1992年3月『橋牟礼川遺跡Ⅲ』指宿駅西部土地区画整備事業地内における下水道管きょ付事業に伴う発掘調査報告書
- ・指宿市役所総務課市誌編さん室昭和60年『指宿市誌』
- ・(財)大阪府文化財センター2006年3月『古式土師器の年代学』
- ・(独)奈良文化財研究所2005年3月『畿内産暗文土師器関連資料Ⅰ-西日本編-』
- ・八代市教育委員会2005年3月『用七遺跡』八代市文化財調査報告書第27集
- ・平安学園考古学クラブ1996年『陶邑古窯址群Ⅰ』
- ・中村浩, 望月幹夫編「季刊考古学」『土師器と須恵器』雄山閣
- ・中村耕治「鹿児島考古16号」『鹿児島県内出土の須恵器-古墳時代を中心にして-』鹿児島県考古学会
- ・吹上町教育委員会1977年3月『辻堂原遺跡』吹上町中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- ・鹿児島県教育委員会1991年3月『小中原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(67)
- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター2006年3月『農業開発総合センター遺跡群Ⅲ 尾ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(98)
- ・大阪府近つ飛鳥博物館平成17年冬季企画展重要文化財指定記念『年代のものさし-邑の須恵器-』
- ・大阪府立弥生博物館 合田幸美 「平成19年9月「平成19年秋季特別展 日向・薩摩・大隅の原像〜南九州の弥生文化〜」『論考 南九州の弥生絵画と記号』
- ・多々良友博 昭和56年12月「鹿児島考古」『成川土器の検討』鹿児島考古学会
- ・本天道輝1993年7月「鹿児島考古27号特集南九州の弥生土器」『鹿児島県下の弥生後期土器』鹿児島考古学会
- ・春成秀爾1991年3月『絵画から記号へ-弥生時代における農耕儀礼の盛衰』国立歴史民俗博物館研究報告第35集
- ・橋本達也・藤井大祐2007年3月『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館
- ・杉原荘介・大塚初重編 昭和49年12月『土師式土器集成本編1〜4巻』東京堂出版
- ・日本考古学会1980年6月『考古学雑誌66観第1号』
- ・松木武彦1996年3月「雪野山古墳の研究 考察編」『前期古墳副葬群の成立過程と構成-雪野山古墳出土鉄・銅鏃の検討によせて-』雪野山古墳発掘調査団編
- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター2005年3月『大坪遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(79)
- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター2002年3月『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(88)
- ・加世田市教育委員会1985年3月『上加世田遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- ・垂水市教育委員会1999年3月『柊原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- ・河口貞徳1981年10月『河口貞徳先生古稀記念著作集上巻』河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会
- ・河口貞徳1983年6月『河口貞徳先生古稀記念著作集下巻』河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会



東上空から南摺ヶ浜遺跡（遠方に開聞岳）

写 真 图 版



17年度調査区（上空から）



15層上面遺物出土状況



土器出土状況



壺形土器出土状況



壺形土器出土状況



19年度調査区（上空から）



1号壺棺墓出土状況



1号壺棺墓出土状況



2号壺棺墓出土状況



2号壺棺墓出土状況



立石 4 検出状況



立石 4 下 4号壺棺墓出土状況



4号壺棺墓内人骨検出状況



5号壺棺墓出土状況



5号壺棺墓出土状況



6号壶棺墓出土状况



8号壶棺墓周边遗物出土状况



8号壶棺墓出土状况



8号壶棺墓完掘状况



10号壶棺墓出土状况



10号壶棺墓完掘状况



9号壶棺墓出土状况



11号壶棺墓出土状况



11号壺棺墓出土状況



11号壺棺墓出土状況



13号壺棺墓出土状況



13号壺棺墓出土状況



15号壺棺墓出土状況



1号甕棺墓出土状況



1号甕棺墓出土状況



1号甕棺墓出土状況



立石1 断面状況



立石5 直下遺物出土状況



立石2 検出状況



立石9 検出状況



立石21 検出状況



1号円形周溝墓検出状況



1号円形周溝墓検出状況



4号円形周溝墓検出状況



2号円形周溝墓検出状況



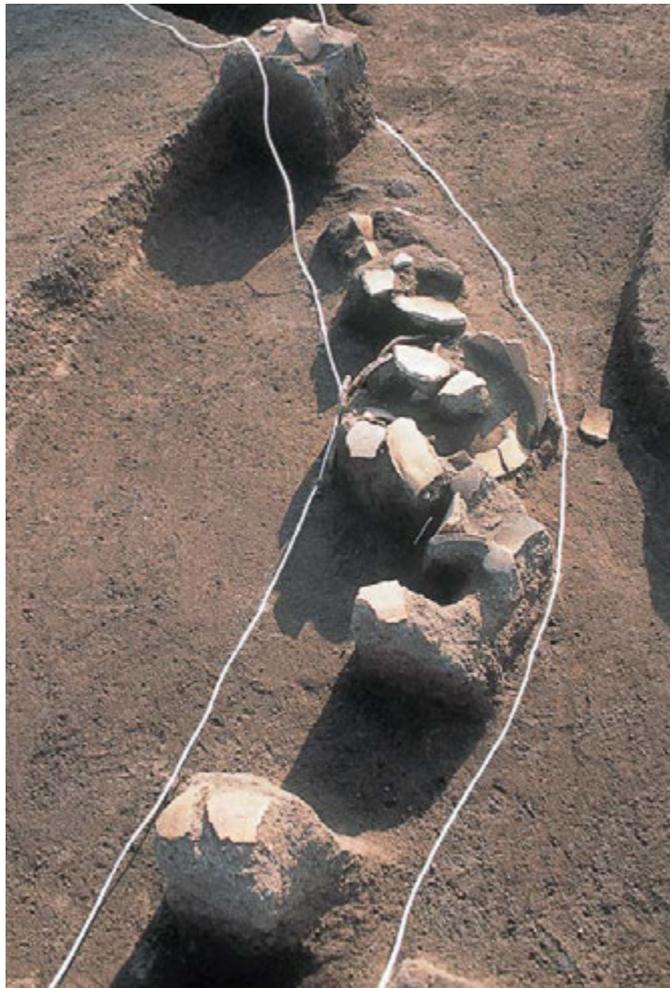
2号円形周溝墓完掘状況



4号円形周溝墓完掘状況



5号円形周溝墓完掘状況



5号円形周溝墓内遺物出土状況



9号円形周溝墓完掘状況



9号円形周溝墓周溝内鉄剣出土状況



1号円形周溝墓完掘状況



6号円形周溝墓完掘状況



8号円形周溝墓完掘状況



3号円形周溝墓完掘状況



遺構完掘状況全景



土坑墓検出状況



22~26号土坑墓完掘状況



47号土坑墓断面状況



47号土坑墓完掘状況

図版12 土坑墓検出状況(2)



62号土坑墓完掘状況



63号土坑墓完掘状況



66・67号土坑墓完掘状況



3号土坑墓内鉄剣出土状況



30号土坑墓内鉄剣出土状況



11号土坑墓内曲剣出土状況



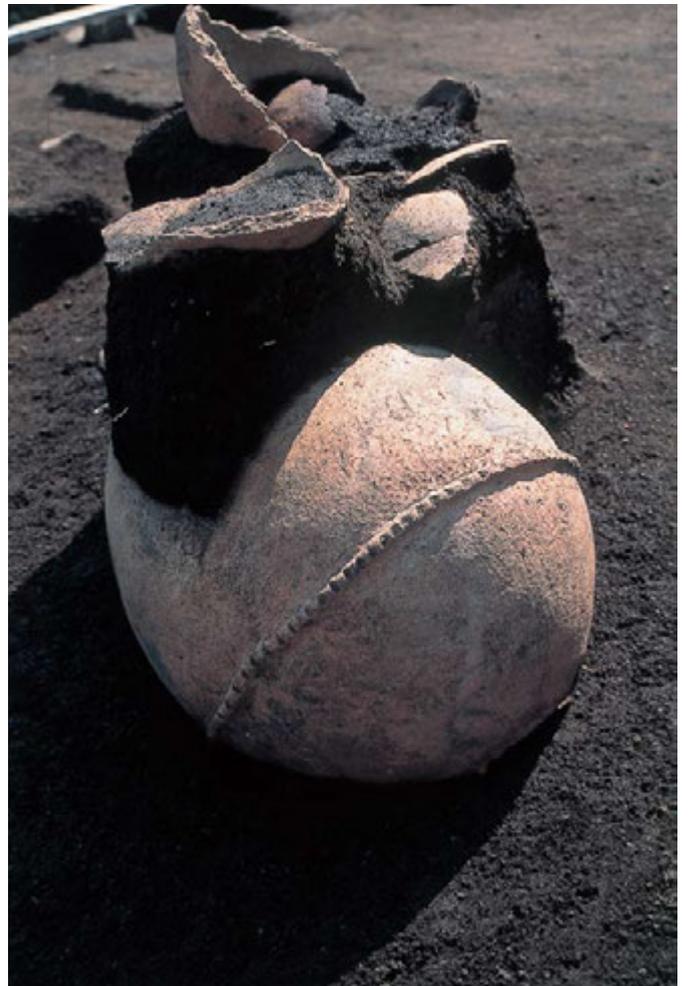
10号土坑墓内土器出土状況



15層上面検出土坑墓全景



遺物出土状況 (Aブロック)



遺物出土状況 (Aブロック)



遺物出土状況 (Aブロック)



遺物出土状況 (Bブロック)



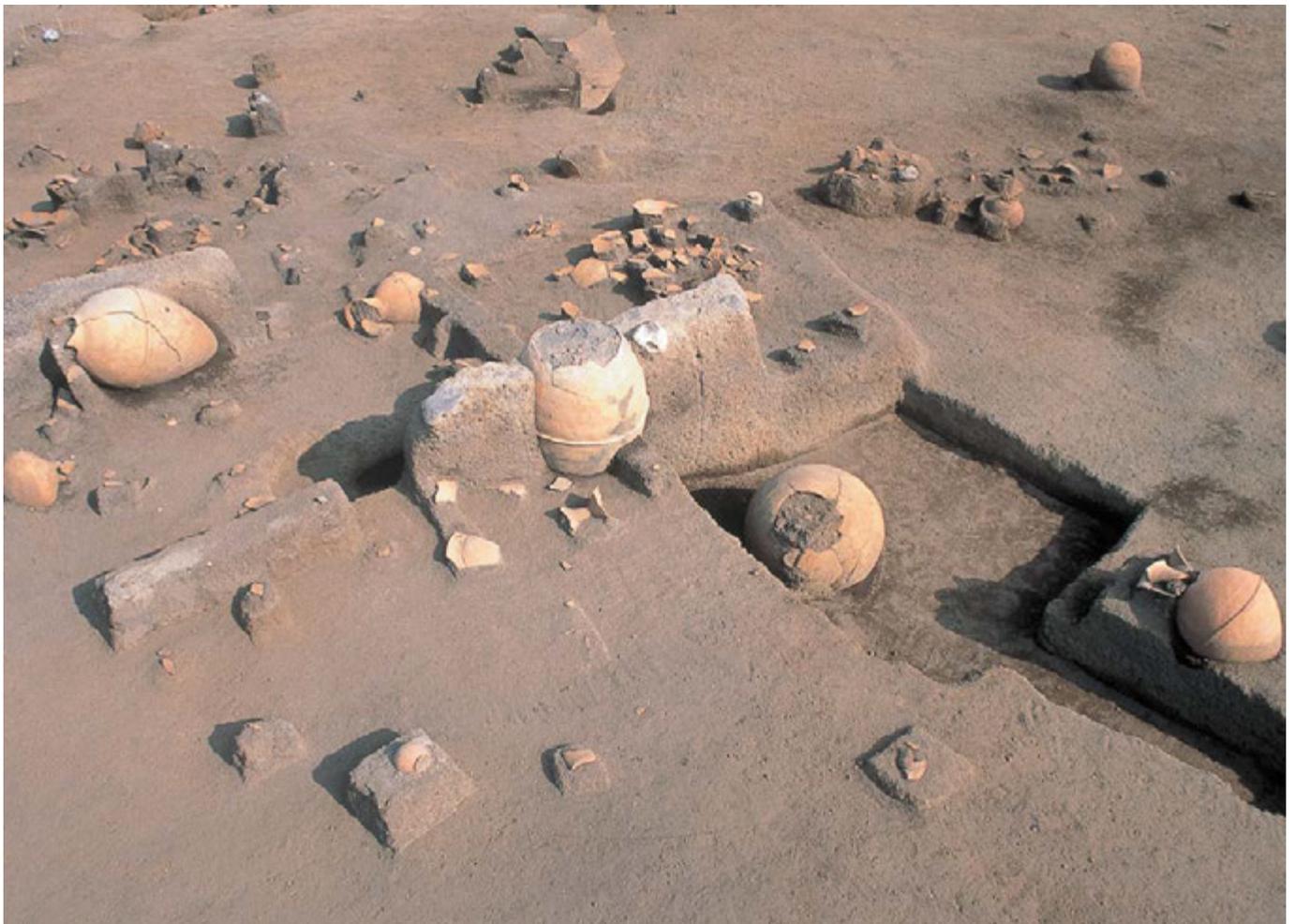
遺物出土状況 (Bブロック)



遺物出土状況 (Bブロック)



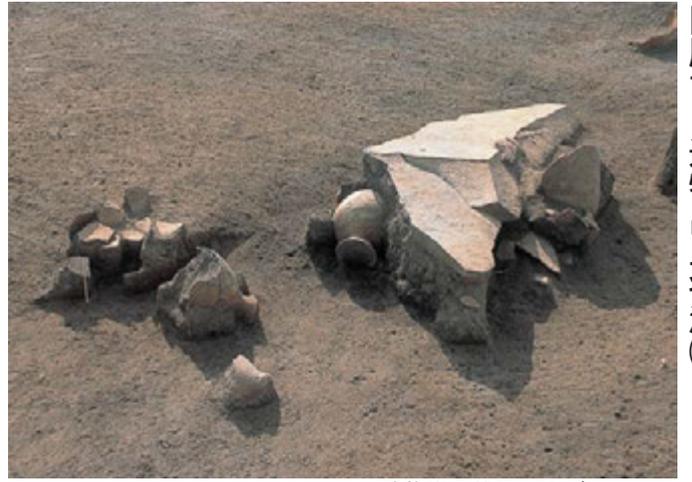
遺物出土状況 (Eブロック)



遺物出土状況 (C・D・Eブロック)



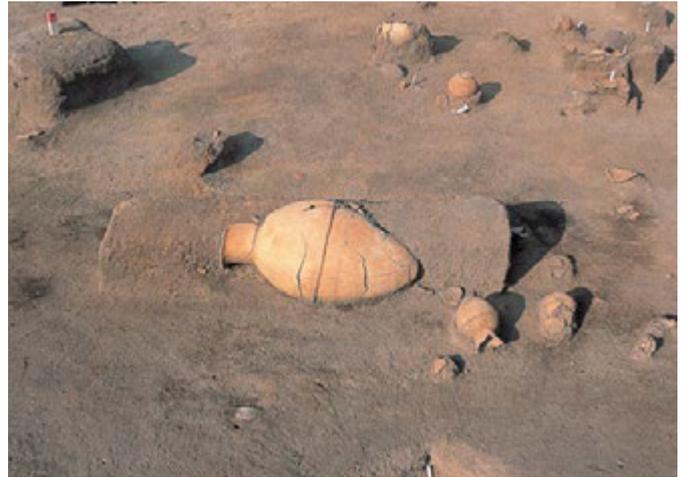
遺物出土状況 (Dブロック)



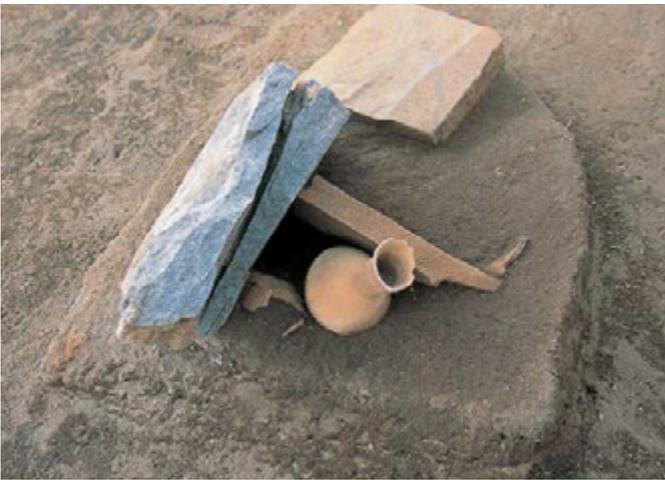
遺物出土状況 (Cブロック)



遺物出土状況 (Eブロック)



遺物出土状況 (Eブロック)



遺物出土状況 (Fブロック)



遺物出土状況 (Fブロック)



遺物出土状況 (Fブロック)



遺物出土状況 (Gブロック)



遺物出土状況 (Hブロック)



遺物出土状況 (Hブロック)



遺物出土状況 (Hブロック)



遺物出土状況 (1号円形周溝墓周辺)



遺物出土状況 (Iブロック)



遺物出土状況 (Iブロック)



遺物出土状況 (Jブロック)



遺物出土状況 (Kブロック)



遺物出土状況 (Kブロック)



遺物出土状況 (44号土坑墓周辺)



遺物出土状況 (Lブロック)



遺物出土状況 (Mブロック)



遺物出土状況 (Mブロック)



遺物出土状況 (Rブロック)



遺物出土状況 (Rブロック)



遺物出土状況 (Rブロック)



遺物出土状況 (Rブロック)



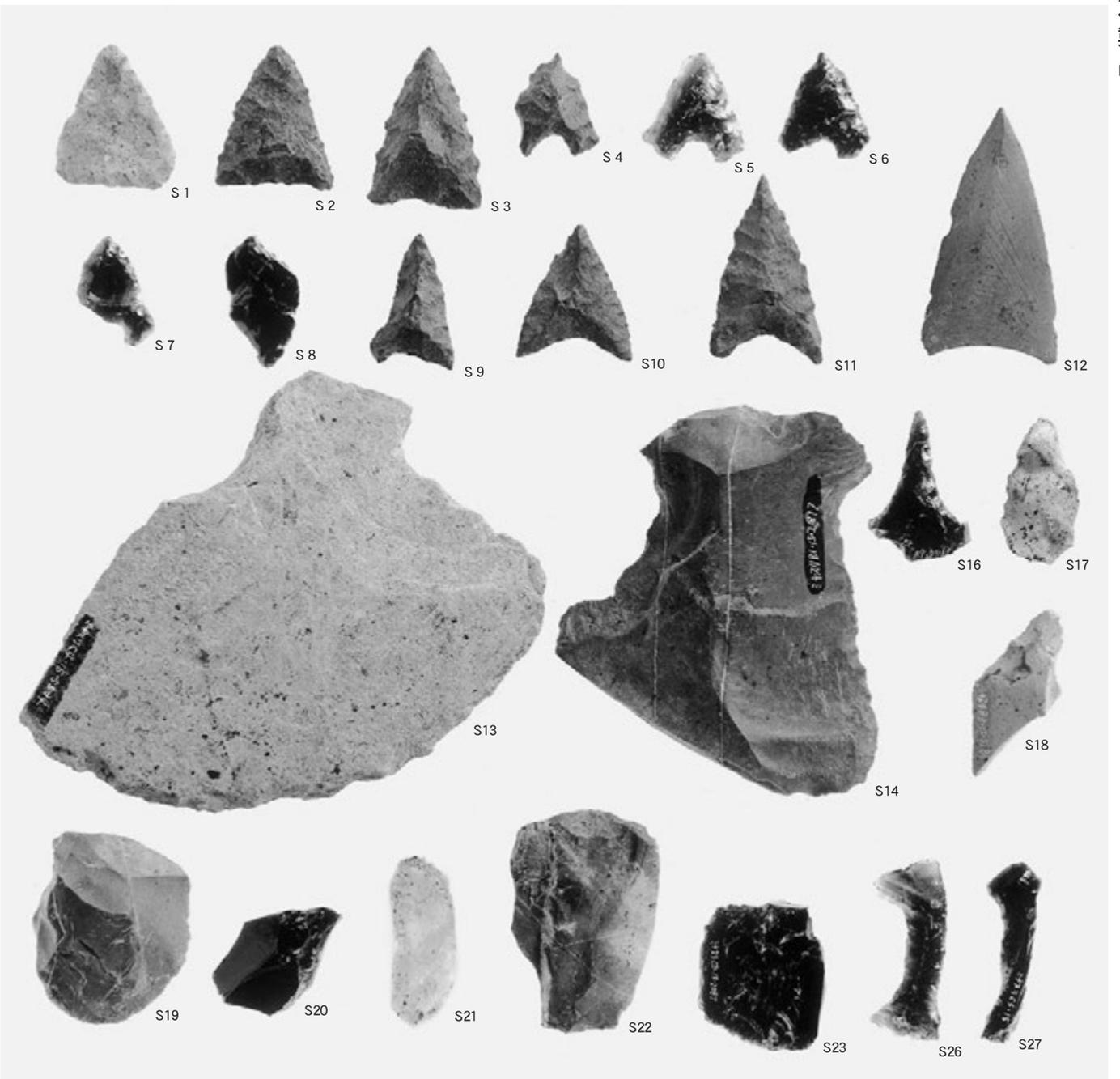
磨製石鏃出土状況



鉄剣出土状況



鉄剣出土状況





S45



S46



S52



S53



S57



S55



S56



S61



S109



S113



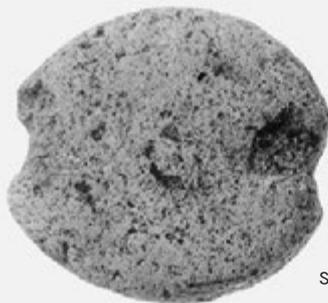
S111



S112



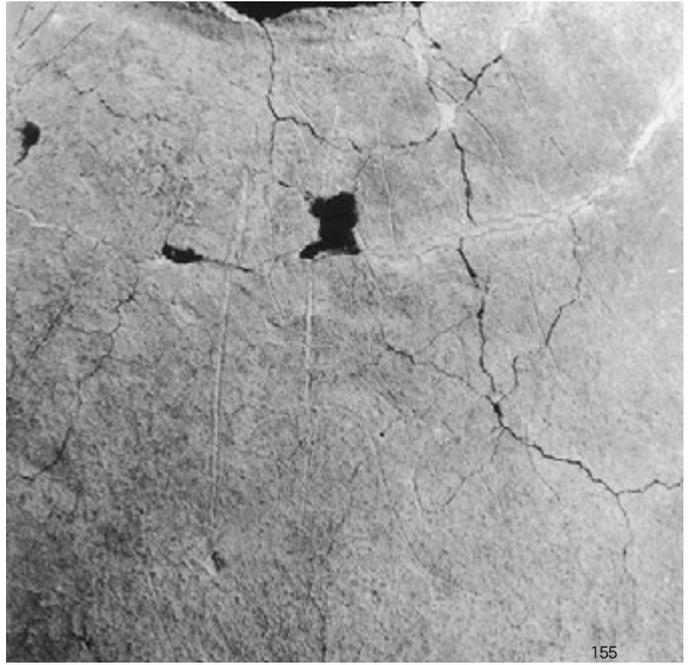
S118



S119



S120

























275



570



276



571



327



318





428



367



491



325



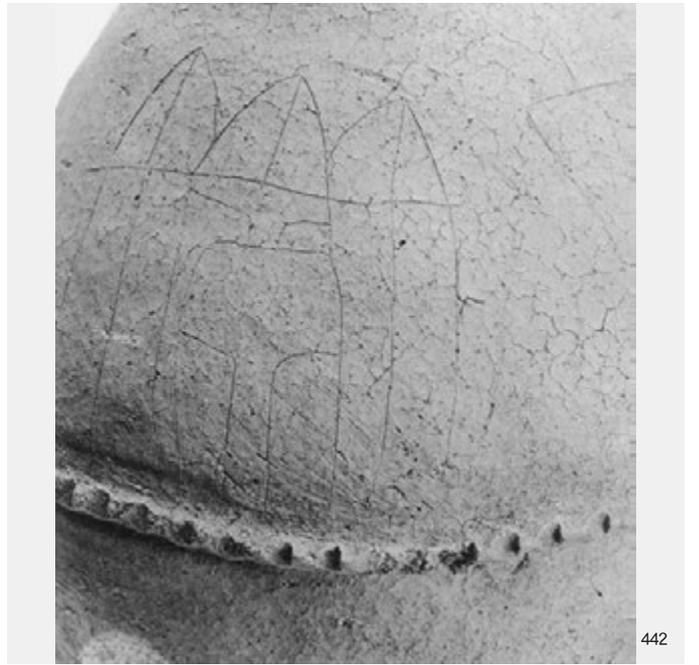
497



494









510



419



512



348



300



414



700



511





















270



340



364



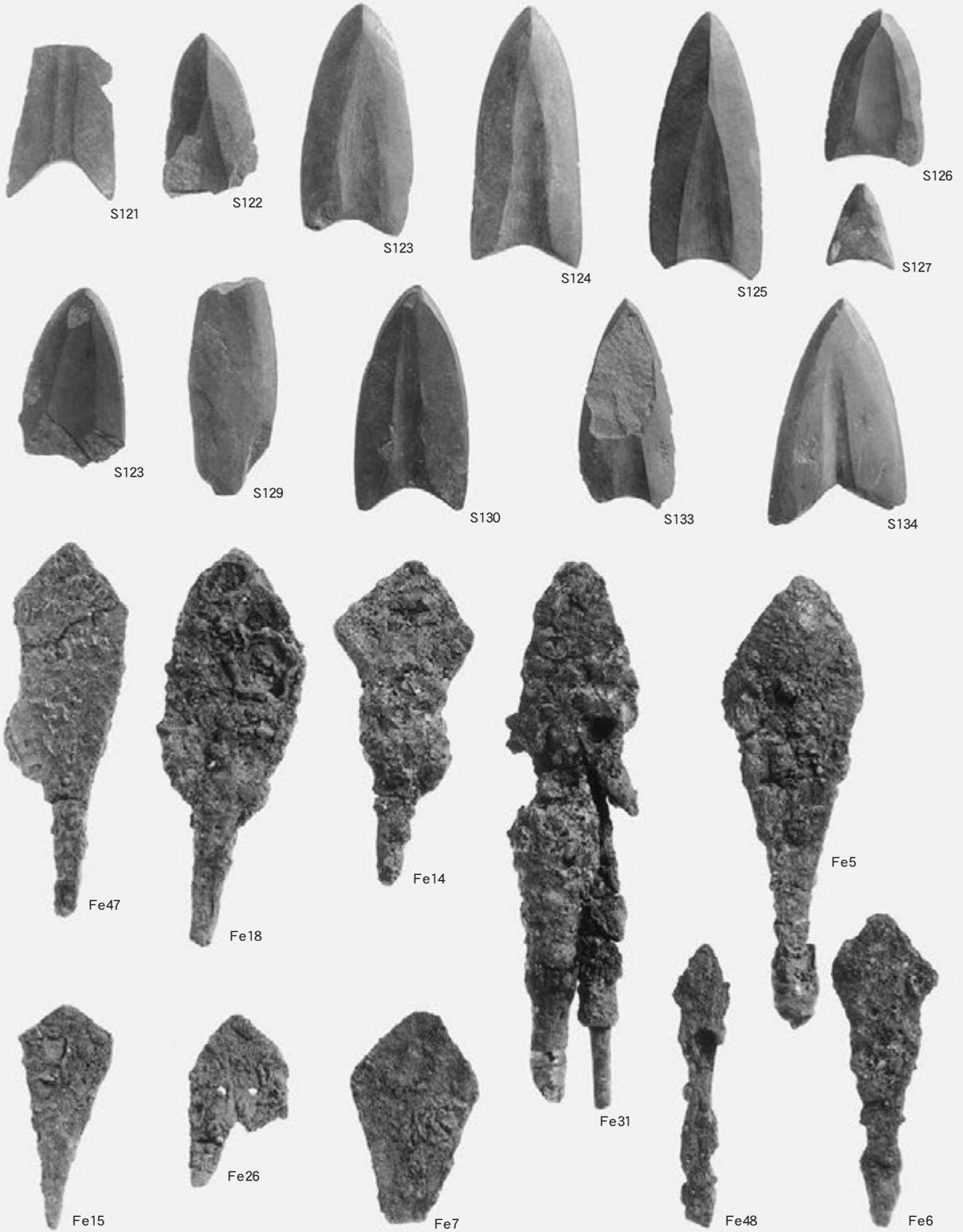
331

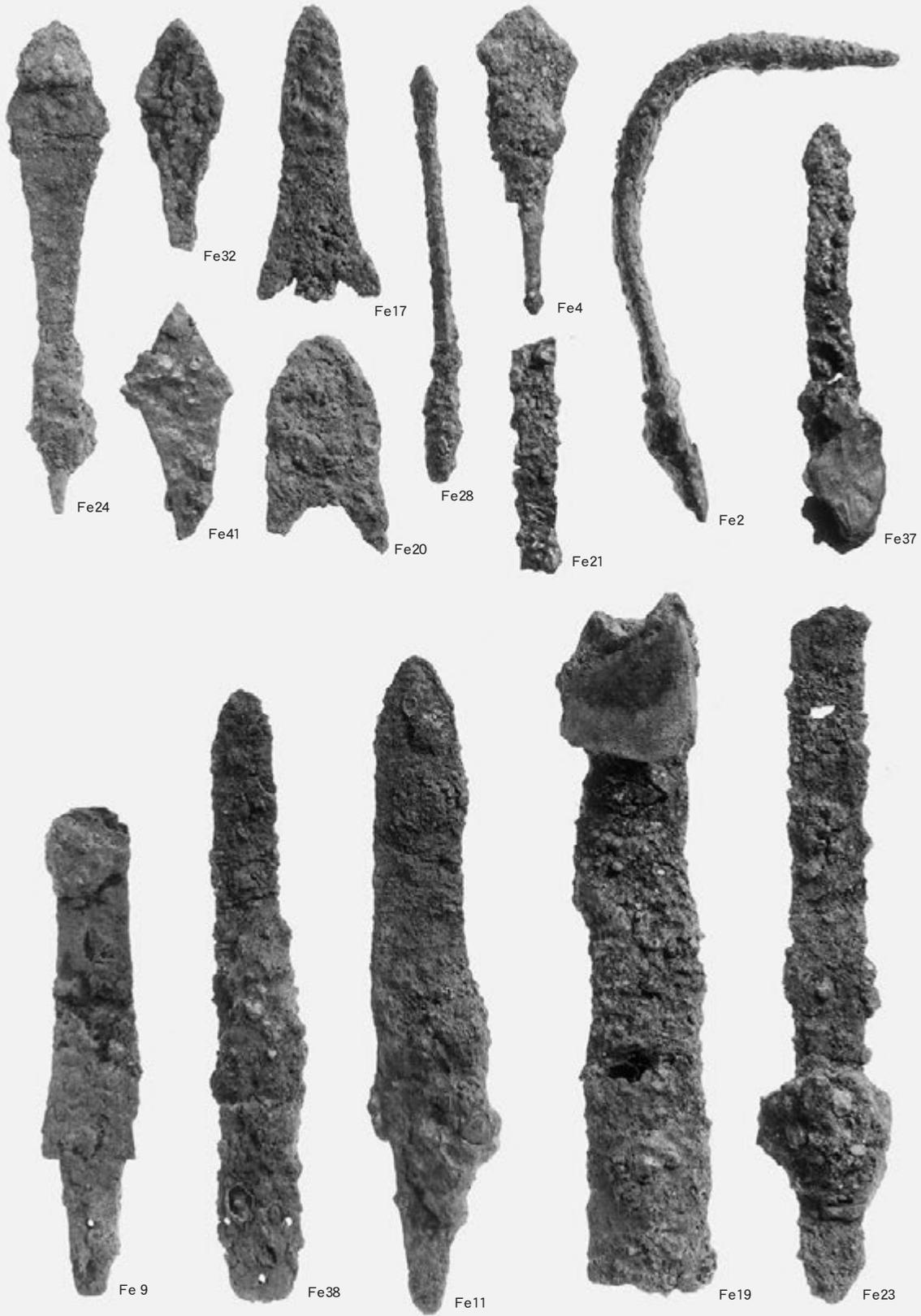


449



538





あ と が き

青い空と海に囲まれた丘の上で、開聞岳の噴出物である固いコラ層の下から、大量の遺物と遺構が出てきたその姿には、圧倒されました。

発掘調査中は、多くの困難が待ち構えていました。6月からの雨期に入ると、水はけの悪い調査区に水がたまってしまうことが多々ありました。泥水で汚れた調査区を何度も丁寧に掃除をかける作業員さんの姿がそこにはありました。大量の遺物と遺構の記録保存のため、多くの方々に支援を頂きながら発掘調査を終えることができました。

報告書作成作業では、出土した大型土器の接合・復元、実測が困難でした。大型の土器は、接合の角度がずれると組み上げてもゆがみが生じ、調整のため外してはまたつけるといった作業をおこないました。また、実測の際は、大型土器を据え付けるところから始まり、道具を工夫して使い試行錯誤しながら実測しました。

発掘調査・報告書作成という作業をとおして言えることは、多くの方々の力が集まってこの南摺ヶ浜遺跡の調査、報告書刊行をすることができたということです。

この資料が、郷土の歴史研究に役立つことができれば幸いです。

発掘調査に携わっていただいた指宿市の方々、報告書刊行のために整理作業に携わっていただいた皆様に深く感謝しお礼申し上げます。

最後に、発掘調査中並びに整理作業中にご指導いただきました方々に末尾ではありますがお礼申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（144）
街路事業瀧山丈六線改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

みなみ すり が はま い せき
南 摺 ヶ 浜 遺 跡

発行日 2009年3月

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
T E L (0995) 48-5811

印刷所 株式会社あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
T E L (099) 214-3757